



黙阿弥全集

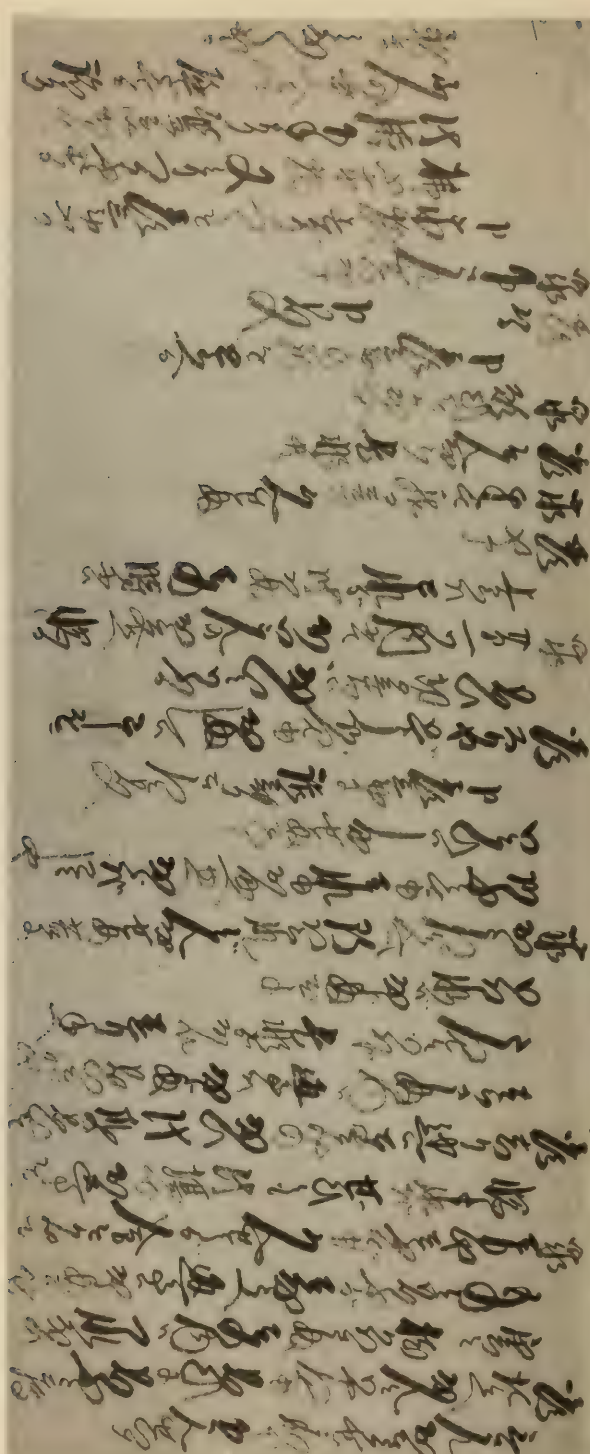
第六巻

黙阿弥全集

第六巻

解説

これは、作者筆稿本の一部である。「櫓太鼓鳴音吉原」の七幕目、三浦屋の場の分である。半紙横二つ折りにしたものへ認めるから、「横書き」とも「横本」とも呼ばれる。完成したる草稿なのである。



(周峯圖



仁王仁太夫

(河原崎權十郎)

櫓太鼓 (豊原國周筆)



仁王仁太夫
(河原崎權十郎)

鷲の長吉
(市村家橘)

朝比奈藤兵衛
(坂東彦三郎)

河竹糸女補修
河竹繁俊校訂編纂

默阿彌全集 第六卷

東京 春陽堂刊行

默阿彌全集　第六卷目次

鶴千歳曾我門松（野晒悟助）……一
處女評判善惡鏡（白浪五人女）……一〇三
櫓太鼓鳴音吉原（明石志賀之助と傾城薄雲）……三八七
稽古筆七いろは（鳩の平右衛門）……七四三
墨畫龍湖水乘切（明智左馬之助）……七九一
（附錄）與行年表……八五一

挿繪目次

◎櫓太鼓の原作稿本（卷頭玻璃版、默阿彌筆）……
◎鷲の長吉（卷頭玻璃版、國周筆）……
◎野晒悟助（玻璃版、國周筆）……一頁の前
◎白浪五人女（玻璃版、國周筆）……一〇三頁の前
◎明石志賀之助（玻璃版、芳幾筆）……三八七頁の前
◎鳩の平右衞門（玻璃版、舞臺寫眞）……七四三頁の前
◎湖水の乘切（玻璃版、周延筆）……七九一頁の前

御贔屓御好 本朝粹菩提

雷名萬山東庵
稻妻表紙後篇

狂言世界 詩歌に聞えし 紫郊原の一休禪師

形容仕組 謠曲に准へし 朱呂山の百魔山姥

名にし近江の佐々木の若殿桂之助が弓始に互に覘ふ岩橋の夜の契に小山三伴作朋輩中も不破名古屋爭ふくら馬の石段から天狗ヶ谷へ誤つて落來る瀧の木の間だんまり闇はあやなし敵とは言て酒賣又六がお三輪と二世の片目の雉子廻る因果の腹切も絡んだ筋の八重垣に遺恨は殘る亡靈の伴左衞門が草履打其書置と辻占の烏扇を結納替り小田井小暖が押掛女房に母香ざらしに下女お卷が否やの返事を待女郎退引ならぬ悟助が難儀身を投入に詫助が娘を賣ての聟引出頼む來世の婚禮に釋迦に提婆が水浴びせどうて體は野晒と四天王寺の山門に多勢を相手の仕返は生死の堺泉なる噂高須の珠名屋に地獄太夫が連歌問答

新春杯開 祐經時致 和合結 ハテめづらしい 初夢對面

茲に羽伸小林素袍定紋

鶴千歳曾我門松

「野晒悟助」は慶應元年一月、市村座に書卸された、作者五十歳の春のことである。語りにも明らかに示されてある如く、山東京傳の讀み本「稻妻表紙」に材料を採つたものである。が、殆ど原作とは面目を異にしてゐる程創作的の脚色である。前半の時代物めいた酒賣又六の件も、決して悪いものではないが、茲に輯錄した後半の野晒悟助の件だけが繰返し〳〵上演せられてゐる。扉の名題は書卸しの時のであるが、野晒悟助の件だけは、「粹菩提悟道野晒」と後に作者によつて命名された。悟助は五世菊五郎が家橘として賣出し時代の、當り狂言であつた。

書卸しの時の役割は、市村家橘（男達野ざらし悟助）、坂東彦三郎（男達浮世戸平）、市川團藏（男達六字南無右衛門）、尾上菊次郎（廛右衛門女房香ざらし）、中村鶴藏（土器賣り詫助、提婆の仁三郎）、澤村訥升（詫助娘小賤）、坂東三津五郎（廛右衛門娘小田井）、市川新車（扇屋の下女おまき）等であつた。

口繪にしたのは、國周筆の錦繪である。

大正十四年九月

校訂者



醉菩提悟道野晒（野晒悟助――二幕）

序幕　　攝州住吉の場

〔役名――土器賣詫助、男達羅漢南無右衛門、男達浮世戸平、男達提婆の子分四人、白酒賣、仕出し男四人、同女五人、扇屋手代二人、駕籠舁二人、男達野晒悟助。扇屋娘小田井、同下女お牧、土器賣の娘小賤、扇屋丁稚三太等。〕

（住吉鳥居先の場）――本舞臺三間の間上手丸物の石の鳥居、續いて石燈籠大分並び、諸所に松櫻の立木日覆より同じく釣枝、床几二脚程竝べ、總て住吉鳥居先の體。爰に白酒賣やつし裝白酒の荷をおろし、仕出し四人立掛り、白酒を呑んで居る。此模樣流行唄へ大拍子を冠せ、賑かに幕明く。

白酒　山川白酒々々。へい、どなたもよろしうお上りなさい。

男一　いや、此とつさんの白酒は、大道賣りにしちやあ、べらぼうにいゝ味だが、おめえ何處から受けて來なさる。

白酒　へい、私のは並木の山屋で受けて來ますゆゑ、白酒は自慢で商ひますが、利が細いので困ります。

男二　さうだらう、どうして〳〵、此諸式の高えのに斯ういふ白酒を安く賣つちやあ、なか〳〵割に合

ふめえよ。

女一　ほんに皆さん、白酒を呑んで氣が替り、新町へでも行つてはいけませんよ。

女二　白酒といへば此人は、いつか助六の芝居で見た、白酒賣りとは大違ひ。

女三　いえ〳〵それでも此人の裝は、汚ない木綿もの、紙子の方がよつぽど綺麗。

女四　其替りには白酒が、大層よいといひますから、此通り晝の内に賣り切れるとやら。

女五　何でも代物はよくないと、評判にならないから、どうか皆さん、みんな惣仕舞をして下さんせ。

男三　わしなども白酒好きゆゑ、此前を通るたんびに、呑まずにやあ行かれませぬ。

白酒　有難いことには、皆樣が御贔屓にして下さいますゆゑ、利が細うてもかさでこなし、どうかかうか合つて行きます。

男四　さうだ〳〵、八文儲ける所は四文儲けても、細く長いがいゝといふものだ。

男一　いや長いといへば此節は、男達の提婆の仁三郎とかいふ人の子分が、提婆組といつて、てんでに長いのを差して歩くぢやあねえか。

男二　其長いのをぶつ込んで、あすこや此處の盛り場で亂暴を働くといふことだが、何と氣味の惡いことぢやあねえか。

男三　今も爰へ來る道で、四五人見掛けたが、みんな長いやつを差して居ましたぜ。
男四　定めてお前方も商ひの、邪魔になるだらうね。
白酒　いやもう、邪魔の段ではございませぬ、昨日などは此先きで突當つたとか行當つたとやらで、大喧嘩をいたしまして、此境內は亂騷ぎでございました。（ト四人向ふを見て、）
男一　あれ〳〵、噂をすれば影とやら、向ふから來る四人連は、今話しの提婆組ぢやあねえか。
男二　違えねええてもんだ、醉つてゞも居ると見えて、人がばら〳〵逃げるやうだ。
男三　とかういふうち、段々こつちの方へ參りますぜ。
女一　男でさへも其やうに、人の怖がるあの衆達。
女二　わたしどもゝ爰へ來ぬうち、少しも早く濱邊の方へ。
女形皆々　行きませうわいなあ。
男四　とかく物には障らぬ神。
男一　祟りのないうち少しも早く。
男二　あれ、駈け出した。
四人　それ、逃げろ〳〵。

ト右の鳴物にて二人づゝ左右へ別れてはひる。此内白酒賣、始終向ふを見込み居て、

白酒　忌々しい、提婆組が來なけりやあ、最うちつと商ひをする所を、みんな客を逃してしまつた。またあの衆達も仰山な、そんなに慌てゝ逃げずともの事だ、追駈けてでも來やあしめえし、何ぞ落し物でもして行きやあしねえか知らぬ。（ト荷の側へ來て四邊を見て）やあ〳〵、こりやあ落し物どころか肝腎の錢を置かずに行つてしまつた。道理でさつきから、つひにねえおれの白酒をべらぼうに褒めるゆゑ、不思議だと思つたら、提婆組を假托に呑み逃げをする氣であつたか。いや提婆組よりやあ惡い顏だ、追駈けて行つて取つて遣りてえが、何をいふにも右と左り、右へ行かうか左りへ行かうか、どちらへ行かうか思案ばし、ちよいと來なせ。

トをかしみの鳴物にて、白酒賣上手へはひる。跡摺鉦入り、出の鳴物になり、花道より○先きに△□◎、何れも着流し一本差し、堂島の下駄、尺八を差し、男達對のこしらへにて出て、花道へ並び、

○　春の景色も住吉に、並んだ松の其中で、闇にも光る燈火は、によつきり高へ高燈籠。

△　目當てに乘込む入船は、梅の魁難波屋の丸い團子も角立つて、曲るは松のお定り。

□　海も平に見渡せば、替らぬ色の靑疊、常磐もそれと和歌の浦。

◎　津々浦々まで御存じは、ごろ〳〵ごろ附く提婆組。

○ 四人一座で
四人 出掛けようか。(ト右の鳴物にて、四人舞臺へ來り、あちこちと花をながめ、)
○ 時にみんな、斯うして揃つて出掛けた所は、どんな見倒しにふましても、懐にやあ二兩と三兩ありさうだが、所がねえのが玉に疵だ。
△ 錢はあつても無くつても、家にぼんやりして居るより、斯うして向ふを見渡した、所はどうも、言へねえ景色ぢやあねえか。
□ 景色もいゝが何にしろ、眞面目ぢやあをかしくねえ、どこらかいゝ出入りをこせえ、旨く酒でも呑みてえものだ。
◎ 噂に聞きやあ此頃ぢやあ、野晒悟助といふ奴が、この界隈をまごついて喧嘩を買つて歩くとやらだ。
○ さういふ奴に幅をされちやあ、こつちの仲間は上つたり。
△ 自然と出入りも隙になり、したみ酒も呑めやあしねえ。(ト□白酒の荷に目を附け、)
□ こうみんな見ろ、爰に白酒の荷があるが、どうだ一ぺい遣らねえか。
◎ べらぼうめ、幾ら酒が呑みてえとて、まだ白酒を呑む耄碌はしねえ。

○　これさ錢もねえ癖に、そんな贅澤をいふものぢやあねえ、何にしろ物はたつしだ、いゝか惡いか呑んで見よう。(ト柄杓にてついで茶碗にて呑み、)どうして〳〵馬鹿にならねえ、空腹のせゐかなか〳〵呑める。

△　どれ〳〵おれにも一ぺい呑ましてくれ。(トよろしく呑んで、)どうして〳〵、こいつあ下戸にも上戸にもといふ白酒だ、重くなくつてとんだいゝ。

□　そんなに旨えか、そいつあ奇妙だ。(ト□呑んで、)成程こりやあ滅法界だ。此白酒を呑まねえたア馬鹿な奴もあるもんだ。こう、とてもの事に、何ぞうめえ肴がほしい。

○　又そんな贅澤を言やあがる。

△　白酒の肴なら、ぽかん〳〵に羊羹はどうだ。

□　べらぼうめ、ぽかん〳〵が喰へるものか。

ト三人捨ぜりふにて頻りに白酒を呑む、此内◎羨ましいといふ思へあつて、片荷の白酒を知れぬやうにそつと呑む、三人はこれに心附かず頻りと呑む、此内◎醉の廻つたこなしにて、

◎　何がどうしたと、さあおれが相手だどうともしろ。

三人　えゝ、びつくりすらあ。(ト三人◎を見て、)

○ こう、豪氣にすました事を言つたが、やつぱりこいつも呑んだと見える。
◎ 呑むも呑まねえもあるものか、こつちの桶はおれが持切りだ。（トこれにて△桶の側へ來て見て）
△ やあ、ごてえさうな事を言やあがつて、片荷すつかり喰つてしまつた。
ト此以前より白酒賣後へ出掛り居て、これを見て悪い者が來て居るといふ思入にて、燈籠の蔭へ隠れ居て、此時聞き耳を立て、
白酒 なに、片荷そつくり呑んでしまつたとか。
◎ 呑んだが悪けりやあ、どうともしろ。
△ はゝあ、それぢやあ手前が白酒屋か。
白酒 はい、左樣でございまする。
○ こりや親仁よく聞けよ、事もおろかやおら達は、此日本はいふに及ばず、唐天竺までも名の高え人も怖るゝ提婆組だ、今日住吉へ參詣に、此白酒がお目に留り、勿體なくもお立寄りだ。
白酒 それはよくお立寄りなさいました。
△ それのみならず御意に叶ひ、惣仕舞にしてやるぞ。
□ 何と冥加に叶つた事ぢやあねえか、そこへ出て禮を言へ〳〵。（ト白酒賣前へ出て）

白酒　へい／＼、どなた樣も有難うございます。

◎　其替り、錢は拂はねえからさう思へ。

白酒　えゝ。（ト呆れた顏をする。）

○　これ／＼何をそんなにびつくりするのだ。はゝあ、それぢやあ何か、おら達が呑んだのが不承知だと言やがるのか。

白酒　いえ／＼、なか／＼左樣ではございませぬ。

△　さうでなけりやあ悅んで、世辭の一つもいふがいゝ、貴樣がもつと氣が利いて居りやあ、白酒の言ひ立てゞも遣つて貰ふが、手前の言立てを聞いた所がさえもしねえ。

□　それよりやあ爰へ來て、ごまでもすつて酌をしろ。

◎　酌の仕樣が惡いが最期、この尺八で叩き挫くぞ。

白酒　へい、只今お酌をする所でございます。（ト白酒賣柄杓にて酌をする、三人又呑んで、）

○　時にみんな、譬にもいふ酌はたぼだ、老爺の酌ぢやあ旨くねえ、社内へ行つて女を生捕り、酌をさせて呑み直さうぢやねえか。

△　成程、こいつあいゝ思ひ附きだ。

□ そんなら親仁も、一緒に來い。

白酒 左樣なら、また呑まつしやりますか。

四人 何と、有難え事だらうが。

白酒 成程、有難いやうでござりまする。

○ それぢやあ行かうか。

白酒 とんだ災難。

四人 早く來ねえか。

白酒 はい、今行き掛つて居ります。

ト右鳴物になり、白酒賣荷をかつぎ、四人に附いて上手へはひる。跡沈んだ合方になり、花道より。詫助白髮鬘切繼、象股引草履掛け、蜜柑籠の上へ板を載せ、これへ土器を並べ、天秤棒にて荷ひ出て來る、下手より幕明きの仕出し出で、花道にて行違ひ花道へはひる。

詫助 もし〳〵旦那、お慰みに土器を投げさつしやりませぬか、見晴らしがようござります。四文が所投げさつしやりませぬか。(ト舞臺へ來り、荷をおろし、四邊を眺め思入あつて、)さて〳〵賑かな事ではある。いやもう、何が高いの、かゞ高いのといつても、斯うして立派に着飾つて人の出さつし

やる所を見ては、まだ〱どうして、世間はよつぽどよいと見える。幸ひ人も途絶えた樣子、花を見ながら、どりや、一服やらかしませう。(ト捨石へ腰を掛け、煙草入より摺火打を出し、煙草をのみ思入あつて、)餘所の娘が着飾つて、斯うして遊山に出さつしやるを、見るに附けても娘のお賤、我が子を褒めるぢやなけれども、十人並に勝れた器量、さぞよい裝がしたからうと、思ふに甲斐ない貧乏暮し、それを不足な顏もせず、孝行にしてくれる程、いとゞ不便が增してならぬ。(トほろりとして氣を替へ、)はゝゝゝ、年寄の癖として、つひ愚痴ばかり出てならぬ、何はともあれ、此やうな他愛もない土器を子供だましに賣つて居ても、どうやら斯うやら暮して行くも、今日樣の皆お蔭ぢや、有難うござります。(ト空を拜み、)はゝあ、最う日差しの鹽梅では、九つ少し廻つたやうぢや、是れから人の出盛る時分、いつもの茶見世で茶を貰ひ、どりや、辨當を遣ひませうか。(ト蜜柑籠の上の板を取り、中を見てないといふ思入にて、又こちらを明けて見て、)南無三、しまつた、こりや辨當を忘れて來た。えゝこりやどんな事をしてのけた。いやもう年を取つては、とんとやくたい、あの娘のお賤めが出掛けに詰めてくれたのを、草履の鼻緒を立てた時、上り端へ置いたまゝがらり忘れて置いて來た。えゝ、まゝよ、今日はお晝飯は御延引と仕よう。

ト流行唄になり、花道よりお賤ほつれたる島田髷、切繼裝、藁草履をはき、重箱を風呂敷にて包み、

提げて出來り、花道にて、

お賤　櫻時分といひながら、ても賑かな事ぢやなあ、それに附けても父さんが、此長の日にお辨當を、忘れしやんして、嘸ひもじがつて居やしやんせう。どうぞ早う逢ひたいものぢやなあ。（卜右の唄にて舞臺へ來り、詫助を見て、）父さん、爰に居やしやんしたか、わたしや一遍と尋ねたわいなあ。

詫助　おゝ娘か、何しに來たのぢや。

お賤　さいなあ、お前が商ひに出やしやんした其跡で、お辨當が忘れてあつたゆゑ、嘸まあ困んなさんせうと、早う持つて來たけれども、いつもの所に居やしやんせぬゆゑ、里松さんに聞いたれば、鳥居の方へ行かしやんしたと聞き、來ごとは來ても此人込み、わたしや方々搜したわいなあ。

詫助　それはよく持つて來てくれた、まだ今日は商ひがないゆゑ、延喜に居所を替へようと、こつちの方へ出掛けて來て、今に人の出盛る時分、此間に飯をやらかさうと、見ればがらりと忘れて來たゆゑ、今日は晩まで斷食ぢやと、覺悟を極めて居たところを、よう持つて來てくれた。嬉しいぞよ〳〵。あ、これを思へば世の中に、持つべきものは娘ぢやな。

お賤　何のまあ勿體ない、其やうに言はしやんすと、わたしに罰が當りますわいなあ。

詫助　何の罰が當らうぞ、そちが來たこそ幸ひぢや、わしはいつもの茶見世へ行て、茶を無心して來る

程に、留守をしながら爰に居ずし、春めく人の裝でも見て、目の正月をさせたがよい。

お賤　あい〳〵、合點ぢやわいなあ、そんなら早う行てござんせ。

詫助　おゝ、直に行て來るぞよ。

ト流行唄の合方へ大拍子を冠せ、詫助上手へはひる。直に花道より小田井、文金髷、振袖雪踏がけ、日傘さし扇を遣ひながら出る。續いてお牧丸髷下女のこしらへ、矢張り雪踏にて出る、跡より三太の小僧、風呂敷包みを背負ひ、附き出て花道にて、

お牧　なんとお孃さま、櫻の宮とこと替り、此住吉は又格別、よい眺めではござりませぬかいなあ。

小田　ほんにそなたの言やる通り、よい眺めではあるわいなう、それはさうと今あすこで、提婆組とやらいふ男達が、此住吉へ來て居るゆゑ、喧嘩がなければよいとの話し、氣味の惡い事ぢやわいなう。

お牧　それはお案じなされまするな、假令何がありませうとも、こちらは女の事ゆゑに、構ふことではござりませぬ、殊更お側に私がお附き申して居りますれば、きな〳〵思召さぬが、よろしうござりますわいなあ。

三太　そんな事を言つて、一番先きへ迯げ出さうと思つて。

小田　又そのやうな憎まれ口、默つて居やらぬか。

お牧　さあ、斯うお出でなされませ。

ト右の唄にて、三人舞臺へ來る。此時詫助上手より土瓶を提げて出で、社殿模樣の鳴物になり、お賤詫助は三人と千鳥に入違ふ事あつて、お賤小田井を見て綺麗な裝だと羨しき思入、三太お賤詫助を見て、

三太　汚ねえ裝だなあ。

お牧　これはしたり、默つて居ぬかいなあ。（ト是れにてお賤しよげるこなし）

三太　いや咲いたりな〳〵、花は櫻木人はぶいちとは、此ことでげすて。

小田　えゝも子供の癖に、其やうな生利な事をいふと、人が笑ふわいなあ。

三太　いや爰らで一句やる所だが、空しく歸るは殘念ないたちでげすて。

お牧　ほんにお見世の番頭さんが、俳諧とやらに凝つて居るゆゑ、小僧どんまでが同じやうに、やれぶいちだのいたちだのと、分らぬ事を言ふわいなあ。

小田　これ三太、其やうなこと言やるなら、俳諧とやらをして聞かしやいなう。

三太　お孃さんのお好みとあらば、一句佛を浮ませようか。こうつと、おゝそれ〳〵、「夕立やかはづ飛

びこむ貰ひ水、浪乘り船の雪は降りつゝ」でげすて。

お牧　ほんに、可笑しい三太どんぢやわいなあ。（ト爰へ詫助出て）

詫助　もしお孃さま、土器は如何でござります。

三太　何だ土器だ。

詫助　これをお投げなされませぬかと、申したのでござります。

お牧　さお其土器も買つて上げたいが、お參りが遲くなるゆゑ、歸りに買うて上げようわいなあ。

詫助　それは有難うござります、左樣ならお歸りをば、お待ち申して居ります。

小田　そんなら參つて來ようわいなあ。

お牧　さあ、參りませうわいなあ。

ト右の唄にて三人上手へはひる。お賤跡を見送りてこなし。合方になり、

お賤　いづくのお方かは知らねども、ても美くしい事ぢやわいなあ。

ト是れを聞き詫助不便なといふ思入。

詫助　同じ娘に生れながら、今の娘は大家と見え、美しい形容、それには引替へそちが其裝嘸羨しいことであらうと、それが不便でならぬわい。

お賤　又其やうな事言はしやんすか、何の羨しい事がござんせう、さう言はしやんすお前こそ、年寄らしやんして此やうに、朝から晩まで齷齪と世帶の苦勞をさしやんすが、わたしや悲しうてならぬ、世の譬にも人の身は、七轉び八起きとやら、やがて花咲く時節が來れば、今の苦勞を昔語りに、お前を樂にさせませう、どうぞそれを樂しみに、煩はぬやうにして下さんせいなあ。

ト　これにて詫助涙を拭ひ、

詫助　おゝよう言うてくれた、嬉しいぞよ、年端も行かぬそなたにまで、其やうに苦勞をかける、生甲斐もない此親仁、いつそ死んだが増しであらう。

お賤　又そのやうな氣になる事、もう〱死ぬの何のといふ事は、嘘にも言うて下さんすな。便りに思ふお前に死なれ、跡に殘つてわたしが身は、どう仕ようと思はしやんす。えゝも、延喜の惡い、鶴龜々々。

詫助　是れはおれが惡かつた、堪忍せい〱、何でもお飯をたんと喰ひ、體を丈夫にせねばならぬ。

お賤　ほんにそれがようござんす、さあ茶の冷めぬうちお辨當を、遣はしやんすがよいわいな。

詫助　おゝさうであつた、どりや御造作にあづかりませう。

ト　辨當を遣ひに掛る。早い大拍子になり、ばた〱にて上手より以前の仕出出で、

大勢　それ、提婆組が來た、逃げろ〳〵。

ト一散に花道へ逃げてはひる。跡より以前の○△出來り、詫助を見て、

○　これ〳〵親仁、たつた今爰へ十六七の、いゝ娘と二十四五の意氣な年增が、逃げて通りはせなんだか。

△　どつちへ行つた、敎へてくれろ。（ト詫助辨當を遣ひながら）

詫助　いえ、左樣なものは一向に心附きませなんだ。

○　なに、心附かねえ。これ、心附かねえで濟むと思やあがるか、何の爲に爰に番をして居やあがるのだ。

詫助　へい、商ひをして居りますゆゑ、左樣な番はいたしませぬ。

△　こいつが〳〵口の減らねえことをぬかしやあがる。こりやおら達を見損やあがつたか、當時難波に隱れのねえ人も恐れる提婆組だぞ、それに何だ、人が物を聞けば、飯を喰ひながら挨拶をぬかしやあがる。總體それが、氣に入らねえのだ。（ト詫助の持つて居る重箱を足にて蹴落す。）

詫助　えゝ、勿體ない事さつしやりますな、知らぬから知らぬと申したのでござります。それを腹を立たつしやるは、そりや御無理と申すものでござります。（トむつとする。）

○ 何だ、無理だ、これよく聞けよ、假令無理でも通すのが、おらが仲間の持前だ。

△ こんな奴に物をいふのは、馬の耳に念佛だ、口ごてえを仕やあがつた替り、懲り〳〵するやうに叩きなぐれ。

お賤 あゝ申し、どうぞ堪忍して下さんせいなあ。

○ えゝ、邪魔をせずとどいて居ろ。

ト お賤の留めるを聞かず、兩人にて詫助を散々に尺八にて打ちする。トゞ土器の荷を轉覆し、

兩人 ざまあ見やあがれ。(ト右鳴物にて花道へはひる。詫助をお賤介抱する。)

詫助 あゝ痛い〳〵。

お賤 これ父さん、どこぞ怪我でもせぬかいなあ。

ト これにて詫助起上り、體の痛む思入にて四邊を見て、

詫助 やゝゝゝゝ、こりや肝腎の代物を、一つ殘らず粉々に、もう勘辨がならぬわえ。

ト 天秤棒を持ち、きつとなる。

お賤 さあ其腹立ちは尤ぢやが、先きは惡者、老の身で叶はぬ事は知れてある。まあ〳〵待つて下さんせいなあ。

詫助　年を取つても此詫助、まだあいつらに負けやあしねえ、留めずとどうぞ遣つてくれ。

お賤　いえ〳〵、どうでも遣られぬわいなあ。

ト兩人爭ひながら花道へ行く、賑かなる鳴物になり、花道より野晒悟助、好みの衣裳、鮫鞘の一本差柾の下駄にて、尺八を差し出來り、詫助を留めて、

悟助　これさ、危ねえ、待ちなせえ。

詫助　どうぞ放して下さりませ。

お賤　あゝもし、留めて下さりませいなあ。

悟助　往來中の間違ひも、どういふ譯か白髮の爺さん、額に浪の寄る年で、棒ちぎりやあ大人氣ねえ、待てといつたら待ちなせえな。

詫助　其御親切は有難いが、是れには段々譯のあること、留めずに遣つて下さりませ。

悟助　さあ、其入譯も向ふへ行き、とつくり聞いた其上で、袖振り合ふも緣とやら、わしが譯道附けようから、腹も立たうが爰が勘辨、おれに免じて返んなせえな。（ト無理に詫助を舞臺へ連れて來る、お賤嬉しき思入。悟助上手の床几へ掛け思入、始終かすめて出の鳴物。）出合頭の事なれば、詳しい事は知らねえが正直者の突き詰めた心と見たゆゑ彌次馬に、留めに這入つたこの扱ひ、どうしたもの

の縺れから、こんたは腹を立てなすつたのだ。

詫助　年甲斐もなく此やうに、棒ちぎりを持ちまして、おこります氣もござりませぬが、おこゝにやならぬ其譯を、一通り聞いて下され。（ト詫への合方になり、）定めてあなたも御存じの、惡いと噂の提婆組の仲間の衆がわしを捉へ、知らぬ女の行方をば知つて居るかと聞かつしやるゆゑ、いえ一向に存じませぬと、いへばいや／＼爰に居て、知らぬといふがあるものか、なぜ敎へぬと無理難題、知らぬことをば其やうに言はつしやるのは御無理ぢやと、いふたが先きの氣に障り、何科もない私の生業物の土器をば、皆こな／＼に毀されまして、擧句の果にうち打擲、わしが體は叩かれても怪我さへせねば堪忍が、なれどならぬは土器の碎けて元の土同然、僅か二百か三百の儲けを持つて歸りまして、味噌醬油から米薪と、やう／＼繫ぐ親子が露命、此物成りの高いのに、ただへ困る貧乏人、元を失ひ途方に暮れ、叶はぬ事と知りながら地藏の顏も三度笠、破れかぶれも年寄のほんの冷水ひやいなところへお年若なお前樣に、御厄介になりますのも、面目なさと詫助が、命拾ひをいたしましてござります。（ト淚ながらにいふ。）

お賤　父さんの身にどのやうな、怪我過ちのある時は、困りまするは私一人、どうなることかと案じましたに、あなたがおいで下されまして、危ふい難儀を遁れまして、えゝ有難うござりまする。

ト辭儀をなす、悟助此うち可愛さうだといふこなしあつて、

悟助　段々との入譯を、聞けば聞くほど哀れな話し、理に詰められてわしまでも、貰ひ泪をこぼしました、それに附けても憎いのは非道を働く提婆の子分、こんたも腹が立つだらうが、相手が悪いあきらめなせえ、其替りにやあ何所ぞでおれが、敵を取つて遣りませう。

詫助　いえもう、お若いあなたの御異見が、身にしみぐとこたへまして、嬉し淚がこぼれます。

ト悟助提煙草入より、小判を一枚出し、紙に捻り、

悟助　おい詫助さんとやら、こりやあ少しばかりだが、今こはされた土器を、わしが買つたる喧嘩の扱ひ、心ばかりだ取つて置きねえ。（ト詫助取つて開き見て、）

詫助　こりや大枚の小判で一兩、めつさうな事おつしやります、危ないところを助けられ、それのみならず此やうに、金子をお貰ひ申しましては、お天道樣へ濟みませぬ、平にこれはお返し申します。

悟助　さうでもあらうが土器を、おれに直をよく賣つたと思ひ、まあ此金は取つて置きねえ。

詫助　いえくどうでも是ればかりは、お貰ひ申すことは出來ませせぬ。

悟助　それぢやあおれの扱ひが、氣に入らねえと言ひなさるのか。

詫助　えゝ、めつさうな其やうな事が。

悟助　さうでなけりやあ取つて置きねえ。
詫助　それだと申して勿體ない。
悟助　但しはおれの顏を潰すか。
詫助　さあ、それは
悟助　野暮を言はずと、これ爺さん、默つて取つて置きなせえな。
詫助　これ娘、こりやどうしたらよからうの。
お賤　さあ御親切にあのやうに、仰しやつて下さるを、お返し申すは却つて失禮、お貰ひ申したがよいわいな。
詫助　そんなら。
お賤　あいなあ。（ト是れにて詫助氣の毒さうに、悟助の側へ來て、）
詫助　左樣なら旦那樣、近頃誠に濟まぬ事ではござりまするが、お詞に甘へまして、此お金をお頂き申しまするでござりまする。
悟助　そんならおれの詞に從ひ、金を納めてくんなさるか、それでこつちの心も屆き、おれも共々悅ばしい。

詑助　これ娘、お禮を申せ。（ト お賤前へ出て）

お賤　これは〳〵、見る影もない私共へ、段々との御親切、殊に大枚のお金をば、頂きまして此やうな、有難い事はござりませぬ。

詑助　何れお禮に上ります、御迷惑かは存じませねど、あなたのお家はいづくにて、お名は何とおつしやりまする、憚りながら私共へお聞かせなされて下さりませ。

お賤　あゝもし父さん、あなたならわたしや知つて居るわいなあ。

悟助　そんならこなたは、疾うからおれを。

詑助　お見かけ申してお家から、あのお名前まで知つて居るか。

お賤　あい、知らいで何とせうぞいなあ。（ト恥しき思入。）

詑助　そんならわが身知つて居るか。何れお禮に上ります、旦那樣有難うござります。

悟助　禮に來るにやあ及ばねえが、知つてとあるなら近所へでも、來たなら寄つて行きなせえ。

お賤　參る段ではござりませぬ、御迷惑でさへなくば、毎日でも上りますわいなあ。なあ、父さん。

詑助　いやもう貧乏させたお蔭には、臺所元でもさせまするると、其手つゞきといふものは、茶の湯の師匠でも及びませぬ、若しお女中でもお入用なら、娘をお遣ひなされませ。

悟助　子分の奴等も大勢居るが、困つた時は頼みませう。（ト時の鐘）とかうする内もう八つだ。又もや障りのない内に、そなたも早く歸るがいゝ。

詫助　有難うござります。

悟助　どりや、おれも參詣して來よッか。（ト悟助立上る、詫助思入あつて、）

詫助　あゝ、お年若でも此やうに、

お賤　お情深いお方もあり。

悟助　思へば憎い提婆組。

詫助
お賤　左樣なれば、御機嫌よろしう。

悟助　よく氣を附けて行きなせえ。（ト唄になり、悟助上手へはひる。詫助悟助の跡を伏拝み、）

詫助　あゝ有難い〳〵。どりや〳〵旦那樣の詞に隨ひ、少しも早く歸りませう〳〵。（ト荷などを繕ひ空を見て、）花曇りとは言ひながら、大分お天氣が怠けたやうぢや、明日は雨にならねばよい。（ト此内お賤悟助の跡を見送りうつとりとして居る。）さあ娘、行かうかの。（トいへどお賤悟助の跡を見て居るゆゑ、）これお賤、何を見て居るのぢや。はあゝ分つた、今の跡を、こりや尤ぢや。これ娘、娘、これ娘。

　　ト大きく言ふ。それにてお賤びつくりして床几へ腰をかける、これを道具替りの知せ、

そんなら今の、

お賤　え、

詫助　か。（トお賤顔を隱し、恥しき思入）あゝ尤ぢや。

　　ト浪の音をすめて、流行唄の合方にて此道具廻る。

　　（住吉境内の場）――本舞臺三間の間、上手へ寄せて一間の出茶屋、軒へ提灯をかけ、床几二三脚並べあり、後住吉の社、反橋の書割、所々に櫻の立木、同じく釣枝、總て住吉境内の模樣。爰に以前の男達四人、小田井お牧を引寄せ、床几へ掛り、いやがるを無理に酒の酌をさせて居る、下手に三太泣いて居るを、白酒賣拵して居る、此見得大拍子にて道具留る。

○　さあおむす、斯うつらまへて來たら、もうどんな事があつても放さねえぞ。一ぱい呑んでくれ、呑んでくれ。

小田　有難うはござりますれど、不調法でござりますれば、御免なされて下さりませいなあ。

△　これさ、そんな愛敬のねえ事をいふものぢやあねえ、貴樣達に呑ませようと、辛いのを止めにして、わざ〱白酒を呑んで居るおら達だ。

□　これ程思ふ心中男、何と憎くはあるめえがの。（ト□お牧にしなだれろ。）
お牧　其御親切は有難うござりまするが、歸りが遲くなりまするど、私が叱られまする程に、どうぞお歸しなされて下さりませ。
○　これさ、白痴が女郎買に行つたやうに、何ぞといふと歸る〳〵と、氣障な事をいふなといふに。
三太　早く歸らないと、番頭さんに叱られらあ。
白酒　今におれが詫言をして、歸してやるから泣くな〳〵。
△　やい〳〵此角大師め、酒の場所で延喜でもねえ、さつきからめそ〳〵と泣ッ面をしやあがるな、默りやあがらねえと叩きくぢくぞ。
白酒　あゝもし、其やうな事を仰しやらずと、もうよい加減になされませ、お孃さんやお供の衆を歸して遣つて下さりませ。
◎　えゝ喧しいやい、手前までがおんなじやうに、餘計な口を叩きやあがるな。
□　えゝこんな奴が側に居るから、酒がめいつて面白くねえ、追拂つてくれ〳〵。
○　合點だ〳〵。さあ、うぬ等のやうな奴は居ると邪魔だ、勝手に荷を置いてうしやあがれ。
白酒　さうおつしやらずと、どうぞ置いて下さりませ。

○　えゝ、行きやあがらねえと、打ちのめすぞ。

ト尺八を振上げる、これにて白酒賣と三太下手へ迯げてはひる。

△　さあ、邪魔は拂つた。これおむす、そんなに顫へるにやあ及ばねえ、歸りたけりやあ歸して遣るから、言ふやうになつてくれろ。

小田　えゝもう、其やうな事は存じませぬ、どうぞ許して下さりませ。

◎　知らざあおれが敎へてやらう。（ト小田井を猶も引寄せようとするを振拂ひ、）

小田　あれ、惡い事をなされまするな。

△　何惡い事ぢやあねえわえ。

ト△◎兩人にて小田井を手籠めにしようとする、お牧あわてゝ留めて、

お牧　あゝもし、まあ〳〵お待ちなされて下さりませ。そりやはや、御酒の上の事ゆゑに、御常談かは存じませぬが、御孃さまのお身の上に、若しもの事がござりましては、附いて參つた私が、命を捨てても旦那樣へ申譯がござりませぬ。爰の所をお聞き分け下さりまして、是ればつかりは何れも樣、お許しなされて下さりませいなあ。

△　これさ〳〵、そんな惡堅へ事をいふものぢやあねえ。

◎ どうでおら達に見込まれちやあ、たゞは歸さねえ、美しく生れたがお前達の不請といふものだ。

□ さあ、年增の方でも新造でも、どつちでも手當り次第だ。

○ さうだ〳〵、こんな事は手短がいゝ、ちつとも早くやらかせ〳〵。

ト□○兩人にて、お牧を捉へる。

お牧 あれえ、誰ぞ來て下されいなう。

ト四人◎○お牧を羽がいじめにする。△は小田井、□はお牧を捉へる。兩人あれえ〳〵と藻掻く、賑かな鳴物になり、花道より以前の悟助出で、花道にてこれを見て舞臺へ駈附け、四人を投退け、小田井お牧を後へ圍ひ、きつと見得、是れにて四人體の痛む思入。

○ あゝ痛え〳〵、女にしては怖しい力だ。

△ こいつあよつぽど喰せもんだぜ。

□ 面と力とは大違ひだ。あゝ、痛え〳〵。

◎ あんまり色氣がなさ過ぎらあ。（ト四人こんな事を言ひながら起上り、悟助を見て）

○ やあ、こりやあ女だと思ひの外、

△ いつの間にやら、青二才、

□　地から湧いたか、天から降つたか、

◎　なぜおら達の、

四人　邪魔をするのだ。

悟助　邪魔をするとはうぬ等がこと、花見の人に難儀をかけ、非道を働くあぶれ者、懲らしてやらうと
さつきから、うぬ等の跡を捜して居たのだ。

○　こいつが〱、まだ小二才の分際で、大きな事をまき出しやがつたな。

△　知つて居るかは知らねえが、當時難波で名の高い、おらが親分仁三郎に、

□　肩を竝べる奴はねえに、遂に見馴れぬしやツ面だ、

◎　いつてえうぬア、

四人　何所のどいつだ。（ト誂への合方になり、）

悟助　峯の松風ざわ〱と、耳やかましくおれが名を、問はれてなんの浪花潟、打込む浪にしつぽりと
濡れて夜汐に淡路島、通ふ船路も鳴門越え、其の渦卷を定紋に、人に男と立てられる、塔婆もわ
づか一ほんか、日本橋の橋詰で、浮名を殘す野晒悟助、骨つぽいから覺悟しろ。

トきつと見得。

○　おゝ、噂に聞いた野晒悟助、骨つぽいとは面白え、
△　道頓堀の川筋で、浮名を流すこんたなら、
□　こつちも名うての天竺浪人、昨日は紀州京三界、
◎　居所定めぬ提婆組、引けを取つちやあ仲間の恥、
○　息の根止めて、
四人　くれべいか。
悟助　何を小癪な。
ト誂への鳴物になり、四人尺八にて悟助に打つて掛る。悟助これを相手にいろ〳〵面白き立廻りあつて、□穿いて居る堂島下駄にて打つて掛る。悟助これを取つて□の天窓を打割る。三人悟助に組附く。此はづみに右の下駄を上手の茶屋の内へ打込む。トゞ皆々叶はず駒下駄を持ち、一散に花道へ逃げてはひる。悟助附際まで行き、
えゝ、口程にもねえ弱い奴等だ。（ト言ひながら跡へ返る、小田井お牧出て手を突いて、）
お牧　これは〳〵いづくのお方かは存じませぬが、既に手籠めに逢ふ所を、あなた様がお出で下され、難儀を救うて下さりまして、お孃さまにもお怪我もなく、歸りましても私が主人へ言譯が立ちま

する。何とお禮を申しませうやら、お禮は詞に盡されませぬ、これは〳〵、まあ有難うござります。

小田　ほんにもうどのやうな目に逢ふことかと、生きた心地はなかつたに、あなたがお出でなされたゆゑ、危い難儀を脱れました、私が爲には命の親、え丶有難うござりますわいなあ。

悟助　これさ〳〵、是れしきの事をそんなに禮を言はれると、却つておれが立ち端を失ふ、今も今とて門前で可愛さうに年寄をば、ぶち打擲をした跡へ、通り掛つて聞いて見りやあ、みんなあいつら四人の仕業、どうぞ一番どこぞでか懲らしてやらうと思つて居たに、出會したのは丁度幸ひ、ちつとはあれで懲りるだらうよ。

小田　其お強いに引替へて、ても、お優しい殿御ぢやなあ。（ト悟助に見惚れるこなし。）

お牧　それはさうと三太どんは、何所へ逃げて行かしやんしたか、案じられる事ぢやなあ。

悟助　然し是れから歸るのに、女ばかりぢやあ物騒だ、おれが送つて上げたいが、ちつと遁れぬ用もあれば、所によつちやあ行かれねえ。さうしてこなた衆の家はどこだえ。

お牧　はい、私は堺の町人扇屋鹿右衞門と申す者の召仕、まきと申すものでござります、是れにお出でなされますは、小田井さまと仰しやいまして、其お娘御でござりまする。

悟助 むゝ、そんならこんた衆は堺だとか。

お牧 左樣でござります。

悟助 そいつあちつと都合が惡い、難波の方へ行く道なら、どうでおれも歸り道、一緒に送つて遣りてえが、堺の方ぢやあ方角違ひだ、さうかといつて女ばかり、歸して遣るも心遣ひ、こいつあ困つたものだなあ。

ト花道より以前の三太先きに、手代の一、二駕籠をかゝせ出來り、

手一 これ三太、お孃さまはどこに居るのだ。

三太 何でもあつちの茶見世のある所だ。

手二 よつぽど褌を堅くしめて掛らにやあならねえ。(ト皆々舞臺へ來り、小田井を見て)

手一 手二 おゝお孃さま、是れおいでになされましたか。

お牧 おゝ誰かと思ふたら見世の者、よう迎ひに來てたもつたなう。

手一 いやもう三太どんの話しでは、よつぽど面倒な掛合ゆゑ、實は鬮取で出掛けて參りました。

手二 旦那樣がお案じゆゑ、早くお駕籠でお歸りなされませ。

お牧 あゝもし〱、皆さん聞いて下さんせ、三太どんも知つての通り、惡者に捉へられ、幾ら詫びて

も聞き入れず、お孃さまをば大勢で、自由にすると無理無體、既に危ふい所をば、此お方樣が通り掛り、それは〳〵小氣味よく、其惡者を取りおさへ、難儀を救つて下さんしたゆゑ、どうぞお前方もよいやうに、お禮をいふて下さんせいなあ。

手一　左樣ならあなた樣が、手前主人の娘御の難儀をば、お救ひなされて下さりましたか。

手二　歸りまして主人へも、此事を申しましたら、嘸悅びまするでござりませう。

手一　何れお禮に上りまするが、あなた樣のお宅は、どの邊でござりまする、お敎へなされて下さりませ。

悟助　なに、これしきに態々禮に來るにやあ及ばねえ。

手二　左樣でもござりませうが、お家を聞いて歸りませぬと、歸つて主人へ濟みませぬ。

悟助　さういふ事なら敎へて上げよう、わしの家は大阪で、千日前といふ所さ、野晒悟助と聞きなさりやあ、大抵知らねえものはねえ、又芝居へでも來たらお寄んなせえ。

小田　そんならあなたは大阪の、芝居町の御近所でござりまするか。

悟助　左樣でござります。

お牧　さうおつしやれば旦那樣は、あなたが不斷御最屓の市村によう似ておいでなされまするなあ。

小田　それぢやによつて。
お牧　えゝ。
小田　さあ、疾うからさう思つて居るわいなあ。
悟助　然しお家で斯うやつて、見世の衆を迎ひに寄越す位ゆゑ、嘸親御達も案じて居よう、ちつとも早く歸んなせえ。
手一　いやもう案じる段ではござりませぬ、爰に居る小僧が青くなり、飛び込んで參りましたゆゑ、何事かと樣子を聞けば、お孃さまを住吉で亂暴者が大勢で、弄つて居るとの觸込みゆゑ。
手二　家の騷ぎは上を下へ、旦那樣もお上さまも、氣違ひのやうになつて、おいでなされました。
お牧　ほんにさうでござんせう、わたしがお附き申して居ながら、面目もない今日の始末、濟まぬ事でござんすなあ。
悟助　さういふ事なら猶のこと、ちつとも早く歸んなせえ。
お牧　左樣なら私共はこれでお暇いたしまする、皆さん大きに御苦勞でござんす。さあお孃さま、參りませう。（トいへども小田井、悟助に見惚れうつとりして居るゆゑ。）もしお孃さまえ、どうなされました。（ト背中を叩く、小田井びつくりして、）

小田　えゝも、何ぢやぞいなあ。
お牧　何だではございませぬ、もう參らうではございませぬか。
小田　わたしやどうやら、去にともないわいなう。
お牧　これはしたり、どういたしたものでございまする。何時までも居て御覽じませ、又さつきのやうな怖い目に逢はうも知れませぬぞえ、それにもお懲りなされず、去にともないとは、如何いたしたものでございます。（ト此内始終三太見て居て、）
三太　なあにお孃さんは、あのお人に、ほの字だわね。
小田　えゝ、何を言やるぞいなあ。（ト恥しき思入、お牧さてはといふこなし、）
お牧　へゝえ成程、こりや御尤でございまする。かう見た所がお二人とも、何れ劣らぬよい御器量、丁度似合の。
悟助　えゝ。
お牧　いえなに、是れははや附かぬ事を承はりまするやうではございまするが、あなたには定めてよい御内方樣がございませうな。
悟助　どうして〳〵大違えだ、年若な身で親に死なれ、據なく跡を繼ぎ主人になつちやあ居るものゝ、

御贔屓さまのみんなおかげ、女房所かおのが手で、天窓の蠅さへ追ひ切れねえ。

お牧　へえ、左様ならあなたは、まだお獨身でござりまするか。

悟助　獨身者でござります。

小田　それはまあ、お嬉しうござりまするわいなあ。（ト嬉しきこなし。）

お牧　お孃さま、お嬉しうござりませうな。

小田　こんな嬉しい事はないわいなあ。

お牧　ほんにもう私でさへ、嬉しうて〳〵なりませぬわいなあ。

手一　あゝ嬉しい、いやもう嬉しいのは皆一同、こんな嬉しい事はござりませぬ。

お牧　えゝも、お前方の嬉しいのとは、嬉しいのが違ふわいなあ。ねえ、お孃さま。

小田　さうぢやわいの。

手二　何にいたせ、ちつとも早く歸らうではござりませぬか。

駕舁二人　さあお孃さま、お仕度がよくば參りませう。

小田　そんならどうでも、行くのかいなあ。

お牧　さあお家でお案じなされますれば、今日の所はお歸り遊ばし、旦那樣やお袋樣に、お話し申した

其上で、お家が知れし上からは、ゆつくりと、それなあ、お禮に上つたがよろしうございますわいなあ。

手一　それがよろしうございませう。

駕舁二人　さあお孃さん、お召しなさい。（ト小田井を駕籠の前へ連行く。）

小田　えゝも、意地の惡い駕籠屋さんぢやわいなあ。（ト駕籠へ乘る、是れを駕籠屋舁きあげる。）

お牧　左樣なれば親方樣。

悟助　そんなら女中。

小田　でも、お愛しい。（ト駕籠よりのり出す。）

お牧　あゝもし、お危なうございますわいなあ。

悟助　氣を附けてお出でなされませ。（ト唄になり、小田井心の殘る思入、お牧危ないと氣遣ふこなしよろしく、皆々花道へはひる。悟助跡を見送り、）俗では居るが佛の弟子に、喧嘩をしめえと思つて居るが、人の難儀を見て居られず、提婆組の奴等をば酷い目に逢はしたのでとんだ罪を作つた。然しこれも後生のうちか。後生といへば又明日は、おれがお袋の命日ゆゑ、毎月今夜の九つから明日の晩の九つまでは、どんな悔しい事があつても、堪忍の二字を守り、料簡するのが佛へ誓ひ、どれ家へ歸

つて香でもあけ、念佛でも唱へようか。

ト流行唄の合方にて、悟助花道へ行きかける。此時上手茶見世の内より、浮世戸平着流し一本差し柾の下駄を履き、男達好みのこしらへにて出來り、

戸平　あもし若いの、ちよつと待つてくんなせえ。

悟助　なに、待てとはわしかえ。

戸平　手間は取らせぬ、どうぞ爰まで。

悟助　何か知らねど、用とあるなら。

戸平　それぢやあ返つてくんなさるか。

悟助　どれ、そこへ行きやせう。（ト摺鉦入りの鳴物になり、悟助舞臺へ來る。）

戸平　こりやあよく返つてくんなすつた。

悟助　誰かと思へば戸平どのか。

戸平　こなたに逢ふのも久し振り。さあ悟助どの、まあ爰へ。（ト床几へ思入。）

悟助　それぢやあ御免なせえ。（ト悟助下手へ掛ける、戸平思入あつて、）

戸平　早速ながら悟助どん、樣子は殘らず見て居たが、まだ年若なこなた故左程の事もあるめへと思ひ

の外に今の喧嘩、當時日の出と言はれるだけ、多勢を相手の働きやあ、なか〱おれなざあ及ばねえ。

悟助　何の及ぶの及ばねえのと、端た喧嘩はするもの丶、家の前の瘦犬で、うぬが育つた土地限り、他へ出ちやあ意氣地はねえ、何の役にも立たねえが、何れも樣のお蔭ばかりで、鼻つ柱が強いのさ。

戸平　いつぞやこんたに別れてから、僅かなうちとはいひながら、種々してえ話しもあるから、久し振りで一杯呑まう、ちよつと附合つてくんなせえ。

悟助　折角お前の頼みだから、附合つて呑みてえが、おらあ生れ附いて酒嫌えだ。

戸平　嫌えなら猪口ばかり、酒は呑むにやあ及ばねえから、一緒に行つてくんねえな。

悟助　愛敬のねえ事をいふやうだが、ちつと急な用もありやあ今日は堪忍してくんなせえ、其内逢つたら附合ひやせう。

戸平　又その内と逃口上に、おれが頼みを聞き入れず、鼻を彈いてこなたは行く氣か。

悟助　さういふ心もねえけれど、元よりおらあ酒が嫌え、面倒だから斷るのだ。

戸平　面倒ならよしにしろ。

悟助　何だと。（ト兩人きつと思入、摺鉦入りの合方になり、）

戸平 久し振りで逢つた早々角目立つもいやだから、蟲を怺へてこつちから一杯呑んでくんなせえと、喧嘩は跡に笑ふ氣で、こんたに賴むも聞き入れにやあ、野暮な文句も言はにやあならねえ。

悟助 むゝ、それぢやあ何ぞおれに遺恨が。

戸平 別に遺恨といふ程の事でもねえが此茶屋で、喧嘩に見とれて居た所へ、こなたが投げ込む草履下駄、茶碗へ當つて粉微塵。（ト盆の上へ割れた茶碗と片々の堂島の下駄を載せて出し、）とんだ喧嘩を横合から、こいつあ買はにやあならねえかと、立つた腹を横にして、一杯呑んでいゝ仲にならうと思つて呼んだのだ、いやだと言やあ仕方がねえ、破れた茶碗の挨拶さつしやれ。

悟助 むゝ、それぢやあこんたは初めから、喧嘩腰で呼んだのか、燒繼屋なら仕樣があらうが、破れた茶碗は仕方がねえ。（ト思入あつて床几を放れ、戸平の前へ來て下に居て、）さあ茶碗のかはりおれが額、その草履下駄でこわしなせえ、これが茶碗の挨拶だ、喧嘩はするが一休の弟子だけ悟つた野晒悟助、手出しはしねえ、破しなせえ。

戸平 流石は名うての野晒悟助、茶碗の代りしやつ額こわせといふは新らしい、然し手出しをしねえと言やあ、死人を打つも同じこと、浮世戸平は相手にしねえ。

悟助 そりやあいらぬ負け惜しみ、茶碗の代りぶたれた上は、跡は互ひに五分と五分、死ぬか生きるか

命の取り遣り、まあ仕返しから先きへしなせえ。

戸平　それぢやお跡の喧嘩を頼みに、先づ仕返しの草履下駄。

悟助　丁度隣りも鏡山、遺恨の仕返し草履打ち。

戸平　こつちも達師の意地づくに、

悟助　尾上のかねていつぞとは、

戸平　胸に疊んだ岩藤も、

悟助　今日の出會にこの喧嘩、

戸平　引くに引かれぬ六段の、

悟助　その奥庭の蛇の目傘、

戸平　破れかぶれとなる上は、

悟助　少しも早く、

戸平　むゝ、遺恨の仕返し。（ト草履下駄を取り、）覺えて居ろ。

ト振上げる、此以前より下手へ羅漢の南無右衛門、着流し柾の下駄一本差し、老けたろ男達のこしらへにて出て居て、

南無　あゝ、これ待つた、待つてくれ。
戸平　や、さういふこなたは。
悟助　達師仲間の親仁分。
南無　朝から晩まで念佛と首つ引する六字南無右衞門、おれが留めた、待つてくりやれ。
戸平　折角こなたの挨拶だが。
悟助　仕掛けた喧嘩を、
兩人　此儘には。
南無　はて、何事も年の功、惡いやうにはしねえから、待てと言つたら待つてくりやれ。
兩人　むゝ。（下兩人思入あつて顏見合せ控へる。誂への鳴物になり、南無右衞門眞中にて思入あつて、）
南無　樣子は後で殘らず聞いた、久振での二人の出會、此樣ことがあらうかと何も樣がお案じ故、役に立ねど年役に二人が跡を附て來たのだ、九年以來別れてから何方も今ぢやあ一本立、取分戸平は坂東一子分子方も大勢で一座を預る頭株、又野晒も江戸市村當時若手の賣出にお女中樣の引張凧何方も負ぬ男と男、留めに入つた此己も年ぢやあ當時市川だ、然も戸平が親仁と同年、龜藏ならぬ龜の子親仁、朝から晩まで酒浸しに醉ふと言ふぢやあねえけれど、元より二人は親類に兄よ弟

と言ふ仲だ、言ば內輪の兄弟喧嘩、野暮な蕨の拳を出さず、山さへ笑ふ春の空、遺恨殘さずさつぱりと雪解と共に解合うて、此場を水にして下せへ。（トよろしく思入にて言ふ、兩人じつとこなしあつて）

戸平　一方ならぬこんたの挨拶、元より遁れぬ中合に、初手から事は好まぬ氣さ。

悟助　お前がさういふ心なら、やつぱりおれも同じこと、跡へ遺恨が殘るものか。

南無　それぢやあ此場を水にして、おれに預けてくれる氣か。

兩人　預けねえでどうするものだ。

南無　そいつあ何より有難へ、物は當つて碎けろと、割つた茶碗はおれが預り。（ト以前の破れし茶碗を取退け、有合ふ茶碗を二つ出し、）此場を丸く茶碗と茶碗、これで一杯呑んでくりやれ。

戸平　死ぬか生きるの遣り取りも、

悟助　目出度く笑つて茶碗のやりとり、

戸平　然し爰にやあ肝腎の、

南無　おつと酒なら片時も、腰を放さぬ此瓢簞。（ト二重の上にある吸筒の瓢簞を出し、）先づ年長だ戸平から。（ト南無右衛門戸平へつぎ、又悟助へつぐ、兩人呑んで、）

戸平　それぢやあ是れで、

悟助　元の兄弟。（ト兩人茶碗を取りかはせ南無右衛門、悟助へつぎ又戸平へつぐ、兩人呑んで、）

兩人　目出度く納めてくんなせえ。

南無　おつと承知だ、（ト兩手へ茶碗をうけ、）「兩の手に桃と櫻や草の餅。」いや草餅は眞平だ。（ト悟助酌をなし、南無右衛門呑み干し思入あつて、）先づこれで安心した。

戸平　祝ひに是れから連立つて、

悟助　しんみり何所ぞで、

南無　む丶、呑み明かさうか。（ト此時後へ○△の子分兩人出で、）

○△　うぬ、さつきの返報。（ト悟助へ掛るを戸平も一人と立廻つて投退け、）

戸平　又もうるせえ、

悟助　さつきの奴等、

南無　こいつに構はず、

兩人　是れから直に、

○△　うぬ。（ト又掛るを投退けるを木の頭、）

兩人　さあ行かうか。（ト戸平悟助連立ち花道へ掛る、）

南無　いゝ若い者だなあ。

ト賑かなる鳴物になり、南無右衞門兩人を見送る。是れと一緒に、悟助戸平花道へはひろをキザミにてよろしく、

ひやうし　幕

中幕　千日前悟助内の場

同返し　四天王寺山門の場

〔役名――土器賣詫助、男達提婆の仁三郎、扇屋女房香晒、男達浮世戸平。扇屋の下女お牧、扇屋の娘小田井、詫助の娘お賤、酒屋の丁稚、扇屋の丁稚三太等。〕

(悟助内の場)――本舞臺三間の間常足の二重、上手一間の附家體、眞中暖簾口、此上に間平戸の押入、下手奥の覆、早桶天蓋の書割、軒口に龍頭燈編笠などを掛け、平舞臺下手あらい格子の内、水瓶を積重ねたる書割、いつもの所門口。二重に忠藏端出なる褞袍、三尺帶にて佛具の金物を磨きながら、義太夫の拔本を見て居る。平舞臺に〇職人のこしらへにて、輿の棒を削り居る、△同じく職人にて早桶の輪をしめて居る、丁稚酒屋の御用聞にて、徳利と酒樽を持ち住ひ居る、此模樣合方にて幕明く。

〇　小僧、油を賣らずと早く歸らねえか。

丁稚　急いで御用に廻つて來たから、半時位蹴出して居る、遊んでも構やあしねえ。

△　いゝかえ、小言を聞きやあしねえか。

丁稚　少し位小言をきいても、義太夫と來ちやあ尻が重くなる。

○　若し忠藏さん、此頃は淨瑠璃が上つたらうね。

△　お前のやうに凝りやあ、上らなくつてどうするものだ。

○　今日は何を始めたね。

忠藏　お前方も凝つて見ねえ、義太夫位面白いものはねえ、今おれが凝つて居る所は千兩幟の髮梳きだ。

○　そいつは豪氣だ、師匠はやつぱり淸八さんかね。

忠藏　當りめえよ、あすこで稽古をした日にやあ、どこの溫習へ行つても幅が利くぜ、さいはひなんざあこたへられねえ、一番語つて聞かせようか。

○　そいつあ聞きてえねえ〳〵。

△　おれが口三味線とやらかさう。（ト輿の棒をもつて、）オイ、チン。

ト三味線を彈く眞似をする、忠藏本を前へ置き、

忠藏「江戶長崎國々へ行かしやんすりや、其跡の、」（ト一口語つて、）どうだ、本ものだらう。

○　是れぢやあごまなしの本物だ。

丁稚　忠藏さんに奢つて貰はうと思つて、うまくごまを摺るが、兄いよりおれの方が餘つぽどうめへや。

○　べらぼうめ、巧へから巧へといふのだ。

丁稚　いや拙いから拙いといふのだ。

○　それぢやあ手前やつて見ろ。

丁稚　遣らなくつてよ。（ト是れにて又△調子を合せる眞似をする。）おいらは金切聲だから、もつと調子を上げておくれ。

△　生意氣を言つて居やあがらあ。（ト棒をもち、）それ、チン／＼。（ト丁稚有合ふ本を取り）

丁稚　「江戸長崎の國々へ行かしやんした其跡の。」（ト語る。）

○　いや、こいつはなか／＼本ものだ。

忠藏　又あんまり淨瑠璃に凝ると、磨き物がお留守だ、兄貴にかすを喰はねえうち、精出して遣つ附けよう。（ト義太夫本を脇へやつて磨き物にかゝろ。）

△　磨くと言やあ内の親分も、あの位賣出すにやあ、よつぽど男を磨かにやならねえの。

忠藏　そりやあ男達と名が附きやあ、命を惜しむやうな事ぢやあ賣出せねえ。

○　さうして忠藏さん、お前も爰の内の一の子分だが、何か端出な達引でもした事がありますかな。
忠藏　あるのねえのと、お前達はまだ噂を聞かねえか。
兩人　ちつとも話しを聞きやせん。
忠藏　聞かざあ話して聞かせるが、所は攝州住吉で、花見戻りの大勢連れ、日の暮紛れのどさくさに、女ばかりと侮つて喧嘩仕掛けの暴れ者、酒を呑めの一緒に行けのと、四五人連れの大男よ、先きの相手が女だから詫言すりやあ附上り、おれも側で見て居たが、癇癪に障るから其中へ飛込んで、
兩人　相手の野郎を、どうした〳〵。
忠藏　どうもかうもあるものか、向ふも名うての奴だから、なか〳〵素手ぢやあ通さねえ、もう手を出しては百年目だ、張殺さうと思つて、おれが一番名乘りをあげた。
兩人　何と言つた〳〵。
忠藏　遠からん者は音にも聞け、近くば寄つて目にも見よ。
○　大層な事をまき出したな。
忠藏　この位に言はねえぢやあ向ふの奴が驚かねえ、當時浪花で男達の開山、達師の親玉、野晒悟助が一の子分穴目の忠藏とはおれが事だ、間近く寄つて御面相を拜み奉つれえゝ、といふと向ふの奴

がびつくりして、蜘蛛の子を散すやうにみんな逃げてしまやあがつたが、何とおれも豪氣なものになつたらうな。
○　そりやあ昨日親分が、提婆の子分を住吉で、
△　酷い目に逢はしたとやらいふ事だが、
○　其話しの受賣りぢやあねえかえ。
忠藏　それぢやあ昨日の話しを聞いたか。
兩人　さうよ。
忠藏　南無三、こいつは顯はれた。
兩人　何を言ふのだ。
ト通り神樂になり、下手より若い者木綿やつし、尻端折りにて出來り、門口に來て、
若者　はい、御免なされませ、野晒親分のお宅はこちらでござりますか。
○　あいこつちでござりやすが、桶か輿かね、桶なら一番も二番も出來合つて居りやす。
若者　いえ〳〵桶ではござりませぬ、私は大谷前の小泉と申す料理屋でござりますが、只今酒呑の悪いお侍が四五人連の大間違ひ、なか〳〵一通りでは鎭まりませぬ、親分に來てお貰ひ申したいと、

わしが主人の申し附け、何分お願ひ申します。

忠藏　何だ暴れ者があるから、取押へてくれろといふのか。

若者　はい、左樣でございまする。

忠藏　そいつは何の造作もねえ事だ、兄貴をちよつと呼んでくれ。

丁稚　親分を呼ぶにやあ及ばねえ、おれが一人で行けばいゝ。

忠藏　えゝ又四文と出やあがる。（ト小僧の天窓を打つ、）何しろ兄貴をちよつと呼べ。

兩人　合點だ〳〵、おい親分え〳〵。（ト奥にて、）

悟助　おい〳〵、何だ〳〵。（ト合方になり、悟助好みの鬘、野晒の模樣の廣袖の着附、扱帶にて珠數を手に持ち出來り、）今看經をして居る所だ、何ぞ用か。

忠藏　兄貴外の事ぢやあねえが、爰に居る人は大谷前の小泉といふ料理屋だが、今暴れ者が來て居るから、兄貴に來てくれと賴みに來やした。

若者　へい〳〵、どうぞお賴み申しまする。

悟助　さうか、そりや嘸困んなさるだらう、誠に氣の毒だが、今日はお袋の命日で、此通り今佛檀で看經をして居る所。（ト珠數を見せ、）喧嘩口論は勿論のこと、蟲螻蛄一疋殺生しめえと、祈誓を掛け

た大事の日、出掛けて行つて扱ふ日にやあ、品によりやあ殺生もしにやあならねえ、それだに丧つて氣の毒だが、今日ばかりはどうも行けねえ、どうぞ此譯を話して下せえ。
若者　そんならお出ではなりませぬか。
悟助　今話した通りの譯、今夜九つを打つまでは、遠出もしねえわしが心願、どうぞ悪しく思はぬやう、斷りを言つて下せえ。
若者　左樣なら其通りを申しませう、どうか今度あつた時は、何分お賴み申します。
忠藏　度々あられてたまるものか。
若者　左樣なら親分樣。
悟助　よく言つておくんなせえ。（下若い者は下手へはひる。悟助思入あつて）いやも、何のかんのとうるせえ體だ、落附いて看經も出來やあしねえ、これ忠藏、佛具の磨き物はもういゝか。
忠藏　えゝ、すつかり綺麗になりやした。（下出して見せる。）
悟助　いや御苦勞々々、直に佛壇へ並べてくれ。
忠藏　あい〳〵、合點でござります。（下忠藏佛具を持つて奥へはひる。）
悟助　手前達も今日は志しの日だ、もう仕事をしまつて、湯へでもはひつて來い。

○　あい、有難うございます。

△　それぢやあ爰を片附けて、一風呂はひらうか。

○　さう仕よう〳〵。（ト兩人よろしく片附けて、）

忠藏　小僧も最う油を賣らずに歸らねえか。

丁稚　義太夫の三味線彈きがねえから、おいらも行かう。（ト立上る。）

○　それぢやあ親分、

兩人　ちよつと行つて來やす。（ト丁稚花道へはひる。兩人門口へ出て下手へはひる。悟助門口へ來て、）

悟助　又湯屋で喧嘩をするな、早く行つて來い。（ト言ひながらこちらへ來て、）生ぎき盛りとは言ひながらがさつな奴等で困り切る。人の事は言はれねえ、餓鬼の時から氣が早く、やゝともすりやあ喧嘩口論、生兵法とはいひながら少しは腕に覺えた劍術、そんな事が足しになり、どうやら斯うやら俠客とか男達とかいはれるだけに、たゞの人より餘ッ程氣苦勞、それも求めたこつちの醉興、然しお袋が死んでから、がさつな事はさつぱり止め、只念佛と首ッ引き、人の難儀を助けるやう、心の内は出家同然。あゝ詰らねえよまい言、あんまりぼれやうが早やすぎらあ。

ト よろしく思入、鞠唄通り神樂になり、花道より小田井の母親香晒、丸髷好みの着附、雪踏商人の女房の

こしらへ、跡より小田井、島田髷、振袖娘裝、お牧丸髷下女のこしらへにて、小風呂敷を持ち小田井の手を引く、此跡より若い衆飾りの附きたる鰹節を背負ひ角樽を提げ、丁稚案内して出來り、花道にて、

お牧　もし小僧さん、野晒親分の所は、此近所でござんすかえ。
丁稚　向うへ突當つて、右角の輿屋が家でござります。
お牧　向ふに見えますお家でござんすかえ。
小田　そんならあすこが悟助さんの、お宅でござんすかいなう。
お牧　若し小田井さま、早うお顏を見たうござりませう。
小田　また弄りやるかいなう。
香晒　これはしたり、そわ〳〵するではないわいなう。
小田　あい。（ト恥しきこなし。）
丁稚　やあ、此お孃さんは、親方に惚れて居るのだな、やあ可笑いや〳〵。
香晒　これはしたり、靜にして下さんせ。
お牧　もう知れたら、これでようござんすわいなあ。
丁稚　へい〳〵。（ト入替つて下手へ來り、）お孃さんのお樂しみやアい。（ト逸散に花道へはひる。）

香晒　そんなら爰が、野晒さまの。
お牧　はい、左様でござりまする。
香晒　そなた、ちよと音づれてたもいなう。
お牧　はい〳〵。御免なされませ、悟助さまのお宅は、こちらでござりますかいなあ。
悟助　あい、悟助はわしでござりますが、何所からお出でなされました。まあ、こちらへおはひりなされませ。
お牧　へい、御免なされませ。（ト門口を明けて、）はい、わたしでござりますわいなあ。（ト悟助見て、）
悟助　おゝ、お前は昨日住吉で、お目にかゝつた女中さんぢやねえか。
お牧　左様でござりまする、昨日は何やかやいろ〳〵と、御厄介になりましてござりまする、ちよつとお禮に上りましてござりまする。若しお上さんえ、親方がお内でござりますわいなあ。
香晒　それは丁度よい所であつた。眞平御免なされませ。（ト小田井を連れて内へはひる。悟助見て、）
悟助　この方は。（トお牧に聞く。）
お牧　はい、私共のお上さんでござりますわいなあ。（ト香晒、此内下手へ住ひ、）
香晒　これは〳〵お初にお目に掛りましてござりまする、私事はこれなる娘小田井が母でござりまする。

悟助　左樣でござりますか、そんならお前さんが扇屋の、お内儀さんでござりますか、私は悟助と申します、どうぞお心安くお賴み申します。

香晒　私こそ何分にもお心安うお願ひ申しまする、昨日は是れなる娘小田井めが、既に難儀になります所、幸ひにお前さまが通り掛つてお救ひ下され、無難に宿へ戻りましたもお前さまの皆お蔭、何とお禮を申さうやら有難うござりまする。これ小田井、何をうつかりとして居やる。ようお禮を申しやいなう。

小田　あい／＼、誠に昨日は有難うござりますわいなあ。（ト恥しき思入にて俯向く、お牧こなしあつて、）

お牧　もうお禮はそれ切りでござりますか、あんまり短かいぢやござりませぬか。もつとたんとお禮をおつしやりませいなあ。

小田　それぢやといふて、何といふてよい事やら、わしは知らぬわいなあ。

お牧　えゝも腑甲斐ない小田井さま。へい／＼、私もとも／＼に、お有難う存じまする。

悟助　いやも其やうにお禮をおつしやると、却つて痛み入りまする、通り掛つた事ゆゑ扱ひましたばかりのこと、どうぞお手を上げて下さりませ、それでは實に困りまする。

香晒　良人も參りまして、お禮を申す筈ではござりますが、少々風邪でござりますゆゑ、女子ばかりで

お禮に上り、眞平御免下さりませ。これ牧や、それをこちらへ。(ト お牧へ指圖なする、お牧鰹節と樽を前へ出す。) 是はお笑止な品ではござりますが、お禮と申すではござりませぬ、ほんの參つた印ばかり、お受けなされて下さりませうなら、有難うござりまする。

悟助　いえ、それはどうもいけませぬ、お禮を受けようと申して致した事ではござりませず、どうぞ是れは戴いたも同じこと、なか〳〵この品は受けられませぬ。

お牧　私が差出ました事ではござりますが、折角持つて參つた物、どうぞお納めなされて下されませ。

悟助　どうあつても此品は、受けまする事は出來ませぬ。

お牧　そこをどうぞ、麁末ながら。

香晒　どうあつても此品を、押してお納め下さらねば、娘が望みが叶ひませぬ。

悟助　そりや又何で。

香晒　さいなあ。(ト 誂への合方になり、) 親の口から申すのも、異な事ではござりますが、昨日あなたにお目もじいたし、それから娘が兎や斯うと、さ、子供に甘いが母の因果、不束者ではござりますが、まだお獨身と聞いたより定めてお氣には入りますまいが、差しつけての此願ひ、どうぞ娘小田井をば、お貰ひなされて下さりませ。

ト小田井恥しき思入、悟助は迷惑なるこなし、お牧思入あつて、

お牧　それゆゑに此品は、結納やら御禮やら、此お子さまを御不便だと思召して此願ひを、叶へてあげて下さりませ、それは〳〵お前さまに、きつい惚れやう。（ト言ふを小田井袂を引く）ほゝゝゝお惚れなされてゞございますわいなあ。

悟助　いやも、見る影もない私をば、左樣に思召して下さるのは、實以て有難うございまする、私もまだ若い身の上。

お牧　はい〳〵。

悟助　女房も持たねばならぬ體。

お牧　左樣にございまする。

悟助　所を持たれぬ譯がございまする。

香晒　え、そんならお許嫁でもございますか。

悟助　そんな者はございませぬ。

お牧　それでは言交したお方でも。

悟助　そんな事は猶以て。

香晒　なぜ又女房が、
香晒
お牧　持たれませぬ。
悟助　さあ、若い身そらで馬鹿々々しいと、思召しもござりませうが、表は男を立通す俠客ではござりますが、一休禪師の御弟子となり、女犯は元より精進潔齋、家に居るにも此通り、珠數をば放さぬ坊主の境涯、それゆゑどうも女房を、持ちます事は出來ませぬ。
香晒　そんなら出家の身の上ゆゑ、
お牧　小田井さまのお願ひが、
小田　どうあつても叶ひませぬか。
悟助　申す通りにござりまする。
小田　はあゝ。（ト泣伏す、香晒是非がないといふ思入。お牧思入あつて、）
お牧　申し小田井さま、お袋さま始め私も、あの位にお願ひ申しましても、お聞き入れのない上は、もういたし方もござりませぬ、もう／＼、思ひ切つておしまひなされませ。
小田　それぢやといふて、わたしやあなたに。
お牧　えゝも聞きわけの惡い、思ひ切つてしまはねば、あなたの望みが、（トお牧二重にある道具箱の中に

ある鑿を持つて來て、是れで喉を突いて死ぬ眞似をしろと、こなしにて小田井に呑込せ、)叶ひませぬぞえ。

小田　そんなら、是れで。

お牧　さあ、すつぱりと、思ひ切つておしまひなされませ。(ト是れにて小田井悟助の側へ來て、)

小田　さうぢや。(ト鑿にて死なうとするを、悟助びつくりしてこれを留め、)

悟助　えゝ危ねえ、何をするのだ。

小田　あなたに嫌はれ、何樂しみに生きながらへて居りませう、放して殺して下さりませ。

香晒　おゝさうぢや／＼、女子は思ふ男は只一人、歎き死に死なうより思ひ切つて死んでしまや、母も憂き目を見やうより跡から死んで行くわいなう。

悟助　これさ、死ぬといふのはあんまり短氣だ、これさ女中衆、見ぬ顏をして居ずと、お前も留めたがいゝぢやあねえか。

お牧　いえ／＼留める事は出來ませぬ、思ひ詰めたお孃さま、さあ早うお死になされませ。

ト又小田井振放して死なうとするを、悟助また留めて、

悟助　まあ／＼刄物を放しなせえな。(ト鑿を引つたくる、小田井ハアと泣伏す、香晒思入あつて、)

香晒　申し悟助さま、お前が今もおつしやつたは、一休さまのお弟子となり、出家堅固とおつしやいま

したが、あなたがいやだとおつしやれば、娘は死ぬと申しまする、娘が死ねば此母も、共に未來へ行く心、一人ならず二人まで見殺しになされまするか、人を助けるが出家の役、どうぞ可愛い娘をば、助けて遣つて下さりませ。

悟助　それだと言つて、女房には。

お牧　それでは二人を見殺しに。

悟助　さうではなけれど。

香晒　娘を貰ふて下さりますか。

悟助　さあ、それは。

兩人　さあ、

悟助　さあ、

三人　さあ〱〱。

香晒　娘が願ひを悟助さま。

お牧　お叶へなされて、

三人　下さりませ。（ト是れにて悟助是非なきこなしにて、）

悟助　さ、出家堅固を立てる氣だが、いやだと言やあ二人の命、又助けるも出家の役。ようござります
　お娘御をば、女房にお貰ひ申しませう。
香晒　そんなら貰ふて下さりまするか。
悟助　はい。
お牧　いよ〳〵御得心でござりますかいなあ。
悟助　はい、得心いたしました。（ト是れを聞きお牧嬉しき思入にて、小田井をこちらへ連れて來て）
お牧　さあ〳〵小田井さま、お望みが叶ひました、何とお嬉しうござりませうな。
小田　これが嬉しうなうて何とせうぞいなう。
香晒　そなたばかりか此母も、こんな嬉しい事はないわいなう。
お牧　私も嬉しうて〳〵痞が下りたやうでござりまする。さあ〳〵忙しくなつて來た、善は急げと申し
　ますれば、何は兎もあれ取極めの、お盃が肝腎でござりまするわいなあ。
香晒　さうとも〳〵、盃をせぬ内は、どうも心が落附かぬわいなう。
悟助　假令盃せぬとても、男が一旦得心したら、變替はいたしませぬ。
香晒　それぢやと申して、どうも心が。（ト此時奥にて）

忠藏「千秋萬歳の千箱の玉を奉つる。」(ト謠をうたひながら八寸の膳の上へ徳利と盃を載せて出來り、)

悟助　忠藏、そりやあ何だ。

忠藏　何だどころか、兄貴お前の所へ嫁が來るとは、こんな目出度いことはない、所でわしが仲人役、先づ嫁御から初めたく〳〵。(ト膳と徳利を眞中へ出す。)

お牧　是れはまあ〳〵仲人さまか、近附きは跡でのこと、私がお酌をいたしませう。さあ〳〵小田井さま、お盃をお持ちなされませ。(トお牧介錯して小田井へ酌をする、又膳と盃を悟助の前へ置き、)へえ、お目出たうございます。(ト悟助に酌をしてやる。)

忠藏　さあ〳〵目出度い〳〵、是れからはお床入り、今日は親の命日でも、最う精進は落さずばなるまい、お寢間は奥の四疊半。どりや、中どんをやらかさうか。(ト唄になり忠藏奥へはひる。)

悟助　いや一人で喋べつて行きやあがつた。

お牧　氣輕なお方でござんすわいな。

香晒　もう盃も濟む上は、悟助どのに飽かれぬやう、貞女を盡さにやならぬぞや。

小田　よう合點して居りまする、不束ながら私を、行末ともに可愛がつて下さんせいなあ。

ト小田井嬉しきこなし、

悟助　もう斯うなつたからは金輪際、そこは男を磨くだけ、不人情はしやあしねえ。
香晒　それで母も、安堵しましたわいの。
お牧　嘸まあ御安心でござりませうわいなあ。

ト皆々悦ぶ思入、通り神樂の合方になり、花道より詫助、白髮鬘、木綿やつし篤實なるこしらへ、お賤島田鬘振袖娘の裝にて出來り、花道にて、

お賤　もし父さん、もちつと早う歩いて下さんせいなあ。
詫助　さう急かいでもいゝぢやないか、是れでも精一杯歩いてゐるのぢや。
お賤　何ぢややら、埒が明かぬやうぢやわいなあ。（ト お賤詫助の袖を引張る、詫助よろ〳〵として）
詫助　えゝ危いわえ。（トやはり右の合方にて本舞臺へ來り、門口にて）はい、お頼み申します。
お牧　もし、誰やらお人がござりますわいなあ。
悟助　どなたか知らぬが、こちらへおはひんなせえな。
詫助　御免なされませ。（ト門口を明け）はい、詫助でござりまする。
悟助　おゝ詫助さんか、よく來なすつた。さあ〳〵、こつちへはひんなせえ。
詫助　はい〳〵有難うござりまする。これは、お客さまでござりまするか。

香晒　いえ〱皆内輪のものでござりまする。御遠慮なう、こちらへお出でなされませ。
詫助　はい〱。これ娘よ、何をうぢ〱して居るのぢや、早うこちらへはひらぬか。
お賤　それぢやといふて、どうやらわたしや。
詫助　えゝ、何をぐづ〱いふて居るのぢや、今まで氣を焦立て居たぢやあないか。さあ、早くはひらぬかい。

ト詫助お賤の手を取り内へ入れる。小田井お牧お賤を見て氣を揉む思入あつて、小田井お牧の袖を引きこちらへ來て、

小田　これ牧や、あのやうなよい娘御が來たわいなう。
お牧　何の來ても大事はござりませぬ、わたしがお側に居りますれば、何にも言はせる事ぢやござりませぬ。
小田　それでもひよつと、悟助さんが。
お牧　何の氣の弱い、大船に乘つた氣で、親方の側へぺつたりとひつ附いておいでなされませいなあ。

ト お賤は間の惡き思入にて、詫助の後へ控へる、詫助思入あつて、

詫助　どなた様も、御免なされて下さりませ。(ト前へ出て、)扨悟助さま、昨日は私めが難儀をお助け下

されまして有難うござりまする。其お禮やら何やかや、お願ひ申す事もあつて、態々參つてござりまする。

悟助　何の禮に來なさるにやあ及ばねえのに、年寄の氣の毒千萬。まあ〳〵茶でも呑んで休んでござらつしやるがいゝ。

詫助　はい〳〵、有難うござりまする。（ト詫助何か言兼ねる思入あつて）誠に、結構なお天氣で暖かな事でござりますな。

悟助　左樣さ、今年は大分暖かさね。

詫助　あの、お前さまはお幾歲でござりますえ。

悟助　詫助さんも藪から棒に、わしやあ今年丁度厄さ。

詫助　へえゝ、それはまあお若い事でござります。私などは其頃は、天窓が餘程きたりました。

悟助　お前は又幾歲の厄だと思つて居るのだ。

詫助　へえ、四十二でござりませう。

悟助　面白くもねえ、二十五だがな。

詫助　左樣でござりますか、道理でお若いと存じました。

悟助　有難く出來て居らあ、あはゝゝゝゝ。（ト詫助思入あつて、）

詫助　若し悟助さま、申し兼ねましたお願ひがござりまする、何とお聞きなされては下さりませぬか。

悟助　何だか知らぬが改つた其詞、次第に依つたら聞きませうよ。

詫助　外の事ではござりませぬが、これなる娘がお前さまに、（ト言兼れる思入、お賤ももぢ〳〵して居る、）詫助思ひ切つて、）惚れましてござりまする、どうか女房に持つて遣つて下さりまするやう、お願ひ申しまする。

ト詫助手拭にて汗を拭いて言ふ、お賤うつむき恥しき思入。香晒、お牧、小田非顔見合せ氣を揉む思入よろしく、悟助も思入あつて、

悟助　何事かと思つたら、そりやまあ御親切は忝ないが、爰に居る此娘を、たつた今女房に持ち立、盃が濟んだばかり、もう一足早けりやあどうか相談も出來たらうが、誠に生憎な事さね。

詫助　え、そんならもうお上さんを、お持ちなされましたか。

悟助　たつた今の事さ。

詫助　左樣でござりますか。（ト詫助本意なき思入、お賤よろしく思入あつて、）

お賤　それ見なさんせいなあ、それぢやに依つてわたしが道を急ぐのに、お前が埒が明かぬゆゑ、こん

な事になつたわいなあ。

詫助　なに、おればかりのせゐではない、そなたが出掛ける先きになつて、髮を結ふたり、最うよいかと思へば湯へはひつて來たり、もう出掛けようといへば、是れから白粉をつけるのぢやと、あんまり手間を取つたゆゑ、先を越されてしまうたのぢや。

お賤　それぢやといふて是れ程まで、思ふて來たのにわたしや此儘、斷られて歸る事はいやぢやわいなあ。

詫助　そりやそちばかりぢやない、おれぢやてゝそなたが好いた男ぢやもの、どうかしてやりたいが、(ト思入あつて、)もしそこなお上さま、そんならあなたが娘御の、親御さまでござりまするか。

香晒　はい、悟助どのゝ女房の、母でござりまするわいなあ。

詫助　左樣に、お見受け申しまする。(ト又お牧に向ひ、)失禮ながらお前さまは、お女中さまでござりまするか。

お牧　はい、わたしやお孃さまの召仕への、牧と申しまするわいなあ。

詫助　左樣でござりまするか、あなたに申すも異な事でござりまするが、御覽の通り私の娘も、きのふ悟助さまをふつと見染めまして、押掛け女房に參つて見れば此しだら、誰しも子供の可愛いに替

つた事はござりませぬ、どうかあなたと相談づくで、半月がはりといふやうに、上十五日があなたの娘、下十五日がわしが娘、其替り小の月はわしが方で割をきゝます。そんな事にお話しが出來ますものなら、お上さまへお願ひなされては下さりませぬか。

お牧　そんならあのお前さんの娘御と、私共のお孃さんと、半月がはりになされたいとおつしやるのでござりますかえ。

詫助　はい、左樣でござりまする。（ト　お牧思入あつて、香晒に向ひ、）

お牧　なあ申しお上さま、こりやむづかしい話しでござりますわいなあ。こりやまあどうしたものでござりませうぞいなあ。

香晒　さいなう、あのお方へはお氣の毒ではあるけれど、外の事ならどうかうと、御相談もならうけれど、夫婦中は親ぢやとて、わしが自由にはならぬわいなう。

お牧　成程左樣でござりますとも、こりやあなたにも御自由にはなりませぬわいなあ。（ト小田井に向ひ）あなたはどうでござりますぞいなあ。（ト小田井頭をふる、）おいやでござりますか、是れも御尤でござりますわいなあ。若しおとつさんえ、お聞きの通りの譯でござんすゆゑ、お氣の毒ではござりますが、どうも御相談にはなりませぬわいなあ。（ト是れにて詫助思入あつて、）

詫助　それではどうも出來ますまいか。(ト當惑の思入、お賤どうぞしてくれと頼む思入、詫助また悟助に向ひ、)もし、しつこいやうではござりまするが、世間にも往々あること、手かけになりと、若しそれもなりませずば、召仕にでもお置きなされて下さりませぬか。

お牧　もし／＼それもなりませぬぞえ、其やうなよい娘御が側に居るさへ氣が揉めるに、お妾の圍ひ者のと、飛んだ事でござりまする、誰が何と言はうとも、お孃さまが不承知でござりますわいなあ。

トずつけりといふ、詫助仕方がないといふ思入。

詫助　こりやもう、取り附く島がない、あゝ、どうぞして遣りたいなあ。(ト詫助思入、お賤詫助に縋り、)

お賤　もし父さん、わたしやお側にゐられずば、生てゐる心はござんせぬ、いつそ死にたいわいなあ。

詫助　えゝも短氣な事を言うてくれるな、たゞでさへ親一人子一人で、心細う思ふもの、そちが死んだら、此おれが、明日から路頭に迷ふわやい。

お賤　そんならどうぞ、わたしが願ひを、叶へて貰うて下さんせいなあ。

詫助　えゝ、又そんな無理ばかり、なんぼ子供てゝ譯が分らぬ、もう脉が上つて居る、幾らそちが思ふても、向ふは大家のお孃さま、こちら親子は其日をば、やう／＼送る貧乏人、どうまあ楯が突けるものだ、ない緣ぢやとあきらめて、もう／＼泣くな。

お賤　あい。

詫助　泣き顔などを男に見せて、猶々愛憎をつかされるわえ、笑うて歸れ。

お賤　それぢやといふて、これ程までに。(ト詫助お賤の手を取り思入あつて、)

詫助　未練を殘さず、さあ立たぬか。

お賤　あい。(トお賤泣伏す。香晒皆々氣の毒の思入。)

詫助　さあ、立たぬか。(ト無理にお賤を引立て。)左樣なれば悟助さま、私が方は引き取りまする。

悟助　何だか氣の毒なやうな、おつな譯さね。

詫助　どなたも御ゆるりとなされませ。

香晒　申し詫助さまとやら、人事には存じませぬ、子を持つ親の心は一つ、嘸まあ本意なう思召しませう、どうぞあの娘御さんも、女子は心の狹いもの、氣病みでも出ぬやうに、力を附けて上げて下さりませ。

詫助　へい、有難うござりまする。

香晒　今日が今日とも行くまいけれど、又わたしが思ふ胸もござりますれば、お尋ね申してお前と二人、また相談もござりませう、お前も必ず力を落して、煩うてばし下さりまするな。

詫助　へい〳〵、どうか何分よろしきやうに。

香晒　若しお賤さんとやら、今日の所は是れぎりでも、どうぞ友達同様に。

お賤　はい、有難う存じまする。（ト悟助へ思入あつて、）悟助さま、御機嫌よろしう。

ト思入にて言ふ、詫助手を取り、

詫助　え丶、物を言ふと、未練に聞えるわえ。（トお賤を門口へ出して、）

お牧　それではもうお開きでござりまするか。若しおとつさん、とぼつかぬやうお靜にお出でなされませ。

詫助　はい〳〵、氣を附けて參りまする。

お賤　そんならどうでも歸るのかえ。

お牧　歸るといふは此席では、忌詞でござんすぞえ。

詫助　何でそれを、（ト門口へ出て、）構ふものかえ。

ト誂への合方になり、門口にて内を窺ひお賤と囁く。お賤うなづく、是れにて詫助お賤の手を引き路地口へはひる、跡皆々思入あつて、

悟助　いや、とんだ事が落合ふものだ。然し爰は見世先きゆゑ、奥へござつてちよつと一口。

香晒　有難うございまする、ほんに一足違ひで私が、今の歎きをば見ねばならぬ所であつた、先づ仕合と此の悦び。

小田　これもやつぱり母さまや、牧のお蔭、手を合せて拜みますわいなあ。

お牧　ほんに、際どいことでござりましたわいな。

香晒　兎かういふ内もう五つ、仲人は宵のうち、わしはそろ〳〵開きませう。

悟助　まあよいではござりませぬか。

香晒　これ小田井、是れからはお上さん、夫を大事はいふに及ばず、體をまめに働かねばならぬぞや。

小田　あい〳〵。

香晒　左樣ならば悟助どの、何分ともに。

悟助　決してお案じなされますな、然しもう日が暮れて眞闇だ。これ忠藏〳〵。

ト呼ぶ、是れにて忠藏出來り、

忠藏　兄貴、何ぞ用かえ。

悟助　用があるから、呼んだのだ、手前何をしてゐたのだ。

忠藏　あい、今少し。（ト ぐづ〳〵言ふ。）

悟助　また淨瑠璃だな、碌でもねえ聲の癖に。手前早く提灯をつけて、お上さんを送つて上げな。

忠藏　あい〳〵。

香晒　いえ〳〵お構ひなされますな、お月夜でござりまする。

悟助　何さ、月夜でも女中ばかり、御遠慮なしにお連れなせえ。（ト此内忠藏提灯をつける。）

忠藏　さあお上さん、送つて上げませう。

香晒　それでは、お氣の毒ながら。

お牧　其替り道々淨瑠璃を聞きませうわいなあ。

悟助　もしお牧さん、忠藏の淨瑠璃を聞くと風を引きますよ。

お牧　親方の惡口ばつかり。

香晒　左樣なれば、悟助さま。

お牧　おやかましう存じました。

悟助　そんならおかみさんではない、お袋さま。

香晒　そなたも體を大事にしや。あゝほんに浮世といふものは、こつちに悅びある時は、

お牧　詫助どのゝあの悲しみ。成程二つよい事は、

香晒　ないものぢやなう。
忠藏　さあ、送り申しませう。
お牧　御苦勞でござんすわいなあ。（ト忠藏提灯を持ち先に立ち、香晒に、お牧附添ひ花道へはひる。）
悟助　忠藏の野郎も、淨瑠璃にばかり凝つて、まだ行燈も出しやあがらねえ。（ト小田井思入あつて、）
小田　わたしが行燈を點けませうわいなあ。
悟助　來い〳〵そう〳〵お前を遣ふも氣の毒だ。
小田　わたしや働きたいのでござんすわいなあ。
悟助　さうか、さういふ譯なら、働いてくんなせえ。然しまだ勝手が知れめえ。（ト悟助暖簾の内より行燈を出して、）そりや、行燈よ。（ト下に置く、小田井明りをうつして、）
小田　爰へ置くのでござんすかえ。
悟助　それでいゝ〳〵。
小田　まだ用がござんすかえ。
悟助　あるとも〳〵、是れからは女切れのねえ家だから、針仕事は勿論のこと、飯も炊いて貰はにやあならねえ。

小田　仕附けぬ事ぢやによつて、よう敎へて下さんせいなあ。
悟助　飯の方は忠藏がお師匠番だ。
小田　さうしてお床の上げ下しは。（ト恥しさうにいふ。）
悟助　違えねえそれが肝腎だ、早速今夜から遣つて貰はにやあならねえのだ。
小田　それも勝手が知れぬゆゑ、奥のお寢間やお座敷を、
悟助　そんな大層な家ぢやあねえ、ほんの火打箱よ。
小田　又行燈をつけるのかいなあ。
悟助　は丶丶丶、お前もよつぽどまた初心だの。
小田　何の事でござんすえ。
悟助　いやさ、奥の勝手を敎へてやらうよ。（ト立上る。）
小田　それでは一緒に、
悟助　さあ、來なせえ。
小田　あい〳〵。（ト是れより床の淨瑠璃になる。）
〽一間へこそは立つて行く。（トこれにて兩人奥へはひる。）

〽鳴る鐘の無常は名のみのつさのさ、婆羅門組の頭分、横筋違の喧嘩買、

ト此文句の内花道より男達提婆の仁三郎、五十日鬘好みの着附、大小駒下駄にて先に立ち、跡より一二一本差し子分の拵へ、續いて序幕の〇△□◎皆々男達畫面の着附、一本差し駒下駄にて出來り、直舞臺へ來り、門口へ來て、

仁三　舍利弗悟助が家は何所だ。

一　向うに見える早桶屋でござりやす。

仁三　佛ツくせえ男達が、輿屋へ仕掛けて行くといふも、

二　どうやら緣も有難い、佛敎嫌へなこちとらが、

〇　施主に立ちたる千日前、

△　これから悟助と差擔ひ、

〇　坊主持ちともいかねえが、

◎　一肩入れて、

六人　擔ぎ込まうぜ。

仁三　さあ行かねえかえ。

六人　おゝい。

一　おい、もう寐たか、ちよつと明けて貰はうかえ。

〽釋迦に提婆の仁三郎、子分引連れ門口から、（ト皆々舞臺へ來る。子分一門口へ來て）

〽音なふ聲に納戸より、悟助は澁々立ち出でゝ、

悟助　何の用か知らねえが、もう表はしめてしまつた、明日の事にして下せえ。

一　明日までは待たれねえ、早桶を買ひに來たのだ、明けてくれ〳〵。

悟助　買物買えぢやあ仕方がねえ。

〽澁々立つて門口を、明ければずつと仁三郎、跡に續いて子分達、仔細ぞあらんと野晒は、門口しめて、座に附けば、

ト悟助立上り門口を明けると、仁三郎先きに皆々內へはひり、ずつと上手へ通る。六人も跡へよろしく住ふ、小田井は氣味の惡き思入、悟助思入あつて、

悟助　つひに御意得ぬお侍樣、夜中のお出では何ぞ御用が。

仁三　其方には今日が始めて、身は深江に住居なす劍學の指南、提婆仁三郎と申すもの、以後は別懇に相賴む。

悟助　へい、左樣でござりまするか、お名はかねて聞き及べど、お目に掛るは今が始めて、私事は悟助と申すもの、何分お目掛けられて下さりませ。

仁三　扨斯う近附きになつた上、ちと其方に無心がある。

〽扨はと思へど素知らぬ顏。（ト悟助思入あつて、）

悟助　劍學指南を遊ばします、お武家樣が私へ、御無心とおつしやるは。

○　無心といふは外でもない、

△　先生の顏は知らずとも、

□　こちとらの面にやあ覺えがあらう。

◎　昨日貴樣がおら達に、

○　疵まで附けた返報に。おのれが命を、

兩人　貰ひに來たのだ。

仁三　此四人の者共は、身が取立ての武術の社中、弟子が恥辱を取つたりと、師匠の耳へ入れられては、それでよいわと見て居られぬ、相手が尋常の者ならば聞き捨にもしようけれど、瘦せても枯れても野晒と肩書のある其方だけ、弟子の天窓をこはされてどうも此儘濟まされぬ、身共が武士を立て

て下せえ。

〽飽くまで根強き提婆が詞、胸を据ゑて野晒は、煙草くゆらし居直りて、

ト仁三郎きつといふ　小田井どうなる事かといふ思入、悟助は胸にあると小田井に呑み込ませる思入、

悟助　お顔を見ますと其事と、疾くより承知はいたしましたが、別にお顔の立てやうも高の知れた町人風情、外に仕様もござりませぬ、お弟子と師匠の間柄、どうかあなたの御威光で扱つては下さりませぬか。

仁三　成程そりやあ扱つても遣はさうが、それも品によつたこと、そんなら是れで扱へと、印がなけりやあ無駄な事だ。

一　そりやあ先生のいふ通り、何ぼ下司な町人でも、

二　男達とか侠客とか、人にも知られた野晒悟助。

○　只これなりに印もなく、

△　素手の孫三で遁れうとは、

□　無駄な話しだ、よしにしろ、

◎　やつぱり師匠の顔を立てろ。

一　大概相場も、
六人　あるものだわ。
悟助　して、扱ひの印といふは。（ト仁三郎六人に向ひ）
仁三　手前達のいゝやうに、そこへ相場を附けてやれ。
六人　おい。
一　扱ひの印にやあ、
六人　百兩出せ。
悟助　そんなら金で、
一　さうよ、百兩の扱ひぢやあ、安いものぢやァあるめえか。
悟助　ようござります、そんなら其金出しませう。
一　承知とあるなら、今爰へ。
二　耳を揃へて、
六人　出さつせえ。
〽言はれてはつと當惑の、詞も胸に詰りし金、（ト六人さつといふ、悟助思入あつて、）

悟助　如何にも百兩承知したが、今といつちやあ手許になければ。

仁三　そんなら金はねえといふのか。

悟助　今出來ずとも、明日の朝まで。

一　え丶やかましい、明日の明後日のと優長に、さうべん〳〵と待たれるものか、いはゞ命と釣替えの、扱ひ金のたつた百兩。

二　貧乏世帶の早桶屋、手許にねえのは知れたこと、然しこつちは慾のねえ、男を磨く提婆組。

○　金がなけりやあお定り、師匠を始めおら達の、

△　面の立つやう昨日の仕返し、今先生の見る前で、

□　此六人が腕節を、見せてやるのがせめての腹癒せ、

◎　金の替りに鐵拳を、受けられるなら受けて見ろ。

仁三　さあ悟助、まさか命も取るめえから、門弟共が望みに任せ、爰で切るとも突合ふとも、言分立てて勝負をしやれさ。

悟助　そりやあわしも男だから、勝負をしねえものでもねえが、今日は大事な親の命日、喧嘩どころか籠められても、決して腹を立つめえと、親の位牌へ祈誓をかけ、今日が過ぎてしまふまでは、手

荒え事は出來ねえ體。
一　へんその迯口上はよしにしろ、出入りが怖くば遣繰つて、
二　百兩爰へ金を竝べ、大先生に頼むがいゝ。
悟助　さあ、今といつちやあ其金が。
一　なけりやあ爰で出入をするか。
悟助　さあ、それは。
六人　但しは金か、
悟助　さあ、それは、
六人　さあ、
悟助　さあ、
六人　さあ〳〵〳〵。
◎　きり〳〵返事を、
六人　しやあがれ。
〳〵口々にわめけば。（ト是れにて悟助ぢつと思入、仁三郎も思入あつて、）

仁三　これ〳〵、無駄な口を叩いても、所詮話しは分らねえ、手前達の腹のいるやう、存分遣つてしまふがいゝ。

六人　おゝ、合點だ。

〽何と返答も野晒が、手を拱いて居たりしが、弱身を附込む舍利弗鬼平のつさ〳〵立上り、

ト悟助はぢつと思入、○悠々と立つて悟助の胸倉を取り、

○　やい悟助。（ト悟助の肩へ足を掛ける。悟助きつとなる。○足をそつと取つて、）何だ〳〵、其面ァ何だ、きのふはうぬが立役で、おらが仲間の四人をば、赤ツ耻をかゝせたな、其返報にけふ爰へ仕返しに來た上からは、假令骨が舍利弗でも、爰が一番命の遣り取り、さあ立會ぬか、出入をせぬか、えゝいけ張合のねえ貧乏野郎め。

〽足蹴にどうと踏飛ばす、小田井はあるにもあられぬ思ひ、走り出でゝしがみ附き、

小田　そりやまあお前、あんまりぢや〳〵、あんまりでござんすわいなあ。（ト留るを悟助思入あつて、）

悟助　何もおぬしの知つた事ではねえ。

小田　それぢやといふて。

悟助　はて、打捨つて置けといふに。

ト小田井を突きやろ、小田井ハア、と泣伏す。此内△立つて來て、

△ さあ是れからはおれが番だ、どうで師匠と弟子だから、ばちがあたれば三味線の、胴と首との生別れ、天窓てんちんちやん八が腕の根締をこてえて見ろ。(ト有合ふ塔婆にて酷く打つて、)是れでもわりやあ手出しをしねえか。いや、是れでもか〱、何と骨身にこてえたか。(ト悟助を打つて手をふろつて見て、)あゝ、まだ腕も曲らねえ。

ト△跡へ下ろ、小田井どうせうといふ思入にて、仁三郎の側へ來り、

小田 もうし、そこなお頭さま、どうぞ皆さんに詫事して、もう堪忍して貰うてあげて下さんせいなあ。

仁三 おぬしは何だか知らねえが、女は怪我でもすると惡い。(ト仁三郎立上り、上手にある早桶の上へ腰を掛け小田井の手を取つて、)爰で見物して居やれさ。

〽泣き入る小田井の手を取つて、早桶引寄せ腰打ち掛ければ、小田井は何と詮方も、泣くより外のこともなき、入替つたる苔九郎、露助諸共突ッ立上り

ト仁三郎小田井を引寄せ、煙草を呑みながら見物する、小田井ハアゝと泣き伏す。□◎悟助の左右より立掛り、

□ さあ露助、是れからが二人の番だ、われからやれ。

◎　まあ、手前始めるがいゝぢやねえか。
□　そんなら先きへ遣らかさう。
◎　ずつと遣つたり〳〵。（ト是れにて口前へ出て、）
□　やい野晒、（ト顫へながら、）あゝ、どうも一人ぢやあ氣味が惡い。
◎　何だ一人ぢやあいけねえのか、意氣地のねえ野郎だ。（ト立上り、悟助を見て、）やつぱりいけねえ、一緒に行かう。
□　それぢやあ二人で息を合せ。（ト塔婆を持ち立掛り、）
兩人　一イ二ウ三イ。（ト双方より酷く打つ、是れにて兩人の塔婆二つに折れる、悟助自由になつて居る。）
□　これで胸がせい〳〵した。
○　今のは隨分こたへたらうよ。
ト兩人とも塔婆の折れを悟助の前へ投り出す、悟助思入。
仁三　どうだ、舍利弗始め皆の者、もうそれでいゝといふのか。
○　わたしや最う澤山だが、又とこんな事はねえ、もちつと遣ればいゝ。
△　遣りてえ事は遣りてえが、かすを喰ふのがどつとしねえ。

□　爰らでいゝとして置かうぢやねえか。
◎　是れでも二人ぐれえは、情婦が減つたぜ。
○　あんまり出來もしねえ面だぜ。
一　手前達がいゝなら、どうで憎まれに出て來たこちとら。
二　此儘引き込むも卑怯だから、一番何とか。
兩人　言はれうか。（ト兩人悟助の左右へ立ち）
一　やい悟助、成程手前はいゝ男だ、然し提婆の子分の者に、今日めちや〳〵に毆られても、大先生が控へて居るので、手出しをしねえのか。
二　けふは親の命日で、出入をせぬとはけちな言草、假令手出しをしねえでも、助ける譯にやあいかねえから、二人の臑を受けて見ろ。
一　見りやあ見るほど、
兩人　みじめなざまだ。（ト兩人にて足蹴になし）
一　これで先生、
二　みんな濟みました。

仁三　それぢやあおれが用がある。(ト仁三郎悠々と立上り、悟助の側へ來て、)社中の者が仕返ししても、後日に記念の殘るやう、おれが斯うして。

ト煙管を逆手に持ち、悟助の額を割る、悟助きつとなつて額を撫でゝ糊紅流るゝゆゑ、きつと思入、

悟助　親の位牌へ誓ひを掛け、じつと辛抱して居たが、こりあ男の生面を。

仁三　おゝ割つた、此仁三郎が打割つた。

悟助　むゝ。(ト無念の思入、小田井悟助に取附く、仁三郎思入。)

仁三　やい悟助、わりやあ是れでも手出しはならねえか、いけ張合のねえ貧乏野郎め、どうだ是れでわいらが仕返しも、さつぱり胸が晴れたらうな。

○　いやもう、晴れたとも〳〵。

△　日本晴れが、

四人　したやうだわえ。

一　是れから今日の祝ひ酒、

二　先生の所へ押込んで、

□　たらふく呑むとやらかさう。

◎今日は別段うまく呑めるぜ。

一　さ、先生行きやせうか。（ト仁三郎立上り、）

仁三　男達の達師のと、いやみばかりの青二才、大小たばさむ侍に、どうして／＼齒が立つものか、それとも口惜しいと思ふなら、百兩の金を算段して、いつ何時でも尋ねて來い、出入りはいつでもしてやるわ。われが異名も是れからは、野晒しぢやねえ業ざらしだ、見りやあ見るほどみじめなざまだ。むゝはゝゝゝゝ。

六人　そんなら、先生、

仁三　さ、參らうか。

〽肩臂怒らし不敵の提婆、同氣求むる四人の獄卒、道を狹しと歩み行く、跡にしよんぼり野晒が、骨にこたへる無念の涙、拳を握り居たりしが、小田井は跡を恨めしげに、影見送つて傍へ寄り、

ト仁三郎先きに四人よろしく花道へはひろ、悟助はほつと思入あつて、着物の塵を拂ふ、小田井門口を明け、外を窺ひ悟助の側へ來る、床の合方になり、

小田　譯は知らねど今の樣子、憎てらしい惡口雜言、嘸悔しうござんせう、それにまあ此やうに、髮ま

でも亂しくさつて、わたしがちよつと髮を結直してあげようわいなあ。

ト小田井挿したる櫛を取つて悟助の後へ廻る。

悟助　いや〳〵、もう結直すには及ばない、ちよつと撫でつけて置いてくれ。

小田　あい〳〵。(ト撫で附けにかゝる、)

〽夫の胸をさし櫛の、涙の雫なで附ける、互ひの心亂れ髮。(ト此内よろしく思入あつて、)

もし悟助さん、撫で附けて置かうより、やつぱり結ふたがよいわいなあ。

悟助　さ、いへば互ひの愛憎づかし、おぬしは不思議に今日爰へ、まだ盃をしたばかり、今の樣子を見たからは、定めて愛憎が盡きたであらう。

小田　何のまあわつけもない、盃した上からは、大事の〳〵夫ぢやもの、愛憎どころか悔しうて、お前の心の内が思ひ遣られて、わたしや悲しうござんすわいなあ。

〽悔し涙ぞ道理なる、悟助は有合ふ拔本を、手に取上げて打ちながめ、

ト思入あつて泣く、悟助傍に有合ふ千兩幟の拔本を手に取上げ、

悟助　これ見や、此本は千兩幟、猪名川といふ角力取は主人の息子禮三郎が、女房の身受けに金才覺、僅か二百兩の金ゆゑに、鐵ヶ嶽に手籠めに逢ひ、嘸口惜しい事であらう、丁度おれが身の上も、

僅かな金がねえばつかり、提婆風情にうち打擲、手出しもならねえ親の命日、男と生れて腑甲斐ないと、必ず笑つてくれるなよ。

〽齒嚙みをなしたる男泣き、小田井はあるにもあられぬ悲しさ、折から告ぐる遠寺の鐘。

ト悟助口惜しき思入、小田井もよろしくこなし。此時九つの鐘。

ありや最う九つ、九つからは明日の日取り、親の忌日が濟んだ日にやあ、提婆諸共四人の奴等、微塵にしにやあ腹が癒えねえ。えゝそれに附けても百兩の、金が出來ねえばつかりに、獄卒どもをのめ〳〵とさせて置くのも金ゆゑだ、えゝ癪に障るわえ。

〽無念面にあらはれて、悔し淚ぞ道理なる、小田井は側へ摺寄つて、

ト悟助無念の思入、小田井側へ寄り、

小田　もし悟助さん、盃した女房に、どうぞ暇を下さんせいなあ。

悟助　そりや又何で。(ト小田井淨瑠璃本を取つて、)

小田　さ、此淨瑠璃の猪名川が、女房おとわになりたい願ひ。

悟助　何と。(ト替つた合方、)

小田　夫の爲に身を沈め、苦界の勤めをしてなりと、男の耻を雪ぐが貞節、何にも知らぬわたしでも、

ゞつまあ見捨てゝ居られうぞいなあ。（ト ぢつと泣伏す。）
悟助　其志しは忝けねえが、どうしておぬしを苦界の勤め。
小田　いえ〳〵やつて下さんせ、お前の男が立てたいわいなあ。
〽口説き歎くぞ頼もしき、折柄表へ詫助が、始終の樣子立ち聞きて、
ト小田井悟助に縋り歎く、此時下手より詫助出て窺ひ居て、この時、
詫助　其金子、御用立て申しませう。
〽ずつとはひれば二人はびつくり。（ト兩人びつくりして、）
悟助　や、お前はさつきの詫助どの。
小田　そんならお前が、其お金を。
詫助　へい、悟助さま、昨日の御恩返し、何がなお禮と存じましたが、何の思案も出ぬ私、失禮ながら娘が寸志、お受けなされて下さりませ。（ト扇の上へ百兩の包みを載せて出す。）
悟助　そんなら、始終の樣子をば。
詫助　路地口に忍んで居て、一部始終を承はりましてござりまする。どうぞ此金役に立てゝ、お前の男を立てゝ下され。

悟助　何は兎もあれ、大枚百兩、

小田　どうして才覺しなさんした。

〽問ひ掛けられて詫助は、涙片手に眼を擦り赤め、（下詫助思入あつて涙を拭ひ、）

詫助　悟助さま、お娘御さま、土器賣の詫助が、見た事もない此お金、出來やう筈はござりませぬが。野晒さま、一ずゐに思ひ込んだ娘が貞女、褒めてやつて下さりませ。

悟助　そんなら娘御お賤どのは。

詫助　はい、身を賣りました此お金、御用に立てゝ下さりませ。

小田　そんならあのお娘御が、苦界へ沈んだ此お金、どうまあ是れが受けられませう。申し悟助さん、わたしをどうぞ替りにやつて、お賤さんと末長う、添うてあげて下さんせいなあ。

詫助　いや〳〵、それではやつぱり、娘の義理が立ちませぬ。

小田　いえ〳〵わたしを苦界の勤めに。

詫助　是れも定まる約束ごと、お前さまはお側にて、行末長う添うてあげて下さりませ。

小田　いえ〳〵それでは濟みませぬ、戀しう思ふ夫でも、女子の義理があるわいなあ。

詫助　それに遠慮は入りませぬわえ。

ト小田井泣伏す、此時ばた／＼になり、花道より忠藏尻端折りにて、一散に出來り、内へはひり、

忠藏　これ兄貴、腹が立つわえ／＼。

悟助　え丶今氣が揉めて居る所だ、何で腹が立つのだ。

忠藏　さあ聞いてくんなせえ、さつき二人の盃事、斯ういふ時は粹を通し、内に居ぬのが通り者と、裏口からそつと出て友達の所で遊んで居たら、提婆の仁三といふ奴が、破落戸を四五人連れ、野晒悟助を疊んで來た、祝ひ酒に天王寺で、月夜を幸ひ夜櫻で、呑み明さうと口々に、わつぱさつぱと吐すを聞き、捉へてやらうと思つたが、向ふは大勢こつちは一人、おれ一人では叶はぬから、早く跡を追掛けて、面の皮を剝いて下せえ。腹が立つて／＼、おりや悔しくつてならぬわえ。

ト是れを聞き悟助きつとなつて、

悟助　それぢやあ提婆が子分諸共、四天王寺へ行つたといふのか。

忠藏　それだによつて、是れから直に。

詫助　娘が心の入つたる百兩、これでお前の男を立て。

悟助　道ならねえ事ながら、それぢやあ此金借りやした。（ト百兩包みを懷中して、）忠藏、脇差を出してくれ。

忠藏　合點だ。（ト戸棚より一腰を出し、悟助に渡す。）

小田　そんなら是れから、天王寺へ、

忠藏　わしも一緒に行きやすぜ。

悟助　えゝ手前は內で留守をしろ、足手まとひは邪魔になるわ

小田　必ずともに。

詫助　怪我せぬやうに。

悟助　親の忌日が過ぎせえすりやあ、彼奴等五人七人は、赤子の腕を捻ぢるも同然。

忠藏　うまく遣つてくんなせえ。

悟助　案じるな、造作もねえわ。

トつか／＼と花道の附際まで行く、詫助留めて、

詫助　あもし、直に行くなら、娘に一目。

ト此前方下手より、駕籠舁四ッ手駕籠を舁き下手に居る。此時詫助駕籠の垂をあげる。內にお賤ゐて思入あつて、

お賤　此世は添はれぬわたしが因果。（ト悟助振返り、）

悟助　禮は重ねて。
お賤　未來は必ず。
小田　え。（ト門口へ出ようとするを忠藏隔てゝ）
忠藏　ちつとも早く、
悟助　おゝ、さうだ。
　〽飛ぶが如くに、
ト詫助駕籠の垂を下す。小田井はハア、と泣伏す。忠藏介抱する。悟助逸散に花道へはひる。此見得
よろしく、三重寺鐘にて、
ト時の鐘のつなぎにて、直に引返す。

幕

本舞臺一面の淺黃幕、禪の勤めにて幕明く。と爰に夜蕎麥賣荷をおろし居る、一、二、三、四、五等、
思ひ／＼の仕出し蕎麥を喰つて居る。
一　おい／＼蕎麥屋さん、お前はついに見たことのない蕎麥屋さんだの。

蕎麥　へい、わしは此間まで大阪名物豌豆まめを賣つて居りましたが、此頃流行る鍋燒饂飩にすつかり押されまして、それから宗旨を替へました。

一　道理で初めて見た顏だと思つた、何でも此節は、お稻荷さまか鍋燒に限るぜ。

蕎麥　左樣でございます、若し皆さん、今晩は此天王寺の山門前で、大層な喧嘩が始るといふ事だが、お前さん方も御見物かね。

一　さあ、其話しを聞いて出て來たのだが、男達と侍だといふ事だが、何所の者だの

二　それぢやあお前は知らずかえ。

三四　一體どこの者でございます。

二　向ふの相手は提婆の仁三郎といつて、劍術の師匠で、大きな聲では言へねえが、やつぱり破落戸さ。

五　それぢやあ何だね、此頃人が噂をする、喧嘩をしちやあ扱ひには入つて、金をゆするといふ評判だが、其人かね。

二　それさ、そいつの子分が大分あるが、それが今夜間違ひをして、こちらの相手といふは、野晒悟助といふ慈悲深い情知りの男さ。

一　そんなら千日前の輿屋かね、あの人なら評判の男達だ。

三　こつちの相手は、野晒親方一人かね。

二　さうさ、向ふは大勢、こつちは一人、なか〳〵見物ごとだね。

五　わしなざあ近附ちやあねえけれど、若し野晒親方が負けさうなら、助けに出て遣ります積りさ。

蕎麥　わたしも天秤棒でも持つて、出掛けて行きませう。

三　ぐづ〳〵して見損なつては詰らねえ、蕎麥屋さん錢はあげたよ。

蕎麥　へい〳〵、有難うござります。

二　さあ〳〵皆さん、出掛けませう。

皆々　御一緒に行きませう。

トやはり禪の勤めにて仕出し皆々下手へはひる。蕎麥屋は呼びながら上手へはひろ。鳴物打上げ、知らせに附き、淺黃幕を切つて落す。

（四天王寺山門の場）――本舞臺誂への山門、見事に飾り附け、是れへ好みの通り足代を掛け、立廻りに遣ふこと、舞臺上手へ竹矢來を見せ、此角の所へ四天王寺山門修覆小屋場と記したろ傍示杭、下手筋塀の張物にて見切り、日覆より櫻の釣枝を二段におろし、此蔭へ灯入りの月を引出し、總て四天王寺山門、夜櫻の體。爰に提婆の仁三郎、好みの裝にて立身、前幕の悟助好みの拵へ、尻端折り一本差

しにて仁三郎の腰を捉へ、兩人引張りの見得。此左右に○△□◎、その外立廻りの男達大勢居並び、
双盤にて道具納ろ。と兩人ほぐれてきつぱりとなる。誂への合方、悟助思入あつて、

仁三　酒宴の場所へ理不盡に、狼藉いたす不屆奴、何で身共へ失敬ひろいだ。

悟助　約束通り野晒が、耻をさらした返報に、胸の曇りも晴れ渡る月夜を幸ひ押掛けた、所も丁度天王寺、彌陀の光りの小判で百兩、耳を揃へて持つて來た、さあ受取りやれ。

ト百兩包みを仁三郎へ突附ける。

仁三　ひど算段の百兩を、持つて來たとはまだ神妙、受取るものは受取つて、うぬが體は利息だから、未練こなしに命は取るぞよ。

悟助　利息といふなら此悟助が、二十五一の厄年も昨日と過ぎて明きの方、うぬが命の申酉はおれが惠方の萬よし、弘誓の船の乗初めよし、旅立よしも冥途の門出、首を洗つて覺悟しろ。

仁三　しやらつくせへ其の一言、此の仁三郎に仕返しをする氣で來たなら歴然とした、柱暦を頼んで來い、大と小との二腰に、うぬらが手出しがなるものか、切られるものなら切つて見ろ。

悟助　何を小癪な。

仁三　それ、疊んでしまへ。

皆々　合點だ。

ト是れより皆々悟助に一度に掛つて烈しき立廻り、よき見得より、誂への鳴物になり、銘々面白き仕ぬきあつて、是れより足場を遣ひ、山門へ上り十分に立廻り、よき程にきつぱりとした見得より鳴物替り、皆々を切散らす。是より平舞臺へ來り、又仁三郎と立廻りあつて、トヾ仁三郎を一かせおびせる。是にてわつと苦しむ所を、悟助附込み仁三郎の脇腹へ突立て、えぐりながら思入あつて、

悟助　今ぞ悟助が恨みの刄、思ひ知れ。

ト十分にえぐる、是にて仁三郎苦しみ落入る、悟助ほつと思入あつて、

惡人ながら多くの人をあやめし上は、所詮遁れぬ我が罪科、捕はれとなり繩目を受け、死恥をさらさんより、此場に於て潔く、さうだ。

ト刀を持ち腹を切らうとする思入、此時ドン／＼になり、花道より浮世戸平、浮世と印したる長提灯を持ち出來り、

戸平　野ざらし悟助、死ぬにやあ及ばぬ、まあ／＼待つた。（トこれにて悟助思入あつて、）

悟助　や、さういふ聲は、

戸平　浮世戸平だ、早まるまいぞ。（ト言ひながら本舞臺へ來る。）

悟助　おゝ兄貴か、遺恨がある故提婆を始め、多くの奴等をあやめし上は、所詮生きちやあ居られねえ、跡の始末はおぬしを賴んだ。（ト又死なうとするを戸平留めて、）

戸平　えゝ聞分のねえ、これ悟助、膝とも談合此戸平が、跡の始末は附けるから、こゝから直に落ちてくれ。

悟助　いゝや、それぢやあ男が立たねえ。

戸平　えゝ、立つも立たぬも跡のことだ、追手の來ぬ中ちつとも早く。

ト せりたてる。此時下手より役人、野袴打裂羽織大小、役人のこしらへにて、黑四天の捕手四人、子持筋の弓張を持ち出來る。兩人是を見て、

兩人　やゝ、あなたはお役人樣。（ト悟助思入あつて、）

悟助　人をあやめし野晒悟助、御法の通りイザお繩を、お掛けなされて下さりませ。

ト後へ手をまはす、役人思入あつて、

役人　假令人をあやめしとて、其方に科はないわえ。

兩人　すりや、何とおつしやります。

役人　其の譯といふは、提婆の仁三郎といふ奴は、大和の國の山中にて、年經し猪と姿を替へ、旅人を

害し金銀を奪ひ取つたる盗賊故、お上よりも召捕らんと、手を廻したる折に幸ひ、其方が手柄にて殺害なしたは、上への忠節、其方に少しもお構ひはない。

悟助　左樣なれば私に、お祟りはござりませぬか。

役人　其儀は安堵いたすがよいわえ。

兩人　えゝ有難うござりまする。（ト戸平思入あつて、）

戸平　おゝ天道樣は見通しだ、貴樣が日頃の善心で人を助けた皆報い、神や佛のこれも御利益。それに附けても今出掛に、貴樣の家で一部始終、委しく聞いて來たが、詫助どのゝ娘とやらが、苦界へ沈んだ百兩は、

悟助　おゝ其金も封の儘、仁三郎が懷中に。

トこれにて戸平仁三郎の吹替の死骸の懷中より百兩包みを出して、

戸平　そんなら是で其の娘の、身請をすりやあ浪風立たず、

悟助　これもやつぱりお上のお慈悲。

役人　我はこれより事の次第、逐一に上へ申上げん。そち達二人は歸宅なし、家内の者へ安堵させい。

戸平　何から何まで、

兩人　えゝ、有難うございまする。

ト此時男達兩人窺ひ出て悟助、戸平の後より、

兩人　覺悟。

ト切つてかゝるを突廻し、戸平は捻上げ、悟助は押へつける。

戸平
悟助　して、こやつめは、

役人　苦しうない、切捨て〳〵。

兩人　はッ。(トちよつと立廻つて見事に切下げる、兩人ぽんと轉るを木の頭、此時鷄笛)最早、鷄鳴。

役人　然らば、此のまゝ。

兩人　お役人樣。(ト兩人刀を拭ふ。)おさらばでございます。

ト皆々よろしく、引張り、鷄笛、時の太鼓にて、よろしく

ひやうし　幕

野晒悟助(終り)

孝女美名天下一

是は此度世に珍らしき烈女は勢州津の山家元は豪家も落ぶれて苦勞を柴田杣右衛門貧の盗に菱繩の掛りやつかなる仁作おしげが眞に泣寄親と子の縁もおあさおさがゝ自殺天晴鳴海の浴衣がけ五人女と白浪や雲津泊に雲切が非道を懲らす狂言も濱の眞砂の旅芝居衣裳鬘や代參のお側女中と夕立に雨の舍の蚊帳の内心早衣喜之助が密夫といはれ百年目百兩ゆする須走りのお熊が鬼も忽に佛と替る傀儡師其山猫に木鼠も浮世の別れおさらばと德兵衛夫婦が身の素性明せば同じ谷川の水間が情に田畑も元へかへりて西心が菩提を弔ふ文月の榮

處女評判善惡鏡

「白浪五人女」は慶應元年八月、作者五十歳の時、市村座に書卸したものである。「雲切五人男」を女に書き換へた趣向であるが、創案に成つたもの。辨天小僧の書込まれてある白浪五人男ほどに好評を以て世に迎へられたものではないが、眞野屋德兵衛と奥女中竹川との色模樣に用ゐられた清元の「夕立」は、詞章作曲ともに好評で、現今に於ても屢々語り物として襲用されてゐる。それから孝女お淺の件は、作者が淺草田原町の名主から得た實說に據つたもので、遺書は其の實說中に實際用ゐられたものをそのまゝに書いたものであるといふ。五人女の中では、何といつても家橘のすばしりお熊が壓卷の出來榮えであつたといふ。

書卸しの時の主なる役割は、坂東彥三郎(眞野屋德兵衛、柚右衛門娘お淺)、市村家橘(五人女奥女中竹川實はすばしりのお熊)、尾上菊次郎(柚右衛門女房おさが、五人女雲切のお六)、市川團藏(百姓柴田柚右衛門)、中村鶴藏(五人女山猫おさん、百姓仁作)、澤村訥升(五人女木鼠お吉、瀨田屋喜之助)、坂東三津五郎(五人女おさらばお傳、堅田の娘早衣)、市川新車(保右衛門妻なぎさ、仁作女房おしげ)、市村竹松(堅田の悴保之助、水間左門)、坂東又太郎(庄屋甚右衛門、瀨田屋喜兵衛)、嵐冠五郎(盜賊今五右衛門、小道具屋悟市)等であつた。

插繪にしたのは國周筆五人女の錦繪である。

大正十四年九月　　校訂者



處女評判善惡鏡（白浪五人女――五幕）

勢州鈴鹿山の場
石山寺門前の場
牛尾越一ッ家の場
瀬田鳥井川の場

序幕

【役名――瀬田屋喜之助、立場茶屋峠のお三實は山猫おさん、堅田保之助、判人きぢ猫虎八、堅田の若黨佐五平、駕舁げんこの權六、同やみの三、一寸法師ちよん兵衞、荻原丹下、若黨苫平、宿役人。堅田の後家なぎさ、同娘早衣、同腰元お稲、鶏娘おちやぼ等。】

（鈴鹿山の場）――本舞臺後淺黃幕、向う一面松並木、日覆より同じく釣枝、下手に勢州鈴鹿山と記したる榜示杭、爰に旅裝の侍一人、切腹して打伏しになり居る、傍に短刀の箱あり、上手に荻原丹下半纏ぶつさき大小床几に掛り、下手に宿役人、百姓四人控へ、此次に苫平、旅裝若黨のこしらへにて平伏して居る、此模樣時の太鼓にて幕明く。

丹下　宿役人共が訴へによつて、荻原丹下罷り越した。して切腹せし死骸と申すは。

宿役　はッ、則ち是れにござりまする。

ト是れにて丹下件の死骸の側へ立寄り、百姓四人介抱して疵口を見せる事よろしくあつて、

丹下　何さま左りの脇より右にかけ引廻したる切先きの跡、笛を掻き切り相果てたる樣子、こりや是れ全く自身の切腹に相違ない、見受けし所年配と申し人品骨柄、こりやなか〳〵大家に於て一廉の高祿を取りしものと相見ゆる。して、此者の召連れたる、家來と申すは何れに居る。

宿役　はッ、其儀は是れに控へ居りまする、苫平どのとやら申す仁こそ、是れなる死骸のお武家樣の御家來との儀にござります。

丹下　すりや、それに居る苫平とやらが、是れなる者の家來と申すか。

苫平　はッ、御意の通りにござりまする。

丹下　然らばそれなる苫平に、ちと尋ねたき仔細がある。苦しうない、是れへ出ませい。

苫平　はッ。(ト是れにて前へ出て、)

丹下　して其方の主人と申すは、いづくの家來にて、姓名は何と申す、有體に申せ。

苫平　はッ、主人儀は近江國六角家の重役にて、眞野浦之進と申すもの。

丹下　して又何の用事あつて、旅行いたして當所まで參りしものぞ、仔細はどうぢや。

苫平　はッ、旅行いたせし仔細と申すは、此度主人浦之進、殿の仰せを蒙りまして、鎌倉鶴ヶ岡八幡にて武運長久祈りの爲、御家の重寶琵琶丸の短刀を所持なし、主從にて鎌倉表へ火急の道中。

丹下　おゝ、かね〴〵噂に聞き及ぶ、近江の國の六角家に、琵琶丸といふ名刀ありと承はりしが、すりや其寶を所持いたし、鎌倉表へ出立せしとか。して何ゆゑに大切なる寶を所持なし居りながら、深夜に及び此處へ、只一人にて參りしぞ。

苫平　はッ、其御不審はさる事ながら、只今も申し上げまする通り、火急の役目の事ゆゑに、片時も早く鎌倉へ罷り越したく、それゆゑに昨夜泊りし土山にて、明朝は正七つ時の出立ゆゑ未明に起しくれるやうにと、宿の女に頼みし所、今朝時を違へしやら、出立いたし參れども鷄もうたはぬ眞の闇、是なる鈴鹿の麓にて蹴躓き石にて切りたる草鞋、求めようにも人家は起きず、それ故主人を待たせ置き、餘儀なく昨夜泊りたる土山宿まで取つて返し、宿にてやう〳〵草鞋を求め跡より追附き參りし所、更に主人の姿も見えず、こは何ゆゑと四邊を見れば、是れなる松の木蔭にて打伏し居るは正しく主人、さては持病の起りしものと立寄り見れば斯くの次第、傍に有あふ短刀の箱の内には寶はなく、主人の書置き封切つて、見ればこれなる山中にて、賊に出合ひ寶の短刀奪ひ取られしゆゑ、役目の越度の申し譯に切腹いたし相果てると、殘る方なき此書置、いざ、御披

見下さりませう。（ト苫平懐中より書置を出し丹下に見せる、丹下取り上げ開き見て、）

丹下　すりや是れなる書置は、それなる主人の自筆ぢやな。

苫平　自筆に相違ござりませぬ。

丹下　此書置の文體では、そちが詞と符合いたせど、吟味に吟味いたさねば、役目の表相立たぬ、いやなに宿役人、只今検分いたせし時、それなる死骸の傍に、落ち散りありし日記を見せやれ。

宿役　はッ。（ト死骸の傍にある道中日記を出す、丹下よく〳〵見較べて、）

丹下　何さま手帳といひ書置、寸分違はぬ上からは、全く役目の越度を思ひ切腹なせしものなるか。して其方に常々から、是れなる主人に遺恨を含み、寶を奪はんなどゝいふ手掛りの者あらざるや。

苫平　其儀は生得實直なる主人の事にござりますれば、遺恨を受くべきやうはなし。尤先年國許にて、謀叛を企つ者ありしを是れなる主人が見顯はし、それ等の者を刑罪に行ひし事もござりますれど、それとても其身の越度に、切腹なして果てしなれば、最早遺恨を含みまする謂れはなきかと存じまする。

丹下　むゝ、すりや其外に、遺恨を含みし者はないと申すか。

苫平　左様にござりまする。

丹下　さては此程鈴鹿山に、盗賊ありと聞きつるか、其者どもの仕業ならん、然らば早速手分けなし、此方に於ても詮議いたし、篤と吟味もいたさうから、近江とあらば一日路、死骸は早々引き取つてよからう。

苫平　委細畏つてござりまする。あゝ、さはさりながら此事を國へ歸つて御新造様や、若旦那の徳次郎様へ、申し上げなば嘸やさぞ、お歎きなされるであらうけれど、是非に及ばぬこの場の仕儀、あ、こりや何うしたらよからうな。

宿役　やれ〳〵是れで落着きました。引取人のない其時は此宿の掛り合、かゝる明白な御吟味にて、事の仔細の分る上は、私共も一つの安堵。

百姓四人　へい〳〵、有難うござりまする。

丹下　篤と檢分いたせし上は、早く死骸を取り片附けい。

宿役四人　へい〳〵、畏まつてござりまする。

丹下　役目相濟む上からは、身共は是れにて歸宅いたさう。（ト立ち上る。）

百姓四人　お役目御苦勞に存じまする。

苫平　左様ござらばお役人様。

丹下　こりや苫平とやら、用事あらば役所へ參れ。
苫平　はッ、有難うございまする。
丹下　さあ案内いたせ。
宿役　はッ。
ト時の太鼓になり、宿役人先きに丹下上手へはひろ、跡より百姓四人有合ふ戸板へ件の死骸を載せ、苫平附添ひ上手へはひろ。是れにて松並木を引いて取り、時の太鼓を打ち上げ、頭取出て、
頭取　東西、御覽に入れましたる發端より、三ケ年相立ちましたる狂言にございますれば、左樣に御覽下さりませう。（トロ上濟んではひろと、後にて、）
大勢　さあ〳〵、踊りの始まり〳〵。
トこれを下座へとり、盆踊り賑やかな鳴物になり、よき程に知せに附き淺黄幕を切つて落す。
（石山寺門前の場）＝＝本舞臺上手へ寄せて、石山寺の門前より湖水を見たる片遠見、下手に葭簀張りの出茶屋、上下とも植込みの張物、日覆より松の釣枝、床几二三脚並べあり、爰に一、二、三、四、五、六等盆踊の人數大勢對の浴衣同じく手拭を冠り、柄太鼓、團扇など持ち、皆々よろしく踊つて居る、此

模樣右の鳴物にて道具納る。

一 さあ〳〵、みんなも休まつしやれ〳〵、一服やつて又始めよう。

ト是れにて皆々床几へかゝる、出茶屋より若い衆の亭主出て茶を運ぶ。

二 ときに、今年は春からの降り通しゆゑ、定めて不作と案じたが、思ひの外の豐作で、こんな目出度いことはない。

三 いや是れといふも、鎌倉將軍樣の御威勢がいゝから、稻まで實のりがいゝといふものだ。

四 いや實のりといへば此間、京都の島原なんぞへ、豆のやうな物が降つたさうだ。

五 はゝあ、さうかな、いや何しろ豆の降るとはよい吉兆、百姓の爲には豐年だ。

六 さうだ〳〵、何でも是れから世直しに、豐年踊とやらかさうぢやあねえか。

皆々 それがいゝ〳〵。

一 そんならこなた音頭を取つて下せえ。

六 おつと合點だ〳〵。それ豐年ぢや、萬作ぢや、あすは旦那の稻刈ぢや。

皆々 やとせのやとせ、やとせのせ。

ト是より又盆踊りの鳴物になり、皆々無性に踊り上手へはひる、跡は古唄になり、花道より早衣島田

鬘、振袖裝、人柄よき屋敷娘のこしらへにて團扇を持ち出る、お稲同じく下女のこしらへにて附添ひ、跡より佐五平羽織大小にて若黨のこしらへにて出て、花道にて、

お稲　もしお孃さま、かう向うを見晴らしました所は、何とよい眺めではござりませぬか。

早衣　ほんにそなたの言やる通り、石山寺の秋の夕暮、よい眺めではあるわいなう。

佐五　いやもう此頃では、あなた樣が兎角に鬱いでばかりいらつしやるゆゑ、御新造さまの御心配、それゆゑあなたのお氣晴しに、毎年嘉例の盆踊りをお見せ申しにお連れ申しましたが、御意に叶つて此やうな、悦ばしい事はござりませぬ。

お稲　何は兎もあれ、向うへ參つて踊りの來るのを、待ちませうではござりませぬか。

早衣　ほんに、それがよいわいの。

佐五　さゝ、お越しなされませ。（ト右の唄にて三人舞臺へ來り、床几へ掛ける、茶見世の亭主出て、）

亭主　これはどなた樣も、よう入らつしやりました。まあ御ゆるりとお休み遊ばしませ。

ト茶を汲んで出す、是れにて三人茶を呑むことよろしく。矢張り右の唄にて、上手より喜之助、羽織着流し雪踏にて、小さき包みを持ち出來り、皆々を見て、

喜之　是れはどなた樣かと存じましたら、堅田樣のお孃さま、お稲さんに佐五平さん、盆踊りを御見物

にお出でなされましたか。

佐五　イヨウ、小間物屋の喜之助どのか、見れば夕暮に只一人で。はゝあ扨はぞめいて歩くのぢやな。

喜之　いえ〳〵、なか〳〵左樣な譯ではござりませぬ、今日出掛けて參りましたは、お孃さまに近々お聟さまがお出でなさるゆゑ、其お支度のお櫛をば見せてくれと、先達て御新造さまからのお賴みゆゑ、只今お宅へ持つて上らうと、それで出掛けて參りました。

ト此内早衣、喜之助を見て嬉しきこなしよろしくあつて、是れを聞き少しむつとして、

早衣　えゝも、人の心も知らぬか何ぞのやうに、それ所ではないわいなあ。

トつんとする。此時盆踊りの鳴物聞える。

お稻　あゝもし佐五平さん、あれ〳〵あすこへ盆踊りが來た程に、行つて見ようぢやないかいなあ。

佐五　なに、踊りが來たとか、それは豪氣だ、さあお孃さま、いらつしやいまし。（ト手を取らうとする。）

早衣　いえ〳〵、わたしは爰に話しが。

佐五　なに、お話しがござりますとは。（ト聞き咎める。）

お稻　いえあの、おゝさうぢや、わしや此喜之助どのに、いろ〳〵註文せにやならぬ物がある程に、そなた衆二人はあそこへ行て、踊りを見て來たがよいわいの。

佐五　喜之助どのへ御註文なら、お宅へお歸りなさつてから御ゆるりとなされませ、それよりちやつとあの踊りを。
お稻　あゝもし佐五平さん、お孃さまがあのやうに仰しやるゆゑ、お心任せにしたがよいわいな。
佐五　それだといつて、肝腎のお孃さまを只お一人、爰へお置き申しては。
お稻　はて、つい目と鼻のあそこへ行くに、其心配には及ばぬわいな。
佐五　左樣なればお孃さま、私共はちよつと行つて、踊りを見て參りまする。
早衣　おゝ、ゆつくりと行つて來やいの。
お稻　そんなら喜之助どの、お孃さまをお賴み申しますぞえ。
喜之　畏りましてござりまする。
佐五　隨分ゆつくり行つて參りますから、お跡でゆつくり、（ト思入あつて）お誂へ物をなされませ。
トやはり右の鳴物にて兩人上手へはひる。
早衣　これ喜之助どの、疾よりお前に逢ひたかつたわいの。（ト合方になり、喜之助ずつとはなれ）
喜之　逢ひ度いとおつしやりますのは、御婚禮のお支度で、小間物の御用でござりますか。何にいたせお目出たい事でござりますな。

兩人　歩びなせえ。

ト唄になり、一、新造三人して胡蝶の手を取り引立てる。胡蝶行くまいとするを、お辰煙管にて打ち、無理やりに下手へ引立てはひる。

番新　ほんにまあ胡蝶さんは、どうしてあんなにならしやんしたか。

○　わたしらよりもおいらんを、不斷大事にするあの子。

□　お客をくれのなんのとは、義理にも言はれぬことだのに。

△　愛想づかしの言ひたいがい、愛想もこそも、

四人　盡きましたわいな。

薄雲　これといふのも十三さんが、胡蝶さんに常談でも、言はしやんしたのでござんせう。

十三　その疑ひも無理ならねど、どうしたことかあの胡蝶が、身の毛の立つほどいやでならぬ。

番新　こりや十三さんのおつしやる通り、つひに一度あの子の側へ、お寄りなすつたこともないに、あまたあの子が惚れるといふも、何か仔細のあることで、あらうかも知れぬわいな。

△　いえ〳〵仔細もございもござりませぬ、十三さんが彥三に似て、よい男でござんすからさ。

ト此時下手より若い者三出來り、

若三　もし東雲さん、近江屋のお客も大忠のお客も、今お出でなさいました。

番新　あい〳〵、さうでござんしたか、おいらん、困つたものでござんすなあ。

薄雲　さあ、今日に限つて此樣に、のがれぬ客の落合ふことは、わたしやじれつたうござんすわいな。

若三　なんにいたせ兩方へ、二人づゝ立ち分れて、先陣をして下さりませ。

番新　あい〳〵、それぢやあ花雲さんと雨雲さんは。近江屋の方へ行て下さんせ。

□△　あい〳〵。

番新　わたしら二人は大忠の、太夫さんの方へ行きませう。

若三　どうぞさうして下さりませ。又おいらんはお癪氣の、積りに申しておきましたから、跡からちよつとお顏ばかりを。

薄雲　あい、承知しましたわいな。

番新　そんならおいらん、

四人　行て來ますぞえ。（トはやり唄にて、新造四人に三附いて下手へはひる。跡十三薄雲殘り）

十三　やれ〳〵、大風の吹いた跡のやうだ。（ト薄雲煙草を吸附けて出し）

薄雲　ちつと、お休みなさんせぬか。

十三　睡くもないが胡蝶の騷ぎで、氣草臥れがしたやうだ。

薄雲　丁度誰れも居ぬこそ幸ひ、寐ながら話しをしませうわいな。

ト誂へ一中節模様の獨吟になり、薄雲屏風を開き、枕を直し、上着を脱ぎ屏風へ掛け、胴抜き扱帯裝になる、十三も煙草盆を提げ、床の上へあがり、兩人思入あつて、

十三　どうした縁の薄いのか、互ひに思ひ思はれながら、おぬしの所へかうして來ても、寐ようとすると障りにて、是れまで一度しつぽりと、寐たことのない此十三。

薄雲　ほんにお客が落合ふか、胡蝶さんに邪魔をされ、又いつの夜と約束して、いつも本意ない別れのみ。

十三　今宵もどうかと思うたが、邪魔する胡蝶が仕置に逢ひ、今爰へ來る氣遣ひなし。

薄雲　外のものも客へ行て、まだめつたには歸らねば、

十三　またとあるまい、今宵の首尾、

薄雲　邪魔のないうち、

十三　少しも早う（ト又獨吟になり、薄雲十三の上着を脱がせ、ぢつと十三に寄添ひ、顔を見て、）

薄雲　どうしてこんなに惚れたのか、骨がないなら一つにと、唄にうたふがしみ〴〵と、一つになりた

うござんすわいな。

十三　すりや左程まで薄雲には、わしに惚れたと言やるのか。

薄雲　外のお客を振捨てゝ、側を離れぬわたしの心、これがお前に知れぬかいな。

十三　それが眞實誠なら、わしが自由になるであらうな。

薄雲　ぬしに任せたわたしの體、どうなと自由になさんせいな。

ト薄雲十三に凭れかゝり、嬉しき思入、十三もにつこり思入あつて、

十三　嬉しや今宵ぞ。(トうすきドロ〳〵のやうな風の音にて、十三凄くいふ。)

薄雲　え。(トこなし、十三氣を替へて)

十三　日頃の思ひを、晴らさうか。

トまた獨吟になり、十三薄雲を引寄せ、ぢつと顏を見る、やはり薄きドロ〳〵のやうな風の音になり、薄雲見込まれし心にて、うつとりとなる、十三薄雲の扱帶を解き、引寄せて頬摺りをなし、嬉しき思入薄雲十三の帶を解く、兩人とも下は緋の長襦袢にて、手を取らうとする途端、やはり薄ドロ〳〵にて、指金の猫出で十三に飛びつく、これにて十三拂ひのけびつくりして飛び退く、薄雲は件の猫を抱き、心はつきりとなりし思入、十三は本意なきこなし、

十三　えゝ、又もや猫に。

薄雲　え。（ト薄雲何心なく猫を出す、十三ぞつとして、）

十三　邪魔をされしか。（トぢつと思入、獨吟の切れ、時の鐘にて、よろしく此の道具廻る。）

（三浦屋藏前の場）――本舞臺眞中より上手へ寄せて、二間の土藏戸前口、上の方一間板羽目、此蔭より箱階子出這入りあり、下の方九尺の屋體、折廻し塗骨障子屋體、總て三浦屋藏前の體、爰に以前の胡蝶細引にて縛られ角の柱へ結ひ附けられ居る、傍に一、二手ごろの棒を持ち胡蝶をくらはし居る、これを八重雲留めてゐる、此見得誂への合方にて道具留る。

八重　まあ〳〵待つて下さんせいな。

若一　これさ八重雲さん留めなさんな、惡く留めだてをしなさると、お前も側杖を喰はにやあならねえ。

八重　假令わたしも共々に、お前方に打たるゝとも、見て居られぬが日頃から、睦しくした朋輩中、どうぞ堪忍して下さんせいな。

若二　いくらお前が留めたつて、こりやあ内證からの言付だ、わたしらが勝手で打つのぢやあねえ。

八重　そりやさうでもござんせうが、お前方の料簡で、よい加減にして下さんせいな。

若一　どうしていゝ加減になるものか、いゝいけしつこい、退いて居なせえ。

ト一、八重雲を突き倒し、胡蝶を打つ、八重雲これを留める。

胡蝶　あもし八重雲さん、留めて下さんすは嬉しいが、打たれるのは身の覺悟、お前はわたしに構はずと、早く座敷へ行きなさんせ、怪我でもしてはならぬわいな。

若二　さあ〳〵そつちへ退いてゐなせえ、心を改め十三さんを、思ひ切つたといふまでは、折檻するのも主人の言付け。

若一　此のひがいゝいすな體ゆゑ、初手のうちは可哀さうだと、わたしらも思つたが、あんまりお前が强情だから、つひにやあ面が憎くなる、さあ、思ひ切つたといふまでは、

兩人　打つて〳〵打たにやあならねえ。(ト兩人胡蝶を打つ、これを八重雲留める。)

八重　どうぞ堪忍して下さんせいな。

ト我が身で胡蝶を圍ひ、これを留める。此時階子より以前の市郎兵衞、着流しにて出來り、これを見て此中へ割つて入り、兩人を留める、兩人は心附かず、

兩人　えゝ、邪魔になる、退きなせい。(ト突き退けようとするを、市郎兵衞突き廻して、)

市郎　これさ、二人とも靜かにしねえか。
八重　や、お前は夢の親方さん。(ト兩人びつくりして、)
若一　これは親方、眞平御免、
兩人　下さりませ。(ト尻をおろし、下に居る、胡蝶は面目なき思入にてうつ向き居る、八重雲は嬉しき思入にて、)
八重　よい所へ來て下さんしたなあ。
市郎　樣子は二階で聞いて來たが、これが稼業の勤めをば、不勤めにしたならば、折檻するもいゝけれど、高の知れた色戀に、さう荒つぽく打たずとも、仕置の仕樣があらうぢやねえか。
若一　いえもう、犬も朋輩鷹も朋輩、私共も此子をば、こんなに打ちたくもござりませぬが、
若二　主人からの言附けでござりますから、據なくやは〱と、痛まぬやうに打ちました。
市郎　そりやあよく庇つてやつてくれた、お前方のやうな心よしの、若い衆だからいゝけれど、因業な奴でゝもあつた日には、どんな痛え目をするか知れねえ。(ト言ひながら懷から紙に包みし金を出し、)こりやあ少しばかりだが、息つぎに一杯やんねえ。(ト一へやる、一、二に見せて、)
兩人　こりやあ親方、有難うござります。
若一　八重雲さん、よろしく。

八重　知らぬわいな。
若二　こいつあ惡いうけだ。(ト市郎兵衛胡蝶に思入あつて、)
市郎　ときに此子に話しがあれば、お前方はちつと爰を。
若一　畏りました、ゆつくりと、
兩人　お話しなさりませ。
市郎　內證へはお前方から。
若一　へい、よいやうに申して置きます、(ト兩人こそ〳〵と下手へはひる。市郎兵衛跡を見送り、)
市郎　成程、地獄の沙汰もだなあ。(ト合方になり、胡蝶顏をあげ、)
胡蝶　親方さん、よくお出でなさんしたな。
市郎　和合連から誘はれて、淨瑠璃を聞きながらお前方のおいらんへ、用があつて出かけて來たが、そりやあさうと胡蝶さん、お前まあ、どうしたといふのだ。
胡蝶　お前さんにお目に掛つて、恥かしうござんすわいな。
市郎　何の恥かしい事があるものかな。(ト此うちよき所へ八重雲薄緣を敷く、市郎兵衛そこへ住ふ。)
八重　もし親方さん、お前さんからとつくりと、胡蝶さんの氣の落着くやう、異見を言つてあげて下さ

んせ。兎やかうわたしが思つても、ほんの蔭で氣を揉むばかり、どうぞお頼み申しますわいな。

市郎　今あらましはお辰どんから、話しを聞いて爰へ來たが、どういふ事で十三さんとやらに、さう又お前は惚れたことだ、其人ばかりが此世界に、男でもなからうぢやあねえか、こんな恥をかゝねえうちに、なぜ思ひ切つてしまはねえのだ。

胡蝶　親方さんのお詞だが、我が身で悪いと知りながら、どうも思ひ切られませぬわいな。

市郎　そりやあ斯うして縛られる程、惚れた事ゆゑよく〳〵な、譯でもあらうが胡蝶さん、お前も利口なやうにもねえ、よく考へて見なせえよ。（ト誂への合方になり、八重雲下手の部屋から煙草盆を持つて來る、市郎兵衛煙草を呑みながら。）これが情人になつたのなら、そりやあ思ひ切られぬのも尤もだとはうけれど、何をいふにも肝腎の相手が得心しねえのを、一人こつちで氣を揉んで、人もあらうにおいらんが惚れ切つて居る其客を、取らうといふはお前が悪い、そんな無理なことはねえ。何ほ思案の外だといつて、あんまりそれぢやあ外すぎる、これが男の不自由な國でゝもありやあしめえし、一年三百六十日、日々替る客の數、十三さんとやらに勝つた男があるめえものでもねえぢやあねえか、後先見ずの料簡に噂を聞きやあの人を、殺してお前が死ぬといふは、そりやあ悪い料簡だ、親兄弟があるならば跡の歎きはどのやうだらう、無けりやあお前が其人達の問ひ弔

ひをせざあなるめえ、大事にすりやあ百年までも生きられる命をば、勝手に詰めるは親への不孝となり、別けて爰の家でも高金出して抱へた體、これから先きが親方の金箱になる所をば、非業な死をばされたら、損徳は扨ておいて、家の景氣に拘はること、假令三日が一日でも主人とした其人に、難儀を掛けるはそでねえ事だ、惡いことは言はねえから、爰の道理を聞きわけて、思ひ切つてしまひなせえ。(ト市郎兵衞思入にて、胡蝶うつ向き泣きゐる、八重雲側へ寄つて、)

八重　もし胡蝶さん、親方さんがあのやうに、御親切にお前へ異見、必ず徒に聞かしやんすな。惡いことは言はしやんせぬ程に、お前も心を取直し、思ひ切つたと言はしやんせ、さうしたならば內證へは、親方さんがよいやうに、お詫をなされて下さんせうわいな。(ト胡蝶顏を上げ、思入あつて、)

胡蝶　事を分けての今の御異見、一から十まで身にしみ〴〵有難うござんすが、斯うならぬ先きは兎も角も、お世話になりしおいらんへ、言ひたいことを言つたゆゑ、仕置の爲に縛られて、內外の衆に顏を見られ、恥を曝した上からは、どうでも死なねばならぬわいな。

市郎　それが一途な鼻許料簡、爰の家にゐるのがいやなら、話しづくでどこへでも仕替に出るがいゝ、年頃といひ器量といひ、羽根が生えて飛ぶ體、又小磯へでも氣を替へて見ねえ、見通しから千石船居ながら拜む六夜待、洒落た話しがあらうも知れねえ。

胡蝶　そのお詞を悖いては濟まぬのも知つては居れど、親兄弟も存じませず小いときに捨てられて、繼親の手で人となり、廓へ賣られしわたしの身の上、間もなく賣つた繼親もどこへ行たやら行方知れず、生き甲斐のない體ゆゑ、どうでも死ぬ氣でござんすわいな。

ト八重雲これを聞き、腹の立つ思入にて、胡蝶へ詰寄り、

八重　ほんにお前はどういふ譯で、そんな心にならしやんした、朋輩多き其中でも人よりいつち中のよい、わたしでさへも愛想が盡きた、無理なことでもある事か御親切な御異見を、無にしてお前死なうとは、そりや分らぬ、分らぬわいな、これがたゞのお人でも聞かねばならぬ所をば、今廓で名の高い男達の市郎兵衛さん、お顏を立てねば濟まぬわいな。

胡蝶　さあそりやお前が言はずとも、濟まぬは知つて居るけれど、あきらめられぬがわたしが因果、どうぞ許して下さんせいな。

八重　そんならお前は、どうあつても。〔ト立ち掛るを市郎兵衛留めて〕

市郎　これさ、おれへの義理なら捨てておきねえ、これが男同士なら顏が立つとか立たねえとかいふこともあらうけれど、取るに足らねえ女の事、なにお前達のいふ事を、何でおれが氣にかけよう、力づくや腕づくと違つて不得手な色の道、無下にいふのも分らぬ譯だ。

八重　それぢやあ親方、お前さんは、腹を立つてぢやござんせぬか。
市郎　何しに腹を立つものだ。
胡蝶　考へて見ると濟まぬけれど、どうも思ひ切れませねば、堪忍して下さんせいな。
　　ト胡蝶うつ向き泣く、市郎兵衞思入あつて、
市郎　かぼそい手をば細引でぐる〳〵卷きの縛り繩、嘸やその手が痛からう、解いてやるのは造作もねえが、廓の法で縛つた繩を手篭めにまさか解かれもせず、今に詫をしてやらうから、最う少しだ辛抱しねえ。
八重　お顏を立てぬ胡蝶さんを、憎いとも思はずに。
胡蝶　えゝ、有難うござんすわいな。（ト此時指金の鼠欄間の上を通る、市郎兵衞これを見て、）
市郎　やゝ、欄間を傳はるあの鼠は。
胡蝶　なに、鼠とはえ。
　　ト胡蝶鼠をきつと見る、うすき風の音、ドロ〳〵にて、鼠ばつたり落ちる、市郎兵衞八重雲見て、
市郎　むゝ、猫も追はぬに此鼠が、
八重　四足をちゞめ落ちたるは、

市郎
八重　もしや爰らに。

胡蝶　え。(ト顔見合せ、胡蝶顔を背ける、これにて鼠逃げてはひる。)

市郎　こいつはけうな事だなあ。(ト合點の行かぬ思入、唄時の鐘にて此道具廻る。)

(離れ座敷の場)═本舞臺三間の間常足の二重、大和葺き本緣附き、向う床の間瓦燈口、太鼓張の襖、地袋戸棚、茶壁、上の方一間折廻し障子屋體、いつもの所庭口の枝折戸、下の方建仁寺垣、石燈籠、櫻の立木、日覆より同じく釣枝、總て離れ座敷の體、爰に短檠を點し、以前の次郎吉立ち掛り居て、薄雲をとらへ居る見得、誂への端唄にて道具止る。と合方彈き流しにて、薄雲振拂ひ行くを、次郎吉きつと留めて、

次郎　これ薄雲、どうぞ言ふこと聞いてくりやれ。

薄雲　一夜流れの苦界の身、枕かはすが勤めなれど、此間から病氣にて初會ばかりか馴染でも、枕かはさぬ此薄雲、座敷ばかりといふことは、初手から承知ぢやござんせぬか。

次郎　成程そなたのいふ通り、杯さへすりや國許へ土産と思うて來たけれど、見れば見るほど美しきそなたの姿にうつほれて、言ふこと聞いて貰ひたいのぢや。

薄雲　假令何と言はしやんしても、座敷ばかりの約束なれば、けふは許して下さんせ、そのうちお出での其時に、氣分がよくばお頼み通り、お前のお伽をしませうわいな。

次郎　その志しは忝けないが、又と尋ねて來られぬは、主命に依つて西國へ明日は立たねばならぬゆゑ、是非とも今宵身共が願ひ、どうぞ叶へてくりやいの。

薄雲　ても聞きわけのないお客さん、廓の樣子を御存じないゆゑ、そんな無理を言はしやんすが、金さへ出せば自由になるものと思うてござんせうが、金で自由にはならぬぞえ、いやなお客は振り通し、身揚りしても逢はぬのが、此大磯の習ひでござんす、早うお歸りなさんせいな。

次郎　いゝや歸らぬ歸り申さぬ、斯う言ひ出しては武士の意地、是非とも一分立てねばならぬ。

薄雲　一分立てるとおつしやつても、座敷ばかりの約束ゆゑ、いやと言うたらどうなさんす。

次郎　むゝ、いやといふたら刀に掛けて。（ト刀を持ちきつとなる、薄雲思入あつて、）

薄雲　刀に掛けてとおつしやるは、殺す心でござんすか、そりや惡い思召し、足らぬわたしが申さずとも、御合點でもござんせうが、遊里へお出でなさんすはお上へ晴れてぢやござんすまい、慮外者ゆゑ切つたとあつて、只濟むところもござんせうが、廓で女郎を切つたといふては御身分に拘はりませう、わたしは高が川竹の一夜流れの勤めの身、殺されたとてそれまでながら、あなたの御

身をしまつたら、御先祖樣へ濟みますまい、爰の道理が分りましたら、御門の切れぬ其うちに、
急いでお歸りなさんせいな。

次郎 返す〴〵も憎き一言、假令扶持の喰上げなすとも、刀の手前この儘に、身共は屋敷へ歸られぬ。

薄雲 そんならどうでも、わたしをば。

次郎 おゝ、刀の銹にしてくれう。(ト立掛ろ、奧より一、二出來り、次郎吉を留めて、)

若一 あゝもし〳〵、こりやあ何となされまする、廓で法度の刀を拔きかけ、誰を切るのでございまする。

若二 素人と違つて大金の、掛つてゐる此おいらん、めつたに切られてなりますものか。

次郎 やあ二人とも留めだていたすな、言ひ出した事あとへ引かぬが、身共が屋敷の國風だ。

若一 屋敷々々とおつしやいますが、さうしてあなたはどちら樣の、

兩人 御藩中でございまする。

次郎 むゝ、身共はさる藩中の侍だ。

若二 どちら樣でござりますか、理不盡な事をなされますれば、お屆け申さにやなりませぬ。

若一 さあ、其お屋敷をおつしやりませ。

次郎　さあそれは。

若二　どちら様でござりまする。

次郎　さあ、

兩人　さあ、

三人　さあ〳〵〳〵。

若一　其お屋敷をおつしやりませ。

次郎　むゝ。

ト次郎吉ぎつちり詰ろ、此以前より市郎兵衞上手障子を明け、次郎吉の紙入あるを取り、中の手紙を見てうなづき懐へ入れ、此時思入あつて、

市郎　いや、其名はめつたに名乘られまい。

次郎　なんと。（ト誂への合方にて、障子屋體より市郎兵衞出來ろ、次郎吉見てびつくりなし、）や、おめえは。（ト逃げに掛るを市郎兵衞捉へ、）

市郎　何でこんな、姿で來たのだ。

薄雲　すりや、お屋敷さんと思うたは。

踊りを見物に行かれしまゝに家出をばなさるゝ覺悟と知つたるゆゑ、取る物も取りあへず石山寺の門前へ、參つて所々を尋ぬれども、かいくれ知れぬお行方に立歸らんとは思ひしが、若しもかやうな裏道へお出でなされし事もやと、來つて尋ぬる其折柄、そち達二人が此場にて、忠義一途の心から姉を失ひ申譯に、死なうといふは尤ながら、元より姉は喜之助と申合せし覺悟の家出、さすればそち達兩人が、不調法ではあらざれば、必ず死ぬるには及ばぬぞよ。

佐五　ではござりませうが死にませねば、御新造さまへ濟みませぬ。

兩人　どうぞお見のがし下さりませ。（ト立上り行かうとするを保之助留めて、）

保之　はてさて、それは惡い料簡、今そち達が死んだとて、姉の行方は知れぬぞよ。

兩人　さあそれは、

保之　身共が思ふ仔細もあれば、待てと申さば、待ちやれと申すに。

ト此模樣よろしく、時の鐘合方にて此道具廻る。

（山中立場茶屋の場）――本舞臺三間の間中足の二重、茅葺屋根竹簀の本緣附き、上手一間障子屋體、向う暖簾口、上手へ寄せて抑入戸棚、下の方鼠の破れ壁、これに、獸の皮など釣しあり、二重眞中へ圍爐

裏を切り自在を下げ、軒口に藥の看板草鞋をつるし、下手藪疊いつもの所竹簀の門口、此外に四つ手駕籠を下しあり、上下とも岩組の張物を見せ、總て岨造り立場茶屋の體、二重上手に鷄娘前髪へ鳥冠と見ゆろ赤い切れを掛け、莚屏風を後へ立廻し、白地の浴衣を羽織り札笊を伏せて腰を掛け居る、本舞臺上手にちよん兵衛奴天窓一寸法師好みのこしらへにて扇を持ち立ちかゝり居る、下手に以前の三次手遊の笛を咬へ、三味線を持ち控へ居る、門口に權次吉原冠りにて手拍子を取り囃し立てゝ居る、總て兩國の見世物模樣よろしく、かんから入り辻打にて道具留る。

權次　それ、おらが隣りのちよこ婆さま。(ト手拍子を打つ、)

三次　おらが隣りのちよこ婆さま。(ト手遊笛にて眞似る。)

權次　その叉隣りのちよこ婆さま、田樂燒くとて手を燒いた、其手でお釋迦の團子をこねた、お釋迦知らずにちよと甜めた。(トよろしく手拍子を打つ、三次此通り一々笛にて眞似る、)あれ御覽じろ、世に珍らしき鷄娘、生れは丹波の笹山で親は代々狩人の娘、親の因果が子に報い生れながらの鷄娘ぢや。これおちやぼ、皆さんへ鳴いてお目に掛けろ。

鷄娘　とツけツこう。(ト鳴く。)

權次　あれあの通りでござりまする。見るは法樂見らるゝはあの子の不仕合せ、代はわづか十二錢ぢや、

ときに、ちよん兵衞さんや。

ちよ　あい〳〵。

權次　これからはお前の番だ、いつもの踊りを皆さんへ、早うお目に掛けたがよい。

ちよ　あい〳〵。

權次　さあ〳〵是れから一寸法師の踊りぢや〳〵、イヨ評判々々、（ト是れより三次見世物の三味線を彈く、）あいや、えゝゝゝ、あいや茶屋のかゝあ、はりやのこまやのやれをばさん、本所のをばさんやれをばさん、橋場の伯父さんやれ伯父さん。

トよろしく唄ふ、一寸法師頻りと踊る、此時虎八花道より半合羽脚袢草鞋がけ、山女衒のこしらへにて出來り、直に舞臺へ來り、

虎八　おつかァは内かの。（ト内へはひろ。）

權次　はい〳〵代は僅か十二錢、成程是れは稀代のものぢや、可愛さうだとお胸に御會得が參りましたら、お戻りでようござります、正眞正銘の鷄娘ぢや、評判々々。

ト夢中になつて囃し立てる、虎八これを見て呆れし思入にて、

虎八　誰だと思つたら、權次に三公ぢやあねえか、氣違ひじみた何をして居るのだ。

ト背中を叩く、これにてやう／＼心附き、

權次　イヨウ、山女衒の虎八さん、久し振りでよくお出でなすつた。

虎八　久し振りはいゝが、何の眞似だ。

三次　日が暮れて仕事はしまふし、仕様がねえからちよん兵衞を相手に、今見世物の稽古をして居る所さ。

ちよ　これは虎八さん、よくお出でなすつた。（ト辭儀をする。）

虎八　おゝちよん公か、いつもながらちよこ／＼と、まめでいゝな。

ちよ　はい、有難うございます。

虎八　ときにおつかァは、居ねえか。

ちよ　はい、今裏で麁朶をこなして居ました。

虎八　それぢやあおれが來たつて、ちよつとさう言つてくれ。

ちよ　あい／＼。（ト合方にて奥へはひる、虎八鷄娘に目を附け、）

虎八　かうお前はいゝ子だなう、幾つになるえ。

鷄娘　とツけツかう。

虎八　何だ、取つて十歳だ、十歳にしちやあ大きな形だ、どうだ伯父さんと一緒に行く氣はねえか。

鶏娘　とツけツかう。

虎八　何だ、とツけツかうか、よし〳〵おつかァに掛合つて、連れて行つて遣るから待つて居な。

權次　おい〳〵虎八さん、其子には鶏にあやかつて、人せえ見るととツけツかうと鳴く、此間買つた因果ものだわな。

虎八　何だ鶏娘だ。（ト手足を見て、）そいつァ大笑ひだ、斯う見た所が子柄がいゝから、買出して行つて儲けようと思つたが、因果者だやあ仕方がねえ、したが爰のおつかァも、よく何でも買込む人だなう。

ト合方になり、奥より小笹結び髪やつし、更けたる好みのこしらへにて出る、是れにて鶏娘そこらを片附ける。

小笹　おゝ虎八さん、久しく逢はなかつたね。（ト虎八見て、）

虎八　おゝおつかァ、いつも達者でいゝね。

小笹　いやもう、達者過ぎて困るくれえだ。

虎八　どうだおつかァ、お定りのせりふだが、いゝ玉はあるめえか。

小篠　どうして〳〵、玉といつちやあ藥にしたくもありやあしねえ、どうかして人魂でもいゝから、買ひこんで來りやあいゝと思つて居る。

虎八　いや此頃のやうに、斯う不漁ぢやあ、女衒なんざあ上つたりだ。

權次　玉といやあ惜しい事をした、さつきわつちが峠で乘せた十六七な屋敷娘、びつくりするやうな好い玉で、何處へ出して踏ましても、ぶつ附け百兩がものはあつた。

虎八　むゝ、さうして其娘はどうした。

三次　いゝ男と二人連れだから、駈落ものと勘づいて、そろ〳〵ゆすつて見た所が、連の野郎がやわだから、路用を捲上げ其上で、脇道へ擔ぎ込み、おつかァの所へ連れて來ようと、ずりを張つたがこつちのあやまり。

權次　飛んだ侍が出やあがつて、百兩といふ路用から、加之に娘まで見はぐつてしまつたが、是れがほんの玉なしといふのだ、今日のやうにどぢを組んだ晩はねえ。

虎八　そいつァ惜しい事をしてしまつたなあ。

小篠　手前達のする仕事は、大概そこらがおちといふもんだ。

三次　もし虎八さん、縁起直しに久し振りで、一杯呑ましておくんなせえな。

虎八　さうよ久し振りだな。おいおつかァ、内に酒の買つたのがあるか。

小笹　生憎昨夜みんな呑んでしまつて、まだ今日は買ひにやらなんだ。

虎八　さうか、それぢやあ買つて貰ふも面倒だから、外へ行つて呑んで來よう。

權次 三次　そいつァ有難うござえます。

虎八　そんなら直に出掛けよう。（卜三人門口へ出掛ける。）

小笹　おい虎八さん、歸りに五合ばかり提げて來てくんなせえな。

虎八　そりやあ言はねえでもの事だ。（卜行きかける。）

三次　もし虎八さん、崖ッぷちが危なうござります。

權次　こう、直にごまを摺りやあがら。

小笹　そんなら賴むよ。

虎八　はて、承知といふに。（卜山おろし合方にて三人下手へはひる。）

小笹　有難え、先づこれで酒に有り附いた、あいつらにでも吹つ掛けなくつちやあ、此高え酒は呑めやあしねえ、どれ燗の出來るやうに焚きつけて置かう。これおちやぼ、裏へ行つて麁朶を取つて來てくれ。

鷄娘　とツけツかう。

ト奥へはひる。小笹圍爐裏を焚きつける、木魚入り合方になり、花道より以前の早衣足を痛めし思入にて、喜之助に手を引かれ出て花道にて、

喜之　命あつての物種ゆゑ、跡をも見ずして逃げたれば、路用は元より紙入まで、取られしからは立ちのまゝ。

早衣　逃げるはずみに足を痛め、急げど道は捗らず、こりやどうしたらよからうなあ。

喜之　京まで行けば知邊もあれば、それへ便つて二人が落着き。

早衣　向うにちら〳〵戸の隙から、燈火がもれて見えるわいなあ。

喜之　あれぞ慥かに峠の一つ家、あれへ便つて暫しのうち。

早衣　足を休めて、

兩人　行かうわいなあ。（ト矢張り右の合方にて兩人舞臺門口へ來り、）

喜之　へい、御免下さりませ。

小笹　誰だえ、どツから來なすつたえ。

喜之　私共は旅の者、足弱連れで夜道をかけ難儀をいたす者でござります、どうぞ暫しの其間お見世を

お貸し下さらば、有難うござりまする。

小笹　そりや嘸困りなさつたゞらう、生憎もう寐てしまつたから、氣の毒だが、外へ行つて休みなせえ。

早衣　左樣でもござりませうが、足を痛めて難儀なもの、どうぞお願ひ申しますわいなあ。

ト是れにて小笹聞耳を立て、

小笹　今の聲は女の聲だが、むゝ、足弱を連れて居ると言つたつけ。さういふ事ならそこを明けて、まあこつちへはひらつしやい。

喜之　そんなら御得心でござりますか。

早衣　やれ、〱それは有難うござりまする。

ト合方きつぱりとなり、門口を明け兩人内へはひろ、小笹早衣を見て思入つ

小笹　まあ〱こつちへ掛けさつしやれ。

兩人　左樣なら、御免下さりませ。

ト二重へ腰を掛けろ、小笹早衣の顏をよく〱見てびつくりなし、

小笹　や、そちや娘の早衣ではないか。(ト早衣小笹を見てびつくりこなし、)

早衣　や、さういふお前は、眞實の母さまではござりませぬか。(ト喜之助小笹を見て、)

喜之　おゝ、ほんにあなたは、堅田さまの先の御新造小笹さま。
小笹　おゝ、こなたは出入の小間物屋喜之助どのでござつたか。
早衣　ほんに、母さまでござりましたか。
喜之　御新造さまじござりましたか。
小笹　やれ、替つて所で、（ト合方。）
三人　逢ひましたなあ。（ト思入、早衣小笹に縋つて、）
早衣　もし母さま、よう御無事で居て下さりましたなあ。
小笹　そちもよう達者で居てくれた。
喜之　お替りもござりませず、お目出度うござります。
小笹　まあ〳〵こつちへ上りやいの。
ト是れにて三人よろしく住ひ、合方になり、嬉しき思入にて、
早衣　何から先きへ問はうやら餘りの事ゆゑ口へは出ねど、先づ差當つて問ひたいは、實の姉さん小浪さまは、お達者でござんすかいなあ。（ト是れにて小笹少し面目なきこなしにて、）
小笹　さあ、そちに問はれて面目ないが、是れには段々譯あつて、姉は内には居ませぬが、話せば長い

事ゆゑに、跡でゆつくり聞かせませう。さうしてそなたは夜る夜中、喜之助どのと二人して、どうして爰へは來やつたのぢや。

早衣　さあお話し申すも恥かしけれど、喜之助どのと譯あつてな。

ト言ひ兼ねることなし、小笹さてはといふこなしあつて、

小笹　はゝあ、そんならそなたは是れに居る喜之助どのと言交し、屋敷に居ては添はれぬゆゑ、いづくの果へ行つてなりと、二人一緒に暮したく、それで大方家出でもしたといふのであらうがの。

早衣　あい、お前のおつしやる通りぢやわいなあ。(ト恥かしきこなし、)

小笹　そりやもうおれも若い時、逃げた覺えのある事ゆゑ一目見れば直に知れるが、然しそちには幼い時、許嫁をした夫があつたが、あの四郎三郎どのはどうしやつた。

早衣　さあ其許嫁があるゆゑに、今の義理ある母さまが、近々家へ呼び迎へ、四郎三郎さまと女夫にして、家督を讓るとおつしやるゆゑ、それがいやさに喜之助どのと今宵家出をした私、母さま必ず叱つて下さりますなや。(ト是れを聞き、小笹いゝ者が來たといふ思入にて、)

小笹　何が叱つてよいものか、わしも矢つ張り其以前、男を連れて逃げた體、いはゞ其子のそなたゆゑ、親に似ぬ子は鬼ッ子と、わしにあやかり家出をしたゆゑ、褒めこそすれ何で叱らう、よう家出を

して來やつたなう。（と悦ぶ思入、是れにて兩人嬉しきこなしにて、）

喜之　左樣なれば私共が、身のいたづらもお叱りなく、お褒めなされて下さりますとか。

早衣　さういふ事なら若し母さま、わたしら二人がお世話をば、どうぞなされて下さりませいなあ。

小笹　そりやもうそつちから頼まずとも、血を分けたそなたといひ、緣に繫がる喜之助どの、身に引受けてどこが何處まで、世話をしないで何うするものか。さうしてそなたも、家を出る時には金を持つて出たらうし、又喜之助どのも男のこと、定めてしつかり路用の金を、持つてござつたであらうなう。

喜之　いえ、私は生業の出先きから直ぐなれば、掛先きを取りました金が僅か十兩餘り、お孃さまがお家から百兩お持ちなされましたを一つにして、私が腰に着けて居りましたが、逃げる途中で駕籠を雇ひ、持ち重りがいたしますゆゑ、其路用から紙入まで一纏めに包みにして、駕籠へ附けしがこつちの災難。

早衣　人里遠き山中にて駕舁にゆすり掛けられ、どうなる事かと思ふ所へ後の藪から編笠にて顏を隱せし侍が、物をも言はず其包みを持つて行かうとしたゆゑに、さうはさせじと爭へば刀を拔いて切り拂はれ、命大事と逃げたゆゑ、路用は元より二人が紙入、包みのまゝに取られてしまひ、仕方

なく／＼立ち寄りし、此家に生みの母さまとは、親子盡きせぬ縁ゆゑ、不便と思うてわたしらのお世話をなされて下さりませいな。(ト此話しの内、小笹思入あつて、)

小笹　その話しでは、今聞いた、玉といふのは。

喜之　え。(ト思入、小笹氣を替へ、)

早衣

小笹　いやさ、たまさか便つて來た二人、見れば立派な身裝ゆゑ、いゝ喰物だと、いやさ、喰はせて置かうと思つたが、今の二人が災難話し、聞いて此身が其以前、家出した時さま／＼と苦患をしたを思ひ出し、濟まぬ事だと氣が附いたら世話する所か一晩でも、一緒にしては置かれぬわいなう。

喜之　そんなら道に背いたる、私共ゆゑあなたには、

早衣　此家に置いては下さりませぬか。

小笹　さあ、斯うばかりでは合點が行くまい、わしが因果の一通りを、二人共に聞いてくりやれ。(ト木魚入り誂への合方になり、)今更いふに及ばねど、屋敷に居ればこのわしも、何不自由なくして居る身が、不圖した心得違ひより中間に來た岩平といたづらをして屋敷を駈落ち、其折そちが姉の小浪を連れて出たれど夫の顏へ、泥を塗つた其罰で、便りに思ふ岩平が長の煩ひ、其うちに身の貯へも盡き果てゝ衣類諸道具賣代なし、醫者や藥と介抱の其甲斐もなく岩平は、冥土の旅へ赴いて

跡へ殘るは借錢に、詮方つきて娘の小浪を、泣きの涙で苦界へ沈め、やう〳〵跡を取り片附け、それから此身は只一人、身性が惡るさに誰あつて構うてくれる人もなく、苦勞苦患を仕盡して、あすこや爰と彷徨うち、最早五十の峠も越え今では崕の立場茶屋、きはどく立てる朝夕の、煙りの代の片助けに、因果ものゝ仲買ひをしてやう〳〵と、果敢ない浮世を送るに附け、あとに殘した娘のそち、聞けば二度目の母が出來、殊に連子もあるとの事、まゝしくされて居はせぬかと最寄の人に餘所ながら尋ねて見れば夫は死に、今では母の渚どの、我が子にかへて義理のあるそちの世話してくれると聞き、ほんの事だが蔭ながら渚どのを拜んで居たに、其恩のある母を捨て、逃げるといふは恩知らず、わしの家とも知らずして便つて來たは天道樣が、おれに息をしろといふ、いやさ、わしに異見をしろといふ、知らせと思へば恐ろしく、假令可愛いそなたでも渚どのへの義理ゆゑに、一晩たりとも家へは置かれぬ、それゆゑ今からそなたをば屋敷へわしが連れて行き、此身の懺悔をした上でそなたの詫びして戻さねば、堅田の家へ何うも濟まぬ、現在親のおれが手本、そでない事では末が遂げぬ、喜之助どのと切れてくれ。またそこに居る喜之助どのも、此譯ゆゑに末を思ひ、此場で綺麗に別れて下され。これ、手を合して賴みますわいなう。

　トわざと涙をこぼしていふ、喜之助じゆつなきこなし。

喜之　事を分けたる其異見、聞き分けぬではござりませねど、濡れぬ先きこそ厭ふ身の、今となつては切れられませぬ。

早衣　義理が濟まぬとおつしやいますなら、あなたのお世話になりますまいから、どうぞ見脫して下さりませ。

喜之　さういふ事なら少しも早く、此家を立ち退き御難儀の、掛らぬやうにいたしませう。

早衣　そんなら母さま。

喜之　隨分御無事で、

兩人　おさらばでござりまする。（ト兩人立上るを小篠留めて）

小篠　それぢやあ是れ程事を分けた母の賴みも聞き入れず、義理を捨ても喜之助どのと、切れる心はないといふのか。

早衣　はい、切れられませぬ、若し母さま、お前も覺えのあることなれど、親兄弟を振捨ても殿御に附くが世の習ひと、人が言ふではござりませぬか。

小篠　むゝ。

早衣　なんとさうではござりませぬかいな。（ト小篠、むゝと詰りし思入にて、）

小笹　おれが身性の悪いに附込み、よく親を遣り込めた、こいつア一番荒療治を。

兩人　えゝ。（トびつくりする、小笹やにはに喜之助の胸倉をとり、）

小笹　やい野郎め、大概にふざけやあがれ、二人の爲を思ふから此身の懺悔になぞらへて、口をすつぱく異見をして、綺麗に別れてくれと賴めば、うぬがいゝ子の面をして濡れぬ先きこそも凄じいやア、總體うぬがしやツ面が生ツ白けて居やあがるから、こんな騷動も起きるといふものだ、假令娘が何と言はうと、いえ〳〵それぢやあ濟みませぬと側から異見を仕ようとはしねえで、一緒に爰を連れ出さうとは見掛けによらねえ太え奴だ、うぬのやうな奴は、以後の見せしめ、斯うしてやらにやあ腹が癒ねえ。（ト喜之助をむごくくらはす、早衣留めて、）

早衣　あゝこれ母さま、何をなされます、まあ〳〵待つて下さりませいなあ。

小笹　えゝ邪魔をするな、打捨つて置け。これよく聞けよ、許嫁のある娘を連れて、逃げりやあわりやあ間男だ。まご〳〵するとうぬの首は胴に附いちやあ居ねえぞえ、まだしも命のあるのが仕合せ、娘を置いてきり〳〵と、勝手の方へうしやあがれ。

喜之　さあ其お腹立ちは、御尤ではござりまするが、是れには段々譯のあること。

小笹　えゝ譯も絲瓜もいるものか、きり〳〵と行きやあがらねえか。

早衣　まあ〳〵待つて下さりませいなあ。

小笹　えゝ、邪魔をせずとどいて居ろ。

ト小笹喜之助を引立て門口の方へ來る。此以前下手より虎八一升德利を提げ、權次三次附いて出來り、門口より內を覗き權次三次さつきの娘だといふ思入あつて、虎八と囁き合ふ、兩人は小蔭へ忍ぶ、虎八此時知らぬ顏にて門口を明け、

虎八　おつかア土產を買つて來たよ。（ト內へはひる、小笹見て）

小笹　おゝいゝ所へ來てくれた、かね〳〵お前も知つて居る屋敷へ殘した妹娘が、男をこさへて逃げて來たゆゑ、おれが是れまで身性が惡さに不義理をして居る言譯に、送り屆けてやらにやあならねえから、御苦勞ながら駕籠へ乘せて、娘をお前連れて行つてくんなせえ。

虎八　おい〳〵おつかア、それぢやあお前何をいふのだ、なんぼ實の娘だとて、みす〳〵こんな代物を何處の屋敷へ送つて行くのだ。

小笹　はて、呑込みの惡い人だ、不斷お前が出入りをする、屋敷といふなあ島原御殿だ。

ト是れにて虎八呑込みし思入にて、

虎八　成程わかつた、島原御殿か、あの屋敷なら譯はねえ。さあ姉さん、わたしと一緒にお出なせえ。

早衣　いえ〳〵わたしやお屋敷へ、歸ることはいやでござりますゝ
喜之　どうぞあなたのお情で、見脱して下さりませ。（ト小笹に縋る。）
小笹　假令何と言はうとも、おれが目に掛つたからは、何でもずつしり金に仕にやあ、いやさ、かねて此身の詫びを仕ようと、思つた所へ幸ひだ、娘はおれが預かつた、うぬァ何處へでも行きやあがれ。（ト門口を明け、喜之助をむごく突き出す。）
喜之　そんなら是れ程申しましても、
小笹　おゝ、聞く耳は持たねえわ。
喜之　そりや又あんまり、
小笹　えゝ、一昨日うしやあがれ。
喜之　あゝこれ、如何に此身に科ありとて、こんなに酷くなされずとも仕樣模樣もあらうのに、さりとは無慈悲な小笹さま、思へば〳〵。
虎八　まだ行かねえのか。
喜之　うぬ覺えて居ろよ。
權次
三次　まだぐづ〳〵して居やあがるか。（ト息杖を振上げる、喜之助是非なく花道へ行き振返り、）

喜之　うぬ覺えて居ろ。

ト唄になり、思入あつて逸散に花道へはひろ、是れにて小笹虎八に囁く。

小笹　ちつとも早く今の屋敷へ。

虎八　おッと承知だ。(ト早衣を無理に、門口へ引立て來り、)それ頼むよ。

權次
三次　ようごぜえます。(ト早衣を駕籠へ押入れ垂れをおろす。)

虎八　そんならおつかア。

小笹　いゝ、れこさはいゝかえ。(ト手を出す。)

虎八　はて、ようごぜえす。

ト是れにて虎八駕籠を舁せて花道へはひろ。小笹跡を見送り、門口にて思入あつて、

小笹　思ひ掛けねえ娘の早衣、あの喜之助めと連立つて、おれが家とも知らずして廻り廻つて來たゆゑに、いゝ喰物と思ひの外二人共にちやんころなし、こいつア一番掀しを掛け、別れさせようと思つたが、中々根強いくッ附き方、それゆゑ手を替へ荒療治で生木をさいて虎八に、屋敷へ送つてくれと言つて、年一杯に賣つてやつたが、流石はおれの餓鬼だけに男をこしらへ家出して、干上り切つたお袋のほつぽを肥してくれるとは、ほんに子供は寶だなあ。(ト思入此時四つの鐘鳴ろ。)おゝ

あの鐘はもう四つだ、どりや奥へ行つて、酒の肴の支度でもして來ようか。

ト奥へはひる、時の鐘、蟲笛の入りし合方になり、下手の藪疊の蔭より以前の喜之助窺ひ出て、

喜之　最前この家を突き出され、行きは行つても後髮、早衣どのが案じられ心に掛れば裏手から、そつと廻つて小蔭にて樣子を聞けば案の定、屋敷へ送るといつたは嘘、やつぱり苦界へ賣つたのだと問はず語りで知つたる上は、こりや斯うしては居られぬわえ。(ト早い合方になり、喜之助支度をして、)遠くは行くまい、跡追ツつき、さうぢや〳〵。

ト逸散に花道へはひる。是れと一緒に此道具廻る。

(瀬田鳥居川の場)――本舞臺四間中足の二重、川添の蹴込み、向う山川の遠見、舞臺前上手へ寄せて浪板を出し、二重上手へ柳の立木、釣枝、上下藪疊、總て瀬田鳥居川の模樣よろしく、浪の音にて道具留る。と合方になり、下手より以前の渚 癪の起りし思入にて、お稻の肩へつかまり出來り、二重へ上り、

お稻　もし御新造さま、最う僅でござりますれば、御ゆつくりお出で遊ばしませ。

渚　おゝ、兎かういふ内もう爰は、我が家へ近き鳥居川、氣強くいうては遣るものゝ親子の別れに持

お稲　病の悩み、ほんに女子といふものは、世に腑甲斐なきものぢやなあ。

渚　御尤さまでござりまするが、頓て目出度うお嬢さまを、お尋ね遊ばしてお歸りなされば、何もきなく〳〵思召さぬが、よろしうござりまする。

お稲　ほんにわたしとした事が、死別れでもしたやうに、愚癡な事ではあるわいなう。

ト此時人音するゆゑ、お稲向うを見て、

渚　もし御新造さまえ、誰やら向うへ參る樣子、爰に居ては往來の邪魔ゆゑ。

お稲　そんなら暫しあの小蔭で、苦痛を休めて行かうわいなう。

ト上手藪疊の蔭へはひろ、波の音打ち上げ、唄淨瑠璃になり、花道より以前の喜之助だいなしの破れたる着附にて、悄々として出來り花道にて、

喜之　あ、道ならぬとは知りながら、言はゞ主ある早衣どのと不義をなしたる其罰で、斯ういふ事になるのも因縁、誰を憎まん所もなければ、御恩を仇の御新造さまへ、申譯には死ぬるより外に思案はあるまいわえ。（ト又唄淨瑠璃になり、喜之助舞臺へ來り二重へ上り、）さはさりながら、親仁さま、わしが死んだと聞くならば、嘸や跡にてお歎きなされう、先立つ不孝は親仁さま、どうぞ許して下さりませ。（トよろしく向うを拜み、）人の目褄にかゝらぬうち、少しも早く、さうぢや〳〵。（ト四邊

の小石を拾ひ袂へ入れ、）南無阿彌陀佛。

ト身を投げようとする、此時後へ渚お稻窺ひ出て、よろしく留めて、

渚　まあ〳〵待つた、これ喜之助。（ト喜之助渚を見て、）

喜之　や、あなたは堅田の御新造さま、あゝ面目ない、面目なうござりまする。

渚　さあ面目ないと言やる譯も、大概それと知つてはゐるが、娘の見えぬは合點行かず、どういふ細でそち一人、身を投げ死なうとしやるのぢや、樣子を聞かしてくりやいなう。

トよろしく留める、喜之助下に居て。

喜之　さあ死なねばならぬ樣子をば、御存じないとおつしやれば是非に及ばず此場にて、お話し申す一通りお聞きなされて下さりませ。（ト沈んだ合方になり、）是れにおいでのお稻どのも知つての通り、石山の踊りの場所にてお孃さまにお目に掛れば私へ、逃げてくれと大枚の金まで出してお賴みゆゑ、お許嫁のあるお身を連れて逃げては濟みませぬと、御異見申せどお聞き入れなく、連れて逃げねば死ぬるとて、覺悟の樣子に詮方なく、お連れ申して立退く途中、あなたの御罰や親の罰、忽ち二人へ廻り來て、盜賊に逢ひ紙入から路用の金まで殘らず取られ、逃げるはずみに足をば痛め、仕方なく〳〵山道を辿る峠の一軒家で、見合す顏は其以前家出なされし御新造さま、是れ幸

ひと身の上を頼めどあなたへ義理を立て、是れまでおれが家出して不義理をなした言譯に、娘を屋敷へ連れて行き詫びをするゆゑ此場にて、緣を切りやれと突き出され、理の當然に仕方なく外へは出れど心が引かされ、小蔭に忍んで樣子を聞けば、駕籠屋を賴んでお孃さまを送つた先きはお屋敷と思ひの外に苦界へ沈め、金にするとの問はず語り、南無三寶と跡追つかけ行けども影も形もなし、跡へ歸つて尋ねたとて實の娘を賣る程な、强慾非道な小笹さま、先きを明かさうやうもなし、考へて見ればあなた樣や親の歎きも厭はずして、色に迷ひしあやまりゆゑ、我が身で我が身に愛想が盡き、申譯には身を投げて死ぬる覺悟の此喜之助、仔細と申すは御新造さま、此通りでござりまする。（トよろしく思入にていふ、渚こなしあつて）

渚　さては娘は話しに聞きし、心よからぬ小笹どのに、逢うて其身を賣られしか、さう聞く上は猶のこと、そちが身を投げ死んだと聞かば、よもや娘も生きては居まい、さすればそちは此私へ重々濟まぬであらうがや。

喜之　何とおつしやります。

渚　かね〴〵そちも存じて居やうが、あの早衣は我が家を繼がさにやならぬ義理ある娘、それゆゑ最前科もなき弟に家出を申し附け、不義せし姉の行方を尋ね、異見を加へ連れ歸れと、世間を兼ね

し渚が心配、今又そちの話しにて娘の手掛り知れたれば、假令惡人なればとて表沙汰にて糺しなば、行方の知れぬことなけれど、事荒立ては許嫁の聟へ濟まねば其方が、死ぬる生命をながらへて、竊に娘の行方をば尋ね搜して此わしへ、知らすが死するに增したる言譯、急く所ではあるまいがな。（トこれにて喜之助思入あつて、）

喜之　成程あなたの仰せの通り、私ゆゑにお孃さまに若しもの事でもある時は、若旦那さまやあなたさまの其御苦勞も水の泡、惜しからぬ命なれど生き存らへて御行方を尋ね出した其上で、互ひにふッつり緣を切り竊に伴ひお屋敷へ、お屆け申して一日も、早く御安堵いたさせませう。

渚　そんならわしの賴みを聞き、生き長らへて娘を尋ね、そなたは緣を切りやるとか。

喜之　向後ふッつり思ひ切り、あきらめまするでござりまする。

渚　あゝ、よう言うてくれた、嬉しいぞよ。あ、許嫁さへなき事なら、娘が好いた戀聟どの、假令町人なればとて、こなたを養子にしたけれど、自由にならぬが浮世の中。

喜之　それ程までに私を、思召して下さりますとは、えゝ有難うござりまする。

ト此時盆踊りの鳴物を打ち込む。

お稻　もし御新造さま、また踊りが參りまする。

渚　人目に掛からぬ其うちに、少しも早う此場をば。
喜之　左様なれば御新造さま、隨分ともに御機嫌よろしう。
渚　そちも達者で居やいなう。（ト喜之助ハッと悄々として花道附際へ行く、渚思入あつて、）あゝこれ、待ちや。
喜之　はッ。（ト下に居る、知らせに附き日覆より月を下ろし、渚懐より金を出し紙に包み、）
渚　雲間を出し月影に、見ればだいなし破れたる衣服、ても見苦しい袖乞どの。
お稻　あ、もし。（ト袖を引き、さうではないといふこなし。）
渚　はて、娘を連れて家出せし、喜之助ならば此渚が、何も構ふいはれはなけれど、袖乞どのとあるからは、幸ひ今日は十三日、盆の供養に渚が報謝。（ト件の金を投る、喜之助手に取上げ、）
喜之　あ、何から何まで、（ト手を合せるを木の頭、）有難うござりまする、
ト花道より舞臺を拜む、渚早く行けといふこなし、此模樣浪の音早き合方にてよろしく、
ひやうし　幕。
幕引き附けると、喜之助金を戴き懷中する、是れにて又盆踊りの鳴物になり、喜之助氣を替へて逸散に花道へはひる、留めの木にてシヤギリ。

二幕目

雲津宿兜屋の場
同　高札場の場
朝熊裏古寺の場

〔役名――百姓柴田杣右衞門、兜屋の亭主郷兵衞、代官星合左文治、古手屋見倒し十兵衞、盜賊今五右衞門、同手下堅田の小雀、同足柄金藏、同三上の百助。同伊吹山丸、伊勢正の若い者太七、同佐助、捕手六人。杣右衞門娘お淺、伊勢參りお村實ハすばしりお熊、同お澤實は木鼠お吉、伊勢參りお菊實は雲切お六、同お光實はおさらばお傳、兜屋下女おだい、同お玉等。〕

（農家玄關前の場）――本舞臺上手へ寄せて一間角丸太の柱の門、左右玉椿の生垣、後上家藏、門の間茅葺の大百姓玄關、上手に松の立木・日覆より同じく釣枝、總て雲津宿大百姓入口の體、爰におせん、おとき在所女のこしらへにて、二人莚の上へ籾を置き、くるりにて打つて居る、側に百姓○△鋤鍬を持ち煙草をのみ居る、臼挽唄にて幕明く。

○　これおせんどん、もういゝ加減にしまつて、夜食の支度をしねえのか。

△　彼岸からこつちへ滅法に日が詰つた、七つを打つと直ぐ日が暮れる。

せん　それだといつて旦那から、言ひ附かつたゞけ仕事をしないと、又叱られるわいな。

○　何處の主人もやかましいが、こつちの主人位やかましい人はねえ、其上大の吝嗇で魚ッ子一疋喰

△ はさねえが、一文惜しみの百損と、昨夜は酷い目に逢つたな。さうよ、喰ふものも喰はずに溜めた千兩といふ金を、今五右衛門にすつかり取られた、それも強欲非道だからだ。

せん　惡く言つては濟まぬけれど、暗いうちから起されて御飯の支度をしてしまふと、稻をこけの籾をすれのと、煙草を呑む間もござんせぬわいな。

とき　せめて夜でも遊ばれるといゝが、お夜食の跡をしまふと、肩を叩けの足を擦れのと、どんな晩でも九つより、早く寐たことがござんせぬから、朝睡くッてならぬわいな。

○　其話しを聞くに附けても、同じ女に生れながらも、杣右衛門とこのお淺ッ子を可愛がることは一方ならず、何でも始終は女房にせうと、吝嗇が餘程金を貸し込んだが、娘をくれぬ所から此頃ぢやあ酷い催促だが、ぜんたい一家の事だから、貢いでやつてもよいのだに。

せん　ほんに杣右衛門さんの親子の衆は、よいお人でござんすが、

とき　なぜあんなに、ならしやんしたぞいな。

○　去年の夏、内職に澁團扇を張つて賣つたが、貧乏神に取りつかれたか、娘に旦那を取つたらば左團扇になられうに。

△　所が昔名主をした、家柄だとか何とかいつて、とんと話しにならねえ人だ。

せん　かけ構ひのない他人でさへ、可愛さうでならぬのに。

とき　現在一家でありながら、酷いことをするといふは。

○　そこが名代の三莊太夫だ。

△　おゝ噂をすれば影とやら、あれ〳〵向うからござつたぜ。

○　歸つて來ては大變だ。

せん　どれ、叱られぬうち片附けて、

とき　夜食の支度を、

兩人　しませうわいな。

ト籾を入れし莚を持ち女兩人門の内へはひる、右の合方ばた〳〵になり、花道より郷兵衛羽織着流し、くり下げ、下駄をはき、宿屋の亭主のこしらへにて、杣右衛門更けたる胡麻鹽鬘さんすゐなる百姓のこしらへ、郷兵衛杣右衛門の胸倉を取り引摺りながら出來り花道にて、

杣右　これ〳〵郷兵衛どの、どうぞ許して下されい、年寄つた者をそのやうに手荒うはせぬものぢや、手籠めにせずとも話しの分ることぢやわいの。

郷兵　いゝや外の奴なら知らねえこと、手籠めにでもしねえ日には、圖太いうぬが、話し合で分るものか。

杣右　まあ〳〵、兎も角も此手を放して下され。

郷兵　いけツぷてえ親仁め、此手を放したら逃げ出して行く料簡だらう、そんな甘口で行く郷兵衛ではないぞ。さあうしやあがれ〳〵。

杣右　さあ〳〵、行くなら行くほどに、此手を放して下され、外聞が惡うござるわいの。

郷兵　えゝ、外聞も當分もいるものか、さあ來やあがれ〳〵。

トやはり杣右衛門を引摺りながら本舞臺へ來る、百姓兩人これを見て、

○　もし〳〵旦那、こりやあ何うしたのでございます。

△　さうして此人は、筭所村の杣右衛門さんぢやァござりませぬか。

郷兵　此杣右衛門親仁が太え奴だによつて、家へ行つてこきおろさうと思つて行つた所、丁度いゝ所で出ツ會したによつて、爰までしよ引いて來たのだ。

○　さうしてまあ、いつたいどういふ譯でござります。

郷兵　どうの斯うのといつて、貴樣達も知つて居るだらうが、是れまで幾度となく無心に來るから、一

兩はいゝ二兩はいゝと貸してやつた其金を、一文半文も返さずに、のめ〳〵として居るけれど、一家内ゆゑ待つて居たが、昨夜千兩取られたる其埋草に、一朱でも取らにやあならねえ、きり〳〵と持つて居る金を出しやあがれ。（トむごくこづく。）

△　もし〳〵旦那、そりやァあなたのお腹立ちは御尤でございますが、此杣右衞門さんは逆さにして振つても、三文だつて出來る人ぢやあござりませんぜ。

鄕兵　これさ、所がどういふ事か知らねえが、一兩ばかり金を持つて居る所を見たゆゑ、猶々料簡がならねえのだ。

○　何だえ、金を持つて居りますとえ。

△　そんなら金を持つて居ながら、

○　やつぱり旦那に返さねえのかえ。

鄕兵　それだによつて、しよびいて來たのだ、さあ〳〵きり〳〵と出しやあがれ。

○　これさ〳〵、ねえ袖は振れねえが、持つて居る金なら出し惜しみをしねえで、旦那へ返してしまふがいゝぢやあねえか。

杣右　そりやもう鄕兵衞どのには、借用の金子があるに違ひはないゆゑ、なか〳〵以て不義理にする心

はさら〳〵なけれど、お前も知つて居やしやるであらうが、家の婆ァめが長の煩ひ、其上わしも此通り段々と寄る年ゆゑ、農業にも出ることならず、田の草取るにも植附にも、まだ年若な娘の手一つ、親子三人稼いでさへ廻り兼ねる瘦世帯、たゞさへ煙りも立兼ねる貧乏暮しに今の成行き、なか〳〵粗略にする氣はない、是れがあかの他人ではなし、繋がる縁の親類中、それも身内でずるけるの何のといふ譯ではなし、今日の所は郷兵衛どの、どうぞ許して下されいなう。

郷兵 なに親類だ、これ杣右衛門どん、よく聞かつせえ、女房が縁で身内であつたが、其女房が死んでしまひ、今ぢやァあかの他人だわ、それぢやあ手前は親類の、ものなら倒して踏む氣だな。

杣右 どうして〳〵、なか〳〵さういふ譯ではなけれど、今いふ通り家の貧窮。

郷兵 えゝ其よまひ言、聞きたくない。おれも親類だと思ふから女房が死んで一人身ゆゑ、そなたの娘を貰はうと一兩二兩と無心のたびに、どうで未來でと思ひながら、鰻登りにつぎ込んだが、どうでも金が出來ねえなら娘お淺をわしに下せえ、さうせえすりや親子三人左り團扇で樂々と、暮しが出來るといふものだ。

杣右 いやも、其御親切は忝うござるが、たつた一人の娘ゆゑ、どうもおれをお前の所へ。

郷兵 くれられざあ仕方がねえ、こつちも男だ言ひがゝり、根こそげ貸しを取らにやあならねえ。

杣右　それぢやといふて今といつては。

鄕兵　なに、ねえ事があるものか。

ト杣右衞門の懷へ手を入れる、杣右衞門やるまいと爭ふ、此時懷より小さな巾着落ちる、杣右衞門それはと取りに掛るを鄕兵衞引つたくり、

これ見やあがれ、是れほど持つて居やあがつて、有るのねえのと喰隱し、どこまで太えか數が知れねえ。

○　いや人は見掛けに寄らねえものだ、心底ねえと思つたが、

△　持つて居ながら哀れッぽい、話しで借りをごまかさうとは。

○　油斷のならねえ世の中だなう。（ト此內鄕兵衞巾着より金を出して、）

鄕兵　それ見ろ、しかも額で四つあるわ、年に不足もねえくせに、慾に限りはねえものだ。

ト肩にて笑ふ、杣右衞門無念なる思入にて、しを〳〵と前へ出て、

杣右　これ鄕兵衞どの、二人の衆許して下され、堪忍して下され。持つて居た其金を橫着で出さぬといふのではない、わしが身の潔白ぢや、どうぞ譯を聞いて下され。（ト合方になり、）こなたもかね〴〵知つての通り、百姓でこそあれ柴田の家、算所村では古い家筋、先祖から十三代田地田畑持ち傳

へ、今わしが代になり榮燿はせねど運拙く、不仕合せのみ打續き、其持ち傳へた田地をば其口に迫つて皆質入、此間より貸方から利息を入れねば月切れゆゑ、流してしまふと度々の催促、殊にはわしは聟の事、先祖代々持ち傳へた田地をわしが代になり、人手に渡しては御位牌樣へどうも濟まぬ、どうか仕樣はない事かと、思案は胸に餘れども、貧に迫つた金の才覺、それを氣病みに婆めが病氣、せめて心の休まるやうと、なか〳〵足りねど今の一兩、やう〳〵の事でこしらへて、女房娘に見せたらば、少しは安堵しをらうかと切ない思ひで才覺した、其金子をばお前さまに、取られてしまへば田畑も、人手に渡さにやなりませぬ、さうなる時には女房めも直に取詰め死にまする、其金子を利息にやれば、一人ならず二人三人、命の助かる今日の切羽、どうぞ爰をば聞き分けて助けて下され郷兵衛どの、慈悲ぢや情ぢや、頼みますわいなう。

ト思入あつていふ、郷兵衛素知らぬ顔にて煙草をのみながら、

郷兵　いやだね。出來ねえね。よく物を積つて見るがいゝ、こつちこそいゝ加減に助けて貰ひてえのだ、一兩といふ此金が又いつ出來るか知れるものか、おれが目に掛つた金、たゞでも取るのぢやあるめえし、貸した金の内取りに情を以て取つて遣るのだ、ぐづ〳〵言ふには及ばねえわ。

柚右　それではお前あんまりむごい、情ないといふものぢや。其金がない時には、今も言うた先祖の田

地を人手に渡さにやなりませぬ、お前の方では此金がないとて事は缺かぬ身代、わしが方ではない時は人の命に拘はること、どうぞ今日は見脱して其一兩を返して下され。これ二人の衆も共々に口を添へて下され、拜みまする〳〵わいなう。

ト此内百姓兩人も空を嘯いて居る、郷兵衞思入あつて、

郷兵　面白くもねえ、今ぢやあ他人の貴樣の家だ、假令死なうが生きようが、おれが方で構つたことかえ。

杣右　さうでもあらうが今日の所を。

郷兵　知らねえよ。

杣右　くどいやうだが手を下げます。

郷兵　えゝ喧しいわえ、いつまで言つてもおんなじ事だ、ならねえと言つたら金輪際、鐚半文もならねえのだ。

杣右　そんならどうでも。

郷兵　知れたことだ。（トきつといふ、杣右衞門はツと當惑の思入、郷兵衞百姓兩人に目くばせして、）宿屋は暮方が肝腎だ、客生業に緣起がわるいわ、早くそつちへ出してしまへ。（ト兩人呑込んで、）

○ これさ〳〵、もう親方があゝ言出しちやあ仕方がねえ、もうあきらめて歸んなせえ。
△ 幾ら言つても元々が、借りた金ぢやあ論はねえ、見世先きの邪魔になるから、ぐづ〳〵せずと歸んなせえ〳〵。(ト杣右衞門の手を持つて引立てる。)
杣右 それではあんまり酷いといふもの、是れほどまでに譯を言つても。
○ えゝ、譯も絲瓜もいるものか。
△ きり〳〵そつちへ行きやあがれ。
ト杣右衞門をひどく突倒す、杣右衞門口惜しき思入にて起上り、
杣右 どうひどい目に逢はうとまゝ、其金歸して下されねば、爰の家は歸りませぬ〳〵。
ト涙ながらに言ふ。
鄕兵 うぬ、まだ强情をぬかしやあがるか。(ト立上る、百姓兩人隔てる。)
杣右 もう聞いてくれにやあそれまでぢや、どうで生甲斐のないわしが體、打つとも叩くともして下され。
鄕兵 ぶたねえで何うするものだ、貸した金をおれが取るのだ、强情ぬかしやあ打殺すぞ。
杣右 さあ殺して下され〳〵。
兩人 これさ杣右衞門どの、何でそんな事を言はつしやるのだ。

郷兵　え丶、何で貴様達はかばふのだ、打捨つて置け〳〵。

ト立腹のこなしにて軒に掛けたる講中札を取つて打つて掛かる。これを兩人止める、此立廻りのうち花道より十兵衛着流し、尻端折り風呂敷を肩に掛け足早に出來り、直に舞臺へ來て杣右衛門を見て、

十兵　お丶杣右衛門どの、爰にござつたか、方々尋ねて居た、さあちやつとわしと一緒に來て下され、來て下され。（トせり立て杣右衛門の手を持つて引立てる、杣右衛門驚いて、）

杣右　お丶こなたは古手の十兵衛どの、何事でござりまする。

十兵　何事どころではない、今わたしが掛り合になる所だ、お前が行きさへすれば事が分る、さあ〳〵來て下され〳〵。

杣右　まあ〳〵待つて下され、來いといふなら行きもいたしますが、何事やら譯が知れませぬ、まあ落着いて聞かして下され。

十兵　どうして落着いて居られるものか。さう言はつしやれば言ひますが、さつきお前の手から一兩で買つた紬縞の反物は、ありやあ何處から持つてござつた。

杣右　え丶。（トびつくり思入、）

十兵　ありや家の代物ではあるまいがの、あの品に附いて話しがあるのだ、わしと一緒に隣村までござ

らつしやい。
杣右　いえ、あの品ならばお氣遣ひはござりませぬ、只今ちつと火急な事で。
十兵　これさ〳〵、そつちに火急な事もあらうが、こつちも大急ぎのお調べものだ、猶豫しては居られぬ、さあ〳〵ござらつしやい〳〵。（ト杣右衛門を引立てる。）
杣右　はい〳〵、只今參りまする。
○　何だかをかしな鹽梅だぜ。
△　又掛り合はけんのんだ。
兩人　さあ〳〵早く行きなせえ。
十兵　えゝ、ぐづ〳〵しては居られぬ、早く〳〵。
杣右　はい〳〵、直に參ります。（ト杣右衛門ひよろ〳〵と立上る。）
兩人　えゝ、きり〳〵と行かねえのか。（ト杣右衛門を突き飛ばす、杣右衛門ひよろ〳〵として、）
杣右　えゝ、今行きますわえ。うぬ、覺えて居ろよ。
十兵　さあ〳〵來なせえ〳〵。
ト合方になり十兵衛杣右衛門の手を引いて足早に下手へはひる、皆々跡を見送り、

○ いや、強情な親仁ぢやねえか。
△ 然しあいつも、餘つほど錢金にやあ、憎まれて居ると見える。
○ もし旦那、あの古着屋の樣子ぢやあ、今の金も怪しうございますぜ。
郷兵 さうよ、どうでひつてんな杢右衞門だから、たゞは算段の出來る氣遣えがねえ、然し何の金でも取らねえは損だ、どうで跡は香奠よ。
○ 左樣なら、もう取れッこはございませぬ。
郷兵 然し一兩ばかりの金を取るので、滅法に隙を潰した、損料物の帳合が仕掛けてあつた、もう一慾張り慾張らにやあならねえ。（ト立上る。）
○ お前さんも隨分あくどい方で、
兩人 ございますな。
郷兵 此くれえにしにやあ、今の世界が渡れるものか。
○ ほんに、違えござりやせん。
郷兵 早く稻を片附けてしまへ。
兩人 はい〳〵、畏りました。

ト臼挽唄になり、三人門の内へはひる。やはり大阪放れての唄になり、花道よりお六好みの鬘、手拭を冠り、中形の浴衣の上ッ張り、草履にて、紅絹紐の附いた菅笠を持ち出來る、跡よりお熊、お吉、お傳、各好みの娘鬘矢張り浴衣の上ッ張り、紅緒の草履菅笠を持ち、皆々旅裝好みのこしらへにて出來り、花道よき所へ留り。

お六　あのまあ喜助や太助は、まだ影も見えないが、何をして居るであらうぞいなあ。

お熊　此跡の立場で、草鞋を履き替へて居ましたから、もう間もなく來るであらうわいなあ。

お吉　大方太吉がいつもの呑み好きゆゑ、喜助も附合で呑んでゐるかも知れぬわいなあ。

お傳　きつとさうかも知れぬわいなあ、それにしても今に日暮れ、早う追附いて來ればよいがなあ。

お六　こりや斯うしようわいな、今夜の泊りは此宿の兜屋とやらぢやによつて、此先きへ行て尋ねて見て、そこで待合はさうぢやないかいなう。

お熊　ほんに、それがよいわいなあ。

お吉　それならば、ちつとも早く。

お傳　兜屋とやらいふ旅籠屋へ。

お六　何にしても其宿屋を、向うあたりで聞いて見ようわいなあ。

お熊　それがいつち、
四人　よいわいなあ。
ト跡より小雀、金藏宿引のこしらへにて出來り、窺ひ居て囁き、舞臺へ來て、
小雀　もし〱、あなた方はお泊りぢやあござりませんか。
金藏　どうか手前方へ、お泊りなされて下さりませ。
お六　はい、わたし共は定宿がござんすわいな。
小雀　左樣でもござりませうが、此間普請もいたし、よいお座敷が明いて居ります。
金藏　お夜具も別に綺麗なのをお出し申してあげますから、どうぞお泊りなされて下さりませ。
お六　其やうに言はしやんしても、定宿があつて行くのぢやから、泊る譯にはゆかぬわいな。
小雀　さうして御定宿は、どちらでござります。
お六　供の者が知つて居るが、慥兜屋とかいふ家でござんす、なあ皆さん。
三人　あい、さうぢやわいな。
小隻　何とおつしやります、兜屋でござりますか、左樣なら私共でござりまする。
金藏　雲津の宿で一といつて二のない宿屋、手前の親方が兜屋鐵右衛門でござりまする。

お六　さうしてお前方はえ。
小雀　手代どもでござりまする。お客さまのお迎ひに、幾人となく宿々へお待受けに出て居ります。
金藏　よい所でお目に掛りました。
お六　ほんに、よい所で逢ひましたな、そんなら直に行かうではござんせぬか。
三人　そんならお賴み申しますわいな。
金藏　さあ〳〵、お笠をこちらへ遣はされませ。（ト皆々菅笠を渡す。）
小雀　どちらからお出でござりましたか、嘸お草臥でござりませう。お早く私共へいらつしやりまして、一番湯へおはひりなされ、お療治でもなされませ。
金藏　さうしてあなた方は、お女中さまばかりでござりまするか。
お六　供の男がござりますわいな。
お熊　もし姉さん、もう太吉や喜助が、參りさうなものでござんすなあ。
お吉　泊りが極つて居ますから、また呑んで居ませうわいな。
お傳　呑んで居ればよいけれど、道でも違ひはしませぬかな。
お六　一筋道ゆゑ間違ひないが、少し待合せて行かうわいな。

小雀　いえ、お待ちなさるには及びませぬ、門口へあなた方の菅笠を出して置きますれば、それが目印になりますから、きつとお出でなさるに違ひございませぬ。

金藏　あなた方はお江戸でございますか。

お六　はい、わたし共は江戸者でございますが、久しい願ひでやう〳〵と、お伊勢さまから京大阪へ參りますも、あちらの芝居が見物したさに、女子連れで參りましてございまする。

小雀　左樣でございますか、それはよいお樂みでございまする、當年はお伊勢さまへ女中衆の御參詣が大層ございまして、賑かなことでございまする。

金藏　昨日なども名古屋講のお女中連が通りましたが、またお江戸のお方は格別なことでございまする。

小雀　そりやあ知れたことよ、お膝許の衆と一つになるものか。失禮な事でございますが、どなたさまも〳〵、お美しいことでございまする。

金藏　いやもう、此やうなお方さまのお宿をいたすは、旅籠屋冥利でございまする。

お六　もし〳〵、其やうにおつしやつては、却つて痛み入りますわいな。

小雀　何にいたせ、もう日暮れでございますから、お早くお泊り下さりませ。

金藏　道者衆の這入らぬうち、お湯へお召しなされませ。

お熊　ほんに、もう日暮れに近うござんすから。
お吉　太吉や喜助に構はずに、
お傳　先きへ泊らうぢやござんせぬか。
小雀　左樣なら、御案内いたしませう。
お六　それでは御厄介になりますわいな。
金藏　御厄介どころか、こんな鳥が。
小雀　あこれ。（ト思入あつて、）さあ、お出でなされませ。
ト臼挽唄にて小雀先きに皆々上手へはひる。内より以前の鄕兵衞百姓二人出來り、跡を見送り思入あつて、
鄕兵　はて、今の二人の宿引は、昨夜來た盜人によく顏が似て居るが、此頃聞けば方々で女連れの旅人を、欺して連れて行つて路用を取り、宿場へ賣るといふことだが、あの美しい江戸道者、蜘の巢へ掛りやあしねえか。
○　慥に盜人に違ひない。兜屋の若い者は大概知つて居りますが。
△　つひに見慣れぬ今の男、跡を附けて見ませうか。

郷兵　どこへ行くか附けて見やれ、おれは是れから代官所へ、お訴へ申して來よう。

兩人　そんなら旦那。

郷兵　ちつとも早く。

兩人　合點だ。（ト尻端折りをする。）

郷兵　どれ、代官所へ訴へようか。（トきつと思入、時の鐘の送りにて此道具廻る。）

（高札場の場）――本舞臺向う一面在體の遠見、眞中に莫大なる榎の大樹、日覆より同じく釣枝、上手に畫心に土橋、此傍に御判行、下手藪疊。此前に「諸勸化無用、村役人」と記したる榜示杭、總て村境高札場の體、爰に役人半纏ぶつさき大小にて、床几に掛り、此後へ黑四天の捕手四人、下手に伊勢正の手代、吳服屋にて控へ居る、此見得よろしく、禪の勤めにて道具留る。と直ばた／＼になり、下手より、以前の十兵衛杣右衛門を引摺りながら出來り、直に下手へ杣右衛門を引きすゑる。役人是れを見て、

役人　こりや／＼古手屋十兵衛、賣主を召連れたか。

十兵　へい／＼、則ちこれなる人が、賣主でござりまする。（ト此内杣右衛門うづくまる。）

杣右　へい、私めは算所村に年久しく住ひまして、百姓杣右衞門と申しまする。

役人　なに、杣右衞門と申すか。

杣右　へい、左樣にござりまする。

役人　こりや、伊勢正の手代の者、其反物をそれへ出せ。

手代　畏りましてござりまする。（ト反物を杣右衞門の前へ出す。）

役人　こりや杣右衞門、其反物に覺えがあらうな。（ト杣右衞門これを見て。）

杣右　へい。

役人　その反物を十兵衞方へ、賣渡したか。

杣右　え。（トこなしあつて、）へい、賣りましてござりまする。

役人　相違ないな。

杣右　相違はござりませぬ。

役人　こりや杣右衞門、して此品は何れより求めた品ぢや、但しは到來でもいたした品か。

杣右　へい、此反物は。（ト言ひ兼ねる思入。）

役人　いかゞいたした、有體に申せ、虚言を申すと許さぬぞ、さ、何うぢや。

杣右　へい、それは手織りの品でござりまする。
役人　然らば其方は織るまい、家内の者でも織つたる品か。
杣右　御意にござりまする。
十兵　これ〳〵杣右衞門どの、お前の家の御内儀は大煩ひで、床に就いて居るではないか。
杣右　なに、女房ではござりませぬ、娘が織りましたのでござりまする。
手代　おい〳〵杣右衞門どの、いゝ加減な嘘を言はつしやい、此反物はわしが店の代物でござるわいの、しかも今朝荷口を分けた代物に相違ないのだ、大概な事を言はつしやるな。
杣右　いえ〳〵、手織りに違ひはござりませぬ。
手代　幾らお前がさう言つても、さつき向う屋敷の中間衆が見世先きへねだりに來て、遣る遣らないの間違ひで、ごた附いて居た其時に、投り散らした見世の代物、あとで改め見た所丁度一反不足ゆゑ。
十兵　これさ〳〵杣右衞門どの、盜んだのなら盜んだといつて、早く片を附けなせえ、慥な品と思つたゆゑ、買つたわたしまで掛り合だ、顏に似合はぬふてぐ〳〵しい人だ。
杣右　いえ〳〵どういたしまして、盜んだなどゝいふ事は、毛頭覺えはござりませぬ、どうぞお許し下

さりませ。

手代　これさ〳〵お前が幾ら言拔けても、こつちの品といふ印は、この反物に慥に印が附いて居るわ、手織木綿とごまかしても、拭き差しならぬ證據があるわ。

役人　なに、其品に證據があると申すか。

手代　へい、此反物の間には、私の見世の隱し符牒が附いて居りまする。

杣右　なに、符牒が附いて居りますとか。（ト立上らうとするを捕手聲を掛け、）

捕手　下に居らう。（ト是れにて杣右衛門はツと下に居る。）

役人　それ、改めて見やれ。

手代　はツ。（ト兩人にて反物の間より符牒を出し、）則ち是れにござりまする、證據は札に伊勢正と申します印が押してござりまする。さあどうだ、是れでも手織りと言ひ拔けるか。

十兵　いけ太え親仁ぢやあねえか。（ト杣右衛門の目先へ反物を突附けて、）さあ、是れでも娘の手織木綿か。

杣右　さあ、それは。

手代　盜んだ品に違ひあるまい。

杣右　さあ。

三人　さあ〳〵。

ト杣右衞門ム、と詰ろ、十兵衞立上り、杣右衞門の胸倉を取つて、

十兵　これ貴樣は〳〵、飛んだことを內職にするな、女房が病氣で困る、喰ふ事が出來ねえと、哀れな事を言ひ込んで手織縞だと一杯喰はせ、一兩に買つてくれと歎いて來たゆゑ仕方なく、高い物だが人助けと買つて置いた此代物、斯ういふ譯と聞いた日にやあ引合が眞平だ。さあ、渡した金を返しなせえ。さあ、耳を揃へて受取らうかえ。

杣右　はい〳〵御尤でござりますが、其一兩の大事の金子も、たつた今雲津の兜屋で、借りの抵當に取られましてござりまする。

十兵　なに、其金を取られてしまつた。いや何處まで太えか數が知れねえ、そんな事を言つたとて取らずにおれが置くものか。（ト杣右衞門に立ち掛ろを役人留めて、）

役人　こりや、十兵衞待て。

十兵　へい。（ト餘儀なく控へろ。）

役人　こりや杣右衞門、いよ〳〵其方は、盜んだに相違ないか。

杣右　へい、斯く證據の出ました上は、いたし方がござりませぬ、餘儀ないことで盜みましてござりま

する。

役人　こりや承はれ、假令僅かな品なりとも盗みいたせば繩目に掛り、禁獄させねば相成らぬぞ、心得違ひを申すな。こりや伊勢正の若い者。

手代　へい〳〵

役人　此品は盗まれたのではあるまい、貸した品であらうな。

手代　いえ〳〵、なか〳〵貸しますす氣遣ひはござりませぬ、盗まれましたに相違ござりませぬ。

役人　いよ〳〵左樣か。

手代　毛頭相違はござりませぬ。

役人　あゝ情を知らぬ、いや、なした業なら是非に及ばぬ。杣右衞門、いよ〳〵盗んだと申すか。

杣右　へい、左樣にござりまする。

十兵　いやはや、渡した金まで取られたとは、是れぢやあ埋るせゐがない、當人を牢へでも入れねえ日にやあ、腹の癒る所がない、飛んだ厄落しだ。

役人　あゝ、人品といひ彼れが振舞、盗みいたす人體とも相見えぬが、よく〳〵貧に、いや假令貧に迫ればとて、盗賊いたせば上の大法、それ家來ども、杣右衞門に繩打て。

捕手　はツ。

ト捕手四人ばら〳〵と來り杣右衞門を引立てる。此時ばた〳〵になり、花道よりお淺、藁を掛けたる島田髷・石持の振袖在所娘のこしらへ、藁草履にて足早に出來り、花道にて舞臺を見てびつくり思入。

お淺　あゝ申し、暫くお待ち下さりませ、暫く〳〵〳〵。（ト本舞臺へ駈けて來て、）お待ちなされて下されませいなあ。（ト杣右衞門に取附き歎く、捕手お淺を引立て、）

捕手　やあ、何奴なれば尾籠な奴、下れ〳〵、下り居らう。（トきつといふ。）

お淺　はい〳〵、私はこれなる杣右衞門の娘、淺と申すものでござりまする。

杣右　おゝ娘か、あゝ面目ない〳〵、面目ないわえ。（ト泣き伏す、お淺涙ながら、）

お淺　これなあ、父さん、こりやまあどうなされたのでござります。それにまあ此繩目は、何のお咎めで縛られしやんした、譯を聞かして下さりませいなあ。（ト泣伏す。）

杣右　もう譯というても外にはない、盗みしたゆゑ縛られたのぢや。

お淺　えゝゝゝ、そりやまあ何で盗みをば。（ト合方になり、）

杣右　こりや娘面目ない事ながら、四百四病の病より辛い貧苦のあだてに迫り、伊勢屋のお見世の取込みに外へ投げ出すあの反物、人の見ぬのが天魔の魅入り、そつと盗んで十兵衞どのに、賣代なし

た其罰で、報いは早い此繩目。あゝ天道さまは、恐ろしいものぢやわい。

お淺　いかに貧に迫ればとて、お前の氣質に似氣もない何の因果で其やうな、さもしい氣にはならしやんしたぞいなあ。

杣右　さゝゝゝ其恨みは尤ぢや、惡いと知りつゝ盗みをしたは、おぬしも知つて居る通り質に入れたる先祖の田地、疾うから流れになつて居るゆゑ、利息を入れねば十三代持ち傳へたる田畑を人手に渡さにやならぬゆゑ、どうしたものと途方に暮れ、人に無心を言はうにも、生れ附いたる腑甲斐ないわしが事ゆゑ知る人の、門へ行つても立戻り、一つ所を幾度か行きつ戻りつするうちに、伊勢屋のお見世に喧嘩があつて、投げ出す反物、道ならぬとは知りながら、そつと盗んで十兵衛どのに無理に金子と換へて貰ひ、其金持つて女房やそなたをも悦ばさうと急いで歸る途中にて、あの强慾な兜屋の鄕兵衛どのに出ッ會し、これまで貸した貸金のかたに、よこせと無理に手籠めに逢ひ、幾ら詫びても聞き入れず、たうとう金は取られてしまひ、仕方なく〳〵思案のうち十兵衛どのが其場へ來て、さあ來い行きやれと引立てられ、樣子知らねば同道して、爰まで來れば反物を盗んだ事が顯はれて、繩目に逢ふも此身の罪科、おれが體は是非もないが、此事を女房めが聞きをつたらばあの大病、直にころりといくであらう。必ず〳〵此事は、家へ行んでも母さまに

いふ事はならぬぞよ。

お淺　あい／＼。（ト泣伏す。）

杣右　母が死んだらそち一人、路頭に迷ふことであらう、親ゆゑそちへ苦勞をかける、堪忍せい／＼よ。

お淺　あゝもし、其やうな悲しい事をいうて下さんすな、わしは必ず母さんに言ひはせぬが、若し人さんからでも聞くならば、直に母さんは死なしやんす。（ト役人に向ひ、）はい／＼、お役人樣へ申し上げます、父さんが盜みました其品が返りましたら、どうぞ牢屋へ行かぬやうにお助けなされて下さりませ、若し御堪忍がなりませずば、父さんの代りに私をお連れなされて下さりませ、若しお慈悲で、お情でござりますわいなあ。（ト涙ながらにいふ、役人もほろりと思入。）

杣右　あゝこれ／＼、娘何を言ふぞえ、御上の御法ぢや其やうな事がなるものぞ、もう／＼あきらめて歸つてくれ、おれが頼みぢや、早う行て母さまの看病してくれ、早う行きや／＼。

お淺　それぢやというて、お前が牢屋へ行くものを、どうまあ見捨てゝ歸られませう、わたしやお前と一緒に行きたい、歸る事はいやでござんす、厭でござんすわいなあ。

役人　あゝ不便とは思へども、天下の大法一度は、入牢させねば相成らぬ。こりや、淺とやら。

お淺　はい／＼。

役人　あゝそちは孝行な者ぢや、假令入牢いたせばとて、言譯さへ相立てば直に出牢いたさせるわ。慈悲は上ぢやぞ、必ず心を落さぬがよいぞや。

お淺　はい／＼、有難うござりまする。（ト此内十兵衛反物を手に取つて恨めしさうに見て、）

十兵　あゝ、そつちは入牢で悲しからうが、こつちは一兩玉紬、縞は一反にして安し、（ト反物の地合を見て、）いゝ地合だ、生はかたしだなあ。（ト思入。）

捕手　默り居らう。

十兵　へい。（ト下に居る。）

お淺　それもやがて私が、あなたに御損は掛けませぬ。（ト杣右衛門お淺を見て、）

杣右　あゝ事によつたら、是れが別れに。

お淺　え。（ト側へ寄る。杣右衛門顏を背け、）

杣右　達者で居ろよ。

お淺　はあゝ。（ト杣右衛門へ縋る、役人思入あつて、）

役人　それ、囚人を引立てい。

捕手　はあゝ、立たう。

ト杣右衛門の繩を取つて引立てる。杣右衛門はよろ〳〵となるを、お淺もしと縋るを道具替りの知らせ、役人顏を背ける。お淺ハアと泣伏す、此仕組よろしく、本釣鐘にて道具廻る。

(朝熊裏道古寺の場)――本舞臺三間の間二重本緣附、向う一面の唐戸、彫物の柱、高欄附き、上下白壁瓦燈口、寺めきたる塀、日覆より紅葉の釣枝、總て此道具雨染みありて古寺の模樣、爰に賊の頭百日鬘黑の褞袍丸ぐけ一本ざし、五右衛門のこしらへ太き煙管を持ち煙草を喫み居る、此見得山門せり上の鳴物にて道具留る。と賊の頭五右衛門の思入にて、

頭　絶景かな〳〵、春の眺めを千金と價を極めしは小さな譬、櫻にまさる夕紅葉、秋の眺は價萬兩、はて一入の眺めぢやなあ。(ト思入、下手より三上の百助、伊吹の山丸手下のこしらへにて出來り)

兩人　イヨ親玉――。(ト是れにて頭びつくりし)

頭　えゝ三上に伊吹、びつくりさした。

兩人　何でびつくりしなすつたのだ。

頭　それだといつて、親玉――などゝ褒められたことのねえ體、びつくりせずに居られるものか。

百助　褒める氣もなかつたが、大百日に黑褞袍で、高欄へもたれかゝり、

山丸　絶景かな〳〵の今のせりふ、芝居でする、實に五右衞門のやうであつた。
頭　今五右衞門といはれる所から、ずつと其氣で居るけれど、先づ五右衞門は昔から鼻が高いか眼が大きいか、變つた所がなければいかぬが、鼻は低し眼は小さし、ちと五右衞門には受取りにくい。
百助　その代り又頭にやあ、人並より背丈が高い。
山丸　是れで草鞋を履いた日には、仁王樣も跣足だ。
頭　たゞの仕事は出來ねえが、其かはり半鐘なら、踏臺入らずで盜めるわ。
兩人　違えねえ。
ト禪の勸めになり、花道より以前の小雀先きにお六、お熊、お吉、お傳、金藏附添ひ出來り、花道にて、
お六　これ兜屋の若い衆、まだ家へは餘程ござんすかいな。
小雀　いえもう、つい向うでござります。
お熊　つい向うと言はしやんすは、あの白い壁の所でござんすか。
お吉　どうやら夜目ゆゑ、しかとは見えぬが。
お傳　ありやお寺ではござんせぬか。
金藏　はい、左樣でござりまする。

四人　え。（ト氣味の惡き思入。）

金藏　則ち、あれが手前の宅でござりまする。（トせき立て四人は氣味の惡き思入にて舞臺へ來る。）これ、お客だよ。

小雀　早くおいでなさりませ。

百助
山丸
小雀
金藏　おい〳〵。（ト立ちかゝり、）
さあ〳〵こつちへ、おはひりなされませ。

ト四人は是非なく内へはひり、四邊を見て氣味の惡き思入、頭これを見て、

頭　おゝ、足柄堅田今歸つたか。

小雀　いゝ鳥が掛りましたから、早歸りに、

兩人　歸りました。

百助
山丸　豪氣な仕事をして來たね。

お六　もし若い衆、爰はお寺ぢやござんせぬか。

小雀　あい、左樣さ、爰はお寺さ。

お熊　え　そんなら兜屋といふ旅籠屋と、いうたは嘘でござんすかえ。

小雀　兜屋といふ旅籠屋は、雲津の宿で名代の家。

金藏　爰は朝熊の裏道で、無住になつた古寺だ。
お吉　さうして斯ういふ淋しいお寺へ、
お傳　何で連れてござんしたのぢや。
小雀　何で連れて來るものか、宿屋といつて連れて來たのは、
金藏　頭を始めおいら達が、自由に爲ようと思つてよ。
お六　えゝ、そんなら若しや、
四人　お前方は。
皆々　泥坊だ。
四人　えゝゝゝゝ。（トびつくりして顫へる。誂へ三絃入りの禪の勤めになる。）
頭　何も驚くことはねえ、隨龍山の樂書に濱の眞砂と書いた通り、種の盡きねえ盗人の中でも一人背高に、肩を比べるものもねえ街道筋へ網を張り、旅人を掛けるひらた蜘手も長けれど足も長い、今五右衛門とはおれが事だ。
小雀　頭に隨ふわれ〳〵は、其五右衛門の手下に形取り、先づ一番が堅田の小雀。
金藏　それに續いて足柄金藏。

百助　三上の百助。
山丸　伊吹の山丸。（ト四人は顫へ居て、）
お六　すりや街道で噂のあつた、
三人　今五右衛門さまでござりましたか。
小雀　何も手前達を連れて來たとて、生膽を取るといふ譯もなけりやあ、別に怖えことはねえ。
金藏　ぶる〳〵せずと落着いて、
皆々　居ねえ〳〵。
　　ト是れにて四人思入あつて上着を脱ぎ、お六懐から胴卷を出し、一つにしてそこへ出し、
お六　御覧の通りの娘子供、只おど〳〵と怖がりまして、物さへ碌に言ひ得ませぬ。
お熊　はい〳〵、路銀は元より衣類まで、殘らず揃へて上げますから、
お吉　何なりとよい物を、お取りなされて命をば、
お傳　どうぞお助け下さりませ、お慈悲お情で、
四人　ござりますわいな。（ト四人手を合せて拜む。）
頭　いや〳〵、そち達が路銀とて高の知れた端た金、十や二十に目はくれぬ、昨夜雲津の大百姓郷兵

衛が所へ行つて、纒めて千兩盜んで來た、欲しくばこつちでくれてやるわ。
お六　お金がいらぬと仰しやつては、上げる物に困りますわいな。
頭　金を取らぬ其代り、望みがあるから聞いてくりやれ。
お熊　如何なる事か存じませぬが、
お吉　其お望みと、
皆々　おつしやりますは。
頭　外でもねえ、そち達を、女房にするからさう思へ。
四人　えゝゝゝ。（ト四人びつくりする。）
頭　善は急げと直ぐ爰で、夫婦の固めをする氣だが、一人取つてもまだ跡に、三人殘つて居るこそ幸ひ、おぬし達も銘々に一人づゝ取るがいゝ。
小雀　えゝ、そんなら頭が取つた跡を、
金藏　銘々に下さるとか。
頭　むゝ、一人殘りは鬮にするがいゝ。
百助　いや、そいつは何より有難え。

山丸　さあ銘々に、引附けを爲ようぜ。

頭　さ、おぬしはおれが極めるとする。（ト お六へ思入。）

小雀　さ、銘々早いが勝だ。

手下皆々　むゝ、合點だ。

ト頭はお六を引立てろ、跡銘々手を取らうとする、其手を取つて押へ、ちよつと立廻つてお六は頭を當て、外三人は左右へ投げ退けきつと見得、三人顔を見合せにつたり思入、本釣鐘を打込み、蟲笛入りの合方になり、

三人　お前は、頭。

お六　これ。（ト思入。）

三人　して、こいつらは、

お六　片ッ端から括し上げねえ。

三人　あい、合點でござんす。

ト お熊お吉お傳誂への鬘がつくりとなり、立上つて小雀金藏を縛る、此内頭心附き四邊を見廻し、

頭　こいつはまるで夢のやうだ、どうして斯ういふ目に逢つたか。

小雀　たゞの女と思つたが、
金藏　こつちの、
三人　目鏡が、
お六　違つたのさ。
皆々　なに、違つたとは。
お六　わつちらは泥坊だよ。
皆々　えゝ。（トびつくりする。）
お六　昨夜雲津の郷兵衞から、千兩盗んだ噂を聞き、其金を取りに來たのだ。
頭　何だ泥坊に金を出せ、そんな逆さまな事があるものか。
小雀　何ぼ息子が後生を願ひ、
金藏　親父が女郎を買ふ世の中でも、
頭　盗んだ金が出されるものか。（ト是れにてお熊お吉お傳懷劍をぬき、鼻の先きへ突き附け、）
お熊　さあ、盗んだ金を盗まれるのだ。
お吉　びく〳〵せずと出してしまへ。

お傳　出さにやあ五右衞門、命がねえぞ。（ト三人懷劍を振上げる、皆々びつくりして、）

頭　あこれ〳〵早まるな〳〵、命あつての物種だ、盜んだ金を出しますから、必ず早まつた事して下さりますな。

小雀　さうして、いつたいお前方は、

金藏　何といふ泥坊だ。（ト誂への合方になり、）

お六　知らざあ言つて聞せようか、わつちも生れは甲州で萬澤在の鄕士の娘、親父は二本さしたれど三本足らぬ猿智慧の手の長いのが生れ附き、十六七の時分からおつな息子を引掛けて、色氣仕掛けで白い齒を見せりやあそこへ附込んで、金に轉んで手切を取り、惡い事にやあ染まる齒の七所鐵漿の黑人になつて働く旅稼ぎ、惡く太つた膽玉もそこは女は女だけ、男は口で殺したが命を取つた事はねえ、然し盜んだ雜物の重荷を背負つた罪科は、二重どころか三十を越えて始終は刀の錆、五十三次股にかけ此街道に隱れのねえ、雲霧のお六といふ、盜人仲間の頭分さ。

お熊　それに隨ふわたしらも、頭と賴む雲霧の晴れりやあ出來ねえ世渡りも、間夫な仕事でよき事と望んで先きへ出過ぎもの、假令劍の眞中でも光りものにやあ恐れぬ氣性、どうで體は野に出して、人の物なら我がものと手掴みで取る筒持せ、まゝ、まんが惡るけりや蒔き直し、二度が三光日月に憎ま

れもの丶口眞似も鷺を烏と夕立の、雨なら濡れて色仕掛け、大取せうより小取から肚胸のすわつた大場でも、人はふけて逃げるとも、もう引きかけたら何處までも花といふのも嗚呼がましいが、一番出たといつた日にやあ、後へは引かねえすばしりお熊、まだ駈出しの提灯持さ。

お吉　花のせりふの其後へ、酒といふのもこぢ附けだが、勝手違えな世渡りに間の惡いのも合點で、酒の力を雁金の其生際の富士見酒、登りかゝつた盜人も一しやうこれで暮らす氣で、見やう見眞似の利酒も、一斗が二斗と度重なり灘を越えたる四斗樽の、姉えの手下に鳴戸潟、御最屓といふ肩書でどうやら功を積み出して、惣一ばんと乘つ込んだお先き眞闇出過ぎもの、ほんの惡事は甘口なまだ出來星の駈出しだが、然し四人は水入らず兄弟分の爪印も仍て件の如しから、新規新酒の仲間入り、形は小さな三つ割だが肚胸の太つた一本生、木鼠お吉といふほんの頭の瞞ッかぢりさ。

お傳　改つちやあ恥しいが、是れまで仕にせたおてんばの後を接木の花の枝、色氣も薄い嘴からおつなせりふも人竝に、一番竝んで見ようといふうち、惡い事にやあ染み易く、まだにた山か板の間の稼ぎがわつちの病み附きで、二度が三度と呉服屋で萬引とまで仕上げてから、油斷のならねえ小娘が小袋坂の追ひ落し、谷七郷も足がつき先づ鎌倉を帆をかけて風を喰つたおさらばお傳、漸う頭の手に附いて、お先きを働く泥坊さ。

ト皆々よろしく名乘りのせりふある、是れを聞き賊の頭始め兩人もびつくりし、ぶる〳〵と顫へて居る、お六思入あつて、

お六　さあ斯う銘々に名乘つたからは、むごい料理をしてなりと、有金殘らず取らにやあならねえ、さあきり〳〵と爰へ出しねえ。

頭　そんならどうでもあの金を、あゝ飛んだものに掛り合つて、どえらい目に逢ふものだなあ。

お吉　さあ、命が惜しくば金を出せ。

お熊　ぐづ〳〵すると、此懷劒をお見舞ひ申すよ。

頭　あゝ申し、出します〳〵、お靜かにお賴み申します、出します〳〵。（ト言ひながらこなしあつて、土藏の內へはひり、金のはひつた箱を持ち出來り、お六の前へ置き、）はい〳〵、盜み溜めた千兩餘り、外には少しもござりませぬ、是れで御料簡を下さりませ。

ト金箱の蓋を明けて、惜しいものだといふ思入、お六中より金を出し、

お六　むゝ、よし〳〵、もう外に金はねえか。

お熊　あるならきり〳〵、持つて來ねえ。

頭　どういたしまして、是れ限りで少しも跡はござりませぬ、ならう事なら其內を、少しばかりお殘

しなされて下さりませ。
お吉　えゝ、未練な事を言ひなさんな。
お傳　たゞ取つた金ぢやあねえか。
お六　難儀な者も構はずに非道な盗みをするだけに、思ひの外餘計にあつた。（ト言ひながら二百兩づゝ五つに並べ、）おいお熊や、爰へ來な。
お熊　あい。（トお六の側へ來る。）
お六　お吉もお傳も、爰へ來ねえ。
お吉　あい、頭何ぞわたしら三人に、
お傳　改つて御用でも、
三人　あるのかえ。
お六　さうよ。お前方に用があるよ。（ト三人の前へ二百兩づゝ金を並べ、）お熊を始め三人とも、今改めて話しがある、おれがいふ事を背きやあしめえな。
三人　何で頭のいふ事を。
お六　さう言つてくれりやあ頼もしいが、凡そ盗みをする内にも、纏めて千兩盗むのは滅多にやあねえ

ものだ、まして今夜の此金は、氣の毒でもねえ盗んだ金、一人前に二百兩づゝ此金を分けてやるから、どうぞ爰から何處へでも、手前達ふけてくんな。

三人　そりや又何で、三人を。

お六　さあ是れまで働く此世渡り、惡い事とは知りながらどうも止める時節がなく、段々太る惡事の仕納め、然し是れまで惡事はしても、難儀な者を助けたお蔭で、今日が日まぢやあ生き延びたが、どうで始終は天の網、疊の上ぢやあ死なれねえ、惡いと知りつゝした惡事も、今日を限りにさつぱり止め、此金をてん〳〵に肌に附けて身を固め、どうぞ堅氣になつてくれ、大概盗みもこゝらが留りた。

お熊　成程、姉御のいふ通り、いつまでしても果てしがねえ。

お吉　これから頭の詞に隨ひ、惡い心を切り替へて、

お傳　また舊惡で取られるとも、まあそれまぢやあ堅氣になつて、

お熊　辛抱をして、

兩人　見ませうよ。

お六　よく言ふ事を聞いてくれた、さう喰ひ切りの早いのが、惡黨の性根だ、惡にも強けりや善にもと、

思ひ切りが肝腎だ、そんなら金を納めてくんねえ。（ト二百兩づゝを渡し、）五つに割つた一分は、五人女の其中で惡事に長けたお吉がお袋、山猫お三に遣りてえから、逢つた時に屆けてくりやれ。（トお吉に渡し、）跡へ殘つた百兩足らずは、こりやあ當座のおれが小遣ひ。

ト百兩を懷中する、三人も二百兩づゝ懷中して、

お熊　斯う魂を入替へたら、生れ替つた正直の、

お吉　頭に宿る神の庭、是れから伊勢へ乘込んで、

お傳　內宮外宮へ參詣して、誓ひを立てゝ別れ〳〵に、

お熊　京鎌倉へ引き別れ、

お吉　緣があつたら其時までは、

お傳　音信不通で身の納り、

お六　足を洗つて辛抱しねえよ。

お熊　もし頭、習ひ込んだ性根だから、

お吉　罰利生は、

三人　ある積りさ。

お六　さう聞く上はおれも安堵だ、それに附けてもこいつらは、義理も法も辨へず、非道な事をした報い、盗んだ金を盗まれるも、天の御罰だ、あきらめろ。

頭　どうして是れがあきらめられよう、命賭けで盗んだ金、たゞ取られてまじく／＼と、平氣な顔かなるものか、未練なやうだが上端でも。（ト頭手を出す、お熊其手を取つて、）

お熊　ふざけなさんな、慾張り野郎め。

頭　それぢやァあんまり。（ト頭立掛るを、お六引附け、）

お六　もう夜明けに間もねえ樣子、二三里踏出す其内にこいつの口から洩れちやあ面倒、身動きのならねえやう、こいつも縛つてそこらの柱へ。

お熊　成程、さうして置きやせう。

ト有合ふ繩にて頭を縛り、上手の柱へくゝり附ける、これを小雀金藏見て、

小雀　もし大百日の五右衛門も、此姿ぢやあふめないね。

お熊　おい木鼠、このまゝたゞも引込めめえ、何ぞこいつら三人に、いゝ置土産はあるめえか。

お吉　さうよ、板の間稼ぎに劣つたわいら、鍋墨でも塗つたらどうだ。

お傳　それよりやあいゝ事があるよ、幸ひ爰に硯箱があるから、五右衛門の格だ、みんなの面へ、落書

をして遣らうぢやあねえか。
お六　そいつあいゝ思ひ附きだ。こうお熊、お前はちつとは畫心があるから、此主人からゑどるがいゝ。
　トお熊筆をとつて、頭の顔を五右衛門のやうにゑどる。
お吉　跡の二人はこつちで遣らう。
　トお吉お傳やはり筆を執つて、小雀、金藏を思ひ〳〵にゑどり見て、
お六　面がいゝや、はゝゝゝ。（ト笑ふ、三人あつけに取られし思入にて顔見合せ、）
三人　何のざまだえ。（ト鬱ぐ。此時ドン〳〵の音する、お六きつと思入あつて、）
お六　や、あの太鼓は、人を集むる合圖の鳴もの。
お熊　もしやこつちの身の上に、
お吉　こりや、うつかりは出來ねえわえ。
頭　身動きならぬ此繩目。
三人　逃げるにも逃げられぬか。
お六　づきが廻つた上からは、喰ひ込まねえ其内に、
お熊　塀を乘り越え裏道傳ひ、

頭　どうぞわしらも共々に、

お吉　手前達は惡事の報い、縛られたまゝ引かれて行け。

頭　えゝ、忌々しい。

女三人　そんなら頭。

お六　これさ、おらア頭は肩抜けだよ。（トよろしく思入、）

女三人　さうだッけなう。

ト皆々身支度をなす、此見得よろしく、ドン／＼にて道具廻る。

（古寺裏手の場）――本舞臺上の方に九尺の太鼓堂、庇高欄とも崩れ古びたる體、これに續いて下の方一面やはり古びたる白壁、瓦燈口の塀、眞中に人の出はひる程の崩れ穴あり、上下切破りの藪疊、よろしく古寺裏手の體。禪の勤めにて道具留る。と花道より黑四天の捕手六人出來り、舞臺にて囁き合ひ、上下へ別れ忍ぶ。時の鐘誂への合方になり、上手太鼓堂へ以前のお熊出で四邊を窺ひ、見越しの松を便りにひらりと飛下りる、此時捕手上下より窺ひ寄り、「捕つた」と打つて掛る、お熊身を躱しちよつと立廻つて鳴物になり、六人を相手によろしく立廻りあつて、トゞたち／＼となり、捕手の後

へ隠れ、腰を以て前へ突き出す、捕手はお熊と心得十手で打つ、お熊突き倒し後の崩れ穴へずつと這入つて小隠れする。捕手はお熊と心得折重なるを刎れ返す、是れにてたち〳〵となり、上下の藪へ打突かる、此時上手の藪を押分けお吉出で、下手の藪を押分けてお傳出で、捕手を投げ退けきつと見得、鳴物替つてお吉、お傳捕手を相手に立廻りよろしくあつて、よき程に崩れ穴よりお熊出で、此中へはひり、二人づゝ相手に立廻つて投退け顔見合せ、

お熊　おゝ、おさらば木鼠、

お吉　もう斯うづゝゝきが廻つちやあ、

お傳　是れから直ぐに別れ〳〵、

お熊　頭を早く落すが專一。（ト此時上手の塀の破れよりお六出來り、）

お六　三人とも、何處にも怪我は、

お熊　なあに、あれしきぢやあ、

三人　大丈夫さ。（ト此時鷄笛。）

お六　おい、そろ〳〵東が白んで來たぜ。

お熊　明るくなつちやあ、こつちの身の上。

お吉
お傳　そんなら是れから、

お六　ふける支度を。

三人　それぢやァ姉御。

お六　先きへ行きねえ。

三人　あい、どりや出掛けようか。

ト本釣鐘を打込む、誂への合方になり、三人先きに花道へ行きかける、お六手拭を肩へ掛け悠々と花道際まで行く、此時賊の頭以前の装にて塀の破れより窺ひながら、そろ／＼出て、

頭　うぬ、泥坊。（ト大きく言ふ。）

女
三人　何だと。

ト三人こちらへ来るを、お六これと抑へる。賊の頭へたる。双方見合つて木の頭。盗人の頭坐りながら、

頭　ふゝ、さま／＼／＼。

ト顫へる。お六肩で笑ふ。皆々よろしく本釣鐘の送り、鶏笛にてよろしく、

ひやうし　幕

ト幕外花道へよろしく居並び、思入あつて、

お熊　へゝ、意氣地のねえ、

三人　盗人だなあ。（ト舞臺へ向つていふ。お六制して、）

お六　これさ、あんまり色氣を消してしまふぜ。

三人　違えねえ。

ト是れをキツカケに、誂への端唄、鳴物を冠せ悠々と花道へはひる。知せに附き跡シヤギリ。

二幕目

算所村貧家の場

柳堤地藏堂の場

（役名――百姓柴田柚右衛門、百姓仁作、星合左門、庄屋甚右衛門、隣の婆おくれ、金貸與九兵衛、口入烏金兵衛、百姓豊十、同万六、同佐兵衛悴三太。柚右衛門娘お淺、柚右衛門女房おさが、仁助女房おしげ等。）

（柚右衛門内の場）――本舞臺三間の間、常足の二重、六枚飾り、向う暖簾口、上手押入戸棚、此内に三尺の佛壇、錦繪を張りたる古襖、下手鼠壁、草紙の反故張り、簀の子の棚、蓑笠を載せ、此棚より

藁の辨慶、是れへ誂への鎌さしあり、いつもの所藁屋根の門口、下の方後へ下げて隣の家の入口、三尺の戸明け立てあり、下座の前一面に小高き藪疊、總て伊勢の國算所村杣右衛門内の體、爰に隣家の婆白髮鬘にて、盆に茶碗を載せ、圍爐裏の罐子より茶を汲み居る、よき所に庄屋羽織着流し、○△の百姓兩人着流しにて煙草を喫み居る、此見得臼挽唄にて幕明く。

婆　これは庄屋さまに組合の衆、よう見舞に來て下さりました、まあ茶を一つ上がらつしやれ。

ト茶を出す、皆々取つて、

庄屋　いや構はつしやるな／＼。こなたは隣づからゆゑ、何かと世話を頼みます。

婆　年取つて役には立ちませぬが、留守位は出來ますから、間さへあると來て居ります。

○　ときにこちの家のお袋、おさがどのゝ病氣は、

○△　どうでござるな。

婆　たゞでさへ藥のきかぬぶら／＼病に、杣右衛門どのがあゝいふ事にならつしやつたゆゑ、どうでも惡うござるわいの。

庄屋　それは困つたものぢやな、然し煩ふのも尤ぢや、以前はこの算所村で一といつて二のない身代、名主役を勤められて、柴田といふ苗字まで名乘る程の百姓であつたが、先代から段々と不時な事

が引續き、今の杣右衞門の代になり、持ち傳へた田畑も、大概人手に渡してしまひ、僅か殘つた田地さへ與九兵衞の所へ質に入れ、期月が切れて流すといふので、どうかして留めたいと杣右衞門どのゝ出來心で、僅かなれども盜みをしたゆゑ、こんな事になつたのぢや。

婆　それといふもおさがどのが、十三代續いた家の田地を流すが口惜しい、どうぞして取戻したいと明暮それを苦勞にして、氣の凝りから出たぶら／＼病、知つての通り杣右衞門殿は作州津山の院の庄村から入聟に來た人なれば、夫婦の中にも義理があるゆゑ、終には盜みもさしやつたのだ。

○　斯ういふ事と知つたらば、賴母子でもこしらへて進ぜたらよかつたに、惜しい事をしましたな。

△　それも言はぬではなかつたが、太郎助が賴母子を半途で潰してしまつたゆゑ。

庄屋　今更言うても仕方がない、さうしておさがどのは、寐て居られるか。

婆　夜は蚤の多いので昨夜も碌々寐られぬというて、今し方寐られました、ちよつと起しませうわいの。

庄屋　あゝこれ／＼、寐てなら決して起すに及ばぬ、其儘にして置いたがよい。

○　さうして娘のお淺どのは、使ひにでも行きましたか。

婆　お袋の寐て居るうち、櫛田村の觀音さまへお參り申して來るというて、今の先き行きましたわい

の。

△　大方親仁どのゝ入牢やお袋の病氣に附き、願掛けに行つたのであらう。

庄屋　あのやうな孝行な者は、又と一人村にないゆゑ、お上から御褒美を貰うて遣らうと思ふ所へ、杣右衛門どのが盗みをしたので、今更願ふに願はれず、早くすればよかつたに、大きにわしがぬかりました。

○　ときに庄屋さま、もう行かうではござりませぬか。

庄屋　おゝさうぢや、日暮れが大分早うなつた、明るいうちに行きませう。

婆　今にお淺が歸りますから、もう一服喫んで下さりませ。

庄屋　折角見舞に來たものだ、隣りのお婆が袖引煙草で、一服喫んで待たうかえ。

○△　それがよろしうござりまする。

ト又臼挽唄になり、三人煙草を呑みゐる。花道よりお淺在所娘前幕の裝、觀音の百度さしを持ち出來り、花道にて、

お淺　父さんのお咎めが、どうぞしてゆりるやう、觀音さまへお百度を上げ、此身にかへてお願ひ申し、自身に取つたお御籤が末の吉とあるからは、末々は父さんも御免になるであらうけれど、急な事

には行かぬか知らぬ。其内に母さんに、若しもの事でもなければよいが、あゝ心に掛かる事ぢやなあ。おゝ隣りの伯母さんに頼んで來たが、母さんの目は覺めはせぬか、早う歸りませうわいな。

（ト右の唄にて舞臺へ來り、門口にて）伯母さん、今歸りましたわいな。

婆　おゝお淺坊歸つたか、庄屋樣始め組合の衆が、見舞に來て下すつたわいの。

お淺　さうでござんしたかいな。（ト下手へ來り、）これは／＼庄屋さま、皆さま、ようお出で下さりましたなあ。

庄屋　おゝお淺歸つたか、お袋が病氣の上、親仁があゝいふ事になつて、嘸心細い事だらうと思ひ、一日も早くお赦になるやう、今日も組合のものを連れて代官所へ歎願に行たが、大きにお上の首尾もよく、聞き屆けたとおつしやるからは、全然御免にならずとも、村預け位で杣右衞門どのも、近々家へ歸るであらう。

○　わしらも年頃懇意にした、杣右衞門どのゝ事なれば、他人のやうには思はぬゆゑ。

△　つど／＼言はぬが、今日で三日歎願に出ましたわいの。

お淺　御親切に有難うござります、そんなら御上の首尾もよろしく、父さんには近々のうち家へ戻つてでござりますかいな。

庄屋　お丶盗みをしたといへばいへ、據なき貧の盗み、外に惡い事がなければ、長く居よう筈がない。
○　こんど御沙汰のある時は、きつと御免に違ひない。
△　樂しみにして居たがよい。
婆　それは耳よりな事でござるな。
お淺　それといふのも皆さまの御蔭、母さんに早う聞して悦ばしてやりませう。
庄屋　あゝこれ〳〵、折角快う寐てぢやゆゑ、目が覺めてから言うたがよい。
お淺　いえ〳〵、よい事でござりますから、早う聞してやりませうわいな。（ト上手屋體の蚊帳の傍へ行き、）もし母さん〳〵。（ト呼ぶ、蚊帳のうちにて、）
さが　あゝもし、どうぞお許しなされて下さりませいなあ。
お淺　これ母さん、夢でも見やしやんしたか、ちやつと爰へ出やしやんせいな。（ト蚊帳をまくる。）
さが　おゝ娘か、怖い夢を見たわいの。（ト合方になり、蚊帳の内よりおさが病鉢卷、更けたる在所女房窶れたろこしらへにて出て、）今親仁どのが縛られて、酷い責めに逢はしやるゆゑ、あれでは命もたまるまいと、どうぞお許し下さりませと、思はず聲を出しましたわいの。
ト言ひながらおさが汗を拭く、お淺背中を擦りながら、

お淺　夢は五臟の疲れとやら、どうか〳〵とそれのみを、胸に思つてござんすゆゑ、そんな夢を見るのでござんす、したが母さん、悦ばしやんせ、今日皆樣が代官所へ御免願ひに行つて下され、二三日の其うちには、家へ戻つてござんすといな。

さが　それは〳〵有難い、庄屋さま始め組合の衆、何とお禮を言はうやら、あゝ有難うござりますわいな。（ト嬉しき思入にて禮をいふ。）

庄屋　何の禮に及ばうぞ、日頃から懇意にした杣右衛門どのゝ事ぢやもの、どうかして一日も早く、歸るやうにしたいわいの。

○　それに又杣右衛門どのは、わしらと違つて病身者、癇と中風で去年から體もほんに遣へぬ樣子。

△　長うあつちに居る日には、煩ふは知れた事ゆゑ、早う出して進ぜたいから、代官所へ願ひを出したが、どうか御免になりさうだ。

さが　ほんに夢は逆夢とて、今見た夢に引きかへて、

お淺　思ひ掛けなく父さんが、家へ戻つてござんすとは。

さが　こんな嬉しい事はない。

婆　おゝわたしでさへ嬉しいもの、尤ぢや〳〵。（ト三人悦ぶ。時の鐘。）

庄屋　おゝうか〳〵と長居して、もう常念寺の暮れ六つだ。
○　盆からめつきり目に立つて、
△　日が詰つたが知れて來た。
庄屋　さあ〳〵、暮れぬうちに行きませう〳〵。
さが　もうお歸りでござりまするか。
庄屋　また明日見舞に來ませう。（ト三人門口へ出る。お淺送りながら、）
お淺　毎日々々有難うござりますわいな。
○△　そんならお娘。
お淺　皆さま方。
庄屋　お袋を大事にしやれ。（ト臼挽唄になり、庄屋先きに百姓兩人花道へはひる。）
さが　秋の日の釣瓶落し、今の間に暗うなつた、お淺燈火を附けてくりやいの。
お淺　あい〳〵。（ト合方にてお淺暖簾口へはひり、破れたる角行燈を持來り、）おゝ是れはしたり、油が少しもなかつた。
さが　ほんに昨夜は下皿を、しぼつて燈火を點けたわいの。

お淺　ちよつと買つて來ませうわいな。

婆　あゝこれ〳〵、日暮れは用の多いもの、わしが買うて來てやりませう。

お淺　お前も用がござんせうに。

婆　家には嫁が居るゆゑに、別に何にも用はない、遠慮せずと出したがよい。

お淺　そんなら御苦勞ながら、買うて來て下さんせ。（ト帶の間の巾着から錢を出し算へて）おゝ、こりや四文足らぬわいな。

婆　足らずばわしが足しておかう。

お淺　明日お返し申しますから、どうぞ貸して下さんせいな。

婆　何の返すに及ぶものかいの。（ト油さしを取つて）どれ、一走り行て來ませう。（ト門口へ出る。）

お淺　あゝ、年寄りを遣うて濟まぬわいな。（ト合方にて婆下手へはひる。）

さが　ほんに久しい馴染とて、隣りの伯母御が親切に、よう世話をして下さるの。

お淺　譬にもいふ近くの他人、親身も及ばぬ事でござんす、燈火を點けず暗いせゐか、大層蚊が出て來ましたわいな。

さが　ちと蚊燻しをしてくりやいの。

お淺　あい／＼。

ト臼挽唄になり、お淺圍爐裏へ粗朶を入れ、蚊燻しをする。花道より與九兵衛羽織着流し金貸のこしらへ、權兵衛着流し世話人のこしらへ、小田原提灯を持ち出來り、

權兵　もし與九兵衛さん、杣右衛門があゝなつたからは、どうでも田地は流れ込みますぜ。

與九　五十兩ぢやあ安いものゆゑ、早く引取つてしまひたいが、利息がしつかり溜つて居るから、引取る前に少しでも、いびり取りに取る積りだ。

權兵　どうで錢はあるまいから、百にでもなる物があつたら、持つてお出でなさい。

與九　錢目なものは娘だが、あれを賣れば田畑も我が手にはひるに、馬鹿ぢやあねえか。

權兵　あんな野暮堅いやつはねえ。（ト兩人舞臺へ來り門口を明け、）おい、お袋また來ましたよ、おゝおそろしい蚊燻しだ。

與九　こいつア、おら達を入れねえ氣だな。

お淺　どなた樣でござんすえ。

與九　どなたでもねえ、與九兵衛に、

權兵　口入の權兵衛だ。

お淺　これはようお出でなさんしたな。
與九　何にしろ眞闇だ、話しをするに分らねえ。
權兵　なぜ燈火を點けねえのだ。
お淺　油がさつぱりござんせぬゆゑ、今貰ひに行きましたわいな。

ト婆下手から出て、門口から油さしを出す。

婆　お淺坊、又二文あがつたよ。
お淺　あい、さうでござんしたか、大きにお世話さまでござんした。
婆　又用があつたら呼んで下され。
お淺　有難うござんすわいな。
さが　是れはあなた、ようお出でなされましたなあ。

ト合方にて婆は隣りの口へはひる。お淺は行燈へ油をつぎ、燈火をつける。

與九　ときにお袋、おれが來たのは外でもねえが、質に取つた田地の事、疾うに期月が切れたゆゑ、利息を入れねば流してしまふと杣右衛門どのに斷つたが、それきり利息も入れず、今日か〳〵と待つて居たが、聞けば親父は盜みをして入牢したといふ事だ、所詮それぢやあ出來めえから、田地

は流してしまふから、さう思つてくんなせい。

權兵　おれも飛んだ口入れをして、末始終掛り合ひ、出來ねえ事なら思ひ切つて、田地は流してしまひなせえ、それとも留めて置きたくば、少しでも入れなせえ、たゞぢやあ今度は待たれねえよ。

さが　誠に是れまで段々と延び／＼になりまして、濟みませぬとは存じながら、どうも才覺が出來ませぬゆゑ、親仁どのがひよんな事してお捕へになつて居りますれば、どうぞ御免になりまして、歸りますまで、最う少し、お待ちなされて下さりませいな。

與九　どうして／＼待たれるものか、是れが御免になる事なら、待つてやるまいものでもないが、假令百でも盜みをして其科で行つたからは、滅多に御免になりはしめえ。

權兵　先づ出る出ないはさておいて、さつき親仁が畚で出て行く所を見掛けたが、弱り切つて肩息だつた、あの樣子では長くは持つまい、明日か明後日の其内には、きつと死ぬに違えねえ。

ト是れを聞き兩人思入あつて、

さが　えゝ、そんならこちの人は、其やうた弱らしやんしたか、すりや最前組合の衆のいうたは僞りにて、今見た夢の責苦に逢ひ、果敢ない死をばなさるのかいな。

お淺　夢でも逢うたがお前の仕合せ、悲しい事になりましたわいな。

ト兩人泣く。與九兵衞權兵衞思入あつて、

與九　所詮さういふ事になれば、受戻すことは出來ないから、五十兩の其抵當に、高い物だが引取らう。

權兵　それとも留めて置きたくば、少しでも氣は心、利息の錢を入れなせえ。

さが　ありさへすれば上げますが、貧に迫つて親仁どのが盜みをする程なれば、上げますお錢がござりませぬ。

お淺　今も今とて五勺買ふ油の錢さへ四文足らず、隣りで借りて買ふ程なれば、たゞ一文のお錢さへ貯へのない親子のもの、どうぞ御料簡なされて下さりませいな。（ト與九兵衞思入あつて）

與九　いや／＼料簡ならねえ／＼、猿廻しの掛取りなら、爰でわつと涙をこぼし、財布をふるつて有りたけ遣り、わつと言はれる所だが、どんな哀れな事を聞いても、終に涙の出たことの、ねえといふのが與九兵衞だ。

權兵　人はのめつて死なうとも、我せえよけりやあいゝといふのが、是れが當時の人情だ、錢がなけりやあ、何なりと抵當を出せ、抵當を取らう。

さが　御覽の通りのあばら簀戸、衣類は元より道具まで目星いものは賣拂ひ、殘つた物は缺けたり割れたり、滿足な物はござりませぬが、それでもよくば何なりと、持つて行て下さりませ。

與九　斯う家中を見たところが、天道干の筵の上で一品四文といふ札で、尿瓶と一座をしさうな代物、五十と踏める物はねえ、こりやァ持つて行けといふ筈だ。

權兵　滿足なものは娘ばかり、疵物で仕方がねえが、然し十三代續いた家だ、古川に水絶えず、踏める物がありさうなものだ。おツとある〳〵。まだ此うちでは、あの蚊帳だ。

ト權兵衞蚊帳を取りにかゝるを、お淺留めて、

お淺　あゝもしめつさうな、其蚊帳をどうなさんすのでござんすぞいな。

與九　どうするものか、質に取つた田地の利息に預かるのだ。

權兵　兎やかう言はずに渡しなせえ。（ト權兵衞お淺を突退け、蚊帳を持つて來る。）

お淺　外の物は兎も角も、蚊帳ばかりは上げられませぬ、晝さへ藪の近いのに、蚊が居て寐られぬこちの家、是れがなければ母さんが、寐る事が出來ませねば、どうぞ堪忍して下さりませいな。

權兵　そんなら蚊帳は止さうから、お前の着物を脫ぎなせえ。

お淺　さあお着替の着物がござんすりや、是れをあなたへ上げますけれど、男と違うて女の事ゆゑ、裸になつて居られませねば。

與九　そんなら蚊帳を持つて行かうか。

お淺　さあそれは、

權兵　但しはおぬしが裸になるか。

お淺　さあ、

兩人　さあ、

三人　さあ〳〵〳〵。

權兵　えゝ面倒な。（トお淺をむごく突退け、蚊帳を持つて行かうとするを、お淺すがり留めて、）

お淺　あゝもし、單衣を脱いで上げますから、どうぞ待つて下さりませ。

トお淺帯を解きにかゝるを、おさが這ひ寄つて留めて、

さが　あゝこれ〳〵、そなたが裸になりやつては、使ひに出すにわしが困る、蚊帳を遣つたがよいわいの。

お淺　いえ〳〵是れがござりませねば、およる事がなりませぬ。

さが　親仁さまの事が氣になり、夜の目もろくに寐られねば、蚊帳はなうても大事ない。

お淺　それぢやというて。

さが　はて、燻しをしても居られるわいの。（トおさがお淺を留める。）

與九　おゝさうだ〳〵、蚊帳を釣らずに寐るものは、世間に幾らもあることだ。
權兵　さう得心がいつたなら、早く持つて行きませう。（ト蚊帳を持ち、立上る。）
お淺　そんなら、どうでも其蚊帳を。
與九　利息の抵當に持つて行くのだ。
お淺　そりや又あんまり。（トお淺立ちかゝるをおさが留めて、）
さが　是れも時節ぢや、捨てゝ置きやいの。
お淺　はあゝ。（ト泣伏す。兩人は門口へ出て、）
權兵　あゝ、こいつは古いが地性がいゝ、今年の相場ぢやあ踏めますぜ。
與九　捨賣にしても、二分にやあなる。
權兵　然し是れがなかつたら、蚊に喰はれて寐られめえ。
與九　ちつとこりやあ可愛さうだ。
權兵　よしなせえな、褒められようと思つて。
與九　ほんに、敵役はしねえ事だ。
ト臼挽唄になり、與九兵衞先きに權兵衞蚊帳を肩に掛け花道へはひる。おさがお淺の背中を擦り、

さが　これ〲お淺、さぞ悔しからうが仕方がない、こんなみじめな目に逢ふも約束事であらうわいの。
お淺　わたしが男でござんすりや、此御苦勞は掛けませぬに、只さへ在所は多い蚊に、右も左りも竹藪ゆゑ、蚊帳がなうては一晩でも、どうまあ寐られませうぞいな。
さが　何の寐られぬ事があらう、親仁どのが獄屋に居る其苦しみに比ぶれば、蚊にせゝられて寐られぬ位何の事でもないわいの、まあそれよりは親仁どのに、まだお夜食を上げなんだ、蔭膳するゑてくりやいの。
お淺　ほんに今の混雜で、大きに遲うなりました、嘸ひもじうござんしたらう。どれ拵へて上げようわいの。
ト瞽女節になり、お淺膳こしらへに掛る。花道より三太奴天窓縞の袖なし半纏藁草履、田舍ッ子のこしらへにて釣竿をかつぎ、紐の附きし一升樽を提げ出來り、直ぐ舞臺へ來て、門口から、
三太　伯母アん、鹽梅はいゝかえ。（ト言ひながら内へはひる。）
さが　おゝ誰かと思つたら、作兵衛が悴の三太か、よう毎日尋ねてくりやるの。
お淺　さうしてまあ今時分、何處へ行つて居たのぢや。
三太　横堀へ釣りに行つたら、いゝ鮒が釣れたから、伯母さんに遣らうと思つて持つて來たのだ。

さが　おゝ、それはよう持つて來てくれた、わしも好きぢやが、親仁どのが大好き、今蔭膳をするゐる所ゆゑ、親仁どのに喰べさせようわいの。

三太　おや、伯父さんは家へ歸つたのかえ。

お淺　まだ歸りはせぬけれど、蔭膳というて、内の膳をするゐるのぢやわいの。

三太　早く歸つて來ればいゝ、算盤を教へて貰ふのに。姉さん、伯父さんは死にやあしめえの。

お淺　何で死なしやんすものか、なぜそんな事を言やるぞいの。

三太　それでも新家の小旦那や、新田の彌五兄アが、死ぬ〳〵といふから。おらあ伯父さんに死なれたらどうせう。（ト三太淚を拭ふ。）

お淺　死なぬからいゝではないか。

三太　それでもおらの父さんは、算盤も何も知らねえから、伯父さんが死んでしまふと、習ふ事が出來ねえもの。

さが　あゝ案じるな〳〵、今に伯父さんが歸つて來て、教へてやるであらうわいの。

お淺　さうして母さんに遣るといふ鮒は、何處にあるのぢやぞいの。

三太　桶へ入れて持つて來た。（ト桶の中より鮒を出し）やあ、今まで生きて居たが、もう死んだ。

さが　お淺　え。（ト兩人心に掛る思入）

三太　惜しい事をしたなあ。

お淺　いや／＼、父さんがあゝいふ事ゆゑ、生物を殺すのは殺生で惡いわいの。（ト鮒を取つて）母さん見やしやんせ、よい鮒ではござんせぬか。

さが　ほんに、鯉ほどあるわいの。

三太　伯母さん、まだ月代は剃れねえかえ。

さが　おゝ早う剃つて遣りたいが、手が顫へて剃れぬわいの。

お淺　おつかァが剃るであらうのに。

三太　あらのおつかァは下手だから、痛くつていけねえもの、そしておらが痛いといふと、よくぐづ／＼言やあがる、なに痛えことがあるものかと、天窓をぽん／＼くらはして、月代を剃るたんびに瘤が出來ねえ事はねえ。

さが　おゝそりやまあ可愛さうに、もう少し快くなると、わしが剃つてやりませう、おゝ月代といへば剃刀は三太の所へいつて居たの。

三太　あゝ、おらの所にあるよ。

さが　今夜あれが、（と思入あつて、）いや、今度來る時持つて來てくりや。
三太　それぢやあ剃つてくれるかえ。
さか　少しづゝ剃つて遣らうわいの。
三太　やあ、そいつァ嬉しい〳〵。
お淺　早う鮒をこしらへたいが、菜切庖刀は錆びて切れず、（ト鎌を取つて、）鎌では此柄が邪魔になるし。
さが　あゝこれ〳〵、鎌でどうして出來ようぞ、隣りに慥か出刃があつた、ちよと借りて來たがよい。
三太　おいらが行つて借りて來ようか。
お淺　そんならちよつと借りて來てくりや。
三太　あい〳〵。（ト下手隣りの家へはひる。）
さが　與九兵衛や權兵衛のやうな、あんな無慈悲な者もあれば、年はいかねど三太のやうに、折角釣つて來た鮒を、わしに喰はせたいというて、くれるといふは可愛い事ぢやの。
お淺　ほんに見掛けはいたづらさうぢやが、優しい氣立てゞござんすな。
さが　さぞ親仁どのが、悅ばつしやらう。（ト下手より三太誂への出刃庖刀を持つて出來り、）
三太　あい、庖刀を借りて來たよ。（ト出す。）

お淺　おゝ御苦勞々々、これはよく切れさうぢやわいな。

三太　これで切つたら、死ぬだらうね。

お淺　さうかえ。(ト思入。)

三太　姉さん、手を切んなさんなよ。

トお淺摺鉢の上へ爼板を載せ鮒をこしらへる。三太手桶の水を掛ける。在郷唄になり、花道より仁作やつし裝尻端折り藁草履百姓のこしらへ、お繁同じく在所女房のこしらへ、裾を端折り藁草履にて、麥を入れし麻袋、味噌を入れし絲立、醬油を入れし德利を繩にて竹へ通し、是れを肩違ひにかつぎ出來り、花道にて、

仁作　これおしげ、德利が振れて擔ぎにくゝツてならぬが、おぬしの肩が違やあしねえか。

お繁　わたしや違ひはせぬけれど、お前の肩が違つてゐるわいな。(ト仁作振返り、)

仁作　大方そんな事だらうと思つた。(ト仁作肩を替へる、お繁も同じく替へて、)

お繁　それ、又違うたわいな。

仁作　えゝ無器用な、肩を替へるからだ。(ト仁作肩を替へる。)

お繁　そんなら、斯うかいな。(ト又替へる。仁作じれ込み、)

仁作　えゝ、分らねえ奴だ、早く來い。

お繁　行かいでかいな。（ト右の唄にて口小言を言ひながら、舞臺へ來り、）

仁作　ほんに世の中に、手前のやうな世話のやけた奴はねえ。

お繁　そりやあわたしの方で言ふことぢやわいな。

仁作　何も手前などに言はれるやうな事を、おらあ言やあしねえ。

ト言ひながら仁作草履をはいた儘、内へ擔ぎ込むをおさが見て、

さが　おゝ仁作どの、ござつたか。（ト仁作心附き、）

仁作　やあ、いつの間にか家へはひつた。

お繁　それ、履物を脫がしやんせいな。

仁作　手前が後から押すからだ。（ト後へ下り、草履を脫ぎ、擔いで來た物をおろし、）

お繁　何でも惡い事といふと、わたしの事にしなさんす。

お淺　おゝ、こりや伯父さんに伯母さん、ようござんしたな。

お繁　晝の内來ようと思うたが、何やかや用があるので、大きに遲うなつたわいの、さうして何をして居やるのぢや。

お淺　今この子が母さんに喰べさせたいというて、鮒を持つて來てくれたゆゑ、拵へて居るのぢやわいな。
仁作　おゝ作兵衛とこの三太か、今家で搜して居たぜ。
お繁　早う家へ歸つたがよい。
三太　そんならおいらは家へ歸らう。伯母さん、早くよくなんねえよ。
さが　早くよくなればよいが、殊によつたら伯母さんは、死なうかも知れぬぞよ。
三太　そんな事を言つちやあ、おらあいやだ。
仁作　なぜいやなのだ。
お淺　月代を剃つて貰ふのが痛いからか。
三太　なあにさうぢやあねえが、小さい時からおいらをば可愛がつてくれたから、おつかァよりやァいいものを。（ト三太しく〳〵と泣く。）
さが　おゝよく言うてくれた、嬉しいわいの。（ト泣く。）
仁作　これ〳〵、其煩つて居る所へ、氣を揉むのは大毒だ。
お繁　おつかァが案じて居るから、三太も早く歸つたがいゝ。

三太　おい〳〵、早く歸らう。
仁作　これ〳〵、歸りに何ぞ買つて行け。（ト仁作財布から十六文出してやる。）
三太　やあ、こりやあ十六文だね。伯父さん有難う。（ト錢を投る。）
仁作　これ又きずをするか、そんな事をすると泥坊になるぞ。
お繁　あもし。（ト仁作の袖を引く、仁作心附き、）
仁作　えゝ、泥坊ぢやあねえ、何よ〳〵。
三太　伯父さん、何だえ。
仁作　なんだら法師の柹の種よ。
三太　何のことだ。
　　ト右の唄にて、三太釣竿をかつぎ、樽を提げ花道へはひる。此内お淺は鮒を串へさし、圍爐裏の緣へさして置く。
仁作　成程こりやあいゝ鮒だ、時に姉御、この混雜の中だから麥を搗くことも出來まいと思ふゆゑ、先づ麥が五升に味噌が百目、まだある〳〵、醬油も五合持つて來た。（ト持つて來た物を並べる、）
さが　これは〳〵、いろ〳〵よう持つて來て下すつた、有難うござるわいの。

お淺　ほんに明日の分がなく、困つて居た所ぢやわいの。
お繁　味噌や醬油は黴びるゆゑ、又持つて來ませうわいな。
お淺　いえもう、是れだけあれば澤山でござんすわいな。
さが　いやも一家中も多いけれど、唯一人かうなつては構うてくれる人がない、可なりに暮らした時分には、隨分人の世話もしたれど、世話甲斐のないものぢやわいの。
お淺　同じ一家でありながら、鄕兵衞どのは大盡でも、人を貢いでくれるどころか、僅かの借りを兎やかうと、あんな無慈悲な人はない。
お繁　鄕兵衞どのが親切に金を出して下すつたら、斯ういふ事にはなるまいに、有り餘るほどありながら、人の事には二朱一つ出した事がござんせぬ。
仁作　其代り噂のある今五右衞門とかいふ泥坊に、强慾非道に溜め込んだ、金をよつぽど取られたさうだが、人の難儀を救はぬから、そんな目に逢つたのだ。（ト此内お淺鮒を焼き皿へ載せ膳立をする。）
お繁　よく蔭膳をするゑなんすな、是れでは牢に居なさんしても、ひもじいことはあるまいわいの。
さが　とてもの事に酒好きゆゑ、此鮒を肴にして一杯呑まして上げたいものだ。これお淺、お神酒だけ買うて供へてくりや、わしも一口呑みたいわいの。

お淺　父さんは酒好きなれど、お前が一口呑みたいとは、珍らしい事ぢやゆゑ、ちよと買うて來ませうわいな。

さが　あゝこれ、飛んだ事をねだつたが、慥かお錢がなかつたの。

お淺　はい。（ト恥しき思入にて、）庄屋さまでお借り申して參りませうわいな。

仁作　あゝこれ〳〵、人に無心をいふには及ばぬ、なんぼおれが貧乏でも、酒位の錢は持つてゐる。（ト財布から百錢を四枚出し、）さあ、是れで買つて來たがよい。

お淺　いえ〳〵、此やうには入りませぬ、一合買へばようござんすのぢや。

仁作　はて、兄貴も大の酒好きゆゑ、それだけ買つて供へてくりやれ。

お淺　其やうに言はしやんすなら、半分買うて來ようわいな。（トお淺錢を二百取る。）

仁作　えゝ、半分と言はずに、みんな持つて行けばよいに。

お繁　なんぼしがない暮しでも、四百や五百遣うたとて、身上には障らぬわいな。

お淺　いえ〳〵、是れで澤山ぢやわいな。（ト德利を持ち門口へ出て、）そんならちよつと行て來る程に、話しをして居て下さんせいな。

仁作　どうで四つまで話して居るから、跡を案じずに行つて來やれ。

お繁　提灯はよいかえ。
お淺　薄月夜ゆゑ入らぬわいな。（ト唄になり、お淺思入あつて徳利を提げ花道へはひる。跡を見送り、）
さが　これ仁作どの、親父どのが煩らうて居るといふ噂ぢやが、そんな事を聞かつしやつたか。
仁作　疾うに聞いて居りまする。
さが　え、そんならほんの事かいの。（ト誂への合方になり、）
仁作　さあ惡い耳は聞かすまいと、二人に隱して居たけれど、何というても年の上、夜も碌々寐られぬゆゑ、病氣附いたといふ事だ。
お繁　たんと惡くならぬうちに、どうかお慈悲で御免になり、家へ歸つて下さんすりやよいが、長う居るうち、ひよつとした事でもあつた其時は、行く所へも行かれぬわいな。
さが　もしさうなつたらわたしらは、跡に殘つてどうせうぞいの。
仁作　そりや決して案じなさんな、只心得にいふものゝ、盜みはすれど餘儀ない譯、心底太い者でなければ天道さまのお惠みと、お上のお慈悲で杣右衛門どのは、きつと助かるに違ひはない、是れに附けても此仁作に相談掛けて下すつたら、どうか仕樣もあらうに、是れが五兩と十兩ならちよつと算段も仕憎いけれど、高が一兩か二兩のこと、質はちいゝ置いても間に合すのに、なぜこんな事を

してくれたかと、實は兄貴を恨んで居ました。
お繁　それもこつちの僻みにて、おれが工面が悪いから、それで言はぬか知らねども、なぜ相談掛けて下さらぬと、物を苦にせぬ氣性ゆゑ、親が死んでも涙一つこぼした事のないぬしが、つひにない涙をこぼし、悔しがつて居ましたわいな。
さが　兄弟とはいひながらわしが身寄りのこなた衆、何というても入聟どの、隔てがあつて言ひ憎かつたか、わしが達者で居たことなら相談にも行くけれど、去年からの此煩ひ、假令先祖の代からして持ち傳へた田地でも、時世時節仕方がない、流してしまつて下されと幾度となくいうたれど、十三代續いて來た柴田の家がおれが代に、田地を人手へ渡しては、先祖へ對して濟まぬというて、取り留めたいばかりにあのやうな事さつしやつたが、家名へ疵を附けるより田地を人手に渡す方が、遙かに増しゆゑ親父どのを、わしも恨んで居ますわいな。
仁作　その恨みも尤だが、あの通りの堅人ゆゑ、田地を人手に渡しては、第一先祖へ濟まぬといひ、附いては娘に讓りたいと、常々から言つてゞあつた。
お繁　それゆゑ田地を留めたいと、思ふばかりに此騒動、まだ此上にどのやうな、難儀な事があらうとも、あの子は年も行かぬゆゑ、お前が心をしつかりと、持たしやんせねばいかぬぞえ。

さが　假令どんな事があつても、親父どのが歸るまでは氣をしつかりと持つて居るゆゑ、必ず案じて下さんすな。
仁作　それでわしらも落着いた。
お繁　何にしろ蚊の多いのに、蚊帳を釣つてはどうでござんす。
さが　さあ、釣りたいにも其蚊帳が。
仁作　えゝ、質にでもやつたのか。
さが　さあ其蚊帳は新田の、與九兵衞と權兵衞が、利息を入れねば書入の田地を流してしまはうか、それとも、留めて置きたくば、抵當をよこせと無理無體、蚊帳を持つて行つたわいな。
仁作　え、すりや慾張りのあの二人が、蚊帳を持つて行つたとか、なぜ又渡してやつたのだ。
さが　さあ、利息を入れねば流すといふゆゑ。
仁作　利息を遣らうが遣るまいが、此一件の濟まぬうちは、手も附けられぬあの田地、女ばかりと侮つて僅な錢にかなるまいに、蚊帳を持つて行くとは。
お繁　ほんに邪險な人達ぢや。
仁作　おれが行つて其蚊帳を、取返して來てやらう。（ト仁作立上るを、）

お繁　お前が取りに行かしやんしても、直ぐ素直に渡さうぞいな。

さが　遣つてしまつたものなれば、其儘にして下されいの。

仁作　それだといつて蚊幮がなくては。

さが　假令一夜さ蚊にせゝられて寐られぬとて、親父どのが獄屋の内で、苦しむよりは遥かに樂であらうわい。

仁作　そりやさうでもあらうけれど、此村では草分けで十三代續いた家柄、如何に金があればとて昨日今日の出來星分限、手籠めな事をして濟まうと思ふか、おれが居れば、（ト腹立ち紛れにお繁の胸倉を取り、）渡しはせぬに。

お繁　あいたゝゝゝ、何をしなさんすのぢやぞいな。

仁作　何をするものか、腹が立つからだ。

お繁　腹が立つといつて、わたしを捉へて。

仁作　それだといつて、あんまりだから。（ト煙管を吸ひ附け立ちかゝる、）

お繁　えゝ、まだかいな。（トお繁留める、仁作逆に煙管を口へ入れ、）

仁作　あツつゝゝゝ、これ、慌てるなといふに。

お繁　そりやお前のことぢやわいな。

さが　ほんにお前のそゝくさも、久しいものであるわいな、ほゝゝゝゝ。

お繁　おゝ、珍らしい、姉さんが笑はしやんしたわいな。

仁作　これそこが、そゝくさの。（ト又逆に煙管を口に入れ、）あツつゝゝゝ、妙だわえ。

ト仁作眞面目に脂下りに煙草を呑む、おさがお繁見て笑ふ、此見得在郷唄にて道具廻る。

（一里塚の場）━━本舞臺上の方に藁葺九尺の辻堂、狐格子、軒口に子育地藏といふ額を掛け、これに續いて道祖神、庚申塚の碑、後一面藪疊、下の方に松の大樹、日覆より同じく釣枝、總て伊勢街道一里塚の體、時の鐘にて道具留る。と時の鐘打上げ、床の淨瑠璃になり、

〽行雲に月はあれども村雲に、晴れては曇る秋の末、千種にすだく蟲の音も、哀れに細き繩手道、お淺はひとりとつおいつ、迷ふ心に六道の地藏堂に佇みて、

ト此内上手より以前のお淺徳利を提げ、思案の思入にて出來り、床の合方、蟲笛になり、

お淺　今酒屋での話しにも、父さんが獄屋の内に長く居ては死ぬであらう、お慈悲願ひに幾度も出て、よいとは言はしやんすが、所詮たゞでは御免はあるまい、いつその事父さんの罪を此身に引受け

て、自害して死んだなら、假令誠でないとても親の爲ゆゑお慈悲にて、御免なされて下さりませう。さつきからとつおいつ、どう考へても死ぬより外に、助ける工夫はないわいな。

〽命捨つるも親の爲、さら／＼惜しうはないけれど、嘸母さんが歎くであろ。貧しい中でも年頃ゆゑ、其身は繼いだ物着ても、わたしに繼ぎのないもの着せ、

〽賣物ゆゑに花かざり、今に聟取り初孫の、顔を見るのが樂しみゆゑ、もう四五年は生きたいと病に苦しむ其中でも、わたしばかりを樂しみに、思うて居さんす母さんが、逆さま事を見やしやんしたら、仕樣模樣も泣き死にゝ、死なしやんせねばよいけれど、

〽父の恩の高きことは、須彌山よりも高くして、母の恩の深き事は、蒼海よりも深しとやら。どちらがどちらと言はれねど、歎きの餘りに母さんが、假令あとで死なさんせうと、今差し掛る父さんをお助け申さにや義理が濟まぬ、幸ひ今宵伯父さんや伯母さんが來てなれば、餘所ながら暇乞して跡々の事賴み置き、夜更けて仔細を書殘し、命を捨てゝお助け申さん。

〽覺悟極めて傍なる、地藏堂を打ち見やり、（此内お淺よろしく思入あつて、）思はず知らず佇みし爰は野中の地藏堂、形はこのやうに大きうても夫を持たねば子供も同然、賽

の河原へ行く身ゆゑ、來世をお助け下さりませ。
〽六道能化の地藏尊、南無阿彌陀佛と伏し拜み、（ト地藏堂を拜む、時の鐘、思入あつて、）
おゝ、さつきから餘程の間、さぞ家で待つてゞあらう、早う歸つて此酒を、父さんに供へた跡で、
親子眞身の名殘りの杯、少しも早う。
〽親に代りて命をば、捨つる心も一筋道、またと類もあらし吹く、風に追はれて、
ト時の鐘、風の音、三重にて、お淺よろしく思入あつて花道へはひる。是れにて道具廻る。

（元の貧家の場）＝＝本舞臺元の世話場の道具。爰に以前のおさが、仁作、お繁案じて居る體、三重にて道具留る。

〽斯くとも知らず我が家では、待たるゝ身より待つ身の譬、歸りの遲きを打ち案じ、
仁作　このお淺はどこまで行つたか、あまり遲いことぢやないか。
お繁　ちよとそこらまでいて、見て來ようわいな。
さが　いや〳〵見に行くには及ばぬ、三股の酒屋へはちと行きにくい事があつて、土橋まで買ひに行く
ゆゑ、それで遲いのぢやわいの。

仁作　土橋まで行つたとて、最う疾うに歸る時分ぢや。

お繁　器量はよし年頃ゆゑ、馬鹿者にでも出逢はにやいゝが。

仁作　おれが行つて見て來よう。

〽言ひつゝ立ち出る門の口、出合頭に向うより、息せき歸る娘のお淺、

ト仁作門口へ出る。此内花道より以前のお淺足早に出來り、直ぐ門口へ來る。

おゝ、お淺歸つたか〳〵。

お淺　大きに遲うなりましたわいな。（ト合方になり、お淺内へはひる。）

お繁　あんまり歸りが遲いゆゑ、大抵案じたことではない。

お淺　酒屋の家で父さんの悔みを言はれ、それゆゑつい遲うなつたわいな。

さが　何しろ親父どのが、嘸待兼ねてゞあらうから、早う燗をして供へてくりや。

お淺　あい〳〵。

〽あいとはいへど貧しさに、何かに事を缺け徳利、少しうつして圍爐裏をかき立て、

トお淺棚より古き燗徳利を出し、酒をうつして、圍爐裏の火をかき立て、

おゝ、こりや圍爐裏の火が少しもなかつた。

仁作　それでは急に燗は出來まい、兄貴は冷が好だつたから、其儘直ぐに供へたがよい。

お淺　そんなら、たんとある方を、お供へ申しませうわいな。

〽徳利の儘に蔭膳へ、添へて供へる冷酒は、燗よりあつき孝行なり。

トお淺柚右衛門へ供へし蔭膳の側へ徳利と猪口を供へる。

仁作　さあ〳〵兄貴、たんと呑まつしやれ〳〵。

お繁　ほんに姉さん、お前もさつき呑みたいと言はしやんしたから、一つ呑みなさんせいな。

トお繁燗徳利と猪口を出す。

さが　おゝ、一つ呑まうわいの。(ト猪口を取る。)

お繁　こりや、珍らしいことでござんすな。

〽何氣なく注ぐ冷酒も、思ひある身は熱湯を、呑む苦しみに呑み干して、

トお繁酌をする、おさがぢつと思入あつてぐつと呑み、

さが　仁作どの、こりやお前に。(ト仁作にさす。)

仁作　此春年始に來た時ぎり、久し振りの酒盛りだ。(ト猪口をとる、お繁酌をする、仁作呑んで、)姉さん、も一つ呑みなせえ。

さが　そんなら、も一つ呑まうかいの。(ト取上げ、)これ、今のでは多いわいの。

お繁　あい〳〵少しつぎませうわいな。(ト此内始終合方にてお繁酌をする、おさが呑みて、)

さが　お繁どの、お前は酒は嫌ひだが、今日は少し呑んで下され。(トお繁へさす。)

お繁　あゝ、呑みますとも〳〵、お淺坊、なみ〳〵とついで下さんせ。

お淺　あい〳〵。(トお淺酌をする。)

仁作　又醉うて困らせようと思つて。

お繁　おゝ、お前ではあるまいし。(トお繁呑んで、)これはお淺坊、お前へ。

トお淺へさす、お淺猪口を取り。

お淺　有難うござんす。

〽うけたる酒は濁らねど、心すまねばうつかりと、

トお淺猪口を持ち、是れが別れといふ思入、お繁酌をして、

お繁　これ何を考へて居るのぢやぞいの。

〽言はれて、ぐつと呑み干して。(トお淺ぐつと呑み、)

お淺　母さん、是れはお前へ。(ト猪口を出す。)

さが　あのそなたから。

〽さすも受くるゝ親と子の、是れが別れの杯と、口に言はねど目に持つ涙、思はず咽せるを背擦り。

ト　おさがお淺互ひに別れといふ思入あつて涙を隱し、おさが呑まうとして咽せる、お淺背中をさすり。

お淺　あゝもし、嘸切なうござんしたらう。

仁作　これ惜しみはしねえから、ゆつくり呑まつしやい。

〽おさがは呑み干し、氣を取り直し。（ト　おさが殘りし酒を呑み思入あつて、）

さが　あゝよい心持に醉うたわいの。（ト誂への合方、蟲笛になり、おさが思入あつて仁作に向ひ、）これ仁作よの、醉うて言ふのぢやなけれども、人間は老少不定斯うして居てもお互ひに、明日の事は知れぬもの、まして此やうな長煩ひ今にも死ぬまいものでもない、若しわしが死んだ後親父どのが赦免になつて、内へ歸つてござればよし、歸らしやらぬ其時は年のゆかぬ娘ばかり、嘸やあとで困らうと、そればかりが明暮に案じられてならぬゆゑ、賴みに思ふはこなた衆夫婦、我が子となして行末長う、どうぞ世話を賴みます。

〽涙ながらに母親が、子の行末を賴むにぞ、仁作夫婦は不審顏。

ト おさが脇を向き泣居る、是れを聞きお淺ちつと思入、仁作思入あつて、

仁作 病氣のせゐか知らないが、何でそんな事を言はつしやるのだ、そりやもう願ふ事ではないが、ひよつと親父どのなりお前なり、そんな事があつたらば、決して跡を案じなさんな、兄弟とても只二人世話をしなくつてどうするものだ、然しそんな事をくよ／＼思ふが第一體へ障るから、餘計な取越し苦勞をせずと、喰ひたいものでもたんと喰ひ、力づくやうにしたがよい。

〽親は泣き寄り頼もしく、力を添ふればまだ娘、（ト お淺此内思入あつて）

お淺 そりや母さんの言はしやんす通り、若い者が死ぬ事やら年寄りが死ぬ事やら、是ればかりは知れぬもの、達者なやうでも生身ゆゑ、今にも死ぬまいものでもない、壽命づくなら仕方がないが、是れまで長々御養育の其御恩も送らずに、年取つた兩親に歎きを掛けるがおいとしい、頼みに思ふ子に放れ、力と思ふは伯父さん伯母さん、お前方ばかりゆゑお世話なされて下さりませ、それがお願ひでござりますわいな。

〽死ぬる覺悟に跡々の、事を頼みて泣き伏せば、（ト お淺わつと泣く、お繁思入あつて、）

お繁 えゝも、お前までが同じやうに、姉さんは年の上に煩うて居やしやんすから、言はしやんすも尤なれど、花なら莟の身の上で今死ぬるか何ぞのやうに、そんな忌はしい事を言はしやんすな、あ

あ鶴亀々々。したがそんな事でもあつたら、女子は女子同士ゆゑ母さんはわたしが引受け、きつと世話をして上げるかち、必ず案じなさんすな、然しそんな事があつてよいものかいな。

仁作　お丶さうだ〳〵、人間の生き死には知れぬで持つた浮世の中、それを取越し苦勞して泣くといふがあるものか、呑んだ酒も一つか二つ醉ふほどな事はないが、哀れッぽい事をいふは、二人とも泣き上戸だな。

お繁　ほんに、泣き上戸でござんすわいな。

〽言へど二人は答へもなく、涙に暮れゝば身につまされ、貰ひ涙に目をしばたゝき、

ト仁作愁ひの思入あつて、

仁作　そんな事はあるまいと、思つては居るけれど、兩親には早く別れ、兄弟とても姉御と二人、貧乏暮らしに金づくの力にはなれぬけれど、明け暮れ兄貴は何うしたか、姉御に替りはあるまいかと、口へ出さぬ日とてはない、詰らぬ物でも二つあれば一つ宛分けて喰ふ、其兄弟に別れたら嘸樂しみもない事だらう、互ひに年も取つたれば今のやうな事をいはれると、急に別れでもするやうで、おらア何だか悲しくなつた。

〽わけも涙を手拭で、ぬぐふ傍から女房が、（ト手拭て涙を拭ふ、お繁同じく愁ひの思入あつて、）

お絮　おゝ嘸悲しうござんせう、さつきからわたしも何だか心細うなつて來た、機の絲取り縫仕事、相談相手の姉さんに、若しもの事でもあつたらば、誰を便りにしませうぞいな。
仁作　老少不定といふからは、まだ其上にお淺にでも、別れたら何うであらう。
お絮　どうの斯うのと年寄りは、順道な事ながら、逆さま事でもあつた日には。
仁作　たまつたものでは無いわいやい。
〽わつとばかりに大聲上げ泣き入る夫婦に親と子が、かゝる歎きをさす事かと、苦しき心取直し、笑ひに紛らす年の功。
ト仁作夫婦わつと泣出す、おさがお淺よろしく思入あつて、おさが氣を取直し、
さが　あゝ二人とも其やうに、何で泣く事があるものか。今死にでもしはせまいし。
お淺　父さんが歸つて來て、逢ふを樂しみにして居やしやんすれば、假令どんな事があらうとも死なしやる事ではないわいな。
さが　娘も若い身の上なれば、そんな事があらうかいな、それをその樣に泣くといふは。
お淺　人の事よりお前方が、泣き上戸でござんすぞえ。
さが　ほんに、泣き上戸ぢやわいの。

兩人　ほゝはゝゝゝ。

〽涙呑み込み打笑へば、（トおさがお淺無理に笑ふ。是れにて仁作お繁思入あつて、）

仁作　成程お淺がいふ通り、

お繁　わたしら二人が、

兩人　泣き上戸ぢや、ほゝはゝゝゝ。

〽親子同胞諸共に、果ては笑ひとなりにけり。（ト皆々笑ひ、よろしく思入あつて、）

仁作　あゝ目出たい〳〵、いつの間にやら泣き上戸が、笑ひ上戸となつたわい。（ト四つの鐘。）おゝ、あの鐘はもう四つだな。

お繁　いつの間に、五つを聞き損なつたか。

さが　さあ〳〵、道も遠い事なれば、更けぬうちに行たがよい。

仁作　いや、今夜は泊つて行きませうか。

さが　泊つてくれるは嬉しいが、子供が內で案じよう。

お繁　ほんに待つてゞありませうわいな。

仁作　そんなら今夜は歸るとして。

お繁　また明日参りませう。（ト合方にて兩人立上る。）
お淺　もし伯父さん、惡い犬が山際に居るといふ事だが、氣を附けて行かしやんせ。
仁作　それには幸ひ棒がある。
〽天秤代りの竹携へ、門へ出づれば、
ト仁作以前の竹を持ち、お繁も共に門へ出る、おさが思入あつて、
さが　あゝこれ、仁作どの。
仁作　何ぞ用かえ。
さが　是れこなたに。
仁作　え。
お淺　わたしもお前に。
仁作　何だと。
〽聲をも出さずしめ泣きに、泣き入るお淺に女房が、（トおさがお淺是れが別れといふ思入。）
お繁　えゝ、また泣き上戸かいな。
仁作　まだ醉ひが覺めぬと見える。

〽仁作夫婦は打連れ立ち、畔道傳ひ行き掛けしが、（ト仁作夫婦花道へ行き思入あつて）

なんだか、おつな素振りだな。

お繁　跡に何ぞなければよいが。

仁作　いや、氣遣ひなこともあるまいわい。（ト お淺門口から顔を出し）

お淺　まだ行かしやんせぬか。

仁作　おゝ、草履の鼻緒をたてゝ居たのだ。

〽心殘して立歸る、〽跡に親子はとつおいつ。

ト時の鐘にて、仁作お繁花道へはひる。お淺跡を見送り、ちつと思入、おさがこなしあつて、

さが　あゝ持つべきものは兄弟ぢや、仁作とても水呑百姓、其日に困る身の上で、麥が五升に味噌醤油、是れで明日からない後も、いやさ、當分これで喰べるに困らぬ、こんな嬉しい事はない。

〽後を案じる母親の、側に娘が無理酒に、茶碗で呑むを見るよりも、

ト お淺思入あつて、茶碗にて酒を呑む。

あゝこれ娘、何でそんなに呑みやるのだ。

お淺　あい、呑みたいから呑んだのでござんす。

さが　不斷嫌ひで呑まぬのに、無理に呑まずとよい事を。
お淺　呑みたいから呑みますが、惡くば止しにしませうわいな。
〽常に替つてあらけなく、手に持つ茶碗投げ出せば、（トお淺茶碗を投げる。）
さが　さあ惡いとは言はぬけれど、跡で苦しからうと思ひ、それでよせと言うたのぢや、好きならたんと呑みやいの。
お淺　いえ〳〵もう〳〵よしませう、好きな酒でも留められては、二度とは呑む氣がござんせぬ。
さが　それ程そちが呑みたいを、留めたはわしが惡かつた、さあ〳〵最一つ呑んだがよい。
お淺　いえ〳〵、わたしやいやでござんす。
さが　はて、さう言はずと、呑んでくりや、わしが酌をしてやりませう。
〽徳利を取つて母親が、つがんとなすを振拂ふ、はずみに落して流るゝ酒。
トおさが徳利を取り酌をしようとするをお淺態と振拂ふ、是れにて徳利を落す。
あゝ、これはまあ勿體ない、高い酒をば疊に呑ました、まだまあ跡にあらうから、早う呑んでくりやいの。
お淺　えゝも、いやでござんすといふに。（トきつと言ふ。）

さが　へけんもほろゝの挨拶に、母はおろ〳〵娘に縋り、（ト誂への合方になり、）これ娘、いつにない愛想づかし、常とは違うて親父どのが、田地の事から獄屋へ行き、明日をも知れぬ命の際、仁作夫婦が親切にしてくるれど近所に居ねば、便りにならず、ほんに杖とも柱とも、思ふはお淺そちばかり、それに酒を留めたというて、親子の中で其やうに何も腹を立ていでもの事、それも是れも此母が惡く思うて言うたのぢやない、女子は酒を呑まいでも濟むことなれば此後ともに、必ず止しヤや。

お淺　いゝえ、わたしや止しませぬ、今日あつて明日知れぬ果敢ない人の身の上ゆゑ、好きなものも呑んだ上氣隨氣儘を言ひ通し、仕度い事をして死ぬのが、其身の德でござんすわいな。

さが　そりやもう男に生れたら氣隨氣儘もよいけれど、譬にもいふ三界に家のないのが女の身、幼い時は親に隨ひ中年にして夫に隨ひ、老いては子に隨はねばならぬといふも知りながら、何でそんな事をいやるぞ。

お淺　えゝも言うても下さんすな、そりや人らしい人のいふ事、世間の娘は五節句や物見遊山に行く時には、綺羅を飾つて行くけれど、こんな家に生れたが身の不祥とはいひながら、此年になるまでに襟肩明いた着物というては、去年の夏鎭守の祭りの揃ひの浴衣を着たばかり、春になつても暮

のまゝ髪の飾りも藁より外掛けたことがござんせぬ、芝居は表の看板を、見るのみが此身の樂み、たゞ見る花さへ碌々に、盛りに行つた事のない生き甲斐のないわたしの體、それも惡い親を持つたとあきらめては居たけれど、せめて好きな酒でも呑まねば、生きて居る氣がござんせぬ。

さが　其恨みも尤ぢやが、今も言やる五節句などに餘所外の子が着飾つて、出る時そちにも同じやうに、着せて遣り度く親父どのと、相談するを悟つてか、風を引いたり頭痛がするのと、外へも出ずに内に居て、親の心を休めてくれるは、着せてくれとねだられるより、遙に辛い事であつたに、其まあ優しい心に引替へ、今日に限つて此やうな、事をば何で言やるのだ。

お淺　是れほど我慢をしましたが、貧しい暮しに飽きたゆゑ、愛想づかしを言ひますのさ。

さが　貧しい暮しに飽きたといひ、愛想づかしを言やるからは。

お淺　お前を捨てゝ出て行きます。

さが　すりや、煩うて居る此母を。

お淺　知れた事ぢやわいな。

〽愛想づかしのありたけに、

さが　おゝ、さういふ心であるならば、そなたの氣儘にしたがよい。如何に落目になればとて、十六年

が其間、手しほに掛けて育てたる子にさへ愛想をつかされるもの、他人は構うてくれぬ筈、そちも愛想がつきたらば、こつちもそちに愛想が盡きた、勝手な所へ出て行きやれ。

お淺　出て行かいでかいな。

さが　可愛い我が子に捨てられても、跡へ心が引かされぬ。

お淺　わたしもさつぱりしたわいな。

〽口と心は裏表、涙隱して門口へ、出て行く娘が後影、見る母親は堪り得ず、

トお淺よろしく思入あつて、門口へ出掛ける、おさが思入あつて、

さが　あゝこれ、娘待ちや。

お淺　え、何でござんす。

さが　行くなら親子一世の別れ、よう顏を見て行きやいの。

お淺　何と言はしやんす。

さが　最前からの愛想づかし、合點行かじと思ひしが、察する所親仁どのを、助けん爲めに自害して死ぬる心であらうがな。

〽星を指されて吐息をつき、（トお淺ぎつくり思入、誂への合方、）

お淺　どうしてそれを知らしやんした。
さが　知らいでならうか此母も、夫の命を助けたく、此世を捨つる心ぢやわ。
お淺　え、そんなら母さん、お前もやつぱり。
さが　此二三日がむづかしいと、人の話しに聞いたゆゑ、死ねばというても我が家へ、呼んで往生させたさに、夫の罪を引受けて、死ぬる覺悟であるわいの。
お淺　おゝ、わたしとても同じ事、此身を捨てゝ父さんの、命に代る心でござんす。
さが　言ひ合さねど親子とも、心は同じ夫の身替り、
お淺　種腹かはらぬ親子とて、
さが　かうも心の、
兩人　合ふものかいなあ。
〽親子手に手を取交し、暫し泪に暮れたりしが、
さが　さあ、死ぬのはわしが死ぬるから、そなたは跡の始末を賴む。
お淺　いえ〳〵死ぬのはわたしが死ぬから、お前は跡で父さんの、無事なお顏を見て下さんせ。
さが　いや〳〵、生ひ先き長い子を先立て、跡に殘つて居られうぞ、是非ともわしが死ぬわいな。

お淺　いえ〳〵わたしが、

さが　いや、わしが、

互ひに爭ふ貞節孝心。（ト兩人爭ふ思入にて、）

それ程に思ふなら、二人一緒に死なうわいの。

お淺　そんならお前、どうあつても、

さが　生甲斐のない身なれども、可愛やそなたを殺すのが、

お淺　何のそれも父さんの爲、

さが　また夫の爲なれば、今日を限りに親子とも、

お淺　親や夫の身替りに、跡へ一筆書き殘す、

さが　其筆に似た朝顏も、

お淺　蕾のまゝに咲きもせで、

さが　葉に置く露と諸共に、

お淺　あすをも待たで今宵のうち、

さが　枯れ行く親子が、

兩人　此世の名殘り。（ト是れなきつかけに誂へ獨吟になり、お淺門口へ掛金をかけ、硯箱を出し、）

お淺　さあ母さん、少しも早う書置を、

さが　書きたいにも煩うて手が顫へ、其上に心も心ならざれば、そなたよいやうに書いてくりや。

お淺　何と書いてようございんすか、わたしには書けぬわいな。

さが　はて、年は行かねど書く物は、わしより遙に勝つたれば、案文をして書いてくりや。

お淺　そんならわたしが書く程に、惡くば直して下さんせいな。

〽言ひつゝ取つてする墨も、にじみ勝ちなる物思ひ、筆の命毛切果てし親子の緣の薄紙に、願ひのたけの軸さへも、ふるうて聞くや鐘の音に、いとゞ無常の身にしみて、

ト跡地藏經になり、又獨吟になり、お淺は墨をすりおさがは佛檀の下より、手習机を出し抽斗より、淸書双紙を出し、末にある白紙を切つて出す、お淺取つて考へながら書置を書く、おさがは佛檀より香爐花立を下し机の上へ並べる、お淺書置を書き仕舞ひ、おさがに見せろ、おさが讀んで見て、是れでよいといふ思入、お淺以前の出刃庖刀と鎌を持つて來る、是れまでにて獨吟一杯に切れ、

お淺　あ、折も折とてあのやうに、

さが　死ぬる今際の地藏經、

お淺　最前願ひし御佛の、

さが　親子のものを導きたまふか。

お淺　あれを力に、

さが　少しも早う、

兩人　南無阿彌陀佛。

〽南無と覺悟はしながらも、今更名殘りの惜しまれて、見交す顏が此世の別れ、母が吹き消す燈火と、共に突き込み苦しむ親子。

ト此內兩人顏見合せよろしく愁ひの思入あつて、おさが燈火を吹き消し、庖刀を喉へ突き立てアッといふ。此聲にお淺後れじといふ思入にて、鎌を喉へ突き込み、どうとなり兩人苦しむ。時の鐘。

〽血筋の緣に引かされて、仁作夫婦は立戻り、

ト時の鐘ばた／＼になり、花道より以前の仁作夫婦出來り、烏笛になる。

仁作　月夜烏か知らねども、心にかゝる烏鳴き、

お繁　殊にわたしが胸騷ぎ。

仁作　なんでも是れは、たゞではない。

〽心ならずも門の口、明けんとなせど明かざれば、
ト仁作門口を明けようとして明かぬゆゑ、門口を叩き、
これお淺、ちよつと爰を明けてくれ〳〵。
お繁　もし、唸る聲が聞ゆるぞえ。
仁作　是れはどうかしたのだわえ。これ仁作だ。明けてくれ〳〵。
〽門の戸叩き呼はるは、仁作の聲に是れ幸ひ、お淺は書置渡さんと、手負ひながらもゐざり出で、苦しさ怺へやう〳〵と、一息ついては一膝進み、明けんとなせど力なく、どうと倒る途端の拍子、門の戸毀し踏み込む仁作。
ト此内お淺よろしく思入あつて、門口まで這ひ出で、門口を明けようとしてどうとなる、此時仁作門の戸を毀し内へはひる。忍び三重樣の合方にて、
あゝこりや眞闇だ。(トお淺に躓き、)や、誰だ、お淺か、どうした〳〵。
〽探る手先へ附く血糊の、ねばりに仁作は打ち驚き、
ト仁作お淺を探り、手に附きし血糊をさぐり見て、びつくりなし、
やあ、こりやお淺がどうかして居る。

お繁　え、お淺がどうかしましたえ。
仁作　これ、燈火を早くつけてくれ。
お繁　あい〳〵。
〽あいとはいへど燧箱、急に知れぬに焦立ちて、（トお繁四邊を探り居る。）
仁作　これ〳〵、そこに蚊燻しの火があるやうだ。
お繁　やうやく附木が知れたわいな。
〽心急げば附き兼ぬる、附木の濕りやう〳〵と、うつす火影に見てびつくり、
ト此内仁作はお淺を抱へ二重よき所へ來る、お繁は行燈へ明りを附け、兩人おさがお淺を見てびつくりなし、どうとなり、
仁作　やあ、こりやお淺、
お繁　何で自害を、
兩人　したのぢやぞいの。
〽抱き起して勞はれば、手負は苦しき息を吐き、
ト仁作はおさが、お繁はお淺を抱き起し、兩人思入あつて、

さが　お丶仁作どのか、親子二人が死ぬるのは、
お淺　獄屋へ行かれし父さんの、
さが　命をどうぞ、
兩人　助けたく。
仁作　えゝお前方が死んだとて、兄貴は盜みの罪あれば、どうまあ御免になるものぞ。
お繁　早まつた事しなさんしたなあ。

〽いふにお淺は這ひ寄りて、机の上の書置取上げ、（トお淺膝行り寄り、机の上の書置を取り）

さが　どうぞ二人が此書置、代官所へ上げて下され。
お淺　親子の命捨てたのを、不便と思召すならば、
さが　お助けなされて下さりませう。（ト書置を出す、仁作取つて）
仁作　むゝ、すりや此書置を代官所へ。
お繁　どういふ願ひか仁作どの、ちよつと讀んで見やしやんせ。
仁作　おゝ、さうぢや〳〵。

〽お繁が行燈かき立つれば、仁作は書置打ちひらき、（ト仁作書置を開き見て）

「一筆申上げ候、杣右衛門こと、此度御胡散にて、御上樣の御苦勞に相成り恐れ多く存じ候、此儀は杣右衛門にては御座なく私共に御座候間、親子の者自害いたし申し候、何卒御上樣の御情下したまはり、杣右衛門を繩を解いて御召返し下され候やう偏に御願ひ申し上げ奉り候、杣右衛門近來は中風と癇症にて上へのぼせ、申す事も何やら相分り申さず、猶々恐れ多く候、間違ひの事申し上げ候とも其儀は御免下さるべく候、心得違ひの儀は杣右衛門にては御座なく候、親子の者に御座候間、何卒御胡散晴して御召返し下さるべく候、病身者ゆゑ親類中へ世話いたしくれ候樣に御願ひ申し上げ奉り候。杣右衛門妻さが、娘あさ、御代官所御役人中樣。」（トよろしく讀んで）此書置を上げたなら、御免になるに違ひない、流石は元が苗字まで名乘る程の百姓とて。

お繁　よう死ぬる氣にならしやんした。

仁作　天晴娘は來世の鑑だ。

へ横手を打つて感心なす、折柄窺ふ庄屋が駈け入り。

ト此以前、書置の前より以前の庄屋弓張提灯を持つて下手より出て、門口に窺ひ居て、此時内へ入り、

庄屋　樣子は門で殘らず聞いた、其書置を出さつしやい、少しも早く代官所へ、おれがお屆け申してやらう。

お粲　おゝ、よい所へ庄屋さま。

仁作　少しも早く頼みます。（ト書置を渡す。）

〽尻端折りて一目散、役所をさして走り行く。

トばた／＼になり、庄屋尻を端折り、逸散に花道へはひる。

〽跡に仁作は手負に向ひ、（ト竹笛入り床の合方になり、仁作おさがを介抱して、）

これ、苦しからうが待たつしやい、今庄屋どのがこなた衆の、書置を持つて行かれたから、今に親仁どのが御免になつて、内へ歸つてござるぞよ。

さが　おゝさうでござんしたか、どうぞ息のある其内に、ならう事なら娘に、

お淺　一目逢うて行きたいわいな。

お粲　おゝ尤ぢや／＼、逢ひたうなくて何とせう。

仁作　言ひ置く事でもあるならば、今の内に言つたがよい。

さが　外に言ひ置く事はなけれど、わたしがない其後は、一家はあれど頼み少なく、力と思ふは伯父さん夫婦、どうぞお頼し申します。

仁作　其事なら案じなさんな、三度のものを二度喰つても、わしが引受け世話をします。

さが　えゝ、嬉しうござるわいの。
お淺　まだ父さんはござんせぬか。
お繁　もう今に歸つてぢやわいの。
さが　どうぞ早う逢はせてやりたいもの。
仁作　此間に歸つてござればよいが、代官所まで餘程の道、後の祭りにならねばいゝが。
お淺　これ伯母さん、水を一口下さんせ。
お繁　あい〳〵。（ト立ち掛ける、）
仁作　あゝこれ〳〵、手負に水は禁物だ。これ、それよりやあ庄屋どのが、最う歸つてござる時分だ、門へ出て見て居やれ。
お繁　あい〳〵。（ト門口へ出る。）
さが　仁作どの、まだかいの。
仁作　最う直きだ〳〵。
〽お繁は門に延び上り、目も放さずに打ち見やり、
お繁　もしこちの人、向うから庄屋さまが、兄さんを肩に掛け、息せき切つてござるわいの。

仁作　なに兄貴が歸つて來た。これ、親仁どのが歸らしやつたぞ。

さが
お淺　えゝ、歸らしやんしたかいの。

〽飛び立つ思ひに氣はあせれど、深手に弱りどうとなり、呼吸の息の絶え〴〵に、

トおさがお淺嬉しき思入にて、出ようとしてどうとなり、苦しき思入、仁作介抱して、

仁作　これ、今歸つてござるから、氣をしつかりと持たつしやい。

さが
お淺　あい〳〵。

仁作　これお繁や、まだ間があるか。

お繁　いえ〳〵、最う直きぢやわいな。

仁作　此息のあるうちに、逢はしたいものだ。

さが　仁作どの、まだかいの。

お淺　早う逢ひたいわいの。

仁作　おゝ、今逢はせるぞ〳〵。

お繁　それ、最うござんしたぞえ。

〽待つ間ほどなく、百姓が提灯持つて先きに立ち、獄屋の疲れにひよろ〳〵と、足もしどろ

に杣右衛門、轉ぶを庄屋が肩にかけ、汗を流して駈け來たる。

ト此内花道より○△の百姓兩人、弓張提灯を持ち、杣右衛門窶れたるこしらへにて、庄屋の肩に掛り出ゝり、直ぐに舞臺へ來て、

庄屋　これ仁作どの、親仁を連れて來ましたぞ。

仁作　おゝ、庄屋さま。

仁作 お繁　御免になりましたか。

△○　悦ばつしやれ。

庄屋 ○△　御免になつた〳〵。

〽杣右衛門は見るよりも、手負を抱へ、（ト杣右衛門内へはひり、おさがお淺を抱へ）

杣右　これ女房、娘、様子を聞いたがそち達の、お蔭で御免になつたわいの。

〽いふに手負は取り縋り、（ト兩人杣右衛門に縋り附き）

さが　おゝ、こちの人、

お淺　父さん。

兩人　御免になりましたか。

杣右　おゝ、御免になつたわ。（トきつと言ふ。）

兩人　えゝ、嬉しうござんす。

〽赦免ときいて氣も弛み、（ト兩人がつくりとなる。）

仁作　これ、氣を慥に。

皆々　持たつしやれ。

杣右　これ、おさが、お淺、あゝ最う締は切れたか。（ト手を放す。兩人俯伏せになる。）

仁作　たゞこなたに逢ひたい〳〵と、思ふ心ばかりで、

お粂　今まで生きてござんしたのだ。

庄屋　こなたに逢うて嬉しやと、

○　思ふと直ぐに、

△　死んだのぢや。

杣右　死んでくれたは忝けないが、女房娘を先立てゝ、跡に殘つて何樂しみ、おゝさうぢや。

〽有合ふ鎌を取るより早く、死なんとなすを押し止め、

ト杣右衛門鎌を取つて腹を切らうとする、仁作あわてゝ押留め、

仁作 あゝこれ、兄貴早まらつしやるな、こなたの命を助けたいばかりに死んだ二人の衆。
お繁 今お前が死ぬ時は、ほんの犬死になりますぞえ。
杣右 それぢやというて田地はなし、二人に死なれて明日から、命を繋ぐことが出來ぬ。
〽悔み歎けば門口に、樣子窺ふ水間左門。
ト此以前下手より前幕の役人水間左門捕手二人弓張提灯を持ち隨ひ出て、門口に窺ひ居て、
左門 あいや、その儀は氣遣ひいたすな。
〽言ひつゝ入れば上座へ敬ひ。
庄屋 これは〳〵思ひ掛けない、
皆々 左門樣。(ト左門上手床几へ掛け、)
左門 烈女二人が功に愛で、質入をせし田地は殘らず、有難くも上より受戻して下さるぞ。
杣右 え、すりや田地を下したまはるとか。
左門 まだ其上に、强慾非道なる鄕兵衞は申すに及ばず、高利を貪る金貸與九兵衞、彼等に過怠申し附け、月々そちを貢がす程に、養子をなして家名を立て、二人が菩提を弔うてやれ。
杣右 あゝ、返す〴〵もお上の御慈悲、

皆々　有難うございまする。

杣右　われは是れより剃髪なし、二人の者の菩提をとひ、是れなる仁作に悴があれば、それを貰うて家督を繼がさん。

お繁　何にもせよ此事を。

仁作　二人に聞かしてやりたいものだ。

左門　相續の儀も舊來の家柄ゆゑ、私にはならねども、それも某お上へ願ひ、よしなに計らひ得さすであらう。

〽はかなき體を抱き起し、二人は耳に口寄せて、（ト杣右衞門はおさが、仁作はお淺を抱き起し、）

杣右　これ、そちが貞心娘が孝心、

仁作　お上から御褒美として、

杣右　田地を殘らず、

兩人　下されたわいの。（トきつと言ふ、おさがお淺目を明き、）

さが
お淺　むゝ。（ト思入。本釣鐘、）

〽言ふ聲耳に通じてや、につこと笑ひ兩の手を、合すが此世の名殘りにて、

ト兩人につこり嬉しさ思入にて、幽に手を合せがつくりなる。

杣右　迷はず往生しやいの。

〽末世の鑑天下一、譽は世々に輝きけり。

ト兩人落入り、愁ひの思入よろしく、本釣鐘にて、

四幕目

鎌倉花水橋の場
同　染川二階の場
長谷小路妾宅の場

（淨瑠璃）やの字結びも打とけて　貸浴衣汗雷　（清元連中）

〔役名――眞野屋德兵衛實は盜賊神道德次、奥女中竹川實は須走りお熊、瀨田保之助、小道具屋悟市、堅田の若黨佐五平、幇間花山、船頭目玉の勘次。德兵衛妾お初實は堅田の娘早衣、同下女お山、染川の娘お柳、茶屋女お照等。〕

（花水橋の場）――本舞臺三間上手より斜に橋の袂を見せ、欄干に開帳の提灯を繩にてからげ、此傍に見世物小屋の後を見せ、開帳千部の札など數多建て、正面より下手へ掛け葭簀張りの出茶屋、軒口に

團子提灯煎じ茶の掛行燈、其外茶道具一式飾り、總て鎌倉花水橋の模樣、よき所に床几二三脚並べ、〇△□の仕出し三人腰をかけ、茶屋女島田鬘前垂掛けにて茶を出して居る、此見得辻打ちにて幕明く。

茶女　どなたも、お茶をお上りなさりませ。（ト仕出し銘々茶碗を取り、）

〇　姉さん、大層お開帳が當つたので、お前方も仕合せだね。

茶女　誠に有難いことに、今度のお開帳のやうに、人の出るのはすけなうございますわいな。

△　それに大層な奉納物だね。

□　聞けば奉納物の番附が出來たさうだね。

茶女　はい、私どもにもございますわいな。

〇　あるなら、ちよつと見せなせえ。

茶女　畏りました。（ト葭簀の内より淨瑠璃の觸書を持つて來り、）是れでございますわいな。

△　どれ〳〵ちよつと讀んで見よう。

□〇　「東西々々。」

△　「淨瑠璃名題――、淨瑠璃太夫清元延壽太夫――、三味線清元――、相勤めまする役人、市村家橘、坂東彥三郞」こりやァをかしな奉納ものだなあ。

△○　何だか間違つたやうだぜ。
茶女　分りました最前茲へ清元の太夫さんが、ちよつとお寄りでござりましたが、其時忘れて行つたのでござりませうわいな。
□　道理こそ、をかしいと思つた。
○　をかしいと言へば、天氣がをかしくなつて來たぜ。
△　降らねえ内に出掛けようぢやあねえか。
□　行くは行くが、默つても引つ込めまい。「いよ／＼此處淨瑠璃始まり、其爲奉納はやう。」
ト觸書を茶屋女に渡す。
△○　いや、惡い洒落だ。
三人　はゝゝゝ、さあ行かう／＼。
トやはり辻打にて仕出し下手へはひる、茶屋女は葭簀の内へはひる、跡輕業人寄せの合方になり、花道より保之助剃立て着流し、大小脚絆草履にて手に菅笠を持ち、跡より佐五平紺看板海鼠襟の合羽、一本ざし脚絆草鞋がけにて、やはり手に菅笠を持ち出で、兩人花道に留り、
保之　我が國許なども、都近いとは申せども、なか／＼及ばぬ鎌倉の繁榮、あゝ夥しい群集ぢやなあ。

佐五　それに此花水橋は、當所一番の盛り場でござりますれば、又別段の事でござりまする。

保之　かやうに人出入り多い所を、毎日捜し歩けども、今に知れぬ姉上の御行方、何れにござる事ぢややら、どうぞしてお目に掛りたいものぢやが。

佐五　何にいたせ若旦那さま、道中に居つては往來の妨げ、幸ひあれなる茶屋にて、ちと御休息なされませ。

保之　いかさま、左樣いたさう。

佐五　先づお越しなされませ。

　トやはり右鳴物にて保之助先に佐五平舞臺へ來る、此内上手より一二三の侍三人、何れも馬乘袴大小にて三人とも酒に醉ひたるこなしにて出來り、舞臺よき所にて双方行合ひ、一態と保之助に突當つて轉び、

一　あゝ痛え〳〵、腰の骨をぶつた〳〵、あゝ痛え〳〵。（ト仰山にいふ、保之助慌て一を引起し、）

保之　これは〳〵、ほんの是れが出合頭、どうか御料簡下され。

一　なに、ほんの出合頭だ、とんだ事をいふ侍ぢやあねえか。

二　假令出合頭にもせよ、相手に怪我をさせながら、たゞ料簡しろとばかりで濟まうと思はつしやる氣か。

三　畢竟申さば其許が、氣を附けて歩かつしやれば、かやうな粗相は出來ぬ。
一　それを貴殿がうか〳〵と、餘所見をして、
三人　歩かつしやるからだ。（トきつと言ふ。保之助思入あつて、）
保之　其お憤りは御尤ながら、拙者ことは御覽の通りの田舍武士、初めて出府いたせしゆゑ、御當所の勝手も存じませず只今の無禮の段、幾重にも御詫び仕つれば、どうかお勘辨なし下さりませう。
ト中腰になり、手を突いていふ。
一　すりや何と言はつしやる、田舍武士で當所の勝手を知らぬから、勘辨しろと言はつしやるか。
保之　如何にも左樣。
一　置かつしやい、あんまり人を馬鹿にさつしやるな。
二　假令田舍であらうが、アメリカであらうが、武士の禮儀に替りはござらぬぞよ。
三　あまりといへばお手前、物を知らぬ侍だ。
一　さあ此儘では相濟みませぬ、武士の一分、
三人　立てさつせえ。（ト此内佐五平始終口惜しき思入にて、此時前へ出て、）
佐五　もし〳〵、そりやあなた方、あんまり御無體と申すものでござりまする。

一　やい／＼下郎め、無體とは、

三人　何が無體だ。

佐五　さればでござりまする、下郎がよく見て居りました、あなた方こそ、御酒機嫌でお出でなされ、こつちで避けるをそつちから、よろめきながら突當り、自分の勝手で轉んで置いて、それをば若旦那が粗相のやうに、言ひたいがいの惡口雜言、お侍にも似合はぬなされ方、それだによつて御無體と、申したのでござりまする。

一　うぬ、下郎の分際といたして、武士に向つて慮外の一言、わいらが存じた事ではない、すつこんでうしやあがれ。（ト扇にて佐五平をきつと打つ、佐五平むつとして、）

佐五　最う料簡が。（ト立ち掛るを保之助留めて、）

保之　これはしたり、お歴々へ對しいかゞいたした儀ぢや。

佐五　それだと申して。

保之　はて、控へて居らうぞ。（トきつと言ふ、是れにて佐五平是非なく控へる、）

○　何の事だ、やい下郎め、留めるを機會にすつこんでうせずとも、腹が立つなら是れへ參つて、

三人　さあ、相手になれ／＼。（ト三人立ち掛るを保之助さゝへて、）

保之　あゝ各方、高が下郎の一人位、お歴々の其許達がお相手になられたとて、餘りお手柄にも相成りますまい程に、下郎が無禮は拙者替つてお詫いたせば、何卒お見許し下されい。

一　成程高が下郎、相手にいたすは大人氣ないから、許してやれいと言はつしやるのか、こりや尤ちや、なう御兩所。

二　いかさま下郎の魂、竹光では身共達の相手にはなれまい。

三　彼れを助けて遣はす代り、貴殿相手に、

三人　ならつせえ。

保之　是れは又いかな事、生若輩の某が、お歴々の各方へ、なか〳〵以てお相手などゝは。

一　ならずばよい、然らば下郎を相手にいたさう。

保之　あゝいや、其儀は只管。

二　然らば貴殿相手になるか。

保之　ぢやと申して某が、

三　そんなら下郎か。

保之　さあ其儀は、

三人　さあ、
保之　さあ、
皆々　さあ〳〵〳〵。
三人　きり〳〵と、返事をさつせえ。(ト是れにて保之助是非なき思入)
保之　是非に及ばぬ、如何にもお相手仕らう。
一　面白い、御兩所よろしうござるか。
兩人　心得申した。

ト三人股立を高く取り、下緒を取つて襷にかけ、刀の目釘を濕して居る、保之助是れに構はずちつとして居る、佐五平見て氣の揉める思入。

佐五　若旦那、あなたもお支度はよろしうござりまするか。
保之　氣遣ひいたさず、そちはそれにて見物しやれ。
佐五　よろしうござりまするか。(ト保之助を案じる思入にて控へる、此内三人支度なし保之助の體を見て)
三人　さあ、早く支度をさつせえ。
保之　いゝや拙者は此儘、御用意よくば各方。

三人　なに、ちよこざいな。

ト三人保之助へ切つて掛るを保之助拔合せ、三人を相手にちよつと立廻り、よき見得より見世物の鳴物を借り、立廻りの内、佐五平此中へはひり、保之助の加勢をなし、可笑味の立廻りなどよろしくあつて、トゞ保之助三人を打倒し峰打にする。是れにて三人這々の體にて下手へ逃げてはひる、保之助嘲笑ひながら刀を鞘へ納める、佐五平嬉しき思入にて、

佐五　あゝ若旦那、お手柄でござりました、是れでお國へ一つのお土産が出來ました、やれお出來しなされましたなあ。（ト兩手を上げ保之助を煽ぎ立てる。）

保之　いや、口ほどにもない奴等ぢやわい。

ト言ひながら着物の塵を拂ひ、床几へ掛ける、此時葭簀の蔭より茶屋女、盆に茶碗を二つ載せ持ち出來り、

茶女　さあお茶一つお上りなさりませ。（ト保之助佐五平茶碗をとる。）誠にあなた、只今の侍をよう酷い目に逢してやつて下さりました、あの三人は毎日茲らへ參りまして、門並荒らして歩きまする、惡い奴でござりまするわいなあ。

佐五　そんならもつと酷い目に、逢はしてやればよかつた、惜しい事をしましたな。

ト此内葭簀の蔭より眞野屋徳兵衞羽織着流し一本ざし、町人のこしらへにて窺ひ居て、保之助の體を見て、感心の思入あつて前へ出て、

徳兵　もしお侍樣、町人風情の私が申すも甚だ失禮ながら、只今あなた樣のお手の内、葭簀の蔭より拜見いたし、誠に感心いたしましてござりまする。

保之　是れは又、さしてもなき事をお褒めのお詞、御覽の如く拙者ことは旅がけにて、不知案内の所と申し、元より事は好みませねど、お聞きの通りの仕儀ゆゑに、據なく只今の仕合せ、面目次第もござりませぬ。

徳兵　してあなたは、何れが御生國でござりまするな。

保之　拙者は江州の者でござりまする。

徳兵　へい、然らば鎌倉御勤番に、お下りでござりまするかな。

保之　いえ、ちと尋ねまするものがござりまして、遙々罷り下りましてござりまする。

徳兵　左樣でござりましたか。（ト佐五平思入あつて徳兵衞に向ひ、）

佐五　それに附きまして、其許は御當所のお方とお見受け申しお尋ね申したきは、若しあなたの御近所にでも、年の頃は二十歳ばかりになりまする、細面で鼻の高いよい器量の娘御を、御存じはござ

りませぬか。

徳兵　それは空なお尋ねものでござりまするが、其お娘御のお名でも知れませぬかな。

佐五　只今では何と申さるゝか、以前の御名は早衣さまとおつしやりまして、生れはやはり江州でござりまする。

徳兵　え、それでは若しや江州の、佐々木の御家で、堅田さまの。

保之　や、どうしてそれをば。

徳兵　さあそれは、あの、おゝ、此間人の話しで承はりました。

保之　何をお隠し申さう、拙者ことは其堅田の悴にて、保之助と申すものでござる。

徳兵　それはまあ、思ひ掛けない、お初の御舎弟。

保之　や。

徳兵　いやなに、お初にお目に掛りましたが、此やうにお近附になります上は、ちと又尋の下邊な御通行の節は、小道具渡世をいたす、眞野屋徳兵衛とお尋ねなされば知れますから、是非お立寄りを願ひまする。

保之　これを御縁に、お尋ね申すでござりませう。

德兵　左樣なれば堅田さま、
保之　德兵衛どのとやら、
德兵　何れその內、
佐五　貴殿のお宅へ、
德兵　お待ち申して居ります。
ト輕業人寄せの鳴物になり、德兵衛思入あつて花道へはひる、保之助跡を見送り思入あつて、
保之　あの德兵衛といふ人は、どうやら姉者人の行方をば、存じて居る今の口振り。
佐五　比企ヶ谷の旅宿から、道の程も遠からぬ、雪の下に住ひをれば、
保之　宅へ戻りし時刻を待受け、
佐五　尋ね參つて事の實否を、
保之　糺して在所を、
佐五　先づそれまでは、
保之　一先づ旅宿へ。〔ト保之助身繕ひして立上る、此時後へ以前の三人窺ひ寄つて〕
三人　うぬ、さつきの返報。

ト切つて掛るを、ちよつと立廻つて保之助一を捻上げ三をきつと踏へる、佐五平は二を引附けろ。此見得佃のやうな早い合方にて道具廻る。

(染川二階の場)――本舞臺眞中より上の方二間半の屋體、一間茶壁の假床、細立物掛けあり、九尺の葭戸引ぬきになる事、下手九尺三尺の床の間、一間いきな襖を立て、此境緑張りの障子にて見切り、上の方斜に障子で見切り、下の方伊豫簾をおろしある隣り二階、よき所に階子の上り口、總て料理茶屋二階の模樣、爰に以前の德兵衞眞中に、悟市小道具屋のこしらへ、船頭、幇間花山、娘分お柳、女中おたい酒肴を取散らし、流行唄にて道具留る。

德兵　もし悟市さん、一つお上んなせえ。

悟市　へい、頂戴いたします。(トお柳酌をする。)

船頭　今日は旦那、花山さんには、呑ませねえ積りでござりますね。

花山　そりやア惡い洒落だ、一體何のお咎めでござりますえ。

たい　何もないものぢやわいな、今日は隣りの柏屋へ、お菊さんが來てゐるとお言ひぢやあないか。

お柳　そのお惚けの科ぢやわいな。

花山　いや、其咎めなら旦那も科は同罪でござりますぜ、お前さんこそ今日は長谷小路のお初さんの所で、散々お樂しみなすつて、私をお待たせなすつたぢやあござりませぬか。

德兵　馬鹿をいへ、今日はお初の所ぢやねえ、出掛けようと思ふと、生憎お出入り屋敷の旦那がおいでなすつて、つい話しが長くなつたものだから、それでこんなに遲くなつたのだ。

花山　さうでござりましたか、私やあまた、それと思ひきつて居る所へ、御妾宅へ定連の悟市さんが御一緒だかち、必定お立寄りだと思ひました。

悟市　何の、わしやあ旦那に用があつて、お宅へ上らうと思つて出掛けた所、丁度途中でお目に掛り、それから直ぐにこちらへお供をしたのさ。

船頭　とんだ疑ひを受けるものだ、是れだから人は常が肝腎だ。

悟市　自分だつて、あんまり好くもねえ癖に。

花山　これさ〱、先づ仲直りに一口おやんなせえ。（ト悟市船頭へ猪口をさす、德兵衞思入あつて、）

德兵　時に悟市さん、わしに用といふのは何だえ。

悟市　外の事でもござりませぬが、いつぞやあなたがお賴みなさつた、煙刀にそつくりといふ拵へのを、仲間内に持つて居るものがござりますから、ちよつとお知らせ申しに參つたのでござります る。

徳兵　そりやあお暑いに、わざ〳〵御苦勞でございました、然し其品はちよつと見る事にやあ行くまいかね。

悟市　思召しがございますなら、ちよつくり行つて借りて參じませうか。

徳兵　それぢやあ御苦勞ながら、茲に居るから一走り、行つて來ておくんなせえ。

悟市　畏りました、（ト立ち掛り、）若し旦那、御妾宅の前を通りますが、何もお言傳はございませぬか。

徳兵　いや、別に用はないから、どうぞ早く行つて來て、一口おやんなせえ。

悟市　それが樂しみでございます。

船頭　大きに御苦勞さまでございます。

悟市　どなたも御ゆるりと。（ト梯子口へはひる。）

花山　慾張りめ、儲け口だものだから、慌てゝ行きやあがつた。

たい　またお前、居ない人の事を惡くお言ひだよ。

お柳　さつきも澤山、旦那のことを。

徳兵　なに、おれが事を惡く言つた。

花山　旦那、嘘でございますよ。

船頭　言ひ兼ねえ男さ、それだから自分も癇な事を言はれるのだ。
德兵　いゝからたんとおれに楯を突きねえ。
花山　また旦那、いゝゝ、いやみ銀山、もし猫入らずといふ騷ぎを、一晩遣りませうぢやあござりませぬか。
船頭　嘘ばつかり、お菊が呼んで貰ひたからう。
花山　さういぢめッこなしに、旦那一つ召上りまし。
德兵　いゝ、おつウごまかしやあがらア。

ト是れより皆々捨ぜりふにて酒盛りになる、此内梯子口より下女お蔦出來り、下へ向ひ、

お蔦　さああなた、こちらへお出でなされませ。

ト始終流行唄にて、梯子口より竹川片外し、奥女中好みのこしらへ、跡よりお勝部屋方者のこしらへにて附いて出來る。

竹川　わたし共は二人だほどに、何處でもようござんすわいな。
お勝　あなた、同じ事なら、川の見える所がよろしうござりますわいな。
竹川　それでも明いてゐぬものを、仕方がないわいなう。

お氣の毒さまながら、ちとお狹うござりませうが、どうぞ是れにいらして下さりませ。

お蔦　もう只今にあちらのお座敷も、お明きになりませうから、少しの内お待ちなされて下さりませ。
お勝　明いたらば、直ぐ知らして下さんせえ。
お蔦　畏りましてござりまする。若しお女中さま、御酒でござりますか。
お勝　御酒はたんとは上りませぬから、直ぐに御膳にして下さりませ。
お蔦　左様なら御會席で、御中酒にいたしませう。
お勝　あい、何でもよいから、お薩摩芋と唐茄子をたんと煮て下さんせ。
お勝　はい、お好みなら煮て差上げませうわいな。
竹川　あゝこれ、其やうな物があるものかいの。女中さん、よいやうにして下さんせ。
お勝　畏りましてござりまする。
お勝　もし、御酒は少しでよいが、おまんまをたんと下さんせ。
竹川　又言やるかいの。
お勝　ほゝゝゝゝ、御常談ばつかりおつしやります。
トお蔦梯子口へはひる、竹川懐中鏡を出し顔を直して居る、お勝側から扇にて竹川をあふいで居る。
此内上手にては皆々酒盛のうち、徳兵衛扇遣ひをしながら。

徳兵　一日やつたせゐか、滅法著くなつて來た、ちつとそこらを明けちやあ何うだ。
花山　成程廣々とようござりませう。（ト下手へ行く）それに風口が塞いであるから、猶たまりませぬ。
　　ト言ひながら縁張り障子を明ける、お勝見て、
お勝　おや何だね、ぶしつけな、人の座敷を明けてからに。
花山　是れは眞平、御免なすつて下さいまし。
竹川　いえ、よろしうござりまする、明けてお置きなされませ、嘸お暑うござりませう。
花山　へい、有難う存じまする、是れは大きに失禮をいたしました。（ト詫びながら竹川の顔をじろ〳〵見て、そつと障子を立てこちらへ來り）若し旦那、素敵々々。
徳兵　けんつくを喰つて、あんまり素敵でもあるめえ。
花山　所がけんつくを喰はせた方は、だぼ沙魚を見たやうな女だが、明けて置いてもいゝと言つたのは、素敵な椎茸でござります。
船頭　そんないゝ椎茸なら、霍亂をしねえやうに、臍へ當てゝ置けばいゝ。
花山　常談ぢやあない、旦那が二丁目の太夫元贔屓だけ、御覽に入れてえものだ、そりやあ家橘そつくりといふ御殿女中だから、ちよつと行つて御覽なせえ。

徳兵　眞面目な顏をして、おれをかつがうと思つて、さううまく行くものか。

船頭　お待ちなせえ、わつちが一番瀨踏みをして來やせう。（トそつと行つて、障子の隙間より覗いて見て、）成程、こりやあ滅法だ。（ト大きく言ふ。）

徳兵　これ、靜にしねえか。（ト船頭口を抑へながらこちらへ來る、是れにて德兵衞そつと行つて障子の隙間より、竹川を見ていゝ女だといふ思入あつてこちらへ來り、）成程、ありやあいゝ女だ。

花山　もし、家橘そつくりでござりませう。

徳兵　あの位似たのはすけねえものだ。

お柳　おや旦那、本當でござりますかえ。

徳兵　よつぽどよく似て居るから行つて見な。

たい　お柳さん、おいでなさいよ。（トお柳おたい障子の隙間より覗いて居る、德兵衞見て、）

徳兵　みんな家橘贔屓と見えて、夢中になつて覗いて居るぜ。

花山　いゝ器量にやあ生れてえものだ。

船頭　それに側に居る女が、へんてこ面だから、猶よく見えるやうだ。（ト此時下手の屋體にて、）

お勝　はツくしよ。（ト嚏をする。）

船頭　爭はれねえものだ、あの顏色でも噂をしたら、嚏をしやあがらあ。

花山　大方風でも引くのだらう。

徳兵　風といやあ、あの御殿女中を見た時、いゝ女だと思つたら、ぞつとして酒が醒めたやうだ、一つついでくれ。(ト言ひながら猪口をとる。)

花山　旦那が戀煩ひをなすつたら可笑からう。

ト言ひながら酌をする。此内始終お柳おたいは覗いて居る。竹川思入あつて箱せこの中より文を取出し、

竹川　勝や、ちよつと耳を貸しや。

お勝　はい。(ト竹川お勝に囁き件の文を渡す、)そんなら是れを彼の所へ。(ト大きくいふ。)

竹川　あれさ、靜に言やいなう。(ト恥かしき思入にて、又ちよつと囁く、お勝吞込み。)

お勝　はい／＼よろしうござります、左樣なら行つて參ります。

竹川　早う返事を聞かせてたもや。

お勝　畏りましたわいな。

トお勝文を持ち、梯子の口へはひる。おたいお柳もこちらへ來り、徳兵衞思入あつて、

德兵　あのまあ隣り座敷に居る御守殿は、宿下りとも見えぬが何だらう、どうもおれには合點が行かねえ。
花山　先づ私の考へでは、御代參を假託に、ちよつと色男に出合ひといふ筋かと思ひますぜ。
たい　ほんにさうおつしやれば、今文を出してお供の女中に持たして、どちらへかお遣りなされましたわいな。
花山　それ、御覽じろツさ。
船頭　あゝ其色男になりてえなあ。
德兵　こいつァ氣の惡りい話しだ。（ト此時雨車薄く雷の音になる。）おや、ごろ附いて來たな。
船頭　いゝ鹽梅だ、みつしりと降ればいゝ、ちつとは涼しくなるだらう。
お柳　雷さまがいやでござんすなあ。
德兵　いや案じなさんな、きつい事もあるめえ。（ト此時雷の音強くなる。）うつかり噂も出來ねえ、こりやあ酷く鳴つて來た。
花山　隣りの御守殿女中は、一人で嘸怖からう。
德兵　いゝ世話やきだ。

ト花山立つて障子の側に窺ひ居る、竹川は始終耳を塞ぎ、うつ伏しになつて居る、此内お蔦梯子の口より出來り、

お蔦　もしあなた、お一人で嘸お怖うございませうな。

竹川　はい、わたしや雷さまはきつい嫌ひゆゑ、怖うて〳〵ならぬわいな。

お蔦　それはお惡うございますな、生憎また御女中さんが、どちらへかいらつしやいましたなあ。

竹川　いえもう、あれが居りましても、何の役にも立ちませぬ、斯ういふ時は男でなくては、心丈夫になりませぬわいな。

お蔦　ほんに左樣でございますわいな。（ト是れを聞き、花山うなづいて障子を明け、）

花山　もし、憚りながら、あなたお怖ければ、ちとこちらへ入らつしやいまし、あの通り男ばかりでござりまする。

德兵　これさ、お屋敷さまへ、失禮な事を申すな。

花山　それでもお怖いのは、我慢なされておいでなさると、お毒でござりますから、御遠慮なさらずにこちらへ入らつしやいまし。（ト親切さうにいふ、竹川思入あつて、）

竹川　これは〳〵御親切に有難うござりまする、實は最前より私方より、お願ひ申したい所でござり

ましたわいな。
花山　そんなら早くさう仰しやればよいに、さあ〳〵こちらへ入らつしやいまし。
竹川　有難う存じます。（トお蔦に向ひ、）參つてもよろしうござんすかえ。
お蔦　えゝ、宜しうございますとも。
竹川　左樣なれば、御免なされませ。
花山　さあ〳〵入らつしやりませ。（ト合方になり、竹川會釋してお蔦附いてこちらへ來る、花山德兵衞の側へ來り、）もし旦那、來ましたぜ。
德兵　こりやあ拾ひものだ。
竹川　え。
德兵　いえさ、こちらの廣い方へいらしやいましな。
竹川　いえ、是れで宜しうございますから、暫くお置きなされて下さりませ。
德兵　左樣ではございませうが、餘り端近でございます。
竹川　いえも、是れが勝手でございますわいな。
花山　何も御遠慮なさるには及びませぬ。

船頭　さあ〱あちらへおいでなさりませ。（ト竹川を無理に引立てようとするを竹川身を縮め、）

竹川　あれ、どうぞ、是れにお置きなされて下さりませいなあ。

花山　それ、光りました。

竹川　おや、さうでござりまするか。

　　ト あわてゝ徳兵衛の側へ行き、耳を塞いで居る、徳兵衛笑ひながら、

徳兵　もし〱嘘でござりますよ、光りはいたしませぬ。

竹川　あなた悪い御常談をなされまするなあ。（ト花山を恨めしさうに見ていふ。）

花山　それでもお前さんが、あんまり情が強いからさ。

竹川　びつくりいたしましたわいな。

徳兵　あなたは餘程、雷さまがお嫌ひと見えますね。

竹川　大嫌ひでござりまする、今日なども御上の御用で出ましたのゆゑ、遅うなりましては濟みませねど、是れではなか〱戻られませぬわいな。

徳兵　それはまあ御奉公のお身の上で、嘸お困りなさいませう、してあなたの御屋敷は、どなた様でござりまする。

竹川　私は千葉の御屋敷に勤めて居りますれど、御存じの通り武家方は御門がやかましうござりますゆゑ、此やうに手間取りまして、御門切れになりはせまいかと、また是れも一つの苦勞になりますわいな。

花山　いえ、まだ御門切れの刻限までには、餘程間がござりますから、お案じなさるには及びませぬ、そしてあなたは、お上の御用とおつしやりましたが、今日は何の御用向で、どちらへいらつしたのでござりますえ。

竹川　今日は奥樣の御代參に、長谷の觀音さまへお參り申した戻りがけ、ちよつと食事をいたさうと、是れへ立寄りましてござりまする。

德兵　はあ、千葉の奥樣は、もうお國からお歸りなされましたかな。

竹川　それはもう先達ての事でござりました、私もやはりお供をいたして、長らくお國許に居りました所、今度またお下りのお供をいたし、奥樣にも道中御無事にお戻りの、今日はその御禮參りの御代參でござりまする。

船頭　はゝあ、それで分りました、お前さんが長らくお國許においでなされた間、逢ひたい〳〵と思つたどツかのお方と、御代參を假託に、爰でといふ意氣な筋でござりませうね。

竹川　其やうな事は存じませぬわいな。（ト恥しき思入にて、扇にて顏を隱す。）

船頭　そりやあお隱しなすつてもいけませぬ、あなた方が御代參なら、差詰め芝居といふ所、爰等へおいでなさるからは、何か曰くがなけりやあ。

竹川　いえ、芝居は此間から二丁目を、度々見物いたしましたわいな。

花山　はあ、二丁目を度々御覽なされましたかえ。

德兵　それでは二丁目に、大層御贔屓な役者があると見えますな。

竹川　はい、いゝえ。

德兵　なに無い事がありますものか、あなたが二丁目で御贔屓になさる役者は、誰でござりませうな。

花山　お待ちなさい、私が當てゝ見せませう、先づあなたが二丁目で御贔屓になさる役者は、あゝ分りました、新左衞門でござりませう。

船頭　いや、三八ぢやねえか。

竹川　ほんに、あの二人は、

兩人　御贔屓でござりまするか。

竹川　雷さまより嫌ひでござりまする。

女形三人 あんないやな役者はございませぬなあ。
兩人 それぢやあ、あなたは、誰が御贔屓でございます。
竹川 あの私の贔屓な役者は。（ト扇をいぢり廻し、言ひ兼ねて居る、船頭扇を見てうなづき、）
舵頭 分りました、是れでございませう。（ト竹川の持つたる扇を引つたくる。）
竹川 あれ、悪い事をなされまするわいなあ。（ト取りにかゝるを留めて、徳兵衛の前へ件の扇を投る。）
徳兵 これはしたり、人様のお扇子を手籠めに取つて、ぶしつけな事をするなえ。
船頭 いゝえさ、私にやあ讀めませねど、其扇に書いてあるのは、役者の發句に相違ございませぬ、ちよつと御覧なせえ。
竹川 其やうな物ではございませぬ、どうぞ是れへ下さりませいなあ。（ト又取りに掛るを船頭留める。）
徳兵 拜見いたしても、宜しいぢやあございませぬか。（ト扇を取る。）
竹川 あれ、いけませぬわいな。（トあせる、船頭しつかりと押へる、徳兵衛は扇を開き見て、）
徳兵 なに薪水、はゝあ、それぢやァあなたは、彦三郎が御贔屓でございますね。
竹川 は、はい。（ト恥しき思入にてちつと俯向く。）
徳兵 あゝ、いやな役者が御贔屓でございますねえ。

花山　それでも旦那は、彦三にそつくり。若し、こりやあ出來ますぜ。
竹川　え。
花山　いえなに、彦三郎はよく出來ますね。
竹川　よい役者でござりますなあ。
たい　あなたが彦三を御贔屓とは、嬉しいではござんせぬかいな。
お柳　彦三を贔屓でないものが、あるものかいなう。
お蔦　あの通り私共は、家中が贔屓でござりますわいな。（ト口々に褒める、德兵衛こなしあつて、）
德兵　いや、みんな話せねえ玉だ。
花山　そんな事を仰しやるけれど、お前さんは彦三に其身其儘でござりますぜ。ねえ若し、あなた。
　　ト竹川へ思入、竹川恥かしさうに、ちよつと德兵衛を尻目に見て、
竹川　よう似ておいでなされまするなあ。（ト思入。）
德兵　こりやあ奢れねえ、然し其お口合へ、憚りながら持合せました、ちよつと一つ差上げませう。
　　ト竹川へ猪口をさす、竹川嬉しさうにそつと手を出し、猪口を取る。
お柳　どれ、私がお酌をいたしませう。

船頭　お柳さんの待女郎かね。（トお柳酌をする、竹川受けて呑み、）

竹川　あなた、憚りながら。（ト徳兵衛へ猪口をさす。）

徳兵　是れはお抑へと申す所でござりますが、初めてなれば一つ頂戴いたしませう。

ト猪口を取る、お柳酌をする。花山眞中へ出で扇を構へ、

花山　千秋萬歳、千箱の玉を奉つる。（トちよつと謠をうたふ。）

徳兵　何を言ふのだ。

花山　はゝゝゝ、先づ是れで御婚禮は、濟んだといふものだ。

ト此時また雷きびしく鳴る、竹川思はず徳兵衛の膝へ縋る。

徳兵　あゝ、だしぬけの一つで、おれもびつくりした、何でも今のは近所へ落ちたに違えねえ。

船頭　大方そこらあたりへ、ゝゝゝ、おつこちでござりませう。（ト竹川へ顋で思入、）

徳兵　何しろ氣味が惡い、お柳そつちの座敷へ蚊帳を釣つてくれねえか。

お柳　畏りました、さあおたいもお蔦も、一緒に來てくんな。

たい
お蔦　あい〳〵。

お柳　どれ釣つて上げませうわいな。（ト合方にて奥へはひろ、花山船頭思入あつて、）

花山　是れは爰に、まじ〳〵して居るのは氣が利かねえ。

船頭　次の間へ下るとせうか。(ト此時又雷きびしく鳴る。竹川德兵衞に取附く。船頭花山もびつくりして、)

船頭
花山　こいつはたまらぬ。(ト奥へ逃げてはひる、跡德兵衞竹川殘り、)

德兵　若し、最うようござりますからお起きなさいまし。

竹川　大きに遲くなりましたな。(ト四邊を見て、)若し、皆さんわえ。

德兵　今の一つでびつくりして、何處へか逃げて行きまして、私一人でござります。

竹川　それはまあお嬉しい。

德兵　え。

竹川　いえ、嬉しいは、あの雷さまが遠くおなりなさつたゆゑ。

ト是れを切つ掛けに下手二階家の伊豫簾を捲き上げる、爰に延壽太夫家內太夫羽織袴にてゐて、兩吟
(淨瑠璃になる。)

〽夕立の雨も一降り馬の背を、分けて涼しき川岸に、柳の枝の寄り添ひて、いつしか色に鳴る神の、音さへ遠き筑波東風、(ト此內竹川は嬉しき思入にて、)

もし、あの淨瑠璃は何處でござります。

徳兵　ありやお隣りに溫習があつて、石町と横山町が、兩吟で語るのだ。
竹川　いゝ聲でございますね。
〽殘る暑さを川水へ、流す上手に歸り船　端唄〽草の葉に宿りし月も小夜風に、憎やこぼれて
はら／＼し、露か雫かしづくか露か、濡れて色增す野邊の色。
ト此内兩人淨瑠璃を聞く思入あつて、徳兵衛煙草を呑む、跡にて煙管を煙草入へ添へ、竹川の前へ出す、竹川禮を言ひ煙草を呑む、又薄く雷鳴る。
あれ、又お鳴りなされますわいな。
徳兵　幾らお鳴りなさつても、筑紫から來る梅のお守りを、私が持つて居りますから、決してお案じなさいますな。
竹川　それはよいお守りをお持ちなされてゞございますな、然し此やうにお側に居て、私は嬉しうございますが、嘸おいやでございませうな。
徳兵　どういたしまして、いやどころか、何時までも雷さまがお鳴りなさればよいと思つて居りまする。
竹川　あなたは嘘がお上手でございますね。
徳兵　なに、嘘をつきますものか。

竹川　嘘でなければ嬉しいけれど。

〽意氣なお方に釣合ぬ、野暮なやの字の屋敷もの、十歳の年からお小姓を勤め通してお側役、二十歳は越せど色戀は、掟嚴しく白玉の、露にも濡れし事はなく、男に逢ふも初秋と、跡はいらへも長苞の、油薫りてなまめかし、（ト竹川箱せこを遣ひ、振りよろしくあつて、）

德兵　そんな事をおつしやるが、今時の御殿女中は、なか〳〵油斷が出來ませぬ。

竹川　そりや餘所外の女中衆は、油斷がならぬか存じませぬが、私などは世間の事は、一向に存じませぬ。

德兵　御存じか御存じでないか、是ればかりは試されない、何しろ段々と又強く鳴りさうだ、蚊帳を釣つてくれたか知らぬ。

ト後の葭戸を明ける、内に蚊帳を釣り、四方の裾を上へまくり上げある、德兵衞是れを見やり、

おゝ、何時の間にか釣つてあつた、さあ、怖くばあそこへお出でなさい。

〽心盡しの言の葉に、飛立つほどの嬉しさは、蚊帳より胸に波打ちて、紅麻うつる顏の色。

ト竹川もじ〳〵として居るを、德兵衞あすこへ行けといふ思入、竹川嬉しき恥かしき思入にて、

竹川　どうぞあなたも、御遠慮なう。

德兵　端の方へ、お入れなすつて下さいまし。

〽又一頻り降る雨に、中を結ぶの雷や、こはさに二人大川の、深き契りぞ交しける。

ト此内雷の音烈しく兩人氣味の惡きこなしにて、上下へ放れて蚊帳を下す、此模樣風車、三重にて伊豫簾をおろし、是れと一緒に道具廻る。

(長谷小路妾宅の場)――本舞臺三間向う暖簾口、上の方床の間、一間の障子屋體、此内蚊帳を釣り、下手一間押入戸棚、此上茶壁、これへ三味線掛け、いつもの所門口、此外一面の黑塀、總て長谷小路妾宅の體、爰にお初浴衣細帶圍者のこしらへにて、煙草盆の火入へ線香を立て居る、側に下女針箱の上へ眞鍮の燈明皿を直し、火打箱にて火を打つて居る、此模樣やはり雷の音にて道具留る。

お初　おやまあ、早くお燈明を上げておくれよ。

やま　お待ちなさい、火口が濕つたと見えて、ちつとも附きませぬわいな。

お初　それだから燒いてお置きといふのだわね。

やま　あゝ附きました〳〵。(ト附木へ火をうつし燈明皿へ點し、)怖いぢやあござりませぬか、今日は旦那さまはおいでなさいませんかね。

お初　昨夜お出でなされたから、今日はお出でなさるまいよ。
やま　お前さまと私ばかりで、男きれがないから猶怖うござりますね。
お初　生憎な時の雷さまだねえ。

トやはり雷の音ばた〳〵になり、花道より喜之助着流し雪駄がけにて手拭を冠り、兩褄を取り走り出來り、直に舞臺門口の外へ來り、手拭を取り體を拭きながら、

喜之　思ひ掛けない夕立で、此近處に傘を借りる所はなし、それに又今日に限つて日傘も持たず、あゝこんな困つた事はない。（ト當惑の思入、おやま是れを聞き、門口を明け、喜之助を見て、）
やま　もしあなた、お困りならこちらへ這入つて、雨を止めておいでなされませいなあ。
喜之　有難う存じまする、左樣ならお詞に甘えまして、暫くお内をお貸しなされて下さりませ。
やま　さあ〳〵こちらへおはひりなされませ。
喜之　御免下さいまし。（ト合方になり、喜之助内へはひり、手拭にて顏を拭いて居る。）
お初　是れおやま、こなたはどちらのお方ぢや。
やま　知らぬお方でござりまするが、此雨に逢つて御難儀の樣子ゆゑ、内へお入れ申して上げましたわいな。

お初 それはよう氣が附いたわいの、もし誰も御遠慮な者は居りませぬから、ゆつくり雨を止めておいでなさりませ。

喜之 有難うござりまする。（ト言ひながらお初と顏見合せ、）や、さういふお前は、早衣どのではござらぬか。

お初 ほんに、思ひ掛けない喜之助さん。（ト喜之助の側へ駈寄り、）逢ひたかつた〳〵わいなあ。

ト喜之助にすがろ、おやま見て合點の行かぬ思入にて、

やま おや〳〵そんならあなたは、御存じの御方でござりますか。

お初 さあ、此お方はわたしが深う。

喜之 あゝいえ、なに、深い馴染の寺小屋友達、幼い時よりお初どのとは、至つて仲よしでござりました。

やま 左樣でござりましたか、それではあなた御遠慮なく、御ゆるりとお話しなされませ、おゝまだお茶も上げずに、どれ、お煮花でも入れませうか。

喜之 必ず構うて下さるな。

やま 然し私がこゝに居りましたら、又いろ〳〵と積る話しに。

兩人　え。

やま　いえなに、まだいろ／＼と臺所に、仕掛けた用がござりますから、どれ片附けて參りませうか。

ト言ひ捨てゝ奥へはひろ、喜之助思入あつて、

喜之　これ早衣どの、ようまあ無事で居て下されたなう。

お初　お前も御無事で、こんな嬉しい事はござんせぬ、まあ何は兎もあれ言ひたい事、聞きたい事もござんすから、こちらへ上つて下さんせいな。

喜之　いや／＼、女子一人で此やうな暮しをして居やるからは、必定れこの、（ト拇指を出し）こりや滅多には上られぬわいな。

お初　まあ何事もあとでゆつくり話すから、さあ／＼早う上らしやんせいなあ。（ト言ひながら喜之助を無理に上へあげる）お前、まあ、よう來て下さんした。あんまり思ひ掛けないので、言ひたい事も碌に、ねつから口へ出ぬわいなあ。

喜之　ほんにまあ何から先きへ話さうやら、さうしてあの時別れた後、今まで行方も知れなんだが、何うして爰に居やるのぢや。

お初　さあ話せば長い事ながら、ようまあ聞いて下さんせいなあ。（ト合方になり、）あの折わたしの母さ

んが屋敷へ送るといつたは僞り、思ひ出しても怖しい山女衒の手に掛り、旅から旅を連れ歩かれ果ては此身を大磯へ賣渡されて半年から風が嵩じて長煩ひ、やう〱なほつて此春から、仕方なくなく見世へ出て、其日に直ぐに附いた客、しかも雪の下の商人にて、眞野屋德兵衛といふお人に身請けされ、此長谷小路に圍はれてゐる今の身の上、他人口から見る時は、ほんに苦勞もないやうに思ふお方もござんせうが、わたしに限り浮氣らしい心はさら〱ござんせぬ、明け暮れ思ふはお前の事、どうぞして今一度逢ひたいと、一途に神佛へお願ひ申せし御利益か、思ひ掛けなく今日爰で、お目に掛つて此やうな、嬉しい事はござんせぬわいなあ。

ト喜之助に縋つていふ、喜之助思入あつて、

喜之　さういふ事とは露知らず、實はこなたを恨んでゐたが、それはまあ種々の苦勞をしやつたなう。

お初　さうしてお前は、今何處にござんすえ。

喜之　わしも母親にこなたをば引揚げられてのめ〱と、再度家へも歸られず、立戻つて樣子を聞けば心よからぬこなたのお袋、お前を苦界へ賣るとの事、聞いてびつくり跡追掛け、取戻さんにもかよわい此身、仕方なく〱其儘に打捨ておけどわしゆゑに、こなたがさういふ身になつては渚さまへ濟まぬと思ひ、委しい事を手紙に認め、そつと置いて戻らんとお庭口まで行きし所、渚さま

に見咎められどのやうにかお叱りと、思ひの外に有難い御異見の其上に、お金まで下された諸さまのお慈悲のお捌き、一旦死なうと思うた身も、どうも死なれぬはめになり、何でもこなたの在所をば尋ね出さねば濟まぬゆゑ、所々方々と歩くうち、今では鎌倉へ來て其以前、わしに乳を呑ませたる乳母の娘に廻り逢ひ、其女の助けにて、是れといふ生業もせず　今日まで存命へてゐた代り、思ひ掛けなくこなたにも逢はれたといふものぢや、あゝ何でも短氣はせぬものぢやなあ。

ト是れを聞き、お初少しつんとして、

お初　もし、短氣は兎もあれ、浮氣はせぬものでござんすなあ。

喜之　いつわたしが浮氣をした。

お初　それでもお前を遊ばして置く、女中さんがあるんぢやござんせぬか。

喜之　これはしたり、そりや乳母の娘ぢやといふに。

お初　何だか知れたものかいなあ。（ト少しつんとする、此途端雷嚴しく鳴る、お初あれいと俯伏になる。）

喜之　それ見や、わしをあんまり酷めるから、雷さまがお鳴りなさるのだ、意趣返しにもつと澤山お鳴りなされればよい。

お初　えゝも、其やうな意地の惡い事を言はずと、あの蚊帳のうちへ來て下さんせ。まだいろ〳〵と話

しもあれど、折惡いこの雷さまで、話しがして居られねば、さあ、早う來て下さんせいなあ。

喜之　いゝや、今聞けば德兵衞どのとやらいふ人の、世話になつて居るとあれば、主あるこなたと一つ蚊帳、ひよつと旦那どのが來た時は。

お初　何の蚊帳へはひつて居ようと、明かな二人が身の上、安心して這入りなさんせ。

喜之　それでも、どうも氣が咎めて、

お初　雷のなる時は、世間並でござんすわいな。（ト此時又烈しく鳴る。）あれえ。

ト蚊帳の中へはひろ、喜之助も氣味の惡き思入にて跡よりはひろ、合方ばた〳〵になり、花道より以前の悟市尻端折り頰冠りにて腕まくりをなし、逸散に走り出來り、直ぐに舞臺へ來て門口を明け、内へはひり、

悟市　お初さん〳〵、傘を一本貸しておくんなせえな。あゝ恐ろしい、何處もかしこもびつしよりになつた。

ト冠つた手拭を取り、顏を拭いて居る、此内奥よりおやま出來り、

やま　おや悟市さん、嘸夕立でお困りなされたらう。

悟市　困つたの困らねえのと、旦那のお使ひで御近所まで來た所が、惡い所で降り出されたので、やう

やう爰まで駈込みました、どうぞ御無心ながら、傘を一本貸しておくんなせえな。

やま　あい／＼。（ト奥へはひる。）

悟市　雨漏りのしさうもねえのを、見ておくんなせえよ。（ト此内奥よりおやま番傘を持ち出來り、）

やま　是れをお持ちなさいまし。

悟市　こりやあ有難うござります。お初さんがお見えなさらないが、どうなさいました。

やま　御存じの通り、雷さまが、お嫌ひゆゑ、蚊帳の内でござんせうわいな。

悟市　成程さうでござりましたね。（ト蚊帳の側へ行かうとするを、）

やま　あもし。（ト思はず袖を控へる。）

悟市　え。

やま　いえなに、まあ御ゆるりなさいと申すことさ。

悟市　なに、歸るのぢやあござりませぬ、ちよつと雷さまのお見舞さ。（トおやま氣を揉む思入、悟市蚊帳の側へ行き、）もし、お嫌ひなものが鳴つていけませんねえ。

ト言ひながら蚊帳の内を覗く、此時お初半身出し、

お初　悟市さん御免なさい、雷さまで今朝ッから頭痛がしてならないから、今按摩さんに揉んで貰つて

居ますよ。

悟市　へえゝ左樣でござりまするか、そりやあ定めし利きますだらうね。（トさてはといふ思入あつて、）ちつと小降りになりましたから、此内に出掛けませう。

お初　もうちつと止めておいでならいゝに。

悟市　いえ、今日の雨は止みさうもござりませぬ。（ト言ひながら下手へ來り、我が雪駄を包む振して喜之助の雪駄を見物へ見えるやうに手拭へ包み懷へ入れ、）御免なさいまし。（ト尻を端折る。）

やま　お前さん、跣足かえ。

悟市　一ツ走りに駈出しますのさ。（ト門口の外へ出て傘を開き、）あゝ、又大粒なのがやつて來やあがつた。（ト戸をぴつしやりしめ、やはり雷の音にて悟市思入あつてうなづき花道へはひる、おやまこちらへ來り。

やま　惡い奴が參りましたねえ。

お初　又誰か來るといけないから、表へ掛金を掛けて置いておくれ。

やま　畏りました。（ト門口へ掛金を掛ける。喜之助蚊帳より顏を出し。）

喜之　憚りながら、わたしの雪駄を片附けて置いて下さい。

やま　はい〳〵、あなたのは是れでござりませうな。（ト悟市の雪駄を取つて見せる。）

喜之　いえ、わたしのはばら緒でござりました。

やま　それでは悟市さんが間違へて行きましたか。

お初　そゝツかしい人だね。

やま　追掛けて取返して參りませう。（ト門口を明ける、）それ光りました。

お初　あれえ。（トうつ向くを道具替りの知らせ、）

喜之　桑原々々。

ト喜之助おやま氣味の惡き思入、雷の音にて此道具廻る。

（元の二階の場）――本舞臺元の二階の道具へ戻る、爰に徳兵衞手拭にて體の汗を拭いて居る、竹川は團扇を遣ひ居る。此模様浮いたる合方にて道具留る。

竹川　私は大層逆上ましたが、何ぞお藥がござりますなら下さいましな。

徳兵　逆上ならよい藥がありますから、唯今出して上げませう。（ト紙入より誂への蒔繪の藥入を出し、）さあ、是れをお上んなさい。（ト竹川藥入を取り、中より丸藥を出し呑む思入あつて、）

竹川　是れは大層よいお藥でござりますから、少々私に下さいましな。

德兵　よけりやあ入物ごとお持ちなさい。（ト竹川嬉しき思入にて、藥入の模樣を見て、）

竹川　此藥入の模樣は、比翼の鶴でござりまするなあ。

德兵　そりやあわたしの好みで、石切河岸の先生に、蒔いてお貰ひ申したのだが、巧いものさねえ。

竹川　ほんに見事でござりまするな、どうぞ私も此やうな、櫛を一枚欲しうござりますわいな。

德兵　いや、櫛ぢやあ上げられない。

竹川　なぜでござりまするえ。

德兵　緣が切れるといふぢやあござりませぬか。

竹川　いやな事を仰しやいますなあ。

ト件の藥入を嬉しさうに帶の間へ挾む。此内梯子口より以前のお勝出來り、

お勝　おや、あなたこちらにおいでなさいましたか、生憎途中で雨に逢ひまして、大きに遲くなりましたわいなあ。

竹川　嘸わが身困つたであらう。わしも、あの雷さまゆゑ、そちは居らずわし一人で怖うて〳〵ならぬ所、こなたが色々御親切に、お世話をなされて下されたれば、よう御禮を申してくりやいなう。

お勝　左樣でござりましたか、それはまあようお世話をして上げて下さりまして、有難う存じまする。
德兵　どういたしまして、餘りあなたがお嫌ひの御樣子ゆゑ、たゞこちらへお連れ申したばかりの事、それをそんなにお禮を仰しやつては、却つてこちらが痛み入りまする。
お勝　もしあなた、餘り遲くなりますから、御膳はお船へ入れて貰ひまして、召上りながらおいでなされませいなあ。
竹川　ほんに今日は御代參ゆゑ、遲うなつてはお上へ濟まぬ、それでは直ぐに歸らうわいなう。
德兵　まあよいではござりませぬか。
竹川　いつまで居てもお名殘り惜しうござりますれば、思ひ切つて歸りませうわいなあ。
ト德兵衞に心の殘る思入にて立上る。
德兵　それぢやあ必ず十四日に。
竹川　先程申した所にて、お待ちなされて下さりませ。
お勝　お待ちなされいではござりませぬ。お船が最前から待つて居りますわいなあ。
ト竹川の手を持つて引張る。
竹川　えゝも忙しい。（トお勝の手を振拂ひ、）あなた、きつとでござりまするぞえ。

ト言ふを構はずお勝捨ぜりふにて竹川をせり立てる、竹川德兵衛へ心の殘る思入にて、お勝にせり立てられながら梯子の口へはひる、此内始終流行唄にて、奧より船頭花山お柳おたいお蔦出來り、

花山　もし旦那、こりやあ大勘定でござりますぜ。

船頭　あんまり酷い見せ附けやうだ。

たい　女子のわたしらの見る前も、あつたものでござんすわいなあ。

お蔦　是れはたゞは置かれませぬ。

皆々　さあ御勘定をなさいまし／＼。（ト皆々わや／＼いふ。）

德兵　あゝ、うるせえ奴等だ。（ト紙入を出し、）それ、いゝやうに捌いて遣つてくれ。

ト花山の前へ紙入を投つてやる、花山取つて、

花山　皆さん、旦那から御勘定が出ましたから、お禮をおつしやいまし。

皆々　これは旦那、有難うござりまする。

ト此内花山紙入より金を出し、紙に包み皆々に遣る、始終流行唄の合方にて、梯子の口より悟市汗を拭きながら出來る、船頭見て、

船頭　いや悟市さん遲かつた、お前が出掛けた跡で、旦那が素敵な得物をなさつて、今勘定を取つた所

さ。
花山　お前も使ひ賃に、一口乘んなせえ。（ト金を紙に包み悟市に渡す、）
悟市　そりやあ何ういふ譯か跡で聞きませう。何にしろこりやあ早速有難い。（ト紙入へ金を仕舞ひ、）旦那、ちよつと耳をお貸しなせえ。
德兵　短刀の事かえ。
悟市　なあに、斯ういふ譯でござりまする。（ト德兵衞に囁き、件の雪駄をそつと懷より出して見せ、）其證據は是れでござります。
德兵　それぢやあお初が。（ト思入。）
悟市　こりやあ打捨つちやあ置かれませんぜ。（ト德兵衞思入あつて氣を替へ、）
德兵　何にしろ、是れから廻るとしよう。こう、おれが羽織と腰の物を出してくれ。
お蔦　はい〳〵。（ト羽織と脇差を持つて來る。）
花山　おや旦那、最うお歸りでござりますかえ。
德兵　柏屋にお菊が居るなら、呼びに遣つて、呑んで居てくんねえ。
船頭　旦那どちらでござりますか、お供をいたしませうか。

德兵　おゝ手前は一緒に行つてくれ。（ト言ひながら立上る。）

花山　それぢやあきつとおいでなさいますね。

德兵　おゝ、直きに行つて來る。

梧市　さあ旦那、ちつとも早く。

德兵　むゝ、いや飛んだ駕籠屋だが、こりやあ待たしだぜ。

ト疊紙の金包を花山の前へ投るを道具替りの知らせ、女形梯子の口にて、

女形　お立ちでござりまする。

ト下へ聲を掛ける、此模樣よろしく、流行唄にて道具廻る。

（元の妾宅の場）＝本舞臺元の妾宅の道具、爰に以前のおやま線香を入れし箱と、赤玉蜀黍を盆へ載せ、羽箒にて火鉢の邊を掃いて居る、此模樣端唄の合方にて道具留る。と塵を掃き寄せ、四邊を片附ける事よろしくあつて、

やま　やう〳〵音が止んだので、ほつと一安心したが、斯ういふ時には觀音さまの玉蜀黍と線香が、どんなに力になるか知れない。（ト屋體へ思入あつて、）取分けお初さまは雷がお嫌ひ、嘸こはい事でご

ざんしたらう、俯伏になつておいでなさつたが、大分靜になつた樣子、あゝこりや疲れておよつたと見える。（ト盆、塵取など持ち）どれ、此間に奥を片附けて置かう。

ト奥へはひる、時の鐘やはり右の合方にて、花道より悟市尻端折りにて貸下駄を履き、染川と記せし貸提灯を持ち、先きに立ち、跡より德兵衞下駄がけ、船頭も貸下駄をはき出來り、直に舞臺へ來り、德兵衞悟市うなづき合ひ、悟市門口を明けようとして明かぬこなし。

悟市　もし、もうお休みなさつたのかえ。おやまどん／＼。（ト門口を叩く、是れにておやま奥より出來り、）

やま　慥か悟市さんの聲だが、もし、何ぞ用かえ。

悟市　さつき雪駄を間違へて行きましたから、取り替に來ました、ちよつと明けておくんなせえ。

やま　ほんにさうだッけ、お前も株でそゝツかしいねえ。（ト言ひながら門口を明け、德兵衞を見てびつくりなし、）や、あなたは旦那。（ト戸をぴつしやりしめ掛金をかけ、慌てゝ蚊帳の側へ來り、）お初さん、大變でござります／＼。

お初　えゝも仰山な、何が大變だよ。

やま　何が所ではござりませぬ、旦那さまがおいでなされましたわいな。

お初　え、旦那がお出でなさつたえ。（トびつくりなし、蚊帳を出る、喜之助も續いて出て、）

喜之　そりや大變だ。是れだから言はぬ事ではない。（トあわてゝまごくするをお初留め、）
お初　まあさ、もう斯うなつたら仕方がない、逃げるには及ばないから、落着いておいでよ。
喜之　いゝ、どう是れが落着いて居られるものか。
お初　まあいゝから、お前はやつぱり蚊帳の中へはひつておいでよ。
　　　ト逃げようとする喜之助を、無理に蚊帳の中へ入れる、此時又悟市門口を頻りに叩き、
悟市　おやまどんく、早く明けねえかく。（ト又しきりに叩く。）
お初　あいく、おやま何をして居るのだね、早く明けてお上げなね。（ト態と表へ聞えるやうにいふ。）
やま　明けてもようござりますかえ。（ト小聲にていふ。）
お初　早く明けてお上げといふに。
　　　ト始終表へ聞えるやうにいふ、おやま顫へながら行つて門口を明ける、是れにて德兵衞先きに悟市船頭内へはひりよろしく住ふ。お初何喰はぬ顔にて、
お初　おや旦那、大層お遲くいらつしやいましたねえ。
德兵　遲くもねえ、今し方日が暮れたばかりだ、それに今夜は大分早くしまりをしたなう。
お初　物騷だといふことを聞きましたから、女ばかりで怖いから、それでしまりを早くさせました。

德兵　そりやあ用心のいゝことだ。（ト言ひながら煙草を呑む振にて、蚊帳の内へ思入、お初悟市と船頭を見て）

お初　大層お揃ひで、皆さんよくお出でなさいましたね。

船頭　お初さん、大きに御無沙汰をいたしました。

お初　どういたしまして。

悟市　私やあ、ちよつと先程上りましたね。（トいやにいふ、お初思入あつて、）

お初　ほんに、さつきは最うちつと雨を止めておいでならいゝに、雷さまの鳴る最中に駈出してさ、男といふものは、雷さまが怖くないものかねえ。

德兵　おぬしやあ、雷さまは怖いか。

お初　あなたはわたしの怖がるのを、不斷から知つておいでなさるではござりませぬか。

德兵　不斷は兎もあれ、今日ばかりは、怖くあるめえと思つてよ。

お初　そりやあ何故でござりますえ。

德兵　力になつてくれる男があるからよ。

お初　なに、男とはえ。

德兵　お初、とぼけるなえ。（トきつと言ふ、誂へ端唄の合方になり、）元より浮氣な圍者、色戀は當りめえ、

それをならぬといふやうな、おれも滿更野暮でもねえ氣だ、殊にやあおぬしを末始終どうも銜へて居にくいのは、何ぼ男の働きでも、世間の聞え女房の手前、どうかして情人でもあつたら添はしてやりてえと、口へこそ出さねえが、不斷心に思つて居るを知らねえとは言ひながら、是れがおぬしを受出して昨日や今日の事ぢやあなし、おれが心も知つて居ながら、隱し立てをしてくれるとは、それぢやァあんまり不人情だらうぜ。（ト思入にていふ、お初も思入あつて、）

お初　あゝ、それぢやあさつきの按摩さんを、譯でもあると悟市さんが、思ひ違へて言ッ附けたのだね。

悟市　もし、お前按摩と言ひなさるが、ちよつと蚊帳越しに見た所が、身裝といひ男振り、ちつと按摩にやあ請取りにくい、必定こりやあ間男と鑑定しちやあ御恩になる、旦那へ言はずにや置けねえから、粗相の振りでまき揚げた、證據は男の此の雪駄、（ト以前の喜之助の雪駄を出し、）此革鼻緒は香取屋で三十匁からする代物、四十や五十の錢を取る按摩の履けねえ此履物、皮ァかぶらずお初さん、ぶちまけ話しにおしなせえ。

やま　悟市さんお前もあんまり當て推な人ぢやあないか、按摩さんを捉へてお初さんが情人だなんぞと、さうお思ひならあの時に、なぜさうお言ひでないのだ、最う按摩さんの歸つた跡で、水掛け論だあね。

悟市　何の一つ穴の狢の癖に、歸つたか歸らねえか、あの蚊帳の中を見れば、分かることだ。

　　ト立ちかゝるをお初留め、

お初　まあ悟市さん、待つておくれ、さう知られたら隱しはしませぬ、成程蚊帳の中に居るのは、以前わたしが言交した、亭主と思つた男でござんす。

悟市　それ見なせえ、間男だらうが。

船頭　よもや〳〵と思つたが、よくあつかましく言はれたものだ。

德兵　然しそりやあよく言つてくれた、負惜しみをいふやうだが、おれもさつぱりした。其お方がそこにならら、ちよつとお目に掛りたいものだ。

悟市　どうして爰へのめ〳〵と、どの面さげて出られませう。（ト お初思入あつて、）

お初　もう斯うなつたら仕方がない。喜之さん、爰へおいでなさんせ。（ト蚊帳の內にて、）

喜之　おゝ、そこへ行つてお目に掛らう。（ト誂への合方になり、蚊帳より出來り、）

船頭　そんならお前が以前の情人か、成程こりやあ好い男だ。（ト喜之助よき所に住ひ、思入あつて、）

喜之　二年跡から言交し、夫婦にならうと約束をしました女でござりますが、今は其身も圍者、主あるからは言はずと間男、見附けられたら百年目、人間僅か五十年、その限りさへまだ半分、二十五

年の今年が厄年、かゝる所へ出合ふのも約束事でござりませうから、四つになして徳兵衛どの、男を立てゝ下さりませ。

悟市　いや、主ある女を盜むだけ、

船頭　顏に似合ぬいゝ肚胸。

徳兵　それぢやあお前が、（ト喜之助を見て思入）むゝ、さてはお初と二年越し、言交したはお前であつたか。

喜之　名乘るも面目ないことだが、生れは同じ江州にて、親は眞面目な小間物屋、喜左衛門が忰にて喜之助といふ怠惰者、御出入屋敷に常不斷お心安く上つたが、緣で其頃言交し、連れて逃げたる此早衣、餘儀ない譯で途中で別れ、それぎり生死も分らねば互ひに尋ねて居た所、思はぬ雨に軒下へ駈込んだのが二人が惡緣。

お初　身請けをされて何一つ、不自由もなく圍はれし其御恩さへ返さずに、嘸や憎うもござんせうが、昨日や今日の事ではなし。

喜之　假初ながら二年越し、馴染重ねし中ゆゑに、

お初　惡いと知りつゝ忍びしも、お目に掛りし上からは、

喜之　言譯ならぬ此場の仕儀、
お初　お腹が立たう旦那さん、
喜之　存分にして、
兩人　下さりませ。（ト兩人思入にていふ、徳兵衞思案の思入にて、默つて居るゆゑ）
悟市　もし旦那、何で默つておいでなさる。
船頭　こいつァたゞは、
兩人　濟まされませぬぜ。
徳兵　いや、おらァ此儘濟ます氣だ。
悟市　そいつァあんまり馬鹿々々しい。
船頭　通りものも程があります。
悟市　あなたのお顏が汚れますわな。（ト兩人徳兵衞をしやくる。徳兵衞是れに構はず）
徳兵　詰らねえ事をいつたものだ、假令女を取られても顏が立たぬといふやうな、肌合な生業ちやなし、知つての通り堅氣の商人、切るの突くのと野暮をすれば、却つて家の暖簾にかゝる、殊にはお時といふきつとした女房のあるおれが身の上、ほんのお初は當座の花、酒の相手に世話はして置く

ものゝ、最う段々と是れも取る年、今もおれがいふ通り好いた男があるならば、疾から添はして遣りてえと思つた所へいはゞ幸ひ、昔馴染とあるからは、向うの方がおれより先約、そこでこつちも四の五のなし、器用に遣つてしまふ積りよ。

悟市　へえゝ、それぢやあ、あの大金を出して身請けなされた。

船頭　お初さんを物言はず、たゞお遣んなさる、

兩人　御料簡かね。

德兵　はて、情人があると聞いちやあ世話をしても面白くねえ、また手切れの足切れのと、商人の身で言はれもしめえ、損金物とあきらめて、早くろうずにならねえうち、綺麗にやるが上分別だ。

お初　そんならあなたは此儘に、切れるお心でござりまするか。

德兵　さあ斯ういふ事を見る上は、ちつとも早いが互ひの爲だ。

喜之　すりや大金にて身請けせし、お初をわしに下さりますとか。

德兵　初めてお目に掛つたが、丁度二人は似合ひ相應、如何にもお初は進ぜるから、行末長く見捨てずに、どうぞ面倒を見てやつておくんなせえ。

喜之　それではどうもあなたへ義理が。

徳兵　はて、濟むも濟まぬも此顏へ、泥を塗られた上からは、義理をば捨てゝお初をば女房にして下せえ。

悟市　ぞりやァあんまり氣が好過ぎますぜ、せめて四つにならずとも、女の方は助けて置いて、三つ位にしてお遣んなせえな。

船頭　此二人をのめ〳〵と、添はして置くのは、忌えましいぢやあござりませぬか。

徳兵　いや、洗ひ立てをした日にやあ、血で血を洗ふこつちの恥、そこで何にも物言はず添はして遣るのも男の意地だ。（ト是れにて喜之助感心の思入）

喜之　ても思ひ切りのよい徳兵衞どの。

徳兵　商人とはいふものゝ一晩拍子のいゝ時にやあ、箱で儲かる眞野屋徳兵衞、未練な心はござりませぬ。

喜之　そのやうに仰しやるほど、猶々こちらの心が濟まぬ。

お初　あゝもし、斯う言ひ出しては又斯うと、後へ返らぬ旦那さん、大磯から身請けされ、是れまで御恩になりましたを、死んでも忘れはいたしませぬ。

喜之　私とても此御恩、いつか一度は送りまする、時節をどうぞ徳兵衞どの。

兩人　お待ちなされて下さりませ。（ト兩人萎れていふ、徳兵衛思入あつて、）
徳兵　わしに恩を送るには及ばぬから、惡い耳を聞かせぬやうにして下せえ。おやま、お初の着物を出して遣れ。
やま　畏りました。（ト立ち掛るを、）
お初　あゝこれ、着物を出すには及ばぬわいな。
やま　ちよつと着替てお出でなされませいなあ。
お初　いや、着替へて居たら遲うならう、夜更けぬうちに。（ト喜之助へ思入あつて、）さあ喜之助さん、早うわたしを、連れて行て下さんせいな。
喜之　おぬしを連れて行きたいにも、亭主といへど掛り人、殊には心よからぬお熊。
お初　え、そんならお前さんは、お上さんがござんすかえ。（ト少し泣聲にて言ふ。）
喜之　假令女房があらうとも、以前からの中といひ、殊には斯うして徳兵衛どのから、貰つたおぬしの事なれば、見捨てる心はなけれども、今差當つてお熊の所へ。
徳兵　女房に遠慮でお初をば、連れて行かれぬ事ならば、此家ぐるみ上げようから、爰へ圍つて置きなせえ。

悟市　此家までも、あの男に。
德兵　さあ、遣るのもこつちに。
皆々　え。（ト思入、德兵衞氣を替へ、）
德兵　それ、さつきのがあるからよ。
悟市　へゝえ、成程道でお聞き申した、一件でござりますかえ。
船頭　爰で旦那が損をしても、さつきのが手に入れば、代物が替るだけ。
兩人　こりやあお德用だ。
德兵　爰等が商人の思ひ切りだ。（ト思入、時の鐘、喜之助お初思入あつて、）
お初　ほんに大氣な旦那さん。
喜之　見ず知らずの私へ、此お家まで下さるとは、餘りといへばお氣の毒。
德兵　こりやあわしが厄落しだ。（ト言ひながら立上り、おやま履物を直す、）おゝおやま、今までと違つて若い夫婦の事だから、氣を附けてやつてくれよ。
やま　畏りましてござりまする。
德兵　然し、是れも餘計の世話か。

お初　そんならあなたと、御縁もこれで、
悟市　いゝや切れねえ、まだ旦那から、
兩人　手切れの狀が。
喜之
お初　や。
德兵　おゝ、其手切れの一札がはり、こりやあわしから喜之助さん。
ト此内德兵衞先きに悟市船頭門口の外へ出て居て、德兵衞手早く懷中より金入れの金を紙へ明けて捻り、喜之助の前へ投る、喜之助取上げ見て、
喜之　こりや是れ金。
兩人　なに金とは。
德兵　なあに、（ト門の戸をぴつしやりしめるを木の頭、）四つにしちやあ早いやうだ。
ト思入、喜之助お初は手を合せ德兵衞の跡を拜む。門口の外には船頭提灯を持ち、德兵衞の先きに立ち、悟市あとより下手へ行きかける。此模樣時の鐘、端唄の合方にてよろしく、
ひやうし　幕

五幕目

雪の下眞野屋の場
笹目ヶ谷四辻の場

【役名――眞野屋徳兵衛實は神道徳次、須走りお熊、瀬田屋喜之助、桂庵婆山猫おさん、道具屋悟市、駕籠舁げんこの權、同やみの三、眞野屋手代宗助、同與八、道具屋銀八、船頭勘治。徳兵衛女房お時、おさらばお傳、徳兵衛妾お初實は堅田の娘早衣、木鼠お吉其他。】

（眞野屋見世先の場）――本舞臺三間の間常足の二重、上手間平戸の戸棚、續いて一間鼠壁、是れへ刀脇差賣上げ帳、金銀出入帳などを掛けたる書割、眞中暖簾口、此下手刀脇差小道具などいろ〳〵飾り附けたる棚の書割、軒口へ眞野屋と記したる紺の暖簾を掛け、下手の柱に御刀掛光澤布の掛看板。いつもの所門口、下手黑簾の所路地口、隔てゝ黑塀、竹の中窓隣の稽古所の心、總て雪の下眞野屋見世先きの體、爰に宗助、與八手代にて煙草盆を控へ、脇差の中身を見て居る、銀八道具屋はた師のこしらへにて、風呂敷包みを背負ひ立掛り居る、此見得相生獅子の切にて幕明く。

銀八　もし宗助さん、今日はお隣りは大分お賑かでござりますね。

宗助　いやもう四季溫習で、朝ッからあの通りだ。

銀八　晩にはお前さんも、何ぞおやんなさるだらうね。

宗助　どうして〳〵、此節はなか〳〵それ所ではござりませね。（ト此内與八刀を見ながら、）
與八　もし銀八さん、鎬の工合は飛んだいゝが、こりやあ數ものだね。
銀八　へえ、さう見えますが、如何にも好い味ひでござります。
與八　兎も角も爰らの所を傍から頼まれて居るから、明日まで預けちやあどうでござります。
銀八　いゝ所ぢやあござりませぬ、然し出所がいゝから、物は慥でござります。
宗助　銀八さん、此間の小柄ぢやあ、一番喰ひ込んだぜ。
銀八　いえあれは全く私がはめられたのでござります、何れあのお入れ合せはいたします。へい何れ明日上りますから、何分よろしくお願ひ申します。
與八　それぢやあ明日。
銀八　へい、毎度おやかましうござります。旦那へよろしく。
宗助　左様なら。
與八
　トやはり右鳴物にて花道へはひろ、直に下手より序幕の駕籠舁兩人、そぼろなるこしらへにて門口へ來て四邊を窺ひ、爰だといふ思入あつて内へはひり、
權次　へい、眞平御免なせえまし。

二次　へい番頭さん、今日は結構なお天氣でござります。
權次　私共は道中の駕籠屋でござりますが、體が惡い上に足を痛めまして、生業をする事が出來ませず、
三次　湯治に參りたうござりますが、どうか思召しでようございますが、草鞋錢をお願ひ申します。
權次　へい、どうぞお願ひ申します。
宗助　何だとえ、駕籠屋が足を痛めたから、合力をしてくれろか、面白くもねえ。こつちで知つた事ぢやアあるめえし。
權次　そりやあ何も、あなた方が御存じな譯ぢやあござりませんが、御大家だからおねだり申すのでござります。
三次　たんとの事ぢやあござりませぬ、どうぞ草鞋錢をお願ひ申します。
與八　よし〳〵どうでたんと遣る氣遣ひはない。さあ〳〵是れを遣るから、歸つた〳〵。
ト與八懸硯の引出しから小錢を二文出して兩人の前へ投つてやる。兩人是れを見て、
權次　おい、常談をしちやあいけねえぜ、何だ二文ばかり、こちとらア乞食ぢやあねえぜ。
三次　あんまり目先きの見えねえ奴等ぢやあねえか、二文や三文の錢を何にするものかえ、人をあんまり見くびりやあがるな。

權次　ぼんやりにも程があるぜ。

宗助　これさ〳〵何を言ふのだ、物貰ひだから報謝を遣つたのだ、緣も由緣もねえお前達に、錢を遣る譯があるものか。

與八　それで惡けりやあ止すがいゝわ、稽古所や圍者の家ぢやあねえ、白几帳面の商人見世だ、ぐづ〳〵言はずと歸んなせえ。

權次　おい〳〵番頭さん、そりやあ知つてゐらあな、野郎天窓が二人して、草鞋錢を貰ひに來たのだ、ちつとは色氣を附けて物を言ひねえな。

三次　おい、只今のお笑ひぐさや、首を廻す親孝行とは譯が違はあ、草鞋錢だつても諸式が高いや、うぬらは算盤を取つて商えをしながら、あんまりお目出度過ぎる奴等ぢやあねえか。

與八　何だ物貰ひの癖に、奴等とは何の事だ、そんな事を吐かしやあがりやあ、一文の事は置いて半文の錢もやられねえ。

宗助　いゝふざけやあがつて、見世先の邪魔になるわ、きり〳〵歸りやあがれ。

權次　いやだ〳〵歸られねえ。これ、乞食と見られちやあ、こちとらの男が廢らあ。

三次　洗ひ流しやお餘りで命を繫ぐ人間だと思やあがるか、高い米でも喰ひ太つた駕籠舁だ。さあ乞食

の惡名を拔いて貰はにやあ、爰の見世は歸られねえ。

權次　何で乞食の取扱ひをしやあがつた、其譯道を附けてくれ。

兩人　さあ、どうともしろ〳〵。

　　トふん反り返る。いろ〳〵捨ぜりふにて暴れる。宗助與八癪に障るといふ思入にて、

宗助　えゝ、こいつ等あいけふざけやあがつて、どうともしねえでどうするものか。

　　ト立ちかゝるを與八留めて、

與八　これさ〳〵、乞食に棒打ちだ。欺すに手なしだ。まあ〳〵待たつしやい〳〵。

宗助　それだと言つてあんまりな奴だ。

兩人　何があんまりだ、さあ譯道を附けろ〳〵。

　　トやはり兩人暴れて居る、宗助與八持て餘しいろ〳〵捨ぜりふにて留める。やはり稽古唄になり、花道より德兵衞羽織着流し、雪駄町人のこしらへ、悟市やはり羽織着流し小道具屋の裝にて刀を包みし風呂敷を持ち、附き出來り、直に舞臺へ來て、門口を明けて內へはひる、悟市內の樣子を見て中へはひり、

悟市　これさ〳〵、お前方はどうしたのだ、何で商人の見世でごたついて居るのだ。

宗助　おゝ、是れは悟市さんでござりましたか。
與八　これは旦那さま、お歸りでござりましたか。（ト是れにて權次三次德兵衞を見て、）
權次
三次　や、お前が爰の旦那かえ。
權次　はて、見たやうな。
三次　おゝ見た筈だ、しかも牛尾の山中で。（ト見ひ掛けるを德兵衞惡い奴が來たといふ思入、）
德兵　何だと、牛追ひでも駕籠舁でも、そんな人に馴染はねえ、何だといつておれが見世で。
宗助　へい旦那、斯ういふ譯でござります。こいつ等二人が見世へ來まして。
與八　草鞋錢をくれと申しますから。（ト言ひ掛けるを、）
德兵　よしく分つた、何もむづかしい事ではねえ、大方錢貰ひに來たのだらう。何のかのと面倒だ、二百も遣つて歸してしまへ。
宗助　それだと申して、あんまりふざけて居りますから。
德兵　はて、いゝといふことよ、商人見世でみつともねえ、早く錢をやつてしまへ。
宗助　へい、（ト不承々々に懸硯の引出しより天保錢を二枚出して、）仕方がねえ、溝の中へ捨てると思つて、是れを遣るから早く歸れ。

與八　たうとう二百に有りつきやあがつた忌々しい。（ト駕籠屋兩人錢を見て、）

權次　何だ、旦那の挨拶でたつた二百か。

三次　あんまりそれぢやあ安過ぎるぜ。（ト悟市見兼ねて、）

悟市　おい〳〵何だかおらあ知らねえが、旦那の思召しで下すつたのだ。それを持つたら早く行きねえ、けふ日の世界だ、三文だつて容易な事ぢやあ儲からねえよ。

權次　おい三や、今日は是れで行かうぢやあねえか。

三次　さうよな、最う家が知れたから、ゆつくり此頃話しに來ようよ。

權次　へい、お內の旦那え、有難うございます。

宗助　えゝぐづ〳〵言はずと早く歸れ。

權次　えゝ、今歸らあ、うぬらに何が分かるものかえ。

三次　分らねえから奉公して居やあがるのだ。

權次　違えねえ、さうだ〳〵。

悟市　さあ〳〵歸つた〳〵。（ト悟市兩人を表へ突き出す、兩人不承々々に門口へ出て、）

權次　もし旦那え、又此頃にお禮がてらに上りますよ。

三次　おい番頭、また來るぜ。

宗助
與八　さう來られてたまるものか。

ト矢張り右の鳴物にて、兩人は下手へはひる、宗助與八門口より跡を見て、

えゝ、一昨日うしやあがれ。（ト門口をしめて、）旦那、とんだ奴が舞ひ込みました。

宗助　悟市さん、大きにお世話さまでござりました。

悟市　いえ、あんな奴に見込まれては仕方がござりませぬ、何でも少し位なら遣つてしまつて、追歸す算段さ、癪にやあ障るが仕方がない。

德兵　何でもあんな無頼漢は、欺して歸すより仕方がない、然しあれで歸れば安いものだ、貴樣達が手でも出して見ろ、そりやあ强請つて動く事ではない。

悟市　實にあいつらは其處が附目でございます、まあ〳〵あの位なら、お目出度いのでござります。

德兵　いや悟市さん、大きにお待ち遠でござりましたらう、飛んだ事で暇取りました。

悟市　いえ〳〵、どういたしまして、まあ御ゆるりで宜しうござります。

德兵　それぢやあ道々お話し申した通り、例の短刀はわしが引取りますが、ありやあ百兩ぎり〳〵かね。

悟市　實はあれは、お前さんのかね〴〵お賴みだから、儲けづくぢやあござりませぬ。

徳兵　いえ、お前の事だから、そこに如在もありますめえ、それぢやあ品物は御持參かね。

悟市　へい、此間も兩國でお約束でござりますゆゑ、是れへ持つて參りました。

徳兵　それは大きに御苦勞でござりました。

ト此内悟市風呂敷より短刀を出し、徳兵衛に渡す、徳兵衛手に取つて、よく〳〵見ること。

悟市　もし、無銘だが、よつぽどいゝ味ひでござりますね。

徳兵　いやもうよい所ではない、無銘とはいふものゝ此こみの所の鑢目が爭はれぬ所さ。（ト刀を納め）それ與八、悟市さんにお茶でも淹れて上げ申せ。

與八　へい〳〵、畏りました。

悟市　いえもう〳〵お構ひなされますな。（ト與八は奥へはひる。）

徳兵　それぢやあ此刀は、引取るといたしませう。

悟市　それは有難うござりまする。

徳兵　これ宗助・今日はお時はどうした。

宗助　へい、何でござります、先刻血の道が起つて眩暈がしてならぬと仰しやりまして、只今横になつておいでなさいまする。

德兵　さうか、どうも弱い體だなう。

悟市　いや、此節は陽氣が悪いので、持病のある者は實にやられますよ、私共の內なども、矢つ張り血の道で、滿足な日は一日もござりませぬ。

德兵　それぢやあお前の素面の日と同じ事だ。

悟市　いえ〳〵、此節は愼んで居ります。

德兵　おゝ違えねえ、お前も吐血で、血の道であッたッけ。

悟市　いや、さうござります。

トやはり稽古唄になり、下手より山猫おさん桂庵婆のなり、胡麻鹽婆の鬘、木綿やつし、安下駄をはき好みのこしらへにて出て來り、門口へ來て、

さん　へい御免なされませ、眞野屋さまとおつしやいますは、こちらでござりますか。

宗助　あい〳〵、眞野屋はこちらの家でございますが、何ぞ御用でござりますか。

さん　左樣ならお許しなされませ。(ト內へはひり、)へい、どなた樣も御免下さい、お賴みなされましたお妾のよいのを連れて參りましたから、何も御緣づくでござりますから、御覽じて下さいまし、さうしてお給金や何やかやの御相談は、親許もござりますから、其方で篤と掛合つて下さいまし、

私はお手引さへいたしまして、御意にさへ入ればお禮の所は。（ト一人で喋べり附ける。）

宗助　おい〳〵お婆さん、お前一人そんなに喋べつても、そりやあ間違ひだぜ、門違ひをしやあしねえかえ。

さん　あなた、そんな事がござりますものかね、御近邊は門並御得意で、毎日お門を通りますもの、お門違ひをしてよいものでござりますか。

宗助　もし旦那え、あなたお覺えがござりますのでござりますか。

德兵　何でおれがそんな奉公人を賴むものかな。

宗助　それぢやあ御存じないのでござりますか。

德兵　ちつとも知らねえことよ。

宗助　それでは名前でも間違つたのだらう。（ト此内おさん、德兵衞を見て、）

さん　左樣ならあなたが、旦那さまでござりますか、眞平御免下さいまし、御挨拶もいたしませんで、こんにちはよいお天氣でござります。

德兵　おい〳〵、おつかァや、お前はそりやあ何ぞ間違ひだらうぜ、何ならよく家へ歸つて、調べて見なせえ、きつと名所が違つて居るぜ。

さん　いえ／＼左様ではござりませぬ、私がきつぱりと承りましたが、雪の下の通り町で、眞野屋の德兵衛さまからのお使ひと申すことは、念を入れて聞いて置きました、そこは生業でござりますもの、猪牙掛りな事は申しませぬ、おほゝゝゝゝ。

德兵　然しあんまり不思議ぢやあねえか、一圓おれにやあ譯が分らねえ。

悟市　もし／＼旦那、こりやあきつと斯ういふ筋でございますぜ、又例の河岸の形で、横店の中通りのが、思ひ附きぢやあござりませぬかえ。

德兵　さうさ、友達の洒落かも知れねえのさ。

悟市　きつとそんな事でござりますぜ。（トおさんに向ひ、）時にお婆さん、おいらが口を出すも入らざる事だが、旦那がまるで御存じないといふから、お仲間の衆や何かゞ洒落に、お上さんに燒かせようといふ思ひ附きで、こんな事をやる衆があるから、大方それに違ひなしだ、お前も生業の事だから、そんなおもちやにされちやあ詰らねえから、其處はおれが旦那にさう言つて、お前だけの骨折は取つて上げるから、萬更無駄骨も折らせめえぢやあねえか。

さん　はい／＼、それは思召は有難うござりますが、その連れて參つた子も旦那とはお馴染で、何だかお約束申した事があるさうでござりやすから、滿更旦那も形なしのこともござりますまい。

德兵　これさ、そんな事を言つても、こつちに少しも覺えはねえといふに。

さん　まあ〳〵覺えがないなら、ないでようございますから、まあ當人を御覽じませ、是れがほんの、見るは法樂とやらでございます、兎も角もお目に掛けますから、お氣に入らざアそれまでゞございます。

宗助　これさ〳〵、連れて來ずといゝといふに。

さん　ようございます、お前さん方の知らねえことだ。（ト一人呑込みながら、門口へ出て下手へ向ひ、）おい〳〵駕籠屋さん、爰だから早く擔ぎ込んでおくれ。おい〳〵、早くしねえ〳〵。

ト是れにて下手より駕籠屋、四ツ手駕籠をかつぎ出來り、門口へ下す、內にては皆々合點の行かぬ思入、此內駕籠の垂を上げて、內よりお熊、結び髮好みの着附、五分高の吾妻下駄をはき、惡婆好みのこしらへにて出來り、

お熊　駕籠屋さん、御苦勞よ。（ト帶の間より紙に捻りし金を出し、）一杯歸りにやつておくれ。

ト駕籠屋に遣る。

駕舁　へい〳〵、是れは有難うございます。（ト駕籠を擔ぎ下手へはひる。お熊思入あつて、）

お熊　をばさん、爰かえ。

さん　爰の家さ。（ト拇指を出し、）これ、こしきも見世に居るよ。
お熊　そいつあ丁度よかつたね。（トお熊門口を明けて、）
さん　まあこつちへおはひりな。（ト内へはひる。）
徳兵　おい〳〵、お前は何處の人だえ。
お熊　旦那、この間は。
徳兵　や、さういふお前は。
お熊　はい、雷さまでお世話になつた、竹川といふ御守殿さ。
徳兵　はて、思ひ掛けねえ。
お熊　どなたも、眞平御免なさい。
ト誂への合方になり、お熊四邊を見ながら内へはひる。皆々合點の行かぬ思入、婆前へ出て、
さん　もし旦那さまえ、何といゝ子でございませうね。
徳兵　どうして〳〵いゝ所ぢやあねえ、豪氣な代物だ。なう悟市さん。
悟市　いや、よいとも〳〵上々吉、無類飛切り本阿彌なら、よろしくといふ筋でございますね。
さん　何と此子は滿更に知らねえ子でもございますまい、話しを聞けば此間、花水橋の染川で逢ひなす

つた事がありますさうだね、もし、しら〳〵を切つちやあいけないね。

徳兵　さうさ、まるで知らねえ子でもねえが、合點の行かぬは其時にやあ、御代参の御守殿だつたが、あんまり拵へが違ふので、實はおれも戸惑ひをしたのよ。

悟市　やつぱり種は御存じなのか。

宗助　餘計な氣を揉みましたぜ。

お熊　もし旦那え、あの時にやあ友達同士、ほんの座興の遊びから、御殿女中の眞似をして、涼みに行つた歸りがけ、ちよつと一杯呑まうと思つて、染川へ寄つたのさ。

徳兵　それぢやァあの折御守殿と、思つたお前の地金といふは。

お熊　お恥かしいが親の爲、三年三月がこはいから、地獄こそしねえけれど、二月縛り三兩で月にやあ四五人旦那を取り、あすこや爰の桂庵で、顏を知られた月圍ひさ。

さん　馴染のお客もいくらもあるが、こつちの旦那がいつちいゝと、毎度此子があなたの事を、お噂をして居りますよ。

お熊　こんな事を言ひましたら、阿婆摺れな女だとお蔑みか知らないが、多くの中であなたの事は今に忘れはしませぬが、どうでこんなお多福だから、幾らやきもき思つても、仕方がねえとあきらめ

ても、何だか日先きへちらついて、寐ても覺めても覺めても寐ても、とんだ都々逸の文句のやうだが、忘れる事が出來ねえから、思ひ切つて出掛けて來たのさ。もし旦那、ちつと押賣りでお氣の毒だが、お一人身なら女房にでも、お上さんがあるなら仕方がねえから、お妾とか圍者とか名を附けて、お前の側に居せえすりやあ、ほんにわつちが本望さ。のろい奴だと皆さんも、どうぞ笑つておくれでないよ。(ト徳兵衞思入にていふ、徳兵衞こなしあつて、)

徳兵　何だかお前が擽つたく、言ひなさるならわしも男、是れが凄味で掛合ふ日にやあ、強淫でも仕やあしめえし、ほんの其場の出來心、おつウ轉んで來なさりやあ遣る所まで遣るも承知さ、それぢやあおれが俠客とか派手な家業で居る者なら、女出入りは面白いと、一番腕も張つて見るが、何をいつてもわしやア商人、妾手かけを置くといふ譯にもどうも行かねえから、お氣の毒だがそれまでの、緣と思つておとなしく、どうぞ歸つておくんなせえ。

さん　へえ〳〵、そんならお前さん、此子がお氣に入りませぬかね。

徳兵　何さ、氣に入るも入らねえも、元より賴んだ譯ぢやあなし、知つた顏の此子だから、まあ手附かずに斷るのさ。

さん　おい〳〵旦那、お前さんも男振りは、五分も隙ねえ人物だが、胸三寸が分らねえ、よく積つても

見なせえな。是れが御殿女中だつて、何處の者だか知れもしねえ者を自由にして濟みますか。時代に言やあ御家の法度、縛り首になりやすぜ。又たゞの女にした所が、亭主がありやあ言はずと間男、こいつも首に拘はる事だ、そこを言はずに妾にしろとは、いゝ口入だと思ひやす、雇つた駕籠を斷つてもあぶれの錢を取られやすぞ、いゝ事をなすつて、只歸れとは何の事だ、歸すなら歸すやうに、目鼻を附けて歸しなせえ、あんまりなのつぺらぼうだ。（ト之を聞き宗助悴へ兼ねて）

宗助　おいおい、おつな事をいふ婆だぜ、入らねえものだから歸してやるのだ。

さん　もしもし、お前さんは御存じねえ事だ、萬引にでも逢はねえやう、お見世番でもしておいで、てえげえな竹ッ篦だよ。

宗助　なに、竹ッ篦だと。

さん　穀潰しだといふ事さ。

宗助　えゝ、喰ひ潰しだ、とんだ事を言やァがらあ。（ト立ち掛るを徳兵衞留めて）

徳兵　これさ、何を騷ぐのだ、手前達は引込んで居ろ。

宗助　それでもあんまり。

徳兵　えゝ、默つて居ろといふに。（ト宗助餘儀なく控へる、徳兵衞思入あつて）これ宗助、その懸硯を取つ

てくれ。

宗助　へい。

ト掛硯を徳兵衞の前へ置く、徳兵衞錠前の下りし引出しより金を出して、紙に包む、

徳兵　おい、をばさん、ちよつと爰へ來てくんな。

さん　あの、わつちにかえ。

徳兵　さうさ、（トおさん前へ出る、）今のやうに言はれて見ると、實に面目ねえ話しだが、おれもあの子を見たのが因果、勘定にも當るめえが今いふ駕籠屋のあいゝぶれと思つて、少しばかりだが、是れで歸りにあの子と二人で、鰻でも喰つて歸つてくんなせえ。（ト金を十兩やる、おさん取つて改め見て、）

さん　え、是れは十兩ありますね、本當にお氣の毒な、お止しなさればいゝに。おい〳〵お熊さん〳〵。

ト こちらへ來る、お熊は此内だまつて居て、

お熊　何だあな、靜かにしねえな。

婆　おい、おめかのあいゝぶれが十兩だが、お前これでいゝかえ。

お熊　なに十兩だえ、可笑くもねえそれツぱかり、返しておくれ。

さん　返すなら返すが、お前十兩だぜ、お貰ひ申しておきやあいゝに。

お熊　そんな物はいらねえから、早く旦那へ返しておくれよ。

さん　それでも、みす〳〵。（トぐづ〳〵する。）

お熊　何をぐづ〳〵するのだえ、入らねえから返しねえといふに。（トおさんの持つて居る十兩の金を德兵衛の前へ投り出しきつと思入、誂へ打合せの合方になり、）もし、わちきやあ何も錢貰ひに來やあしないのだよ、面白くもねえ、錢金が欲しいといつて、女房のあるのを合點で、押掛け女房に來るものかね、何も外に望みはないから、女房にせえ持つてくれゝばいゝのだアね。むづかしいことがあるものかな。（ト思入あつて、）おい、若い衆大きなものへ水を一杯おくれな、さつき大橋で一杯やつたので、素敵に喉が渇いて來た。（ト此時宗助水を持つて來て、）

宗助　はい、水。

お熊　これさ、こぼれらアな。（ト水を呑んで、）あゝいゝ水だ、おつかア一杯遣らねえか。

さん　年寄りの冷水は眞平だ。おいお熊さん、何だか埒が明かねえの。

お熊　何のぐづ〳〵させて置くものかな、わつちが片を附けませうよ、何の造作もあるものかね。（ト思入あつて、）もし旦那、わつちやあ女房にや持たれねえのかえ。おい、默つて居ちやあ分らねえやな。何とか物を言つておくれな、おいこう、それぢやあ挨拶は出來ねえのだね、出來ざアそれまで、

どうなるものか、わつちを尋常の女と思つて居るから、甘口な十兩ばかりの目腐れ金、欲しかあお前にくれてやらあ。（ト烟管の先きにて金を突き出す。）

宗助　たゞの女と思つたが、それぢやあやつぱり喰せ者か。

お熊　知れたことよ、娘姿で是れまでに押借りゆすり筒持せ、出來ねえながらもして見たが、今度は一番新らしく、附かねえ鐵漿も附燒刃、落した眉毛の跡先きも揃はぬ青い嘴から、筋なせりふも夕立に思ひ附いたる濡仕事、縁を結ぶのかみなりが、勿怪の幸ひ取り持ちで、うぶと見せたるこつちの仕事、味なとこから附込んで、精進物の椎茸で箸を取らせた御馳走を、一杯喰つたがお前の不祥さ、斯う白化にぶちまけりやあ、酢の蒟蒻のと言はせるものが、話しを附けて貰はにやあお氣の毒だが金輪際、もう身動きはしねえよ。（トよろしく思入にていふ、おさんもこなしあつて、）

さん　ほんに自烈込みなさる筈さ、わたしなんぞも年寄りのせるか、氣がいらちになるものだから、話しの早いが大好きさ。

お熊　おつかァの言ふ通り、話しは早いがいゝのよ、然し是れから跡は突出すとか、召連れるとかいふだらう、それまで遣らにやあ片は附かねえ。

ト兩人よろしく思入あつて、根強く言ふ。此時悟市こは〴〵前へ出來り、お熊の側へ來て、

悟市　もし姉さんえ、わしも爰の內へ出這入つて、毎日のやうに來て居るが、丁度今日も來合せて、さながら見ても居られないといふ譯でござりますが、今までお前の仰しやつた事に、ちつとも御無理はありやあしませぬが、こちらは斯ういふ商人の事なり、又世間の聞えもあるといふものだから、どうか又及ばずながら、わしも共々お話しをしませうから、兎も角も艀治か何かで一杯遣りながら、御相談を仕ようぢやあござりませんか。ねえもし姉さん、どうでござります。

お熊　えゝ、いけ騷々しい、止しねえな、お前達の知つた事ぢやあねえ、餘計な口を利きなさんな。

悟市　そりやあさうでもあらうけれど、こんな事にやあ他人が一人はひらにやあ、話しの出來ねえものだわね。

お熊　大きにお世話だ、誰も賴みやあしねえやな、いゝ加減なおせゝぢやあねえか、いけ好かねえ背高だぜ。

悟市　ほい御挨拶、それではお話しになりませぬかね。(卜悟市にうと跡へ下る、德兵衞思入あつて前へ出て、)

德兵　これさ二人の衆、どうで妾の女房のと、そりやあお前方二人も、出來ねえ相談は承知だらうが、どうで多いか少ねえか、誰が中へはひつても、話しの留りは金より外別に仕樣はありやあしねえ、金と轉んで掛合ふ日にやあ、いつたい幾ら取らうといふのだ。

お熊　さうさ、流石は旦那だ、目が高い、どうで結局は金づくさね。
さん　おい、早く相場を附けて遣んねえな。
お熊　さうよ。日が詰つたから早いがいゝ、安いものだがまあ大負けに、まあ一本さね。
悟市　なに一本とは。
お熊　何だね、びつくりしなさんな、一本といふは、百兩のことよ。
徳兵　そんならいよ〱、百兩で。
お熊　爰らが丁度、中ずみさね。
ト煙草を呑みながら空を吹いていふ、此時奥よりお時、丸髷商人の女房好みのこしらへにて出來り、思入あつて、
お時　旦那、お歸りでございましたか。
徳兵　おゝお時か、血の道はどうだ。
お時　あい、大きにようございます。（ト思入あつて兩人を見て、）もし、お前さん方は何だか知らぬが、さつきから何をやかましく言ひなさるのだ。
お熊　あい、言ふ筋があるから言ふのさ。（ト思はずお時と顔見合せ、）

兩人　や、お前は頭。

お時　あこれ、(ト目て押へ、びつくり思入あつて、)てもまあ、思ひ掛けない。

兩人　どうして爰に。(ト三人の素振を見て、徳兵衛思入あつて、)

徳兵　お時、おぬしは二人を知つて居るか。

お時　いゝえ、知つては居りませんが、まだわたしが緣附いて、こちらの家へ來ぬ時分、河岸のお湯で時折出逢ひ、口は利かねど知つた顏、それでかしでというたのぢやわいな。

さん　ほんに、あれきりさつぱりと、お前さんにも逢はなんだが、廻り廻つて又爰で、思はずお目に掛るとは、不思議な御緣で、

兩人　ござりますなあ。(ト兩人思入、お時思入あつて、)

お時　樣子は奥で聞きましたが、是れが貸借りといふぢやあなし、出さねばならぬ譯もなけれど、見ず知らずの人でもなし、荒立てれば世間の聞え、こりや穩便に濟まさにやならぬ。(ト徳兵衛に向ひ、)もし旦那、わたしが何か差出たとお思ひなさるであらうけれど、どうぞあの二人へ、望みの金を遣つて下さんせ、こりやァわたしが賴みでござんすわいなあ。

徳兵　いやもう、貴樣に話しを聞かれちやあ、面目もねえ今日の始末、然しむざ〳〵百兩の、金を出す

のも癪に障れど。

お時　そりやさうでもござんせうが、世間の聞え暖簾の名折れ、幸ひわたしが預かつた、丁度封金此の百兩、（ト思入あつて、）もしお前さん、委しい樣子は知らないが、おつに搦んだぬしの身の上、女房のわたしが横合から、直段の高下も爭はれず、出入りはわたしが買ふほどに、不承であらうが此金で、綺麗に歸つて下さんせ、しかも歩金で揃つて百兩、是れを納めて下さんせ。

ト百兩包みをお熊の前へ置く、お熊兩人思入あつて、

お熊　有難うござりますが、是れはお返し申します。（トお時の前へ出す。）

お時　返すとは何でござんす、お前方の望みの高、百兩上げたが不足かえ。

お熊　いえ、不足ぢやあござりませんが、お貰ひ申しては濟みませぬからさ。

お時　なに、濟まないとはえ。

お熊　さあ、見ず知らずのお家と思つて、おねだり申しに參りましたが、お顏を見ちやあどうして是れが。

お時　そんな義理をば言はないで、口數きかず其金を、手切れに持つて行かしやんせ。

お熊　それだといつて。（ト返さうとするを、）

さん　これさ〳〵、お上さんがあのやうに事を分けて仰しやるから、お貰ひ申して行きねえな。
お熊　長くいふうち襤褸が出勝手、お詞に隨つて、こりやあお貰ひ申しませう。
德兵　其金取つたら二人とも、
お熊　なに、言ひ分がござりませう。
悟市　然し一度が百兩とは、
お熊　斯うなつて見ると、お氣の毒だねえ。
宗助　お氣の毒なら、置いて行きねえ。
さん　えゝ、又四文と出やあがらア。
ト兩人思入あつて、お熊金を懷に入れて悠々と立上り、おさんと顏見合せこなしあつて、
お熊　はい旦那、おやかましうござりました。
さん　お上さん、とんだ御厄介になりましたねえ。
宗助　さあ〳〵、金を取つたら早く行きねえ。
お熊　えゝ行かねえでどうするものかえ。
さん　おい、こいつも生涯雜兵だせ。

お熊　さうよ、陣笠の似合ふ面だらう。（ト言ひながら門口へ出て、）あゝ悪い事は出來ねえ、どうして爰に、あの頭が。
さん　何さ、河岸から行くより、眞直ぐの方がよつぽど近いよ。
お熊　横に曲つた魂を、見下げられるが恥しい。
さん　横町へ曲つて何處へ寄るのだ。（トお熊此内おさんの下駄を間違へてはいて出る。婆お熊の袖を引き、）おいお熊さん、下駄が間違つたよ。（トいふをお熊思入あつて、）
お熊　今日は歸つて、またあした。
さん　これさ、あしだぢやあねえ、下駄が違つたといふことよ。（ト此時お熊心附き、）
お熊　なに、下駄が違つた、やつぱりそゝくさする奴よ。
さん　おいお熊さん、悪い方にやあ落着いたものだね。
お熊　なあに、爰らが肚胸の青い所よ。
さん　どうして仕事は大丈夫だ、おいらが目利が違ふものかね。
お熊　おい、山伏の夕立だぜ。
さん　何だとえ。

お熊　買かぶりだといふことよ。

さん　へゝ、若い者は如在ねえの。

ト手拭を肩へ掛ける、是れを切つ掛けに誂への合方になり、二人並んで捨ぜりふを言ひながら花道へはひる。宗助跡を見送り居る、徳兵衞思入あつて、

徳兵　これさ宗助、いつまで跡を見て居るのだ。

宗助　いや、太え女もあるものだ。（トこちらへ來る、）

徳兵　ときに悟市さん、とんだ所へ掛り合つて、誠に氣の毒千萬だ。

悟市　いえ、どういたしまして、然しまあ今の世界でも、やつぱりあんな奴がござりますね、實に女だといつて肌は許されませぬ。（トお時を見て、）これはお上さん、御免なさい。

お時　ほゝゝゝ、ほんに油斷がなりませぬわいな、是れといふのもやつぱり内のが、襤褸ッ買だによつてゞござんすわいなあ。

徳兵　今日の始末は、一言なしだ。

宗助　もし、私は宗吉の所へ行つて、山刀の催促をいたして參りませう。

徳兵　おゝ、よく氣が附いた、今日も催促をされた、どうぞそれぢやあ行つて來て下せえ。

宗助　へい／＼畏りました。（ト宗助風呂敷包みを肩に掛けて、）へい悟市さん、御ゆるりと。
ト是れにて宗助は下手へはひろ、悟市思入あつて、

悟市　いえ、私も大きに長座をいたしました、左様なら此短刀は、お手取りになりますでござりますね。

德兵　そりやあ買ふ段ぢやあないが、ちつと氣の毒な事があるが、其短刀を買ふ積りで、金は百兩こしらへて置いたが、お前も見て居なさる通り、今金を遣つたゆゑ、ちつと今は差支へるが、どうか明日まで金の所を、繰合せて置いて下されぬか。

悟市　いえ、それは外ならぬこちらの事でござりますから、宜しうござります、左様なら品物は慥にお預け申しました。

德兵　これはしつかり預かりました。

悟市　へいお上さん、お喧しうござりました。

お時　まあよいではござりませぬか、何にもござりませぬが、一口附けませうわいなあ。

悟市　へい、有難うはござりますが、まだ中通りへ廻らねばなりませぬ、明日までお預けといたしませう。

お時　さうでござんすか、誠に今日はお氣の毒でござりましたわいなあ。

悟市　どういたしまして、左様ならまた明日。

德兵　悟市さん、御免なせえ。（ト合方になり、悟市花道へはひる、跡德兵衞お時思入あつて、）これお時、手前の耳へ聞えちやあ、實におらァ面目ねえよ。

お時　さあ、悋氣はせまいと心では、異見はしても女の淺慮、氣の揉めぬでもなけれども、是れもやつぱり約束事さね。

德兵　さうあきらめてくれるなら、おらァやつと安心したよ。

お時　安心したと落着いて、又手を出してはならないよ。

德兵　手を出す所か、懲り〳〵したのよ。

お時　懲りたといへば今の女、性懲りもなく筒持せ、段々首の細るも知らずやつぱり直らぬあの性根。

ト思はず心に思ふことをいふ思入、德兵衞もこなしあつて、

德兵　惡い事とは知りながら、止められぬのもやつぱり業か。

お時　あの須走りの樣子では、どうで此身の雲霧も、

德兵　晴れて言はれぬ舊惡を、突き當てに來た二人の駕籠舁。

お時　但しは因果でいつまでも、惡い心の放れぬのか。

德兵　一日惡事を働いた、其罪科の報ふも道理。
お時　あの筒持せの樣子ぢやあ。
德兵　刀は銹を研ぎ直せど。
お時　心の銹はとれねえものか。
德兵　あ、天道さまは。(ト是れまで心々のせりふあつて、思はず德兵衞大きくいふ。)
お時　え。(ト心の附く思入、德兵衞氣を替へる。)
德兵　何さ、よつほど日ざしが、(ト空を見て、)違つて來たの。
ト此模樣よろしく心々の思入、やはり隣りの稽古唄にて、此道具廻る。

(眞野屋奥座敷の場)＝本舞臺三間の間中足の二重、本緣附き風雅なる欄間、上手床の間、下手腰張りのある茶壁、眞中茶立口、下手地袋違ひ棚、ずつと上手畫心に圍ひの横手を見せ突這の手水鉢、此前秋草の花壇、誂への床几一脚あり、下手朝顔の搦みし四つ目垣、いつもの所風流なる枝折戸、此道具綺麗に飾り、總て眞野屋奥座敷の模樣、爰に丁稚尻端折り、襷掛にて手桶を側へ置き、如露にて花壇へ水を遣つて居る、此見得よろしく合方にて道具留る。ト丁稚手桶の水をあちこち撒いて、

丁稚　本當に今日ぐらゐ忙しい事はなかつたぜ、たまさか旦那が留守だから、ちつと油を賣らうと思ふと、お上さんが血の道だといつて、頭痛がするから天窓を叩け、それもやう〳〵濟ましてしまふと、旦那が見世へ歸つて來て、何だかごて〳〵して居るから、此間が儲けものと、臺所の隅で寐て居ると、間もなく旦那に起されて、跡が直ぐに庭の掃除だ、水を汲むので肩が張つた、あゝ、是れを思へば世の中に、せまじきものは水づかひぢやなあ。はツくしよ、はい、又お上さんの小言の支度だと見えるわい。（ト手桶と如露を持つて、）是れから湯へでも行つて、ちつと樂をしにやあならねえ、錢湯は年季野郎の下屋敷ツさ、畜生め、うまくやりやあがつた。

トやはり合方にて下手へはひる、時の鐘打上げて、上方唄の獨吟になり、一件濟んで合方になる、以前のお時短檠を提げ、奧より出來り、思入あつて、

お時　此身に積る罪科をどうか一度は消したいと、眞人間になる心で、いつぞや朝熊の古寺で盜んだ金を分配なし、是れが惡事の仕納めと手下の者にも因果を含め、それから世間の氣を拔いて、此鎌倉で知邊を尋ね、眞面目な顏で嫁入りして、けふが日まで盜み所か生眞面目に、亭主を大事商人は約しくしにやあならねえと、ほんに稼ぎ一三昧、是れぢやあどうか末始終、疊の上で死なれると、思つた矢先へ今日のごて〳〵、うつかり見世へ出て見れば、ゆすりに來たるあの女、一人は

須走り、いまだに心が直らぬとは、よく〳〵因果なあのお熊、今日逢うたのが此身の天命、爰にも長くは居られねえが、どうでも惡事の帳消しは、出來ねえものと見えるなあ。

ト愁ひの思入、また獨吟の二の句になり、思案のこなし、此唄を借り、花道より前幕の喜之助頬冠り尻端折り、一本ざし、お初の手を引き出來り、花道にて思入あつて直ぐに本舞臺へ來り、枝折の外より内を窺ひ、兩人囁き合ひ、思入あつて下手へ忍ぶ。お時は此内うなづく事あつて、有合ふ硯箱を引寄せ、文を書いて居る、此時以前の德兵衞出來り、

德兵　お時、爰に居たか。（ト是れにてびつくりして手紙を卷き仕舞ふ。）

お時　あい。

德兵　手前、何をして居るのだ。

お時　今手紙を書かうと思つて。

德兵　その手紙は何處へやるのだ。

お時　はい、媒人の所へ。

德兵　何で手前は媒人へ、何の用があつて遣るのだ。

お時　何でやるのかわたしより、お前の胸に聞いて見やしやんせ。

徳兵　いゝおつに搦んだ事をいふが、それぢやあ矢ッ張りさつきの事を。
お時　もう古臭い女房ゆゑ、わたしを去つて若いのを、持たうと思ふ心根に、ふッつり愛想が盡きたゆゑ、どうぞ暇を下さんせ、あい、退状書いて下さんせいなあ。（トずつけり言ふ、徳兵衞こなしあつて）
徳兵　これさお時、手前も粋にも似合はねえ、なにあれしきな女の間違ひ、出るも引くもあるものかな。
お時　いゝえ、わたしやどうあつても。
徳兵　愛想がつきたと言やるのか。
お時　さ、わたしよりはお前の方で、愛想が盡きると思ふゆゑ、去状貰つて退きたいのさ。
徳兵　そりや又何で此おれが、おぬしに愛想が盡きるといふは。
お時　もし徳兵衞さん、實はさつきのあの女が、わたしが爰に居る事を、知つたに依つて何うも爰には。
徳兵　さうしてさつきのあの女を、手前何處でか近附きか。
お時　近附き所かあの女は、實はわつちの手下の奴さ。
徳兵　そんなら手前は。
お時　あい、是れまで包み隱して居たが、明かさにやならぬわたしが身の上、恥かしながら雲切お六といふわたしや泥坊さ。

德兵　や。

お時　それだに依つて此内に、わたしが長く居る時は、お前の爲にならぬに依つて、辛い所だが德兵衞さん、去つて貰はにやならぬわいなあ。（ト思入あつていふ、德兵衞も思入あつて、）

德兵　これお時、それぢやあ猶々去られねえ。

お時　そりや又何で、わたしをば。

德兵　其泥坊が賴もしさに。

お時　何と言はしやんす。

德兵　おれもやつぱり泥坊よ。

お時　えゝゝゝ。（トびつくり思入、德兵衞コレと四邊へ思入、誂への合方になり、）

德兵　何を隱さう此おれも、東海道ぢやあ肩書を、少しやあ知られた夜働き、神道德次といふ盜人は、おれが事よ。

お時　そんならお前が噂の高い。

德兵　おれも長らく稼いだが、最う切りあげてしまはうと、堅氣になつて居た所が、さつき見世へ錢貰ひにうせた二人の駕籠舁は、以前おれを見知つた奴、おれが體へ目を附けて歸つて行つたが油斷

がならねえ、づいづきが廻りやあおぬしもおれも、どうで遁れぬ天の網、一度死んだら二度とは死なねえ、まあ落着いて居るがいゝわな。

お時　ほんに緣といふものは、互ひに盜みをした體が、堅氣になつて共々に、素性を隱して夫婦になり。

德兵　廻り〳〵てばれ口が、一つ其日に來るといふも。

お時　斯うも廻つて來るものか。

德兵　成程似たもの夫婦とは、

兩人　よく言つたものだなあ。（ト兩人よろしく思入。）

お時　さうしてお前は以前から、此鎌倉の生れかえ。

德兵　さあ話せば長いおれが素性、產れは近江の六角家で眞野浦之進といふ武士の悴、おれが親仁が殿樣から琵琶丸といふ短刀を、鶴ケ岡の八幡へ納める役を蒙つて下る途中鈴鹿山で、其一腰を盜まれて言譯なさに親仁は切腹、それから屋敷はほんてんこく、浪人してもおのれやれ親仁の敵、二つには、刀の詮議仕出さうと旅から旅を步くうち、路銀が盡きた所から、ちよつと始めた盜人も、惡い事にやあ染み易く、二度が三度と功を積み、トヾの仕舞は面白く、たうとう引けも取らねえやう、本物とまで仕上げたが、元はと言やあ琵琶丸の、詮議の種が病み付きよ。

ト徳兵衛こなしあつていふ、お時も是れを聞き、びつくりすることあつて、心を定めし思入にて、

お時　さうぢや。(ト立上り、行きかけるを徳兵衛留めて、)

徳兵　これお時、さつ相替へて何處へ行くのだ。

お時　はて知れた事、明しあつたる惡事のばれ口、お前の惡事を訴人して、それを功に舊惡を、脫れて命を助かる積りさ。(ト振切つて行きに掛るを、徳兵衛きつと留める、)

徳兵　人も知つたる雲切だが、流石は女、未練が出たな。

お時　假令未練といはれうが、最う斯うなつちやあ一日でも、生き延びるのが此身の德。さあ、そこ退いて通しなせえな。

徳兵　そんなら、どうでも訴人をする氣か。

お時　知れた事だ、放しなせえ。(ト又振拂つて行きかけるを、)

徳兵　もう是れまでだ、覺悟しろ。

ト徳兵衛拔打ちにお時に浴びせる、お時切られながら這廻つて、手水鉢の柄杓を打附ける、又徳兵衛切り込むを拔けつ潜りつ立廻るうち、又一刀切込み、お時わつと倒れる、徳兵衛乘りかゝつて刀を振上げろ、お時苦しき思入にて、

お時　まあ〳〵待つて、德兵衞どの。

德兵　えゝ、今となつて卑怯な一言、息の根留めて。(トきつとなろ。)

お時　さゝゝゝ腹が立たう、腹も立たうがこちの人、わたしやお前の手に掛り死にたいばかりで今の空言。是れで少しはわたしの身の、濟まぬ義理が立つたわいなあ。(ト德兵衞不思議の思入。)

德兵　何といふ、此德兵衞が手に掛つて、此身の義理が立つたとは。

お時　もし德兵衞どの、今は昔の此身の懺悔、今まで知らぬお前の素性、聞いてびつくり驚いたは、お前の親御の浦之進どのが、所持なす寶の短刀を、鈴鹿越えの山中で奪ひ取つたは此雲切、それぢやによつて手に掛り、死なねば義理が濟まぬわいなあ。

ト泣落しの合方より、直ぐに竹笛の合方になり、此時以前の喜之助、お初下手よりそつと出て、門口にて窺ひ居る、德兵衞思入あつて、

德兵　そんなら鈴鹿で琵琶丸を、盜み取つたはそちであつたか。

お時　さゝ、それにも深い樣子のあること、わたしが實の父さんは、やつぱり同じ藩中にて、其名も唐澤松太夫、子供も二人あつたれど、兄が家督に弟も、わたしも幼いその時に、他所へ貰はれ成人なし、身性が惡く音信不通に行かなんだが、噂を聞けば兄松兵衞、謀叛の兆しをお前の親御の、

浦之進殿に見顯はされ、切腹なして斷絕と聞いては親身の兄弟ゆゑ、惡い兄でも妹の身でも無念のやみ難く、時がなあらば恨みをば晴らさんものと思ふうち、殿より預かる琵琶丸を所持して旅へ發足と、聞いて嬉しく跡を附け、日頃の恨みと一腰奪ひ逐電なしたは此お六、廻り〳〵て敵同士夫婦となるも重なる因果、それゆゑお前の手に掛り、切られて死ぬるが此身の本望、どうぞ許して下されいなう。

ト苦しき思入にていふ。此時門口の兩人走り入り、喜之助はあわてゝお時に縋り、

喜之 そんならお前は六角家にて、唐崎松太夫どのゝ、娘御にてあつたるか。

德兵 やゝ、そなたは瀨田屋の喜之助どの、お初と二人何ゆゑあつて。

お初 さあお前さんにも此間の、申譯やら何やかや、喜之助さんと二人して、さつきに此場へ來かゝりて、立聞きなしたるお家の樣子。

喜之 德兵衞どのお聞き下され、不思議といふも愚なこと、今際の際に御内儀が、物語りせし唐崎氏こそ、此喜之助が實の親人。

德兵 やゝ何といふ、さすれば女房お時には、胤も替らぬ實の兄弟。

お時 そんならそちが弟の、喜之助であつたかいなう。

喜之　姉上さまでござりましたか、此喜之助は幼き時より、瀨川屋の家へ養子となり、年月過ぎる其うちに我が實家たる唐崎の、家名は惡事の露顯にて、家斷絶と聞いたばかりで音信不通、姉者人がおはすとは、豫て寢耳に覺ゆれど、お顏も知らずに過せしに、計らず此家で同胞が、名乘り逢ふのは不思議の奇緣。

お時　折角逢ひは逢ひながら、先非を悔いて此深手、是れが同胞逢ひ初めの、

喜之　逢ひ納めでござりまするか。

お時　弟。

喜之　姉者人。（ト兩人手を取交し、）

兩人　お懐しうござりまする。（ト兩人ちつと泣き落す。お時氣を替へ、）

お時　さうして是れなる娘御は。

お初　お内儀さま、私ことは初と申しまして、不思議な事で旦那さまの、お世話になつて居りましたれど、是れまで終に一夜さもお泊りなさるゝ事もなく、不思議に思うて居りますうち、雨宿りに計らずも喜之助さまにお目に掛り、過ぎ越し方を話すうち、旦那さまのお出でにて、厚い御恩を受けまして何とお禮を申さうやら、只濟まぬのは是れまでに、假令帯紐解かずとも、御内儀さんの

ある方に、お世話になつて居ましたは、お許しなされて下さりませ。（ト思入にて言ふ。）

お時　そんならかねぐ話しのある、お女中さんであつたかいなう。（ト徳兵衛思入あつて、）

徳兵　それに附いても徳兵衛が、話さにやならぬ一部始終、斯う打ち寄つた上からは、廻りめぐつた因果因縁、此お初をば匿つたも浮氣でねえといふ仔細を、切なからうがこれお時、まあとつくりと聞いてくりやれ。（トまたお初に向つて、）おぬしやあ元は佐々木の藩中、堅田保左衛門どのゝ娘にて、早衣といはうがな。

お初　え、どうして其名を。

徳兵　さあ知つたといふは去年の秋、しかも盆の十三日、牛尾越えの山中で、喜之助どのとこなたと二人、駈落者と覺つたる駕籠舁二人が弱身を附込み、路用の金へ目を附けて追落さうとした時に、取つた路銀を後から濡手であわよくせしめたる、深編笠の侍は、見忘れたらうが此おれだ。

お初　えゝ、そんならあの時路銀を取つたは。

徳兵　まあ其後を聞きなせえ、それから包みを開いて見ると、中にあつたる守りの封じに、近江の國佐佐木の藩中堅田保左衛門娘早衣と、記してあつたでびつくりしたは、おれが親仁が劍術の兄弟子にて一方ならず、世話になりしと不斷の話し、こいつは飛んだ事をしたと、追駈けようにも時

刻は延びる、あゝ儘よ、是れ限り逢はずにも居めえから、何處でなりとも見當つたら、其時詫びて返さうと思つて暮す其うちに、此春ふつと大磯で早衣どのに廻り逢ひ、艱難苦勞をするといふ話しを餘所に聞いたゆゑ、それからおれが引取つて圍つて置いたもどうかして、達者で居るなら喜之助どのに逢はれる事もあるだらうと、上部ばかりは圍者、是れまでふッつり其事を明して言はぬも二人を、一緒にしてえばつかりだ。樣子といふは此通り、此身の懺悔二人の衆、どうぞ料簡して下せえ。

お初　初めて聞いたるお物語り、惡に強いは善にもと、喜之助さんに逢はさうばかり、長の年月私をばお世話下さるお志し。

喜之　恨む所か、此お禮、口ではなか〳〵盡されませぬ。

お初　是れに附けても不思議な御縁は、今おつしやつた唐崎の松兵衞さまの御内儀は、私が父さま保左衞門さまへ再縁なされて今の母さま。

お時　すりや早衣どのゝ母御といふは、兄松兵衞の連合なりしか。

喜之　心よからぬ兄者人ゆゑ、音信不通に知らざりしが。

德兵　思ひ掛けなく名乘つて見れば、

喜之　柵む緣で、

皆々　あつたよなあ。（ト皆々思入）

德兵　あゝ今更いつて詮ないが、是れまで互ひに素性を包み、夫婦になつたる女房お時、其身の罪科といひながら。

お時　いえ〳〵わたしが此體は、どうで一度は天の網、ちつとも悔む事はない、望んで夫の手に掛り疊の上で死ぬるのが、わたしや嬉しい、お前はどうぞ此場を落延び、どうぞ脫れて下さんせ。

德兵　そりやあ未練といふものだ、假令翼があるにもせよ、天から掛つた網の目は、どうで脫れる事は出來ねえ、名乘つて出でゝ尋常に、お上のお仕置受ける心、斯う入譯を聞く上は、計らず手に入る此琵琶丸、花水橋で此間早衣どのゝ弟御保之助どのにお目に掛つた、旅宿は慥に笹目ヶ谷、保之助どのより六角家へ差上げて下さるやう、喜之助どのへ我が賴み。（ト以前の短刀を出す。）

喜之　そんなら是れなる一腰を、

德兵　保之助どのへ屆けて下せえ。

喜之　氣遣ひあるな德兵衛どの、鎌倉表へ出府とあれば、

お初　久し振りにて弟に逢ひ、

喜之　此一品はしつかりわしが。(ト短刀を受取る。)

德兵　それさへ渡せば德兵衞が、思ひ置く事更になし、さあ又障りない内に、二人の衆は此場を早く。

お初　それぢやというて此儘に、どうまあ見捨てゝいなれませう。

德兵　えゝ未練を殘す所でない、爰に構はず短刀をば。

喜之　そんなら此儘德兵衞どの。

お初　お禮は重ねて、(ト兩人よろしく立上りしが、お時に心の殘る思入にて、)

喜之　姉者人が此場の御最期、其身に科はあるとても、同胞といふ恩愛に、何で隔てがござりませう。

お時　其恩愛も愛着も、捨てゝ浮世を邪非道。

喜之　それぢやと申して血筋の緣は。

お時　さ、切つて此世を。(ト有合ふ脇差を腹へ突立てる、兩人見て、)

兩人　そんなら是れが。(ト又寄らうとするを德兵衞隔てる、此時以前の駕籠舁窺ひ出で、)

權次
三次　お尋ねものゝ神道、雲切。

ト權次はお時の手を持つて引立てる、三次は德兵衞に組附くを突廻して一刀浴びせる、お時は其儘よろよろと權次に引かれながら、どうとなるはずみ、權次の脇腹を刀にて貫く、それにて權次ヮツと苦しむ。

お時思入あつて、

お時　冥土の血祭り。

徳兵　臨終稱念。（ト片手にて拜む。喜之助お初は花道附際にて、）

喜之助
お初　南無阿彌陀彿。

徳兵　やがて此身も。（トちよつと愁ひの思入。）

兩人　え。

徳兵　行きやれといふに。

ト刀を引く、三次見事にかへる。是れと一時にお時がつくり倒れる、此途端權次も見事にかへる。喜之助お初手を合せ、双方見合つて木の頭。

喜之
お初　はあゝ。

ト泣落す、徳兵衞顏を背ける。お時がつくりと落入る。此仕組よろしく寺鐘にて、

ト時の鐘にてつなぎ、直ぐに引返す。

ひやうし　幕

（笹目ヶ谷四辻の場）――本舞臺三間の間戸を締めたる表店の道具、眞中に上手へ九尺の緣を附け、下手に潜り戸、板葺屋根乘る事あり、上手に黑塗り町木戸、左右柵矢來用水桶、後黑幕、よき所に柳の立木、日覆より同じく釣枝、總て笹目ヶ谷四ツ辻の體、軒下に○△□◎の雨宿りの仕出し立掛り居る、雨車四ツ竹節にて幕明く。

○　もし秋の空とは言ひながら、氣違ひ日和ぢやあござりませぬか。

△　然しほんの一降りで、西の方が切上りました。

□　まだ北の方が眞つ闇だから、最う一降りかゝるかも知れねえ。

◎　傘を買ふにも四つ過ぎだから、こんな困る事はねえ。

○　さあ〱降らねえうちに行きませう〱。

ト仕出し上下へ別れてはひる。跡に頰冠り絲立を着た捕手二人殘り、四邊へ思入あつて、

捕一　兵馬どの。

捕二　運八どのか、貴殿は何れをお廻りなされた。

捕一　拙者は滑川より切通しの方を廻りましたが、未だ手掛りが知れませぬ。

捕二　手前は此界隈を歩きましたが、知らぬ事とて雪の下の、眞野屋徳兵衛と申す者が、神道徳次と申

す曲者にて、かの女房が五人女の、雲切お六めと注進あつて承はりました。

捕一 して見まするると、お熊おさん殘りの者も、此界隈に隱れ居るも知れませぬ。

捕二 何にいたせ雲切は、自殺なしたと申す事ゆゑ、須走りお熊を初め、殘りの者を詮議なし、搦め捕つて手柄になさん。

捕一 然らば是れにてお別れ申す。

捕二 由井ヶ濱にてお出合ひ申さん。

ト時の鐘、右の合方にて兩人上下へ別れてはひろ。ばた〳〵になり、花道より以前の悟市琵琶丸の短刀を持ち出來り、跡より以前の喜之助追駈け出るを、船頭支へながら出來り、花道にて、

喜之 これ悟市どの、其短刀を返して下され。

悟市 途方もねえ事をいつたものだ、此短刀はおれが代物。

喜之 さうでもあらうが、是非ともそれを。

船頭 えゝ、無駄な事を言ひなさんな。（ト船頭喜之助を突退け、三人舞臺へ來ろ、喜之助悟市を留め、）

喜之 成程元はこなたの物にもせよ、德兵衛どのより預つたれば、わしが手からは返されぬ。

悟市 返すも返さねえもあるものか、此短刀は仲間うちから、借りて來て賣つたのだ、まだ代金を取ら

ねえければ、言はずと知れたおれが代物。
船頭　それに又話しを聞けば、德兵衞さんか盜人で、さつき逃げたといふ事だ。
悟市　其噂を聞いたゆゑ、取返しに行く途中にて、出會したはこつちの仕合せ、達てといへば代官所へ、こなたを連れて訴へるぞ。
船頭　訴へられたら疵持つ足、人の女を取る程だから、あんまり細い方でもあるめえ、思ひ切つて仕舞ひなせえ。
喜之　假令何であらうとも、なくてならざる其短刀、それをこなたに取られては、德兵衞どのへ義理が濟まぬ、どうぞそれを返して下され。
悟市　返せ〳〵と言つたとて、只是れが返せるものか、おれも商人の事だから誰に賣るのも同じ事だ、欲しくば是れを賣つてやらう。
喜之　そんならどうぞ賣つて下さいまし。
悟市　さあ賣つて遣るから、百兩の代金を渡しなせえ。
喜之　さあ今といふては其金が、
悟市　出來ねえのかえ。

喜之　どうぞ明日まで貸して下され。
船頭　おい〳〵喜之助さん、無駄な事を言ひなさんな、身許も慥に知れねえお前、二分か三分なら知らねえこと、百兩といふ大金だよ。
悟市　右から左りそつくりと、耳を揃へて渡すなら、賣つて遣るめえものでもねえが、貸せと言つては四文も貸せねえ。（ト悟市喜之助を突放す、喜之助縋り留める。）
喜之　こなたの言ふのも尤ながら、其短刀を取られては、一旦男が受合つた、徳兵衛どのへどうも濟まぬ。
悟市　濟まざア金を出しなせえ、後ともいはず、賣つて遣らう。
喜之　さあ其金は、
船頭　出來ねえのか。
喜之　さあ、
悟市　金を出すか。
喜之　さあ、
兩人　さあ、

三人　さあ〳〵。
悟市　金が出來るか。
喜之　むゝ。（トぢつと思入。）
悟市　金が出來ずば無駄なことだ。
船頭　さあ、きり〳〵と退きやあがれ。
ト船頭喜之助をむごく突倒す、此以前後へお熊頬冠り番傘を提げ窺ひ居て、
お熊　其短刀はわつちが買はうよ。（ト手拭を取り前へ出る。喜之助見て、）
喜之　や、そなたはお熊。
船頭　やあ、こりや此間の御殿女中。
悟市　女のゆすりのこなたが是れを。
お熊　ちつとこつちに入用だから、わつちに賣つておくんなせえな。
悟市　おゝ耳を揃へて百兩なら、相手は構はぬ賣つて遣らう。
お熊　お前もさつき見て居なすつた、德兵衛から取つた百兩だが、おさんに十兩遣つたから九十兩ある、是れで賣りねえ。（ト懷から金包みを出す。）

悟市　いや氣の毒だが百兩ぢやあ決着の値段だから、十兩缺けては賣りにくい。
お熊　損はかけねえ、今夜にもいゝ仕事があつたらば、お前の家へ持つて行かあな。
悟市　それだと言つて九十兩ぢやあ。
お熊　けちな事を言ひなさんな、膝に凭れて一言いやあ、百兩づゝも取るわつちだ、お前方に十や十五の端た金を倒すものかな。（ト三人思入あつて、）
船頭　もし悟市さん、買はうといふ相手が相手だ、思ひ切つておしまひなさいな。
悟市　思ひ切つて賣りたいが、みすみすに元直が切れるから。（ト是れにてお熊癇に障りし思入。）
お熊　賣れざアよしねえ、買ひやすめえ、出所の知れねえ此短刀、ゆすり衒で昨夜から捜されて居て、喰ひ込んだ其時に、十兩だけのお禮はわつちが、きつとするから覺悟しねえ。
悟市　え。（ト思入、船頭悟市の袖を引き、）
船頭　これさ悟市さん、商人は思ひ切りが肝腎だ、器用に賣つてしまひなせえ。
悟市　むゝ、それぢやあ九十兩で負けてしまはう。
お熊　なに、負けるにやあ及ばねえ、出來さへすりやあ持つて行くよ。
ト此内喜之助合點の行かぬ思入にて、

喜之　これお熊、おぬしはそれを何で買ふのだ。
お熊　何で買はうとわつちが胸に、お前は默つて見て居ねえ。(ト件の金包みを出す、)それ九十兩ある、改めて見ねえ。(ト悟市金を取つて改め見て、)
悟市　はい慥に受取つた、それ短刀。(ト悟市お熊に短刀を渡す、悟市金を懷へ入れ。)
船頭　さあ金を取つたら悟市さん、ちつとも早く行きませう。
悟市　すんでの事に短刀を玉なしにする所、廻り廻つて德兵衞の、金がお前の手に入るとは、
悟市　こいつも深い因緣だ。(ト時の鐘、右の合方にて足早に上手へはひる。跡喜之助思入あつて、)
喜之　これお熊、おぬしはそれを何にするのだ。
お熊　わつちが何にするものかね、大方お前が欲しからうと、思ふから買つたのさ。
喜之　そんならおれにくれる氣か。(ト喜之助嬉しき思入。)
お熊　連添ふ亭主の事だから、遣らねえ心もねえけれど、九十兩といふ金を出してわつちが買つたのだから、たゞはいやだ喜之助さん、一つの趣意を立てゝおくれな。
喜之　なに、一つの趣意を立てろとは。

お熊　まあ立つて話しも出來ねえから、丁度いゝものがある。（ト揚緣をおろし、）喜之助さん、まあ爰へお掛けな。（ト合方になり、）

喜之　これお熊、改まつてわしに話しとは。

お熊　以前の情婦か知らねえが、長谷小路の新道で、お初といふ圍者と、いゝ仲になつたさうだね。

喜之　え、どうしてそれを。

お熊　知らねえでどうするものだ、里親のお勝が來て、何もかも喋べつて行つたよ。

喜之　すりやあのお勝が。

お熊　假令以前の情婦にもせよ、それぢやあお前義理が濟むめえ、亭主の恥を言ひ度くもねえが、近江の國から鎌倉へお前が出て來た其時は、菰こそ着ねえが乞食同然、ふつと出合つてお互ひに見覺えのある幼な顏、やれお熊か若旦那かと、段々との話しをば聞けば聞くほど哀れな身の上、直ぐにわつちが引取つて二年此かた据膳でお前を過して置いたのは、以前わつちのお袋が乳母奉公をして居たゆゑ、其恩返しと言ひながら、ちつとは義理のある女房、まだ其上に此間産んだ其子も里にやり、其扶持から着物まで針はきかねえ替りにやあ鋏の利いた腕一つ、みんなわつちの稼ぎだよ、それを振捨て色狂ひ、主人でなけりやあ亭主でも、たゞは置きやあしねえけれど、手出し

のならねえ其替り、お初とやらいふ圍者と、すつぱり切れてしまひなせえ、其時これを上げやせう、立派に切れたといふ證據が、なけりやあ何ぼ亭主でも、此短刀は上げられねえ。

ト是れにて喜之助じゆつなき思入にて、

喜之　乳母の緣とはいひながら、此身の難儀を救はれし義理あるそなたを振捨てゝ、何で其樣な事を仕よう、深い樣子は知るまいが、以前近江に居た時分わしゆゑ家出した娘、思ひ掛けなく出逢うたれど、そなたに替へてお初をば、女房に仕ようなどゝいふそんな心はないわいの。

お熊　ない事もあるめえが、是れが欲しくば其女と、切れてわたしへ證據をお見せ、さうさへすりやあ亭主のこと、女房の物はお前の物だ。

喜之　むゝ、さういふ事ならお初に逢ひ、立派に切れて來る程に、證據を見せたら短刀を。

お熊　わつちが持つて益ねえ品、上げねえでどうするものだ。

喜之　そんなら直ぐに、（トつか〳〵と花道へ行き、思入あつて、）とはいへ、便りのないお初。

お熊　未練が殘つて切られずば、男を取られた意趣返し、わつちが是れですつぱりと。

喜之　えゝ、それでは切れぬ其時は、

お熊　切つて恨みを、

喜之　あこれ、それに及ばぬ、今宵のうちに、

お熊　お初と切れた、

喜之　證據を見せう。

お熊　見せなさるかえ。

喜之　待つて居やゝ。（ト時の鐘にて喜之助逸散に花道へはひる。お熊立上り傘を持ち跡を見送り、思入あつて、）

お熊　思ひがけない此短刀が、お勝に聞いた圍者お初と手切れの枷になつたが、今のやうにやあ言ふもの〻昔馴染の其上に、わつちと違つてお孃さん、見替へられるは無理はねえ、夫婦といへどせう事なし、難儀な所を助けられ無理往生の亭主だから、捨てられるも仕方もねえが、男に負けねえ惡黨でも氣の揉めるなア色の道、亭主に情婦が出來たと聞きやあ、萬更いゝ心持でもねえ、嫉妬を燒くのも尤だ、家へ歸つて返事を待たうか。

ト お熊思入あつて、短刀を帶にさし傘を持ち、片褄とつて上手へ行きかける、花道の揚幕にて、

お傳　おい〳〵、ちよつと待つてくんな。

お熊　なに、待てといふはわつちかえ。

ト向うへ思入、合方にて花道よりおさらばお傳、宿場女郎好みのこしらへにて出來り、花道から、

お傳　おい、呼び掛けたのは、お前だよ。
お熊　さういふのは、お傳ぢやあねえか。
お傳　夜目にも忘れぬ形容、お熊と見たから呼んだのだ。（トお傳舞臺へ來る。）
お熊　ほんに、久し振りで逢つたが、替る事もなくつていゝの。
お傳　よくお前も達者で居たの。
お熊　危いところを切り拔け〳〵、今日までは無事で居たが、さうしてお前は何處に居るのだ。
お傳　いつか頭に別れてから、富士の根方の知邊を便り、ぐつと堅氣になる積りで、百姓の女房になつたが、三度喰ふ麥飯と日向臭え亭主に飽き、藤澤へ來て自前稼ぎに、宿場の勤めをして居たよ。
お熊　鼻の先きの藤澤に、お前が居るとは知らなんだ。
お傳　聞けばお吉も此頃は、鎌倉へ來て居るといふぢやあねえか。
お熊　おゝ牛尾峠の立場に居た、あれがお袋の山猫おさんが、鎌倉へ流れて來て、朝比奈の切通しに茨から茶見世を出して居たが、そこへお吉も一つになり、體のいゝ筒持せで、小綺麗に暮して居るよ。
お傳　それぢやあお吉もお袋の、山猫おさんと一つかえ。

お熊　まだ世間で知らねえから、人を化して居るけれど、名うてのおさんお吉だから、どうで長持ちはありやしねえよ。

お傳　何にしろ久し振りだから、何處かでお酒と仕ようぢやないか。

お熊　ま、ゆつくりと話してえが、ちつと今夜は用があるから、明日の事にしてくんねえな。

お傳　今夜に限つた事もねえから、それぢやあ明日の事に仕よう、さうしてお前の家は何處だ。

お熊　笹目ヶ谷の寺町で、紙屑屋と花屋の裏だよ。

お傳　それぢやあ坊主湯の先きだの。

お熊　よく知つて居るの。

ト此時上手より以前の捕手兩人出で二人を窺ふ、お熊お傳是れを見て互ひにぎつくり思入あつて振返り見る、是れにて捕手は後へはひる、兩人ともうなづき、

お傳　何かの事は、

お熊　明日ゆつくり、

お傳　話しを仕ようよ。（ト時の鐘合方にて、お傳上手へはひる。お熊思入あつて、）

お熊　どれ、更けねえうちに、早く行かうか。

ト帯をきつとしめる、時の鐘、此時下手へお吉好みのこしらへ、頬冠りにて窺ひ居る、お熊是れを見て上手へ行きかけるを、お吉つか／＼と行き帯を引戻し、

お吉　おい、ちよつと待ちな。

お熊　え〻、何をしやあがる。（ト振拂ふ。）

お吉　え〻、びく／＼せずと待ちなといふに。

お熊　やあ、さういふ聲は。

お吉　木鼠のお吉だよ。（ト時の鐘合方きつぱりとなり、）

お熊　待てといふのは、何ぞ用か。

お吉　ちつとお前に、無心があるのだ。

お熊　氣の毒だが錢金なら、ちつと話しが出來ねえよ。

お吉　何ぼしがねえおいらだつて、錢金の無心をいふものかね。

お熊　何の無心か知らねえが、早く言つてくんねえな。

お吉　外でもねえ、お前の持つて居る、其短刀を貰ひたいのだ。

お熊　なに、此短刀を、（ト思入あつて、）おつな物の無心だが、何で是れが欲しいのだ。

お吉　ちつと遣りてえ人があるから、是非それを貰ひたいのさ。
お熊　むゝ、其遣りてえといふのは、誰だ。
お吉　誰でもねえ、喜之助さんよ。
お熊　そりや又何で。
お吉　あの喜之助さんが言交した、お初といふ圍者は、以前屋敷へ殘して來た早衣といふわつちの妹さ。

ト是れを聞きお熊思入あつて、

お熊　それぢやあお初といふ女は、木鼠手前の妹か。
お吉　是れでも昔は屋敷もの、佐々木の家中で堅田の娘小浪といつたお孃さん、身性の惡いお袋に連れて出られて苦界へ賣られ、手癖が惡さに鞍替も旅から旅を段々と、流れ〳〵て鎌倉で、今ぢやあ堅氣な水茶屋渡世、兄弟つきぬ緣端へさつき休んだ妹の早衣、牛尾峠で賣られたる委しい話しをとつくりと、聞けば今はお初と名を替へ、喜之助さんと深い仲、其緣切りの枷になるお前の持つてる短刀をわつちが貰つて二人を、生れ故鄕へやりてえのさ。
お熊　五人女と同胞同樣、緣を結んだ其中も、親身の妹に義理を立て、おれが向うを張る氣たな。
お吉　そりやあ言はずと知れた事よ、實の妹に連添ふ亭主、肩を持たねえでどうするものだ、さあ其短

刀を早く出しな。（トお熊きつと思入あつて、）

お熊　さう他人こなら、おれも共氣だ、いつぞや朝熊の古寺で二百兩づゝ分け取りに、惡い心を入替へて堅氣になれと親切な、頭の異見も水の泡、世の譬にも川だちは川で果つるといふ通り、此須走りも水心、段々覺めて臍よりか膽が太つて來たものゝ、鯔となるにやあまだ丈の足りねえ小さな鯔ッ子も、尾鰭が附いて一年増し、罪科深い沖を越え、いゝとゞの仕舞は爼板の、板附になり切られる體、此短刀がほしいなら、命を二ッこみにして、腕があるなら取つて見な。（トきつと言ふ。）

お吉　おゝ取らねえでどうするものだ、わつちが取らうと覘つたら、どんな危ない所でも、枝から枝へ飛び歩き、取るのが得手な木鼠お吉、親といふ字に恐れるは、五人の内で山猫ばかり、假令熊でも狼でも馬の尾につく鼠の早業、晝は隱れて忍んでも、寢靜まつての夜働き、二十日鼠の時分から大きな仕事もしたけれど、尻尾を見せた事はねえ。さあわつちに生血を吸はれぬうち、きり／＼短刀渡しなせえ。

お熊　命が二つあるならば、此短刀を遣らうけれど、男を取つたお初の姉妹、生かして置いて遣るものか。

お吉　そつちも無事にやあ置かねえから、二つ命があるなら力め。

お熊　おゝ、手前を殺すか、殺されるか。

お吉　その短刀と命の遣り取り。

お熊　そんなら爰で、

兩人　勝負しよう。

ト兩人さつと見得、誂への合方にてお吉件の短刀を取りに掛る、お熊やるまいと是れを枷に立廻り、兩人とも匕首を拔きよろしく立廻つて、トヾお吉短刀を取る、お熊やるまいと引張り居る、此時以前の捕手兩人、外に黑四天の捕手六人出て、

捕手　それ、

皆々　捕つた。

ト十手にて打つて掛る、是非なくお熊お吉捕手を相手に上下へ別れ、立廻りあつて、お吉立廻りながら上手へはひる、ばた／＼になり、上手より以前のお傳出來り、捕手を追ひ散らしお熊を助ける。

お傳　須走りぢやあねえか。

お熊　や、おさらばか。

お傳　これ須走り、今山猫おさんが揚げられたので、おぬしの惡事が露顯して、此近邊は嚴しい詮議、

まだ木戸々々のしまらぬうち、ちつとも早く落ちたがいゝ。

お熊　いゝや惡事が露顯したら、逃げ隠れをした所が、天の網は脱れられねえ、お吉に大事な短刀を取られたからは取返し、あいつを殺して破れかぶれ。

お傳　そんならどうでも落ちねえ心か。

お熊　遣る所までやつて見る氣だ。（ト爰へ捕手出て、よろしく立廻りあつて下手へはひる、跡お熊思入あつて）是れからお吉が跡おつ掛け、男を取られた遺恨の仕返し。（ト上手へつか〱と行く、上手の木戸ぴつしやりしまる、）南無三、木戸がしまつたか。（ト當惑の思入）

お傳　表町が締つたら、

お熊　裏町から廻つて。（ト下手へ來る、下手の木戸ぴつしやりしまる。）

お傳　もう此上は。

お熊　取つて返して、（トお熊は花道、お傳は東の假花道へ掛かる、左右揚幕の木戸しまる、どん〱烈しく打ち、）やゝ、四方の木戸がしまりしよな。

お傳　間近く聞ゆる寄せ太鼓。

お熊　袋の鼠となつたるか。（ト見得、爰へ後より捕手掛り立廻りながら舞臺へ來り、）これ〱お傳、おれに構

はずおぬしは早く。

お傳 いや／＼、おれに構はずおぬしが早く。

捕手 何を。

ト捕手打つて掛るを相手に立廻り、お傳打ち据ゑられるをお熊助け、落ちろといふ思入、是れにてお傳下手へはひる。誂へ鳴物にて烈しき立廻りあつて、下手へ追ひ込み、ほつと思入あつて、

お熊 此間に木戸を乗越えて、おゝさうだ。

トお熊登らうとする捕手二人かゝる、是れを足代に木戸を乗越え内へはひる、どん／＼ありや／＼の聲、ばた／＼にて知らせに附き、此道具打返す、雨落より霞の張物をせり上げる。

（屋上捕物の場）――本舞臺一面の大屋根、後續きの屋根、物干火の見誂へよろしく、向う打抜き切出しの屋根、町家の遠見よろしく、どん／＼にて道具納る。と屋根の上へ以前のお吉上り來る、跡より捕手四人上りちよつと立廻り、よき見得より誂への鳴物になり、お吉四人を相手に立廻りよろしくあつて、下手屋根傳ひに追ひ込む、又どん／＼にて、上手よりお熊屋根へ出て來る、捕手四人掛り、竹笛入りの鳴物になり、立廻りあつて左右へ追ひ込み、ほつと思入、此時後へお吉出で、

お吉　須走り覺悟。

お熊　何を小癪な。

ト誂への鳴物になり兩人懷劍にて立廻りよろしく、是れへ捕手からむ、是れに隔てられ面白き立廻りあつて、トヾお熊お吉を一刀切る。

お吉　やゝ、こりやおれを切つたな。

お熊　おゝ、生かしちやあ置けねえ。（トどん／＼誂への鳴物にて又立廻つて、お熊短刀を取返しお吉を切下げる。）

お吉　やゝ、深手を負つたか。（トどうとなる。）

お熊　もう叶はぬぞ木鼠お吉、尻尾をはさんで往生しろ。

お吉　ちえゝ、口惜しい。

トお吉立ちかゝらうとしてどうとなる、お熊短刀を振上げきつと見得、是れにてせり上げの鳴物になり此屋體せり上る。此内兩人手負の立廻りよろしくあつて、上手にて、

捕手　歩め。

トお傳繩にかゝり、捕手繩を取り、是れに此村音八割羽織野袴大小草鞋がけにて、神道徳次の切首を提げ出來る、お熊これを見やり、びつくりなし、

お熊　や・頭といひお傳まで。
お傳　今先きの四つ角で、頭が追手に取り卷かれ、進退きはまり切り死になすを、せめて日頃の恩返しと介錯なして首を持ち、遁れようとした所を、たうとう遁れ果せずに、首諸共に此繩目だ。
お熊　それぢやあ是れまで姉妹の、縁を結んだ友達は、皆上の手にあひたるか。
音八　神道德次を初めとして斯くお捕へになる上は、最早脱れる道はなし、潔よく繩目を受けるか、但し卑怯を働く上は、此場を脱さず召捕るか、さあ返答は如何なるぞ。
ト是れにてお熊もう是れまでといふ思入あつて、持つたる短刀を鞘へ納め音八の前へ下に居て、
お熊　今日まで遁れた須走りも、爰が年貢の納め時、尋常に繩にかゝりますが、只此上の御慈悲には此琵琶丸の短刀を、瀬川屋の悴喜之助どのへお返しなされて下さりますやう、是れが一つのお願ひでござりまする。（ト音八受取り、）
音八　一應調べし其上にて、願ひは必ず聞き屆けん。（お吉苦しき思入にて、）
お吉　そんなら須走り、是れが此世の。
トうつとりになる、捕手後より襟首を取り引立てる、是れにてお熊お傳ぢつと見返り、
お傳　此場はこの儘別るゝとも。

お熊　今に冥土で、（ト切首とお吉を見やりぢつとなり、お傳と顔見合せるを木の頭、）さ、繩をお掛け下さりませ。

ト兩手を後へ廻す、お吉は落入る。お傳投げ首をする。此模樣よろしく時の太鼓、三重模樣早き合方にて、

ひやうし　幕

白浪五人女（終り）

東の方

小林が取持に久し振にて仁太夫が御目見得の土俵入、

河津股野、

西の方

於虎を取持て重年なせし志賀之助が御贔屓願初番附

西行が猫頼豪が鼠を種に二組三組結ぶ世界も義仲公巴と契ろ隱里入に語ぬだんまりに仔細も言ず市郎兵衛が愛想盡しに去れたろおすまが胸をお涙が汲み返らぬ愚癡を車井戸水垢離取し朝霧が師匠思ひに嬉も落ち仁王に勝し明石を遺恨に與之助仁太の喧嘩から浮世を夢と朝比奈が切合ふ白刃の眞中へ飛込む鷲の長吉

昔今曾我取組春芝居の榮

に惚たおよしは未戀も初雷かごろつきの家へ駈込むお嬢さん手切の金や麻衣坊主小兵衛も善心に野暮な異見を夕月の影も朧に薄雲が親宗庵の祟により魅し舊鼠の十三郎中を隔ろ新造の胡蝶も猫の本性を顯す屋根の立廻り變つた趣向に手は盡せど餘所は手取の力士と力士何れも樣を力にて立合ふ角力も未熟の顔觸

揚名乘廓源氏名

櫓太鼓鳴音吉原

やぐらだいこおともよしはら

「明石志賀之助と傾城薄雲」は慶應二年二月市村座に稿下された。作者五十一歳のことである。明石志賀之助の件は後年「關東名物男達鑑」といふ名題の下に復演された。それは附錄年表の通りである。彦三郎の明石志賀之助、家橘の長吉何れも好評であつたが、後年の七世團藏である市川九藏の明石の弟子朝霧島藏がすばらしい出來榮えで、出世藝の一つになつたと言はれてゐる。二番目の薄雲の件では、猫と鼠の屋上の立廻りといふものが大評判であつたといふ。

稿下當時の役割は坂東彦三郎（明石志賀之助、飛脚音平、深見十三實は舊鼠の怪、朝比奈藤兵衞）、岩井紫若（三浦屋の薄雲、市郎兵衞女房おすま、巴御前）、河原崎權十郎（仁王仁太夫、夢の市郎兵衞、飛脚咲平）、市村家橘（飛脚渦平、鷲の長吉、三浦屋の新造胡蝶實は舊猫の怪）、市川九藏（明石弟子朝霧島藏、修行者北山、巾着切幻次郎吉）、坂東龜藏（三浦屋四郎左衞門、坊主小兵衞、印南主膳）、中村歌女之丞（志賀之助女房おなみ、三浦屋の朧夜）、市川新之助（一富士仁太郎、印南の下部升平）、河原崎國太郎（江島屋娘およし、新造八重雲）、中村仲太郎（醫者素庵）等であつた。

口繪にしたのは、國周筆の錦繪で、鷲の長吉が仲裁に這入つた所。挿繪にしたのは、芳幾筆の明石志賀之助である。卷頭の作者筆稿本は三浦屋の場の一部分である。又扉の題字は繪草紙から採つたものである。

大正十四年九月　　　　校訂者


明石志賀之助
坂東彦三郎
芳幾画

櫓太鼓鳴音吉原（明石志賀之助と傾城薄雲——七幕）

鶴ケ岡八幡の場
雪の下小池の場
極樂寺縄手の場

序幕

〔役名——明石志賀之助、巾着切幻次郎吉、醫者飾摩宗庵、夢の子分一富士仁太郎、鎌倉屋の息子梅之助、神崎傳內、印南三七郎、巾着切小雀忠次、仁王の弟子金剛彌太八、林田作六、船坂甚藏、賴家公、呼出の小奴三太。志賀之助女房お浪等。〕

（鎌倉鶴ケ岡境內の場）——本舞臺四間通し中足の二重、前面石垣の蹴込み、左右へ笹龍膽の幕を張り、正面八幡宮拜殿の書割、諸所に銀杏の立木、日覆より同じく釣枝、總て鎌倉鶴ケ岡境內の模樣、二重眞中に賴家烏帽子狩衣にて床几に掛り、後に仕丁四人長柄の傘、沓臺を持ち控へ居る、左右に大名六人何れも烏帽子素袍大紋にて居並び、此見得天王立ちめいたる鳴物にて幕明く。

賴家　今四海泰平に治まり、父賴朝へ誰れあつて敵たふものもあらざるに、先年粟津の一戰に滅ぼされし

たる義仲主從修羅の巷に迷ひ、魔道に入りしと聞き及ぶ頼豪阿闍梨の亡靈と合體なして鼠と化し、都をはじめ關東へ害をなさんとはびこるよし。

大一　既にこの程御大將御機嫌斜めなる故、お側に隨ふ大小名晝夜詰番いたせしところ、御惱まします刻限は、毎夜違はぬ子の上刻。

大二　合點行かずと存ずるゆゑ修驗を召寄せ尋ねしところ、近衞の院のその古へ刻限違へず大内へ、鵺の祟りし例を引き、

大三　是れぞ年經る鼠の業と審かなる敎へに依り、心を附けて窺ひ見れば、丈拔群なる大鼠、夜毎に御所へ顯れ出づ。

大四　然るにそれを避けんには、西行法師へさいつころ遣はされたる白銀の猫、病間へ飾り置くときは年經る鼠退散なす由。

大五　それゆゑ東へ下られし西行法師の在所を求め、猫を所望に及びしところ、墨染櫻のほとりにて知らぬ童に遣りしとやら。

大六　如何に出家の身なればとて餘り無慾な西行殿、それゆゑにこそ此程より白銀の猫詮議最中。

大一　國に盜賊家に鼠と世の諺には申せども、誠にこれは國に鼠、奇異なることではござらぬか。

六人　何さま仰せの通りでござる。

頼家　餘事は扨おき、今日ツた、社參いたすは外ならず、父君所勞平癒の爲、各祈念いたされよ。

六人　委細畏り奉つる。

ト大拍子になり花道より、印南半七郎上下大小にて出る、東の假花道より神崎傳内、同じく上下大小にて出で、双方花道へ留り、下に居て、

半七　はツ、主人大江の廣元が名代として家臣の者、則ち印南半七郎、

傳内　まつた、北條時政が名代として重役たる、神崎傳内嚴命ゆゑ、

半七　これまで推參、

兩人　仕つてござりまする。（ト舞臺へ向ひ辭儀をなす。）

頼家　ほゝ、申し附け度き儀によつて、兩家へ使者を遣はせしに、早速罷り出たる兩人、苦しうない近う參れ。

大一　頼家公の御意なれば、

大二　いざ先づこれへ、

六人　お通りなされい。

傳内　然らば御免、

兩人　下さりませう。(ト右鳴物にて兩人舞臺へ來り、傳内は上手半七郎は下手に住ふ。)

傳内　してわれ〳〵へ、御諚とは。

半七　如何なる儀にて候や。

傳内　仰せ聞けられ、

兩人　下さりませう。

賴家　ほゝお、召出すこと餘の儀にあらず、かねて音にも聞きつらんが、年經る鼠の奇變に依り父賴朝には夜毎の御惱、それを避けんその爲に白銀の猫詮議いたせど、未だ行方が知れざれば兩家へ詮議申附くる、日あらず詮議いたせし方へ、きつと恩賞たるべしと、父君よりの則ち嚴命。

半七　はゝ、委細畏り奉つる、斯かる嚴命蒙る上は、假令いづくの果までも草を分かつて詮議なし、日あらず上へ差し上げん。

傳内　あいや暫く印南氏、貴殿左様に言はるゝが、其白銀の猫と申すは、疾より上で御詮議あれど、只今以て知れざる品、貴殿が穿鑿召されたとて何の知れよう筈がござらう。

半七　お默りめされ神崎氏、詮議いたして知れ難き所を捜すが則ち詮議、假令如何なる品なりとも唐天

竺へ渡らば知らず、我が日の本にあるときは、尋ね出すに何の手間暇、それに何ぞや蔑めさるゝは、近頃以て慮外でござらう。

傳內　いゝや慮外でござらぬ、無駄な詮議と存ずるゆゑ、知れぬと言つたが如何いたした。

半七　所を身共が詮議なし、上へ差上げ御覽に入れん。

傳內　見事御身が。

半七　おんでもないこと。

兩人　何を。（トきつとなる。）

賴家　兩人控へい。

傳內
半七　はッ。（トこれにて平伏なす。）

賴家　予が面前をも憚らず、互ひの高聲無禮であらうぞ。

半七　はッ、恐入り奉つる。

賴家　いやなに傳內、只今そちが詞には、父賴朝が嚴命にて詮議を申附けたる品、そちは知れぬと申し張るが、何を證據に申し出しぞ。

傳內　さあ、其儀は。（トぐつとつまる。）

賴家　はて未だ詮議もいたさずして、左樣な儀をば申さずと、兩人共に心を碎き、きつと詮議をいたしてよからう。

傳內
半七　委細畏り奉つる。（ト是れにて傳內少ししよげる思入れ）

賴家　それは扨おき、父君の所勞の憂きを慰めんと赤澤山の相撲に習ひ、諸國の力士を呼び集め、近々御所の庭前にて、相撲上覽催す間領地々々に力量の勝れし者があるなれば、當日召連れ參られよ。

傳內　はゝ、旣に其儀は先達て仰せ出されあるゆゑに、我が國許より出たる力士仁王仁太夫と申すもの、衆に勝れし手取りゆゑ、則ち東の關と定め。

半七　まつた、國許播州より出でたる力士、其名さへあらはに明石志賀之助、これも十分の手取り故、西の片やの關と定め。

大一　それに續きし關脇は、大和の國より出でたる力士、背拔群に勝れしゆゑ其名も大佛奈良右衛門。

大二　又小結は紀州なる熊野浦にて生ひ立ちたる、名も大鯨沖之助、互ひに劣らぬ背高に、彼の大佛と比べし所、金と鯨に二寸程、こちらの背丈が高いとやら。

大三　爰に古今の大男は駿河の國の出生にて、名も鵜呑山富士九郎、彼れ十分に背丈を伸し、歩くときには青空へ、天窓が半分はひるよし。

大四　聞けば先日太陽と鉢合せをなし額をば、大分火傷いたせしとやら。

大五　又その向うを張らんとて、近江の國より出でたる力士、名も湖水嶽勝吉とて湖水にひとしきへその穴。

大六　それに順じて惣身の數は未だに相分らず。

傳内　いや如何程身形が大きいとて、必ずともに當にはならぬ、拙者が何より手本でござる。然し明石がどれ程に力量勝れ居るとても、仁王に所詮及ばぬことは、寫眞鏡にて見るも同然。

半七　あいや、又しても傳内殿には左樣なことを仰せらるゝ。假令いかほど仁太夫が力量勝れ居るとても、志賀之助に及ばぬことは、蟷螂が斧の譬のごとし。

大一　何さま、いづれが何れやら、どちらも勝れし力士ゆゑ。

六二　その勝敗は存ぜねど、身共は仁王のものかと存ずる。

大三　いや〳〵身共は明石の方が、相撲は上手と存ずるて。

大四　何も其座の一興なれば、分と預かり物言ひまで、殘らず貰つてどちらへでも百疋賭にて參らうかな。

大五　われ〳〵共も一味をいたす。

大六　いや、慾張つたことを申さるゝ。

頼家　あいや勝負は時の拍子とやら、未だ手合せいたさぬうちは何れが是とも定め難し、其爭ひは無用たるべし、益なきことにて時移り、最早祈念の刻限なれば、是れより社參いたすであらう。

半七　何さま君の仰せの如く、他事の論にて暫時の暇取り。

傳內　左樣ござらば頼家公。

頼家　方々にも、

大一　先づ、

皆々　お入りあられませう。

ト下り葉になり、若い衆の仕丁沓を直す、頼家これを履き二重より下り、跡より仕丁長柄の傘を差掛け、是れへ大名六人附添ひ上手へはひる、傳內思入あつて上手へはひる、續いて半七郎はひろ、跡大拍子になり、花道より林田伴六船坂甚藏袴大小にて出る、跡より金剛彌太八鶏冠天窓、大縞の布子とりてきのこしらへにて出て花道にて、

伴六　何と船坂氏、最早九ツを打ちましたれば、今日殿の御名代に此鶴ヶ岡へ參られて居る、神崎氏にもお役目、定めて最早相濟んだでござらう。

甚藏　左樣でござる、あれへ參つて待合せ神崎氏を同道なし、例の小池で吸ひこみませう。
金剛　いや又それでは今日は、船坂樣の蝙蝠の閻魔の踊りが見られまするな。
甚藏　いや其踊りはそつちへ讓り、身共は當時太夫の方だ。
伴六　外の踊りは兎も角も、閻魔ばかりは貴殿に限るて。
金剛　その又閻魔の地を唄ふは、伴六樣に限ります。
伴六　とは又、なぜだな。
金剛　はて、閻魔に鹽辛聲と言ひます。
伴六　なにを馬鹿な。（トやはり右鳴物にて三人舞臺へ來る、上手より傳内出來り、）
傳内　それへござつたは、御兩所ではござらぬか。
伴六　これは〳〵神崎氏、われ〳〵かねてお約束ゆゑ、船坂氏と同道にて、時刻をはかつて出かけて參つた。
甚藏　最早お役目が相濟みましたら、われ〳〵御同伴いたすでござらう。
傳内　それはよくこそお出でゞござるが、未だ役目が相濟みませぬて。
伴六　して、今日の御用の筋は。

甚藏　如何なる仔細でござつたな。

傳内　いやお聞き下され、斯樣でござる。（ト是れにて三人床几へ掛ける）其御用と申すは外でもござらぬ、お手前方も知らるゝ通り、いつぞや將軍賴朝公西行法師へ遣はされし、白銀をもつて作りし猫、詮議仕出して差上げよと、北條大江の兩家へ嚴命。

伴六　それぞ幸ひ其猫こそ、

伴六
甚屋　かねて貴殿が。（ト言ひかけるを）

傳内　えへん〳〵。（ト金剛が居るゆゑ、言つては惡いと目配せする。）

伴六　いや〳〵其御斟酌には及び申さぬ、貴殿は未だ御存じないが、あれは仁王が祕藏弟子にて、金剛彌太八と申して　隨分惡才のはたらく奴ゆゑ、かねて一味にいたしてござる。

金剛　どうぞ此末御贔屓を、何分お願ひ申しまする。

傳内　いや左樣でござるか、然らば憚かることもなければお話し申すが、知らるゝ通り西行法師が彼の猫を童に與へし跡へ廻り、童を欺し某が猫を卷揚げ所持してをつたが、我が手にあつては面倒と存じたゆゑに京都なる、一味の修驗者不動院へかね〴〵預けおいたれば、此度上意の出たこそ幸ひ、我が腹心の家來たる足早段平めに申附け、竊に都へ走らせて早速取寄せ某が詮議仕出せし積

りにて、北條家より差上げなば、日頃不和にて何處ぞでは恥辱を與へてやらうと存ずる、大江家では鼻があき、其虛に附込み近々に上覽相撲のあるこそ幸ひ、關と關ゆゑ大江家の抱への明石と此方で抱への仁王と取るは必定、けちの附いたる大江家ゆゑ明石が負けるは知れたこと、さすれば猶々大江家へ、恥辱に恥辱を與へる魂膽、何とうまい手番ひではござらぬか。

作六　いや、驚き入つたる貴殿の御工風。

甚藏　われ〳〵感心いたしてござる。

金剛　いやもう、高の知れたる附出し相撲、言はゞ素人同樣の明石とこつちの師匠とは、比べものにはなりませぬ。

作六　殊に貴殿の言はるゝ通り、兩家へ嚴命下つたる詮議の猫を差上げれば、大江は御不興こつちは上首尾。

甚藏　何かに附けて邪魔になる、あの廣元さへ押籠めれば、跡は當家の心のまゝ。

作六　やがて天下は北條の。（ト言ひかけるを、）

甚藏　あこれ、（ト抑へて四邊へ思入あつて、）壁に耳ある世の習ひ、何かの事は隱密々々。

傳內　左樣ござらば、小池へ參り、其前祝ひに一獻汲まうか。

傳內　身共も同道いたしたいが、今言ふ通り役目がござれば。

甚藏　然らばわれ〳〵兩人、お先へ參つて貴殿のお出でを。

金剛　お待ち申してをりまする。

傳內　そんなら御兩所。

伴六
甚藏　傳內殿。

傳內　兎角勤めは辛うござるて。

ト大拍子にて傳內は上手へ三人は下手へはひる、あと流行唄になり、花道よりお浪相撲の女房好みのこしらへにて出る、三太奴天窓相撲の仕着裝、縞の達附をはき、風呂敷包みを背負ひ出る、跡より幻次郎吉剃立てそぼろなるこしらへにて、一富士仁太郎の男達の子分に引摺られて出る、此跡より小雀忠次町人のこしらへ、合羽草履掛にて出て、花道に留り、

仁太　さあ野郎め、拔いた簪を出しやあがれ。

次郎　あゝもし、左樣な覺えはござりませぬ、どうぞ御免なされて下さりませ。

お浪　もし仁太さん、まあ靜かにして下さんせえなあ。

仁太　なに構ひません、こんな奴は打ちやつておくと癖になります。さあおれと一緒にうしやあがれ。

しやあがれ。

（ト右の唄にて皆々舞臺へ來り、仁太郎次郎吉を引附けこ）さあ、盜みやあがつた簪を、きり〳〵爰へ出せ。

次郎 あゝもし〳〵、只今も申します通り、何も盜みました覺えはござりませぬ、どうぞ御免下さりま

仁太 何ねえことがあるものか、これ人を見損なやあがつたか、憚りながら爰に居るのは、當時評判の

い〻西の關、明石志賀之助さんのお上さんだぞ。

三太 又爰に居るこの兄いは、その親類の男達夢の市郎兵衞さんの一子分で、一富士の仁太さんといつ

ちやあ、當時若手の賣出しだ。

仁太 さあ拔いた簪を出しやあがらねえと、うぬが足腰を拔いてやるぞ。

ト立ちかける、忠次始終この體を見て居て前へ出て、

忠次 おい〳〵、おらあ往來のもんだから、委しい事は知らねえが、盜んだのなら出してしまひねえ、

其替りにやあ此衆達へ、おれが詫言はしてやらあ。（ト是れにて次郎吉顏を上げこ）

次郎 いづくのお方かは存じませぬが、御親切なる其お詞、成程盜みはいたしましたが取つたと言つた

ら、どのやうな目に逢ふことかと存じまして、今まで包み隱しましたが、お詫をして下さるとお

つしやりますゆゑ、抜きましたる其簪はお返し申しまする。其替りにはあなたからどうぞあれなる皆さんへ、お詫をなされて下さりませ。（ト懐より簪を出す、忠次取つて、）

忠次　もし、これでござりますか。（トお浪へ出す。）

お浪　はい、是れでござりますわいなあ。

仁太　これ見やあがれ、此通りだ。

三太　これ程持つて居やあがつて、いや、いけ太え野郎だなあ。（ト忠次次郎吉を見て思入あつて、）

忠次　こう兄イ、見りやあお前も年若で定めて親もあるだらうが、なぜこんな不料簡なことをするのだ、これお相手でも悪い目にやあ突出されても仕方がねえや、さうなる時にはあとへ残つた親の歎きはどんなだと思ふ、今日の所はどこまでも、おれが皆さんへ詫をしてやるから、是れからふッつり心を改め、堅氣にならにやあいかねえぜ。（ト是れにて次郎吉しを／＼として、）

次郎　はい有難うござりまする、見ればあなたもお若いのに、よく御親切に言つて下さりました、其お優しい詞につき、此身の因果を何れもさま、一通り聞いて下さりませ。（ト合方になり、）何をお隠し申しませう。私はこの笹目ヶ谷で一人の母を養ふ爲、人様のお使ひをして其日をかすかに送るもの、此物成りの高いのでたゞさへ困るその中で一人の母が長の煩ひ、長屋の衆のおつしやるに

は血痨とやらゆゑ人參を、盛らねば所詮直らぬと話しに聞けど貧しさに、一服二服の買藥も煎じ詰めたる瘦世帶、どうぞいたして人參を母に呑ませてもう一度、達者にさせてやりたいと表へ出ても片時忘れず、思案に餘つて來かゝる道、向うから來る女中連、いづくの人のお上さんか、てもお立派な身の廻りと見惚れるお顏に目に附く簪、あれがあつたら人參の價の代にならうかと、ふと魔がさした出來心、親の爲ゆゑ今日樣も大目に御覽下さらうと、こは〴〵ながら拔きましたも馴れぬことゆゑ捉へられ、取つたと言へばどのやうな目に逢ふことかと悲しく思ひ、今私が居ぬ時は、みす〳〵母が見殺しにせねばならぬと思ひますゆゑ、知らぬ〳〵と言ひ張りしも、あなたが中へおはひり下され、お詫をなされ有難い御異見までして下さいますとは、何とお禮を申しませうやら、有難涙がこぼれまする。

ト涙ながらにいふ、お浪不便だといふ思入、忠次思入あつて、

忠次　やれ〳〵お前も若いのに、とんだ苦勞をしなさるなう。

お浪　さう聞く上はわたしもまた、一旦念のかゝつた簪、さして居る氣はない程に、是れをお前に上げようから、幾らになりと賣代なし、それで今いふ母さんに藥を買うて呑ませなさんせ。

ト簪を遣らうとするを、仁太郎留めて、

仁太　これさ姉さん、何をしなさるのだ、こんな哀れッぽいことを言ふのは、こりやあこいつ等の附目でござります、無駄なことだ、止しなさるがいゝ。
お浪　いえ〳〵假令嘘にもせよ、親孝行の爲にする盜みとあれば此わたしも、かゝさんに早く別れ種々苦勞をしたゆゑに、人の事とは思はれませぬ、この簪がないとても別に困りもせぬゆゑに、どうぞ遣つて下さんせいなあ。
仁太　それだといつて、馬鹿々々しいから。
お浪　はてまあ、遣つて下さんせいなあ。（ト是れを聞き忠次感心せし思入にて、）
忠次　成程なあ、流石は當時名の高い明石關のお上さんだ、いや、切れ放れのいゝことだなあ。さういふ事ならお貰ひ申して、おつかァの病氣を直すがいゝ。
次郎　いえ〳〵、其の思召しは有難けれど、嘘を申すと思はれましては、どうも心が濟みませねば、どうなりまするも時節だと、お袋のことはあきらめまする。
忠次　これさ、そんな事を言はねえで、折角お上さんの思召しだ、戴いておくがいゝ。
次郎　左樣ならばお詞に甘え、頂戴いたすでござりまする。
お浪　どうぞさうして下さんせいなあ。（ト是れにて次郎吉簪を貰ひ嬉しき思入にて、）

次郎　あゝ有難い〳〵、此簪がござりますれば親子二人が助かります、少しも早く藥を求め、お袋の病氣が直したいわい。

忠次　おゝさうであらう〳〵。然しわしも仲人だ、さういふ事もあるまいが、是れが嘘の日には此衆達へ濟まないから、こなたの家まで送つて行き、おつかァに逢つて此事を共々話して悦ばせよう。

次郎　成程左樣でござりまする、あなたがさうして下さりますれば、此身の疑ひも晴れるといふもの。（トお浪の前へ來り、）これは〳〵お上さま、何とお禮を申しませうやら、有難うござりまする。是れにて母が全快いたせば、母を伴ひお禮には、きつと二人で上りまする。

お浪　いえもうそれには及ばぬ程に、早う戻つておつかさんの、病氣を直したがよいわいなあ。

次郎　有難うござりまする、左樣ならお前さん、大きに失禮を申しました。（ト仁太郎三太に挨拶をする。）

忠次　さあ〳〵、早く行かう〳〵。左樣なら皆さん、又お目に掛りませう。

ト忠次先きに次郎吉附いて行きに掛る、此前より後へ以前の半七郎、袴大小にて出掛り窺ひ居て、此時前へ出て、

半七　兩人待て。（ト是れにて次郎吉忠次ぎつくり思入あつて、後を振向き半七郎を見てびつくりなし、）

次郎
忠次　南無三、しまつた。（ト逃げに掛るを、仁太郎は次郎吉を、三太は忠次を捉へ、）

仁太　大方からであらうと思つた。
三八　そんならやつぱり、此奴等は。
半七　おゝ掏摸を働く盗賊ぢやわ。（トお浪、半七郎を見て）
お浪　どなた樣かと存じましたら、あなたは夫志賀之助がお出入り屋敷の印南樣、さうしてこちらの町人も。
半七　如何にもかれらは相掏にて、某先日主用にて滑川まで參りし歸り、花水橋へ掛りしところ、是なる兩人申し合せ我が懷中を拔かんとせしを、引捉へしが只管にこの後心を改めると、達て詫びるに不便と存じ、異見を加へ見脱しやりしに、又候稼ぎを致すとは言はうやうなき人非人めが。
ときつと言ふ。
仁太　さう聞いちやあ猶のこと、こいつア生けてはおかれぬわえ。
ト立ちかゝらうとする。此うち次郎吉、もうこれまでといふ思入あつて、
次郎　やかましいやい、靜かにしろ。（ト尻をまくり胡坐をかき、）さう知られたら仕方がねえ、如何にもおらあ盗人だが、高の知れた晝稼ぎ、かたつた物は此通り。（ト件の簪を投出し、）返してしまへば出入りはちよん〳〵、所でさつき腹散々往來中を引摺られ手籠めにされた仕返しを、是れからおれ

が仕にやあならねえ。（トきつとなる。）

仁太　おゝ面白え、さう吐かしやあ、うぬ、何うするか見やあがれ。（ト立掛るをお浪留めて、）

お浪　これさ仁太さん、どうしたものだ、こんな者を相手にしてお前ばかりか親分の、恥になるのを知らしやんせぬか。

仁太　それだと言つて、あんまりだから。

お浪　はてまあ、よしにしなさんせといふに。（トよろしく留める、是れを聞き次郎吉猶々附上り、）

次郎　なに恥になる、べらぼうめ。恥になるとはこつちで言ふこと。聞きやあそつちは男達の夢の子分といやあがつたが、道理でぼんやりした野郎だ、まご〳〵すると其面を、目の覺める程張り曲げるぞ。

トこれを聞き忠次氣の揉めるこなしにて、

忠次　これさ次郎公どうしたものだ、そんなばらがきな事を言つて、くれえ込んだらどうするのだ、ちつとも早く逃げねえ〳〵。（ト手を持つて引張るを振拂つて、）

次郎　えゝ、けちなことを言やあがるな、もう斯うなつたら肚胸をするゑて、直ぐに爰から突出させろ。さあ相手にならざあ爰から突出せ、其替りにやあ片ツ端から、抱いて行くからさう思へ。

半七　おゝ、望みに任せ兩人とも、繩打つて引く、覺悟いたせ。（ト立掛るをお浪留めて、）

お浪　あゝもし其御立腹はお道理ながら、是れを表沙汰にいたす時は夫の名まで出さねばならず、殊に取られし其品も、こちらへ返りし上からは、どうぞ此場は穩便にお濟ませなされて下さりませいな。

半七　許しにくい奴なれど、現在盜みに逢うたるそちが、詫びるとあらば此方も、元より事は好まぬゆゑ、許してくれる。兩人とも、とつとゝ早く立つて行け。

（ト此うち三太件の簪を拾ひとる、仁太郎忌々ましいといふ思入。）

仁太　たゞおく奴ぢやあねえけれど、折角姉御の賴みだから、うぬ等の命は預けておくぞ。

三太　命冥加に有難えと、禮をいつて行くがいゝ。

次郎　うぬ等が行けといはねえでも、用もねえのにべんくと、いつまで爰に居るものかえ。

忠次　然し折角うまくいつたに、とんだ奴が出やあがつて、たうとう仕事もちやあふうだ。

次郎　もしお侍さんえ、此返報はいつか一度は。

半七　おゝ、恨みがあるなら何時なりと。

次郎　えゝ、きつとお禮に行きますよ。（いやに云ふ、是れにて唄になり次郎吉忠次花道へ行く、三太前へ出て、）

三太　やい馬鹿野郎、ざまあ見やあがれ。

ト囃す、これにて次郎吉うぬと跡へ返らうとするを忠次留めて、

忠次　これさ、まあおれに任せろといふに。（ト兩人向うへはひる。）

仁太　盜人たけ〴〵しいと、いや呆れけえつた奴等だなあ。（ト合方になり、お浪前へ出て、）

お浪　今の騷ぎに取紛れ、まだ御挨拶もいたしませぬが、毎度夫志賀之助が御贔屓に預りまして、有難うござりまする。只今は又むざ〳〵と、あいつらの騙りにあふ所を、あなた樣のお蔭にて無難に濟みまして、有難うござりまする。（トよろしく禮をいふ。）

半七　何の〳〵其禮には及ばぬわい、いや憎い奴等であるてなあ。

仁太　さうしてあなたは今日は、どちらへおいでゝござりまするな。

半七　おゝ聞いてくりやれ、今日ツた上より重き嚴命にて、鶴ケ岡まで參りし所、御用の趣き終つて後又候かねて噂ある、鎌倉御所の上覽相撲、上にも兎角お待兼ね、そちも存じて居る通り、先きの相手は我が屋敷と日頃不和なる北條家の抱へ角力の仁王仁太夫、左樣なことはあるまいが勝負は時の拍子と申せば、萬々が一仁太夫に、もしも明石が負を取らば、主人をはじめ一家中恥辱を取らねばならぬゆゑ、そちが夫の志賀之助へ心添へをばいたさんと、明日宅まで出張らうと存じ居

つたに當所にて、そちに逢ひしは是れ幸ひ、何卒右の仔細をば夫明石へ傳へてくりやれ。

お浪　そりやもうよろしうござりまする、宅へ戻りて夫へ話し、大事の上にも大事を見定め、きつと勝利を得るやうに、神や佛へ誓ひを立て、きつと勝たせて見せませう。

仁太　もし其儀はお氣遣ひなされますな、高が向うは仁王仁太夫、何のこつちの明石關に及ばうやうにござりませぬ。人は知らず一富士の、仁太がお請合ひ申しまする。

三太　さうとも〳〵、此相撲は比べものにはなりませぬ、實に去年の冬場所に須磨の浦を投げた時なんぞは、繪にもかけないやうでござりました。

仁太　はゝあ、さうして其時はどういふ鹽梅だつた。

三太　どうのかうのと、先づ最初行司の團扇を引くを合圖に双方一緒に立上り、かういふ鹽梅に取組んだ。（ト是れより一人角力になり、）どどんがどが〳〵〳〵、ハツケヨイヤ殘つたヨイシヨ〳〵。（ト言ひながら相撲を取りトヾおのが手に足がらを取られし思入にて投げられ、）先づ、こんな鹽梅でござりました。

仁太　おゝ、出來た〳〵。

半七　いや氣の輕い奴ではある、所謂これが吉瑞にて定めて明石が勝であらう。何かの事に暫時の暇入

り、最早程なく御歸館なれば、身共は是にて別れ申す。
お浪　左樣なれば印南樣。
半七　おゝ、志賀之助へもよろしく言つてくりやれ。（ト唄になり、半七郎上手へはひる。）
お浪　あ、いつに變らずこちの人明石殿をば御贔屓に、御親切なる印南樣。
仁太　それといふも關取に、愛敬があるものだから、お屋敷方の通りもいゝのさ。
お浪　それもやつぱり信心の、神々樣のお蔭ぢやわいなあ。（ト此時うしろにて、）
呼び　御歸館。（ト呼ぶ。）
お浪　御歸館なれば、丁度幸ひ。
仁太　御成跡なら定めて開帳。
三太　拜むといふも、間のいゝ知らせ。
お浪　どれ、お參りをしませうわいなあ。（トお浪先きに三人上手へはひる。流行唄にて此道具廻る。）

（雪の下小池の場）——本舞臺一面風雅なる板塀、上手へ寄せて同じく門柱へ御料理の札、塀の内より梅の立木大分、日覆より同じく釣枝、總て雪の下小池入口の模樣、床几二三脚並べ、爰に以前の伴六甚藏

床几に掛り、側に○△□茶屋女にて立掛り、其中に金剛のとりてき頻りに踊つて居る、此模様角力甚句にて道具留る。

○　モウシ金剛さん、もうよい加減になさんせいなあ。
△　踊りをお踊りなさんすなら、奥へ行つて踊らしやんせ。
□　爰でお踊りなさんすと、表へ人立ちがしますわいなあ。
金剛　いや〳〵奥で踊つては、内輪のものが見るばかりで、踊るにどうも張合がない、こう人立ちのした所で、もう一踊りやらかす〳〵。
伴六　何さま、かやうにずしん〳〵座敷の内で踊つたら、大方根太が拔けるであらう。
甚藏　さうなる時はわれ〳〵が、此家の主人へ氣の毒ゆゑ、爰に居るうち腹一杯、
兩人　踊りためておくがよいわさ。
○　さういふ事なら今のうち、爰で思ひれ、
三女人　踊らしやんせいなあ。
金剛　いやさうお許しが出たからは、今度は一番音曲入り、角力甚句の始まり〳〵。（ト是れより下座にて角力甚句の合方を彈く、）「角力ぢや仁王關、役者ぢや巴二右衛門、つんぼは團八さんに止めさす、あ

りや〳〵ありやせ。」（ト頻りに踊ろ。）

伴六　いや、是れは一段と面白いわい。（トはやり唄になり、上手より傳内出來り）

甚藏
傳內　これは〳〵御兩所には、嘸お待遠にござつたらう。

甚藏　いやもう、待たるゝ身より待つ身の譬、實に待ち草臥れてをりました。

傳內　某も左樣存じて早く參りたく、心は急けど何を申すも、見送りの役目が濟まねば參ることが出來ぬゆゑ、存じながら遲刻いたした。

〇　左樣ならば私共は、御酒の支度をいたしませうわいな。

伴六　さうしてくりやれ〳〵。

傳內　然らば拙者が參らぬゆゑ、まだお始め下されぬか。いや先きへお始め下さればよいに。

甚藏　こりや、銚子を熱くしてくりやれ。

女
三人　はい〳〵、畏りました。

ト門の内へはひる。はやり唄になり、花道より飾摩宗庵更けたる撫附、羽織着流し一本差し、醫者のこしらへにて出來り花道にて、

宗庵　どうでも春は春だけに、どこもかしこも賑やかぢやが、それに引替へこつちはまだ、心がわくわ

くするせゐか、とんと節季のやうでもある、それはさうと今聞けば八幡宮へ參詣するとて、さつき娘が通つたとやら、大方歸りは小池であらう、どれ向うへ行つて待合さうか。

ト右の唄にて宗庵舞臺へ來る、傳內目早く宗庵を見て、

傳內　おゝそれへ見えられたは、宗庵老ではござらぬか。

宗庵　これは〳〵、どなた樣かと存じましたら、神崎樣でござるか、いつも〳〵御健勝で恐悅に存じまする。

傳內　いやお身も達者で先づは重疊。さゝ、これへ來て掛けさつしやれ。

宗庵　へい有難うはござりまするが、ちと急用がござりますゆゑ。

傳內　はて、さうでもあらうが春のことぢや、少々ぐらゐはよいではないか。

伴六　折角あのやうに仰せあるゆゑ、

甚藏　休息いたして行くがよいわさ。

宗庵　左樣なれば何れもさま、御免なされて下さりませ。（ト會釋して床几へ掛ける。）

傳內　さて宗庵老、早速申し入れたいは、豫て懇望いたせし通り、貴公の息女お岸どの、身共の妻に申し受けたい、左すれば貴公は失禮ながら此姿ではおき申さぬ。言はゞ身共が舅ゆゑ主人へ推擧い

たした上、屋敷へ引取り一廉の、高祿をも取らるゝやう、取立て申すが如何でござるな。

伴六　いや、かやう申すと何かはや、仲人口を利くやうなれど、神崎氏の妻女になれば、貴公の娘は大きな仕合せ。

甚藏　それに續いて貴公まで、一生樂が出來るといふもの、こりやうんと言つて神崎氏の御家内にいたしたがようござらう。（ト此うち宗庵思入あつて、）

宗庵　いえ、其思召しは何程か有難うござりまするが、ちと仔細あつて娘ことは、わきへ緣附けましてござりまする。

傳内　むゝ、すりや先々より申し入れし、拙者を差しおき、あの外へ。

伴六　これ〳〵宗庵老、どんな先きかは存ぜぬが、大抵ならば何も方便、先きを體よく離緣にいたし。

甚藏　こちらの方へ振向けた方が、こりや當世と申すものぢや。

宗庵　左樣にお心添へ下さるは有難うござりまするが、元より老の一人身なれば、一生氣安く送りたく、仕官の望みもござらぬゆゑ、此儀はお斷りを申しまする。

傳内　むゝ、して御息女のお岸どのは、何れへ緣を組まれたな。

宗庵　さあ、其先きは。（ト言ひ兼ねるこなし、）

傳內　一旦心を掛けたる身共、その先きを承はりたい、何れへ緣を組まれたな。（ト是れにて困る思入にて）
宗庵　さあ、假令何れでござりませうとも、親の心に叶ひし所へ遣はしましてござりますれば、それをあなたが其やうに、入らぬ御穿鑿なされずとも、よろしいではござりませぬか。
　　　トずつけりいふ、傳內これにてム丶といき詰る。
伴六　やあ最前から神崎氏が、一應も再應もお尋ねなさるに申しもせず、
甚藏　慮外を申すは憎い宗庵、たつて言はぬと申すなら、
金剛　この金剛が引捉へ、力づくにて言はせて見せる。（ト三人立掛るを傳內留めて）
傳內　あゝこれ、何れもお待ち下され。此宗庵と申すものは斯樣な氣質のものでござれば、手荒いことはいたされぬがよい。
三人　それぢやと申して。
傳內　はて、木折りでいかぬが戀でござるて。（ト是れにて三人控へる。）いやなに宗庵老、只今のことは只今ぎり、最早身共も尋ねまいから、何は兎もあれ爰は端近、奥へ參つて一獻過しやれ。
宗庵　有難うはござりまするが、御酒は一向不調法、殊に先刻申す通り、ちと急用がござりますれば。
傳內　然らば是れなる小池に居るゆゑ、用事が濟みなば戻りに寄りやれ。

宗庵　へい有難うございまする。左樣なら何れもさま、是れにてお別れ申しまする。

ト唄になり、宗庵上手へはひる。傳內跡を見送りて、

傳內　いや、世界にはさま〴〵な氣風な奴もあるものぢや。

伴六　いや、慾を知らぬはたわけの內と。

甚藏　話せぬ親仁ではござらぬか。（ト此うち門のうちより□出て、）

□　もし、お支度ができましてござりまする。

傳內　何さま、誂へものが出來たとあれば、座敷へ參つて酒宴といたさう。

伴六
甚藏　成程それがよろしうござる。

□　さあ、かうお出でなされませ。

ト□先きに皆々門の內へはひる。はやり唄になり、花道より梅之助羽織着流し息子のこしらへにて出る。跡より一、二茶屋の若い者にて出來り、花道にて、

一　もし〳〵若旦那、私共を引張つて、どこまで連れておいでなさるのでござります。

二　どうぞ出來るとも出來ないとも、早く御挨拶を聞かして下さりませ。

梅之　さあ挨拶せうにも爰は途中ゆゑ、向うの小池の座敷へ行つて一口呑んで話さうから、マアあそこ

まで來て下されいなう。

一　いえ〳〵其手は喰ひませぬ、一口呑まして義理詰めに、もう二三日待てといふのは、極つた筋でございます。

二　御酒は呑みたくございませんから、話しを早く附けて下さりませ。

梅之　まあ其やうな事を言はずと、一口呑んでくれたがよい。（ト三人舞臺へ來り、）まあ〳〵爰へ掛けやいなう。（ト是れにて梅之助を眞中に三人床几へ掛ける。）

一　さて若旦那、いつもながらきまつてをりますセリフゆゑ、別に何にも申しませぬが、

二　今日は是非ともに、片を附けて下さいまし。

梅之　そりやもう段々延び〳〵になつたことゆゑ、其やうに二人が言やるは尤もなれど、もう長うとは言ひませぬ、どうぞ一日か二日のところ、待つて貰うて下されいなう。

一　いえ〳〵どうも待たれませぬ、愛敬のない事を申すやうだが、外々の掛と違ひまして、お家へ晴れては上られず、斯うして途中でお目に掛るが、敵に出逢つたやうなものだ。

二　それもあなたの着物を剝いで、抵當に取らうといふではなし、お預かり申した香合を他へ賣りさへすればよいのだ。

二一　そんならきつとお斷り申しました。（ト兩人立つて行かうとするを梅之助捉へて、）

梅之　さあ其品を餘所外の人手に渡すくらゐなら、何もかうして頼みはせぬが、あれは人手に渡されてはならぬ品ゆゑこのやうに、事を分けて頼むのぢやわいなう。

一　さあお頼みなさるから、今日が日まで便々だらりと、待ちましたのだ。

二　それ程大事の品ならば、早く御勘定を下さいましな。

梅之　さあ其金がある位なら、何も苦勞はせぬわいなう。

一　金がなけりやあ仕方がねえ、此香合を賣りませうか。

梅之　えゝめつさうな、どうしてそれを。

二　そんなら金をおくんなさるか。

梅之　それぢやと言うて。

一　それを賣らうか。

梅之　さあ、

二一　さあ、

三人　さあ〳〵〳〵。

一　いつまで言つても同じことだ、そんなら是れを賣りますから、

二　たしかにお斷り申しました。（ト兩人行きに掛るを留めて、）

梅之　あゝこれ、どうぞ待つて下され。

二一　えゝ、しづッこい放しなせえ。

トはやり唄になり、兩人振切つて行かうとするを梅之助留める。爰へ以前のお浪先きに仁太郎三太附けて上手より出來り、此體を見て、

お浪　あゝもし、あなたは鎌倉屋の若旦那ではござりませぬか。（ト梅之助お浪を見て、）

梅之　おゝ、こなたは明石のお内儀どの、二人を留めて下されいなう。

お浪　もしお二人さん、どういふ譯か知らねど此若旦那は、こちの人が不斷お世話になるお家の若旦那ゆゑ、何なりとわたしが譯を附けよう程に、まあ〳〵待つて下さんせいなあ。

仁太　姉御があんなに言ひなさるから、まあ〳〵下に居るがいゝ。

一　いえ〳〵下には居られませぬ、是れには段々譯のあること。

二　うつちやつておいて下さりませ。

お浪　いゝえ、うつちやつてはおかれませぬ。もし若旦那え、こりやまあ一體どうなされたのでござり

ますえ。

梅之　さあ、それはな。（ト言ひ兼ねろこなし。）

お浪　もしお前さん方え、どういふ譯だか聞しておくんなさいな。

一　左樣なら申しますが、私共は仲の町の吉本と申す茶屋の若い者でございますが、此若旦那が三浦屋の八重雲さんといふ花魁の所へ馴染んでお通ひなされまして、段々との御勘定が溜つて都合五十兩、御案內でもございませうが、昔と違つて只今ぢやあ納める方はみんな現金、中へはひつて難澁するのは茶屋ばかりでございますゆゑ、度々掛に上りましても其御勘定が一向下がらず、トドの詰り掛の抵當にとお預けなされた此香合。（ト懷中より香合を出し、）其日限も疾に切れ、手前方にございましてもほんの寶の持腐れゆゑ、さる道具屋に見せましたら是非とも欲しいと申しますから、御勘定を下さらずば、其道具屋に賣り渡しますと、只今お斷りを申したのでございます。

梅之　さあ其香合は、何を隱さうお出入り屋敷の、大江樣から預かつてある大事の品ゆゑ、外へ遣つてはお屋敷へ濟まぬによつて最う二三日、待つてくれろと今爰で、賴んで居る所ぢやわいなう。

お浪　さういふ事ならお前方も、僅か二三日の所なれば、待つて上げたがよいわいなあ。

一　さあ其二三日も腹散々、待つて〳〵待ちくたびれ、幾度足を運んでも果てしがないから起つた事。

二　もう二三日はさておいて、小半時でも待たれませぬ。中へはひつて下さるなら、耳を揃へてたつた今。
兩人　五十兩下さいまし。
お浪　それぢやというて其金は、爰にというてはござんせぬわいなあ。
一　金がなければ出來ない相談。
兩人　どうぞ默つて居て下さいまし。（トこれにてお浪當惑の思入、爰へ以前の宗庵出で窺ひ居て、）
宗庵　あいや、其金わしが用達てませう。（ト前へ出る、皆々見て、）
仁太　こなたは姉御のおとつさん。
お浪　どうして爰へ來さんした。
宗庵　はて、樣子は後で聞きましたが、切羽詰つた金の入用、幸ひ爰に持合せた金が丁度五十兩、これで埒を明けたがよい。
ト胴卷より五十兩包を出し、お浪に渡す。お浪心得ぬ思入にて、
お浪　どうして是れを、お前には。
宗庵　はて仔細は跡で聞かせませう、何はともあれ差當る、なくて叶はぬ五十兩、あの衆達に渡すがよ

い。

お浪 何か様子は知らぬけれど、さういふ事なら借りまする。（ト金を請取り、）もし若い衆さんえ、それぢやあ若旦那の五十兩は、慥にそちらへ返しますから、香合とやらをこちらへお出し。

一 いえもう、金さへ下さいますれば、抵當に取りました香合は、慥にそちらへお返し申します。

ト金と引換にする。

お浪 もし若旦那え、何も御念でござりますから、中をちよつとお改めなされませ。

ト此うち梅之助始終氣の毒なるこなしあつて、

梅之 そんならこなたは志賀之助の内儀の親御でござりまするか、思ひがけなくお出で下され、難儀を救うて下されて、何とお禮を申さうやら有難うござりまする、そんなら中を改めまする。（ト件の香合を改め見て、）如何にも預けた香合は、是れに相違はござらぬわいなう。

仁太 さあ金を取つたらお前達は、何も言分はあるめえから、ぐづ〳〵せずと早く行きねえ。

一 いえもうお金さへ請取りますれば、何も言分はござりませぬ。

二 もし若旦那え、大きに失禮を申しました、どうぞ是れにお懲りなさらず、ちと又お遊びにいらつしやいまし、えへゝゝゝゝ。

一　左様ならどなた様も、大きにおやかましうござりました。（ト兩人下手へはひる。）

梅之　いやもう、何とお禮を言はうやら、中々口では言ひ盡くされぬ。これお内儀、この恩は忘れませぬわいなう。（ト頻りに禮を言ふ。）

お浪　あゝもし若旦那、其やうにおつしやりますと、却つて痛み入りますわいなあ。

ト此時門のうちよりお仲出て、

お仲　おや鎌倉屋の若旦那、お久し振りでござりますわいなあ。

梅之　おゝ、誰かと思へばお仲どん、ちと取込みがあつたゆゑ、つい〳〵こちらも無沙汰をしました、今日は年始でないけれど、此衆達に一口あげたい、何ぞ見繕つて下されいなう。

お仲　へい〳〵畏りました、五人さまでござりまするな。

お浪　あゝもし、わたし共は今支度をして來たばかりゆゑ、必ず構うて下さんすなえ。

梅之　さうでもあらうが久し振りゆゑ、一口呑んでいてたもいなう。

お浪　左様なれば斯ういたしませう、私はちと内々にて爰で親父に話しもあれば、是れに居りまする二人をば、どうぞお頼み申しますわいなあ。

仁太　いえ、それではどうもお氣の毒だ、私共もよしませう。

梅之　はて、さう言はずと何も附合ひ、わし一人では淋しいゆゑ、一緒に行つて下されいなう。

お浪　もし仁太さん、折角のお詞ゆゑ、お前御馳走にならしやんせいなあ。

三太　左樣なら御遠慮なしに、わたしも御馳走になりませう。

梅之　どうぞさうしてたもいなう。もしそこなおとつさんえ、お話しが濟みましたら、どうぞ一口あがりに來て下さい。

宗庵　いえ愚老も只今支度をしたれば、其御心配には及びませぬ、決してお構ひ下さるな。

お浪　左樣ならその二人を、どうぞお賴み申しまする。

梅之　そんなら待つて居ますぞや。

仁太
三太　どりや、御馳走になつて來ようか。

お仲　さあおいでなさりませ。

ト唄になり、お仲先きに皆々門の內へはひる。跡お浪宗庵殘り、四邊へ思入あつて、

お浪　もしとゝさん、お前どうしてあのお金を、爰に持つて居やしやんしたのぢやえ。

ト是れにて宗庵じゆつなきこなしにて、

宗庵　さあ、何を隱さうあの金は、そちが妹のお岸をば、廓へ賣りし身の代ぢやわやい。

お浪　え丶、（トびつくりなし側へ詰寄り、）何と言はしやんすえ。（ト誂への合方になり、）

宗庵　改めいふには及ばねど、明くれば一昨年霜月の忘れもせぬ三日の夜、常々お岸が可愛がる家の小猫がおのれより大きな鼠と喰合うて、組づ解れつ爭ひしが果ては猫めが危くなり、叶はぬ様子を見るに附け、窮鼠返つて猫を食むと古語にもいへば助けんと、有合ふ火箸で鼠を打ち危い猫を助けし所、打たれて逃げる鼠めが其とき我が手に喰附きしが、惣身に毒が廻りしか、それが元にて二年越し藥のきかぬ長煩ひ、かねて話しに聞き及ぶ鼠が猫に喰勝てば、その黨の頭となり其身の譽れになるとやら、其妨げをされしゆゑ恨みの毒氣に此わしの、體を惱まし命まで旣に危き其時に、手飼の猫を枕邊へ呼んで病氣の其元は、いつぞやそちを助けし時逃げる鼠に喰附かれ、それより惱む此病と愚癡を竝べし其日より、猫めが頻りと疵口を日毎に舐めてくれるに隨ひ、不思議に癒ゆる我が難病、それにて命は助かりしが長の病氣の其うちに、療治は出來ず其日に迫り、そちが夫の明石どのより借りたる金も五六十、まだ其外に病氣中こゝやかしこの借財の、其たゝまりが八九兩、利に利が積んで惡催促、途方に暮れるを娘が見兼ね、廓とやらへ此わしを賣つてくれろと賴むゆゑ、始めの程は叱りつけ、假令如何なる事あつても勤めはさせぬと言ひ張りし、心の弓も弦切れて矢の催促を凌ぎ兼ね、不便ながらも三浦屋へ百兩に娘を賣り、こゝやかしこの借

財を返せし殘りの五十兩、そなたに逢うて返さうと、待合したる小蔭にて樣子を聞けば、明石どのが不斷お世話になるお家の、其若旦那が手詰の切羽、爰ぞと思ひ用達てしが、これにて娘の心も屆き、わしも嬉しう思ひますわいなう。

お浪　そりやもう手詰の切羽ゆゑ、用に立つたは嬉しいが、なぜさういふ事ならば、姉のわたしに斯う〳〵と、相談かけて下さんせぬ、わたしやお前を恨みますわいなあ。

宗庵　さあ其恨みは尤もなれど、今もそなたにいふ通り借りたる金も返せぬゆゑ、夫婦の中でも明石どのへ嘸や肩身が狹からうと、わしもお岸も言ひくらし、遂には無沙汰になつたゆゑ、たゞさへ閾の高い家、なんぼ親子のそなたでも、よしない耳が聞かさりよぞいやい。

お浪　そりやお前、いらぬ義理立て、假令不義理があればとて五本の指でござんすもの、何の惡う思ひませう、さうとは知らずこちの人も久しう來ぬゆゑ二人の身に、變つたことでもありはせぬかと明暮案じて居さんすに、相談かけて下さんせぬは、そりや聞えませぬ、聞えませぬわいなあ。

宗庵　そりやもう相談したなれば親孝心の明石どの、貢いでくれるは知れてあれど、それでは猶々濟まぬゆゑ、お岸と二人心を定め、言はぬはわしが誤りなれど、この譯ゆゑにこれ娘、惡う思つてくれるなよ。

お浪　そりやもうお前の言はしやんすも、無理とは更々思はねど、妹が不便でならぬわいなあ。

トよろしく泣く、此以前より梅之助うしろへ出て始終を聞き居て、

梅之　様子は後で聞きましたが、わしの難儀を救うてくれし金は娘を賣つたる金と、聞いては猶更その儘に捨ておかれぬ金ゆゑに、遲くも二日か三日のうちには、わしが都合をしませう程に、どうぞそれまで其金の證文替りに此香合、そちらへおいて下されいなう。(ト件の香合を宗庵の前へ出す。)

宗庵　いや、其の御斟酌には及びませぬ、娘を賣つたあの金もどうで明石へ戻す金、常々御恩を受けまする志賀之助めがお前樣へ、御恩返しの爲なれば、其御心配には及びませぬ、どうぞ是れはあなたの方へ、お置きなされて下さりませ。

梅之　いや／＼それでは心が濟まぬ、どうぞ是れをば預かつてわしに安堵をさせて下され、左もない時は氣になつて、わしは夜の目も寐られぬわいなう。(ト是れを聞きお浪思入あつて、)

お浪　もしとゝさん、若旦那樣があのやうに心が濟まぬとおつしやるゆゑ、お心ゆかしに其品は、お前預かつておかしやんせいなあ。

宗庵　成程それもさうぢやなあ、お心ゆかしとあるなれば、如何にもわしが預かりませう。

梅之　そんならさうして下さるか、それでわしも落着きましたわいなう。

トこれにて宗庵件の香合を懷中する、此以前より後へ次郎吉頰冠りをなし、これを窺ひゐてよろしく小隱れする。時の鐘鳴る。

宗庵　とかうするうち、ありやもう七ツ、どれ日の長けぬうち歸りませう。(ト立上る。)

梅之　あゝこれ、何はなくとも支度をしたれば、一口呑んで行かしやれいなう。

宗庵　いえ有難うはござりまするが、田圃を隔てゝをりますれば、暮れては道が物騷ゆゑ、少しも早く歸りませう。

お浪　ほんにとゝさん此頃は、大分世間が物騷ゆゑ、日の暮れぬうちに行かしやんせいなあ。

梅之　さういふことなら、日長けぬうちに。

宗庵　左樣なれば若旦那。

お浪　そんならとゝさん。

梅之　氣を附けて行かつしやれ。(ト唄になり、宗庵足早に花道へはひる、門の内より三太出て、)

三太　もしお上さん、お肴が出來ましたから、早くお座敷へおいでなされませ。

お浪　いえ〳〵わたしや欲しうないゆゑ、直にこれから歸らうわいなあ。

梅之　さうでもあらうが誂へたれば、一口呑んで行つてたもひなう。

三太　もしお上さん、折角あんなにおつしやいますから、まあ座敷へおいでなさいな。
お浪　それもさうぢやなあ、御遠慮申すも却つて失禮、左樣ならお詞に任せ、御馳走さまになりませうか。
梅之　どうぞさうして下されいなう。
三太　さあお出でなされませ。
ト唄になり、三人門の內へはひる。跡時の鐘にて上手より以前の次郎吉忠次出來り、四邊を窺ひ向うへ思入あつて、
次郎　今親仁めが預かつて持つて行つたは大江家に、代々傳はる寶の香合、こつちへ卷揚げ持つて居たら、たんまり金になりさうだ。
忠次　田圃を越えると言つたれば、何でも歸りは極樂寺の、裏手を通るに違ひはねえ。
次郎　今から行けば夜に入らにやあ、どうせ越せねえ田圃道、往來のねえを幸ひに、先きへ廻つて歸りを待ちうけ、
忠次　然し中身は鈍刀でも、耳ッくじりを差して居りやあ、怪我でもしちやあ詰らねえ。
次郎　それもこつちが手筈を極め、二人がゝりでやツつけりやあ、あんな親仁は何でもねえ。

忠次　そんなら次郎吉。

次郎　必ずぬかるな。

忠次　おゝ合點だ。

ト時の鐘にて、兩人逸散に花道へはひる、跡はやり唄ばた〳〵になり、門の内より金剛のとりてき梅之助を引摺つて出る、跡より傳内伴六甚藏出る、お浪仁太郎三太是れを留めながら出て、

お浪　まあ〳〵待つて下さんせ、何でこんなに若旦那を、お前手籠めにしなさんすのぢや。

金剛　おゝ何でするとは知れたこと、隣り座敷で聞いて居りやあ、おらが師匠の仁王關は明石に逢つちやあ狗兒を屋根へあげたも同樣で、意氣地がねえと吐かした二才、上覽相撲も取らねえ先きに師匠にけちを附ける奴等、弟子の身として小胸が惡く、意氣地があるかねえかをば、今旦那方の見る前で此金剛が腕前を、見せるのだからさう思へ。（ト立ち掛るを留めて、）

お浪　成程さう聞いて見ればこちらが誤り、そりやもう師匠を惡く言はれ、弟子の身として腹の立つはこりや尤もでござんすが、誰れでも蔭では鎌倉の賴朝樣さへ惡く言へば、そこを思うて金剛さん、どうぞ堪忍しなさんせいなあ。

傳内　いゝや料簡罷りならぬ、外のものなら兎も角も、現在相手の志賀之助の、女房が一緒に居るから

は。

伴六　大方明石が言附けて、斯かる遊里へ我々が參つて居るを承知にて、惡く申しに參つた奴等。

甚藏　達て詫びると申すなら、志賀之助めが是れへ參り、明石がわるくばあやまらうと申したならば知らぬ事。

傳內　左もないうちは、

三人　料簡ならぬわ。（ト是れにて仁太郎前へ出て、）

仁太　もしお侍樣、只今姉御が段々とお詫をするも聞入れず、料簡ならぬとおつしやれば連れのわつちも達師の端、夢といふ名の親分に眞似て一番一富士と、夢中で附けた仁太郎も、少しは二鷹三茄子、假令へたでも斯うなつたら、びくともするのぢやござりませぬ。料簡ならざあお侍、切ると も突くとも勝手にしやれ。（トきつと見得。）

お浪　わたしも斯うなる上からは、痩せても枯れても明石の女房、未練な心はござりませぬ。これ奴、そなたは爰から若旦那を、お連れ申して行つたがよい。

三太　おつと合點、若旦那、わたしと一緒にお出でなせえ。

傳內　えゝ面倒な、それ、何れも。

伴六　心得申した。
甚藏
ト是れにて敵役四人打つてかゝる、仁太郎お浪よろしくあしらふ。此間に三太梅之助の手を引き花道へ逃げてはひろ、お浪は傳内を留める。仁太郎は伴六を留める。甚藏金剛向うへ追ひかけてはひろ。直ぐに甚藏揚幕より出て花道へ見事にかへる。これを切つ掛けに櫓太鼓になり、花道より明石志賀之助、角力好みのこしらへにて、金剛を捻ぢあげ、梅之助を後へ圍ひながら出る、跡より三太扇にて明石をあふぎ出來り、花道へ留る。

お浪　危いところへこちの人、
仁太　よく出掛けて來てくんなすつた。
傳内　や、わりや明石志賀之助、武士たるものを品玉か、
伴六　蒟蒻玉を見るやうに、
甚藏　何で手玉に、
三人　いたしたのだ。
明石　おゝ假令武士でも侍でも、無法無體をさつしやれば、たゞはおかぬが天下の大法、鎌倉方の大小名御通行をばなされても、下にも居ずに行逢ふが、爰がお江戸に紫の許しをうけた志賀之助、松

の山縁にこなた衆が意地くね悪く出なされば、こつちも曲つた横縄で張殺すから覺悟しろ。

ト花道にてきつと見得、三太後から明石を煽ぎながら、

三太　イヨ〳〵、こちの親方〳〵。

金剛　いくら覺悟をして居ても、もう我慢が出來ねえから、どうぞ此手を放して下せえ。

明石　えゝ意氣地のねえ野郎だなあ。（ト金剛を張飛ばす、是れにて金剛天窓を抱へし儘下手へ逃げてはひる。）さあ若旦那、この明石が參つたからは、何も怖いことはござりませぬ、氣を落着けてござりませ。

梅之　何分そなたを頼むわいなう。（ト右鳴物にて明石に梅之助三太附いて舞臺へ來る、お浪傳内に向ひ）

お浪　サアあなた方のお望み通り、明石が是れへ參つたからは、

仁太　何もそつちに言分はあるめえ、さあ何とでも言つて見ろ。

傳内　やあ重ね〳〵憎き志賀之助、生けてはおかれぬ。

三人　それへ直れ。

明石　何か仔細は知らねえが、言分あるならわしが相手、一人や二人は面倒だ三人一緒にかゝんなせえ。

ト大手を廣げきつと見得、

傳内　それ、片附けておしまひなされ。

伴六
甚藏 心得申した。

ト是れにて伴六甚藏一度に拔きつれ明石へ切つて掛る、明石身を繰し兩人の腕首を抑へる、是れにて兩人體の痺れる思入、爰へ傳内切つて掛るを明石よろしくあしらひ、トゞ三人の刀を拳にて打落す、三人それをと取りにかゝるを右左へ投げのけきつと見得、これにて櫓太鼓の入りし誂への鳴物になり、お浪手傳ひて明石肌脱ぎになる。傳内伴六甚藏明石へ組附く、いつもの立廻りよろしくあつて、トゞ叶はず三人刀を拾ひ花道へ逃げてはひる、明石跡を追つて行きかけるをお浪留めて、

お浪 あもし、こちの人、もうよい加減にしなさんせいな。
仁太 いや、ごてえさうな事を吐かしやあがつて、口程にもねえ奴等だなあ。
梅之 ほんにもう〱是れで、わしもさつぱり心が晴れて嬉しいわいなう。
明石 若旦那、どこもお怪我はなされませぬか。
梅之 いや〱何うもせぬわいなう。
明石 それはよろしうござりました、あれは慥に仁王が出入場、北條殿の家來の奴等。
お浪 さあそれゆゑに此の小池で、仁太夫さんの噂をば、隣り座敷でして居たを、ゝゝ、とつこに取つての今の間違ひ。

明石　それといふのも近々に、鎌倉御所にて仁王とおれの顏が合ふゆゑその先きに、こつちへけちを附けようと、あいつ等四人で企んだ仕事。

仁太　さうしてこなたは、どうして爰へ。

明石　今いふ相撲のことに附き、摩利支天から八幡宮へ、心願あつて出掛けて來たのぢや。

お浪　そんなら丁度ようござんす、みんなで一緒に歸らうわいなあ。

明石　いゝやおれは用があつて、大江の屋敷へ行かねばならぬ、それぢやによつてわれ達は、若旦那のお供をして、一足先きへ歸つてくれ。（ト梅之助氣味の惡きこなしにて、）

梅之　行けとあるなら行くけれど、又もやさつきの。

お浪
仁太　え。

梅之　いやさ、先きへ一足行かうわいなう。

明石　然しあいつ等三人が、まだまごついて居ようも知れぬ、逢うては何かと面倒ゆゑ、道を違へて行くがいゝ。

仁太　そんなら關取。

お浪　こちの人。

明石　おゝ、若旦那をば、頼んだぞや。

ト唄になり、梅之助先きにお浪仁太郎三太下手へはひる、明石跡を見送りて、

今北條の侍を手籠めになしてやつたれば、話しを聞いたら仁太夫が遺恨を含むに違ひはねえが、それに附けてもお上より、御所望ありし今度の相撲、關は仁王とこの明石、そのお抱へは日頃から不和だと噂の大江と北條、互ひに遺恨のある中ゆゑ、爰が千番に一番の勝負を定める大事の相撲、どう魂膽をしてなりと、頼朝公の御前にて、仁王を投げてやらにやあならねえ。

ト向うへ思入、此時以前の金剛窺ひ出て、

金剛　所を斯うして。(ト組附くを明石せゝら笑ひ)

明石　えゝ、くすぐつてえ。(ト體を捻る、是れにて金剛見事にかへる、是れを道具替りの知せ)ふざけやがるな。(ト此模樣よろしく、流行唄にて此道具廻る。)

(極樂寺繩手の場)――本舞臺一面の平舞臺、上手へ寄せて小さき屋根のある石地藏、舞臺前下手へ寄せて九尺程の流れの土手板、後一面六郷の屋敷を見たる裏田圃夜の遠見、所々に松の立木日覆より同じく釣枝、總て極樂寺繩手の模樣、禪の勤めにて道具留る。とやはり右の鳴物にて、花道より以前の宗庵出

來り、花道にて、

宗庵　明るいうちに歸らうと思ひの外に遲くなつたが、然し折よく娘に逢ひ、返しに行きし其金で、明石どのがお世話になる、其旦那場の息子殿の難儀を救うてやつたれば、明石どのへ返せしも同然、わしもこれにて身輕になつた。（ト思入あつて、）いや〳〵さうも言はれぬわい、其抵當ぢやとて預かりし、此香合は大枚の、金にもかへる寶とやら、此やうなものを持て居ながら、田圃を越すは物騷なれど、日が暮れたとはいふものゝまだ宵の口のことなれば、何も仔細はあるまいわい。どりや急いで行きませうか。（ト舞臺へ來り流れを見て、）南無三しまうた、はゝあ二三日あとまで降り續けで、又爰へ水が出をつたと見える、所詮草履をはいては越されず、跡へ歸れば餘程の廻り、こりや跣足にならねばならぬわえ。

ト當惑の思入、下手より以前の次郎吉、頬冠り、下駄がけにて、手に古下駄を持ち出來り、

次郎　もし旦那さま、お下駄をお貸し申しませうか。（ト是れにて宗庵びつくりせし思入。）

宗庵　なに、下駄を貸してくれるとは。

次郎　私共は田圃に居る、小屋の者でござりますが、雨でも降つて此の近所へ水が出ました其時には、往來をなさる旦那方へ、お勸め申して下駄を貸し、お手の内をいたゞく者でござります。

宗庵　はゝ、扨はこなたは非人どのか、然らば丁度幸ひゆゑ、それなる下駄を借りるであらう。

次郎　へい、それは有難うござりまする。(ト宗庵の前へ下駄を直す、是れにて宗庵下駄をはき替へる、次郎吉雪踏を持ち先きへ立ち、兩人流れを渡り上手へ來り、)さあ、お召し替へなされませ。

ト雪踏を直す。

宗庵　これは、大きに大儀であつた。(ト雪踏になり、紙入を出し中より錢入を出す、次郎吉紙入をのぞき込む、宗庵紙入を是れにて隱すことあつて錢を出し、)それ、手の内を遣はすぞ。

次郎　これは有難うござりまする。(ト錢を手に取つて、)もし、こりや錢でござりますね。

宗庵　おゝさ、下駄を借りたる其禮に、手の内を遣はしたのぢや。

次郎　いゝえ、其手の内と申しますのは、錢の事ぢやあござりませぬ。

宗庵　なに、錢の事でないと申すは。

次郎　へい、外に望みがござります。

宗庵　むゝ、さうしてそちが望みとは。

次郎　望みといふは外でもねえ、お前さんが懐に持つて居なさる香合を、報謝のかはりに貰ひてえ。

トこれにて宗庵扨はといふ思入にて、

宗庵　そんなら非人といふのは僞り、扨はおのれは物取りぢやな。

次郎　知れたことだ。(ト頬冠りを取る、合方になり、)さつき小池の門口で三人寄つて何やら話し、どうか仕事になりさうと、そつと後で聞いて見りやあ金の替りに預かるの預からねえのといふ香合、引ッさらはうとは思つたが側にゐるのが明石の女房、附けが惡るさに品をかへ、われが歸りを見屆けて、先きへ廻つてさつきから、手ぐすね引いて待つて居たのだ。

宗庵　成程そつちが言ふ通り金の抵當にと香合を、爰に預かり持つては居るが、抵當とはいへど高が香合、そつちにあつても益なき品、それより少しの手の内を貰つて早く歸るがいゝ。

次郎　やかましいやい、人は知らぬと思はうが其香合は大江家で、代々傳はる寶といふのは、疾から話しに聞いて居らあ、無駄な口をばきかねえで、さつさと爰へおいて行け。

宗庵　さう知つて居れば是非がない、昔と違ひ老の身に體よくいふも殺生を、するがいやさに欺しても聞入れなければ此方とて、腰に帶せし刀の手前、たゞはそつちへ渡さぬぞ。

次郎　おゝ面白え、さう吐かしやあおれの腕にも骨があらあ、高の知れたる耳ッくじり、人を切るなら斯うして切れ。

トいきなり宗庵の刀へ手をかける、宗庵その手を拂ひ刀を拔きちよつと立廻り、次郎吉切り立てられ上

手へ行き、地藏の傍に立てゝある幟を取つて立廻り、兩人きつと見得、これより狸囃子かすめて廓の騷ぎ聞ゆる、兩人よろしく立廻り、トヾ次郎吉幟竿を打落され危くなる、爰へ地藏の蔭より忠次窺ひ出て宗庵を後より抱く、此間に次郎吉宗庵の刀をもぎ取り、懷より香合を出し持つて行かうとする、宗庵これをやろまいと三人香合を柳に立廻り、忠次香合を持つて逃げにかゝるを宗庵引附ける、次郎吉件の刀を拾ひ宗庵の肩口を切下げる、宗庵アッと倒れる、是れにて忠次起きあがり宗庵を押へる、次郎吉上手にて刀を振上げきつと見得、宗庵苦しき思入にて、

宗庵　さてはわいらは相摺あつて、疾より待伏せいたせしよな、不覺を取りしか殘念な。
　　ト口惜しきこなし、凄き合方。

次郎　どうだとつさん及ぶめえ、習はうよりは馴れろとやら、見やう見眞似で此頃ぢやあ、膏が乘つた盛り場も、昨日は土手の花水橋、明日は積る雪の下と飛んだ挊ぎも晝日中、姿を隱す所から異名を取つた幻次郎吉、仕事に掛けたらあくまでも素早い所が身上だ。

忠次　その幻の相摺になつて爰まで小雀忠次、名が何よりの看板に着たきり雀の鋏が元手、お宿はどこと定めぬゆゑ、喰ひこんでも氣は輕い葛籠の紐の十文字、一百背負やあ出られる身も今日からしちやあ刑狀持、うぬのお蔭で出世すらア。（ト兩人よろしく思入にて言ふ。）

宗庵　假令不覺を取るとても、人より預かる大事の香合、やはかわいらに渡さうか。
次郎　まだぐづ〳〵と吐かしやあがるか、いや往生際の惡い奴だ。
忠次　かう次郎やい、人でも來ちやあ面倒だ、早く片附けてしまはねえか。
次郎　違えねえ、それもさうだ。どれ引導を渡してやらうか。（ト立掛るを、）
宗庵　何をおのれ。

ト立上り次郎吉へ掛るを、次郎吉宗庵の脇腹へ刀を突込む、宗庵立身にて苦しみ、よろしく落入る。次郎吉乘ッかゝつて止めを刺す、此内忠次は四邊を窺ひ居て、

忠次　そんなら次郎公、早く行かう。
次郎　さうよ、ごねてしまやあもう構はねえ、さうして香合はどうした。
忠次　おれが爰に持つて居らあ。
次郎　さうか、それぢやあそろ〳〵出掛けようか。
忠次　こう、こう株でまた落着いて居るぜ。さあ〳〵早く來ねえ〳〵。（ト兩人花道へ來る、次郎吉思入あつて、）
次郎　こう忠次、おらあ飛んだ事をしたえ。
忠次　どうした。

次郎　あすこへ煙草入を落して來たから、後日の證據にでもなつちやあならねえ、ちよと行つて捜して來るから、手前一足先きへ行つてくれろ。

忠次　さうか、それぢやあ一足先きへ行つて、いつもの夜明しへ寄つて居るぜ。

次郎　よしきた、それぢやあ直ぐ行くぜ。（ト忠次花道へはひろ。次郎吉舞臺へ歸り宗庵の懷より紙入を引出し金入の目方を引き、につたりと思入あつて、）さつき報謝を出す時から、かんづいて居たこの紙入、まだかけ出しのあの忠次め、どぎまぎするを幸ひと、體よく先きへ遣つてしまひ、取つて返したゞけあつて、思つたよりやあ餘計な金、こいつあ受目と出て來たわえ。

ト頻りと金をかぞへ居る、米山の唄になり、花道より以前の明石出來り、直ぐに舞臺へ來る、此足音に次郎吉びつくりして、花道の方へ駆出すとたんに明石へ突當る。

明石　えゝ何をしやあがる。（ト是れにて次郎吉花道へぺつたり下に居る、明石心得ぬ思入にて、舞臺上手へ來り、宗庵の死骸に躓き透し見て、）こりやこれ人が。（ト此時花道の次郎吉起き上つて、えいと舞臺へ礫を打つ、明石身を躱し、）うぬ、待ちやあがれ。

ト褄を取るを木の頭、次郎吉逸散に花道へはひろ、明石向うを見込む、双盤のせめにてよろしく、

ひやうし　幕

二幕目

江州四明ヶ嶽の場
隱里淨瑠璃の場
鼠ヶ祠だんまりの場

【役名――飛脚音平、虛無僧草月實は舊鼠の怪、木曾義仲、飛脚吹平、盜賊西國太郎實は能登守敎經、回國の修行者北山、粟津の七郎俊兼、根井の小彌太、鼠取岩見銀造、捕手三毛平、獵人峰藏、同斧助、飛脚渦平、盜賊東國次郎實は樋口の次郎兼光。義仲の妾巴御前、廻國の修行者小草、俊兼の妹松風。】

（四明ヶ嶽麓の場）――本舞臺一面の山幕、杉の立木同じく釣枝、爰に岩見銀造手拭を冠り脚絆手甲草鞋鼠取りの藥を入れし箱を首へ掛け鼠とりの幟を持ち、峰藏斧助手網達附ほくそ頭巾、草鞋鐵砲を持ち獵人のこしらへにて、立掛り居る、山おろしにて幕明く。

銀造　もし獵人衆、爰は何といふ所でござりますな。

峰藏　爰は叡山の半腹で、これから上が四明ヶ嶽、鼠の祠といふ所だ。

銀造　それぢやあさつき噂に聞いた、鼠の祠はこの上かな。

斧助　貴樣はどうか東のやうだか、鎌倉からござつたか。

銀造　如何にもわしは鎌倉だが、先だつてから世界中へ鼠が殖えて荒れるゆゑ、鼠取りの藥を賣つて、

峰藏　はる〴〵京へ登つて來たのは。
峰藏　その鼠の出る元といふは、此四明ヶ嶽の鼠の祠だ、頼豪阿闍梨といふ僧が鼠になつて荒れたのを、此山へ祀つたが、今に恨みが晴れぬかして、時々怪しい姿に變じ、人を脅してならぬわい。
斧助　それに又先達て、粟津ヶ原で討死した木曾義仲の主從が、其頼豪と合體なし魔道へ入つたといふ噂。
銀造　それで樣子が分りました、義仲の魂魄が合體したので鎌倉へ、鼠が出てあれるのは恨みを晴らしに出るものと見える、何にしろ此上が鼠の出る元とあれば、藥が賣れるに違ひない、こりやいゝ所へ來ましたわえ。
峰藏　いゝ所ならいゝけれど、是れかち先きは鼠の祠、山挊ぎのこちとらせへめつたに通らぬ惡い所、品もあらうに鼠取りの藥を賣りに行つた日には、鼠取りより命取り危ねえことだ止さつしやい。
斧助　おれ達も御領主から鼠狩を言附り、鐵砲を持つて歩くものゝ、猪より大きい鼠があれば、なかなか打取ることは出來ぬ、そこでなるたけ出逢はぬやうに、麓ばかり歩いて居るわ。
銀造　へゝえ、猪より大きい鼠が出ますか、それを生捕つて兩國へ見世物に出したらば、大金にならうけれど、獵人衆さへ逃げるとあれば、鼠取りの手には合はぬ、こりや山越えを止めにして大津か

ら行きませう。

峰藏　それがいゝ〳〵、命あつての物種だ、廻り道をして行かつしやい。

斧助　これから大津へ行くならば、左りの方が近道だ。

銀造　宿まで一里もござりませうか。

峰藏　なに一里まではねえ半道だが、やかましい關所があるから、手形がなくつちやあ通れねえ。

斧助　手形はこなた持つて居るか。

銀造　その手形は持つてゐぬが、三井寺へ參詣のものと、言つたら通してくれませうか。

峰藏　どうして〳〵、小町なら知らねえこと、こなたぢやあ通すめえ。

銀藏　そりやあ困つたものだなあ。

峰藏　おゝいゝ事がある、おらが仲間の手形があつた、これを貴樣に進ぜよう。

銀造　それは有難うござります。（ト峰藏懷から觸書を出してやる、銀造取つて開き見て、）何だ、「淨瑠璃名題木曾どのと背中合せの寒さかな、有姿夢湖水」こりやあ可笑な手形だな。

峰藏　どれ〳〵。（ト峰藏とつて、）「淨瑠璃太夫、富本豐前太夫――。」

斧助　「相勤めまする役人――。」（ト太夫連名役人替名を代り〳〵に讀み、）

銀造　こりやあ手形だと思つたら、淨瑠璃の觸書だが、關を越すに困つたものだ。
峰藏　案じなさんな、手形は入らねえ。
銀造　なに、手形はいらねえとは。
斧助　この先きに關所はねえわな。
峰藏　關所があると言つたのは、此觸書を讀まさうばかりよ。
銀造　えゝ忌えましい、一ぺい喰つたか。
峰藏　さあ、是れせえ讀みやあ用はねえ。
斧助　ちつとも早く行きませう。
　ト山おろしにて峰藏斧助うなづき合ひ、銀造の持つて居た鼠取り藥の箱を持ち、上手へはひる。銀造思入あつて、
銀造　今獵人の話しに聞きやあ、頼豪阿闍梨に義仲の魂魄が合體なし、祟りをなすとあるからは、こいつあたゞの鼠ぢやねえ、いたづらものゝ手際には所詮生捕ることは出來ねえ。（ト四邊を見て、）や、藥を入れた箱が見えぬが、今の奴等が惡戯に持つて行つたに違ひない。えゝ忌々しい事をしやあがつた。（ト幟を持ち、）惡戯ものは居ないかな〳〵。

ト山おろしにて銀造上手へはひる、よき程に知らせに附き、山幕を切つて落す。

（隱里淨瑠璃の場）――本舞臺一面の岩組居所替り仕掛の張物、欄間に替る杉の釣枝、上の方杉林、下の方淨瑠璃臺、岩の張物打返しよろしく道具納まる。と山おろし打上げ、大薩摩になる。

〽それ松柏とこしなへに枝を重ねて生茂り、晝さへ闇き四明ヶ嶽、月なき夜半に木の間もる星かと思ふ白梅も、春を忘れず返り咲き、主はなけれど花の香は、高嶺の雪解どう〳〵と、落來る水のこだまして、哀れにもまた物凄し。

ト謠へ六部三重せり上げの鳴物になり、上手に修行者北山、鼠の頭巾、同じ着附手甲脚絆草鞋、六部の笈を背負ひ錫杖を突き立身、下手に同じく小草、結び下げ同じく鼠の着附手甲脚絆草鞋、笠を持ち兩人とも六部のこしらへにてせり上げ、鳴物打上げ、こだまの合方になり、

北山　日本六十餘州をば、廻國修行の境涯に、杖を曳きたる旅の空、

小草　歸る雁金來る燕、幾春秋をすぐせども、住む所さへ定めなき、

北山　一所不住に一歳は吉野の花を狩りくらし、

小草　また一歳は更科の月をながめて越の雪、

北山　積る思ひでやう〳〵と、今年都へ歸りしも、
小草　四とせ五とせ久々に、勝手忘れし此山路、
北山　去年の栞の梅さへも、
小草　谷間はおそく莟勝ち、
北山　花咲く春の御目見得に、
小草　日影にまさるお惠を、
北山　偏にお願ひ、
兩人　申しまする。（ト兩人辭儀をなし思入あつて、）
北山　此お願ひをしてしまへば、これで心もさつぱりと、
小草　曇りし空の晴れ行きて、東に立ちし月代は、
北山　早や子の刻に程近し、やがてぞ告ぐる三井寺の、
小草　鐘の音霞む春の夜に、
北山　夢も結ばぬ兄妹が、
小草　夜毎に通ふ、

北山 四明ヶ嶽。（ト此時以前の峰藏斧助窺ひ寄つて、）
峰藏 最前から窺ふところ、
斧助 どうやら怪しい、
兩人 二人の修行者。
北山 いや、我々二人は同胞にて、菩提の爲の廻國修行、
小草 怪しいものではござりませぬ。
峰藏 いや怪しくないとはいはれまい、人も恐るゝ鼠の祠へ、
斧助 夜更けて參るはたゞものならず。
北山 さういふおのれ等兩人は、
小草 正しく領主の廻し者。
峰藏 頼豪阿闍梨義仲の、魂魄此土に止まつて、
斧助 恨みを晴らす溝鼠を、狩りとる役目の山獵師。
北山 鼠を狩りとる獵師と聞いては、
小草 此儘生けては、

兩人　歸さぬぞ。
峰藏斧助　何を小癪な。
ト峰藏は北山、斧助は小草へ掛り立廻り、山おろしこだまの合方にて、よろしくあつて兩人を引附ける、此時本釣鐘を打込み、兩人思入あつて、
小草　今鳴る鐘は、
北山　子の上刻、
小草　もはや我が君、
北山　御入りの刻限。
峰藏斧助　何を。（トはれ返し立廻つて兩人を當てる、此時花道の揚幕にて、）
呼び　我が君のお入り。（ト呼ぶ、）
北山小草　はあゝ。
ト兩人を投げのけ平伏なす、大ドロ〳〵になり一面の岩組銀襖に替り、釣枝打返し銀張りの大欄間に替
り、これより御簾を振出し道具納まると、一時に、北山棒茶筌袴一本差しのこしらへになり、小草花櫛
をさし振袖腰元装になる、これにて下手、岩の張物打返し、爰に富本連中居並び、前彈きなしに直ぐ淨

瑠璃になる。

〽去年今年降り積む雪の解け初めて、綻ぶ梅に春を知る花の馨りは隱れねど、人に粟津の戰ひより爰に隱るゝ隱れ里。（ト此內北山小草振りあつて）

〽巴御前と御仲も義仲公は館より、小彌太を供に九十九折。

ト花道より義仲白綸子の着附、織物の小忌衣小さ刀駒下駄、義仲のこしらへ、小彌太棒茶筌袴大小白緒の草履、義仲の刀を紫の袱紗で持ち、出來り花道にて、

〽夜毎に通ふ山路も、濡れて嬉しき雨の後、萠ゆる小草の薄綠、霞む朧の月影をよすがに木曾の御大將、道のかたへに佇みたまひ。（ト此うち兩人振りあつて）

義仲　實にや深山幽谷に景地ありとの故事も、思はず出づる春の夜の朧の月に遠山の、綠にかすむ八重一重、おくれ咲きなる梅が香に岩打つ谷の水音は、心耳を澄ますながめぢやなあ。

小彌　仰せの如く都へは、僅かな里數に候へど、人跡稀なる山中にて、樵夫獵夫も通はざる浮世はなれし放れ里。

義仲　如何なる榮耀なすとても、誰れに憚ることもなく、心に掛る雲もなし。

小彌　それゆゑ月の廻りでは、今宵も最早子の刻過ぎ、

義仲　片時も早く巴が許へ。

〽君を思へば徒歩路にて、扉間近く入りたまへば、それと見るより出迎へ、

ト義仲小彌太舞臺へ來る、北山小草出で迎へ、

北山　これは〳〵我が君には、ようこそお入り、先刻より御愛妾巴御前のお待兼ね、

小草　少しも早く、設けのお席へ。

義仲　粟津七郎妹松風、夜毎の出迎ひ大儀なるぞ。

北山
小草　はッ。

小彌　何はともあれ我が君には、

北山　いざ先づあれへ、

三人　お通り遊ばされませう。

〽軍慮に敏き義仲も、色にやはらぐ春の宵、設けの席へ着きたまふ。

ト此うち小草上手へ褥を敷く、義仲此上へ住ふ、北山煙草盆を持ち來る、小彌太は下手へ控へる、小草正面へ向ひ、

小草　巴さまへ申し上げます、我が君さまのお入りにござりまする。（ト御簾のうちにて、）

巴　そのお入りを、待ち詫びましたわいな。

〽谷の戸出づる鶯の初音床しき思ひもの、羽風に薫る梅が香や、空炷の香もにくからず、會釋こぼして、手をつかへ、

ト此うちよき程に正面の御簾卷き揚げろ、內に巴御前褐色花簪袿、巴御前のこしらへ、側に碁盤双六盤など飾りあり、巴御前義仲の側へ住ひ、

今宵はお入りのない事と、思ひましたに我が君さまには、ようお出で遊ばしましたな。

義仲　そりや何故に今宵は又、來ぬことゝ思うて居た。

巴　色香もまさる山吹さまの方へ、お出で遊ばせしと存じましたわいな。

義仲　何しに山吹の方へ參らうぞ、そも〳〵木曾よりそもじと連立ち、爰へ來りし此義仲。

巴　初々しき身に便りなう、一夜逢はねば百夜の思ひ。

義仲　それを察して今宵もまた、子の上刻の時計を合圖に、館を出でゝ參つたのぢや。

小彌　お庭傳ひと申しながら、平地と違ふこの山中、お拾ひゆゑに路次の暇取り。

北山　花を暦の山住みながら、最早如月の末なれば、餘程つまりし春の宵、僅か子の刻一時ゆゑ、巴さまにはお待兼ね。

小草　それゆゑ同胞二人して、君のお入りを幾度か、お出迎ひに出ましたわいな。
義仲　如何さま兄の七郎は、予が迎ひに出たかも知らぬが、松風そちは予ではあるまい。
小草　何と御意遊ばします。
義仲　そちが迎ひに出やつたは、これなる小彌太に逢はうでな。
小草　何でまあ私が。
巴　あゝこれ松風どの、我が君が御存じならば、もう隱すには及ばぬわいな。
北山　扨は妹は小彌太どのと。
巴　疾から深い仲ぢやわいな。
小彌　面目次第もござりませぬ。（ト小彌太小草うつぶき居る、北山思入あつて、）
北山　まだ子供だと思ひの外、いつの間にそのよな事を、はて油斷のならぬ事ぢやなあ。
義仲　如何なることで馴れそめしか、其話しをいたして聞かしやれ。それを肴に一獻汲まん。
小草　どうしてまあ、そのよな事が。
巴　何をするのもお慰み、小彌太どのも共々に。
小彌　なんぼ君の仰せでも、是ればつかりは御免下され。

義仲　いや〳〵許さぬ〳〵、予も巴との馴れそめを、跡で話して聞かさうから、先づそち達から先きへはじめい。

小草　それぢやというて、兄さんの聞く前で。

義仲　なに構ふことがあるものか、俊兼そちは聞かぬふりで、そちらの方を向いて居やれ。

北山　畏つてござりまする。（ト北山眞面目に下の方を向く、）

巴　さあ、是れで誰に遠慮もない。

義仲　さあ〳〵早う、話して聞かしやれ。

小彌　左樣ならば仰せに任せ。

小草　恥かしながら。（ト兩人前へ出て、）

〽そもや二人が馴初めは、去年の彌生の櫻時、花の御遊の御酒宴に、筵隔てず奥表、打ちこぞつての藝盡し、〽舞も亂れて今樣に、琴三絃のいとしさと〽ほんに胡弓の弓取りゐ思ふ心の合せ物、笛の色音に節をこめて、その露とりに濡れそめし、二人が仲とあと言兼ね、顏を覆へば義仲公。

ト此うち小彌太小草、口說き模樣の振りよろしくあつて、義仲前へ出て、

〽然も其夜は山吹のことを巴が言ひ募り、夜半すぐるまで振附けて、背中合せの肌寒に。

ト義仲振りあつて巴御前出て、

〽こらへ情なき女氣の、寐返りなしてにつこりと、山さへ笑ふ雪解時谷の流れの水ならで、

〽ついしやら解けの袱紗帶、解いて結んで結んで解いて、閨へ朝日のさし合も知らで結びし春の夢。

ト義仲巴御前よろしく振りあつて納まる、此うち北山は下手を向いて居る。

義仲　これ〳〵俊兼、いつまでそちらを向いて居るのぢや。

北山　もうよろしうござりますか、やれ〳〵窮屈な目に逢ひました。

巴　お氣の毒でござりましたわいな。

義仲　これ巴、堅くるしい顏をして居るが、俊兼も若い身の上、何か色があるであらうな。

巴　女中仲間で評判なれば、あるに違ひはござりませぬわいな。

義仲　何も一興ぢや、話して聞かしや。

北山　どういたして拙者などが。

小彌　我々二人もお話し申せば。

小草　お前も隱さず、お話しなされませいな。
北山　あれば話してお聞かせ申すが、木曾山育ちの無骨者、軍より外存じませぬ。
義仲　その又堅い戰をば、色にやはらげ話して聞かしや。
北山　すりやどうあつても。
巴　君の御所望。
小彌　辭退は失禮。
小草　さあ〳〵早う。
北山　はて、迷惑な事ぢやなあ。（ト北山扇を持ち前へ出る。）
〽すぎし睦月の合戰は、味方の一座ちり〴〵に、忍んで通ふ道もせに、敵に堰かれて近江路に、あふことならぬ粟津浦、大津八丁土手馬にて、君は深田に深ばまり、日文矢文に果敢なくも、辛き別れのきぬ〴〵を、語るも涙聞くもまた、思はぬ涙に暮れにける。
ト北山物語やうの振り、ちよつと小彌太小草掛りよろしくあつて、
〽かゝる所へ山坂を越えて飛脚の二人連。
ト山颪韋駄天のやうな合方にて、花道より音平、胸當手甲脚絆草鞋一本差しにて、狀箱をかつぎ、渦平

同じこしらへ、小田原提灯を持ち出來り花道にて、

〽一時三里三條を四ツから立つて五里六里、七里飛脚は龍に虎、その雲助や風祭り、箱根八里の長持唄に、乘つてさつさと九里十里、浮かれ〳〵て來りける。

ト花道にて振りあつて、舞臺へ來りびつくりなして、

渦平　これ〳〵音平、いつも通る山越だが、こいつあ道が違やあしねえか。

音平　されば、遂に見馴れぬ此御殿、何さまのお屋敷だか。

渦平　何にしろ聞いて見よう。

官平　それがいゝ〳〵。

渦平　へい〳〵、御免下さりませ。（ト北山立つて、）

北山　おゝ、案内を乞ふは何者なるぞ。

渦平　へい、此街道を年中通る飛脚でござりまするが、遂に見馴れぬこの御殿、こゝは何と申すところでござりまする。

北山　おゝ其方共は存ぜぬ筈、爰は叡山の裏手にて樵夫獵師も通はざる、浮世はなれし隠れ里ぢや。

音平　へゝえ、隠れ里でござりまするか。よく話しにいたしますは、谷川へ椀が流れて來て、其水上を

尋ねたら公卿衆が居たといふ事を、話しに聞いて居りましたが、眼前見るは今日が初めて。

渦平　さうして向うにお出でなさるは、あれは公卿衆でござりまするか。

北山　いや／＼向うにおいでなさるのは、其方共も音に聞かん、朝日將軍義仲公だわ。

音平　その木曾の義仲さまは、粟津が原で討死をなされたと聞きましたが、御存命でござりまするか。

北山　おゝ石田の次郎が矢先に掛り、空しくお果てなされしと、風聞ありしは僞りなるわ。

小彌　誠は賴豪阿闍梨の助けにて、主從爰へのがれ來て、隱れ里においでなさるのぢや。

渦平　そりやとんだ事でござりまするな。して、向うにおいでなされまする、美くしいお女中さまは。

小草　あなたは君の寵妾、巴御前さまぢやわいの。

渦平　巴御前さまでござりますか。

北山　人にさへ語らねばよい、あれへ參つてお目通りいたせ。

音平
渦平　それは有難うござりまする。（ト兩人草鞋を取り、おづ／＼前へ出る、義仲見て）

義仲　こりや俊兼、その兩人は何者ぢや。

北山　はツ、往來の飛脚にござりまする。

義仲　苦しうない、近う參れ。

音平　へい〳〵、私共は一年中この街道を往來いたしまする、飛脚でござりまする、則ち音平と申します。

渦平　又私は渦平と申しまして、氣も輕ければ足も輕い、三度飛脚でござります。

義仲　年中旅を歩くとあれば、面白い話しがあらう。

巴　何ぞ話して聞かしやいの。

音平　別に變つた事もござりませんが、泊り〳〵の旅籠屋で、下女やおぢやれを相手にして、

渦平　一夜限りの情のお話し、兄貴と二人でやらかしませう。

北山　それは一段の事ぢや。

小彌　さあ〳〵早う、

小草　話しやいの。

音平
渦平　さらばお話し申しませう。

〽これは此春氣もはずむ、鞠子泊りの合宿に、連は娘と梅干婆、とんだ千松ならねども、惚れられたさがいつぱいに、湯からあがつて髮かき上げ、下女から貰うた白粉を、廊下の蔭で薄化粧。（ト音平よろしくなかしみの振りあつて、渦平手拭を冠り娘の思入にて、）

〽襖隔てゝ隣りから笑ひかけられ其口へ、ちよつと一口あげたいと、さしたる猪口の受けもよく、合の抑への狐拳、ばかされるとは知らずして、思ひ附かせる聲自慢〽おらが女房になるなら、朝も先きへ起さず寐かしておいて、水を汲み込み飯をば炊いて、汁もすりましよ掃除もしましよ、こんな亭主が唐にもあろか、唐にやない筈ヤンレ二ほん棒。

ト宜しく振あつて、

〽話しも出來てこつそりと、寐よとのかねて約束に、燈火消してくらがりへ這ひ込む所を引きこまれ、夢か現か宇津の谷の十團子よりも數多く、ほつと一息次の間から、下女が差出す行燈に、見れば白髮の梅干婆、逃げるはずみに傍なるとろゝの摺鉢打ちかへし、腰はふなふなぬら〱と、滑り〱てあいたゝゝゝゝ、鉢合せ。

ト此うち白き手拭を冠り、婆の思入にて音平と二人をかし味よろしくあつて納まる。

義仲　これは一入面白かつた〱、二人のものへ九獻を取らせい。

北山　畏りました。（ト銚子杯を取つて、）我が君より御酒下され、有難く頂戴しや。

音平
渦平　これは何より有難うござりまする。（ト兩人酒を呑む、）

義仲　これ巴、そちはどうか、予は今の話しを聞いて睡たうなつた。

巴　ほんにわらはも最前より、味な心になりましたわいな。
北山　何さま今宵ももう丑三つ、刻限來らぬ其うちに。
義仲　小彌太松風兩人も、
巴　君のお側で、
小彌 小草　有難うござりまする。
〽君の許しの帶紐も、解けてぬるみし春の水、濡れなんものと主從が、氣も若草に萠え出る心づくしや早蕨の、手に手を取りて寄添へば、
ト義仲巴御前の手を取る。小彌太小草も恥かしさうに同じく手を取り合ふ。
音平　もし〳〵番頭さま、どうかこちらもお相伴は出來ますまいか。
渦平　何でもよいから、取持つて下さいましな。
北山　幾らも女中衆があるから、今に一人づゝ取持つてやらう。
兩人　それは有難うござります。
北山　いざ、我が君には最早刻限。
義仲　どれ、この所で。（ト引寄せようとする。）

巴　あゝもし、燈火があつては。（ト巴御前片手で碁盤を取つて燈火を打消す。）

音平
過平　ても大力な。（ト兩人びつくりなす。）

巴　恥かしいわいな。

〽消える燈火に主從が、深き契りぞ。

ト三重になり義仲は巴御前、小彌太は小草をぢつと引寄せる。これにて一面に御簾をおろす、兩人北山に早くといふ思入、北山振拂ひ三重にて上手へはひる。これにて淨瑠璃臺を霞幕にて消す。誂への合方になり、音平過平御簾の內を覗きをかし味よろしくあつて、

音平　これ過平、

過平　早く來てくれゝばよいなア。（ト薄ドロ〳〵になり、上手より縫包みの鼠出る。）

音平　そりや來た〳〵。

過平　しめたぞ〳〵。（ト兩人鼠を捉へさぐり見て、びつくりなし、）

兩人　やあ、こりや鼠だ。

ト逃げに掛るを鼠捉へて、ちよつと立廻り、兩人舞臺の眞中へ下り、重なりてうつ伏せになる、これにて大ドロ〳〵になり、鼠上手へはひり、居所替りに道具替る。

（鼠の祠前の場）――本舞臺正面一面の岩組、眞中巖窟、是れへ鼠の祠と記せし白の緞帳を掛け、誂へ仕掛あり、上下畫心に藁葺常足の辻堂、打破りの狐格子、上の方杉林日覆より同じく杉の釣枝、下の方岩の張物で淨瑠璃臺を消し、よろしくドロ〳〵にて道具納まる。と時の鐘、山颪、誂への合方になり、音平渦平起上り四邊を見て合點の行かぬ思入にて、

音平　やあ、今までありし御殿もなく。

渦平　爰は見馴れぬ山の中。

音平　夢か現か、義仲公と巴御前の戯れを、あり〳〵見たる隱れ里。

渦平　狐狸に化されたか、こいつあ稀有な目に逢つた。（ト兩人思入あつて、）

音平　や、向うに見える提灯は、旅人が爰へ來ると見える。

渦平　待合して一緒に行かう。

音平　何にしろ枯葉を集めて、焚火でもして待たう。

トやはり右の合方にて音平杉の枯葉を集める、渦平は火を打ち焚き附ける。花道より咲平同じこしらへの飛脚、首へ誂への猫の香爐の入りし箱を掛け、背中へ竹の吸筒を背負ひ、三度笠小田原提灯を提げ出來り花道にて、

咲平　やれ〳〵七ツだと思つて立つたが、まだ夜の明ける氣色もないは、八ツと間違へて出たと見える。（ト舞臺を見て、）やあ向うに火を焚いて人が居るが、早立ちの雲助が煙草でも呑んで居るか、どれ一服やつて行かうか。（ト言ひながら舞臺へ來り、）こりやあどなたも、お早うござります。

音平　いや、わしらあ昨夜立つたのだが、此山ではぐらかされ、

渦平　めつぽふに手間取つたが、もう何時だね。

咲平　わしも時を間違へて、八ツから立つて來ましたが、もう七ツかと思ひます。

音平　それぢやあ明けるに一時あるな、お前も急がぬ道ならば、

渦平　一服やつて行きなさい。

咲平　それぢやあそこへ割込みませうか。（ト側へ寄り、三人顏見合せ、）

渦平　や、こなたは飛脚の咲平ぢやあねえか。

咲平　おゝ、さう言ふは渦平に音平か。

音平　思ひがけねえ所で逢つたが、おぬしにやあ二年振りだな。

渦平　おらあ久しく逢はなんだ。

咲平　昨日今日のやうだつたが、今年で丁度足掛け五年だ。

渦平　何にしろいゝ所で逢つた、さあ〳〵こつちへ來ねえ〳〵。

ト渦平上手へ行き、唉平下手へ來り、音平を眞中に三人岩臺へ腰を掛け思入あつて、

音平　さうしておぬしやあ、どこへ行くのだ。

唉平　おらあ急な飛脚を頼まれ、京から鎌倉へ行くのだが、お前方はどこへ行くのだ。

渦平　こつちもやつぱり、鎌倉へ行くのだ。

唉平　そいつは丁度幸ひだ、おれも一緒に行きてえものだ。

音平　こつちから一緒にと、今言はうと思つた所だ。これまで二人で歩いたが。

渦平　おぬしがこゝへ飛びこんで、三人となりやあ氣が丈夫だ。

音平　文殊の智慧はないにもしろ、三人寄れば膝とも談合。

唉平　おれも二人と一緒になりやあ、頼みが出來て安心だ。

音平　然しこれから長の道中、詰らねえことを言ひ合つて喧嘩をしちやあいかねえぜ、おればかりぢやあねえ、御贔屓の何れもさまがお案じなさらあ。

渦平　なに喧嘩をするものか、地震此方五六年、一つに育つた二人が仲。

唉平　人より仲のいゝのだけれど、いぢり合ひでもするやうに、世間の人が言ふからだ。

音平　物は當つて碎けろと、これから互ひに魚と水。

渦平　三人兄弟同様に、

咲平　力を合せて働かう。

音平　何にしろ極りを附けるに、ちよつと一杯やりてえ所だ。

渦平　株で兄貴は呑みたがるぜ。

咲平　おつと酒なら爰にある、夜道をするにやあ一杯やらにやあ、山氣を拂ふことが出來ねえ。

ト言ひながら、首へ掛けたる箱を取つて前へおき、背中の竹筒を出す、

音平　ほんにおぬしやあいつの間にか、おいらの仲間へへひつたな。

咲平　みんなお前に仕込まれたのだ。

渦平　先づ酒には有附いたが、茶碗を一つ欲しいものだ。

咲平　それもおれが持つて居る。（ト袂から塗物の水呑を出す、音平取つて、）

音平　こいつあ入子で二つになるが。（ト水呑を二つにして、）これで二人呑み合つて、跡はおれにさしてくれ、それで丁度五分々々だ。（ト音平酌をして咲平渦平水呑の遣り取りをして、兩人から音平へさす、音平兩方の手に受ける、咲平酌をする、音平呑んで、）去年にかはつて今年は又、おれが二人を取持つとは、

こいつァ嫁が姑だな。(トよろしく酒盛りあつて、)かう杯をするからは、假令向うが大敵でも、三人掛りで戰をする氣だ。

咲平 かう〳〵兄貴、お前方はさうでもあらうが、久し振りでの歸り新參、おらあ何だか氣味が惡い。

渦平 そりやあお前ばかりぢやあねえ、年功のねえ體だから、おいらなどもびく〳〵ものだ。

音平 所で去年首尾よくやつたは、飛脚の臑や腕ぢやあねえ。(ト腕を出し思入あつて、)御贔屓さまのみんなお蔭だ、後楯がねえ日にやあ、所詮戰は出來やあしねえ。

渦平 去年に替らず今年も又、

咲平 新まい奴も共々に、

音平 お引立てを隅から隅まで、

三人 偏にお願ひ申し上げます。(ト三人見物へ向ひ辭儀をなし、)

音平 これでいよ〳〵大丈夫だ。

渦平 とんだ油を掛けるやうだが、賴まれたれば後へは引かず、

咲平 弱い者をば見捨てぬが、爰がお江戸の身上だ。

音平 祝ひに爰でもう一杯、(ト音平咲平の前にある吸筒を取らうとして、)どつこい酒をこぼす所だ。(ト思は

ず咲平の脇にある箱へ足をかける、薄ドロ〳〵になり音平足のすくむ思入、びつくりして）やあ、今此箱へ足をかけると、俄に五體がすくんだは。

渦平　こりやあ何ぞ尊いものかえ。

咲平　その怪しみを見られたからは、隱しはしねえ此中は、賴朝公より西行へ施物にやつた銀の猫だ。

音平　そんなら是れが、噂に聞いた。

渦平　西行が貰つた銀の猫か。

咲平　一日晝夜四十里の道を歩く所から、急使に賴まれて京都から鎌倉へ、三日限りで持つて行くのだ。

音平　こりやあ賣つたら大金だらう。

咲平　先づ賣買より鎌倉で、草を分けて御詮議ゆゑ、賴朝樣へ差上げなば、褒美の金は望み次第。

渦平　そりやあ氣の惡い話しだな。

音平　おぬしがこれを、

兩人　持つて居ずば。（ト音平渦平箱へ目を附け）

咲平　や。（ト三人思入、音平吸筒をひつくりかへし）

音平　やあ、こりや酒をこぼして、焚火を消した。（ト時の鐘、合方替つて四邊へ思入）

咲平　こいつア俄かに眞闇だ。
渦平　星の光りを便りにして、
音平　ちつとも早く。
三人　麓の方へ。

ト三人思入あつて、咲平は箱を取つて首へかける、音平渦平は尻を端折り、身ごしらへして是れを取らうといふ思入あつて、双方より窺ひ寄り箱へ手を掛ける、時の鐘山おろし合方にて、

咲平　や、こりや何とするのだ。
音平　何とするとは知れたこと、われが持つて居る其猫を。
渦平　こつちへ巻揚げ鎌倉へ、持つて行つて褒美にするのだ。
咲平　さては二人言ひ合せ。
音平　いゝや一人でせしめる氣だ。
渦平　こつちも一人で褒美の金。
咲平　さう聞く上は。（ト振拂ふを立廻つて、）
音平　きり／＼こつちへ。

兩人　渡してしまへ。

咲平　何を小癪な。

ト　これより山颪誂への鳴物になり、三人件の箱を枷に立廻りよろしくあつて、花道より假花道を廻り、土間へ隱れなどして面白き立廻り存分あつて、トヾ舞臺へ歸り、舞臺眞中へ件の箱を置き、三人これを取らうとして鉢合せ、立廻つて音平、咲平渦平を切倒す、誂への切首板返しにて出て兩人後へ倒れる、音平糊紅を拭ひ鞘へ納め、四邊を搜す。此時以前の銀造下手から出で音平に行き當りちよつと立廻り、音平足にて搜し箱へ踏みかけ、ドロ／＼になり、箱を取上げ銀造を踏へきつと見得、

音平　頼朝公から西行へ下すつた銀の猫、鎌倉御所へ差上げりやあ褒美の金は望み次第、ずつしり〆子の、兎ぢやあねえ銀の猫、にやんにも言はずちつとも早く、おゝさうだ。

ト音平行かうとするを銀造後から組附く、此時ドンと本鐵砲の音して、音平銀造うたれたかと思入にてアツと苦しみ、音平猫の箱を前へ落し、ひよろ／＼として銀造と入替り音平は後へ倒れ、銀造は前へ見事にかへる、これをキツカケに上手古宮をばら／＼と毀し、西國太郎、百日、素網、褞袍丸ぐけ一本差し重れ草鞋にて鐵砲を持ち出る、是れと一緒に下手古宮を毀し東國次郎短かき百日、素網四天しごき一本差し重れ草鞋にて同じく鐵砲を持ち出て、双方一時にきつと見得、誂への鳴物になる、鐵砲を捨て双

方より探り寄り箱へ手をかけ拂ひのけ、手を取つてきつと見得、双盤を打込み、誂へ〆ンマリの鳴物になり、箱を柵に立廻り、このうち箱の紐解け、内より錦の袱紗包みの猫出る、これを争ひトヾ東國次郎取つて懐へ入れ、双方拔合せちよつと立廻つて、よき程に大ドロ〳〵になり、正面の鼠の祠屋體ひしぎになり、屋根の上に莫大な鼠顯れる、兩人びつくりなし東國次郎は上手、西國太郎は下手へ双方飛び退き足を踏み出すを木の頭、これにて鼠目口を開く、兩人刀を構へきつと見得、大ドロ〳〵仰山な鳴物にてよろしく、

ひやうし幕

ト幕引附けると、やはりドロ〳〵にて、花道へ伊達虛無僧草月、天蓋尺八を持ち伊達袋駒下駄、スッポンにて出ろ、此時後へ捕手三毛平、斑と見える好みの四天、緋鹿の子の丸ぐけにて草月へ掛るを投退けきつと見得、誂へ唄尺八入りの鳴物になり、三毛平見事にかへり蜻蛉がへりをして立上るを草月きつと見る、三毛平またかへり蜻蛉がへりをして立上るを草月きつと見る、このこと花道よき所まであつて、トヾ三毛平後退りに花道へはひるを、草月跡より悠々と花道へはひる。知せに附き跡シヤギリ。

三幕目

志賀之助内の場

【役名――明石志賀之助、仁王仁太夫、夢の市郎兵衛、行司早瀧丈之助、朝霧島藏、一富士仁太郎、神崎傳内、金剛彌太八、呼出し奴三太、相撲棧敷賣甚太、同角吉。市郎兵衛女房お菅、志賀之助女房お浪等。】

（明石内の場）――本舞臺三間の間平舞臺、上手書心に一間の障子屋體、是れに續いて一間の床の間、これへ相撲祖神の掛物、これへ並べて本物不動尊の掛物を掛け、兩樣とも供物燈明を上げ、不動尊の前にも臺附の護摩札をおき、よき所に誂へ太き竹の花活、これへ木蓮を生けあり、眞中暖簾口、これより下手茶壁、綺麗に拵へたる神棚、これへ神燈明など上げてあること、此下手の襖障子建切り、これより折廻して太文字に明石と記したる腰障子を建て、この前に用水桶、これへも白く明石と記し、いつもの所門口、よき所に莫大なる箱火鉢、これへ本物大きなる藥罐を掛け、總て明石志賀之助内の體、爰に三太奴天窓縞もの、着附呼出し奴の裝にて、小さなる敷紙の上にて神酒德利の口を磨いて居る、下手に甚太角吉中形もの、勸進元の紋のある着附、相撲掛りの者にて住ひ、側へ臺附の護摩札を置き煙草を呑み居る、此模樣よろしく、さんげ〳〵角兵衛獅子の鳴物にて幕明く。と三太磨きものをしながら、

三太　おい、今日は甚太さんも角吉さんも、豪氣に眞面目だね、まだ大橋を攻めねえと見えるね。

甚太　馬鹿を言ひねえ、今日はいつもとは違ふわ、内の關取が病氣だから、鎌倉前の不動さまへ、お百

度に行つたのだ。

角吉　そりや見な、此通り護摩のお札を持つて來た。（ト護摩札を見せる。）

三太　成程、けふばかりは本當の信心詣りだな。

甚太　神詣りに噓といふのがあるものか。

三太　それでもお前方の生業ぢやあ護摩を焚くより、ごまを摺る方がよからうと思つてよ。

角吉　こいつも口から先きへ生れたと見えて、よく喋べる奴だぜ。

甚太　そりやあ其筈だ、呼出しにならねえ前は、鬼灯賣りをして居たもの。

角吉　成程それで口が達者な筈だ。

三太　大きにお世話だ、口が達者だから呼出しになつたのだ、足が達者なら町飛脚になつてしまふよ。

甚太　よく負けずに喋べりやあがらあ、口が達者だから豆屋にでもなればいゝに。

角吉　さうよ、幾ら呼出しで口が達者でも、行司さんにやあ天窓は上らねえ。

甚太　どうして天窓が上るものか、此天窓はよつほど重いからよ。

三太　また天窓のことを言やあがらあ。（ト三太立掛るを兩人留めて、）

甚太　これさ〳〵、もう言はねえ、堪忍してくれ〳〵。

角吉　凹ましたら喜ぶだらう。

三太　また言やあがる。

ト神酒德利の口を持つて兩人を追廻す、甚太角吉は捨ぜりふにて逃げ廻ること。合方になり奧より朝霧島藏若衆鬘明石の弟子、角力好みのこしらへにて、三方へ神酒德利を載せこれを持ち出で來る、是れへ三太追ひ廻しながら行き當る、

朝霧　えゝ危ねえ、何をするのだ。

ト朝霧左りの手にて三太を突く、是れにて三太ころ〳〵と轉げて立上り、

三太　なぜおれを轉がしやあがつた。（ト朝霧の顏を見てびつくりして）や、お前は。

朝霧　えゝふざけやあがつて、關取が病氣だわえ、極道奴めが。

と三太こそ〳〵と下へ來る、甚太角吉も下手へ住ひ、

甚太　へい、朝霧關今日は。

角吉　よいお天氣でござりまする。

朝霧　これは誰れかと思うたら出方の衆、ようござりました、ちよと御免なせえ。（ト神酒德利を床の間へ供へながら、）これ奴、二人の衆に、お茶でも進ぜねえか。

三太　あい。（ト不承々々に茶を汲んで兩人の前へ出す、此うち朝霧こちらへ來り、）

朝霧　これは失禮をしました、まあこつちへござつて、一服呑んで下さりませ。

甚太　へい有難うございます、早速ながら關取の御病氣は、如何でございます。

角吉　日々にもお尋ね申すのでございますが、つい暇なしで、御無沙汰ばかり。

甚太　少しはよろしい方で、

兩人　ございますかな。

朝霧　親切によう尋ねて下さります、少しづゝは快い方ぢやが、どうも埒が明かぬで困りきります。

甚太　それに附きまして、掛り合のゝのも關取が御病氣ゆゑ、賴朝樣の御上覽相撲が延引になりますゆゑ。

角吉　出方は元より中賣りの衆までも、どうか早く御全快になりますやう、不動さまへお百度を上げましたゆゑ。

甚太　大勢參るも御迷惑と存じまして、二人いたしてお札をば、持つて參つてござります。

ト以前の臺附の護摩札を出す。

朝霧　それはまあ用もあらうに、皆の衆が、有難いことでござりまする。いやも出方の衆や御贔屓の旦

那方のその勢力でも、近いうちには全快するでござりませう、一統の衆へもよう禮をいうて下さいまし。

甚太　はい〳〵、御傳言は申しまする。

角吉　さうして今日はお內儀さんは、どちらへかお出でゞござりますか。

朝霧　はい、姉御はけふは父親の初七日に當るゆゑ、寺詣りにいなれました。

甚太　左樣でござりますか、申すも何だかお氣の毒でござりますが、宗庵さまもとんだ事でござりましたなあ。

朝霧　實にあれが災難でござりますよ。

角吉　然し御用の多いにべん〳〵と、そろ〳〵出船といたしませう。

甚太　關取さまにもお內儀にも、よろしくお願ひ申しまする。

朝霧　まあいゝぢやあござりませぬか。

甚太　いえ、又この頃にお尋ね申しまする。（ト兩人捨ぜりふにて門口へ出て、）

兩人　へい、お暇申しまする。

朝霧　ようござりました。（ト角兵衛獅子の鳴物にて兩人は下手へはひる、やはり跡合方、三太居睡をしてゐる、

朝霧見て、〽これ三太、また居睡りをして居るかえ、用があれば呼ぶ程に、中の間の掃除でもして
おけ、え〻早く行かねえか。

三太　あい、今行くところだ。

トぶつ〳〵言ひながら暖簾口へはひる。朝霧は護摩札を床の間へ上げ、ちよつと拜をしてこちらへ住ひ、
よろしく思入あつて、

朝霧　よく芝居でも言ふせりふだが、有爲轉變の世の中とは、よく言つたことだなあ。内儀さんの親父どの宗庵どのといふお人は、不實はもとより律義一遍、あんなお人はあるまいと褒めぬ人といふものは只の一人もなかつたが、どういふ事であんな御最期、神信心もなされたが、身にふり掛る災難は、神や佛の力にも及ばぬことゝ見えるわえ、それに附けても關取のどうか病氣の本復するやう、いゝ藥が欲しいものだなあ。

ト思案の思入、大太鼓入り角力甚九の鳴物になり、花道より仁王仁太夫角力好みの鬘、羽織一本差し堂島の駒下駄にて出來る、其跡より傳内繰下げ、羽織着流し大小、其跡より金剛角力取りてき好みの裝、一本差し雪踏にて出來り、花道にて、

傳内　これ關取、志賀之助の宅はあれか。

仁王　へい、さうぢやさうでござります。貴樣は知つて居るか。

金剛　いやもう知つて居やすとも、向うにべつたり明石と書いた、あの腰障子が目印でござります。

仁王　それぢやあ手前案内しろ。

金剛　あい、合點でごんす。

傳內　かう近附いたら、これ關取、何分貴公が便りだぞよ。

仁王　はてようごんすわいの、わしに任せてお置きなされませ、ぐつとも言はせる事ぢやござりませぬ。

傳內　いよ〳〵よいかの。

仁王　はてお案じなされますな、やい金剛、われ先きへ立たぬかえ。

金剛　あい。（トやはり右の鳴物になり、金剛先きへ舞臺へ來り、）朝霧どのは家でごんすか、關取が見舞に來ましたぞよ。（ト此うち仁王傳內は門口へ來る、朝霧思入あつて、）

朝霧　なに關取が見舞に來たとは、誰れ關ぢや名を言はんせ。（ト此時仁王門口を明けて、）

仁王　あい、わしでごんす、仁太夫が尋ねに來たのぢや。（ト是れにて朝霧仁王を見て、門口へ來り、）

朝霧　おゝこれは仁王關、よう來て下さりました、聞き馴れぬ聲ぢやによつて、誰れぢや知らんと思うて居ました、どうぞ堪忍して下さりませ。さあ、こちへ通つて下さりませ。

仁王　あい〳〵、もう〳〵構うて下んすな。さゝ傳內さま、こちらへおはひりなされませ。

傳內　然らばそれへ參るであらう。（ト傳內附いて上手へ通る、朝霧不審の思入、仁王こなしあつて、）

仁王　やい金剛、われもこつちへはひつていゝ。

金剛　あい〳〵、（ト內へはひり、）朝霧關、さつぱり無沙汰をいたしました。

朝霧　おゝ、誰れかと思うたら金剛か、さゝこつちへ來て、ゆるりとさんせ。（ト此うち仁王もよろしく住ふ、朝霧前へ出て、）關取、今日ござりましたは、何ぞ師匠に相談でも。

仁王　おゝちと用もあつて參つたが、此間から病氣といふこと聞いたゆゑ、どうして居るかと案じるによつて、今日は見舞に出掛けて來たのぢや、少しづゝもいゝ方かの。

朝霧　へい有難うござりまする、次第に少しはよい方でござりまする。

仁王　それは何より重疊ぢや、おれも疾から見舞はうと、今日はいんで顏出さうか、明日は明石を尋ねようかと、心に思はぬことはないが、これ朝霧聞いてたも、お出入り屋敷の殿樣からちよつと來い仁王關、それ呼んで來い仁太夫と、一日おれが顏出さぬと、御前樣が御不興ぢや、いや餘り氣に入られ過ぎるのも、世間の義理を缺くやつだ、あはゝゝゝゝ、よう師匠に言うてくりやれ。

朝霧　はい有難うござりまする、言はるゝ通り關取も、煩いことでごんせうの。（トさげすんでいふ。）

傳内　いや又こゝの明石關とは違うて、仁王關の人氣といふものは、殿をはじめお裏方女中方にいたるまで、それ仁王やれ仁太夫とお手車、かく申す傳内などもかたまり法華の片贔屓、凡そ日本廣しといへども、仁王關に續くものは、恐らくあるまいと思うて居るわえ。

金剛　いやもう師匠に繋がる我々まで、仕合せといふものでござりますわえ。

ト此うち朝霧知らぬ思入にて、

朝霧　關取始めわしらでも、何でも顏を賣る稼業は、旦那方の御贔屓が何より強味でござります。

仁王　何は格別志賀之助が、少しも病氣がいゝとあれば、逢はねばならぬ用もあれば、ちよつと呼んでくれまいか。

朝霧　へい、よいというてもまだ床を放れても居りませぬが、ちよつと師匠にお出でのことを。

仁王　大儀ながら、言うてくだんせ。（ト此時上手屋體の内にて、）

明石　仁王關が見えたとか、病中ながら志賀之助が、それへ行て逢ひませうわえ。

ト合方になり、障子を明ける。内に明石角力好みの窶れたる鬘、病形、褞袍の重ね着、平ぐけにて搔卷を羽おり居る、朝霧側へ行き、

朝霧　もし關取、無禮は病氣のことゆゑに、居所で用を聞きなさんせ、風が當ると惡いぞえ。

明石　いや〳〵、今日は大きにいゝやうだ、そろ〳〵出て挨拶しようよ。

朝霧　そんならたんと引掛けて、暖かにしてござりませ。

ト朝霧介抱なして明石の手を取り前へ出る、仁王明石を見て、

仁王　おゝ明石關、大抵案じたことぢやあない、今も朝霧に様子は聞いたが、少しづゝもいゝ方で。わしも大きに安堵した。

明石　いやよう尋ねて下された、こんな大きな圖體で病氣に負けるも意氣地がないと、幾らせいてもあせつても、是れが世にいふ主と病、どうも團扇があがらぬわえ。

仁王　そりやあ貴様の言ふ通り、力づくにも腕づくにも勝たれぬものは主と病さ、その勝たれぬお主の筋道から、ちつと話さにやならぬことが、見舞旁々その譯で、今日は態々出掛けて來た。

ト明石思入あつて、

明石　その又貴様が主筋に、搦んだ譯と言はつしやるは。

仁王　外でもない爰にござる此御仁は、おれが扶持を貰つて居る北條様の御家來、傳内様とおつしやるお方、貴様もちつとは覺えがあらうの。

明石　さればさ、お屋敷方の御贔屓も多くあるゆゑ、一度や二度では、どつもはつきり覺えぬわえ。

傳内　やい〳〵、覺えぬとは緩怠至極、まだ朋輩も外に二人居合せたれど、此傳内を目途に取り、人を投げたり手玉に取り、それで知らぬと申す事か。（ト辰巳上りになつて言ふ、仁王制して、）

仁王　はてまあ、お控へなされませ、わしが申しまする。

傳内　ぢやと申して、しら〴〵しいわえ。

仁王　よろしうござります、此仁太夫が居りますから、先づ〳〵お控へなされませ。

傳内　むう。（ト口惜しき思入にて控へる。）

仁王　今傳内様が言はれた通り、雪の下の小池の前で、何の遺恨か知らねえが、神崎様を始めとして外のお方も二人三人、まだそればかりかおれが弟子、あの金剛まで手酷い目に逢はせたといふことは、疾におれが聞いて居る、お侍は兎も角も手にも足りねえ取りてきを、貴様は投げて晴れになるか。傳内様、御朋輩の遺恨の趣意をば聞いた上、おれも默つて見ちやあ居られぬ、此仁太夫に入譯を平にぶつけて聞かせてくりやれな。（ト明石思入あつて、）

明石　あはゝゝゝゝ、何事かと思つたら、其間違ひならわしの方に、元より何の遺恨もなし時のはずみの出合頭、さう大仰に言はれては此明石が面目ない、あの旦那にも詫いうて貴様も心を直してくりやれ。いやも、大人氣ないと我ながら顔向けるのも恥かしいわえ。

仁王　明石關、いやさ志賀之助、あやまりさへすりや事が濟むと、空嘯いても此仁王の、下のものなら時の間違ひ、料簡しろで濟まさうが、相手が名に負ふ志賀之助、關と關との間違ひで明石が怖さに料簡したと世間の人に言はれちやあ、仁太夫ばかりの恥ではねえ、お出入り屋敷の恥辱ゆゑ、相手を連れて出入りに來たのだ。さあ、顏を立てゝ貰ひに來たのだ。

トきつと言ふ、明石ちつと思入あつて、

明石　さゝ、其の腹立ちは尤もだ、腹も立たうが今いふ通り、ほんの時のはずみだから、どうぞ勘辨して下せえ。これ、明石が詫びる、志賀之助が詫びて居るわえ。

ト此うち朝霧氣を揉む思入にて、立つたり居たりして癪に障るこなしにて、明石の側へ來て、

朝霧　もし〳〵關取、何でそんなに詫びなさるのだ、樣子は何も知らねえが、ちつとはこつちに理もあるだらう、何とか話しをおつけなせえな。

明石　何もそつちの知つた事ではねえ、まあそつちへ寄つて居やれ。

朝霧　それでもお前、あんまり譯が。

明石　はてぐづ〳〵言ふな、これ朝霧、心の附かぬ、酒の支度でもして、仁王關に馳走をしやれ、氣の附かねえ奴等だわえ。（ト追從にいふ、仁王冠せかけて、）

仁王　いや〳〵、其馳走振りおいて貰はう、わしや酒は所望でねえわえ。

明石　はて、さうでもあらうが何はなくとも、これ島藏、燗をせぬかえ。

仁王　えゝ此仁太夫は關取ぢや、爰まで酒を呑みにや來ねえわえ、貴樣が出入りの挨拶次第で、こなたが不斷大事にする、鎌倉屋の梅之助とかいふ靑二才、いくら貴樣が肩持つても大商人の金持のと、いつた所が高が町人、こちの相手は誰れあらう北條家の御重役、次第によりやあ切捨ても埃もかからぬ御身分だぞよ。然し貴樣、その息子に怪我でもさせては濟むめえから、そこは仲間の誼だけ、旦那を宥めて連れて來たのだ。さあ志賀之助、男らしい挨拶して、早く片を附けてくりやれな。

ト此うち明石ぢつと思入あつて、

明石　むゝ、ようごんす、如何にもそなたの顏を立つたら。

仁王　さればさ、男が立ちやあ言分はないわえ。

明石　それで料簡なることなら、どうなりとも腹のいるやう。

仁王　成程面白い、然し病みほうけた明石を橋詰までとも言はれめえ、そちが旦那や金剛を打ち叩いたそれだけを、あの二人に打たれるなら、それで勘辨してやらうよ。

明石　そりや打つなりと叩くなりと、存分にならうわえ。
仁王　いよ〳〵存分打たれる氣か。
明石　そりやもう念には及ばぬわえ。
仁王　むゝ、よし〳〵、流石は明石志賀之助、いゝ覺悟だ。申し傳内さま、お聞きの通りの譯なれば、御遠慮なしに志賀之助を存分打つて、お前さまの無念をお晴らしなされませ。
傳内　然らば打つても大事ないか。
仁王　何で大事がござりませう、お心丈夫に仕返しをば。
ト仁王傳内と顏見合せ、おもひいれ打てといふこなし、朝霧前へ出て、
朝霧　もうし關取、いやさ仁王關どの、遺恨があつての仕返しなら、病氣に疲れた師匠をば、打つた所が手柄にはなりますめえ、わしを存分打ち叩いて、それで腹を癒て下せえ、師匠の代りに朝霧が、どうとも自由にならうから、それで料簡して下せえ。これ關取、どうぞわしを打つて下せえ。
ト思入あつて言ふ。
仁王　えゝ役にも立たぬ師匠思ひ、貴樣を打つて腹がいるなら、こゝまで態々出ては來ぬわ。無駄な頼みだ、聞く耳はねえわえ。

朝霧　さゝ、さうではあらうがあの通り、瘧の病でたゞでせえ節々痛む煩ひゆゑ、どうぞわしをば代りに打つて。

仁王　えゝ、無駄なことだ、ならぬ事だわ。

朝霧　これ程わしが賴んでも、聞入れては下さらぬか。

仁王　えゝ、くどいわえ。（トきつと言ふ。）

朝霧　むゝ。（ト朝霧口惜しきこなし、明石目配せして、控へて居ろといふ思入あつて）

明石　またしても入らざる差し出、われが構うたことぢやない、すつこんでゐい。

朝霧　それでも、これが。

明石　えゝ、すつこんでゐいと言ふに。（トきつと言ふ、是れにて朝霧餘儀なく控へろ、明石前へ出て）さあ仁太夫、手出しはせぬ、腹のいるほど打つて下せえ。

仁王　おゝ心得た。神崎さま、お遣りなせえ。やい金剛、われも明石を存分にぶて。（トいへども兩人うちうちして居るゆゑ、）傳内さま、何をうぢ／＼なされまする。金剛、早くせぬかえ。但し明石がこはいのか、後には仁王が居るわえ。この仁太夫が、控へて居るわえ。（トこれにて傳内立上り、）

傳内　そんなら仁王鬪、始めるぞよ。大丈夫だな。よいな、手出しはせぬな。

仁王　ようござりますわえ。

傳内　さう請合へば、先づ安心。（ト怖々明石の側へ來り）いよ〳〵是れから仕返しだぞ。（ト遠くより手を延ばし明石の襟上をそつと取つて）やい明石、よくも此中雪の下で、手酷い目に逢はせたな、其返報に出て來たのだ。何もそちが怖いから、仁王を連れて來たのぢやないぞよ、貴樣の宅を知らぬゆゑ道案内に賴んで來たのだ。さあ、これからおのれを打つのぢやぞ。（ト爪立つて顫へながら、やいやい金剛、われも早くこゝへ來い。一人も多いが氣が丈夫だ。

金剛　まあ〳〵、お先きへおやりなされませ、あなたの打たぬ其先きに、私が手を出しては失禮でござります。

傳内　えゝ、何もこんな時に、辭儀が入るものか、早く來い〳〵。

仁王　何をぐづ〳〵言はつしやるのだ、早くさんせ〳〵。

傳内　何もぐづ〳〵はいたさぬ、今やりかゝつて居る所だ。やい金剛、早く來ぬかい。

金剛　あい行きやすよ。それ、行くぞ〳〵〳〵。

ト金剛そろ〳〵と立上り、そつと明石の後へ廻り、傳内と一時に明石の襟上を取つて、

傳内　やい、明石。（ト金剛傳内と顔を見合せ）

金剛　やい、明石。
傳内　いよ〳〵打つぞ。
金剛　いよ〳〵打つぞ。
傳内　いや、かう。
金剛　いや、かう。
傳内　かう〳〵。
金剛　かう〳〵。（と兩人にて互ひに明石を打つて、）
傳内　かう二人で打つときは、罰が當れば貴樣もおれも。
金剛　腕が曲れば、あなたもわしも。
傳内　憎まれるのも身共と其方。
金剛　投げられるのも、あなたとわたし。
傳内　仲よく最一つ。
兩人　かう〳〵。（トまた明石を打つて、）
傳内　何と骨身に、

金剛　こ、
傳內　た、
金剛　へ、
傳內　た、
金剛　か。（ト兩人にて割つていふ。仁王につたり思入あつて、）
仁王　えゝ二人揃つて意氣地のねえ、それぢやあ骨身にこたへぬわ。傳內さまも金剛も、そつちへ寄つてござるがいゝ。（ト言ひながら仁王立上り明石の後へ廻り、）とてもやるなら金輪際、これでなけりやあ。（ト持つてゐた煙管にて明石の額を割る、明石ムヽと思入、）こたへぬわえ。
　　　ト兩人きつと見得、朝霧仁王の側へ摺寄つて、
朝霧　これ關取、何でお前が手出しをするのだ、仕返しするのは今の二人、何でお前が師匠を打つた、假令關でも仁王でも、道に違やあ弟子師匠、默つて見ちやあ居られねえわえ。
　　　ト朝霧きつとなつて、口惜しき思入、
仁王　おゝ打つてもいゝ、叩いても大事ねえわえ。
朝霧　何でこんたが、打つてもいゝのだ。

仁王　今の二人のまだ外に、伴六甚藏二人の衆の、其仕返しを一つにして、此仁王が名代だわ。

朝霧　いゝやそいつあお前が無理だ、代りで濟むならなぜおれを、師匠の替りにぶたねえのだ、師匠が蟲を怺へても此朝霧が、我慢が出來ねえ。（ト立上りきつとなるを、明石制して、）

明石　これ朝霧、立ち騷いで見苦しい、言つてよけりやあおれが言ふ、手前は控へて。（ト無理にすゑて、）居ろといふに。（ト朝霧口惜しき思入にて、）

朝霧　えゝ、癪に障るなあ。（トぢつと思入、傳内嘲笑つて、）

傳内　これ金剛見たか、同じ西と東の關でも、仁王關と立竝ぶと猫に追はれた鼠のやうに、體がすくんで手出しが出來ぬわ、あれでも力士と言はれるものか、いつも極りの憎まれ口だが、見れば見るほどみじめなざまだ。

金剛　そこが體の貫目といふもの、こちの師匠は大々名北條樣のお抱へさ、向うはたゞの商人や女子供にごまをすつて、贔屓を賴む關だもの、そりやあ一つにはならぬわさ。

傳内　此手際では本復して、上覽相撲へ出た所が、大概相場も知れたものだ。（ト此うち仁王思入あつて、）

仁王　やい金剛、無駄口を叩くなえ。傳内さま、あなたはお胸が晴れましたか。

傳内　いやもう、晴れたとも〳〵、日本晴れ所ぢやござらぬ、唐天竺から蝦夷松前、アメリカオロシヤ

の方までもすつぱり晴れた心持だ。

金剛　何でもい〻師匠は持つべきもの、これで胸がせい〳〵しました。

傳内　關取、もうそろ〳〵出掛けようか。

仁王　あい、それがようござんせう。あなたの胸が晴れせえすりやあ、わしが役も濟んだといふもの。
（ト仁王悠々と立上り、）あ〻今この廣い世界に於て、關といふのは明石と仁王、片腕とする志賀之助が此樣子では心許ない、さすれば跡に仁太夫が右に立つ相手がないわえ、貴樣もおれに立竝ぶ心があるなら隨分と、神佛でも信心して土俵の上へ出たがい〻わ。それも又おぬしの心たゞ一つで、この仁王に逆らへば梅之助が身の上だぞ、とつくり胸に手を置いて晴れの勝負は土俵の上。これ朝霧、貴樣も師匠が力づくやう、鰻でもす〻めてやれ。はて、氣の毒千萬だ、む〻は〻〻〻〻。
（ト此うち傳内金剛は門口へ出ろ、仁王も捨ぜりふを言ひながら門口へ出て、）これ明石、今言つて聞かせた通り、晴れの相撲はおぬしが心一つだぞよ、え〻、必ず心に忘れまいぞ。さ、傳内さま、參りませう。

傳内　先づ〳〵關取。

金剛　親方羽織が。（ト金剛爪立つて仁王の羽織の襟を直す、）

仁王　さ、行かうかえ。

　　トやはり大太鼓入り賑かなる鳴物になり、仁王先きに、傳内金剛えらいものだといふ思入にて花道へはひろ、跡朝霧始終口惜しき思入にて仁王のはひるを、段々と門口まで見送りて、

朝霧　おのれ仁王仁太夫め、我慢に我慢をして居たが、どうも蟲が承知しねえ、是れから跡を追つかけて、存分言はにやあならねえわえ。（ト立上るを明石留める。）

明石　その悔しいのは尤もだが、おれが無念をこれえたも高があいつ等二人か三人、病みほうけても志賀之助何の造作もねえことだが、退引ならぬは鎌倉屋の、若旦那を枷にして仕返しに來たあの仁太夫、病氣全快なす上で、遺恨を返すは土俵の上、急かずとおれに任せておけ。

朝霧　でも仁太夫めが惡口が、世間へぱつとした日にやあ、末代までの師匠の名折れ、それだによつてどうぞわしをば。

明石　いゝや今はやられねえ、おれが遺恨を返すを待て。（ト明石朝霧を宥める、爰へ以前の三太出て、）

三太　おい〳〵朝霧さん、七輪の湯が煮たつたよ。（ト是れに構はず、）

朝霧　そんならどうでも、わしをやつちやあ。

明石　さ、惡いによつて留めるのだ。これ朝霧、病人に氣を揉ませてくれるな。

三太　湯が煮立つたといふによ。

朝霧　えゝ、忌々しい。（ト朝霧思はず拳を握り、三太の天窓を張り倒す、三太びつくりして、）

三太　あいたゝゝゝ。

ト天窓を押へて暖簾口へはひる、朝霧ぢつと下に居る。薄く風の音時の鐘になり、明石思入あつて、

明石　あゝ今打つのはありや七つか、また病のきざす時分だ、時の鐘を聞く度に、何だか壽命が縮まるやうだ。又ぞく〳〵して來たわえ。朝霧、ちよつと搔卷を引つかけてくれ。

トこれにて朝霧心を取直せし思入にて、

朝霧　關取寒くなりましたか、搔卷もあげますが、爰では風が當りますぜ、やつぱり寢所へござりませ。

明石　寢所も何だか陰氣でならねえ、やつぱりちつと爰に居ようよ。

朝霧　そんならさうなされませ、あんまりかぶるも却つて毒だ。（ト言ひながら搔卷を明石の後よりかけて、）ちつと背中を、擦りませうか。

明石　あゝ、氣の毒だなう。

朝霧　何のお前。（ト言ひながら朝霧明石の後へ廻り背中をさする、時の鐘打ち上げ、床の淨瑠璃になる、）

〽春といふ文字に晴るゝの意はあれど、晴れぬ思ひの朝霧が、介抱おろか七つの鐘、打ちつ

れ來たる道もせに、胸に早瀧丈之助お浪を伴ひ出來り、

ト此淨瑠璃のうち花道より丈之助胡麻鹽鬘羽織着流し一本差し、角力年寄更けたるこしらへ、跡よりお浪、丸髷角力女房好みの裝、小さなる珠數を手に持ち出來り、

早瀧　お浪どん、丁度いゝ所で逢つた、今日はどこへいなれたのだ。

お浪　はい、今日はとゝさんの初七日でござんすゆゑ、お寺參りに行て參りましたわいなあ。

早瀧　おゝ寺參りか、そりやあよく參詣をしなすつた、とつさんも嘸悦ぶであらうわえ。

お浪　はい、有難うござりまする、ぬしが病氣でござんすゆゑ、外へ出るのもそこ〳〵で、氣がせいてなりませぬわいなあ。

早瀧　おゝさうであらうとも、明石も定めて待つて居よう。さゝ、連立つて行きませうわえ。

お浪　お先きへ參じますわいなあ、

〽お浪は心いきせきと、立歸つたる門の口。（トお浪先に舞臺へ來り、門口を明けて、）

今歸りましたわいなあ。（ト内へはひる。）

明石　おゝ女房か、大層早いことであつた。

お浪　もし〳〵こちの人、あの丈之助さんと、連立つて戻りましたわいなあ。

明石　なに、師匠がござつたとか。

〽といふうち表へ丈之助。（ト此うち早瀧門口へ來て、）

早瀧　どうだ、ちつとは氣分がいゝかの。

明石　これは師匠、ようござりました、さあ〳〵こつちへはひつて下さりませ。

ト朝霧そこらを片附けながら、

朝霧　お內儀さん、さぞ草臥れたでござりませう。（ト早瀧に向ひ、）へい親方、御無沙汰をいたしました。さあ〳〵、あちらへお通りなされませ。

明石　どうぞこちらへ來て下され、何だかわしが病人ゆゑ、取り散らしてむさうござります。

ト此うち早瀧は上手に住ふ、朝霧茶を汲んで持つて來り、

朝霧　はい、お茶をお上りなさりませ。

早瀧　あゝもう構やるな〳〵、弟子師匠とは言ひながら、內の朝霧は感心に、よく世話をしてくれるなう。

明石　いやもう、なか〳〵親身も及ばぬ世話。どうぞ師匠、禮をいうて下さりませ。

お浪　島藏さんがぬしの世話を、して下さんすのでわたくしも、安心して寺參りも出來まするわいなあ。

早瀧　ときにお浪や、明石は食はどうだ。
お浪　どうも思ふやうに進まぬわいなあ。
早瀧　そいつあ困つたものだ、さうして氣分はどうだ。
明石　大きに此一日二日は、次第にようござります。
早瀧　氣分が段々よくなれば喰物も食へて來る、これお浪やちつと食づいたら脂濃いものは惡いが、何ぞ輕い魚を喰してくれ。
お浪　はい、そりやもうわたしも勸めまして、昨日もむしのよいのを買うて置きましたわいなあ。
早瀧　さうか／＼、これお浪、鰈などはいゝが、貝藻は當時わるいぞや。
お浪　はい／＼、いえもうぬしは貝藻は好きませぬわいなあ。
早瀧　えゝ呑込みの惡い、それ、貴樣のさ。
お浪　あれまア常談ばつかり、そのやうな事はござんせぬわいなあ、ほゝゝゝ。
早瀧　あはゝゝゝ。
〽流石氣輕な情知り、粹な異見ぞ頼もしき。
明石　いやもう、いつもながら親仁さんは、氣さくなことでござりまする、あはゝゝゝ。

お浪　お蔭で久しぶりで、ぬしの笑ひ顔が出ましたわいなあ。

明石　これ〳〵朝霧、師匠に一口つけて上げろよ。

朝霧　あい〳〵、丁度いゝ酒が來てをりまする、親方の口に合ふのがございまする。

早瀧　あゝよせ〳〵、今日は無駄だ。

朝霧　なぜでございます。

明石　何はなくとも、一杯引つかけて下さりませ。

お浪　わたしがお肴をこしらへようわいなあ。

早瀧　何さ、元より好きな酒だもの、呑めりやあ何の遠慮をせうぞ、此四五日は禁酒をしたわえ。

明石　そりや又何で、禁酒をば。（ト合方になり、思入あつて、）

早瀧　志賀之助貴様の病氣も段々と、いゝとあれば嬉しいが、上覽相撲がこれまでに、延引するのもそちが病氣、一日なりとも關取を早う全快させてえと仲間の者が氣を揉むゆゑ、師匠の身では猶の事、そればかりならよけれども、世間でつまらぬ取沙汰を聞く度々に癪に障れど、貴様さへ全快して相撲になれば何でもないと、實のことおらあ好きな酒を禁酒して、不動樣へ日參を始めて居るのよ、それぢやによつて折角の、酒の馳走を斷るのよ。

〽弟子といへば我が子より、深き惠みを志賀之助、有難涙おし包む、女房お浪も差寄つて、

ト早瀧ちよつとこなしあつていふ、明石は忝ないといふ思入、お浪こなしあつて、

お浪　いつに替らぬ親方さんの、御親切なる其お詞、何とお禮を申さうやら有難涙がこぼれまする。

明石　親分許して下さりませ、病とはいひながら年寄られたお前にまで、好きな酒を斷たせるとは、不孝なことでござりますわい。

早瀧　これさ、そんなに言つてくれるな、弟子といやあおれが子だ、酒斷ちぐれえは當りめえだわ。

朝霧　あゝほんになあ、人の心といふものは種々なものだ、親方のやうな親切な人もあるに、底意地の惡いあの仁王め、病みつかれたる關取をば。

〽思はずせき立つ島藏を、見るよりお浪は聞き咎め、

ト思はず朝霧きつとなる、お浪これを聞いて、

お浪　もし島藏さん、仁王關がこちの人を、どうかしたのでござんすかえ。

明石　あゝこれ島藏、何をいふのだ。仁王が何をするものだ、ちよぼくさ口を走らすな。

〽言はれて朝霧心附き、

朝霧　はい、何にもしはせぬけれど、日頃から憎體な仁王關でござんすによつて、親方さんの志しとあ

んまり心が違ふゆゑ、つい引比べて言ひましたのさ。

お浪　それならばよいけれどちよつと聞いた話しもあれば、わたしはどうぞしはせぬかと、實にびつくりしましたわいなあ。

明石　えゝ女といふものは愚癡なもの、餘計な氣をば揉みをるわえ。

早瀧　そりやあ女は當りめえ、亭主のことで氣を揉むのはこりやあ女の習ひだ、なうお浪どん。ときに志賀之助、貴樣にちつと密々に話さにやならぬ事があるが、みんな内輪で仔細はなけれど、少し他聞を憚ること、ちよつとの間二人をば。

明石　承知しました。これお浪、朝霧、何か師匠が内々の話しがあると言はつしやるから、二人とも少しの間奥へ行きやれ。

お浪　あい〳〵、丁度わたしもお寺參りをした儘ゆゑ、御燈明を上げませうわいなあ。

朝霧　わしも仕掛けた用もあれば、

お浪　そんならゆるりと、親方さん、

朝霧　用があつたら呼んで下され。

早瀧　手間取ることはない程に、少しの間ぢや許さんせ。

〽師匠の詞兩人は、心も跡に奥の間へ、打連れてこそ入りにける。

ト朝霧お涙は心の殘る思入あつて奥へはひる。

〽跡先見廻し丈之助、明石の前へ摺寄つて、

ト早瀧奥口を窺ひ、思入あつて明石の側へ住ひ、合方になり、

早瀧　藪から棒に、つかぬ事をいふやうだが、こなたの病氣の起りといふは、今日で僅か五日か六日、熱氣が強く魘されたり又は譫言、おこりぢや瘧ぢやといふては居れど、どうもおれが考へでは、たゞの病とは思はれぬ、と言つたら氣にも掛けるだらうが、是れも貴様を思へばこそ、決して惡うは聞いてくれるな、それに附いてあの二人を遠ざけたといふ話しは、貴様は今月七日の夜に、極樂寺繩手を通つたであらうの。

明石　はい、雪の下から戻りがけ、日暮れて繩手を通りましたが、それがどうぞしましたかな。

早瀧　いよ〳〵そちは通つたの。

明石　何でお前に嘘僞り。

〽心附かねば志賀之助、ずつかり言へば摺寄つて、

早瀧　斯う根問ひをしておいて、そちにちひと見せる物がある、といふのは外でもない、おれもあの夜

に通り掛り、往來稀なるあの繩手で、拾つたものがあるゆゑに、ちよつと貴樣見てくりやれ。

〽と言ひつゝ取出す手拭に、如何なる譯と志賀之助、不審さうに差覗けば、

ト此うち早瀧懷中より、誂へ月に波の模樣の手拭を出す、明石不審の思入、

此手拭、貴樣覺えがあらうの。（ト明石に見せる。）

明石　如何にもそれは、わしが手拭でござりまする。

早瀧　月に波の縫取りは、難波土産におれが遣つた、人も目につく此手拭、あぢな所で拾うたわえ。

明石　此間雪の下から、歸りにどこでか落したが、さうしてそれを拾つた所は。

早瀧　さあ聞きやれ、行司仲間の寄合で梅が谷から戻りがけ、通り掛つた極樂寺の繩手へかゝる闇まぎれ、まだ生々しい切られた死骸、その傍らで拾うたが、貴樣通つた其時に、其死骸があつたであらうの。

明石　へい、死骸のあつたは見ましたが、主は誰とも宵闇ゆゑ、むごいことをば仕をつたと思つたばかりで其夜は歸り、夜明けて聞いてびつくりしたは、女房が親の宗庵どの、それと知つたらあの時に、尋ねて見たら手掛りが、あつたらうにと思つたが、悔んで返らぬ後の祭り、それから死骸を引取つて葬むつては遣りましたが、其晩からのわしの大熱、たうとう瘧と名が附いて、功德と思

つて世話やいたが、其の返禮が此煩らひ、實に情の罪科ではござりますよ。

早瀧　まあ〳〵、さう聞いておれも安心はしたものゝ、それに附けても此手拭、其晩にも持つて來て貴様に遣らうと思つたが、何をいふにも所が所、死骸の側にあつたので白地に染みし此血汐、人目に立つては惡いから、實は今日まで延ばして居たのだ、然し貴様が潔白なら、おれも案じる所はねえ、まあ此手拭を納めてくりやれ。

明石　いやもう、御親切なる師匠の詞、そんなら是れはしつかりわしが。

早瀧　この上ともにそんな物は、落さぬやうに氣を附きやれ。

明石　はい、有難うござりまする。

〽元より覺えは白地なる、手拭渡せば何氣なき體に見ゆれど早瀧も、胸におろせし丈之助。

ト早瀧もしや殺しはせぬかといふ思入あつて、

早瀧　これ明石、決して腹は立てなぢやが、拾うた場所が場所ぢやゆゑ、もしや舅の宗庵どのを。

明石　あはゝゝゝ、案じて下さるは有難いが、そんな卑劣な心のある明石ぢやござりませぬぞえ、何でその様な非道なことを。（ト少しむつとせし思入にていふ。）

早瀧　さゝ、そりやさうぢやない、さうでないのは知れてあるが、拾うた場所が惡いのに、血汐の染み

た其手拭、畢竟おれが拾うたればこそよけれ、もしも他人の手に入らば、言はずと直に人殺し、

〽と思はず高聲口に袖し

まゝ師匠のおれが拾うて仕合せ、覺えがなければ先づ目出たい。おれもそれで安心した。然し血汐の染みた手拭、必ず人に見られぬやう、しつかりとしまうておきやれ。

明石 はい、しつかり仕舞うて置きます程に、決して案じて下さるな。

早瀧 それで重荷を下したやうだ。どりや、おれも馴染の男どの、せめて香でも手向けて進ぜう。これ明石、愚癡なことといふ男と、跡で笑うてくれるなよ。

〽手輕な詞も生業の意氣にはいへど心の内、もしやと晴れぬ疑ひの、心ならずも納戸口、思ひを殘して入りにけり、あと見送りて志賀之助、ほつと一息吐息をつき、

ト早瀧よろしくこなしあつて、暖簾の口へはひる。明石跡を見送り思入あつて、

明石 今師匠の詞では、どうやらおれが宗庵どのを、殺しはせぬかとあの疑ひ、そりやあ思ふも尤もだ、どうして其場へ落したか、思へばあの時繩手にて、怪しい奴に出逢つたが、それを話してもしひよつと、疑ひでも受けてはと、言はずに居たのがこつちの誤り、あゝ隱し事は出來ねえものだなあ。

〽先非を悔いたるかこち言、かゝる折から市郎兵衛が妻のおすまはいきせきと、供に連れたる仁太郎が、つゝ包み片手に門の口。

ト此浄瑠璃へ通り神樂を冠せ、花道よりおすま世話女房、好みのこしらへにて出來り、跡より仁太郎奴がゝりし鬘、縞物の着附、尻端折り子分のこしらへ、風呂敷に包みし折を持ち出て來り、直ぐに本舞臺へ來て仁太郎門口を明けて、

仁太　へい關取、今日は。

明石　おゝ誰だ、仁太郎か。

すま　兄さん、お前そこにおいでなさるかいなあ。

明石　誰かと思つたら妹か、さあ〳〵こつちへはひるがいゝ。よくまあ、來てくれたなあ。

〽隔てぬ中の同胞は、わりなく見ゆる挨拶なり。

ト おすま内へはひりよろしく住ふ。仁太郎折を出して、

仁太　關取親分がよろしく申しました、御病氣は如何でござりますか、段々よろしい方でござりますか、お案じ申しましてござりまする。

すま　ほゝゝゝゝ、よく丁寧に口上を覺えて來やつたなう。

仁太　すつかりさらつて來ました。おつと、まだある／＼。（ト折を出して、）扨はや、これは詰らぬ物でござりますが、關取のお口には合ひますまいけれど、お見舞でござりまする。（ト慇懃に口上を言つて、）もう、これでわしが役は濟みました。

明石　はゝゝゝ、いつもながら氣さくでいゝ元氣だ。妹こんなことをせずともの こと、市郎兵衞によく言つてたもれよ。

すま　何やらさもしい物なれど、ぬしが心にかけて、あれに持たせてよこしたわいなあ。

明石　これお浪や／＼、ト此うち明石奥へ向ひ、妹が來た、ちよつと來てたも。（ト奥にて、）

お浪　あい／＼。

〽あいと答へて女房は、とつかはとして出來り、（ト奥より以前のお浪襷を取りながら出來り、）

これはまあおすまさん、よう來て下さんしたなあ。おや仁太郎さん、お供かえ、大きに御苦勞でござんしたなあ。

すま　わたしも此中から、兄さんの病氣と聞いたゆゑ、ちよつと見舞がてら來ようと思へど、知つての通り人出入りの多い家ゆゑ、何やかやと用の多いので、つい御無沙汰になりましたわいなあ。

お浪　いえもう、それはお互ひのことでござんすわいなあ。
明石　お浪や、市郎兵衞の所から見舞物をくれた、よう禮をいうてくりやれ。
お浪　さうでござんすかいなあ、いつもながら市郎兵衞さんに、お氣の毒でござりますわいなあ。
すま　何のまあお禮で痛み入りまする、それにつけてもお浪さんえ、お氣の毒なはお前のとゝさん、ひよんなことでござんして、嘸まあ力落しでござんせうわいなあ。
お浪　はい推量して下さんせ、どういふ因果な生れやら、たつた一人の妹には生別れ、又とゝさんはあのやうな、病み煩ひでもあることか、人手にかゝりあへない最期、便り少なう思ふところへそれからしての主の煩ひ、わたしやどうやら心細うて。（ト愁ひの思入あつて）おすまさん、推量して下さんせいなあ。
〽悔み歎けば妹も、道理に迫る共涙、氣を取り直し勵まして、
ト　お浪愁ひの思入、おすま尤もだといふこなしあつて氣な取直し、
すま　そのお歎きは道理でござんすが、是れも悔んで詮ないこと、又兄さんの病氣ぢやとて、言はゞ當座のことでござんす、必ずともに案じぬがようござんす。お前なりわたしなり、親兄弟も便りなれど身の固まつた上からは、女子の身では亭主が力。わたしなどもこちの人市郎兵衞どのが便り

でござんす。おゝ市郎兵衛どのといへば、主もお前によう言うてくれと、言傳を言はしやんしたわいなあ。

お浪　有難うござんすわいなあ。

〽果ては互ひに奥底も、納戸の内より朝霧が、加減の藥手にさげて、茶碗携へ立ち出て、

ト朝霧藥鍋をさげ出來り、おすまを見て、

朝霧　おゝこれはおすまさま、ようまあお出でゝござりました。

すま　島蔵さん、いつもながらお健かでお目出たうござんす。さうしていろ〳〵兄さんのお世話、有難うござんすわいなあ。

朝霧　何のまあ、世話して下さる師匠のこと、何で禮いふことがござりませうぞえ。關取、丁度藥が呑み加減、呑み憎うても呑んで下さりませ。

明石　おゝ藥が出來たか、御苦勞であつた。又苦い顔をせずばなるまいかえ。

お浪　もしこちの人、其お口直しに市郎兵衛さんから下さんした、此折を開かうではござんせぬか。

明石　成程さうぢや、おすまにもお持たせのお茶うけぢや、ちやつとそこへ開いてくれ。

お浪　あい〳〵。

〽と心得お浪が杉折の、あたふた明くれば、菓子ならで、中より出る封じ物、

ト お浪折を引寄せ蓋を取る、中に封じたる書物ある、皆々不審の思入、

やゝゝゝ、中には菓子は一つもなく、何やら書いたものがござんす。

明石　なに折の中に書いた物とは、はて心得ぬ。これには何か仔細があらう、これ妹、そなた中を開いて見やれ。

〽といふにおすまは心ならず、封じとく〱打見やり、

すま　何々、「去狀の事」、えゝ。

〽びつくり驚くおすまより、志賀之助は差寄つて、

明石　なに去狀の事とは、ドヽちよつと見せろ〱。(ト明石去狀を取る、お浪朝霧心得ぬ思入、)誠に是れは市郎兵衞が、自筆で書きし此の去狀、是れには何ぞ深い仔細が。

ト明石思案の思入、おすまお浪朝霧はたゞ茫然とせしこなし、此前方より市郎兵衞男達好みのこしらへにて下手より出て、門口に樣子を窺ひ居て、此の時、

市郎　おゝ、仔細がありやこそ、去つたのだわ。

すま　や、あの聲は。

市郎 如何にも、夢の市郎兵衞だ。

〽言ひつゝはひる市郎兵衞、四邊見廻し座になほれば、女房見るより走り寄り、

ト市郎兵衞思入あつて内へはひる、おすまこなしあつて側へ行き、

すま もしこちの人、市郎兵衞どの、何でわたしを去るのでござんす、あいわたしや去られる覺えはない。お前は氣でも違うたかいなあ。

市郎 えゝやかましいわえ、飽いた女房を亭主が去るに、何としたのだ。

〽ずつけり言へばお浪は摺寄り、（トお浪側へ行き、）

お浪 モウシ市郎兵衞さん、こりやまあどういふ譯でござんす、腹の立つこともあらうけれど、どうぞ堪忍して上げて下さんせいなあ。

市郎 えゝ、何もお前方の知つたことぢやあない、氣に入らぬから去つたのさ。

朝霧 もし〳〵親分、お前それぢやあ分らねえといふものだ、内の師匠に科はなし、何も爰へ去狀突附け物々しくなさらずとも、どうか話しもござりませう、殊に師匠も病氣のこと。

お浪 ほんにさうでござんすとも、濟まぬことがあるならば、うちの人とも相談して、

朝霧 どうぞ機嫌を直して、

お浪　下さんせいなあ。（ト兩人にて宥める、市郎兵衛默つて居る、仁太郎前へ出て、）

仁太　おい〳〵親分々々、お前何でそんな事を言ひ出したのだ、紫若おすまと鎌倉で一といつて二のねえ器量、女ばかりか諸事萬事、どこに一つ拔目のねえ金箔附きのお上さんを、去らうといふのは料簡違ひだ、女房冥利が盡きやすぜ、こいつあ親分筋が惡いぜ。

市郎　えゝやかましいわえ、わいらの知つた事ぢやあねえ、すつこんで居やあがれ。

仁太　それでもお前。

市郎　まだぬかしやがるか。（トきつと言ふ、是れにて仁太郎跡へ下る。）

〽仔細ぞあらんと志賀之助、たゞうつ向いて居たりしが、進み出て膝立て直し、

ト明石思入あつて前へ出て、

明石　市郎兵衛どん、今まで默つて聞いて居たが、何科あつて妹を、去狀附けて戻したのだ。其仔細を聞かうかえ。

〽病中ながらきかぬは關、どつさり居直るお家の眞中、市郎兵衛も摺寄つて、

市郎　科の次第を一々にいふもいらねえ口に風、愛想が盡きて去つたのだ。

明石　そりやあ足らはぬおすまゆゑ、こなたの氣にも入るめえが、どういふ仔細か其仔細を、聞かにや

お妹は受取られねえ。

市郎　それぢやあ言つて聞かせようか、愛想の盡きたその譯は、先づ第一が朝寐が好き、五ツ前から起きるのは芝居を見に行く時ばかり、起きりやあ楊枝に半時かゝり、うがひをつかつて其儘に火鉢の側へ御輿をするゑ、横のものを縦にもせず、仕事が嫌ひ世辭が嫌ひ、好きなものは買喰と按摩と晝寐に宵ッ張り、おまけに酒と花合せ、取得は面の綺麗なばかり、何ぼ年中宵越の錢を持たねえ達師でも、世帶の爲にならねえから、去状附けて返したのだ。

〽口から出任せ言ひたいがい、おすまは聞くよりせき立つて、

すま　もしこちの人、市郎兵衛どの、いやになつたと言はしやんすりや、元より足らはぬわたしゆゑ、あきらめもしようけれど、

〽此身に覺えもないことを、並べ立てゝの言ひたいがい、何ぼ親身の兄さんでも、さういふ事があつてはと、思はれるのが恥かしい。

取りわけて又お濱さんは、女子同士に此顔が、

〽面目なうて合されぬ、こんな無い名を附けられては、わたしや去られぬ〳〵と、夫の膝に取附いて恨み涙に暮れにける、市郎兵衛も不便なと心に思へどあらけなく、態と手荒く突放

し、

ト此うちおすまよろしく思入、市郎兵衞も思入あつて、

市郎　覺えがねえも凄じい、見掛が素直に見えるから、誰もさうとは思はねえが、現在亭主の市郎兵衞、おれがいふから間違ひねえ。

すま　まだまあ、そんな事を言うて。（ト立ち掛るをお浪留めて）

お浪　あゝもしおすまさん、待たしやんせ、お前にさういふ事のないは、人が知つて居るわいな。

仁太　おゝ誰よりかわしが知つて居る、朝寐どころか朝などは人より先きへ起きなすつて、そりやあ飯こそ炊きなさらねえが、何から何まで氣の附く姉御、世辭がよくツて仕事がよくツて、按摩や晝寐が大嫌ひだ、酒は元より花合せなどは、手に取つたこともねえ、こりやあ人より居候のわつちが慥な證人だ。

市郎　えゝ此野郎め、小遣ひに一分ツつも貰ふとこから、おつウごまをすりやあがるな。

仁太　なにごまをするものか、さういふ親分お前こそ。

市郎　又口出しをしやあがるか。（ト仁太郎の天窓をくらはす。）

仁太　あゝ痛え、またぶたれたか、大神樂のおしな同樣だ。（ト控へる。）

明石 〽始終を聞いて志賀之助、（ト明石思入あつて、）成程貴樣のいふ通り、さういふ越度があつた日にやあ、妹を去るも尤もだ、親なき後は兄が親、如何にもおれが引取らう。

市郎 それぢやあしつかり返したぞ。

明石 念にやあ及ばぬ受取つた。

すま あゝもし兄さん、わたしやあんな名を附けられては。

明石 はて、おれが呑込んで居るわえ。

すま それぢやというて。

お浪 まあ何事もこちの人に、任せておかしやんせいなあ。（トお浪おすまを留める。）

明石 妹を離縁するからは、是れまで結んだ兄弟の、緣もおぬしやあ切る氣だらうな。

市郎 知れたことだ、女房を去りやあ、あかの他人、兄弟分も今日ぎりだ。

〽言ふを明石は聞き咎め、

明石 そりやあちつと、違ふだらうぜ。

市郎 なに、違ふとは。

明石　妹をやらぬ其先きから、兄弟分になつた中、妹はともあれ此おれと、緣を切らうと云ふからにゃあ、おれにも何ぞ愛想が盡きたか。

市郎　おゝ、愛想が盡きた。

明石　なに、盡きたとは。

市郎　見掛け倒しな關取ゆゑ、ふつ〳〵おらあ愛想が盡きた。

朝霧　なに、見掛け倒しだとは、何で師匠が見掛け倒しだ。（トきつとなるを、）

明石　これ〳〵朝霧、だまつて居ろ、口がふえてやかましい。

朝霧　それだと言つて、あんまりな。

明石　はてまあ、控へて居ろといふに。（ト朝霧を留めゝして、）見掛け倒しとは。

市郎　むゝ、男がようて柄もあり、どこへ出しても大關だが、形に似合ず肝が小せえ。

明石　何と。（トきつとなる、誂への合方になり、市郎兵衞思入あつて、）

市郎　賴朝公の嚴命で、鎌倉御所の上覽相撲、その大關を勤めるは相撲冥加にかなつたこと、願つたとても出來ねえ譯だ、繫がる緣のおれでせえ飛立つ程に嬉しかつた。どうぞ手柄がさしてへと力ッ瘤を入れて居るに、病氣といつて引いたきり、そりやあ東の大關が名におふ仁王仁太夫ゆゑ、金

剛力があらうけれど力ばかりで角力は勝てねえ、四十八手の手をくだき魂膽工夫をしたならば、假令相手が鬼神でも勝てねえことがあるものか。それを恐れて俄の病氣、この大關を關脇で勤められちやあ一生涯、田舍は知らず鎌倉の場所へ再び出られめえ、相手の仁王がこはいのか一寸遁れは卑怯なことだ、貴樣は寐て居て知るめえが、志賀之助の病氣といふは相手の仁王に恐れてだ、臆病ものだ卑怯ものだと、湯屋髮結床の評判を、聞く度々に兄弟の縁を結んだおれが悔しさ。これ、此胸がにえ返るわい。

〽拳を握り市郎兵衞、臆病未練と口にはいへど、目に持つ涙打ち拂ひ、

ト此うち市郎兵衞よろしく思入あつて、

さあ、おれなら假令死ぬまでも、此相撲を取らにやあおかねえ、それを病氣を言ひ立つて引込んでゐる臆病者、見掛け倒しといつたが無理か、斯ういふ卑怯な心と知らず、兄弟分になつたがあやまり、女房を去つて縁を切り、他人にならにやあ市郎兵衞も男を磨く稼業だけ、世間へ面が出されねえ、これからおれも共々に惡くいふからさう思へ。(ト明石だまつて居る。)これ程おれに言はれても、悔しいとは思はねえか。いやさ、死んでも今度の上覽相撲、取らうといふ氣にならねえか。(ト明石やはり默つて居る。)えゝ、見下げ果てた腰拔けだなあ。

〽胸に一物市郎兵衛が、切つて放せし惡口に、おすまを始め人々も手に汗握るばかりなり。

ト市郎兵衛思入にていふ、明石はぢつとうつ向き居る、朝霧悔しきこなし、皆々思入あつて、

すま　あゝもし、そりや何を言はしやんす、是れが病氣でないならば卑怯でもござんせうが、病氣は仕方がござんせぬ。

お浪　嘘僞りをいふやうな、そんな夫ぢやござんせぬわいな。

市郎　卑怯でなけりやあ潔く、なぜ上覽相撲を取らねえのだ。

お浪　それぢやというて病氣ゆゑ。

市郎　えゝ、其の病氣が氣に喰はねえ。

明石　これ〳〵、おすまもお浪も默つて居やれ、たとひ何と言はれても、瘧の病で立合ひの出來ねえのがおれが不運、男を磨く稼業ゆゑ、外聞惡くば兄弟の、緣も今日ぎり切つてやらう。

市郎　おゝ其一言を聞く上は、あかの他人の市郎兵衛に、これ程卑怯といはれても。

明石　病氣ゆゑなら仕方がねえ。

市郎　えゝさういふ心ぢやなかつたが、（ト市郎兵衛ホロリと思入あつて氣を替へ）えゝ見下げ果てたことだなあ。

明石　卑怯未練といはれても、所詮仁王に勝たれぬ病氣、何とでも言へ〳〵。
市郎　言はねえでどうするものだ、腰拔けも腰拔け大腰拔けめ。
朝霧　こりやもう料簡が。
明石　あゝこれ、何事もおれが病氣、聞き流しにしておきやいの。
朝霧　えゝ忌えましい。（ト朝霧口惜しき思入、市郎兵衛も思入あつて、）
市郎　さあ、斯う言はれるが悔しくば、一世一度の晴れ相撲、上覽場へ出て死ぬがいゝ、人は一代名は末代、土俵で死ぬのは戰場で武士が死ぬのも同じこと、然しこなたの性根ぢやあ、なか〳〵さういふ意地はあるめえ、顏を見るのも、（ト明石を見てぢつと思入あつて氣を替へ、折を蹴返し、）小癪に障らあ。

〽苦り切つたる一言も口と心の裏表、斯くとも知らぬ朝霧が、拳を握り口惜し淚、女房々々ははアはツと氣はあせれども銘々の夫の心汲み兼ねて、起つたり居たりおろ〳〵淚、市郎兵衛は見向もせず、

ト此うち明石は腕組をなし思案の思入、朝霧は口惜しき思入、おすまお淚も氣を揉むこなしよろしく、市郎兵衛思入あつて、

市郎　あゝ是れでさつぱり兄弟の、縁切つたればせい〴〵したわえ。やい仁太郎、手前はおれと一緒に歸れ。

仁太　それでもお前、姉御のことが。

市郎　えゝ、何をぐづ〴〵吐かすのだ、歸れといつたら歸らねえか。

仁太　おい、今行きやさァね。

　トぐづ〴〵言ひながら、おすまに會釋をして門口へ出で、市郎兵衛の履物を直す、市郎兵衛悠々と門口へ出て、

市郎　これ志賀之助、女房は元より兄弟の縁を切りやあかの他人、卑怯未練な根性でも一寸の蟲にも五分の魂、少しやあ悔しく思ふなら、神や佛の力を借り、こなたが命を切りに賭け、上覽相撲を取つた上、相手の仁王を投げたらば、おれも男だその時は、命を纏頭にくれてやらう。（ト憎く言ひ、）さもねえ事なら今日限り、是れが互ひの顔の見納め。（トおすま側へ行き袖をひかへ、）

すま　そんならどうでも、わたしをば。

市郎　去つた女房に。

すま　もし。（トおすま袖を控へる市郎兵衛袖を振拂ひ、）

市郎 用はねえわえ。(ト門口をしめる、おすまワッと泣伏す、市郎兵衛ちつと思入。)

〽怒りを外にあらけなき、詞に慈悲のこもるとは、夢にも誰か市郎兵衛、肩臂いからし立ち歸る。(ト市郎兵衛思入あつて仁太郎附いて花道へはひる。)

〽行く間おそしとおすまは駈け出で、(トおすま立上り、)

すま どう思ひ直しても、最一度ぬしに逢うた上、存分言はにやならぬわいなあ。

お浪 そりやさうでもござんすが、又とつくりとうちの人に、相談をした其の上で。

すま いえ〳〵わたしは市郎兵衛さんに、逢はねば心が濟まぬゆゑ。

お浪 それぢやというて、お前一人は。

すま 一人で大事ないわいなあ。

〽と小褄引きあげ女房は、夫のあとを慕ひ行く。

トおすま帶を引しめ逸散に花道へはひる、お浪は心の急く思入あつて、

お浪 もし〳〵こちの人、おすまさんが市郎兵衛さんの、跡を追うていたわいなあ。たつた一人では心許ない、わたしは跡から追附いて、見屆けて來る程に、朝霧さん頼んだぞえ。

朝霧 家の事はようござんす。ちつとも早くいて下され。

お浪　こちの人、いて來るぞえ。

朝霧　あゝもし、期を延ばしては心遣ひぢや。

お浪　そんなら跡を、

朝霧　そりや呑みこんでをりますわえ。

〽心殘して妹の跡、慕うてこそは走り行く。（トお浪おすまの跡を追うて花道へはひる。）

〽是れまで怺へし朝霧が、明石の側へにじりより、

もし關取、わしや悔しうござります、悔しうござりますわえ、どうぞ相撲を取つて下さりませ、どうもさうせにやもし關取、お前の男がすたりますわえ。（ト悔し泣きに泣く、明石も思入あつて、）

明石　おゝ、今市郎兵衛がいうたのは、無理とは思はぬ道理だらけ、幾らせい腹揉んだというて、此病氣にやあ勝たれぬわえ。

朝霧　いゝやそりやあ大丈夫だ、わしが病氣を直します、きつと本復させますするわえ。

明石　えゝまだな事いふ男ぢやわえ、名ある醫者さへ持てあます、此の病氣が貴様の業で。

朝霧　あい直します、なかく醫者や藥では、さうてきぱきと行かぬは承知、この朝霧が一心で、かねてお前も信心する不動樣へ願籠めして、假令此身の壽命をばつめてなりとも關取の、一度病氣を

本復させせにやなりませぬ。なあに此朝霧がこれまでに、出世したのも師匠のお蔭、其恩返しにやあ島蔵が、命一つは何でもねえ、必ず案じさつしやるな。

明石　そんならおれに成りかはり、不動尊へ祈誓をかけて。

朝霧　おゝ、裏の井戸にて垢離を取り、成田の不動を一生懸命。

明石　此明石も共々に、床に掛けたるあの畫像へ、一心こめて祈念をなさん。

朝霧　わしは是れより勝手の井戸で。

明石　ちつとも早く、

朝霧　おゝ合點だ。

〽一心込んだる朝霧は、勝手を差して走り行く。（ト朝霧よろしくこなしあつて奥へはひろ。）〽引違へて一間の障子、いかつげに押明けて立出る丈之助、物をも言はず表の方、出て行く裳を明石は引留め

ト上手の障子を明け、以前の早瀧出て、よろしく思入あつて、明石の前を通り、門口へ出ようとする、明石早瀧を留めて、

明石　あゝもし親仁さん、もう歸らつしやるのでござりますか。

早瀧　おゝ歸るとも〳〵、こんな家にや長居はならぬわえ。
明石　そんなら、何かの樣子をば。
早瀧　おゝ聞いた、なんぼ逆上せて居る耳でも、筒拔けな惡口雜言、ありや市郎兵衞が尤もだ、おれにしろ腹を立てるわえ、おれも師弟の緣切つた、さう思うて貰はうわえ。
明石　えゝそりや又何で師弟の緣を。
早瀧　えゝ言ふな明石、幾らそちが隱してもそれと知れたる人殺し、聞けばあの時舅どのが金目の品を所持とやら、男を磨く鬪取が慾に耽つて現在の、舅を殺して濟まうと思ふか。(トいふを明石留めて、)
明石　あゝもし、そりや元より覺えのないこと、全く以て舅どのをば。
早瀧　いくら貴樣が隱しても、天道樣はおそろしい、あれ程慥かな證據があるわえ。
明石　さゝ、假令證據があつたにせよ、何でそんな邪をば。
早瀧　えゝ聞く耳もたぬ、穢らはしいわえ。(ト明石を突きのけ、早瀧門口へ出て、)もう出はひりも是れぎりぢやぞ。

〽と言ひ放ちたる一徹に、難題何と言譯も、それと明石が身の災難、暫し途方に暮れの鐘、
ト早瀧は門口へ出て、そつと內の樣子を窺ひ、思入あつて下手へはひる、明石ほつと當惑の思入、時の

鐘になる。

明石　ヱ今日は如何なる悪日か、身にふり掛る難題も一度ならず二度三度、四鳥に搦む男の横死、言譯しても證據の手拭、もう志賀之助が命の年明き、生きても詮ねえこの病氣、時もあらうに上覧の相撲の日取顔觸れが極つた晩から此の煩ひ、朝夕祈る摩利支天、相撲の祖神も見放せしか、全く男を害せぬ譯、また二つには上覧を卑怯で延ばさぬ此身の言譯、幸ひ女房が歸らぬ間に、何かの事をたゞ一筆、さうぢや〳〵。

〽有合ふ硯引寄せて、おろす墨には艶あれど、さめ果てし身の繰言を、たれ白紙へ書殘す。

ト此文句のうち明石有合ふ硯箱を出し、墨をすりかゝる、此仕組よろしく知せに附き、道具廻る。

（朝霧水垢離の場）――本舞臺三間の間上手へ寄せて九尺の二重、正面一面の板羽目、上手も板羽目、中窓この棲障子建切り、下手折廻して太き繩すだれ、平舞臺よき所に車井戸、上手二重へ惣銅壺の竈、釜茶釜をかけ其脇置流し、水瓶、向うの羽目へ荒神棚、燈明上げてあり、上手へ寄せて引窓の心にて、上より細引をおろし、總て志賀之助内臺所の模様、爰に以前の朝霧素裸にて白手拭の鉢卷、晒布の腹卷をして、車井戸にて水を浴び垢離を取つて居る、此仕組よろしく三重にて道具留る。

〽一心不亂に島藏が、師匠の病氣直さんと、水行なすこそ頼もしき。

ト朝霧よろしく垢離を取つて拍手を打ち、

朝霧　南無大聖不動明王、師匠の病氣全快なさば、我が一命を捧げ申さん、願望納受なさしめたまへ、南無大聖不動明王。

〽またも立寄る車井の、水汲みあげてざんぶと浴び、汲みあげ〳〵一生懸命、かゝる所へ小蔭より窺ひ寄つたる金剛彌太八、物をもいはず後よりむんずと組めば朝霧が、邪魔ひろぐなと小腕とり、何の苦もなくづでんだう、見向きもやらず井戸繩をたぐれば又も組附く金剛、こなたは心得身を捻れば、兩手解れて眞うつむけ、起きる所を天窓からざんぶり浴せる一釣瓶、いらつて一腰拔き放し切つてかゝれば身をかはし、打込む利腕しつかと捉へ、

ト此うち朝霧は水を浴び祈念をなす、よき時分に以前の金剛尻端折り、一本差しにて下手の繩簾より窺ひ出て朝霧に組附く、朝霧は水を浴びながらよろしく立廻り、トヾ金剛の切つてかゝるをちよと立廻つて金剛の利腕を取り、

やい金剛、わりや仁王に頼まれたか、小いやらしい刃物三昧、張り殺すのは造作もねえが、祈念の場所の穢れを思ひ、助けてやるがこせ〳〵と、又手を出すが面倒だ、幸ひ爰へ暫しのうち。

ト金剛を捻ぢあげ、引窓の紐にてぐる〳〵巻きに縛りにかゝる。

金剛　あゝこれ、どうするのだ〳〵。

朝霧　えゝぢつとして居ろ、おれが水行済んでから、始終を告げて歸してやるわ。（ト金剛の刀を取り下におき、トゞ縛りあげ、又井戸の側へ來り水を汲み上げ、）南無大聖不動明王。

〽またも汲みあげ祈念をなす、繩引き切つて金剛が、性懲りもなく切りこむを、しや面倒なと張飛ばし、ひるむ所を蹴返せば、流しに辷りつる〳〵、又も切り込む一刀をばもぎ取る暇も荒行の、祈念に怠りなかりける。

ト此内金剛縛られながら足にて刀を取り、細引を引切りまた朝霧に切つてかゝる、立廻りのうち見事にかへる。朝霧切れたる細引を取り又金剛を縛らうとする、是れを振拂つて又切り込むを、朝霧金剛の刀を取る、それをと掛るを見事に投げる、是れにて金剛四ツ這ひになる、此上へ朝霧どつかと腰をかけ、右の手に細引左の手に刀を持ち、不動の見得、やはり床の送りにて道具廻る。

（元の座敷夜の場）――本舞臺元の道具、爰に以前の明石行燈をともし、經机の上へ佛檀の蠟燭を立て此そばへ床にありし竹の花活をおき、一腰を引附け書留を書きしまひたる模樣にてよろしく道具留る。

と床の合方になり。

明石　あゝよく人のいふ事だが、成程師匠は弟子を思ひ、弟子は師匠を思へばこそ、まだまあ餘寒で冷えるのに、おれが病氣を直してえと水行なして一心不亂、其親切は有難えがどうも死なにやあならねえ仕儀。これ朝霧、必ず恨んでくれるなよ、障りのねえうちさうだ〳〵。

〽諸肌押脫ぎ一腰を、拔き放して金色を、ながめるうちに朝霧が、祈念終つて立出る、樣子見るよりびつくりなし。

ト明石肌を脫ぎ一腰を引拔く、此途端暖簾口より朝霧出來り、明石の樣子を見てびつくりなし、刀を持つた手を押へて、

朝霧　關取、これさ師匠、お前こりやあどうしなすつたのだ。

明石　是れには段々譯のあること、邪魔せずと、こゝ放せ。

朝霧　いゝや、どうしてこれが放せるものか。

明石　えゝ放せ。

朝霧　いゝや放さぬ。

明石　えゝ放せといふに。（ト朝霧を突飛し、又死なうとするを朝霧かじり附くゆゑ、明石じれたるこなしにて。）

朝霧　えゝ退け〳〵。（ト思はず立廻つて朝霧を下へすゑろ、朝霧この樣子を見て、）

朝霧　や、關取、お前が今の立振舞ひ、不斷に違はぬ此體は。

〳〵と言はれて明石は手足を踏みしめ、起つて見居て見五體を撫で、（ト思はず一腰を下におき、）

明石　おゝ、精神すゞしくなつたる上、日頃に替らぬ我が力。

朝霧　これぞ全く祈誓をかけし、

明石　不動尊の御利益なるか、

兩人　ちえゝ忝けない。

〳〵と悦び合ふこそ道理なる、朝霧はた〳〵笑顏をつくり。

朝霧　もし關取、お前が病氣が直つたる力試しにわしを相手に、

明石　地取りの稽古をして見ようか。

朝霧　おゝそんなら取るぞや。

明石　おゝ、來い〳〵。

ト是れより床と下座打合せの合方へ相撲太鼓を冠せ、朝霧肌脫ぎになり、尻を端折り明石にかゝろ、是より、地取りよろしくあつて、朝霧叶はぬ仕組、

朝霧　關取、これぢやあ大丈夫だ。

明石　おれが病氣が本復なし、元の通りの力になりやあ、上覽相撲は期を延ばさず。

朝霧　恥辱を取つた仁王めを、たゞ一摑みに土俵の砂へ。

明石　埋めてやるに何の手間ひま。

朝霧　返す〲も御利益は、

兩人　いや、有難いものだなあ。

〽互ひに悅ぶ其處へ、窺ひ居たる市郎兵衛、行司も共に立ち出でゝ、

ト明石朝霧悅ぶこなし、此以前より門口へ市郎兵衛、おすまを連れ窺ひ居る、上手の障子を明けて以前の早瀧、お浪も共に窺ひ居て、此時皆々前へ出て、

早瀧　志賀之助、樣子は聞いた。

市郎　今の手際を見る上は、

早瀧　あつぱれ大關、

兩人　安心したわえ。（トこれにて朝霧心得ぬ思入、明石思入あつて）

明石　やゝ、お前は師匠の丈之助どの。

朝霧　夢親分もどうしてこゝへ。
明石　妹といひ女房までも。
朝霧　連れて又もや此家へは。
早瀧　歸つて來たも外ぢやあねえ、さつき貴樣に疑ひをかけたる譯もさつぱり分り、其殺しても知れたゆゑ、歸つて見れば今の樣子。
市郎　さつきのやうに此わしが惡口したのも勵みをつけ、悔しいといふ一心で早く病氣を全快させ、上覽相撲に出してえばつかり。
すま　わたしはほんまの事と思ひ、恨みを言はうと行つた所。
お浪　樣子を聞けば今の譯、主の病氣の直つたとは、自慢ぢやないが市郎兵衛さん、並ぶ相手はないわいなあ。
〽夫自慢もどこやらに、貞節見えて奥床し、（トお浪よろしく思入。）
明石　いやも、さう打明けて聞いて見れば、此わしゆゑに師匠を始め、市郎兵衛どのにもいかい心配。
朝霧　わしもあんまり嬉しいので、何とお禮を申さうやら。
お浪　これがほんの親は泣き寄り。

朝霧　有難うございまする。

市郎　斯う打解けたらさつきの去状、（ト有合ふ折の中にある去状を取つて、すん〳〵に引裂き。）さ、斯うしてしまへば元々の、おすまは女房關取とは、相もかはらぬ兄弟分。

すま　さつきの歎きに引替へて、兄弟夫婦打寄つて。

早瀧　明石のやうな弟子を持つた、師匠も是れぢやあ鼻が高いわ。

市郎　たんと自慢をなさるがいゝのさ。（トよろしく思入。）

明石　斯う打寄つた上からは、憚りながら師匠には、わしが病氣の全快屆けを。

早瀧　そりやあおれが呑込んだ。

明石　さゝ是れからは島藏が心を碎いた返禮に、最前仁王仁太夫が手籠めになしたる意趣返しを上覽相撲の土俵の上で。（ト側なる竹の花活を取つて兩手にて捻切り、）まツこの通り。

早瀧　おゝ、出來た。

〽と思はず高聲小躍りし、

褒めてくだんせ、へゝ、どんなもんぢやえ。（ト早瀧思はず立上つて手を擴げる。）

市郎　イヨウ〳〵こちの、

三人　親方さま。

明石　むゝ、はゝゝゝゝ。（ト笑ひながら力足を踏む、これにて皆々よろ〳〵となる。）

〽ゆゝし勇まし。

ト明石其中にて土俵入の形、朝霧この脇へ以前の刀をもつて中腰になる。早瀧明石の座蒲團の上へ胡坐をかく。市郎兵衛下手にて扇を出して明石を褒める思入。おすまお涙は感心の思入。此の仕組よろしく三重にて、

ひやうし　幕

四幕目　新清水の場

〔役名＝明石志賀之助、朝比奈藤兵衛、仁王仁太夫、夢の市郎兵衛、わしの長吉、須磨の浦右衛門、朝霧島藏、船木十太夫、同忰牛七郎、神崎傳內、金剛彌太八、林田伴六、藪坂甚藏、朝比奈子分。江島屋の娘お芳、同下女お繁、友達娘お米等。〕

（新清水花盛りの場）＝本舞臺三間の間一面の清水の舞臺、朱塗りの高欄、鍍金金物、正面破風造り、これへ新清水といふ見事なる額を掛け、一樣に綺麗なる書割、此下手へ誂への傘を附けし奉納の額、眞

中石段、此側へ石の手水鉢、諸所に櫻の立木、日覆より櫻の釣枝二段におろし、上手へ音羽の瀧、「此櫻折取るべからず」の高札、平舞臺へ毛氈をかけたる床几二三脚並べ、總て新清水花盛りの體、こゝに花見の仕出し、四人○△□◎床几に掛り、吸筒にて酒盛りをして居る。此模樣よろしく双盤通り神樂にて賑かに幕明く。

○　何とよく咲いたぢやあねえか。

△　今年は陽氣が早いから、今が眞ッ盛りだの。

□　此ごろの陽氣ぢやあ、家にぢつとしちやあ居られねえの。

◎　それだから、人の出ることを見ねえ、大層な群集ぢやあねえか。

○　こう〳〵、群集といやあ、昨日頼朝さまの鎌倉御所で、上覽相撲があつたさうだが、大層なことだとよ。

△　さういふ話しだ、何でも止めの角力が、當時日の出の明石關と仁王關だから、こいつ見物事だつたらうよ。

□　さればよ、聞きねえ、あの明石關は此間から、瘧を煩らつて病み擧句の立合だから、てつきり仁王にやられるだらうと思つたところ。

◎ おれも聞いたが、ひつくり返して仁王關をやんやと投げた、其時にやあ御所中が、鳴り響くやうな人聲だつたといふことだ。

○ そりやあ其筈だ、兩關とはいふものゝ、明石關の方が十段も角力が上だ、役者なんぞとは譯が違つて角力の方は腕づくだ、上の角力にやあ勝てる譯があるものか。

三人 そりやあ、其通りだ。

ト捨ぜりふにて、わやわや言つて居る。やはり右の鳴物にて、上手より傳内、伴六、甚藏袴羽織大小にて出來り、後に窺ひ居て此時三人前へ出て、

傳内 やいやいやい、おのれ等は怪しからぬ奴等だわえ、素町人の分際として、身共が屋敷の抱へ角力仁王の事を惡く吐かすとは、途方もない奴等だわえ。

伴六 おのれらが存じた譯ではない、今一言此處に於て、仁王がことを蔑して見ろ。

甚藏 一刀の下に切りさげるぞ。わいら四人のうちで、どいつがたんと惡く吐かした、そやつをこゝへ引き出せ、眞ッ二つにいたしてくれる。

四人 へいへい御免なされませ、お許しなされて下さりませ。

傳内 えゝ面倒だ、四人ながら引摺つてござらつせえ。(トきつと言ふ。)

四人　こりやあ大變だ、逃げろ〳〵。（ト四人は慌てゝ下手へ逃げてはひる。跡合方、通り神樂になる、）

伴六　扨々町人などゝ申すものは、意氣地のない者でござるわえ。

甚藏　左樣でござる、新刀を試すは今此の時、梨割り胴切りから竹割り、事の見事にぶッ放してやらうと存じたに、ハテ殘念至極の儀でござつたわえ。

傳内　是れと申すも昨日の角力に、仁王が負けたばッかりに、掛り合ひもない匹夫にまであのやうな事を申されては、抱へ屋敷の恥辱になれば、斯樣いたして歩くのも、何だか肩身が狹いやうでござるわえ。

伴六　左樣でござる、一昨日までは何處へ參つても、ほん〳〵ほん〳〵申して仁王のことを褒めそやして、自慢たら〳〵申したゆゑ、猶々人に顏合すも、面目ないやうな心持でござるわえ。

甚藏　いや〳〵其樣に悔んだものでもござらぬ、將棋で負けても碁で勝つ道理、何ぞで明石の小股をすくひ、面を見返すこともござれば、其時こそは肩身を廣く歩きまするわ。

伴六　何さま貴公の言はるゝ通り、鬱いで居つては體の毒、そこらがあきらめ所でござらうて。

傳内　いやなに御兩所、それに附けても仁王關が、昨日のことでもやくやと定めて心も浮くまいと存じたゆゑ、花見がてら一獻の催す約束、もうこゝへ見える筈だが。

甚藏　もう〳〵間もなく參るでござらう、戻りは何れ大磯の廓に於て、天井拔けといふ騷ぎをいたして見たうござるわえ。

伴六　身共はまた唐詩選で美音を聞かせ、婦人の相場を狂はしたうござるわえ。

傳内　これは又伴六殿、貴殿の音聲では、婦人の相場より法華坊主の相場が狂ふでござらうわ。

甚藏　何を仰せられる。

三人　あはゝゝゝゝ。（ト此うち甚藏向うを見て、）

甚藏　神崎氏々々、噂をすれば影とやら、向うより仁王關が見えまするわえ。

傳内　なに、關取の影が見える、どれ〳〵。（ト背延びをして、）成程仁王關だ、おゝい〳〵。

三人　おゝい〳〵。

ト頻りに呼び立てろ、三味線入り大拍子へ通り神樂を冠せ、花道より仁王仁太夫、角力好みのこしらへ一本差し駒下駄、跡より金剛彌太八前幕の裝にて供をして出來り、花道中程まで來るを、舞臺にて傳内こなしあつて、

傳内　よう〳〵、關取來たか〳〵、先程より此傳内其方の參るのを、いつもより背をのばして待つて居つた。

伴六　いやもう、神崎氏を始めとして、我々共も立つたり居たり、

甚藏　今か〱と待つて居つた。

仁王　是れば皆樣お揃ひで、お待受けとは恐れ入る、疾に出かけて來る所ちよつとのがれぬ用事が出來て、つい遲うなりましたわえ。

金剛　いやもう、何時もいらちな師匠ゆゑ、氣を揉んで參りました。

傳內　何の〱其の心配、何はともあれ仁王關。

伴六　櫻の許へ。

三人　ちつとも早く。

仁王　そこへ參るでござりませう。さゝ金剛來やれ。

金剛　あい。(ト やはり右の鳴物にて、仁王先きに金剛附いて舞臺へ來る、三人よろしくこなしあつて、)

傳內　さて〱關取、よう出掛けて來てたもつた。

兩人　待兼ね申した。さゝ、是れへ掛けやれ〱。

仁王　はい〱、構うて下さるな。(ト此うち金剛床几を出し、)

金剛　關取、爰へ掛けさんせ。

仁王　おい〳〵、そんなら許して下さりませ。（ト床几へ掛ける、傳内前へ出て、）

傳內　ときに仁王關、花見の中で述懷も如何ぢやが、返す〴〵も昨日の角力、かね〴〵其方にも頼み置いたに、どういふはずみか負けになつたゆゑ、殿にも兎角御不興にて、仁王が負けは北條家の恥辱なりと殊の外御立腹、今更言つて歸らねど、なぜ勝を取つてはくれなんだ。

仁王　左樣に言はつしやると實に面目もござりませぬが、元より手取りの志賀之助、どうか勝たにやあならねえと魂膽はして行きましたが、病み擧句のことではあり、何の造作はあるまいと氣を許したがわしの誤り、思ひの外に左りをさゝれ一番跳ねてくれべいと揉み切つたれど最初の油斷、少しのことで負けになり、殘念なことをいたしましたわえ。

金剛　いやも勝負は時のはずみなれど、あんまりいつぞや明石の家で、ほん〳〵味噌をあげ過ぎて、あの朝霧めに笑はれるが、癪に障るわけでござりまする。

伴六　これ〳〵金剛、そのやうな事は氣にいたすな、何ぞで意趣は返してやるわえ。

甚藏　假令仁王が負けたりとも、我々共が肩持てば、明石の面を見返す手段は、又外にさま〴〵あるわえ。

金剛　どうかせめての腹癒せに喧嘩でもぶツ掛けて、足でも掬つてやりませねば、どうも腹がいえませ

ぬわえ。(トたけりたつて言ふ。)

仁王　これさ金剛、いつまでそんな愚癡をぬかすぞ、何ほ關の角力でも、勝つときばかりあいやせぬわえ。

金剛　それはまあさうだけれど。

仁王　えゝ、けれどなら無駄口利くなえ。(ト是れにて金剛控へる。)もし傳內樣噂を聞けば志賀之助も、此清水へ參るとのことぢやあござりませぬか。

傳內　何と申す、今日此處へ志賀之助が參ると申すか。

仁王　さうぢやさうにござりまする。

傳內　參るとあれば最屈竟、我々共が參るを待ち受け、

伴六　喧嘩仕掛けで難題言ひかけ、

甚藏　昨日の遺恨を滿座の中で、

傳內　二度場所へも出られぬやう、

金剛　旨くやつて下さりませ。

仁王　わしも遺恨の重なる明石、何れも方を土臺にして、面恥かゝすが少しは腹いせ。

金剛　坊主が憎けりや袈裟までと、あの朝霧も師匠の供で、一緒に來るは知れたこと。
伴六　彼奴めも共々、憂き目を見せて、
甚藏　貴樣の胸も晴らしてやるわ。
傳內　さう話しが極つたら、是れから山の見晴らしで、一杯やつて明石の來るのを、
伴六　何でも物は祝ひがら、お御酒を上げて前祝ひに、
甚藏　しらふで遣るより持前の、酒の力でいつものぶう〳〵、
金剛　斯ういふ時は酒の上の、惡いも一つの役に立ちます。
仁王　そんならわしも志賀之助が、來るまで一杯引つかけませう。
傳內　斯ういふ手筈になるといふも、昨日の意趣を返せといふ、觀世音の導きでござらうわえ。
伴六　如何さま、これが譬の通り、
甚藏　正直の頭に、
兩人　神宿るでござらうわえ。
仁王　何は兎もあれ見晴しにて、吞んだ上にて何かの相談。
傳內　然らば直ぐに奧山にて、喧嘩を仕掛ける魂膽工夫、

伴六甚藏 三人寄れば文珠の智慧。

金剛 五人寄つたら楠孔明。

仁王 むだを言はずと、ちつとも早く、

兩人 そんなら關取、

傳內 さ、參らうわえ。

トやはり三味線入り大拍子になり、傳內伴六甚藏先きに、仁王金剛附いて皆々よろしく捨ゼリフにて上手へはひる、此鳴物にて、花道より、船木十太夫更けたるこしらへ、袴羽織大小、同じく悴半七郎、やはり袴羽織大小にて出來り、跡より中間、風呂敷包みを持ち供をして出來り、花道にて、

十太 こりや〳〵悴、何と見やれ、見事に咲いたではないか。

半七 仰せの通り、吉野初瀨はいざ知らず、新清水の櫻のさかり、一入なる儀でござりまする。

十太 それは格別、あの志賀之助は、もう見えさうなものではないか。

半七 いえ、只今見えるでござりませう、なか〳〵約せし事を變じまする明石ではござりませねば、間もなう參るでござりませう。

十太 何はしかれ、あれなる花の下へ參つて、待合さうではないか。

半七　それがよろしうござりませう。さゝ、家來參れ。

中間　はツ。

ト右の鳴物にて、皆々本舞臺へ來り、觀世音へ拜禮することあつて、あちこちと櫻を眺める思入あつて床几へ掛り、

十太　これ悴、今日は明石に面會のいたし、殿の思召しも申し聞かせ悦ばさうと思へば、一倍待ち久しく思はるゝわえ。

半七　それは御尤ものことでござりまする、待たるゝより待つ身とか申す世俗の譬、よう申した事でござりまする。

ト唄大拍子になり、花道より明石、角力好みのこしらへ、着流し駒下駄にて、扇をつかひ出來り、跡より朝霧、やはり明石の弟子、好みのこしらへにて出來り、花道にて、

明石　これ朝霧、十太夫樣はまだお出ではあるまいか。

朝霧　いえ〳〵お氣の短い旦那樣ゆゑ、きつとお待兼ねでござりませう。（ト朝霧向うを見て、）もし〳〵關取、船木樣はあそこの床几に、お掛けなされてゞござりますぜ。

明石　なに、旦那樣が。（ト見て、）こりやあ失禮を申したわえ。（トやはり右の鳴物にて舞臺へ來り、兩人を見

て、）これは〳〵旦那様、嘸ぞお待遠でござりましたらう。

十太　おゝ明石か、待兼ね申した。

半七　朝霧も、よう今日は同道いたした。

朝霧　へい、師匠の供で參りましてござりまする。

十太　さゝ、志賀之助、これへ掛けやれ〳〵。

明石　へい有難うござりまする、そんならお許しなされて下さりませ。（ト眞中の床几へ掛ける。）

半七　さあ〳〵朝霧、その方も掛けやれ〳〵。

朝霧　へい、左樣なれば御免なされませい。（ト下手の床几へ掛ける。合方になり、）

十太　扨はや志賀之助、昨日の上覽角力、其方煩ひ擧句のことゆゑ如何あらうと、拙者は元よりお上にも、事ない御心配にてあつたる所、流石は其方、見事に仁王を投げたる手際、何か年甲斐もないやうなれど、あの節は我を忘れて、御前に於てやんや〳〵と高聲に申して、跡にて赤面のいたしたわい、あはゝゝゝ。

半七　いやも、父上にも事ない御心配をなされたわえ。

明石　へい〳〵有難うござりまする、いやもう私も日立ちませぬ煩ひ擧句、相手は名に負ふ仁王でござ

りますれば、土俵の上へあがりまして、行司の團扇を引きますまでは心許なうござりました。

朝霧　實に私もいくら背腹揉みましても、役にも立たぬ事ではござりますが、其上にまた外の者との立會なら兎も角もでござりますが、しやッ面憎い仁王關でござりますゆゑ。（ト言ひ掛けるを、）

明石　これさ朝霧、づけ〳〵物を言ふなといふに。

朝霧　はい、それゆゑ師匠が取組むうちも、心のうちで不動樣を、一生懸命に祈つて居りました。

十太　おゝさうあらうとも、弟子師匠となつたる上は、其くらゐな心體でなうては賴もしくないと申すものぢや。何は格別志賀之助、其方に悅ばすことがあるわえ。

明石　へい〳〵、それは耳よりな事でござります。（ト十太夫思入あつて、）

十太　こりや〳〵悴、其品を是れへ出しやれ。

半七　畏りましてござりまする。これ友藏其包みを。

中間　へい、畏りました。

ト中間風呂敷包みを半七郞の前へ出す、半七郞取つて風呂敷包みの儘十太夫へ渡す。

十太　これ明石悅びやれ、昨日其方が手柄をいたせしゆゑ、殿にも事ない御悅喜にて、これを見やれ、（ト風呂敷包みを明けて、）俄に殿の思召し附きにて、おこしらへ遊ばした此羽織、これ〳〵悴、其方

も手傳うて開いて見やれ。

ト十太夫羽織を出す、半七郎手傳つて羽織をひろげ明石に見せる、羽織に、日の下開山明石志賀之助といふ文字縫つてあること、明石これを見て、

明石　これはまあ、冥加に餘りましたる下されもの、殊に日の下開山と、金絲を以ての縫模樣、これは餘りの御賞美なれば。

十太　はてさて何で其遠慮、こりや其方が自身で誇る名聞でない、十目の見るところ十指の指さすところ、少しも卑下には及ばぬわえ。

朝霧　猶更弟子の身に取りましても、世間を歩くに肩身が廣く、どうやら私の體も大きくなつたやうに思ひますわい。へい／＼關取、お目出たうござりますわえ。

半七　嘸かしそちも悦ばしい事であらう、是れと申すも日頃より心立てのよい明石ゆゑ、天道よりのお惠みと申すもの。

十太　それは悴の申す通り、こりや自身が幾ら願うても、時節でなければ成らぬことぢや、目出たい目出たい。目出たいと申せばこりや志賀之助、其方はいふに及ばず身共も何か心嬉しい事なれば、門前の料理屋にて、悦びの酒を一獻汲まうではないか、悴それがよいではないか。

半七　よろしい所ではござりませぬ、明石どの、朝霧同道いたして參つたがよい。

明石　それははや重ね〴〵有難いことでござりまする。私も觀世音さまへ願籠めいたしましたれば、ちよつとお禮參りをいたして、直にお跡から參りますれば、一足お先きへ願ひまする。

十太　如何さまそれも尤も至極、然らば身共は先きへ參り、甲子屋にて酒肴の支度をいたしておかうわえ。

平七　參詣も相濟みなば、少しも早く。

明石　いえ、直にお跡から參りまする、禮參りとはいふものゝ、經讀むことも知りませねば、有難いと禮いふばかり、直さま參るでござりまする。

朝霧　この朝霧も、師匠と一緒に。

十太　然らば明石待つて居るぞや。

明石　お先へ、お出で下さりませ。

朝霧　若旦那樣。

半七　早う來やれ。

十太　さゝ、參らうわえ。

ト唄になり、十太夫半七郎中間附いて上手へはひる、跡合方になり、朝霧以前の羽織を取つて、いろいろ見る事あつて、

朝霧　あゝ立派な物だなあ、お大名といふものは是れ程な縫模樣を、思ひ立つたら今が今、いや自由になるものだなあ。もし關取、ちよつと引掛けて御覽じませぬか。

明石　成程折角の拜領物、そんなら是れを引つ掛けて、觀音さまへ御禮參りをして來ようかえ。

朝霧　是れも一つの御利益なれば、さうした方がようござりませう。

ト朝霧明石に羽織を着せる事よろしくあつて、明石羽織を着て、いろ／＼風俗を見ることよろしく、

明石　どうぢや、朝霧似合うたか。（ト朝霧前へ廻り後へ廻り見て）

朝霧　いや、立派なものでござりまするわえ。

明石　是れも偏に家業の徳だ、疎略に思ふと罰が當るわえ。

朝霧　實にさうでござりまする。

ト兩人よろしく思入、三味線入り大拍子になり、花道より江島屋娘お芳、振袖娘好みのこしらへ、お繁の下女小さき風呂敷包みを持ち日傘を差掛け、お米友達娘の裝にて附き出來り、此跡より、下男辨當包みを背負ひ出で來り花道にて、

お粲　申しお芳さま御覽じませ、ようまあ咲いたぢやござりませぬかいなあ。
お芳　ほんに、美しい事ぢやわいなう。
お米　もしお芳さんえ、是れからあの淸水の舞臺へ行て、種々の人の通るのを見ようではないかいなあ。
お粲　それがようござんす、それから中堂へもいて、鬼渡しをいたしませうわいなあ。
お芳　よいやうにしてたもひなう。（トお芳うかぬ思入、）
お粲　あなた、さつぱりお浮きなされませぬわいなあ、もそつと、浮き〳〵なされませいなあ。
お米　今に奥山へ行きますと、花見の人が鬼渡しやら、目隱しやら面白いことでござんすゆゑ、早う行て見ようわいなあ。
お粲　何にしろあそこへ行て、一休みしませうわいなあ。
ト右の鳴物にて、みな〳〵本舞臺へ來る、明石朝霧お芳を見て、
明石　これは〳〵江島屋のお嬢さん、今日はお花見でございますか。
お芳　關取さん、あなたもお花見でござんすかえ。
明石　いえ私は觀音さまへお詣りに參りました。おゝお粲どん、今日はお樂しみでござりますな。
お粲　はい〳〵、有難うござりまする。（ト朝霧を見て、）おや朝霧さん、さつぱり此頃はお出でがござり

ませぬわいなあ。

朝霧　はい、御無沙汰をいたしました、お孃さんがお花見にお出でなさるなら、參りがけにお見世までお寄り申せばよかつたに、惜しいことをいたしました。(トお米を見て、)お米さん、お前も御一緒で又いゝ男の相場を狂はせようと思つて。

お米　朝霧さん、そんなことは知りませぬわいなあ。

朝霧　何知らねえ事があるものか、なうお繁さん。

お繁　ほんにさうでござんすとも、お米さんは元氣がようてよいけれど、お孃さんのお鬱ぎには、誠に困りますわいなあ。

明石　さういへばお芳さまのお顏の色が惡いやうぢや、お年頃のことぢやによつて、おはしやぎなされませ、ひよつと又お煩ひでも出てはなりませぬ、今日は天氣も長閑なれば、ゆるりと保養をなさりませ。

お繁　左樣でござりまする、あんまりお鬱ぎなされますから、やう／＼の事でお米さんをお賴み申し、無理にすゝめて、お連れ申しましたわいなあ。

朝霧　はゝあ分りました、お孃さんの鬱ぐのは、こりや戀煩ひでござりますぜ、ねえ申しお芳さま。

お芳　わたしや其やうな事は知りませぬわいなあ。（ト恥かしさうに言ふ。）
朝霧　あんまり知らぬ事もござりますまい、はゝゝゝゝ。（ト此うち明石よろしくあつて、）
明石　さうしてお嬢さま、旦那様にはお替りござりませぬか。
お芳　はい、おとゝさんにもお替りはないわいなあ。
朝霧　もし關取、江島屋の旦那様は、勿體ない程いゝお方でござりますが、御新造さんは憎てらしい。
ト言ふを明石抑へて、
明石　えゝ、入らぬ口を利くなといふに。（ト是れにて朝霧口を抑へる。）
お繁　ほんにもう、朝霧さんの言はしやんす通り、あんなやかましいお叱言のお好きな御新造さんはないわいなあ。
お米　お芳さんの前では悪いけれど、評判の意地わるでござんすわいなあ。（ト此うち朝霧思入あつて、）
朝霧　これさ、お米さんく。（ト小聲にて言ふ。）
お米　何でござんすえ。
朝霧　お上さんが、それ、後へ。（ト眞面目に言ふ。）
お繁
お米　えゝ。（トびつくりする。）

朝霧　といつて、欺したものさ。
兩人　えゝも、憎らしい朝霧さん。（トお米朝霧の背中を叩く。）
朝霧　どうで女中方には、憎まれものさ。
お繁　もし朝霧さん、さう言はしやんすな、お前には此お米さんが。
お米　あれお繁どん、いけないよ。（トお繁の袖を引く。）
朝霧　そりやあ本當かね。
明石　そりや朝霧に、奢らさにやあならぬわい。
朝霧　それぢやあ、わしもちつとめかさずばなるまい。
お芳　いゝえ朝霧さんはめかさずとも、いつも綺麗でござんすわいなあ。
朝霧　いや、これは今日は有卦に入りましたわえ、あはゝゝゝゝ。（トよろしく思入、お芳こなしあつて、）
お芳　これ繁や、それではちよつとお參りをして來ようかいなう。
お繁　それがよろしうございませう。
明石　そんならお參りでござりますか、此人込みを美しい女中ばかりで歩くはけんのん、これを附けて上げませう。これ朝霧、そこらまで見て上げろよ。

お繁　いえ〳〵有難うございますが、お山の内は大丈夫でございますわいなあ。
お芳　關取さん、御ゆるりとなされませいなあ。
明石　送らせればいゝ事を、それでは氣を附けてございりませ。
お繁　有難うございりまする。（トお米思入あつて、）
お米　朝霧さん、お靜かに。
お繁　もし朝霧さん、お米さんが。
朝霧　いや、今日はよつぽど出來がいゝわえ。
お芳　さ、行かうわいなあ。
トやはり三味線入り大拍子になり、お芳先きにお繁お米附いて上手へはひる、明石跡を見送つて、
明石　いや、女中連といふものは、騷々しいものだわえ。
朝霧　よく喋べるものでござりまする。
明石　こつちもそろ〳〵參詣して、甲子屋へ行くとしようか。
朝霧　定めて旦那も、待つてゞござりませう。
明石　どりや參詣をいたして來ようか。（ト明石立上り、石段へ上りにかゝる、此時上手にて、）

仁王　あいや明石、ちよと待つて下んせ。（ト仁王先きに、傳内伴六甚藏附いて出て來る、明石仁王を見て、）

明石　おゝ、誰かと思うたら仁王どん、此明石を呼び止めたは、何か用でもごんすかの。

仁王　さればさ、用があるゆゑ呼び止めた、まあちよと爰まで出て下せえ。

明石　あの、おれに。

仁王　如何にも。

明石　むゝ。

ト思入あつて、誂への合方になり、明石悠々と前へ出る、此うち朝霧は下手、傳内伴六甚藏金剛は上手にて双方ともに氣を揉む思入、明石もこなしあつて、

して此明石に用といふのは。

仁王　外でもねえ、ちつと貴樣に無心があるが、何と聞いちやくれめえか。

明石　改まつた其の詞、おれが身分だけのことなら、聞いてやらうよ。

仁王　むゝ、早速の承知忝けない、其無心といふは外でもねえ、昨日御所での上覧角力、貴樣に勝を取られたゆゑ出入り屋敷の扶持の喰上げ、どうもたゞぢやあ顏が出せねえ、貴樣の首を土産にして其詫事に行く積りだ、ちつとそつちもくれ憎からうが、どうぞ命を貰ひてえのだ。

明石　あはゝゝゝ、大業に頼むから、何事かと思つたら、おれの命をくれろといふのか、そいつあ何より安い無心だ、遠慮なしに持つて行けな。

仁王　そんならくれるか。

明石　さあ〱遣るから持つて行け。だが仁太夫、おぬしやあどうして取る積りだ。

仁王　そりやあ造作もねえことだ、まあちよつと斯うして取るわ。（ト明石の胸倉を取る、明石是れを拂ひ、）

明石　えゝ、何をしやあがる。

ト兩人立上る、朝霧は後にて氣を揉み、鉢卷をして身ごしらへをする、金剛も鉢卷をして支度をする、傳内件六甚藏は刀の目釘を濕してきつと思入。

朝霧　もうぢつとしちやあ居られねえ。

金剛　おれも師匠の加勢をして。（ト兩人きつとなるを、）

明石　えゝ、朝霧氣をもむな。

仁王　金剛、手出し仕ちやあならねえぞ。

朝霧
金剛　それだと言つて。

明石　はて、そこから見物、

兩人　して居やれ。（ト此うち明石は羽織を脫いで、）

明石　大事な羽織だ、それ朝霧。

ト羽織を朝霧に渡す、朝霧是れを受取る、兩人むづ〳〵するといふ思入、是れより明石仁王尻を端折り支度をする、これを朝霧金剛手傳ふことよろしくあつて兩人前へ出て、

明石　さあ來い仁王。

仁王　おゝ合點だ。

ト角力太鼓を打込み、双盤誂への鳴物になり、兩人よろしく立廻り、此うち敵役は拔きかけようとして居る、朝霧は若し拔いたらばといふ意氣込みのこなし、よろしく立廻りあつて、明石仁王をドンと當てる、是れにて仁王ウンといつて下に居る、敵役みな〳〵是れはとびつくりする、金剛これを見て、

金剛　こりや、關取が。（ト寄らうとするを明石こなし、）

明石　はて案じることはない、急所を除けて當てたのぢや、跡で手當をしてやらんせ。（ト是れにて明石悠々と身ごしらへをして、）さあ朝霧行かうかえ。（ト朝霧いゝ氣味といふ思入あつて、）

朝霧　へゝ、益ねえ事を言ひ出して、ハテ氣の毒千萬な。（ト敵役みな〳〵口惜しき思入あつて、）

傳內　又もや今日も、恥辱を取りしか。

伴六
甚藏　おのれ明石め、（トきつとなつて刀の柄へ手をかける、明石こなしあつて、）

明石　お相手になりませう。

傳内　いゝや、それには及ばぬ。（ト後へ下ろ、朝霧につたり思入あつて、）

朝霧　こりやさうでござんせうわえ、そんなら闕取。

明石　どりや、參詣をしようかえ。（ト唄になり、悠々と立上り石段を上り上手へはひろ、朝霧どうだといふ思入あつて、）

朝霧　やい金剛、どんなものだ、なぜ手出しをしねえのだ、えゝ意氣地なしの、業晒しめ。

ト敵役みなへ掛けて言ふ。

金剛　うぬ、其舌の根を。（ト立ち上らうとかゝるを、）

朝霧　何を。（トきつとなる、金剛下に居て、）

金剛　こりやあ何うでも、（トきつとなつて、）あきらめものだ。（ト是れにて朝霧につたり笑つて石段を上り上手へはひろ、金剛此うち口惜しき思入あつて、傳内の手を引張り出して、）もしく旦那、傳内さま、師匠をどうかして下さりませ。（ト金剛縋つて言ふ。）

傳内　はて、それは氣遣ひいたすな、身共が日頃の手練を以て、うんと一つ活を入れゝば、假令十日が

十五日を經たる死人でも、其場に於て卽座にしやつきりよみがへる、是れが身共の鍛錬でござるわえ。

伴六　これさく傳內殿、自慢はあとでゆるりの事、先づ差當る仁王鬪をば。

甚藏　ちつとも早く手當てが肝腎。さゝ、早く。

傳內　心得申した。（ト傳內こなしあつて、仁王に活を入れる、是れにて仁王心附きし思入にて、）

仁王　おのれ明石め、（ト立上つて心附き、）えゝ忌えましい、又もや爰にて恥辱を取りしか、むゝ。

トきつと思入、金剛うろくして、

金剛　もしく師匠、氣持は慥になりましたか。

傳內　これく仁王、假令少し當てられても、是れはそちの恥ではないぞ。

伴六　當てるといふは、何よりえんぎぢや。

甚藏　ちつとも、ひるむ事はないてや。（ト側より皆々仁王に勵みを附ける、此うち仁王無念の思入あつて、）

仁王　うぬ明石志賀之助、一度ならず二度までも恥辱を取らせし上からは、もう仁太夫が破れかぶれ生してておいちや恥のかき揚げ、是れから直に跡追ツかけて、さうだ。

ト血相替へて上手へ行きにかゝる、皆々は呆氣に取られる思入、此時花道の揚幕にて、

藤兵　いや、其仕返しは、まあ〳〵待つた。
仁王　なに、待てと仁王を留めたのは。
傳内　どこのどいつだ。
金剛　何で關を。
三人　留めたのだ。
藤兵　おゝ、朝比奈が留めたのだ、まあ〳〵待つて貰はうかえ。
皆々　何と。

ト謔へ三味線入り出の鳴物になり、花道より朝比奈藤兵衞、男達好みのこしらへ一本差し尺八を差し、柾の下駄にて出來り花道にて、

藤兵　仁王關、おれが留めた、急かずと待つて下んせといふに。
仁王　おゝ、誰れかと思つたら、兄貴の朝比奈藤兵衞どの。
傳内　おゝ朝比奈どの、いゝ所へ來て下された。
伴六　どうなる事かと案じたところ。
甚藏　其方參れば一ツの安堵。

金剛　親分どうぞ爰へ來て、師匠の一埒一通り。

三人　よう聞いてやつて下され。

藤兵　何は兎もあれ、そこへ行て、一部始終を聞きませうよ。

　　トやはり右の鳴物にて、藤兵衞舞臺へ來りよろしく床几へ掛ける、仁王もよろしく床几へ掛ける。

仁王　これ兄貴、おりやどうも面が立たぬ〳〵、立たぬわえ。（トきつと言ふ。）

藤兵　むゝ、立たぬといふは昨日の角力、負けたに依つて立たぬといふのか。

仁王　そればかりぢやあねえ、今日もまた恥辱を取つた上からは、何うも明石はたゞは置けねえ。生しておいちやあ面が立たねえ。（ト藤兵衞思案の思入。）

藤兵　むゝ呑込んだ、そりやあ貴樣が尤もだが、爰をよく考へて見ろ、手めえが無闇に切込んでも、向うも名うての志賀之助、またも負けを取つた日にやあ手前も生きちやあ居られめえ、それだに依つて藤兵衞が、聲を掛けて留めたのだ。（ト是れにて仁王思入あつて、）

仁王　そりやあ兄貴わからねえ、もう斯うなつちやあおれが命、捨てる覺悟でかゝる喧嘩、留めずと遣つてくんなせい。

藤兵　いゝや手前は遣られねえ、おぬしの替りに血を分けた、此藤兵衞が仕返しする、明石に恥辱を取

らせたら、別に否やはあるめえが。

仁王　そりやあ、あいつに恥面をかゝせてくれりやあ、おいらが胸も。

藤兵　嚇らすはおれの子分の奴等、大勢一度に仕掛けて行きやあ、假令明石が大力でも多勢に無勢だ、打つてしめるは造作もねえ、手前に引けを取らすやうな、そんな出入りはしねえから、まあ朝比奈に任せておけ、きつと仕返しして見せるわ。

傳内　成程是れは藤兵衞が申す通り、多勢をかけてたゝんだ日には、明石は直に寂滅爲樂。

伴六　流石は兄貴は兄貴ほど、龜の甲より年の功。

甚藏　其の目覺しい仕返しの、我々どもゝ後詰となりて、

金剛　師匠の返報金剛が、金剛力を出しかけて、片ッ端から手玉に取り、

藤兵　さうして貴樣は投げられるか。

金剛　あゝ當てられた。

傳内　何を申す。

仁王　それぢやあ兄貴この出入りは、お前にすつぱり任せませうよ。

藤兵　おゝよく得心してくれた、それでおれも留めに出た甲斐があるといふものだ、さう話しが極つた

ち、是れから崖で酒としよう、失禮ながら旦那方も、お附合ひなされませ。
傳內　參る段ではない、酒と聞いては目のないわれ〳〵。
伴六　御馳走酒は元より好物。
甚藏　拙者も貴公の申す通り。
金剛　この金剛も其通り。
仁王　そんなら兄貴。
三人　朝比奈藤兵衞。（ト藤兵衞みな〳〵へ會釋して、）
藤兵　御免なせえ、お先きへ行きやす。
三人　遠慮なしに。
藤兵　どりや、行きませうか。

ト三味線入り大拍子になり、藤兵衞先きに仁王皆々附いて上手へはひろ。此時石段の上より以前の朝霧出來り、皆々の跡を見送りながら平舞臺へ下りて、

朝霧　今あいつらが相談ぢやあ現在兄の朝比奈が子分を集めて仁太夫の、仕返しをするあつちの魂膽、こりやあ師匠の身の上だ、假令子分が五人十人、關取のことだから恐れる事はねえけれど、不意

を喰つちやあ油斷大敵、いゝ所へ來合せておれが耳にへえつたも、是れもやつぱり御利益だ、然しこいつあ捨てゝ置かれぬわえ、こつちも師匠の兄弟分、夢の親方へ此事を知らせて行きやあ、こつちにも數多の子分の加勢をすりやあ、師匠に怪我はねえといふもの、こいつあ是れが上分別だ、後手にならねえ其うちに、ちつとも早く、さうだ。

ト朝霧こなしあつて、尻を端折り行きにかゝる、此時金剛後へ窺ひ出て、

金剛　うぬ朝霧め、さつきの返報。

ト金剛朝霧に切つてかゝるをちよつと立廻つて、朝霧金剛の腕を押へ、

朝霧　えゝ、この胡麻摺り野郎め、小いやらしい事をしやあがるな。

金剛　なんと。

トまた振拂つて切つてかゝる、朝霧握り拳にて金剛の利腕をなぐる、是れにて刀を落す、金剛これを取らうとするを、又手を取つて背負ひ投げに投げる、また起き上がつて組附くを握り拳にて張りまはす、金剛天窓を張られながら、ぐるり〳〵廻つて花道まで行く、此時早き大拍子になり、花道より夢の市郎兵衞、男達好みの裝尻端折りにて足早に出て來る。金剛逃げ出す出會頭に市郎兵衞に行當る、市郎兵衞何をすると、また金剛を張り倒す、これにて金剛逸散に花道へ逃げてはひる。朝霧市郎兵衞と顏見合せ

思入。

朝霧　おゝ、お前は夢の親分か。

市郎　貴樣は朝霧、血相替へて。

朝霧　今お前の家へ行くところだ、何は兎もあれあすこへ行つて。

市郎　そんなら朝霧、さあ來やれ。（ト兩人よろしく本舞臺へ來て、）

朝霧　親分いゝ所へ來て下すつた。今日はいろ／＼家の師匠の、身の上に掛ることで。

市郎　なに明石の身の上にかゝること、大方仁王が昨日の遺恨で、喧嘩を仕掛けて仕返しをすると、ちよと噂を聞いたから、明石のことが氣になるゆゑ、それでおれも急いで來たのだ。

朝霧　そんならお前も其事を。

市郎　聞いたに依つて明石の跡を、此の清水まで尋ねに來たのだ。

朝霧　それぢやあわしも安心だが、仁王ばかりで仕掛けるならちつとも恐れる事はねえが、仁王の兄の朝比奈藤兵衞、あいつが子分を大勢集め、師匠の所へ仕掛けると相談するを聞いたゆゑ、それで師匠の耳へも入れず、お前の所へ行くところさ。

市郎　そりやあおれが呑込んだが、さうして明石はどこに居るのだ。

朝霧　今門前の甲子屋に、屋敷の衆の酒の相手。

市郎　それぢやあ直にそこへ行き、明石に逢うて何かの手筈を。

朝霧　そんなら親分。

市郎　ちつとも早く。

朝霧　さあ、ござりませ。

トやはり大拍子にて、兩人足早に上手へはひる、跡双盤の入りし合方になり、花道より前幕の須磨の浦苫右衞門、角力年寄好みのこしらへ、一本差し雪駄にて出來り花道にて、

須磨　何でも世界といふものは、十分にやあ行かねえものだ、明石の病氣も全快して上覽角力も勝を取り、やれ嬉しやと安心して、樂々家に居たところ、話しを聞けばそれからの遺恨で明石と仁王の喧嘩、其腰押しが夢と朝比奈、どつちもみんな子も同然、どうか無難にこの出入り濟まして遣りてえものだなあ。

トやはり右の鳴物にて、思案の思入あつて本舞臺へ來る。直にばた〳〵になり、上手より以前のお芳お繁お米駈けて出來り、苫右衞門を見て、

お芳　モウシ〳〵、どうぞお助けなされて下さりませ。

お繁　どうぞあなた、お願ひでござりまする、助けて上げて下さりませ。

お米　お願ひでござりまする、お助けなされて、

三人　下さりませいなあ、（ト三人苦右衛門に縋る、苦右衛門心得ぬ思入にてお芳を見て）

須磨　おゝお前はいつも志賀之助がお世話になる旦那さま、江島屋のお嬢さまではござりませぬか。

お芳　ほんにお前は須磨の浦さん、いゝ、ひやいな目に逢ひましたわいなあ。

須磨　いゝ、ひやいな目とは、どうしたのでござりまする。

お繁　親方さん、御覧なされて下さりませ、只怖い一心であなたさまとも心附かず、御挨拶も申しませぬ、今奥山で悪いお侍に出逢ひまして、お嬢さまや此お子に無禮な事をいたしますゆゑ、どう詫言うても聞き入れませず。

お米　お酒を呑めの酌しろの、又其上にいやらしい事をして、怖うて／＼なりませぬわいなあ。

お芳　これ／＼繁や、また爰へ來はせぬかいなう、どうぞしてたもいなう。（トお繁上手を見て）

お繁　あれ／＼、又向うから來ましたわいなう。

お芳　わたしやどうせう、どうせうぞいなあ。

お米　早う逃げたいものでござりますわいなあ。

須磨　まあ〳〵お靜かになされませ、お前方が爰にござると、相手がさゞぶでは面倒だ、少しの間あれなる小蔭で。
お繁　それでは暫しの其間。
須磨　さあ〳〵早く。
お繁　さあ〳〵、お孃さんもお米さんも、早うござんせいなあ。
トお繁お芳お米の手を取つて下手へはひろ、直に上手より以前の傳内先きに、伴六甚藏皆々酒に醉うたろこなしにて、うろ〳〵して出來り、苫右衛門を見て、
傳內　こりや〳〵、そこに居るは、須磨の浦苫右衛門ではないか。
須磨　へい、如何にも須磨の浦でござりますが、あなた方は、何をうろ〳〵なされまする、何ぞ落し物でもなされましたか。
傳內　何を申す、武士たるものが物を落すやうな、狼狽たことはいたさぬわ。
伴六　貴樣が是れに居るからは、定めて存じて居るであらうが、只今これへ三人連、
甚藏　新造が二人に年增が一人、これへ參つたに違ひないが、知つて居るなら是れへ出せ。
傳內　これ、隱し立ていたすと、爲にならぬぞ。

須磨　へい、成程女子の三人連。
三人　存じて居るか〳〵。
須磨　それならば存じて居りまする。
傳內　さうして其女は、何れへ參つた。
須磨　へい、私が逃しましてござりまする。
傳內　なに逃した、何でわれは、
三人　逃したのだ。（ト言ふ、苫右衛門思入あつて、合方になり）
須磨　左樣でござりまする、逃出して來た其者が、すつぱ拔きでもしたものとか、また醉漢の暴れもの爲にならぬ奴ならば、引ツつかまへても遣りますが、相手にならぬ女三人、お武家さまに捉へられやう〳〵逃げて來たゆゑに、助けてくれと賴みますゆゑ、逃してやつてござりまする。
傳內　然らばいよ〳〵逃したか。
須磨　仰せの通りでござりまする。
傳內　よいわ、逃したとあれば、其女にはもう構はぬ、此上はわれが相手だ。
作六　左樣々々、女と違つて須磨の浦。

甚藏　こりやであつて面白い。

傳內　覺悟なして、

三人　それへ直れ。（ト苦右衞門思入あつて眞中へ居直り、）

須磨　いやも逃しましたが御意に入らずば、御存分になされませ、わたくしも若い時分なら、爰で何とかおつりきなせりふも言つて見てえけれど、もうそんな根がない、何にも言はねえお侍、遣るだけ遣つて御覽なせえ。

傳內　おゝ望みに任せ我々が、存分にいたしてくれるわ。さあ御兩所、腹ごなしに此場に於て。

伴六　若手を打つより年寄だけ、骨があつてであるわえ。

甚藏　年寄でも女でも、そこに見境があつた日には、敵役は勤まらねえ。

伴六　左樣々々、女を逃した其替り、斯うしてやるが腹いせだ。

甚藏　斯うしてやるわ。

伴六　斯うしてやるわ。

兩人　斯う〳〵〳〵。（ト兩人して、加減をして苦右衞門を打つ。）

傳內　これさ〳〵御兩所、遠慮があつて見苦しい、懲り〳〵する程土足にかけて。

伴六　成程、もう斯うなつては憎まれついで、

甚藏　思ひ切つて、

兩人　斯うしてくれるわ。

ト伴六甚藏兩人にて苦右衛門を足蹴に蹴倒す。苦右衛門自由になつて居る。此時上手より以前の朝霧出て、此體を見、伴六甚藏を突き退けきつとなつて、

朝霧　またわいらは爰へ來て、何で師匠の親分をうぬら手籠めにしやあがつた、身の程知らぬ罰當りめ、さあ是れからはおれが相手だ、指でもさして見やあがれ、片ツ端から命がねえぞ。

トきつとなつて言ふを苦右衛門制して、

須磨　これ朝霧、手前は何にも知らねえことだ、手出しを仕ちやあならねえぞ、おれが胸にあることだ、まあそつちへ控へて居ろよ。

朝霧　それでもお前、年寄をば。

須磨　さあ年寄ゆゑに打たれても、何の恥にもならぬこと、まづ氣を揉まずと、（ト朝霧を下へすゑて、）辛抱しろよ。

朝霧　むゝ。（ト癪に障る思入、傳內思入あつて、）

傳内　やい朝霧、貴樣は手出しはならねえのか、いやさ、此兩腰に恐れたか、どうして〳〵手出しはなるまい、角力取でも力士でも、武士に逢つてはみじめなものだ。御兩所あれを御覽じろ、此大小が怖いかして、ぶる〳〵顫へて居りますわ、哀れなものではござらぬか。

伴六　いやも、我々に掛つては、手足もすくむと見えますわい。

甚藏　左樣でござる、何と傳内殿、あゝ縮こまつて居られて見ると、少し無常氣がさして來るて。

傳内　そこが武士の情でござらう、先づ今日は此位で、見のがしてやりませうか。

伴六　何さま、それもよろしうござらう。然し、よい慰みでござつたわい。（ト甚藏朝霧に向つて、）

甚藏　やい朝霧、其方は仕合せものだ、御兩所が御勘辨强いゆゑ、そちが命は助かつたぞ、我々歸つた其跡で御酒でもあげて三拜いたせ、命冥加な奴だわえ。

傳内　いやも弟子も師匠も又弟子も、此方どもに出逢つては、よく〳〵苦手と見えまするわえ。

兩人　左樣でござる。

傳内　あはゝゝゝ、さあ參りませう。

ト三人よろしくこなしあつて、唄になり、下手へはひる。朝霧跡を見送りて、

朝霧　えゝ忌えましい毒蟲めら、やゝともすると出しや張つて憎まれ口の惣まくり、女護の島へ流され

ても女に出入りは出來ねえ奴等だ。（ト苦右衞門の側へ來り）もし親方、あんな奴は以後の見せしめ筋骨拔いてもいゝのに、何でお前は自由になつて手籠めになつて居なすつたのだ。

須磨　まだ〳〵貴樣は若い料簡、今日志賀之助と仁王の喧嘩も、種は昨日の角力から、仁王を贔屓なあの衆まで悔しがつて居る所、おれが自由に打たれりやあ、少しは向うの心ゆかしだ、氣を弛めるのも一つの手段、年寄のすることに、大概そつがあるものか。

朝霧　成程そこへは氣が附きませぬ、が、一體何であいつらがお前を。

須磨　さあ聞きやれ、身に振りかゝる災難は、のがれる事は出來ねえものだ、明石の事が氣になるから樣子聞かうと出て來た所、出合頭に奧山から逃げ出して來た女三人、助けてくれと賴むゆゑ、見れば一人は志賀之助の、お世話になつたる江島屋の、手前も知つてるお孃さんよ。

朝霧　あの江島屋のお芳さんを、えゝ忌えましい奴等だなあ。

ト此話しのうち、ばた〳〵にて、下手より以前のお繁お米出來り、

お繁　モウシ〳〵親方さま、また大變が出來ましたわいなあ。

須磨　おゝお前は今の女中さん、大變とは何の事だ。

お米　今三人で小蔭から、あの侍が意地惡をば、言ふのを怖々見て居るうち、

お繁　お嬢さまが見えなくなり、お米さんと二人してそこら四邊を尋ねても、かいくれ姿が見えませぬわいなあ。

朝霧　何とおつしやります、そんなら今の其間に、お芳さまが見えなくなつたと。

お繁　それぢやによつて、大變でござんすわいなあ。

お米　お見かけ申して二人がお願ひ、どうぞ共々奥山を、一緒に捜して下さりませいなあ。

須磨　そりやア何しろ飛んだことだ、それぢやあ朝霧手前も共々、お尋ね申して上げてくれ。

朝霧　外ならねえお家の娘御、尋ねねえでどうしませう。そんなら直にわしと一緒に、

お繁　何分ともに、お前が便り、

お米　どうぞ捜して下さりませ。

朝霧　そんなら親方、わしは是れから。

須磨　早く尋ねてあげてくれ。

朝霧　さあ、わしと一緒にござりませ。

ト早めたる合方にて、朝霧先きにお繁お米附いて下手へはひる、苫右衛門跡に思入あつて、

須磨　いや、とんだ騒ぎになるものだ。（ト思入。やはり大拍子になり、上手より以前の十太夫半七郎中間附いて出

て來る、苫右衞門是れを見てこや、あなたは舟木十太夫樣、若旦那も御同道にて、何れへお越しでござりまする。

十太　身共は今日志賀之助に、用事あつて先刻より此山內へ參り居りしが、計らざる仁王めが明石へ遺恨を含むとのこと、最前夢の市郎兵衞に面會なして詳しき樣子、承はつて其座を別れ、心ならずも立歸らんと、只今これへ參りかゝる所。

半七　北條家の藩中にて、神崎傳內とか申すもの、外兩人も同藩ならん、そちに無體を言ひ掛けしを、勘辨なしたる一部始終。

十太　あれなる小蔭で立ち休らひ、貴所の計ひ感心いたした、人は斯くこそありたきもの。これ聞きやれ、悴などは怺へかね、切つても出でたき存念なりしが、やう〳〵制して止め申した。

半七　いやも親人がお止めなくば、實以て彼れらをば、切つて捨てんと存じ居つたて。

須磨　いやもう、旦那さまのお褒めに預かり、面目次第もござりませねど、其我慢が出來ますも、そこがやはり年でござりませう、斯樣に申すも如何なれど、あの明石めが身の上を、無難にさせたいばかりでござりまする。

十太　それゆゑ身共も心配いたす、たゞ穩便に濟ますやう、何分ともに其方を相賴む。

須磨　お頼みなくとものがれぬ師弟、及ばずながら私が、骨をば折るでござりまする。

十太　それにて身共も一つの安堵、上の角力の遺恨より、それからそれの加勢もあれば、大業なる間違ひにでもなるその時は、北條大江の抱への角力、次第によれば御兩家の、確執にもなるは必定、萬事はよきに苫右衛門。

半七　必ずともに拔かりなきやう。

須磨　畏つてござりまする。

十太　然らば身共は歸宅いたさん。

須磨　左樣なれば、御機嫌よろしう。

半七　よき左右をば相待ち申す。

須磨　きつと御左右を申し上げます。

半七　さゝ、參らうわえ。(ト唄になり、十太夫先きに半七郎中間附いて花道へはひる。苫右衛門跡に思入あつて、)

須磨　仁王の肩持つ北條家の、さつきのさゞぶに引替へて、又歷々は格別なもの。(ト思入、)何はともあれ明石に逢ひ、市郎兵衛とも相談して、手延びにならねえ其うちに、どうか工風をしにやならねえ。

ト合方になり、苫右衛門こなしあつて上手へはひろ、跡薄き風の音巡禮唄になり、舞臺の上手より、以前のお芳しを／＼とした思入にて出來り、舞臺の端へ來り思入あつて、

お芳　さつきわたしら三人が、危い目に逢ふところを、須磨の浦さんに助けられ、小蔭に隱れて居るうちに、そつと忍んで爰まで來たは、不孝な事とは知りながら、あのまゝしい母さまが心に染ぬ男を持てと、明暮おすゝめなさるゆゑ、否ぢやといへば折檻して、是非にとあるゆゑ引籠り、態と病氣の體にして、外へも出ぬは去年の夏、花水橋で逢うたお方、年端も行かぬわたしでも、どうぞあゝいふお方をば一生男に持ちたいと、思ひに思うて居るけれど、所詮叶はぬ此身の願ひ、辛い思ひをするよりも、いつその事に此身を捨てゝ。（ト思案の思入、此時薄き風の音、櫻の花散る。）今散る花と諸共に、冥土へ散り行く我が身の上、此舞臺より飛び下りて、爰で死ぬれば佛の御庭觀音さまのお助けで修羅の苦患も助からん。（トお芳手を合せる思入。）賴み上げるは御許さま、親に先立つ不孝の此身、未來とやらの苦しみを、お救ひなされて下さりませ。

トこなしあつて拜む思入、誂への派手なる端唄の合方、通り神樂になり、花道より、鷲の長吉、剃り立て、好みの着附いなせのこしらへにて、表附の駒下駄をはき出て來る、舞臺にてはお芳をがみ仕舞ひ、思入あつて額にかけたる奉納の傘を取り、欄干の前へ出て、飛び下りようとする、是れを長吉花道にて

遠目に見附けたる思入にて、

長吉　こう〳〵、飛んだことをする娘があるぜ、清水の舞臺で傘を廣げて居るなあ、飛び下りる支度だぜ、古風なことをする女ぢやあねえか、おい〳〵〳〵危ねえ〳〵、そこから飛び下りゝやあ命がねえぜ危ねえ〳〵。（ト花道にて手をあげ氣を揉む思入、舞臺にては聞えぬ心、お芳身支度をして）

お芳　南無阿彌陀佛。（ト手を合せる、また長吉見て、）

長吉　あゝ、これさ〳〵危ねえといふに、おゝい〳〵。

ト手招きをして氣を揉んでゐる、此うちお芳舞臺より飛び下り、氣絶せし思入、長吉はこれと一時に舞臺へ驅け來り、

ええ、たうとう飛び下りてしまつた。（トお芳をいろ〳〵見て）そりや〳〵〳〵、たうとう目を廻してしまつた、年端も行かねえいゝ娘だが、何でこんな眞似をするだらう、こいつあ打捨つておいちやあ大變だ、連れの人もねえか知らぬ。（トあちこち氣をもむ思入）おい〳〵、誰か此娘の連れの人はねえかえ、いゝ娘が飛び下りて目を廻したぜ。おゝい〳〵、誰も居ねえのかえ。おゝ連れも近所にやあ居ねえさうだ、さうかといつて、打捨つてもおかれず、とんだところへ掛り合ふもんだ。

トいろ〳〵思入あつて、手水鉢の水を柄杓で汲んで來たり、お芳を抱き起し、口の所へ柄杓をあてがふ、口を結んでゐる、片々の手を放して口を開けようとする、お芳その儘倒れかゝる、又長吉片手にて抱き起す、此うちいろ〳〵よろしくこなしあつて、仕方がねえといふ思入にて、柄杓の水を一口呑んで口移しにお芳へ水を呑ませて、耳の端へ口を寄せて、

おゝい〳〵、あゝ何といふ名だか知れねえ、おゝい飛び下りた娘やァい、娘さんやァい。

ト長吉お芳を抱へたまゝ、いろ〳〵介抱をする、此うちお芳段々心の附きし思入にて、目を開く、本釣鐘、薄き風の音、櫻の散り花、しつとりとした合方になり、お芳長吉の顏をぢつと見て、

お芳　や、あなたは。

長吉　おい、おれだ。

お芳　えゝ。

トお芳飛び退き、長吉をぢつと見て居る、長吉はどうしたのだといふ思入、お芳長吉の側へ摺り寄つて

おゝ、あなたぢや、あなたぢや。

長吉　どうしたのだ〳〵。（ト長吉薄氣味惡き思入にて、段々後退りをする。）

お芳　あなたぢや〳〵、やつぱりあなたぢやわいなあ。（トお芳見惚れる。）

長吉　何だか、さつぱり譯がわからねえ。こいつァひよつと、（ト眉毛に唾をつけて、）つまゝれやあしねえか知らぬ。（トよろしく思入、此うちお芳こなしあつて、）
お芳　あなた、ようまあお出でゝございましたなあ。
長吉　おめえもいゝ氣な人だぜ、よう來た所か此舞臺から、お前が爰へ飛びおりて、ぐつといつてしまつたから、來合せたのが掛り合ひと、連れを呼んでも音沙汰なし、仕方がねえから介抱して、水を吹いたり呼び生けたり、やつとお前が氣が附いたのだ。
お芳　えゝ、そんならあなたの御介抱で、心が附きましたのかいなあ。（ト嬉しき思入。）
長吉　そりやあいゝが、おい姉さん、どういふことの不料簡で、こんな無分別を始めたのだ。
お芳　はい、是れには深い樣子があつて。
長吉　そりやあ死なうといふ位だから、どうせ樣子はあるだらうが、（トお芳を見て、）此いゝ娘が死なうといふのは、やつぱり意氣な仕事だね、どこのどいつか知らねえが、お前に思ひ附かれるとは、仕合せものもあるものだなあ。（トお芳恥かしき思入にて、）
お芳　はい、其のお方に添はれぬゆゑ。
長吉　何だと、とんだ惚氣を聞くものだ、さうしてそりやあ、何處の人だえ。

お芳　あの、其のお方は。
長吉　むゝ、その野郎は。（ト此うちお芳は長吉をぢつと見て、）
お芳　あの、お前さんで。
長吉　え。
お芳　ござりますわいなあ。（ト袖にて顔を隠す。長吉びつくりして、）
長吉　どうしたとえ。（ト是れにて誂へのなまめきたる合方になり、お芳思入あつて、）
お芳　あなたはお忘れなさいましたか、丁度去年の夏のこと、暑さを凌ぐ夕涼み、花水橋の群集の中で。
　　　　ト此うち長吉思入あつて、
長吉　おゝ、思ひ出した、道理こそ見たやうだと思つて居たが、其時に川は花火で大騒ぎ、石置場の河岸ツ端、並んで繋つた船と船。
お芳　簾を揚げた其時に、縁を運ぶ戀風が、身にしみ〴〵と愛しうて。
長吉　こつちも心有松の、浴衣で汗をふく風に、ふつと薫つた鬢の香に、おいゝな氣持に夏の雨。
お芳　心で濡れし仇浪の、見ず知らずなるあなたをば。
長吉　こがれた船で氣があれば、目も口ほどに夕立の。

お芳　思ひのたけの棹さして、それから船は右左。
長吉　分れて今日まで逢はなんだが、
お芳　不思議なことで計らずも、
長吉　爰で逢つたも、何その約束、
お芳　つきせぬ縁で、
長吉　いや、あつたなあ。（ト兩人よろしく思入あつて言ふ。）
お芳　さうしてあなたのお家わえ。
長吉　家を開かれて面目ねえが、是れから左のみ遠くもねえ、蛇ヶ谷の二丁目で、ほんの猫の額ほどな裏家住居のなまけもので、鷲の長吉といひやすが、さうしてお前の家はどこだえ。
お芳　はい、わたしの家は雪の下の廣小路で、江島屋といふ質屋の娘、よしと申しますわいなあ。
長吉　はあ、そんなら立派な角屋敷、質兩替のお嬢さんか。
お芳　是れを御縁にあなたの家へ、參りましても、大事ござりませぬかいなあ。
長吉　そりやあ譯なし、いつ何時でも。
お芳　きつとわたしは參りますぞえ。

長吉　來るのはいゝが、家を見ちやあ、こいつァ愛想が盡きるだらうよ。
お芳　何で愛想の盡きること、手鍋提げるが、
長吉　え。
お芳　望みぢやわいなあ。

トお芳媚いていふ、大拍子になり、下手より以前のお繁お米出來り、お芳を見て、

お繁　モウシ〳〵お孃さま、爰においでなされましたかいなあ。
お米　わたしら二人が苦勞をして、どのやうに搜したか知れぬわいなあ。
お繁　さあ〳〵お孃さま、定めてお家で、お案じなされてゞござりませう、ちやつとお歸りなさりませ。

トお芳の手を引く、お芳は長吉に見惚れて居る、此時長吉前へ出て、

長吉　それぢやあお前さん方は、此孃さんのお連れかえ。
兩人　はい、左樣でござりますわいなあ。
長吉　そりやあ丁度いゝ所だ。娘御さんとわしと二人爰に居たら、お前方もをかしくも思ひなすつたらうが、斯ういふ譯だお聞きなせえ。此娘御が舞臺から傘を持つて飛び下りたところへ、わしが通り合せ、一遍息を引附けたお孃さんをば介抱して、やう〳〵心が附いた所、お連れとあればしつ

かりとお前方お二人へ、きつとお渡し申しました。

お繁　それではあのお孃さまが、此高いところから。

お米　何でまあ其やうなこと、それでも何處にもお怪我もなく、

お繁　お前さまの御介抱、何とお禮を申しませうやら。

兩人　有難うござりまする。（ト兩人にて禮をいふ。）

長吉　何さ、それぢやあ却つて氣の毒だ。（ト此うちお芳長吉を見て、いゝ男だといふ思入）さあ姉さん、もう連れが來りやあ大丈夫だ、ちつとも早くお歸んなせえ。

お芳　それでもわたしや。

お繁　是れはしたり、お孃さま、早うお立ちなされませ。

お米　またお袋さんに叱られるわいなあ。（ト兩人にてお芳を無理に引立てる、お芳不承々々立上り。）

お芳　そんならあなた、きつとお家へ。（ト長吉へ思入、お繁心附きし思入にて、）

お繁　ほんにお宅へ、此のお禮に。

お米　お家を聞いて置かしやんせいなあ。（トお米、お芳の袖を引く。）

お芳　えゝも、わたしが知つて居るわいなあ。

ト袖を振拂ふ、お繁お米は心の附かぬ思入、唄になり、お芳長吉を見返るを、お繁お米せき立て花道へはひる、長吉跡を見送つて、

長吉　おい〳〵、氣を附けて行きなせえよ。（ト合方になり、）妙な事があるものだぜ、去年の夏あの娘に船で逢つた其時も、こいつァ旨く行きさうだと思つた所へ俄雨で左右に別れてそれなりけり、今日もまた思はず出會し、おつりき話しになりかけて、ちよつと一口初ものと兆した所へ連れが來て、たうとう娘は玉なしだ、去年と今年で丁度二度だ、何だかをかしな心持だぜ。（ト此時時の太鼓の頭を打込む、是れにて長吉びつくりして、）えゝびつくりさせらァ、はゝあ開帳だな。どれ、おれもお參り申して來ようわえ。

ト合方通り神樂になり、長吉石段を上り上手へはひる、跡双盤になり、下手より朝比奈の子分六人、揃ひの着附、尻端折りにて出來り、

子一　けふ親分からの知らせにやあ、明石關と仁王關が、昨日の角力が遺恨となり、

子二　喧嘩仕掛けに仕掛けたところ、兄弟仲ゆゑ親分が、

子三　其出入りをば買取つて、明石の所へ仕掛ける魂膽、

子四　向うも名に負ふ明石關。

子五　まだ其上に夢親分が、
子六　尻押しといふ事ゆゑ、
子一　爰で明石の歸るを待受け、
子二　手柄は仕勝ちだ、必ずともに、
子一　二手に分れ小隱れして。（ト皆々囁き合ひ、）ぬからぬやうに。
皆々　合點だ。

ト皆々よろしく左右へ別れて小隱れする。三味線入り大拍子になり、舞臺の上手より市郎兵衞、深編笠、以前の志賀之助と記したる羽織を着て、石段を下りて花道の方へ行きかける、此時子分六人、左右より窺ひ居て、

子一　志賀之助、
五人　覺悟しろ。

ト早き大拍子になり、縫ぐるみにて打つてかゝる、市郎兵衞心得右左へ投げ退ける、又六人起き上つて掛るをよろしく立廻つて、皆々を追廻す。是にて叶はず皆々下手へ逃げてはひる。市郎兵衞塵を拂ひちよつと肩にて笑ひ、悠々として花道へかゝる。此時舞臺の上へ以前の藤兵衞出掛り居て、

藤兵　おい〳〵市郎兵衞、ちよつと待つて貰はうかえ。（ト是れにて市郎兵衞立ちどまり、）
市郎　おれを呼んだは、誰だ。
藤兵　おゝ、朝比奈が呼んだのだ、ちよつと爰まで歸つて下ツし。
市郎　むゝ、呼び留めたが朝比奈ぢやあ、こりやあ歸らずばなるめえわえ。
藤兵　面倒ながら、
市郎　どりや、そこへ行かうかえ。
トこれにて誂への男達の合方になり、市郎兵衞本舞臺へ來る、藤兵衞も平舞臺へおりる、市郎兵衞この時笠を取つて思入、兩人よろしく眞中の床几へかゝる、市郎兵衞思入あつて、
藤兵衞どん、おれを呼んだは改めて、爰で聞くにやあ及ばねえ、定めて仁王が腰押しだらうの。
藤兵　そりやあ言はずと知れたことよ、丁度去年の今頃も、ゝおつに搦んだ達引で、呼び留めて出て出入をしたが、やつぱり今年も重年で、一度が二度目二丁目で、三本足りねえ猿智慧も、おめず臆せず初春だけ、のたり突ん出た朝比奈藤兵衞、喧嘩の相手に不足のねえ、かたじけ茄子の初夢と異名を取つた市郎兵衞、仁王の腰をおしきせの、せりふも角ある九字菱を、切るといふのも達師の意地、命の遣り取り朝比奈が、今日淸水での對面も、兄弟だけに肩を持つのだ。

市郎　さう始めから喧嘩腰で、名乘り掛けての出入なら、身にふりかゝつた禍も三年足かけ四年目で、やつと故郷へ歸り早々、憎まれ口もきゝたくねえが、異名は夢でも達引にやあ、寐たことのねえ市郎兵衞、乘掛つたらどこまでも浪乘り船の音羽屋と、一番腕を播磨潟、明石の腰をどこまでも、押の强いも合點で、遣るところまで八ッ花形、花に嵐の落花狼藉、どうで命も塵芥、つもる恨みも今爰で、晴れの勝負は貴様とおれで。

藤兵　仁王明石の遺恨の引受け、

市郎　二人が恨み火花を散らして、

藤兵　花の吹雪の白刃と白刃、

市郎　兄貴の返報、

藤兵　弟が仕返し、

市郎　さあ、

藤兵　さあ、

兩人　さあ〳〵〳〵。何を。

ト早めたる双盤になり、兩人身ごしらへしてきつと見得、是れより誂への鳴物になり、拔きつれて石段

を使ひ、存分に立廻り、是れより大神樂の囃子になり、兩人平舞臺にてきつと見得、此時以前の長吉、石段の上へ出て、此體を見て平舞臺へ下り、其中へ這入り留めること、これを兩人振拂つてまた切り結ぶ、長吉有合ふ床几の毛氈を取つて、兩人の白刃の上へ冠せて此上へ乘りきつと留める、兩人も右左へ別れ、三人一時の見得。藤兵衞市郎兵衞、長吉を見て、

藤兵　若えの、留立てしてくれるな。

市郎　仁王明石が遺恨ゆゑ、

藤兵　命のやりとり此場の出入、

市郎　怪我せぬうちに、

兩人　退いた〳〵。(トきつといふ、長吉思入あつて合方になり、)

長吉　いゝや退かねえ退かれねえ。切つはツつの叩き合ひ、山ほど人が集つても、ぶきみな刃物に誰あつて飛び込む人も內會から、歸りに見兼ねて飛び込んだ、わつちア土地の遊び人、古いせりふも燒き直し又新らしく建前の、雷門の破落戸だが、雲にきらめく稻妻の白刃を預かる料簡だが、此まゝ二人に彈かれちやあ、風の神ぢやあねえけれど、一人袋を背負はにやあならねえ、兄いか頭の出る所を、はねたわつちが飛び込むは、飛んだり跳ねたり替つた世界、その定見世の爺さん

と思つて口を菊五郎、爰は一番手を打つて、わつちに預けてくんなせえ。

ト思入あつていふ、兩人もこなしあつて、

藤兵　折角そつちが頼みゆゑ、

市郎　花を持たせて遣りてえが、

藤兵　けふの出入りはどうあつても、

市郎　預けることは、

兩人　出來ねえわ。（ト兩人きつと言ふ。）

長吉　それぢやあおれが是れ程に、譯を言つても聞かれねえか。

藤兵　是ればつかりやあ、

兩人　どうあつても。（ト是れにて長吉思入あつて、兩人の眞中へ胡坐をかいて、）

長吉　さあ、聞かれざあ仕方がねえ、何ぼこんな小二才でも、一旦中へへひつたからにやあ、指を啣へちやあ引込めねえ、わつちをすつぱり遣んなせえ、おれを殺した其跡で、どうでも勝手に勝負をしなせえ、是れなり跡へ引込んぢやあ、死んだ親仁や爺さんの面へ泥をば塗らにやあならねえ、さあ切んなせえ、いやさ、殺しなせえ。すつぱりやつて、（ト首を叩いて、）貰はうかえ。

ト きつと見得、兩人もじれ込みし思入にて、何かと刀を引く、此前方より上手へ以前の苫右衛門、下手より以前の朝霧出掛り窺ひ居て、此時苫右衛門朝霧前へ出て、兩人を支へて、

須磨　まあ〳〵待つた、待つてくれ。

朝霧　夢親方も待つて下せえ。（ト兩人を引分ける。）

藤兵　や、お前は關取、

三人　須磨の浦どの。（トいふ內苫右衛門眞中へはひつて。）

須磨　まあ〳〵、兎も角も朝比奈どの、市郎兵衛どのも、まあ〳〵靜かにして下せえ。（ト長吉に向つて。）これ長吉どの聞いて下せえ、實はおれが年役だから、此出入りの眞中へ留めに出ようと思つた所、貴樣がそこへ飛び込んで、見ず知らずの喧嘩を留めて、命を取れとは流石は江戸ッ子、ちつと見ねえ其うちによつほどいゝ肚胸になつた、じみた事をいふやうだが、實におらア淚がこぼれた。（トちよつと思入あつて、）本當にこんないゝ若い者になつた所を、死んだとつさんやぢいさんに、見せてやりてえ。實に後世恐るべしだ。（トよろしく思入、又兩人へ思入あつて、）さあ是れからはお前方に、賴みといふは外でもねえ。二人も當時は顏を賣る、若い同士の達師と達師、どつちに怪我があつてもならねえ、爰はおれが賴むから、此場の出入りは此兄ィに、どうぞ預けて遣つてく

んねえ。

朝霧　わしも師匠のことに附き、親分手合のこの喧嘩、留めに出たくも出られはせず、どうかおれも精出して、一人前の闘取になつたらどうか遣つて見てえと、氣ばかり揉んで居りました。

須磨　不承もあらうが二人とも、おれの言ふこと聞いて下せえ。（ト是れにて兩人も思入あつて。）

藤兵　元々わし達二人が、遺恨で出入りをするぢやあなし、

市郎　おつなとこから意地となり、仁王明石の仕返しをば、

藤兵　身に引受けた事なれば、そつちが預ける心なら、

市郎　貴樣が預ける心底なら、

長吉　それぢやあわつちの顏を立て、

藤兵　綺麗にこの場は、

兩人　預けませうよ。

須磨　なに、そんなら此場を預けてくれるか、えゝ有難えく、是れで二人に怪我もなく、又長吉どのの顏も立つといふものだ。

朝霧　わしも是れで安心しました、どうなる事かと手に汗を握つて居ました。

須磨　これ朝霧、貴樣やおればかりぢやあねえ、御見物樣が御安心だ。（ト見物へ思入。）

藤兵　飛んだことでとつさんに、

市郎　いかい苦勞をかけました。

長吉　須磨の浦の親方が、口を添へたばつかりで、わしも男になれました。

須磨　何さ、斯ういふ時でなくつちやあ、年寄の使ひ道はありやあしねえわ。

朝霧　斯ういふ事になつたときは、實に年寄が道具でござりまする。

須磨　えゝおだてゝくれるな、あはゝゝゝ。

朝霧　それぢやお戻りに、師匠の家へ。

須磨　委細はおれが、話しをするわえ。（ト此時藤兵衞市郎兵衞思入あつて。）

藤兵　然し預けた、

藤兵
市郎　出入りのばつは。

長吉　何れ明日まで長吉が、異名の鷲の一摑み、しつかりわつちが呑込みました。

須磨　流石は長吉、ヨウー。

ト苫右衞門感心だと手を拍つ、藤兵衞市郎兵衞刀を鞘へ納める。朝霧は明石の羽織を肩へかける。長吉

は手拭をふるふ。双方見合つて、木の頭。此仕組よろしく、双盤小太鼓の通り神樂にて、

ひやうし　幕

五幕目

大磯仲の町の場

淨瑠璃　京町の猫通ひけり揚屋町　鼠鳴色逢夜　（淸元連中）

【役名――深見十三、新造胡蝶、三浦屋の遣手お辰、同若い者。三浦の傾城薄雲、若菜屋の娘お花、薄雲禿しげり、新造、禿等。】

（八町堤の場）――本舞臺一面の淺黃幕、上手に柳の立木、日覆より同じく釣枝、下手に葭簀張りの出茶屋、金鍔燒の掛行燈、總て八町堤の體、通り神樂にて幕明く。と上下より吉原踊り素見の仕出し、思ひ思ひのこしらへにて出て、セリフあつて入違ひ、上下へはひろ。やはり右の鳴物にて、花道より町飛脚箱をかつぎ出て來ろ、上手より金助、田町茶屋の若い衆の形にて、白丁の德利を持ち出來り、舞臺にて行きあひ、

飛脚　もし、そこらへお出でなさるのは、田町の增田屋の、金助さんぢやあござりませぬか。

金助　おゝお前は飛脚屋さん、昨日は大きにお世話でござりました。

飛脚　へい、どういたしまして、今參りがけにお見世へ寄りましたら、お客樣を送つて仲においでと聞きましたから、どうで萬字屋まで參る次手ゆゑ、お目にかゝつてお返事を申さうと、存じた所でござりまする。

金助　さうかえ、それぢやあ返事が來ましたかえ。

飛脚　へいお返事も參りました、さうして是非逢ひたい用があるから、明日の朝早く來てくれろとおつしやいました。

金助　何だ早朝に來てくれとか、何の用だ知らぬ。（ト此内飛脚屋箱の中より封じたる手紙を出し）

飛脚　これがお返事でござります。

金助　大層長い手紙と見えて、べらぼうに大きな封じだ。

飛脚　何にしろ讀んで御覽じませ、もし又御返事でもなさるのなら、どうで今日はまたあの邊まで參りまする。

金助　それぢやあ、ことによつたらお頼み申します。

ト金助手紙を廣げて、「淨瑠璃名題京町の猫通ひけり揚屋町鼠鳴色に逢夜、淨瑠璃太夫相勤めまする役人――」トよろしく淨瑠璃觸れを讀む、飛脚屋思入あつて、

飛脚　もし〳〵金助さん、をかしなお返事でござりますね。
金助　所がこれで用が辨じるのだ。
飛脚　そんならあちらへお返事は。
金助　きつと明日の朝は、早く行くと言つて下さい。
飛脚　畏りました。
金助　いゝかね。
飛脚　よろしうござります。
金助　その爲早朝、
飛脚　左樣、なら。

トやはり通り神樂にて上下へ別れてはひる、知らせに附き、柳の立木出茶屋を引いて取り、淺黄幕を切つて落す。

（仲の町假宅の場）――本舞臺四間通し常足の二重、本緣附き、下手三尺の落間、これへ若菜屋と記したろ柿の三尺暖簾をかけ、軒先き綺麗なる板圍、正面風流なる襖、上手へ障子をはめたる緣起棚、此下墨

繪を書きしけんどん、此天井へ繭玉をさげ、上下の褄はすに飾り、帶のある茶壁、よき所に本物のきれいなる障子屏風、舞臺上手黒塗の大きなる門、此内遊女屋を見たる片遠見の屋體、下手黒暖簾のところより船板の塀、このうち二階家の心にて青簾をおろしたる淨瑠璃臺、やはり塀の内へ櫻の立木、日覆より同じく釣枝、總て大磯仲の町假宅の模樣。爰にお竹下女の裝にて煙草盆を二つ程並べ、灰ならしにて火をいけて居る、此見得よろしく、名古屋名物の合方、通り神樂にて道具納まる。とやはり右の合方にて、下手より貸本屋本宗風呂敷を背負ひ、手に四五册本を持ち、貸本屋にて出來り、

本屋　へい今日は、結構なお天氣でござりまする。

お竹　おや本宗さん、さつぱりお遠々しいね。

本屋　いえ左樣ではござりませぬ、一昨日上りましたが、お前さんがお見えなさいませなんだ。

お竹　おやまあ、さうだつたかねえ、何か今日は持つてお出でか。

本屋　へい、此間お梅さんがお頼みでございますから、田舍源氏を持つて參りました。

お竹　さうでござんすか、それではわたしが預かつておかうわいなあ。

本屋　どうぞお願ひ申しまする。（ト本をお竹に渡して、）へい、宜しくおつしやつて下さりませ。

お竹　まあ一服呑んでお出でな。

本屋　有難うござります、へい左樣なら。

ト貸本屋は捨ぜりふにて上手へはひろ、お竹本をよき所におき、煙草盆を片附け、

お竹　もうおいらんのお出でに間もあるまい、其うちちよつと髮でも撫附けておかうわいなあ。

トやはり右の合方にて奥へはひろ〻花道の揚幕にて。

皆々　太夫さん、ござんせいなあ。

トこれにてすがゞき通り神樂になり花道より、薄雲、傾城好みのこしらへ、打掛三ッ齒の駒下駄、若い者長柄を差しかけ出來ろ、此跡より禿しげり、長煙管を持ち、他の禿蒔繪の煙草盆を持ち、此次へ新造三人、此あとへお辰の遣手、三浦屋の若い者二人、みな〳〵花道へよろしく居並び、薄雲思入あつて、

薄雲　面影のうつらぬ時もなかりけり心や花の鏡とは、身に薄雲の名はあれど、曇らぬ廓の春景色、よい眺めではあるわいなあ。

新一　色ある廓といひながら、花の頃には誰れさんも心もはれて一樣に、まぶちの霞ほんのりと、

新二　氣も春風に花の香を、慕うてこ〻へ如月の、空ものどけき青簾、

新三　見世すがゞきも引きつれて、三筋の霞三味線の、初音うれしき鶯の、

しげ　戀の巻を魁の、若紫のすり衣、

禿二　一重に二重みよしのに、まさる廓の花盛り、

お辰　こちらは咲いた花よりも、お客のはなの實入りよく、額についたる櫻をば、いつち餘計にほしいわいなア。

若一　わたしは赤でも小白でも、其咲分けの嫌ひなくしめたら春より懷が、ほか〳〵するでござりませう。

若二　こつちは花が酒ならば、禁酒のことゆゑ八重なりの、餡ころ餅の山吹色、慾氣をはなれて喰ひ氣の方、

新一　何は兎もあれ太夫さん、定めてお客のお待ちかね、

お辰　ほんにさうでござんせう。少しも早く若菜屋へ、

新二　それでは早う、太夫さん、

新三 皆々　さあ、ござんせいなあ。

薄雲　禿來や。

禿 二人　あい――。

トやはり右の鳴物にて、この人數みな〳〵本舞臺へ來る、奧より以前のお竹出來り、

お竹　おいらん、お早うござりましたわいなあ、先刻からお客様が、お待ちなされてゞござりまする。

薄雲　さうでござんしたかいなあ、早う來ようと思うたれど、

新一　さうでありんす、仲の町の門並で、

新二　薄雲さんの太夫さんのと、聲を掛けて下さんすゆゑ。

新三　ちよつと寄つても門多ゆゑ、つい手間が取れるわいなあ。

お辰　わたしがあくせく氣を揉んで、やつとの事で今爰へ。

お竹　何はともあれおいらんには、こちらへお上りなされませいなあ。

ト是れにて新造一、二にて手を取り、薄雲二重へよろしく住ひ、思入あつて、

薄雲　あの今日は、お梅さんはえ。

お竹　はい、只今髪を結うてゞござりまする、今御挨拶に出ますわいなあ。

薄雲　ほんに何時でもよい嗜み、綺麗なことであるわいなあ。

お辰　モウシおいらんえ、お梅さんは此ごろでは、揚屋町に當があるゆゑ、格別磨きに念が入りますわいなあ。

若一　そんならお梅さんの當といふのは、揚屋町かえ。

若二　それは大きに勘定違ひだ。
新一　そりやまた、なぜでありんすえ。
若一　わしか喜助か二人のうちへ、
若二　札が落ちる筈であつたが。
新二　おやまあ、あつかましい。
新三　鏡と相談。
三人　しなさんせいなあ。
兩人　これは御挨拶。（ト此時お辰前へ出て、）
お辰　モウシおいらんえ、それでは是れからわたしらは。
薄雲　皆も一緒に家へいいて、後に迎ひに來て下さんせいなあ。
新一　それでは一緒に、なあ皆さん。
新二　連立つて行かうわいなあ。
新三　そんならおいらん。
皆々　又のちほど。

薄雲　しげりは跡へ殘つてたも。
しげ　あい〳〵。
お辰　これ〳〵しげり、おいらんの側に居るのぢやぞ、惡戲をしてはならないよ。
しげ　あい。
お竹　皆さん、今にござんせい。
若一
若二　それではおいらん、御機嫌よろしう。
お辰　皆さん一緒に。
新一　さあ、行かうわいなあ。
新二　太夫さん。
皆々　後にえ。
お竹　どれ、わたしもお出でを、知らせようわいなあ。

トやはりすがゞきになり、皆々は上手へはひる、あと薄雲殘り、時の鐘跳への合方になり、しげりの禿煙草盆長煙管を薄雲の前へ置くこと、薄雲よろしく思入あつて、

薄雲　花咲く春もおのづから、浮かぬ心に夕告げの鐘に無常を知るとやら、此世を去りし父さんの然も

其日の廻り來て、猶忘られぬ果敢ない御最期、心のまゝに香華さへ手向けかねたる憂き勤め、これを思へば川竹の、苦界に果はないわいなあ。

ト薄雲長煙管をついてぢつと思入、知せに附き下手二階家の簾をあげる、内に淸元連中羽織袴にて居並び、前彈なしに直に淨瑠璃になる、

〽憂きことの積る思ひを雪ならで、花の吹雪の身にしみ〴〵と、無常を告ぐるかね言を、戀慕流しか尺八に、心のたけを吹く東風が、誘うて爰へきさらぎや。

ト薄き風の音になり、櫻の花散る、薄雲は物思ひの思入、よき程に此文句のうち、花道より深見十三、天蓋を冠り、尺八を持ち、伊達袋虛無僧好みのこしらへ、塗下駄にて出來り、花道へ留り、

十三　行水の數かくよりも果敢なきは思はぬ人を思ふなりけりと、慈鎭和尙がよみ歌も、我が身の上に逢坂の心の關路通ひ來て、深き思ひを薄雲の、晦日に月のあるさとも、戀の闇路に迷ふとは思案の外の煩惱ぢやなあ。

〽よしや包まじ袖の香に、引かれくるわの仲の町、暫しこなたへ佇みて、

ト本舞臺へ來り、よろしく思入あつて、十三裏向きになり、尺八を吹く、合方にてしげりの禿薄雲の傍へ來り、

禿　モウシおいらん、虚無僧さんが來なんしたぞえ。（ト是れにて薄雲思入あつて、）

薄雲　おゝ、ほんに梵論字どの、今日はわしが父さんの丁度忌日に當るに依て、これしげりや報謝してたもいなう。

禿　あいあい。

〽あいとしげりが合點して、報謝包んで持つて出で、

トしげり報謝を紙に包み、持つて平舞臺へ來て、十三へ思入あつて、

申しお修行者さん、志しを上げますぞえ。（ト十三に渡す。）

〽渡す施物の包みより、つゝみ兼ねたる戀衣。

ト十三施物を取つて、懐へ入れ、薄雲へ思入あつて、また尺八を吹きにかゝる、薄雲思入あつて、

薄雲　あゝモウシ梵論字さま、あなたにちよつとお願ひがござりますわいなあ。

十三　何といはるゝ、雲水の身の梵論字に、情を繫ぐ傾城どのが。

薄雲　さあ其お願ひと申しまするは、幸ひ今日は志す佛の忌日に當りますれば、おむづかしくとも御回向を。

十三　回向とあれば、修行の身なれば。

薄雲　お手向けなされて下さりまするか。

十三　如何にも、手向けの一曲をば。

薄雲　左樣なれば、どうぞ是れへ。

十三　然らば、それへ參るでござらう。

〽面を覆ふ天蓋の内ぞゆかりの香を運ぶ、風さへ胸に浪打ちて、どこやらふつと水際のたつた浮名を岩つゝじ、花に露をや含むらん。

ト此文句のうち、十三天蓋を取り薄雲と顏見合せ思入、此時薄きドロ〳〵のやうな風の音になり、薄雲ぞつとせしこなしにて、うつとりと十三に見惚れる、十三二重へ上り、附廻しに十三上手へ住ふ、兩人よろしく思入、

〽折柄こゝへ生娘のいろけ白齒か白梅の、名もかんばしき茶の花香、茶碗携へ立ち出でゝ。

ト此文句にてお梅島田鬘、茶屋の娘のこしらへにて、腰高の茶臺へ茶碗を載せ持つて出來り、

お梅　これはまあおいらん、誠に失禮を申しましたわいなあ、今髪結さんが來て居ましたゆゑ、御挨拶もいたしませぬ。眞平御免なされませいなあ。

薄雲　お梅さん、いつもながら美しいことでありんすわいなあ。

お梅　あれまた、おいらんの程ばつかり、おほゝゝゝゝ、（ト十三を見て、）これはまあ御修行者様、ようお出でござりました、お茶一つお上りなされませいなあ。（ト茶を出す、十三取つて、）

十三　これは〳〵、必ずお構ひなされまするな。

お梅　モウシおいらん、今ちよつと承はりましたが、何かお志しがござんすのでござりますかいなあ。

薄雲　それぢやに依つて、あなたをば。

お梅　さうでござんすかいなあ、あなた御苦勞さまでござりまする。（ト十三をよく〳〵見て、）モウシおいらんえ、こんな事を申しまして、をかしなやうでござりますが、斯うお見受け申しました所が、御器量といひお形といひ、モシおいらん、佛様の御回向より、お前がどうやらお志しが。

ト薄雲へ思入にていふ。

薄雲　あれまあ、お梅さん、そんな事をば。

お梅　どこというて拔目のない、丁度あなたと。

薄雲　え。

お梅　よいお似合でござりますわいなあ。

〽口には何といはた帶、心で結ぶ神ならで、ほどけ掛りし風情なり。

ト此うち薄雲うれしきこなしにて十三に向ひ、

薄雲　あのモウシあなた樣え、お前さまは本當の梵論字さんでござんすかいなあ。

十三　はて、異な事言をはつしやる、修行者と申すより何で僞り申しませう。

お梅　いえ〳〵さうではござりますまい、其御修行とおつしやりまするは、色事の御修行でござりませうわいなあ。

薄雲　ほんにさうで、ありんせうわいなあ。

十三　これはまた怪しからぬ、どうして身共が。

薄雲　いえ〳〵お隱しなされますな、どうぞ言うて下さんせいなあ。（ト十三思入あつて、）

十三　いや、其やうに言はるれば、包まず言うて聞かせませう。

お梅　それ御覽じませ、さあ〳〵、早うおつしやりませ。

十三　恥かしながら薄雲どの、そなたの名をば聞き及び、かゝる姿に身を窶し、此廓へ參つたのぢや。

薄雲　あれまあ、其やうな事いはしやんして、何で賤しいこのわたしを。

十三　いやも、面目ないが、眞實そもじに。

薄雲　アノほんまに、（ト嬉しきこなし。）
十三　何で嘘をいふものぞ。
薄雲　さうしてあなたの、お名前はえ。
十三　さ、さる頃までは仕官の身の上、ふとせしことにて只今にては、浪々なしてかすかな住居、深見十三と申すもの。
薄雲　そんならあなたは、十三さま。（ト薄雲なまめいて言ふ、お梅思入あつて、）
お梅　ほんにあなた、よいお名前でござりますわいなあ、それに御覧じませ、とう〳〵あなた本性をば。
十三　や。
お梅　もしおいらんえ、もう斯うなつたら佛臭い御回向はあとのこと、ちよつと、お初會のことなれば、そこはお茶屋の役廻り、お引附けをせねばならぬわいなあ。（ト手を叩いて、）お竹やちよつと御酒を持つてお出で。（ト奥へ向つていふ、奥にて、）
お竹　あい〳〵。
ト始終合方にて、お竹小ぶりの能代の廣蓋の上へ、本物の綺麗なる酒肴を載せ持つて來て、直に奥へはひろ、お梅よろしくこなし、

お梅　さあ〳〵、お一ッお上りなされませいなあ。（ト杯を取つて十三へさす、）
十三　これでは却つて、氣の毒千萬。
お梅　何のまあ、氣の毒なこと。これ〳〵、お前お酌をして上げて下さんせいなあ。
禿　あい〳〵。（ト酌をして、）モウシおいらんえ。
薄雲　何ぢやぞいなう、用ありさうに。（トしげり十三に指ざしして、）
禿　あの虛無僧さんはね。
薄雲　あのお方が。
禿　よいお人でござんすわいなあ。
お梅　こりやあ子供の目が、慥かでござんすわいなあ。
〽言の葉を絲で結びしその下心、戀といふ字に讀み習はして、恨み妬みもつれなさも、仇も情も僞りも此結び目の解けてより、よい〳〵〳〵戀ぢやえ。
トしげり、薄雲十三を取持つ心にて、振りよろしくある、此内兩人は酒盛りをして居る、お梅酌をしながら、取持つことよろしくあつて、
イヨウ〳〵、こちのしげりさま、親はないか。

ト よろしく褒めること、薄雲少し醉ひたる思入にて、十三の側へ寄り、

薄雲　あのあなたえ、今おつしやつたお詞は、本當のことでござんすかえ。

十三　何で嘘をいふものぞ、浪々なしても深見十三、僞り言うてよいものか。

薄雲　それが定なら。（ト恥しき思入）

お梅　あのお嬉しさうなお顏わいなあ。

ト 薄雲の背中を叩く、薄雲うつとりこなしあつて、有合ふ田舍源氏の本を取つて、

薄雲　もし、此本は何でござんすえ。

十三　はて、これは名代の田舍源氏、故人になられた種彥の、人も知つたる作意ぢやわいの。

薄雲　それでもわたしや此外題の、僞紫が氣になれど。

〽初の御見に三浦屋の薄雲といふ名指しとは、よう來南枝の梅ヶ枝も、初手の莟も綻びていつか色香も匂ふ宮、初會は何の須磨明石、二度から藤のうらなじみ、どうした花の宴ぢややら、またの逢瀨を松蟲の、寐てから夢の浮きなかに、せめてうつゝか幻に胸の思ひは氣を紅葉笠、中を結ぶの揚卷もとけてほぐれてしめかねる、人目あらしについ寄り兼ねて花散る里ぢやないかいな。

ト十三薄雲お梅搦んで口説きの振りよろしくある、お梅思入あつて、

お梅　もしおいらんえ、もうお座敷はお片附け、是れよりお二人しつぽりと。

十三　あゝこれ、お梅どのとやら、まそつと話しな。

お梅　いゝえ、却つてお邪魔でござりませう、お二人とも御遠慮なく。

兩人　え。（ト思入）

お梅　跡でゆつくり、（トしげりの手を取つて）しげりおじや。

〽口あひ交りそこ〳〵と、跡に心を奥の間へ氣轉きかして走りゆく。

ト お梅よろしくこなしあつて、しげりの手を引き奥へはひる。

〽跡には流石二人して、物いふ花の香を覆ふ、〽まだ色氣さへつくばねや、一夜に二夜身仕舞もやう〳〵昨日京町の猫通ひけり揚屋から、迎ひ新造の媚きし菜の葉に狂ふ胡蝶とて、翼にあらで五ツ羽の、はずみ〳〵て來りける。

ト十三薄雲よろしく寄添つて居る、爰へ此文句のうち、胡蝶、新造好みのこしらへ、羽子板を持ちよろしく振りあつて舞臺へ來り、兩人を見てちよつと佇む、ドロ〳〵のやうな風の音になり、十三胡蝶を見てちよつと飛び退く、薄雲本意なき思入、胡蝶二重へ上り、兩人の眞中へ住ひ、思入あつて、

胡蝶　もしおいらん、まだ爰においでなんしたかえ。

薄雲　おゝ誰かと思うたら、そなたは胡蝶、何しに來たのぢやぞいなう。

胡蝶　さいなあ、あの式部さんがござんして、お前にちよつと逢ひたいと、さつきにから待つてゞござんす、それで迎ひに來たのぢやわいなあ。（ト十三をきつと見て、）さうしておいらん、あのお方はえ。

薄雲　あのお方はの。

胡蝶　どこのお方でありんすえ。

薄雲　さあ、今日わしが志しの、佛樣があるゆゑに、御回向をばお願ひ申したのぢやわいなう。

胡蝶　そんならあのお方が、（ト十三をぢつと見て凄き思入、また氣を替へて薄雲に向ひ、）さうでござんすかいなあ。（ト優しくいふ。）

〽散りかゝる花とや人の惜しむらん、思ひ返して見し夢の、枕のあくた積りては、身の隱れ家の戀の山、登りつめては何時しかに、我がつみ草のかざしとは、思ひつくしや早蕨の野邊さへ燃ゆる春の風。

ト此文句のうち、薄雲は十三に寄添ふ、此中へ胡蝶はひり、邪魔をすること、總て二面の模樣よろしく、あつて納まろ、十三こなしあつて、

十三　いやなに薄雲どのとやら、今日は思はぬ事ゆゑに、いかいお世話になりました。
薄雲　私こそはあなたさまの、御回向うけて何程か。
胡蝶　お嬉しうござんすかえ。
薄雲　あいなあ。
十三　また其内に、御縁もあらば。
薄雲　どうぞ御見を待ちますぞえ。
胡蝶　そんなら、あなた。（ト十三へ寄る。）
十三　あいや、お暇申すでござらうわえ。
薄雲　とはいへ、此儘。（ト寄添はうとするを胡蝶隔てゝ、）
胡蝶　御縁深見の十三さま。
薄雲　どうしてあなたのお名前を。
胡蝶　えゝ、（ト思入あつて、）お見知り越しに、知るお人でござんすわいなあ。
十三　どりや、お暇申さうかえ。
〽心に一物にこやかに、一禮なして梵論字の底意も深き天蓋を、打ちかざしてぞ歸り行く。

ト十三天蓋を持ち、こなしあつて花道まで行き、思入あつて花道へはひる。薄雲跡見送りうつとりとして居ろ、胡蝶はきつと向うを見込み居ろ。此時ドロ〳〵になり、指金の鼠出て薄雲の體に纏ふ。

〽時に不思議や怪しの鼠、心もうつゝ薄雲が、五體を纏へば胡蝶は見るより。

ト跳への合方になり、胡蝶ちよつと猫の思入あつて鼠を覘ふ。

〽覘ひ寄つてむんずと摑み、かたへゝ投げれば薄雲が、我に返りし鼠の障礙。

ト胡蝶件の鼠をむんずと摑み、舞臺へ打ちつける、是れにて薄雲心の附きし思入にて、胡蝶を見て、

薄雲　そなたは胡蝶。

胡蝶　あい。

ト胡蝶有合ふ羽子板にて、鼠を押へて隱す、薄雲はホツと溜息をつく、此の仕組よろしく、

〽怪しおそろし。（ト三重に薄ドロ〳〵を冠せよろしく、）

幕

六幕目

蛇ヶ谷裏借家の場

〔役名――朝比奈藤兵衛、ごろ附坊主小兵衛、同悴わしの長吉、巾着切幻次郎吉、江島屋の後家おさが、巾着切小雀忠次、ごろ附熊鷹眼八、同烏の勘次、同鳶の藤吉、同靑鷺五郎太、江島屋若い者嘉介、同與八。眼八女房おしやも、江島屋の娘お芳等。〕

（蛇ヶ谷裏借家の場）――本舞臺一面の平舞臺、上手一間折廻しの障子屋體、正面暖簾口、上の方一間の戸棚、下の方鼠壁、此下手板羽目、これに勝手道具をよろしく書割り、よき所に一ッ竈、いつもの所門口、總て蛇ヶ谷裏借家の體、上手に熊鷹眼八、突込み天窓、そぼろなる襦袢を着て、辻番へ跨がりあたつて居る、下の方に烏の勘次、鳶の藤吉、靑鷺五郎太いづれもごろ附好みのこしらへにて、寢轉びながら細見を見てゐる、此模樣さんげ〳〵にて幕明く。

と勘次細見を讀んで、

勘次　コウツト爰が伏見町か、何だ、ませ垣、眞菰、蓮の飯、千屈菜。

藤吉　こう〳〵待ちねえ〳〵、何だか精靈さまの買物に行つたやうぢやあねえか。

五郎　さうよ、あんまり馬鹿げた女郎の名だが、さうしてそりやあ何處の家の女郎だ。

勘次　家か、家はなによ、いゝいゝや、あはぼう屋平兵衛としてある。

藤吉　こう、伏見町にそんな家ァあつたッけなあ。

五郎　いゝやおらあさつぱり聞かねえが、何でも細見に出て居るから、どつかにあるにやあ違えねえが、不思議な家もあるもんぢやあねえか。

勘次　それだから、あすこを伏見町だと言はあ。

眼八　この野郎はさつきから、おれが默つて聞いて居りやあ、藤や五郎が無事だと思つて、好きなことを言つて居やあがらあ。

藤吉五郎　はゝあ、それぢやあ一ぺえ喰せやがつたのか。

勘次　どうだ、よけりやあ、もつと喰はせてやらうか。

藤吉五郎　ふざけやアがるな。

眼八　ときにこう、おれの女はどこに出て居る。

勘次　なに、手前の女といふのは、誰だ。

眼八　誰だつてべらぼうめ、極つて居らあ、角町の松村の家でかをるといふ女だ。

藤吉　こうかをるといやあ、昨夜廓へ行つたら、手前のことをすてきに惡く言つて居たぜ。

五郎　どうで何處でも善くは言ふめえよ。

眼八　さう人を安くするな、何といつても女は本ものだ、此三月年が明けるからお前の所へ行きてえと

いふから、手前がさういふ料簡ならおれもかゝあを叩き出して、手前の來るのを待つて居るつて言つたら、本當にさうかつて喰附きやあがつたが、いまだに脣がびりつきやあがる。

ト此以前下手よりおしやも、裏店の嚊アにて出で、門口に立聞して居て、これを聞き腹の立つ思入にて内へはひり、

しや　何だ、家のかゝあを叩き出す。

眼八　やあ、おしやもめ、そこに居たか。

三人　こいつァ大變だ。

しや　さあ叩き出すなら出すやうに、かたを附けて出しやあがれ。（トおしやもめそ〳〵泣出す。）

勘次　こう〳〵おしやもさん、そんなに怒んなさんな、眼コウだつても心からさういふ料簡でもねえけれど、ほんの常談に言つたのだ。

藤吉　まあ、そんな事を言はねえで、

五郎　機嫌を直して歸んねえ。

しや　やかましいやい、此一つ穴の貉野郎め、體のいゝことを言やあがるな。

眼八　この阿魔あ、おれが默つて居りやあいゝかと思つて、他人にまで喰つて掛りやあがつて、このカ

ルメラめ、どうするか見やあがれ。

しや　何だカルメラだ、カルメラで惡けりやあなぜ女房にしやあがつた、どうするかも凄じいやア。さあ、ぶつとも叩くとも勝手にしろ。

眼八　うぬ、ぶたねえで何うするものだ。

ト是れにて兩人むしり合ふ、勘次、藤吉、五郎太しきりに留める、合方になり、奥より坊主小兵衞褞袍半纏のこしらへにて出て、

小兵　これ、何だか知らねえが、大概にしねえか、やかましくッて寐られやあしねえ。

勘次　それ、親分が出て來なすつた。

藤吉五郎　靜かにしろ〳〵。（トこれにて皆々下に居る、おしやも前へ出て）

しや　もしおとつさん、聞いておくんなさい、わたしの家の馬鹿野郎め、此春なんぞもすつぱり取られ、どうか仕樣はあるめえかと、ぶる〳〵顫へて居やあがるから、わたしが去年中やきもきして、鼻緒を縫つてためた金が一分三朱ばかりあつたから、これで殺した着物を受けて明日から仕事に出るがいゝと、貸して遣つた其時にやあ、嚊ア大明神さまだなどゝ手を合せて拜みやあがつて、仕事に行くといつて出た日から、家へといつちやあ寄り附かず、こつちの家へ搜しに來りやあ一ツ

穴の貉野郎が居ねえといふから、歸つた振りで表へ來て聞いて居りやあ、女は本ものだもねえものだ、さうして其ざまあ見やあがれ、着せて遣つた着物は脱いでやつぱり元の襦袢一枚、髮といつたらむしやくしやと、まるで護摩壇の不動さまか、丹波の國から生捕つた荒熊のやうな顏色で、よく他人をカルメラだもねえものだ、おとつさんの前だが、わたしやもう腹が立つて〳〵なりやあしねえ。

ト叩きたつて泣く。

小兵　成程腹の立つのは尤もだが、眼パもお前に濟まねえといつて、言ひ暮しちやあ居るけれど、此頃の附けの惡さに、すつかり剝かれたもんだから、據なしに燻つて居るが、おれだつても惡かあしねえ、一番いゝのをこせえて遣るから、まあそんな事を言はねえで、今日はうんといつて歸んねえ、お前も可愛いとかいとしいとかいつて、夫婦になつた仲ぢやあねえか。

しや　いえ〳〵、いくらおとつさんがそんな氣休めを言ひなさつても、あの野郎の心は替つて居ます、何でも年明きの阿魔を呼ぶ積りで、わたしを邪險にしやあがるのだ。

小兵　これさ、馬鹿なことを言ひなさんな、是れが若いものぢやあなし、そんな事をするものかな、これ眼パ手前が詰らねえことを言ふもんだから、可愛さうに氣を揉んで居らあ。よく氣の落着くや

うに言つてやれ。

眼八　あい、言つて遣りませう。やい、まだめそ／＼と泣きやあがるか、外聞がわりいや、おれと一緒に表へ出ろ。

しや　誰が手前のやうな奴と出るものか。

眼八　まあいゝから出ろといふに。（ト無理に表へおしやを引張り出し、）これ、何をぐづ／＼いふのだ、おれが心を知つて居るだらうに、手前を捨てゝ何のつけにすべたを家へ連れて來るものか、今のやうに言つたのは、みんな嘘だ、おれが地金はこの通りだ。

トおしやを兩手で抱へろ。これでおしやも心が直りし思入にて、

しや　ほんとうに忌えましい浮氣野郎だよ、それぢやあ一晩こせえて貰つたら、きつと歸つて來やあがれよ。

眼八　いゝといふ事よ、そりやあ承知して居らあ。

しや　きつとだよ。

眼八　いゝといふことよ。

しや　ほんに、世話のやけた野郎だなう。（ト下手へはひる、眼八内へはひりて、）

眼八　いや親分、大きに有難うございます、みんなも喧しかつたらう。
三人　どうした、いゝ鹽梅に歸つたか。
眼八　やう／＼欺して歸しました。
小兵　ときに、もう日が暮れるが、どうだい夜食の支度はいゝかえ。
勘次　あい、飯は今炊いてしまひやした。
小兵　そいつは手廻しだつた、ヽヽこう大分今日は蛸が見えるやうだが、炊き立ての飯なら、刺身が喰ひてえものだ。
藤吉　それぢやあ行つて買つて來やせうか。
小兵　買つて來るはいゝが、錢がどうだ。
五郎　昨夜のばんこがヽヽヽ一本ばかりあります。
小兵　なに一本しかねえ、此頭へ四百ばかり貰つても喰ひたりねえが、もうちつとそこらにねえか。
眼八　どうだ勘次、手前昨夜大分いゝやうだつたが、ちつとばかり奢りやな。
勘次　ねえ／＼／＼、ねえのつらが十三ばい續いたので、すつかり昨夜すつてしまつた。
眼八　意氣地のねえ野郎だ、こう藤やい、あるなら出しやな。

藤吉　こう出せと言はねえでも、さつきから出したくツてむずくして居たのだ、憚りながらかんてんながら、年中懐に錢をたやした事のねえ男だ。

眼八　ごてえさうな事を言はずと、早く出せ。

藤吉　そら來た、これで有りツたけだ。（ト腹掛の隱しより十六文出す。）

眼八　何だ、文久がたつた二ツか。

藤吉　それでもねえにはましだらう。

眼八　ふざけやあがるな、大概にしろ、それぢやあ仕方がねえ、五郎手前そのあはぼうを脫ぎやな。

五郎　馬鹿アいふな、こいつを脫ぐと素ツ裸だ。

眼八　さう言ふな、おれだつて素ツ裸だ、もうお釋迦が近いから、裸も隨分洒落れて居らあ、何も附合ひだ、脫げツてえことよ。

五郎　おらアそんな事にや附合ひたくねえ。

眼八　えゝしみツたれな野郎だなあ。

小兵　何にしろ眞闇だ、誰でもいゝから、行燈を點けてくれろ。

勘次　おい來た、承知だ。

ト暖簾口へはひる、さんげ〳〵になり、花道より三立目の次郎吉、頬冠りにて出來り、直に舞臺へ來り、外から内をのぞいて、

次郎　親分、此間は。

小兵　おい、誰だ、薄暗くツて分らねえが、誰だえ。

次郎　あい、わつちさ。（ト頬冠りを取り内へはひる。奥より勘次行燈をとぼして出る。）

小兵　おゝ、誰だと思つたら、幻の次郎か。

眼八　おゝ次郎か、久しく逢はねえな。

四人　どうしたえ。

次郎　北條の賭場で別れてから、二月ばかり濱へ行つて、ごろ〳〵して遊んで居たが、すつかり種を耗つてしまひ、路用の金を富に借りて、やう〳〵昨夜歸つて來たが、惡い噂を聞いたから、餘焰の冷める間、上州の方へ行かうと思ふのよ。

小兵　何だ、折角濱から歸つて來て、又上州の方へ出かけるのか。

次郎　あい。

小兵　さうしてそりやあ急に立つのか。

次郎　あい、明日にも立ちてえと思つて居やす。
小兵　そいつあまあ急なこツたが、濱と違つて上州ぢやあ、よつほどあるが路用はいゝかえ。
次郎　さあ其路用の當がねえから、一晩こさへて貰はうと思つて、それでこつちへ出かけて來やした。
小兵　それを賴みに出て來たのか、今に野郎が歸るからそこで遊んで居るがいゝ。
次郎　あい、どうで今夜はこつちの家へ、御厄介にならにやあならねえ。
小兵　それぢやあ勘次や、蒲團を借りておいてやれ。
勘次　あい、ようござりやす。（ト此うち四人件の細見を見て居る。）
次郎　こう、手前達は、何を見てゐるのだ。
眼八　なあに、今細見を見て居るのよ。
次郎　よせ、無駄なことだ、さうして廓も値上げになつたといふ事だから、手前達の買ふ女はありやあしねえや。
勘次　さういふな、おれの女は爰に居らあ。
次郎　おれの女もねえものだ、去年の暮に一度買つた女だらう。
勘次　馬鹿ア言へ、この阿魔ぢやあ隨分おれも耗つて居らあ。

次郎　さうして其女は、どこに出て居る。
勘次　それ、爰に居る、梅ヶ枝といふのだ。
小兵　こう其梅ヶ枝といふなあ、源太といふ情人があつて、その男に三百兩の金がこせえてやりてえといつて、無間の鐘を撞いた女だ。
眼八　ところがやつの梅ヶ枝は、極くひつてんなぴい〳〵女郎で、年が年中二階のをばさんの、厄介にばかりなつて居やす。
藤吉　三百兩は扨おいて、三百の達引きも出來やあしねえ。
五郎　無間の鐘より工面の金で、人せえ見ると貸せ〳〵と、あんなしみッたれな女はねえ。
眼八　何とでも言へ、こつちやあ女は本ものだ。
勘次　また嗅あが來やあしねえか。
三人　違えねえ。
次郎　何でも當時の賣出しは、京町の三浦屋で、薄雲といふおいらんが、流行兒といふことだ、濱の方まで評判だぜ。
眼八　その薄雲といふ女郎は、滅法界美しくッて、程がよくッて調子がよくッて、何でも高尾に續いて

だ。

勘次　此間も素見に行つて、仲の町で見掛けたが、ぞつとする程いゝ女だ。

藤吉　女もいゝが出もいゝとめえて、第一人柄が素敵にいゝ。

五郎　何でもいゝところのお孃さんか、それでなけりやあお屋敷だらう。

眼八　手前達あ、あの親許をまだ知らずか。

三人　むゝ、知らねえが何だ。

眼八　ありやあおらが横町に居た、宗庵といふ醫者の娘で、その宗庵が長く煩ひ療治にやあ出られず、家は喰ひこみ、二進も三進もいかねえ所から、親子二人が相談づくで、三浦屋の家へ賣つたのださうだ。

小兵　宗庵といふは聞いたやうだが、そりやあいつか殺されたと、噂のあつた醫者ぢやあねえか。

眼八　さうさ三月あとの二十四日の晩に、極樂寺の裏田圃で、切られて死んだ醫者のことだ。

トこれを聞き次郎吉ぎつくり思入あつて、

次郎　そんならあれが。（ト小兵衞次郎吉を見て、）

小兵　次郎、手前知つて居るか。

次郎　いゝえ、わつちやあ知らねえが、そんな噂があつたからさ。
小兵　さうして、殺した奴は知れたか。
眼八　いゝや未だに知れねえさうだが、其宗庵の總領娘が、今評判の關取の明石の所へ、片附いて居て、その又明石の妹が、夢の市郎兵衞といふ男達の女房になつて居るものだから、繋がる縁の兄弟中で明石關も市郎兵衞も、敵を取つて遣りてえと、方々手がゝりを搜して居るさうだ。

ト是れを聞いて次郎吉思入あつて、

次郎　こいつは迂濶に。
小兵　や。
次郎　なアにさ、そいつア飛んだ事だなあ。

トさんげ〳〵になり、花道より三立目の小雀忠次出來り、直に舞臺へ來り、門口を明けて、

忠次　おゝ、こりやあ大分大入りだな。
小兵　誰だ、忠次か。
忠次　あい、わつちでござります。
小兵　何ぞ用か。

忠次　あい此間から次郎の野郎を捜して居ますが、こつちの家へは見えませんか。

次郎　おい、爰に居るが何ぞ用か。

忠次　おゝ次郎、そこに居たか。（ト内へはひり、）外ぢやあねえが手前に何時か預かつた、それ一件の代物な。

次郎　おゝ、それがどうぞしたか。

忠次　あいつあ薄々聞いたところが、町觸が出たさうだから、所詮鎌倉ぢやあはけねえぜ。

次郎　おれもさうだといふ事だから、ちつとばかり路用をこせえて、旅へ出て捌く積りだが、さうして手前そこに持つて居るか。

忠次　むゝ、爰に持つてゐるから、手前に返さう、何だかおれも氣味がわりい。

ト箱に入れし香合を、懐より出して次郎吉に渡す、

次郎　それぢやあ慥に請取つた。

眼八　いゝこう次郎、何ぞ金目な代物か。

次郎　なあに、さしたる物でもねえのよ。（ト懐へ入れる、小兵衛始終これを見て居て、）

小兵　次郎、何を手前仕事をしたのだ。

次郎　え丶なに、こりやあ詰らねえものでござります。

小兵　どんな仕事か知らねえが、もう大概にするがい丶ぜ。（ト合方になり、）おれも若え時分から惡いことにやあ拔目がなく、度々喰えこんだけれど、多く喧嘩やおつかぶせ、押借りゆすりが高だから幾度行つても叩きか構へ、もう／＼止さうと切上げて坊主になつたも七度だが、三日と持たずまた元の三尺店に一ツ竈、坊主小兵衛と渾名に呼ばれ背中へ彫つた雨乞小町が、卒堵婆小町を見るやうに皺だらけになる此年まで、斯うして生きて居られるのは、邪險なことをしねえからだ、持つて生れた性根だから、夜盗かつさき屋尻切り、濱の眞砂で仕方がねえが、たゞ其うちで愼しむのは人殺しと強婬だ、こいつをしちやあ助らねえ、直に忙しい身になつて、そりや上州へでも高飛びを、しにやあならねえ事が出來る、大事にすりやあ一生ある親から貰つた命をば、わづか二十五の曉くらゐで切られて死んぢやあ詰らねえ。おれが惡いことは言はねえから、爰らで手前も切上げろ、鼠小僧と名の高い次郎太夫でせえ終ひにやあ、廻しになつて切られて死んだ、手前も似寄りの名の次郎吉、もうい丶加減に足を洗つて、只の遊び人になるがい丶ぜ。

ト是れを聞き次郎吉思入あつて、

次郎　有難うごせえます、今とつさんの其御異見が、身にしみ／＼とこたへまして、結構わつちも心を

改め、挊ぎの方は止めにします。
忠次　こつちも異見のお相伴で、挊ぎを止めて堅氣になり、天秤棒を肩へ當て、魚でも賣りやせう。
小兵　商ひするなァよしにしろ、是れこそほんの三日坊主だ、またとつさんをいびり拔いて、餘計な苦勞を掛けようと思つて。（ト次郎吉惡いことをしたといふ思入にて、）
次郎　あゝ、これと知つたら此間。
小兵　え。
次郎　いえ、此間から止める氣さ。
ト此以前下手より、長吉すつぽり手拭を冠り、褞袍の上へれんれこを引掛け、安ぶらを提げ出來り、門口にて提灯を懷へ入れ聞いてゐて、此時ずつと內へはひろ、皆々見て、
皆々　おゝ兄貴、今歸んなすつたか。（ト長吉次郎吉を見て、）
長吉　おゝ、誰かと思つたら次郎か、久しく逢はなかつたが、どうして來た。
次郎　兄貴聞いてくんねえ、ちつとこつちに居られねえ譯があつて、上州の方へ行きやすから、暇乞に來たのだ。
長吉　さうか、そいつァ何にしろよく來たが、さうして手前喧嘩でもしたのか。

次郎　なあに、ちつと是れにやあ譯のある事だ。

小兵　さうして聞きやあ次郎公も、路用の當がねえさうだから、一晩こせえてやつてくれ。

長吉　なあに、こせえるには及ばねえ、いゝ内會を突きあてたから、庭から内へ踏込んで、側中さらつて持つて來た。（ト腹掛の隱しから金をざくて出す、みな〳〵見て、）

勘次　いやア、こいつあ兄貴素敵だね。

眼八　さうしてそりやあ、どこに出來て居やしたえ。

長吉　横町の米屋の家に商人手合が寄合つて、蚊に喰はれねえ厭禁と、ちよぼ一が出來て居たが、銀張りで素敵だつた。

藤吉　さうだらう、此金は二十四五兩ありさうだ。

五郎　ほんに燈臺元闇しと、ちつともおらッちは知らなんだ。

忠次　こうみんな聞いてくりや、此間表町の紙屋の前を四ツ過ぎに通ると、二階に大分燈火がさして錢の音がざら〳〵するから、こいつあ必定内會だと思つてそつと屋根へ上り、二階から飛び込んだら、無盡の割返しをこせえて居るところで、どぢを組んでぶん擲られたが、いまだに足がほんとでねえ。

眼八　えゝ此野郎、うそを吐け、手前の足は去年からだ。

忠次　南無三、てれ隱しを見出されたか。

藤吉　何にしろこいつァ、又御祝儀に呑める話しだ。

五郎　兄貴酒をそろ〳〵買つて來ようか。

長吉　なあに行くにやあ及ばねえ、酒も肴も今來るから、燗の湯でも沸しておきねえ。

眼八　それぢやあ誂へて來なすつたとか。

勘次　いや拔目のねえ兄貴だなあ。

藤吉　是れだから女が惚れらあ。

五郎　おらッちでせえ惚れるものを。

長吉　止せエ、油アかけても無駄なことだ。（ト件の金を五兩程紙に包み）こう次郎や、こりやあ少しばかりだが草鞋錢だ。（ト出す、次郎吉取つて開き見て、）

次郎　そいつァ有難い、ゝゝこう兄貴、こんなにやあ入らねえ。

長吉　三日でも旅へ出りやあ、二朱でも多い方がいゝ、そんな事をいはねえで、取つておくがいゝ。

次郎　それぢやあ氣の毒だが、貰ひやすぜ。（ト次郎吉ちよつと戴いて懷へ入れる。）

長吉　いや、手前達も是れをやるから、いゝ按排に分けてくれ。（ト二兩程遣る。）
五人　これは兄貴、有難うござります。（ト皆々わける。）
長吉　とつさん、こりやあお前の小遣ひだ。（ト一兩出す。）
小兵　何だ、おれに小遣ひをくれる、そいつァ有難え、是れでうなといゝが喰はれるわえ。
　　ト ぞく〳〵悦ぶ、さんげ〳〵になり、花道より三太酒屋の御用にて、二升樽を提げ、又二居酒屋の若い者にて肴のはひりし岡持を提げ出來り、門口を明け、
又二　はい、內田でござります、お誂へが出來ました。
五郎　おい〳〵、こりやあ御苦勞だつた。
又二　どうぞお上んなすつたら、皿をこはさないやうにお賴み申します。
五郎　いゝてえことよ、案じなさんな。（ト岡持より刺身の皿と鉢肴を出す。）
又二　左様なら、有難うござります。（ト岡持を持ち花道へはひる。）
三太　はい、お酒も參りました。
五郎　おゝ、御苦勞々々。（ト樽を持つて見て、）こりやあべらぼうに重いぢやあねえか。
三太　へい、二升ござります。

五郎　そいつァ素敵だ。（ト三太行かうとするゆゑ、）

長吉　おい〳〵、小僧待ちな。

三太　へい、何ぞ御用でござりますか。

長吉　お前歸りがけに、横丁の中村屋へ行つて餡のぬきを三枚ばかり持つて來いと、さう言つてくんねえ。

三太　へい〳〵畏りました。

ト此内花道より江島屋のお芳出て、花道にて跡を見い〳〵門口へ來り、慥か爰かといふ思入にて、うろうろして居る、三太是れを見附け、

三太　おい姉さん、どこをお前尋ねるのだえ。

お芳　此御近所に、長吉さんといふお方のお家はござんせぬか、お前知つてなら教へて下さんせいなあ。

三太　長吉さんといふのは、いツくらもあるが、何生業だえ。

お芳　御生業は存じませぬが、あの市村に似たお方ぢやわいな。

三太　あゝ太夫元に似た長吉さんなら、ついそこの家だが、お前何ぞ用かえ。

お芳　あい、ちつとお目に掛りたいことがあつて、參りましたわいな。
三太　何の用か知らないが、ありやあ坊主小兵衛といつて、以前惡黨のとつさんがあつて、男はいゝがごろん坊だよ。
お芳　ごろんばうとはえ。
三太　くろん坊は珊瑚珠を取るが、ごろん坊はかすりを取るのさ。
お芳　さうして、あのお方にはお上さんがござんすかえ。
三太　なあに、お上さんはないがね、太夫元に似て居るから、どんなに女が惚れるだらう。
お芳　大方さうであらうと思うたわいな。
三太　お前も惚れて來なすつたのだね。
お芳　いえ、わたしやさうでは。
三太　いや〳〵、それに違ひない、慥にお前は長吉さんに。
お芳　え。
三太　ほかん、えゝ、笑かしやあがる。
ト三太逸散に花道へはひる、此うち皆々七輪へ火をおこし、土瓶にて燗をし、戸棚より廣蓋を出し、よ

ろしく酒の支度をする。

長吉　どうだえ、燗が出來たら、始めようぢやあねえか。

藤吉　はい、丁度兄貴燗に出來ました。

長吉　なに、おれの燗とは。

藤吉　はて、程燗だといふことだ。

長吉　またごまを摺つて居やあがらア。（ト猪口を取って、）それぢやあとつあん、始めてくんねえ。

小兵　いや、おらあ飯があつたけえから、其刺身で飯としよう。

勘次　違えねえ、親分はさつき刺身で、飯が喰ひてえと言つてゐた所だ。

五郎　是れがほんの、言ふ目が出るといふのだ。

眼八　かういふ鹽梅に物事が行けば、おらあ襦袢一枚にならねえものを。

忠次　いや、詰らねえ愚痴を言やあがらあ。

長吉　それぢやあおれから始めるとしよう。

ト是れにて小兵衛は、別の膳にてお櫃を引附け飯を喰ふ。皆々は捨ゼリフにて酒盛りになる、此内お芳門口より内をのぞき、爰だといふ思入にてはひらうとして、恥かしきこなしにて、あちこちとして居て、

ト思ひ切つたるこなしにて、

お芳　はい、御免下さいまし〳〵。（トこは〴〵ながら小聲でいふ。皆々聞附けて、）

長吉　誰か表へ來たぢやあねえか。

眼八　大方家主の嬶アが、店賃の催促に來たのだらう。

藤吉　誰れも居ませんよ、留守だよ。

勘次　馬鹿アいふな、誰が居ねえといつて、承知するものだ。

五郎　大方二朱八のおツかあだらうぜ。

お芳　はい、御免下さいまし。

次郎　い、こう待ちねえ、何だか優しい聲だぜ。

忠次　さうさ、どうか女の子のやうな聲だ。

ト言ひながら立つて來て門口を明ける、お芳恥しきこなしにて顏を背ける、忠次是れを見てびつくりしてこららへ來り、

鬼子母神だ〳〵。

四人　何だ、鬼子母神さまが來た。

忠次　分らねえ、大違ひだといふ洒落だ。
長吉　わりい洒落だ、さうして何だ。
忠次　何だどころぢやねえ、びつくりすべりしやつくりを留めるといふ、美しいお孃さんだ。
眼八　なに、お孃さんだ、嘘をつけ、また擔がうと思つて。
忠次　嘘だと思ふなら行つて見ろえ。
四人　どれ〳〵。（ト門口を明けて見る、お芳また顔を背ける、皆々こちらへ來り、）すてき〳〵、お孃さんだ
　お孃さんだ。
長吉　そんならお孃さんに違ひねえか。
皆々　あい、違ひござりません。
次郎　何もこつちの家へ、そんなお孃さんが來る譯がねえが、こりやあ間違ひぢやねえか聞いて見ろ。
忠次　あい〳〵。（トこちらへ來り、）もしお前さん、どこを捜しなさるのか知らねえが、こつちの家は坊主
　小兵衞に、鷲の長吉といふ者の家でござりますが、お前間違へぢやねえかえ。
お芳　いゝえ、間違へではござりませぬわいなあ。
忠次　こう、間違へぢやあねえと言ふぜ。（ト次郎吉思入あつて、）

次郎　はゝあ分つたわえ、みんな油斷をするな。
皆々　なぜ〳〵。
次郎　なぜといつて、此後を狸長屋といふ位だから、こゝらは名代の狸の巣だ。大方肴の匂ひをかぎ附けて、肴を取りに狸が來たのだ。
忠次　成程こいつァさうかも知れねえ。
眼八　さういへば、先刻から何だか、言ふことがはつきりしねえぜ。
勘次　こいつァ狸に違えねえわえ。
長吉　何にしろ内へ入れて、狸か狸でねえか、確めて見ろ。
五人　それがいゝ〳〵。（ト門口の前へ來り、門口を明けて、）
五郎　もし、おたのさんえ、さあ此方へおはひりな。
お芳　はい、有難うござりますわいな。（ト恥しさうに内へはひろ。）
皆々　そりやはひつたぞ〳〵。
五郎　そこらの肴を氣を附けろ。（ト皆々わや〳〵言ふ。お芳氣味惡さうに下手へ住ふ。）
次郎　こいうえて物を隱さうと思つて、やたら後へ下りたがるぜ。

忠次　さうだ〳〵、何でも後が怪しいぜ。（ト眼八お芳のうしろを撫でる。）
お芳　あれ、何をなされまするぞいなあ。
眼八　どう見ても尻尾が見えねえが、よく化けたぢやねえか。
勘次　おらあ狸でもいゝから、此まんま抱いて寐たい。
藤吉　さうして何處へ遣繰つたか、睾丸も見えぬやうだ。
五郎　こりやあ大方貉の方だらう。
次郎　いゝこう何しろ薄闇えところぢやあ分らねえ、みんなで此方へ引き出すがいゝ。
五人　さあ〳〵おたのさん、こつちへお出で〳〵。
　　ト恥かしがるお芳を、無理に手を持つて引き出す、長吉この内酒を呑んでゐて、此時お芳と顔を見合せ、
長吉　や、お前はこなひだ清水の、舞臺から飛んだ娘御か。
お芳　はい、左樣でござりますわいな。（ト恥かしき思入。）
長吉　さうして、何しに來なすつたのだ。
お芳　その時お世話になりました、お禮に參りましたわいな。

長吉　なんの禮には及ばねえのに。(ト兩人思入、みな〳〵も思入あつて、)
次郎　それぢやあ兄貴が、知つた娘か。
皆々　こいつア大當違ひだわえ。(ト此うち小兵衞飯を喰つてゐて、是れを聞き、)
小兵　やれ〳〵、それは日が暮れたのに、よくまあ尋ねて來なすつた、さうして見りやあ一人の樣だが、お前供も連れずかえ。
お芳　はい、一人でやう〳〵參りましたわいなあ。
長吉　よくまあ、知れたッけねえ。
お芳　いえもう、知れませぬで困りましたわいなあ。
小兵　さうだつたらう、知れにくい所だ。さうしてお前の家はどこだえ。
お芳　はい、私は雪の下の江島屋と申す家の、娘でござりますわいなあ。
小兵　それぢやあお前は雪の下かえ、そりやあ何にしろ餘ッぽどあらア、よく一人で來なすつた。然し此頃は物騷だといふから、更けねえうちに早く歸んなさるがいゝ。いゝ、こう誰かそこらまで送つて上げろ。
皆々　あい〳〵。(ト立掛らうとするをお芳留めて、)

お芳　あゝモウシお前さま、どうぞお願ひでござりますから、もう少々こちらのお家へ、お置きなされて下さりませいなあ。

小兵　居るのは何時まで居てもいゝが、何もこつちに居たつても、別に面白いこともなし、さうしてまあ男と違つて、割物も持つて居るから、歸りがどうも案じられらア。

忠次　ほんに、とつさんの言ふ通りだ。

眼八　おらッちが送つて遣るから、

皆々　少しも早く歸んねえ。

お芳　いえ〳〵、さう仰しやらずと、もう少々、こゝに置いて下さりませいなあ。

ト始終お芳長吉の顏を見てゐて、頻りと居たがる、皆々は連れて行かうとする。爰へ次郎吉出で留め、

次郎　こう〳〵みんな待ちねえ〳〵、おれが此子に聞いて見ることがある。(トお芳の側へ來り、)もし姉さん、お前そんなに爰に居たがるが、何ぞ爰の家へ内々で、用でもあつてお出でのかえ、あるなら何も遠慮はないから、わたしにそつと話してお聞かせ。

お芳　左樣ならあなたに、申しますわいなあ。

次郎　さあ〳〵、早くお言ひ〳〵。(トお芳恥かしき思入にて、)

お芳　あの、わたくしは。

次郎　あのわたくしは。

お芳　こゝのお家へ。

次郎　こゝのお家へ。

お芳　置いてお貰ひ申したうござりますわいな。(ト顏を隱す、次郎吉合點の行かぬ思入。)

次郎　はゝあ、そりやあ何でだね。

お芳　さあ、それはな。(ト言ひ兼ねてゐる。)

次郎　言ひ兼ねるのはお孃さん、兄貴に惚れて爰の家へ。

皆々　駈け込んで來なすつたのかえ。

お芳　あいなあ。(ト恥かしき思入にて顏を隱す。)

皆々　いやア。

次郎　いゝこう兄貴、お前の女房になりてえと、此子が駈け込んで來たのだとよ。

小兵　そりやあ飛んだ話しだなう。(ト此うち長吉思入あつて、)

長吉　おいお孃さん、駈け込んで來てくれたは有難えが、そりやあお前惡い料簡だ、思ひ直して歸んね

え。

お芳　いえ〳〵、わたしや歸りませぬわいな。

長吉　歸らねえと言ひなすつても、是れを見たらいやになるだらう、おらァこんなあたまになつた。

ト冠りし手拭を取る、長吉すゐなう張りの坊主鬘、次郎吉見てびつくりなし、

次郎　や、こりや兄貴にやあ何で坊主に。

長吉　さあ、こりやあ此間清水で、今名の高い男達夢の市郎兵衛と朝日奈藤兵衛が喧嘩の所へ出會し、見て居られぬがおれが素性、入らぬおせつかいに飛込んで命をかけて預かつたが。それから跡が器用に行かず笑つてくれろと賴んでも、藤兵衛めが强情ゆゑ、市郎兵衛への言譯に髮を切つて坊主になり、指を銜へて引込んだが、此意趣返しやあ朝比奈に、何處でかけちを附ける氣よ。何しろをかしいなあ親が坊主といふ渾名に、餓鬼が坊主になるといふなあ、馬琴の本なら名詮自稱だ、ほんに作者もまだ書かねえ坊主天窓のごろつきに、お孃さんが惚れるとは、こいつァ一番新らしいが、そりやあ惡い料簡だ。

お芳　いえ〳〵假令坊さんでも、あなたの方でさへおいやでなくば、わたしや宜しうございますわいな。

忠次　こう、坊さんでも何でもいゝから、どうぞ女房にしてくれと言ふぜ。
眼八　此の鹽梅ぢやあ、此子は兄貴によつほど惚れて居ると見える。
勘次　年頃といひ器量といひ、ごろつきの女房にやあ勿體ねえ。
藤吉　かういふ玉が春早々、兄貴の所へ舞ひこむとは、
五郎　成程是れぢやあ、內會ぐらゐ突き當てるのは何でもねえ。
次郎　こう兄貴、こりやあ是非とも女房に、持つて遣らざあなるめえぜ。（ト此內長吉思案の思入あつて、）
長吉　いゝや、おらあ持つのはいやだ。
お芳　えゝ。（トびつくりする。）
皆々　何で此子が持てねえとは。（ト合方になり、）
長吉　さればさ、是れが似合相應な家の子ならば親許へ、渡りを附けて貰ひもせうが、立派な所のお孃さんを、金に目がくれ欺したと世間の奴等に言はれちやあ、此長吉が肩身がせめえ。それだによつて氣の毒だが、此女房は貰へねえ。おい姉さん、わつちのやうなこんな者でも、思ひ詰めて來てくれたは、實にわつちも嬉しいが、今いふ通りこつちはごろつき、お前は大家のお孃さん、釣合ねえのは不緣のもとだ、どうぞあきらめて歸つてくんねえ。こう氣の毒ながら誰でもいゝから

皆々 此子を家へ送り屆けてくれろ。

小兵 あい〳〵。（ト是れを聞き、小兵衞感心せし思入にて横手を打ち、）

こりやあ長吉感心だ、手前が言はざあおれが今さう言はうと思つた所、口まで出ちやあ居たけれど、色戀ばかりやあこりやあ別物、親の自由にもいかねえから、默つて側で聞いて居たが、流石はおれの餓鬼ほどあつて、手前そりやあよく言つた。是れがおれも以前なら、いゝ幸えと引摺り込み、抱寐をさせた其上が、言はずと知れた手切の金、斯ういふ仕事が附目だが、今ぢやあ惡事をふッつり止め、朝晩珠數と首ッ引き、後生を願ふ氣になつたら、こんな事は見るもいやだ。

（ト是れを聞き、次郎吉思入あつて、）

次郎 成程それに違えねえ、おれも今夜とつさんの、異見で堅氣になる氣になつたら、此理窟が分つて來た。もしお孃さん、お前も今聞く通りだから、所詮話しやあおッ附かねえ、緣なき衆生とあきらめて、早く家へ歸んなせえ。こう忠次、手前送つていつて遣るがいゝ。

忠次 おい〳〵承知だ、それぢやあお孃さん、わつちと一緒にお出でなせい。（ト手を取るを振拂ひ、）

お芳 いえ〳〵わたしやどうあつても、歸ることはいやでござりますわいなあ。

忠次 これさ、お前がいくらさう言つても、兄貴の方であゝ言つて居ちやあ、爰に居つても仕方がねえ

ぢやねえか。

お芳　いえ〱、あなたが置いて下さらねば、わたしや死ぬる氣でござりますわいなあ。

皆々　いや、こいつア困つたものだなあ。

　トさんげ〱になり、花道より江島屋の後家おさが商人の女房のこしらへにて、嘉介與八の若い者、弓張提灯を持ち、先に立ち出來り、花道にて、

さが　さつしてお前方も不斷から、あれが文の遣り取りでも、して居ることを知つて居るなら、隱さず教へてくんな。

嘉介　いえ〱、お孃さんに限りましては、そんな事はござりませんが、然しお年頃のことでござりますから、なう與八どん。

與八　さうさ私共は存じませぬが、おしげどんの話しでは、花見においでなされた時、この蛇ケ谷の裏店に居る、鶯の長吉とかいふものに、大層お世話におなんなすつて、それから毎日其人の事ばかりを言ひ暮して、おいでなされたといふことでござります。

さが　今路地口の家で聞いた所が、その長吉とかいふ者は、遊び人だとかいふ事だなう。

兩人　へい、左樣でござります。

さが　何しろ角だといつたから、大方向うの家がさうだらう。

兩人　左樣でござりませう。（ト右の合方にて三人舞臺へ來り、門口より嘉介內をのぞいて見て、お芳が居るとおさがに敎へる、おさがそこを明けてはひれといふこなし、是れにて門口を明け、）はい、御免下さいまし。

さが　大方こんな事であらうと思つた。（トずつとはひる、お芳見てびつくりなし、）

お芳　や、お前はかゝさん。（ト逃げにかゝるをおさが押へて、）

さが　どつこい、逃してなるものか、どなたも御免なさいましよ。（トよろしく住ふ。皆々見て、）

小兵
長吉　そんならお前がおつかさんかえ。

さが　はい、此娘のお袋でござります。

皆々　いや、こりやあ、鳶が鷹だわえ。

さが　いえ、實の子ではござりませぬ、これは先妻の子でござります。

小兵　さうだらう、あんまり似な過ぎらあ。

さが　これお芳、おまへはまあ〳〵、大それたことをおしだなう。

ト お芳の胸倉を取りこづく、是れを見て次郎吉仲へはひり、お芳を上手へやり、

次郎　これさおつかさん、高が知れた色戀だ、そんなに手荒いことをせずと、まあなんどりと言つて聞

かせなせえな。

さが　いえ〳〵、なんどり言つては居られませぬ、斯ういふ事を仕出來しては、きつと言はねばなりませぬ。これお芳、爰へおいで、えゝおいでといふに。(ト合方になり、お芳是非なく側へ來る。)斯ういへば、どうかわたしの器量自慢をするやうだが、丁度お前が五歳の時、おつかさんが亡なつて、男鰥で困るからお針がほしいと慶庵へ、旦那が頼みにおいでの時、お針とお擦り兼帶でしかも三分の給金に、外に一分の小遣ひでお前の所へ行つたところ、此美しいわたしゆゑほんに仕事の針よりか、旦那の針がよくきいて、僅か三月か四月のうちに、ごほん〳〵と顎で蠅、とう〳〵腎虚の旦那の世話からお前の世話まで、みんなわたしがして來たのだよ、此節でこそお嬢さんは、やれ國太郎に似て居るのと人に噂をされるけれど、小い時には泣き蟲で、胎毒天窓で涕汁ッたらしで。(ト お芳そんな事を言つてくれるなといふ思入にて、手を合せて拜む。)はて、言はいでかいな〳〵。まだ其上に着物を着せれば、袂を嚙んだり横撫でをしたり、木綿布子で置かうと思へば、世間の口が面倒ゆゑ、着物の袂へ知れぬやうに、唐辛子を入れておいたら、それを知らずにしやぶつたので、口を腫らして泣いたことをお前覺えておいでだらう。それに何だえ、此頃では、やれ白粉は家橘香がいゝの、すき油はよしやがいゝの、頭掛けは何がいゝのと、好きな熱をふいてからに

擧句の果てが親を捨て、男狂ひをしようとは。お前どの顏でおしだ、いゝえいな、あの、此顏でおしか。

ト お芳の頰を抓るゆゑ、長吉見兼れて留め、

長吉 これさおつかさん、もういゝ加減にしなせえな、是れが男狂ひとはいふものゝ、まだ逢つたといふ譯ぢやあなし、今異見をしてこつちから、送らしてやらうといふ所だ。

さが いえ／＼逢はうが逢ふまいが、大事な親を振捨てゝ家出をした上からは、もう／＼歸るには及ばないから、どうともお前の勝手におし、明日が日夫金兵衞が死んだとても子は入らぬ、まだ老朽ちたといふ身ではなし、金さへあれば好き自由に若い男を、いやさ、若氣とは言ひながら、男狂ひをしたからは、打捨つてはおかれませぬ、惚れて來たなら乞食にでも、菰冠りにでもなるがよいわな。

ト 是れを聞き皆々腹の立つ思入。

長吉 おい／＼、お擦りのおつかさんとやら、おかなことを言ひなさるが、わつちやあ天下晴れての遊び人、乞食ぢやあごぜえませんよ。

次郎 さうだ／＼、此婆アはとんでもねえ事をぬかしやあがらあ。

皆々　構ふことはねえ、叩きなぐれ。(トわや〳〵言つて立掛るを、嘉介與八あわてゝ留めて、)

嘉介　あゝもし〳〵、其お腹立ちは御尤もでござりますが、なか〳〵お前さん方の事を、乞食と申したのではござりませぬ。

與八　ほんの、譬を申したのでござりませうが、お氣に障りましたら、御勘辨下さりませ。

ト兩人頻りに留めて、おさがの側へ來り、

嘉介　もし〳〵お袋さん、何時までそんな事をおつしやつて居ても、果しのない事ぢやあござりませんか。

與八　それよりやあ、お孃さんを家へ連れてお歸りなすつて、とつくり御異見をなされたがようござります。

さが　いえ〳〵、それには及びませぬ、親を捨てゝ出た娘を、何で家へ入れるものか、素ツ裸にして追出すから、お前達も手傳つておくれ。

嘉介
與八　もし、そりやアあんまり酷うござりませう。

さが　はて、酷からうが何だらうが、主人の言附だ、手傳へといつたら、手傳ふがいゝ。(ト是れにて兩人是非なくこちらへ來る、)さあ、お前の好きなやうにしてあげるから、其の着物を脱いでおしまひ。

お芳　もしかゝさん、どうぞそればかりは、堪忍して下さりませいなあ。

さが　いえ〳〵堪忍はなりませぬ。さあ〳〵、脱いでおしまひ〳〵。

　　トお芳のいやがるを、無理に與八、嘉介手傳つて帶を解き、着物を脱せにかゝる、皆々見兼て留め、

忠次　こう〳〵、そりやあお前あんまりといふもんだぜ。

眼八　おれも裸で覺えがあるが、まだ此の寒いに裸ぢやあ居られねえ。

勘次　まあ〳〵、着物だけは。

五郎　着せておいて遣るがいゝ。

さが　いえ〳〵、大きにお世話でござります、親がするのだ、打捨つておいておくんなさい。

　　トトゞ三人にてお芳を裸にする、お芳緋鹿子の長襦袢一ツになり、眞中へ顫へながらうづくまる、是れにて長吉可愛さうだといふ思入あつて、

長吉　もし、お針さんぢやあねえ、もうお上さんだ、それぢやあいよ〳〵此娘は、縁を切つて捨てなすつたのかえ。

さが　左樣さ、親に不孝な娘だから、裸にして捨てたのさ。

長吉　そりやあお前、よく捨てなすつた。

さが　なに、よく捨てたとはえ。（ト合方替つて）

長吉　さあ、御はつせきをば合點で、生業にして暮すこちとら、目が立つて居る其時にやあ、身分に過ぎた奢りもして贅澤をいふこともあるが、一番外れて來た日にやあ、着物は元より鍋釜まで、質にぶち込む博奕打、その上げ下げの遣繰りに立派な所のお孃さんを、まさか遣られもしねえから不釣合だと斷つたが、捨てられたらば丁度幸ひ、わつちが女房に拾ひませうよ。

お芳　そんならあなたは、あのわたしを。

長吉　まだ一人身の鷲の長吉、どうで始終は女房を、どの道持たにやあならねえ體、貧乏人の事だから昔話しにある通り、裸の嫁入りとやらかさう。

お芳　えゝ、そりやまあ、ほんまでござりますかいなあ。

長吉　爰に親父も聞いて居らあ、決して嘘は吐かねえから、もう案じずに居るがいゝ。

お芳　えゝ、お嬉しうござりますわいなあ。（トぞく〳〵悦ぶ。）

小兵　おゝさうだ〳〵、手前ゆゑに捨てられた娘の事ゆゑ、どこがどこまで女房に持つて、末長く可愛がつてやるがいゝ。まあ何にしろ寒からう、手前の中へ入れてやれ。

ト是れにて長吉着て居るれんねこを羽織つて、

長吉　さあ、お孃さん寒からう、爰へ這入んな。
お芳　そんなら、這入つてもよろしうございますか。
長吉　いゝ所ぢやあねえ、斯うなりやあ長吉さんのお上さんだ、都々一の文句だがぬしが風引きや共難儀だ。（ト是れにてお芳こはぐ\ながられんれこの中へ這入る、是れを見ておさが腹の立つ思入にて、）
さが　えゝも人の見る目も憚からず、いけしやあぐ\とくッ附き合ひ、あの嬉しさうなしやッ面を、見るも中々小胸がわりい。どれ、早く歸らう。
次郞　おいぐ\、捨子のおつかさん、拾ひ手が出來たら安心だ。
皆々　さあぐ\、早く歸んなぐ\。（ト是れにて嘉介提灯を點けて先に立ち、三人門口より出て花道へ行く。）
さが　ほんにぐ\、忌々しい餓鬼だ。
嘉介　もしお袋さん、旦那さんにも御相談なしで、なぜあいつらにお遣んなすつたのだ。
さが　はて、親に暇をくれた娘、捨てるに相談がいるものかな。
與八　さあ、お捨てなさるはようございますが、お孃さんは賣られますぜ。
さが　そりやあ心柄だから、仕方がねえわな。
嘉介　あいらに遣つて賣らせるより、惡い事をしたのを科に、こつちで賣つたらどんなにしても、百兩

にはなりませうに。

さが　それぢやあ行つて、取返して來ようか。

嘉介　いえ〳〵今更返せと言つたらば、手切をくれと言ひませうぜ。

さが　何にしろ惜しいことをしたが、どうか仕樣はあるまいか。

與八　もし、いゝ事がございます、切通しの朝比奈親方を賴んで、取戻して貰つちやあどうでございます。

嘉介　成程、こりやあいゝ思ひ附きだ。

さが　それぢやあ直にこれから廻つて、朝比奈さんを賴むとしよう。

兩人　それが早手廻しでございます。

さが　あゝ、お天氣はいゝが、ぬかつた事をした。

トさんげ〳〵にて、三人花道へはひろ。此うち皆々酒盛りをして居て、

皆々　兄貴、お目出たうございます。

長吉　いや、今夜はまだ内祝言だが、いづれ此頃に改めて、みんなを呼んで弘めをしよう。こうお孃さん、おめえおれの女房になるからにやあ、今までとは違ふから、丁寧なことはさらりと止めて、

何でもざつくばらりにしにやあいかねえぜ。
お芳　其ざつくばらりとやら申すのは、どういたす事でござりますかいなあ。
皆々　いや、こいつア知らねえのは尤もだ。（ト爰へ小兵衛土瓶を持つて眞中へ出て、）
小兵　扨、何はともあれおれも嬉しい、ちよつとこゝで祝ひませう。先づ此の土瓶が島臺代りだ、それ爰に鶴も舞ひ遊ぶし、中には龜の水もあらア、そこで土瓶のふたりが中も、（ト蓋を取つて、）水も漏らさぬ中となる、とはどうだ、みんなうまからう。（ト是れにて皆々よろしく酒宴あつて、）
次郎　ときに、わつちやあもうお暇いたしませう。
忠次　これさ次郎、どうしたもんだ、婚禮にお暇なんぞといふなア、こりやあ大の忌詞だ。
次郎　違えねえ、さうだッけ、それぢやあお開きと奉りませうかね。
小兵　そんなら手前はもう行くか。
次郎　あい、まご／＼して居て親分や兄貴に苦勞を掛けねえうち、今夜直に板橋まで、乘出しておく積りだ。
長吉　今夜泊つて明日の朝、明けねえうちに行きやあいゝに。
小兵　いや／＼、今夜のうちの方がよからう、更けねえうちに早く行くがいゝ。

次郎　それぢやあ親分、達者で居ねえよ。

小兵　おゝ、先刻手前に言つた通り、必ず惡事は止めにしろ。

次郎　あい、もう稼ぎは止めにします（ト思入あつて、）然し是れから旅へ出掛け、いつまたみんなに逢はれるか、品によつたら是れが別れに。

忠次　これさ、又別れるといふか。

次郎　むゝ、それぢやあ兄貴、おめえも達者で。

長吉　手前も體を大事にしろよ。

皆々　そんなら次郎公（ト次郎吉門口へ出て、）

次郎　どりや、お開きとしようか。（ト門口をしめる、さんげ〳〵になり、次郎吉頬冠りをなし花道へはひる。）

小兵　さあ手前、それぢやあお孃さんと、早く行つて寐るがいゝ。

皆々　いや、氣のわりい話しだなあ。

小兵　おゝ、みんなも爰にやあ居られめえ、明でも追ひに行くがいゝ。

忠次　成程とつさんのいふ通り、まだ手入らずのお孃さんを、兄貴がしめるを側へ寐て、邪魔をするのも氣が利かねえ。

勘次　さつきの渡りがねえ日にやあ、兄貴にどうかして貰はうが、あれがあるからあいつを持つて。

藤吉　梅ヶ枝さんの所へ行くなら、おれも一緒に附合はう。

五郎　どうだ眼公、松村のかほるさんの所へ行かねえか。

眼八　いゝや、おらあ鳥羽を受けて、下歯の所へ歸らにやあならねえ。

忠次　また極りで、下歯々々といやあがらあ。（ト皆々門口へ出て、）

皆々　もしお孃さん、今夜はしつかり。

お芳　え。

皆々　お樂しみなさいまし。（トさんげ〳〵にて、皆々下手へはひる。）

小兵　いや、騷々しい奴等だッちやあねえ、とんと大風の吹いた跡のやうだ。

トそこらを片附ける、長吉お芳に手傳つて、片附けろと顎で知らせる、是れにてお芳れんれこを着てこちらへ來り、

お芳　もしおとつさま、わたしが片附けますわいな。（トそこらをよろしく片附ける。）

小兵　どれ、おれもそろ〳〵寐るとしよう。おいお孃さん、あの戸棚の上を明けると、搔卷と枕がはひつて居るから、出してくんねえ。

お芳　はい、畏りましたわいなあ。（ト戸棚をあけ、搔卷と枕を出す。）
長吉　とつさん、足でも撫つてやらうか。
小兵　なに、おらあいゝから、手前たちは早く奥へいつて寐るがいゝ。
長吉　それでもまだ四ツめえだから、寐るにやあちつと早過ぎらあ。
小兵　そんな瘦我慢を言はねえで、早くいつて寐ろといふに。
お芳　もし、よつぽど夜は短かうなりましたなあ。
小兵　それ見ろ、お孃さんが御催促だ。さあ〳〵、早くいつて寐ろ〳〵。
長吉　それぢやあ行つて寐るとしようか。さあお孃さん、一緒においで。
お芳　いえ〳〵、わたしや。（ト恥かしき思入。）
小兵　何だな、いまはの際になつて、そんな我慢を言はねえで、さあ早く行きな〳〵。（ト兩人を上手の屋體へ入れて、）どうだ、寒かあねえか、然しひつたり抱かつて寐りやあ、若え同士だ寒かァあるめえ。おゝ枕が一ツぢやあ困るだらう、おれの枕を貸してやらうか。（ト枕を持ち障子の側へ行き、）なに碁石の箱があるからいゝ、さうして紙はそこの笊の中にあつたぜ。（トこちらへ來り、土瓶と茶碗を持つて行き、）それ、喉が渴いたら爰に水があるぜ。もし其子が手水に行くなら、手前一緒に起き

て敎へてやれ。（トこちらへ來り、）やれ〳〵、世話のやけたことだ。いや、是れだから若え奴等ァ年寄をうるさがらァ。どれ、おれの情人は此の辻番、火でもよくして抱いて寐よう。

ト辻番をして搔卷をかけよき所へ寐る。さんげ〳〵になり、花道より以前の嘉介、與八弓張りを點して先へ立ち、跡より朝比奈藤兵衛出て花道にて、

藤兵　こう若い衆、それぢやあ向うが長吉の家か。

嘉介 與八　へい、左樣でござります。

藤兵　あの長吉にやあ此間、新淸水の喧嘩から、おれが强情張り通して、挨拶に髮まで切らしたゆゑ、定めて遺恨に思つて居よう、すべよくおれに返せばよし、さもねえ時にやあこつちも意地づく、血塗れ仕事をしにやあならねえ。

嘉介　そんならもしや相談が、

與八　おッ附きませぬ、其時には。

藤兵　ことに寄つたら腕づくで、貰ひ引きにもならうから、おれが拔いたらお前達ァ、遠慮はねえから早く逃げねえ。

嘉介 與八　いえ、逃げなくつてどうしませう。（トやはり右の唄にて舞臺へ來り、嘉介門口を叩き、）

嘉介　へい、御免下さいまし。（ト小兵衞起上り）

小兵　あい、どこから來たか、明けてこつちへ這入んなせえ。

嘉介與八　左樣なら、御免下さいまし。（ト門口を明け、兩人を跡に藤兵衞はひろ。）

小兵　おゝ、こなたは先刻來なすつた、江島屋の若い衆達、さうして一緒に來なすつたは。

　　　ト是れにて藤兵衞上手へ住ひ、

藤兵　こりやあお初にお目に掛りますが、わしやあ此の切通しに居る、朝比奈の藤兵衞といふ者でござります、どうぞ此後見知つておくんなせえ。

小兵　おゝ、それぢやあかねて噂に聞いた、朝比奈親方とはお前さんか、わしやあ坊主小兵衞といふ、燒廻りのごろつきでござります、何分お心安くお賴み申します。

藤兵　こりやまあ、折角お休みなすつたを、起してお氣の毒でござります。

小兵　なに、まだ本當に寐たといふ譯ぢやあござりません。して親方にやあ夜に入つて、何の御用でわしが家へ。

藤兵　はい、今夜斯うして出掛けて來たのは、外の事でもござりませぬが、爰に若い者も聞いて居りますが、さつきこつちへ駈込んで來た、娘を歸して貰はうと、それで態々來やしたのさ。

小兵 成程お前さんの言ふ通り、其娘御はこつちの家へ、來て居ることは來て居りますが、ありやあ駈込んで來たとは言ひ條、さつき親御が捨てなすつたのを、家の野郎が拾つた花嫁。こりやあどうも別もので、親の自由にもならねえから、忰に話しをしなさるがようござります。

ト此うち上手障子屋體より、長吉寢卷姿にて、跡よりお芳曲つたる島田髷、長吉の褞袍を着て附いて出て、

長吉 こりやあ藤兵衞、よく來なすつた。(トよろしく住ふ、合方になり)

藤兵 おゝ長吉さん、此間はとんだ間違ひで、お前に髮まで切らしたが、大きに濟まねえことをしました、どうぞ堪忍してくんなせえ。

長吉 なあにお前さん、是れしきのことをあやまんなさるにやあ及ばねえ、さうして今夜來なすつたのは、何ぞ用でもあるのかえ。

藤兵 さあわざ／＼わしが出て來たは、外でもねえそこに居る、娘御のことで來たが、定めてお前も知つてゞあらうが、さつき來たお袋とはなさねえ仲で不斷から、此子を邪魔にして居たところ、今夜宵からふいと出て、どこへ行つたか行方が知れず、勾引されでもしやあしねえかと、案じて方方捜した所が、こつちの家といふ事がやう／＼知れてお袋が、やつきとなつて來て見りやあ、家

へ歸るのはいやだとか、爰に居てえとか言つたものだから、そこがなさねえ仲合に、親に暇をくれた娘と着物を脱せて捨てたさうだが、家へ歸つて段々と主人に話しをした所、以ての外の腹立ちで、家の娘を勘當するなら手前も一緒に暇を出すと、夫婦喧嘩が始まつた所へわしが行き合せどういふ譯だと樣子を聞けば、これ〳〵だと話すから、そりやあお袋お前が惡い、義理ある仲なら猶のことだ、家へ歸つて旦那どのに、一應相談した上で勘當するともどうするとも、しにやあならねえ譯のものだと言つたところ、お袋も成程わたしが惡かつたから、夫の言譯にどうぞ娘を元々へ、取返したいとお袋が折れて出たゆゑ賴まれて、據なく出掛けて來たのだ、不承もあらうが長吉さん、爰は一番大負けに負けて娘を返して下せえ。

長吉　そりやあ折角のお出でだが、もう一足早かつたら、直に返して上げようものを、今祝言の杯をして床へ這入つた上からは、わつちの女房のこのお芳、たゞお前には渡されねえ。

藤兵　そりやあこなたが言はねえでも、おれも承知だ、たゞは來ねえ、思ふやうには行くめえが、少し位の事ならば、手切の金も出しやせう。

長吉　そりやあ御親切に有難えが、わつちやあ金にやあ目はくれねえ。

藤兵　なんとべト誂への合方になり、

長吉　これが手切の足切のと、いもくを附ける位なら、二度まで逢つた其時に、引廻して足になり、手切の金とごろぶけれど、そんな邪險なことはしねえ、米は二合五勺しても年中ごろ〳〵居候の家に絕えねえ遊び人、堅氣な衆の內會を搜して步いて突き當てりやあ、側中さらつて來るけれど、こりやあ向うが御はつせきの惡事をするから只取るのだ、百本背負ふのを合點で表稼業にして居るごろつき、かすりを取るなあ運上だ、博奕の外は三文でもきざな錢を取らねえ長吉、金で娘は返されねえ、取返すなら取返すやうに、趣意を立つて來なせえな。

藤兵　して、立てろといふ其の趣意は。

長吉　趣意といふのは外でもねえ、お前のお蔭でこの通り、坊主になつた此の長吉、それだによつて其趣意にやあ、お前の髷が貰ひてえ。

藤兵　そんなら喧嘩の仲人で、坊主になつたを根葉に思ひ、爰へ持ち込み其趣意に髷を切れとはよく言つた、如何にも遣らうと言ひてえが、氣の毒ながらいやだ。これが放駒の四郎兵衛とか幡隨院の長兵衛なら、坊主になつて貰ひ引きをしねえものでもねえけれど、高の知れたるごろん坊、取るに足りねえ手めえ達で、おれも坊主になるやうな、まだ耄碌はしねえ積りだ。

長吉　いやならよしねえ、無理にやあ言はねえ、こつちも相手が素人なら、綺麗に返して遣りもせうが、

先は名うての朝比奈藤兵衛、人に知られた達師ゆゑ、趣意がなけりやあ返されねえ。

藤兵　返されなけりやあ仕方がねえ、血塗れ仕事をしてなりと、娘を連れて行かにやあならねえ。

ト刀を持つて立上る。

長吉　こりやあおれを切る氣だな、面白え切られよう。生先き短けえとつさんを、跡に殘して濟まねえが、爰が男の意地づくに、殺されたれば知らねえこと、生きて居ちやあ渡されねえ。

トきつと言ふ、小兵衛も思入あつて、

小兵　おゝ尤もだ渡されめえ、おれに遠慮はいらねえから、跡を案じずすつぱり遣れ。手前が四の二となる時にやあ、神も佛も五一三六、おれも後生をさらりと止め、小兵衛坊主と返り花、たとひ潰れた胴殼でも、樒ぐらゐは立てゝやらア。（ト是れにてお芳案じる思入にて）

お芳　こりやまあ、どうせう、どうせうぞいなあ。

小兵　もしお嬢さん、怖かあねえから落着いて居ねえ。ごろつきの女房になりやあ、こんな事は度々だ。

長吉　さあ藤兵衛さん、今いふ通り長吉が、死目になつたら知らねえこと、生目のうちは金輪際どんな槍でもとつぱでも此儘玉は渡されねえ、素手の五六三のごろつきだが、こゝが肚胸のたでん坊、

投げ出す命の一點張り、卑怯なずりは掛けねえから首と別れのだうらくに、腕からなりと足からなりと、但しやあぶつ〳〵賽の目でも、土壇か賭場の盆の上、お前の思ふ壺皿に切るとも突くとも勝手にして、つぶれた胴を立てなせえ。(ト長吉腹掛一つになり、藤兵衞へ體を突きつける。)

藤兵　さう胴の間がすわつたら、如何にも手前の言條通り、其そッ首も切通し、此朝比奈が引導で地獄廻りをしやあがれ。(ト脇差を抜き、長吉の前へ突附ける、嘉介與八是れを見てびつくりなし、)

嘉介 與八　それ始まつた、逃げろ〳〵。

ト逸散に下手へ逃げてはひる、お芳氣を揉むを、小兵衞よろしく留める、藤兵衞白刃を長吉の襟首へあてがふ、長吉目を閉ぢてぢつとして居る、藤兵衞これを見て、感心せし思入あつて一腰を下へ置き、

藤兵　いや、流石は江戸ッ子だけあつて、驚きいつたいゝ肚胸だ。(ト是れにて長吉目をひらき、)

長吉　おい、お爲ごかしを言はねえで、未練こなしにすつぱり遣んねえ。

藤兵　いゝや、こいつア切られねえ。

小兵　なに、長吉が。

三人　切れぬとは。

藤兵　さあ、此藤兵衞も江戸ッ子だが、餓鬼の折から大阪へ登つてあつちで育つたゆゑ、肚胸くらべを

した日にやあ、中々おぬしに及ばねえ、こつちも命を捨てる氣でおぬしを切らうと思つたか、今年とつた親を捨て、又その親は子を捨ても汚なびれねえ心に惚れた、元より無理な貰ひ引きと、承知しながら出て來たも、おぬしの心を試さう爲、斯う何もかもぶちまけたら、人は當つて碎けろだ、今までのことは水にして、是れから仲よくして下せえ。

ト事を分けていふ、長吉心得ぬこなしにて、

長吉　そんならこなたは本心で、さう碎けて出てくんなすつたか。

藤兵　はて、不動の梵字を切ものにした、この一腰はおれが魂、金打すりやあ嘘は言はねえ。

ト藤兵衞金打をして見せる、小兵衞これに目を附けて、

小兵　もし、不動の梵字の切ものある、其一腰は名代の業物、來國行の作ぢやあねえか。

藤兵　どうしてそれを、こなさんは。

小兵　知つてゐるのは此わしが、昔勤めた御主人が、不斷祕藏になされたる其一腰も來國行、もしやお前は飯島の若旦那ぢやあござりませぬか。（ト是れにて藤兵衞びつくり思入、）

藤兵　如何にも飯島主膳が悴、幼き時に親に別れ、難波へ行つて人と成り、今は俠客朝比奈藤兵衞、そんならこなたは其昔。

小兵　まだお前さんの生れぬ先き、若黨奉公して居たる、其名もやつぱり小兵衞といふもの。

藤兵　むゝ、かねて噂に聞いたる小兵衞、扨は家來であつたるか。

小兵　若旦那でござりましたか。

藤兵　はて、思ひ掛けない、

兩人　事だなあ〔ト兩人碎けて思入、小兵衞藤兵衞を上座へ直し、〕

小兵　いやもう、あなたの親御には、種々お世話になりましたが、今と違つて其時分は、亂暴盛りでござりまして、度々旦那の御異見もうはの空で居りましたが、段々年を取るにつけ其御異見が思ひ當り、お世話になつた旦那のことは、片時も忘れはいたしませぬ、さつきあなたの來た時から旦那によく似た面ざしだと、思つて居たが似た筈だ、現在實のお子だものを〔ト思入、〕

藤兵　さう知れたれば猶のこと、假令昔は主にもせよ今は達師のこの藤兵衞、知つての通り清水で出入りをしたも段々と、こつちに譯のあることゆゑ、爰は一番力になり、おれの腰をば押して下せえ。

長吉　そりやあいはねえでも、親父がお主とあるからは、善にもせよ惡にもせよ、命をきりにかけてなりと、力にならいでどうしませう。

小兵　さうだ〳〵、さうしてくれ、おれも段々取る年ゆゑ便り少ねえ手前だから、何でも是れから兄だと思つて、仲よくしにやあならねえ。（ト是れにてお芳嬉しき思入。）

お芳　ほんにもう、どうなる事かと案じましたに、お二人さんにお怪我もなう、斯ういふ事になりますとは、嬉しいことでござりますわいなあ。

藤兵　扨斯うなつた上からは、縺れかゝつた婚禮も、一番こゝは切替へて、おれが仲人になつて遣らう。

長吉　成程こいつア思ひ附きだ、さうなる時はのがれねえ、緣に繋がる親類中。

小兵　また同胞も同樣に、三々九どうも賴むは悴。

お芳　そんなら爰で、

長吉　固めの　杯。

藤兵　然し爰にやあ、其の酒が。

小兵　幸ひこゝにさつきの酒。（ト德利と猪口を出し、）まづ、お定まりの嫁御から。

ト是れより四人よろしく婚禮の酒盛りあつて、

藤兵　さ、是れですつぱり極つた緣談。

長吉　あゝ知らぬことゝて闇雲に、角目立つたる角樽も、
お芳　今では野暮と結納に、結ぶ縁の柳樽。
藤兵　こつちも引かぬ意氣張りづく、既に血を見る色直しも。
小兵　坊主小兵衛の家だけに、丸く納まる今夜の婚禮。
藤兵　さて、仲人は宵のうち。(ト立上る。)
小兵　爰等が程な、床杯。
長吉　そんなら兄貴。
お芳　お仲人さま。(ト此うち藤兵衛門口へ出て、)
藤兵　目出度くこの場を。(ト膝の塵を拂ふを木の頭、)開きませう。
ト土手の提灯のやうなる唄になり、藤兵衛は門口、あと三人は藤兵衛を見送る。此模樣よろしく、
ひやうし　幕

七幕目　三浦屋の場

【役名――深見十三、夢の市郎兵衛、幻次郎吉、若い者四人、三絃箱持李助、鶴澤三壽齋、鎌倉屋梅之助。新造胡蝶、三浦屋薄雲、新造八重雲、新造三人、番頭新造、禿ゆかり、志賀助女房お浪、其他。】

〔三浦屋格子先の場〕――本舞臺三間の間朱塗りの大格子、青簾をおろし、上手一間の入口、三浦屋といふ柿の長暖簾を掛け、下手千本格子、駒寄せ、總て大磯京町三浦屋格子先の體、爰に○への新造錦繪の巻いたのを持ち、側に□同じく新造にて立ち掛り、若い者一、二床几へ掛り居る、此見得すがゞきにて幕明く。

□　雨雲さん、何の繪を買つて來なさんした。

△　おいらんに頼まれて、繪双紙屋へ買ひにいつたが、みんな買つた繪ばかりで、やう〳〵二三枚買つて來たわいなあ。

□　誰れの繪を買つて來なさんしたか、ちよつと見せて下さんせいな。

若一　お前が最屓の役者なら、彦三郎か太夫元か。

若二　但しは權ちやんか三好屋、大和屋の太夫ぢやあねえか。

△　いえ〳〵そんな役者ぢやァありません、わたしが首ツたけ惚れて居るのは、太夫元の弟の橘五郎さ。

若一　むゝ、あの一人遣ひの人形を見るやうな、でつくりな役者かえ、成程お前が惚れさうだが、然し錦繪に出やあしめえ。

若二　どうして〳〵、版元へ禮でもしにやあ、誰があんなものを彫るものか。

□　雨雲さん、お前禮をして、畫に出るやうにして貰ひなさんせいな。

△　ほんにあの人の事なら、幾らでも散財をするから、早く錦繪に出したいものだ。

若一　なけなし物を散財するより、不斷お前を御贔屓の、傳馬町の旦那へ頼んで、芳幾さんにでもかいて貰ふがいゝ。

△　それぢやあ旦那へお願ひ申して、大首にして奉書へ、立派に摺つてお貰ひ申しませう。

若二　そりやあお前無駄な話しだ、橘五郎の大首を、誰が買ひ手があるものだ。

□　もし又買ひ手があつた時は、方々の娘ッ子が橘五郎に惚れようわいな。

△　成程惚れてが多くなつては、餘計にわたしが氣を揉む種だ、こりや止しませう〳〵。

ト此つた口錦繪を開き見て、

□　太助どん、見なさんせ、薄雲さんは大和屋に、よく似て居るぢやァありませんか。
若一　おいらんも似て居るが、胡蝶さんも太夫元の、女形にそつくりだね。
若二　誰が似て居るのなんのといつて、十三さんが彦三郎に、似て居る位なものはない。
△　ほんに口跡まで似てだが、彦三を氣取つて居なさんすかも知れない。
若一　誰が氣取つて居るものかね。
若二　おいらんも十三さんには、大層惚れて居なさるね。
△　おいらんよりは胡蝶さんが、どんなに惚れて居なさんすだらう。
□　胡蝶さんはおいらんに、負けない器量でござんすが、どうした事か十三さんは、きつい嫌ひでござんすわいな。
△　嫌ひも〳〵胡蝶さんに、物を言はれるとぞつとして、身の毛が立つというてぢやわいな。
若一　おいらんならこつちから、顫ひ附いて惚れるのに。
若二　こいつも分らぬ話しだな。
□　それはさうと今夜は家へ、和合連のお方が來て、淨瑠璃があるぢやござんせぬか。
若一　わしの平ちやんの催しで、後に淨瑠璃があるさうだ。それで思ひ出したが、猿寺の稲の屋へ菓子

を取りに遣るのだつた。

若二　あの稻の屋は新見世だが、めつぽふに賣出したの。

若一　そりやあ賣出す筈さ、綺麗で旨くつて安いと來て居るから、あれで賣れにやあ買ひ手が無理だ。

□　まあ物に例へて見ようなら、わたしらのおいらんでござんすね。

△　さうしてわたしなどは、何だらうね。

若一　さうさ、お前などは見てくれが惡くつて、そして喰つてまづいから、下馬先きの大福餅だ。

△　よくそんな事が言へたことだ、まづくツても喰つたくせに。（ト背中を叩く。）

若一　それを言はれちやあたまらねえ。

□　思入れ打つて遣りなさんせいな。

ト若い者の一逃げるを△追廻し、トヾ暖簾口へ逃込むを追ひ掛け、皆々附添ひはひろ。吉原雀の唄になり、花道より梅之助、羽織着流し雪駄にて出來ろ。跡より三壽齋、羽織着流し義太夫の三絃彈のこしらへ、杢助花色の股引、草履尻端折り、三絃箱をかつぎ、下男にて附添ひ出來り、花道にて、

三壽　もし〳〵、そこへお出でなさいますは、鎌倉屋の若旦那ではござりませぬか。（ト梅之助振返り、）

梅之　誰かと思つたら、鶴澤の師匠か、どこぞ座敷があつて來なすつたのか。

三壽　はい、京町の三浦屋に和合連の淨瑠璃がござりまして、それへ參りますのでござりまする。

杢助　若旦那さま、此間は有難うござりまする。

梅之　おゝ杢助どん、御苦勞だの。

杢助　あなたも今日は、三浦屋でござりますか。

梅之　いや〳〵、わしはちつと廓内に、生業用があつて來たのぢやわいの。

杢助　その御生業とおつしやるは、お遊びでござりませう。

三壽　こりや杢助がいふ通り、お遊びより外若旦那に、御生業はない筈だ。

梅之　まさかさうでもないわいの、さうして今日は降らうかと、お天氣を案じたが、杢助が傘を持たぬからは、雨は丈夫と見えるな。

杢助　いえも、降る氣遣ひはござりませぬ、あなたがお遊ひに入らしつたやうなものだ。

三壽　こりや、杢助出來し居つた。

梅之　なか〳〵隅へはおかれぬわいの。

杢助　どれ、眞中へ出て行きませうか。

ト右の唄にて、梅之助先さに三人舞臺へ來る。暖簾口より○□△の新造出來り、

○　梅之助さん、お出でなさんしたか。
□　きついお見限りでござんしたな。
△　八重雲さんがお前さんを、
三人　どんなに待つてゞござんせう。
梅之　ちつと來られぬ譯あつて、みんなの顔も見なかつたわいの。
○　まあ爰へお掛けなさんせいな。（トこれにて浮いた合方になり、梅之助床几へかける。）
三壽　いや此間お家へ上り、旦那さまに承はりましたが、まだいつぞやの香合は、知れませぬさうでござりますな。
梅之　さあ大江様のお屋敷から度々の御催促ゆゑ、日延もこれまで言ひ盡し、毎日斯うして方々を尋ね捜して歩けども、今に手掛りの知れぬといふは、此鎌倉へお觸が出たゆゑ、京大阪か出羽奥州遠くへ賣りに行たかも知れぬ。何にしろ其香合が、四五日うちに出ぬ時は、生きても死んでも居られぬわいの。
三壽　それは御心配なことでござりますな。
杢助　成程それでは若旦那さまも、廓へお出でなされずに、御生業替をなされた筈だ。

梅之　ほんにみんなの顏を見るも、今日が限りにならうも知れぬわいの。

○　えゝも、そのよな緣起の惡い、忌はしいことをおつしやりますな。

□　八重雲さんを始めとして、わたし達の一心でも、

△　今にそれが知れませうわいな。

三壽　よく淨瑠璃の世界などにも、寶物の知れぬので、心中などに出るやうな仕組はいくらもございますが、狂言綺語にあのやうに、理窟を附けて書きますれど、考へて見るとみんな無理、恩ある親へ苦勞を掛けるが、第一の不孝でござりまする。

杢助　また師匠さんのお談義か、そんな事を言ひなさるから、箍が弛んだと言はれますぜ。

三壽　何のおれより手前こそ、よつぽど弛んで居るくせに。

杢助　なに、わしの箍はゆるんだのではない、先から是れなのだ。

○　ほんにお師匠さんのお出でをば、御連中がさつきから、お待ちなされてゞござんすぞえ。

三壽　おゝさうでござりませう、始まらぬうち二三段、合して置くものがござりました。

□　杢助どん、お前も今日は語りなさんすか。

杢助　あゝ語りますとも〳〵、後に一段やります積りだ。

梅之　杢助どんの淨瑠璃は、小丸の唄と一對であらう。
三壽　まことに聞きごとでござりまする。
△　みんながどんなにお前をば、樂しみにして居りませう。
杢助　それだから今日は、傘を持たねえのだ。
三人　そりやなぜでござんすえ。
杢助　廓へ來るとふられないからさ。
三壽　惡く洒落れる。さやうなら、若旦那。
梅之　鶴澤の師匠。
三壽　後程お目に掛りませう。(ト吉原雀の唄にて、三壽齋杢助暖簾口へはひる。)
○　さあ梅さん、八重雲さんがお前さんを、いつそ苦勞にして居なさんすから、
ゐ。
三人　早う二階へござんせいな。
梅之　久し振りで二階へ行き、みんなと一緒に遊びたいが、こちの家へ表向き來られぬやうになつたゆ
○　其事ならようござんす、外ならぬお前さんゆゑ、お辰どんでも内證でも、見て見ぬ顏をしますか

ら、忍んでお上りなさんせいな。

梅之　それぢやというて、喜助や太助の、目に掛つては濟まぬわいの。

□　何の濟まぬことがござんせう、是れまでみんなにあのやうに、お遣んなすつた梅さんなれば、誰がやかましく言ひませう。

△　言ひませぬはわたしが請合、早うお上りなさんせいな。(ト此時暖簾口より、八重雲新造裝にて出來り、)

八重　横雲さん、梅さんが來なさんしたぢやござんせぬか。

○　あい、今爰へござんしたわいな。(ト是れにて八重雲梅之助の側へ來て、)

八重　おゝ梅さん、よう來て來さんしたな、わたしや逢ひたうて、逢ひたうてならぬわいな。

梅之　そなたよりわしの方が、ひよつと情人でも出來はせまいかと、逢ひたうて〱ならなんだわいの。

ト八重雲これを聞き、ツンとして、

八重　そんならお前は、わたしが情事でもするかと思うてござんすかえ。

梅之　さあ、思ふまいものでもない、日毎に替る客の數、見替へられるよい人が、出來まいとも言はれぬわいの。

八重　假令どのよなお方が來ても、座敷ばかりで逢はぬといふ、證據にあげたわたしの起請、お前は嘘ぢやと思うてか。

梅之　さあ、嘘ぢやとは思はぬけれど。

八重　思はぬならば假初にも、必ず言うて下さんすな、わたしや悲しくなりますわいな。

ト八重雲泣く思入。

○　こりや梅さんが惡うござんす、八重雲さんはほんに〳〵、お前さんより外に男はないやうに、思うてゞござんす。

□　見世に居ても、座敷に居ても、寄るとさはると噂のみ。

△　朝から晩まで惚け通し、うけ賃に甘味をば、幾度買うたか知れねわいな。

○　それを兎やかう言はしやんすと、お前が惡うござんすわいな。

梅之　さういふ事とは知らぬゆゑ、今のやうにいうたのは、わしが惡かつた、堪忍しや〳〵。

ト八重雲の背中をさする。

八重　堪忍してあげるから、わたしにあやまらしやんせいな。

梅之　大きに粗相を申しました、眞平御免下さりませ。（ト手を突いてあやまる。）

八重　えゝも、人を茶にして憎らしい。
梅之　それ、憎らしいといふではないか。
△「いえ〳〵、憎い〳〵は可愛の裏さ。
八重　まあ、こつちへ寄らしやんせいな。（ト八重雲梅之助にひつたり寄添ふ。）
○　さうして爰へ梅さんの、ござんしたを八重雲さんは、誰に聞いてござんした。
八重　喜助どんがこつそりと、わたしに知らせてくれたわいな。
○　それ御覧じろ、喜助どんがこつそり知らせてくれましたとさ。
梅之　それでは野暮もいふまいかいの。
○　そりや大丈夫で、
三人　ござんすわいな。
　トやはり太鼓入りの唄になり、花道より夢の市郎兵衛、好みのこしらへにて出來り、花道にて、
市郎　成程この里ばかりは月夜かなと、土手から下りて大門を這入ると實に別世界、どんな者でも氣が浮いて、うき世の事をさつぱりと、忘れてしまふは爰ばかりだ、ぢゞいじみたことを言ふやうだが、年の若い息子などは、親の勘當うける筈だ。（ト本舞臺へ來る、皆々見て、）

○こりやお珍らしい、夢の親方。

皆々　ようお出でなさんしたな。(トこれにて梅之助顔を背け居る。)

市郎　けふこつちの内にある、和合連の淨瑠璃を聞いてくれと連中から、迎ひの來たを幸ひに、薄雲さんに用もあるから、ぶら〳〵遊びに出掛けて來たのさ。(ト言ひながら梅之助を見て、)もし、そこにおいでなさるのは、梅之助さんぢやあござりませぬか。(ト梅之助こちらを向き、)

梅之　おゝ市郎兵衛殿、こなたに逢うては面目ないわいの。

市郎　何か面目なうござります。

梅之　何というて、お前とは兄弟分の明石闘に一方ならぬ苦勞をかけ、廓へ來ては濟まぬわいの。

市郎　何の事かと存じましたら、その事ならば私へ何の御遠慮がござりませう、四十五十になる人さへ現をぬかして來ますものを、十九や二十のお前さまが、爰へ來ずに居られますものか。是れから廿四五までが面白い遊び盛り、おもいれ廓へお出でなせえ。もう私のやうになりましては、惚れ手もなけりやあ爰へ來ても、さう面白くござりませぬ。

八重　あんまりさうでもござんすまい、花の戸さんが親方には、大層惚れて居なさんすわいな。

市郎　またそんな嘘をいうか、しかし嘘でも女郎衆に、惚れたとかはれたとが言はれるうちが花、何の

茲はねえ、梅と同じことで、色氣がうせて實を持ちやあ、枝へたかつた毛蟲同樣、人につまゝれいやがられるのだ、何でも花のあるうちに、おもいれ色をなされませ。

梅之　やれ〳〵嬉しや、そのお詞で安心はしましたが、關取へは內々に。

市郎　そりやあ仰しやるまでもない、何しにそんなことを言ひませう、わたしらでせえ爰へ這入ると、いゝおつな心になりますものを、まして獨身の若旦那、面白い相手はあるし、人の目顏を忍んでもお出でなさるは無理ぢやあねえ、遊ぶ爲に出來てゐる御免の場所の此廓、行くなといふのがマア無理さ、實に勘當受けるやうな、人がなけりやあ繁昌しませぬ。

○　ほんに、さうでござんすなあ。

八重　それでは親方梅さんを、お呼び申してもようござんすかえ。

市郞　いゝとも〳〵、思入れ可愛がつてお上げなせえ。

□　お前さんがおつしやらずとも、八重雲さんは梅さんを。

△　ほんに甜めたり乾かしたり、どんなに可愛がんなさんせう。

梅之　あんまりさうでもないわいの、氣兼ね苦勞をして來れど、邪魔にしてならぬわいの。

八重　又そんな事を言ひなさんすか、いつ邪魔にしましたぞいな。（ト八重雲しがみ附く。）

市郎　これ〳〵、なんぼ色の世界でも、往來中でみつともない、部屋へいつて夜通し、思入れいぢめて上げなせえ。

八重　親方の許しゆゑ、思入れいぢめて上げねばならぬ。さあ、わたしと一緒にござんせいな。

ト八重雲梅之助の手を取り引立てる。

梅之　さあ、おぬしがさう手を取つても、爰の二階へこの儘に、客になつては上れぬわいの。

市郎　その入譯も姉御から、話に聞いて居りました、高の知れたことなれば、わしと一緒にござりませ。

梅之　そんなら此儘知らぬ顏で、上つてもよからうかいの。

○　よいの何のと、親方と御一緒ならば、誰あつて指のさし手もござんせぬわいな。

八重　いえ〳〵、指のさし手がござんすわいな。

市郎　むゝ、誰が指をさしますえ。（トきつとなる。）

八重　お前に惚れてる、花の戸さんが。

市郎　おきやあがれ、兄貴を馬鹿にしやあがつて。

皆々　さあ、ござんせいなあ。

ト吉原雀の唄にて、市郎兵衛先きに皆々暖簾口へはひろ。名古屋名物になり、花道より幻次郎吉、桃色木綿の手拭を吉原冠りになし、羽織着流し草履にて出來り、花道にて、

次郎　扨々賑かなことではある、じやんじやか〳〵彈き立て、氣が浮き〳〵とするやうだ、身共初めて參つたが、國許の遊所場などゝは又格別なことではある。向うに見ゆるが此廓で名の高い三浦屋ぢやな。どれ〳〵、あれへ參つて案内を乞はう。（ト右の唄にて舞臺へ來り、）賴まう〳〵。

ト大きな聲する、暖簾口より若い者一、二着流しにて出來り、

一二　へい〳〵、これは入らつしやいまし。

次郎　こりや〳〵、三浦屋と申すはこちらぢやな。

若一　さやうにござりまする、三浦屋と申しまするのは、三四軒ござりまするが、こちらが惣本家にござりまする。

若二　へい、高尾、揚卷、薄雲と名代の遊女のござりますのは、本家のこちらでござります。

次郎　然らば、薄雲といふ遊女はあるかな。

次郎　身共はさる藩中にて、主命に依つて鎌倉へ今般罷り下りしが、かね〴〵噂に聞及ぶ此大磯の遊女町、名高き遊女を求めんと、朋輩どもに承はりしに、當三浦屋の遊女にて、薄雲と申すのが廓

一の美人と聞き、國許へ歸りし後土産話しにしたいものぢやが、どうか求めることは出來まいか。

若一 いえもう、出來ぬことはござりませぬが、お茶屋はどちらでござりまする。

次郎 身共屋敷のお茶屋かな。

若一 左樣にござりまする。

次郎 お下屋敷に、築山あづまや作りのお茶屋があるて。

若二 いえ、其のお茶屋ではござりませぬ、お遊びにいらつしやいます、お茶屋のことでござります。

次郎 殿樣や奥樣が、時折りお遊びにいらッしやるわえ。

若二 これはとんと、分らぬ話しだ。

次郎 とんと身共分らぬゆゑ、どうかお身達よいやうに手引をなしてくれまいか。國許の土産なれば、金子は何ぼでも出す程に、其の薄雲を買はしてくりやれ。

若一 折角のお賴みでござりますが、當時全盛のおいらんゆゑ、お馴染のお客ばかりで澤山でござりますから、初會のお客はどなたでも、お斷り申しまする。

次郎 そこをどうかお身達の、働きを以て買はしてくりやれ、杯ばかりで大事ない。

若一　そのやうに仰しやりますなら、どうか私共が働きませう。

次郎　何分ともに頼み申す、これは少しばかりぢやが、お身達へ骨折りだ。

ト懐から紙に包みし金を出してやる。

兩人　これは有難うござります。（ト兩人ちよつといたゞき、あけて見て、）

若一　こう太助、何と世界は開けたぢやあねえか、遠國のお方が此通りだ。

若二　これから見ると江戸ッ子で、通りものがつた顔をして、三文も遣はねえ奴があるな。

若一　ところがちよつと二分づゝとは、江手ッ子は跣足だ。

次郎　はあ、江戸では跣足が流行るかな。

若一　いえ、跣足だと申しましたは、江戸ッ子よりお前樣が、お金をたんと下さいましたから、跣足だと申しました。

次郎　して見ると跣足とは、惡い事ではないか。

若二　惡いどころか、よい事を跣足だと申しまする。

次郎　はてく、所柄とて、よい事が跣足ぢやな。

若二　何でもお金をたんと下さる方が、跣足でござりまする。

次郎　然らばもそつと跣足にならうか。(トまた紙入から一分出して遣る。)
兩人　これは、有難うござりまする。
若一　また一分づゝ下さるとは。
若二　いよ〳〵跣足でござります。
次郎　猶もお身達に褒められるやう、身共もこれで跣足にならう。(ト次郎吉草履をぬぐ。)
若一　あゝもし、おみ足が汚れます。
次郎　汚れても苦しうない。(ト草履の泥を落す心にて合して叩くを道具替りの知らせ、)さゝ、案内いたせ。
ト草履を懐へ入れる、兩人間拔けだといふ思入、その手で深味への唄にて、此道具よろしく廻る。

(薄雲部屋の場)＝本舞臺一面の平舞臺、正面床の間、袋戸棚、違ひ棚、此下夜具棚、簞笥小道具の書割よろしく、上の方一間折廻し塗骨障子屋體、下の方廊下口、部屋の書割、上手に夜具・屏風建廻しあり、總て薄雲部屋の體。上手に深見十三、着流し前帶、薄雲部屋着の裝にて兩人誂への火鉢にあたり居る。此前に胡蝶新造しごき裝、番頭新造○、□、△いづれも新造裝にて、道中双六を置き、双六をして居る見得、十三の傍に草双紙、羽子板あたま掛のきれなどいろ〳〵景物を置き、此見得よろしく、浮

いた合方にて道具留る。

十三　さあ〳〵、もう少しで上りだから、さつさと振つたがよい。
薄雲　今泊つたのは、誰でござんす。
胡蝶　また雨雲さんでござんすわいな。
△　たゞならさつさと出來ますけれど、戀によそへて宿の名を、いふのがわたしや出來ないものを。
番新　出來ずば抜けておしまひならいゝに。
△　よくそんな邪險なことを言ひなさんす、抜けては景物が取れぬわいな。
○　お前の取れぬは、みんなの悦び。
□　少しも構ひはござんせぬわいな。
薄雲　さうしてお前の支へたのは、どこの宿でござんすえ。
△　あい、鳴海でぎつちり支へましたが、おいらん何ぞござりますかえ。
薄雲　さあ、色に鳴海のはじまりは、とは、どうでござんすえ。
△　そりやあようござんす。さあ〳〵、わたしのは色に鳴海のはじまりは。（ト賽を振つて、）ほい、一ツだから、宮の宿だ。

胡蝶 さあ、色に鳴海のはじまりは。

△ おいらん、何ぞござりますか。

十三 互ひに顏を宮の宿、

△ こりや有難うござります。さあ〳〵、色に鳴海のはじまりは、互ひに顏を宮の宿。

ト△賽を振つて、

胡蝶 渡りに舟の桑名より、契りし中も四日市。(トかぞへて次へ廻す。)

番新 わたしはたつた一ッゆゑ、誓ひは堅き石藥師。

○ よい相、庄野、あひ惚れに、龜やま〳〵の約束も。

□ 人目の關の坂の下、雨の土山幾夜濡れ。

△ 雁々水口、あとのが先へ。

薄雲 それでは詞がつかぬわいな。

△ なに、つかないことがありませう、雨の降る日に雁が通つたのだ。

胡蝶 またお株で、わからないことを言ひなさんす。

十三 それも續けて言はうなら、雨の土山幾夜ぬれ、水口々になぶられて。

△　それ〳〵、水口々になぶられて。
胡蝶　野暮な石部の異見をば、
番新　餘所に草津の草隱れ、
○　晴れて大津を樂しみに、
□　けふぞ上りの女夫中、
薄雲　また花雲さんが、上りなさんしたか。
□　これで三度でござんすわいな。（ト△賽を取つて、）
△　えゝ此賽は忌々しい、わたしにさつぱり上らせぬわいな。（ト口へ入れ呑込み喉へ支へし思入にて苦しみ、）むゝゝゝゝ。
十三　これ〳〵、苦しさうだがどうしたのだ。
胡蝶　賽を呑んだのでござんせう。
番新　詰らないことをしなさんすねえ。（ト背中をたゝき、）それ、通つたかえ。（△賽をはき出し、）
△　えゝ、此五が出ると、わたしが上つたのだ。
番新　ほんにお前は、後生樂だねえ。

△　さあ〳〵、もう一遍やりませう。
薄雲　もうよい加減にしまひなさんせ、お前が困る種ぢやわいな。
△　それでも是れきりしまつては、賭物が取れぬわいな。
薄雲　そりやわたしが上げようわいな。
△　賭物さへ下さんすなら、さあ〳〵直におしまひ〳〵。（ト双六を片寄せる。）
十三　いや、雨雲は正直ものだ。（ト下手より、以前の若い者一出來り）
若一　もし東雲さん、ちよと顔を貸して下さりませ。
番新　喜助どん、何だえ。
若一　外の事ではござりませぬが、さる遠國のお侍様が、今し方おいでなされて、かね〴〵おいらんの名を聞き及び、國許への土産にしたいから、ちよつと逢はしてくれとおつしやいますが、どうかおいやでもござりませうが、ちよつとお逢ひなすつちやあ下さいますまいか。
番新　そりやあお前斷つておくれならよかつたに、おいらんも昨夜から少し癪氣で居なさんすし、今に近江屋と大忠から、お出でのお客も知つて居ながら、どうぞ斷つて下さんせいな。
若一　それも知つて居りますから、初會のお客はどこからでも、みんな斷つて居りますが、何をいふに

も遠國から態々おいらんの名を聞いて、國への土産に逢はしてくれと、大小さしたお侍様が、兩手を突いてお頼みゆゑ、まさか出來ないと、ねえモシ旦那、申されませぬではござりませぬか。

十三　成程喜助も、さういふ事では斷りにくからう、遠國から名を聞いて、わざ〳〵來たとあるからはちよつと行つて逢うたがよい。

薄雲　十三さんがあゝ言ひなさんすから、座敷ばかりなら行かうわいな。

若一　それは有難うござります、杯ばかりでよろしいのでござります。

番新　そんな事を言ひなさんしても、町人者と違つてお屋敷ゆゑ、是非床へはひらねば、一分が立たぬなどゝ、跡で困らして下さんすな。

○　此間も軍兵衞さんへ、名代に出ていじめられ、わたしや懲り〳〵したわいな。

□　どうぞおいらんは杯きりで、早くお返し申して下さんせ。

若一　そこは私も三浦屋で、この年まで若い者を勤めて居れば、お前方に決して難儀は掛けませぬ。

番新　そこさへよくばおいらんを、今にお連れ申さうわいな。

○　さうして座敷は、どこでござんす。

若一　生憎今晩は込合つて、どこも塞がつて居りますから、少し遠うござりますが、內證の圍ひでござりまする。

十三　さぞ客人が待つてゞあらう、早う支度をして行つたがよい。

薄雲　わたしが爰にをりましては、何ぞお邪魔になりますかえ。

十三　またそんないやみを言ふか。

薄雲　いやみではござんせぬ、惚れ手の多い十三さんゆゑ。

□　ほんに、油斷がなりませぬわいな。

番新　さあ胡蝶さん、お前も一緒に行きなさんせ。（ト此以前より胡蝶胸を抑へ、癪の起りし思入。）

胡蝶　一緒に參りたうござんすが、さつきから癪が差込み、切なくツてなりませんから、どうぞ堪忍して下さんせ。

番新　おやく、今まで何ともないやうだつたが、急に癪が差込むかえ。

△　こりや大方十三さんに。

胡蝶　あゝこれ、そんな譯ではござんせぬ、實に切なうござんすから、歩くことが出來ませぬわいな。

薄雲　癪とあるなら仕方がない、合藥でも呑みなさんせい。

胡蝶　あい、有難うござんす。
若一　左様なら、どうか直に。
番新　えゝせわしない、靜かにしなさんせいな。（ト此うち薄雲打掛を着て、）
薄雲　そんなら十三さん、行つて來るぞえ。
十三　おゝ、ゆつくりと行つて來やれ。（ト薄雲立上り、思入あつて、）
薄雲　もし、胡蝶さん。
胡胡　おいらん、何でござります。
薄雲　ぬしには惚れ手が多いから、お前そこに居なさんすなら、氣を附けて下さんせい。
胡蝶　あい、あいたゝゝゝゝ。（ト胡蝶癪の差込む思入にて胸を押へ、俯伏せになる、皆々顏見合せ思入、）
若一　こりやよい下駄の預け所だ。
番新　さあ、支度がよくば、
皆々　ござんせいな。
薄雲　苦界の勤めを（ト十三と顏見合せ、）して來ようかいな。
ト唄になり、薄雲先きに○、□、番新、一附いて、下手廊下口へはひる。あと十三煙草を吞み居る、胡

蝶は俯伏せになりし儘にてゐる、十三手持ち無沙汰の思入にて双六を見て、

十三　この双六は普通のと違ひ、名所古跡はいふも更なり、名物までが記してある、府中二丁町遊女屋あり、鞠子名物とろゝ汁、うつの谷の十團子、蔦の細道に猫石あり。

ト十三ぎつくり思入、胡蝶そつと天窓をあげ見る、十三顔見合せ、素知らぬふり、胡蝶も其儘俯伏せになる、十三思入あつて双六を片附け、

今までみんなが双六を、して居たので賑かだつたが、おれ一人取り殘され、斯うして居るも退屈なれば、薄雲が歸るまで、花の戸さんの所へ行て、話しでもして來ようか。

ト十三立上る、胡蝶顔を上げ、十三を見て、

胡蝶　もし、十三さん。

十三　や。(ト十三ぎつくり思入。)

胡蝶　どこへお出でなさんすえ。

十三　さあ、初會の客で薄雲が、みんなを連れて行てしまひ、おぬしは癪で寐てゐるし、おれ一人で淋しいから、花の戸さんの所へ行くのぢや。

胡蝶　もうわたしもようござんすから、爰においでなさんせいな。

十三　いや、外にちつと話しもあれば。

胡蝶　そりやさうでもござんせうが、わたしもあなたに話しがあれば、まあ〳〵待つて下さんせいな。

ト胡蝶十三の裾をとらへる。合方。十三思入あつて、

十三　そんなら癪は、をさまつたのか。

胡蝶　あい、疾うからよろしうござんす。

十三　きつう起つた様子であつたが。

胡蝶　ありや嘘でござんすわいな。

十三　なんで假病をつかうたのぢや。

胡蝶　何でとは十三さん、わたしの心が知れぬかいなあ。（ト誂への合方になり、十三を下へ引きすゑ、思入あつて、）忘れもせぬ仲の町で、初めてお目に掛りし時、まだ肌寒き春風にぞつとする程思ひそめ、同じお客に出るならば、あゝいふお客と一晩でも枕並べて寐たならば、女郎冥加に叶ひしことゝ心に極めを附けてから、外へ出るのがいやになり、ほんに義理あるおいらんの、お客でなくばと幾度か、我が身で我が身に異見をなし、愼んでは居たけれど、寐ても覺めても忘られず、夢現にお名を呼ぶのを朋輩衆になぶらるゝも、惚れた此身に嬉しくて、いつそ打明け言うたらば、若し

や願ひが叶はうかと、今日は〳〵と思うても、四邊の人目に言兼ねしが、今おいらんがみんなを連れ、客へ行くのは鹽斷ちした觀音さまの御利益と、癪というて殘つたは、跡でお前へ此胸を明けてお話し仕ようばツかり、是程思ふ心をば不便と思うて十三さん、情人になつて下さんせいな。（ト十三思入あつて、）

十三　すりや、おぬしには先達て、仲の町にて逢うたる時より、わしに思ひを掛けしとか。

ト十三ぞつとする思入、

胡蝶　さあ、所詮わたしとおいらんとは、比べものにはならぬけれど、惚れた心は一つにて、別に替りはござんせぬわいな。

十三　それ程までにこの十三を、思うてくれるは嬉しいが、何を隱さう薄雲を、わしも疾うから思ひそめ、（ト思入あつて、）跡の月より通へども、月に叢雲花に風、兎角に物の障りにて、（ト胡蝶へ思入あつて、）まだ一夜さもしつぽりと、枕かはして寐たことなく、惚れた思ひを晴らさねば、あの薄雲と今宵にも、比翼連理の契りをなし、一旦斯うと思うたる男の意地が立つたなら、そなたの頼みも聞かうけれど、思ひを晴らさぬそのうちは、どうぞ許してくりやいの。

胡蝶　そのおいらんと枕をば、かはさぬうちに、惚れられたのが因果ゆゑ、どうぞわたしに乘替へて嬉

しい返事を十三さん、お聞かせなされて下さんせいな。

十三　たとひ何と言やつても、思ひに思うた薄雲と枕かはさぬ其うちは、つれないものと思はうが、そなたへ返事はならぬわいの。

胡蝶　そりやさうでもござんせうが、命をかけて惚れたれば、是非とも此場でお返事を。

十三　さりとては聞分のない、此身の思ひを晴らさぬうちは、返事はならぬ思ひ切りや、たつてと言はば是非がない、遣手へ言はねばならぬぞよ。

胡蝶　お辰どんへ斷られ、どんな責苦に逢はうとも、それもお前ゆゑならば、わたしや厭ひはしませぬわいな。（ト十三に詰寄り、きつと思入。）

十三　すりや、どうあつてもおぬしはわしを、思ひ切る氣はないといふか。

胡蝶　さあ一ツ家にておいらんの、お客へ惚れる上からは、これが叶はぬその時には。

十三　やあ。

胡蝶　生きて居る氣はござんせぬ。

十三　そんなら是非とも、

胡蝶　願ひを叶へて。（ト十三の袖を捉へる。）

十三　むゝ。(ト思入。)

胡蝶　下さんせいなあ。

ト胡蝶縋りつくを十三振拂ふ、胡蝶また取付かうとする、此時下手より薄雲出て、兩人の中へはひり隔てる、あとより新造みな〳〵出る、

薄雲　こりや胡蝶さん、何をしなさんすのぢや。

胡蝶　や、おいらんでござんすか。

薄雲　今廊下から見て居れば、十三さんに縋り付き、願ひを叶へて下さんせとは。

番新　何の願ひで、

皆々　ござんすぞえ。(トこれにて胡蝶ちつと思入あつて、)

胡蝶　願ひといふは外でもない、十三さんに惚れたゆゑ、情人になつて下さんせと、お願ひ申して居たのでござんす。

皆々　えゝ。(トみな〳〵びつくりなし、呆れし思入、)

番新　これ胡蝶さん、そりやお前、本氣でござんすか。

胡蝶　あい、わたしや本氣でござんすわいな。

番新　いゝえいな、そりやどの口で、
皆々　言はしやんすぞえ。
胡蝶　此の口で言ひますわいなあ。（トずつけりいふ。皆々思入、）
番新　ても、憎らしい。（ト番頭新造立掛るを薄雲止めて、）
薄雲　あゝこれ、待ちなさんせいな。（ト番頭新造を止めて、）これ胡蝶さん、疾うからお前が十三さんに、惚れて居るのは聞いては居れど、側から惚れるも往々あることゆゑ、聞いても聞かぬ顔をしてわたしや今日までこれ程でも、いうたことはござんせぬ、意氣地なしゆゑどうでもよいと、お前は見くびつて言ひたいがいを言はしやんすか、痩せても枯れても姉女郎、わたしの客をお前がとつて、それで濟まうと思はしやんすか。（ト胡蝶思入あつて、）
胡蝶　そりや濟まぬのも知つては居れど、十三さんにしみ〴〵と、惚れたがわたしの身の因果、濟まぬ義理をば打捨てゝ、言ひ出すからはどこまでも、願ひを叶へにやおかぬわいな。
番新　これ〳〵胡蝶さん、そりやお前どうしたのでござんす。
○　一方ならぬおいらんの、世話になつたお前の體。
□　物事内氣なおいらんが、口へ出して惚れたといふ、

△　十三さんを取らうとは、てもあつかましい。
○　こりやお酒でも呑みなんして、醉うての上のてんがうか。
□　よもやまことぢや、
兩人　ござんすまい。
胡蝶　いえ〳〵、わたしや醉つては居ませぬ、てんがう所か誠も〳〵、眞實誠でござんすわいな。
薄雲　眞實誠とあるからは、義理を捨てゝ言ふのであらうが、朋輩衆なら知らぬこと、假にも妹といふ名のある、新造衆に我が客を、手籠めに取られて明日から、どの顏さげて薄雲が仲の町へ出られようぞ、斯ういふ事をしてもよいか、又惡いかを糺すのは、二階を預かる遣手の役、お辰どんに斷つて廓の法にする程に、覺悟極めて居なさんせいな。
胡蝶　そりやどうなりとしなさんせ、愛敬捨てゝいふからは、三度の食を止められて、此身を縛られ遣手衆の、小刀針の苦しみも、かねての覺悟でござんすわいな。
薄雲　流石は常から意地のある、胡蝶さんだけ立派な挨拶、なか〳〵わたしは及ばねど、此京町で一といつて二とは下らぬ三浦屋で、高尾揚卷薄雲と代々續きし名の手前、わたしは兎もあれ先代へ、濟まねばどこがどこまでも、意地を立てねばおかぬわいな。

胡蝶　お前も意地を立てなさんすりや、わたしも意地を立てねばおかぬ。
番新　そんならどうでも。
皆々　十三さんを。
胡蝶　わたしが貰はにやならぬわいな。
番新　ほんに呆れた、
皆々　子ぢやわいな。（ト思入、此時下手よりお辰の遣手、一、二の若い衆出來り）
お辰　いや、その仕置はわたしがしませう。
十三　や、おぬしはお辰か。
お辰　十三さま、御免下さりませ、樣子は廊下で障子越し、殘らず聞いて居りました、新造の身でおいらんへ、不手勝手な今の詞、このまゝ捨てゝはおかれませぬ。
若一　これ胡蝶さん、お前氣でも違つたのか、おいらんのお客を新造衆の取ることは、ねえ事ぢやあねえけれど、そりやあ内證ですることだ、手引きがあつて明き部屋で、こつそり寐ても口を拭き、どこがどこまでしらを切り、知らねえ顏をしにやあならねえ。
若二　それを現在おいらんへ、平ぶッ付けに惚れたから、客をくれろと强談にねだるといふのはいゝ

肚胸、振袖を着る新造衆にやア、あんまり色氣のねえせりふだ。
お辰　紋日物日も世話になる、薄雲さんへ義理が濟まぬ。さあ、御免なせえと手を突いて、おいらんへあやまりなさんせ。
胡蝶　いゝえ、わたしやあやまらぬから、廓の法にしなさんせ、言ひにくいことを言ふからは、義理は捨てる心でござんす。
お辰　そんな譯の分らねえ、無法な事をいふものがどこの國にあるものだ、義理を捨てると言ひなさりやあ、爰の家へはおかねえよ。
若一　そりやお前いゝ覺悟だ、お辰どんはいふに及ばず、わしらも聞いた上からは、居てえといつてもおかれない。
胡蝶　あい、住替に出されるのも、わたしや覺悟でござんすわいな。
若二　お前一人が女郎衆なら、そんな熱もきかうけれど、百人からある大三浦屋、外の女郎衆の示しにならねえ。
若一　こりやあお辰どん、內證へいつて、旦那のお耳へ入れた上、

若二　判方の善六を、呼びにやつて引渡し、白い黑いをわけにやあならねえ。

お辰　さあわたしらと、

三人　一緒に來なせえ。（ト胡蝶を引立てに掛る、薄雲思入あつて、）

薄雲　あゝもし、まあ〳〵待つて下さんせ。

お辰　何でお留め、

三人　なさるのだ。

薄雲　さあ、お前方を留めたのは、一言この子に言ひたいから。（ト胡蝶の側へ來て、）これ胡蝶さん、賣詞には買詞で今のやうには言ふものゝ、一方ならずお前とは互ひの憂さを語り合ひ、ほんに親身の同胞同樣、睦じくした二人が仲、如何に思案の外とはいへど、十三さんに惚れこんで愛想づかしの今の詞、どうしてそんな邪險な氣に、お前はなつた事ぢやなあ。

ト優しくいふ、是れにて胡蝶も濟まぬことだといふ思入あつて、

胡蝶　ほんにわたしは孤兒にて、親姉妹もないものゆゑ、便りない身を不便に思ひ、親身も及ばず親切にして下さんす薄雲さん、實の姉ともわたしは思ひ、お前の爲なら命でも捨てる心の此胡蝶、どうしたことか、十三さんに、（ト胡蝶十三をぢつと見る、十三顏を背け、いやなる思入、胡蝶氣を替へ、）さ

あ、ほれて〳〵惚れぬいて、命までもと思うたが、浮世の義理も恩も捨てゝ、斯う言ひ出した上からは、十三さんを下さんせにやわたしや生きては居ぬ心、一人命は捨てぬゆゑ。（ト十三へ思入あつて、）覺悟極めて居なさんせいな。

若一　一人死なぬといふからは、無理な望みの叶はぬ時は、十三さんもおいらんも、大方殺して死ぬ氣だらう。

お辰　いやはや、呆れかへつた代物だ、いつの間にそのやうに、ふて〴〵しい氣になつたか。

若二　さう聞いては此儘に、放し飼にはしておかれぬ。

お辰　土藏の前へ連れて行き、きつと仕置をしにやあならぬ。

若一　さあ、わたしらと、

三人　一緒に來なせえ。（ト一、二、胡蝶を引立てるを振拂ひ、）

胡蝶　いえ〳〵、わたしやどうあつても、爰の座敷は退きませぬ。

お辰　退かないと言つたとて、退かせずにおくものか。

若一　强情言はずと、

兩人　さあ來ねえ。（トまた引立てるを、）

胡蝶　いえ〳〵、わたしや退かぬ〳〵、退かぬわいな。（ト體を振るを兩人押へつけ、）

若一　いくらじたばたしたとつて、

若二　叶はぬことだ、往生しねえ。（ト双方から手を捉へ引張る。胡蝶ぢつとなつて、）

胡蝶　そんならどうでも、わたしをば。

十三　それもおぬしの心から、我が身の事を思ひ切り、お辰へ詫をしたがよい。

薄雲　惡いと心がついたなら、わたしがみんなへ詫をして、責苦を助けて上げようわいな。

胡蝶　高の知れたる遣手の折檻、わたしや厭ひはいたしませぬ、假令この儘殺されても。

新造皆々　思ひ切る氣はござんせぬか。

胡蝶　死んでも思ひ切られぬわいな。

敵役三人　ても、强情なことだ。

胡蝶　これも誰ゆゑ、十三さん。（ト十三をきつと見る。）

十三　や。

胡蝶　きつと覺えて居なさんせい。

若一　さあ、きり〳〵と、

兩人　歩びなせえ。

ト唄になり、一、新造三人して胡蝶の手を取り引立てる。胡蝶行くまいとするを、お辰煙管にて打ち、無理やりに下手へ引立てはひる。

番新　ほんにまあ胡蝶さんは、どうしてあんなにならしやんしたか。

○　わたしらよりもおいらんを、不斷大事にするあの子。

□　お客をくれのなんのとは、義理にも言はれぬことだのに。

△　愛想づかしの言ひたいがい、愛想もこそも、

四人　盡きましたわいな。

薄雲　これといふのも十三さんが、胡蝶さんに常談でも、言はしやんしたのでござんせう。

十三　その疑ひも無理ならねど、どうしたことかあの胡蝶が、身の毛の立つほどいやでならぬ。

番新　こりや十三さんのおつしやる通り、つひに一度あの子の側へ、お寄りなすつたこともないに、あまたあの子が惚れるといふも、何か仔細のあることで、あらうかも知れぬわいな。

△　いえ〳〵仔細もございもござりませぬ、十三さんが彦三に似て、よい男でござんすからさ。

ト此時下手より若い者三出來り、

若三　もし東雲さん、近江屋のお客も大忠のお客も、今お出でなさいました。
番新　あい〳〵、さうでござんしたか、おいらん、困つたものでござんすなあ。
薄雲　さあ、今日に限つて此樣に、のがれぬ客の落合ふことは、わたしやじれつたうござんすわいな。
若三　なんにいたせ兩方へ、二人づゝ立ち分れて、先陣をして下さりませ。
番新　あい〳〵、それぢやあ花雲さんと雨雲さんは。近江屋の方へ行て下さんせ。
□△　あい〳〵。
番新　わたしら二人は大忠の、太夫さんの方へ行きませう。
若三　どうぞさうして下さりませ。又おいらんはお癪氣の、積りに申しておきましたから、跡からちよつとお顏ばかりを。
薄雲　あい、承知しましたわいな。
番新　そんならおいらん、
四人　行て來ますぞえ。（トはやり唄にて、新造四人に三附いて下手へはひる。跡十三薄雲殘り、）
十三　やれ〳〵、大風の吹いた跡のやうだ。（ト薄雲烟草を吸附けて出し、）
薄雲　ちつと、お休みなさんせぬか。

十三　睡くもないが胡蝶の騷ぎで、氣草臥れがしたやうだ。

薄雲　丁度誰れも居ぬこそ幸ひ、寐ながら話しをしませうわいな。

ト誂へ一中節模樣の獨吟になり、薄雲屏風を開き、枕を直し、上着を脫ぎ屏風へ掛け、胴拔き扱帶裝になる、十三も煙草盆を提げ、床の上へあがり、兩人思入あつて、

十三　どうした緣の薄いのか、互ひに思ひ思はれながら、おぬしの所へかうして來ても、寐ようとすると障りにて、是れまで一度しつぽりと、寐たことのない此十三。

薄雲　ほんにお客が落合ふか、胡蝶さんに邪魔をされ、又いつの夜と約束して、いつも本意ない別れのみ。

十三　今宵もどうかと思うたが、邪魔する胡蝶が仕置に逢ひ、今爰へ來る氣遣ひなし。

薄雲　外のものも客へ行て、まだめつたには歸らねば、

十三　またとあるまい、今宵の首尾、

薄雲　邪魔のないうち。

十三　少しも早う。(ト又獨吟になり、薄雲十三の上着を脫がせ、ぢつと十三に寄添ひ、顏を見て、)

薄雲　どうしてこんなに惚れたのか、骨がないなら一つにと、唄にうたふがしみ〴〵と、一つになりた

　　うござんすわいな。

十三　すりや左程まで薄雲には、わしに惚れたと言やるのか。

薄雲　外のお客を振捨てゝ、側を離れぬわたしの心、これがお前に知れぬかいな。

十三　それが眞實誠なら、わしが自由になるであらうな。

薄雲　ぬしに任せたわたしの體、どうなと自由になさんせいな。

　　ト薄雲十三に凭れかゝり、嬉しき思入、十三もにつこり思入あつて、

十三　嬉しや今宵ぞ。(トうすきドロ〳〵のやうな風の音にて、十三凄くいふ。)

薄雲　え。(トこなし、十三氣を替へ、)

十三　日頃の思ひを、晴らさうか。

　　トまた獨吟になり、十三薄雲を引寄せ、ぢつと顔を見る、やはり薄きドロ〳〵のやうな風の音になり、薄雲見込まれし心にて、うつとりとなる、十三薄雲の扱帶を解き、引寄せて頬摺りをなし、嬉しき思入薄雲十三の帶を解く、兩人とも下は緋の長襦袢にて、手を取らうとする途端、やはり薄ドロ〳〵にて、指金の猫出て十三に飛びつく、これにて十三拂ひのけびつくりして飛び退く、薄雲は件の猫を抱き、心はつきりとなりし思入、十三は本意なきこなし、

十三　えゝ、又もや猫に。

薄雲　え。（ト薄雲何心なく猫を出す、十三ぞつとして、）

十三　邪魔をされしか。（トぢつと思入、獨吟の切れ、時の鐘にて、よろしく此の道具廻る。）

（三浦屋藏前の場）――本舞臺眞中より上手へ寄せて、二間の土藏戸前口、上の方一間板羽目、此蔭より箱階子出這入りあり、下の方九尺の屋體、沂廻し塗骨障子屋體、總て三浦屋藏前の體、爰に以前の胡蝶細引にて縛られ角の柱へ結ひ附けられ居る、傍に一、二手ごろの棒を持ち胡蝶をくらはし居る、これを八重雲留めてゐる、此見得誂への合方にて道具留る。

八重　まあ〱待つて下さんせいな。

若一　これさ八重雲さん留めなさんな、惡く留めだてをしなさると、お前も側杖を喰はにやあならねえ。

八重　假令わたしも共々に、お前方に打たるゝとも、見て居られぬが日頃から、睦しくした朋輩中、どうぞ堪忍して下さんせいな。

若二　いくらお前が留めたつて、こりやあ内證からの言付だ、わたしらが勝手で打つのぢやあねえ。

八重　そりやさうでもござんせうが、お前方の料簡で、よい加減にして下さんせいな。

若一　どうしていゝ加減になるものか、いゝ、いけしつこい、退いて居なせえ。

ト一、八重雲を突き倒し、胡蝶を打つ、八重雲これを留める。

胡蝶　あもし八重雲さん、留めて下さんすは嬉しいが、打たれるのは身の覺悟、お前はわたしに構はずと、早く座敷へ行きなさんせ、怪我でもしてはならぬわいな。

若二　さあ〳〵そつちへ退いてゐなせえ、心を改め十三さんを、思ひ切つたといふまでは、折檻するのも主人の言付け。

若一　此のひがいゝすな體ゆゑ、初手のうちは可哀さうだと、わたしらも思つたが、あんまりお前が强情だから、つひにやあ面が憎くなる、さあ、思ひ切つたといふまでは、

兩人　打つて〳〵打たにやあならねえ。(ト兩人胡蝶を打つ、これを八重雲留める。)

八重　どうぞ堪忍して下さんせいな。

ト我が身で胡蝶を圍ひ、これを留める。此時階子より以前の市郎兵衞、着流しにて出來り、これを見て此中へ割つて入り、兩人を留める、兩人は心附かず、

兩人　えゝ、邪魔になる、退きなせい。(ト突き退けようとするを、市郎兵衞突き廻して、)

市郎　これさ、二人とも靜かにしねえか。

八重　や、お前は夢の親方さん。(ト兩人びつくりして、)

若一　これは親方、眞平御免、

兩人　下さりませ。(ト尻をおろし、下に居る、胡蝶は面目なき思入にてうつ向き居る、八重雲は嬉しき思入にて、)

八重　よい所へ來て下さんしたなあ。

市郎　樣子は二階で聞いて來たが、これが稼業の勤めをば、不勤めにしたならば、折檻するもいゝけれど、高の知れた色戀に、さう荒つぽく打たずとも、仕置の仕樣があらうぢやねえか。

若一　いえもう、犬も朋輩鷹も朋輩、私共も此子をば、こんなに打ちたくもござりませぬが、

若二　主人からの言附けでござりますから、據なくやはく\と、痛まぬやうに打ちました。

市郎　そりやあよく庇つてやつてくれた、お前方のやうな心よしの、若い衆だからいゝけれど、因業な奴でゝもあつた日には、どんな痛え目をするか知れねえ。(ト言ひながら懷から紙に包みし金を出し、)こりやあ少しばかりだが、息つぎに一杯やんねえ。(ト一へやる、一、二に見せて、)

兩人　こりやお親方、有難うござります。

若一　八重雲さん、よろしく。

八重　知らぬわいな。

若二　こいつあ惡いうけだ。（ト市郎兵衞胡蝶に思入あつて、）

市郎　ときに此子に話しがあれば、お前方はちつと爰を。

若一　畏りました、ゆつくりと、

兩人　お話しなさりませ。

市郎　內證へはお前方から。

若一　へい、よいやうに申して置きます、（ト兩人こそ〳〵と下手へはひる。市郎兵衞跡を見送り、）

市郎　成程、地獄の沙汰もだなあ。（ト合方になり、胡蝶顏をあげ、）

胡蝶　親方さん、よくお出でなさんしたな。

市郎　和合連から誘はれて、淨瑠璃を聞きながらお前方のおいらんへ、用があつて出かけて來たが、そりやあさうと胡蝶さん、お前まあ、どうしたといふのだ。

胡蝶　お前さんにお目に掛つて、恥かしうござんすわいな。

市郎　何の恥かしい事があるものかな。（ト此うちよき所へ八重雲薄緣を敷く、市郎兵衞そこへ住ふ。）

八重　もし親方さん、お前さんからとつくりと、胡蝶さんの氣の落着くやう、異見を言つてあげて下さ

んせ。兎やかうわたしが思つても、ほんの蔭で氣を揉むばかり、どうぞお賴み申しますわいな。

市郞　今あらましはお辰どんから、話しを聞いて爰へ來たが、どういふ事で十三さんとやらに、さう又お前は惚れたことだ、其人ばかりが此世界に、男でもなからうぢやあねえか、こんな恥をかゝねえうちに、なぜ思ひ切つてしまはねえのだ。

胡蝶　親方さんのお詞だが、我が身で惡いと知りながら、どうも思ひ切られませぬわいな。

市郞　そりやあ斯うして縛られる程、惚れた事ゆゑよく〳〵な、譯でもあらうが胡蝶さん、お前も利口なやうにもねえ、よく考へて見なせえよ〔ト誂への合方になり、八重雲下手の部屋から煙草盆を持つて來る、市郞兵衞煙草を吞みながら〕これが情人になつたのなら、そりやあ思ひ切られぬのも尤もだといはうけれど、何をいふにも肝腎の相手が得心しねえのを、一人こつちで氣を揉んで、人もあらうにおいらんが惚れ切つて居る其客を、取らうといふはお前が惡い、そんな無理なことはねえ。何ぼ思案の外だといつて、あんまりそれぢやあ外すぎる、これが男の不自由な國でゝもありやあしめえし、一年三百六十日、日々替る客の數、十三さんとやらに勝つた男があるめえものでもねえぢやあねえか、後先見ずの料簡に噂を聞きやああの人を、殺してお前が死ぬといふは、そりやあ惡い料簡だ、親兄弟があるならば跡の歎きはどのやうだらう、無けりやあお前が其人達の問ひ弔

ひをせざあなるめえ、大事にすりやあ百年までも生きられる命をば、勝手に詰めるは親への不孝となり、別けて爰の家でも高金出して抱へた體、これから先きが親方の金箱になる所をば、非業な死をばされたら、損徳は扨ておいて、家の景氣に拘はること、假令三日が一日でも主人とした其人に、難儀を掛けるはそでねえ事だ、悪いことは言はねえから、爰の道理を聞きわけて、思ひ切つてしまひなせえ。（ト市郎兵衞思入にて、胡蝶うつ向き泣きゐる、八重雲側へ寄つて、）

八重　もし胡蝶さん、親方さんがあのやうに、御親切にお前へ異見、必ず徒に聞かしやんすな。悪いことは言はしやんせぬ程に、お前も心を取直し、思ひ切つたと言はしやんせ、さうしたならば内證へは、親方さんがよいやうに、お詫をなされて下さんせうわいな。（ト胡蝶顔を上げ、思入あつて、）

胡蝶　事を分けての今の御異見、一から十まで身にしみ〴〵有難うござんすが、斯うならぬ先きは兎も角も、お世話になりしおいらんへ、言ひたいことを言つたゆゑ、仕置の爲に縛られて、内外の衆に顔を見られ、恥を曝した上からは、どうでも死なねばならぬわいな。

市郎　それが一途な鼻許料簡、爰の家にゐるのがいやなら、話しづくでどこへでも住替に出るがいゝ、年頃といひ器量といひ、羽根が生えて飛ぶ體、又小磯へでも氣を替へて見ねえ、見通しから千石船居ながら拜む六夜待、洒落た話しがあらうも知れねえ。

胡蝶　そのお詞を悖いては濟まぬのも知つては居れど、親兄弟も存じませず小いときに捨てられて、繼親の手で人となり、廓へ賣られしわたしの身の上、間もなく賣つた繼親もどこへ行たやら行方知れず、生き甲斐のない體ゆゑ、どうでも死ぬ氣でござんすわいな。

ト八重雲これを聞き、腹の立つ思入にて、胡蝶へ詰寄り、

八重　ほんにお前はどういふ譯で、そんな心にならしやんした、朋輩多き其中でも人よりいつち中のよい、わたしでさへも愛想が盡きた、無理なことでもある事か御親切な御異見を、無にしてお前死なうとは、そりや分らぬ、分らぬわいな、これがたゞのお人でも聞かねばならぬ所をば、今廓で名の高い男達の市郎兵衛さん、お顏を立てねば濟まぬわいな。

胡蝶　さあそりやお前が言はずとも、濟まぬは知つて居るけれど、あきらめられぬがわたしが因果、どうぞ許して下さんせいな。

八重　そんならお前は、どうあつても。ト立ち掛るを市郎兵衛留めて、

市郎　これさ、おれへの義理なら捨ておきねえ、これが男同士なら顏が立つとか立たねえとかいふこともあらうけれど、取るに足らねえ女の事、なにお前達のいふ事を、何でおれが氣にかけよう、力づくや腕づくと違つて不得手な色の道、無下にいふのも分らぬ譯だ。

八重　それぢやお親方、お前さんは、腹を立つてぢやござんせぬか。

市郎　何しに腹を立つものだ。

胡蝶　考へて見ると濟まぬけれど、どうも思ひ切れませねば、堪忍して下さんせいな。

ト胡蝶うつ向き泣く、市郎兵衛思入あつて、

市郎　かぼそい手をば細引でぐる／＼巻きの縛り繩、嘸やその手が痛からう、解いてやるのは造作もねえが、廓の法で縛つた繩を手籠めにまさか解かれもせず、今に詫をしてやらうから、最う少しだ辛抱しねえ。

八重　お顔を立てぬ胡蝶さんを、憎いとも思はずに。

胡蝶　えゝ、有難うござんすわいな。（ト此時指金の鼠欄間の上を通る、市郎兵衛これを見て、）

市郎　やゝ、欄間を傳はるあの鼠は。

胡蝶　なに、鼠とはえ。

ト胡蝶鼠をきつと見る、うすき風の音、ドロ／＼にて、鼠ばつたり落ちる、市郎兵衛八重雲見て、

市郎　むゝ、猫も追はぬに此鼠が、

八重　四足をちゞめ落ちたるは、

市郎　こいつはけうな事だなあ。(ト合點の行かぬ思入、唄時の鐘にて此道具廻る。)

胡蝶　え。(ト顔見合せ、胡蝶顔を背ける、これにて鼠逃げてはひろ。)

市郎
八重　もしや爰らに。

(離れ座敷の場)――本舞臺三間の間常足の二重、大和葺き本椽附き、向う床の間瓦燈口、太鼓張の襖、地袋戸棚、茶壁、上の方一間折廻し障子屋體、いつもの所庭口の枝折戸、下の方建仁寺垣、石燈籠、櫻の立木、日覆より同じく釣枝、總て離れ座敷の體、爰に短檠を點し、以前の次郎吉立ち掛り居て、薄雲をとらへ居る見得、誂への端唄にて道具止る。と合方彈き流しにて、薄雲振拂ひ行くを、次郎吉きつと留めて、

次郎　これ薄雲、どうぞ言ふこと聞いてくりやれ。

薄雲　一夜流れの苦界の身、枕かはすが勤めなれど、此間から病氣にて初會ばかりか馴染でも、枕かはさぬ此薄雲、座敷ばかりといふことは、初手から承知ぢやござんせぬか。

次郎　成程そなたのいふ通り、杯さへすりや國許へ土産と思うて來たけれど、見れば見るほど美しきそなたの姿にうつほれて、言ふこと聞いて貰ひたいのぢや。

薄雲　假令何と言はしやんしても、座敷ばかりの約束なれば、けふは許して下さんせ、そのうちお出での其時に、氣分がよくばお賴み通り、お前のお伽をしませうわいな。

次郎　その志しは忝けないが、又と尋ねて來られぬは、主命に依つて西國へ明日は立たねばならぬゆゑ、是非とも今宵身共が願ひ、どうぞ叶へてくりやいの。

薄雲　ても聞きわけのないお客さん、廓の樣子を御存じないゆゑ、そんな無理を言はしやんすが、金さへ出せば自由になるものと思うてござんせうが、金で自由にはならぬぞえ、いやなお客は振り通し、身揚りしても逢はぬのが、此大磯の習ひでござんす、早うお歸りなさんせいな。

次郎　いゝや歸らぬ歸り申さぬ、斯う言ひ出しては武士の意地、是非とも一分立てねばならぬ。

薄雲　一分立てるとおつしやつても、座敷ばかりの約束ゆゑ、いやと言うたらどうなさんす。

次郎　むゝ、いやというたら刀に掛けて（ト刀を持ちきつとなる、薄雲思入あつて、）

薄雲　刀に掛けてとおつしやるは、殺す心でござんすか、そりや惡い思召し、足らぬわたしが申さずとも、御合點でもござんせうが、遊里へお出でなさんすはお上へ晴れてぢやござんすまい、慮外者ゆゑ切つたとあつて、只濟むところもござんせうが、廓で女郎を切つたというては御身分に拘はりませう、わたしは高が川竹の一夜流れの勤めの身、殺されたとてそれまでながら、あなたの御

身をしまつたら、御先祖様へ濟みますまい、爰の道理が分りましたら、御門の切れぬ其うちに、

次郎　急いでお歸りなさんせいな。

薄雲　返すくも憎き一言、假令扶持の喰上げなすとも、刀の手前この儘に、身共は屋敷へ歸られぬ。

若一　そんならどうでも、わたしをば。

次郎　おゝ、刀の錆にしてくれう。（ト立掛る、奥より一、二出來り、次郎吉を留めて）

若一　あゝもしく、こりやあ何となされまする、廓で法度の刀を拔きかけ、誰を切るのでございま
する。

若二　素人と違つて大金の、掛つてゐる此おいらん、めつたに切られてなりますものか。

次郎　やあ二人とも留めだていたすな、言ひ出した事あとへ引かぬが、身共が屋敷の國風だ。

若一　屋敷々々とおつしやいますが、さうしてあなたはどちら樣の、

兩人　御藩中でござりまする。

次郎　むゝ、身共はさる藩中の侍だ。

若二　どちら樣でござりますか、理不盡な事をなされますれば、お屆け申さにやなりませぬ。

若一　さあ、其お屋敷をおつしやりませ。

次郎　さあそれは。
若二　どちら様でござりますする。
次郎　さあ、
兩人　さあ、
三人　さあ〳〵〳〵。
若一　其お屋敷をおつしやりませ。
次郎　むゝ。
　　ト次郎吉ぎつちり詰る、此以前より市郎兵衛上手障子を明け、次郎吉の紙入あるを取り、中の手紙を見てうなづき懷へ入れ、此時思入あつて、
市郎　いや、其名はめつたに名乘られまい。
次郎　なんと。(ト誂への合方にて、障子屋體より市郎兵衛出來る、次郎吉見てびつくりなし)や、おめえは。(ト逃げに掛るを市郎兵衛捉へ、)
市郎　何でこんな、姿で來たのだ。
薄雲　すりや、お屋敷さんと思うたは。

若一　もしや騙りぢや、
兩人　ござりませぬか。
市郎　如何にも此奴は、大騙りだ。
皆々　やあ。

ト思入、次郎吉振拂ふ拍子に、手拭を落す、好みの鬘、着附すつぽり脱げて好みのこしらへになり、

次郎　もう斯うなつたら隱しやあしねえ、此市郎兵衞が弟で、名も幻の次郎吉といふ、盛り場稼ぎの巾着切りだ。
若一　え、それぢやあお前は親方の、
若二　弟御であつたるか。
市郎　何でうぬは此里へ、こんな裝でうしやあがつた。（ト次郎吉を引摺り倒し、誂への合方になり、）胤腹替らぬ兄弟ながら、斯うもおれとは違ふものか、三ッ兒の魂百までと、十にもならぬ其うちから小遣錢を盜み出し、きず穴一つが手解きに十三の年から賽のことを覺え、骨牌の札附き野天博奕の喧嘩から明るい體で闇黑へ行つて猶々肚胸がすわり、質屋の押借り早乘りの、尻も幾度拭つたか、親に苦勞を掛け足りず、おればかりかは女房の、おすぎがものまで借り盡し、其恩のある

女房と繋がる緣の薄雲どの、損料借りの安大小、こんな姿にして來たは、何か企みがあつてゞあらう。さあ有體にそれをぬかせ、われゆゑ世間へ顏を賣る、此市郞兵衞が何度か人に天窓を下げたか知れねえ、まだ慊らず廓へ來ておれに恥をかゝせる氣か、言はうやうない盜人めが。

ト次郞吉を疊へすり附け、きつと思入、

薄雲　あゝもし親方、知らぬ先きは兎も角も、お前の弟とあるからは、わたしとてものがれぬ中。

若一　お腹も立たうが、もし親分。

若二　御免なすつて、

兩人　下さりませ。

市郞　おいらん始めお前方も、打捨つておいてくんなせい。さあ、何で爰へ姿を替へ、忍んで來たかそれを言へ。

次郞　今いふから、これ兄貴、此手をちよつと弛めてくんねえ。

市郞　うぬ、逃げようと思やあがつて。

次郞　何のつけに逃げるものだ、さあ安心をして弛めてくんねえ。

市郞　さあきり〳〵と、言つてしまへ。（ト市郞兵衞、次郞吉を突放す。）

次郎　なに言はねえでどうするものだ、ゆすり騙りに來ねえなら、別に企みもありやあしねえ、伏見町の小格子へごろ寐の客の次郎吉が、薄雲さんの姿に惚れ、假令三分のおいらんでも金せえ出しやお買はれる身の上、一晩抱いて寐ようと思ひ、損料物を借込んで武家の威光で脅さうと、遠國者に化けて來た狸寐入りの客人も、お前に尻尾を見出されて種が上つた上からは、逃げも隠れはしやあしねえ、突き出すとも殺すとも、お前の勝手にしてくんねえ。

市郎　むゝ、殺せとはいゝ覺悟だ。(ト思入あつて、)科の次第を言ひ立つて、突出す日には命がねえ、どうで切られて死ぬものなら、おれが手に掛け殺してやらう。

次郎　薄雲どのに兄弟の、緣あるこなたに殺されりやあ、此次郎吉が本望だ、見事おれを殺してくれるか。

市郎　うぬ、殺さねえでどうするものだ。(ト次郎吉思入あつて市郎兵衞に體を突き附け、)

次郎　さあ殺せ〳〵、おれを切つたら手柄にならう。さあ、きり〳〵と殺してくんねえ。

市郎　うぬを殺すは安けれど、一方ならぬ三浦屋の家へ苦勞を掛けるのが、濟まねえことゝ我慢をすりやあ、いゝかと思つて附けあがり、おれへ體を突附けて殺せといふなあ、よく〳〵に、惡い性根に生れたな。

次郎　悪い性根に生れたは、死んだとつさんかゝさんのこしらへやうが悪いからだ、其親達が草葉の蔭で、お前がおれを殺したら、嘸ぞ悦ぶことであらう。

市郎　上の刑罪うけるより、親も悦ぶ兄の手で、望み通り殺してやらう。（ト市郎兵衛一腰を抜き、立掛る、）

薄雲　そのお腹立ちは尤もだが、元の起りはわたしゆゑ、どうまあこれが見て居られう。

若一　短氣を出さずと、もし親分、

若二　まあ〳〵待つて、

兩人　下さりませ。（ト三人留めるを振拂ひ、）

市郎　留め立てせずと、退いた〳〵。

薄雲　それぢやといふて。

ト薄雲市郎兵衛の手に縋り留める、市郎兵衛刀をその手に持ちかへ、次郎吉を一刀切る、次郎吉あつと倒れる、薄雲びつくりなして隔てる、一、二はこれにて奥へ逃げてはひる、次郎吉起きかへり、

次郎　こりやあおれを、切りやあがつたな。（ト市郎兵衛きつと思入あつて、）

市郎　薄雲どのゝ手を持ち添へ、切つたはそちが望みだらう。

次郎　なんと。（ト合方替つて、）

市郎　薄雲どのゝ實の親、宗庵殿を手にかけた敵を討たれに來たのであらうが。(ト次郎吉びつくりなし、)

次郎　どうして、それを。

市郎　宗庵殿を手に掛けしを、噂に聞いたも四五日あと、證據を見た上薄雲どのとおなみどのに、殺させねば兄弟中の義理立たず、そちが行方を尋ねしが年中人の居候、住所定めぬごろつきにいはゞ無宿の幻次郎吉、今日出逢うたは幸ひと、思ふ折柄一間にて、拾つたそちが紙入の中にあつたる此の書置。

ト以前の紙入と書置を出す。

次郎　死ぬる覺悟で來ながらも、心まはらず一間の內へ、忘れたおれが紙入の、其の書置で知つたのか。

薄雲　えゝ、そんならお前がとゝさんを、殺せし敵であつたるか。

次郎　いかにもわしが殺したゆゑ、敵を討たれに來た次郎吉。

薄雲　それも名乘れば繫がる緣、殺さずともよかつたに、ひよんな事をしてしまつたわいな。

市郎　あいや、どうで始終は切られる體、惡に强きは善にもと先非を悔いて敵ゆゑ、薄雲どのに討たれに來たは天晴出來した、よく來たと心で思ひ打明けて、敵と名乘り討たせんと思ひしかども、い

やれ／＼、繋がる緣に名乘つたら薄雲どのが討つまいと、思つて態と言ひ募り、留めるその手を持ち添へて、敵を討たせし市郎兵衛、口では畜生人でなしと、さがなく言へど心では、天晴出來した弟と、口と心の裏表、よくぞ敵を討たれに來たぞ。

次郎　たゞ慾ゆゑの極樂寺の、繩手で殺した宗庵どの、いづくの人とも知らなんだが、坊主小兵衛の所にて薄雲どのゝ素性を聞き、初めて知つた敵同士、濟まねえことをしたと思ひ、爰が人の死にどころ、顏を知らぬを幸ひに覺悟極めて殺されに、姿をかへて來たるもの、女の事ゆゑ脇差の用意もたしかになからうと、生れが鄕士に又元の假にも武士の姿となり、我が殺される刃物をば、我が手に持込み來たる次郎吉、これで止めを刺して下せえ（ト脇差を出す。）

薄雲　敵といへど繋がる緣、元より知らぬことなれば、さういふ心にならしやんしたら、なぜ死なずとも髮でも下ろし、亡きとゝさんの問ひ弔ひ、回向をしては下さんせぬ、早まつた事して下さんしたな。

市郎　あいや／＼、どうで死なねばならぬ體、これで以前の罪滅し、さすが鄕士の悴だけ、惡黨ながら天晴と死花咲すこの次郎吉、悔む所はござりませぬ（ト此時後へ前幕の志賀之助女房お浪出て、）

お浪　市郎兵衛さん、久しくお目に掛りませぬ。

市郎　や、思ひがけないお浪どの。

薄雲　どうして姉さんござんした。

お浪　お前に逢ひたく宵に來て、樣子は二階で聞いたわいの。

市郎　そんなら弟が宗庵殿を、

薄雲　殺せし敵といふことも、

お浪　一間に隱れて一部始終、殘らず聞いて居ましたわいの。

市郎　何にしろお浪どのゝ、圖らず爰へ來るといふも、

薄雲　亡きとゝさんの導きなるか。

次郎　親の敵の此次郎吉、姉妹揃つた上からは、此場でわしを殺して下せえ。

お浪　いえ〳〵妹は兎も角も、わたしは他家へ縁附いて、今は關取明石の女房、假令親の敵にせよ、夫と深く兄弟の縁を結んだ市郎兵衛さん、その弟御の次郎吉さん、どうまあわたしが討たれませう。

市郎　よしや兄弟縁者とて親にかへる者はない、折角討たれる覺悟の弟、一刀でもお浪どの、切つてやつて下さいませ。

お浪　そんならどうでもわたしにも。
次郎　お前方に切られにやあ、冥土へいつて次郎吉が、宗庵どのに逢はれぬわえ。
市郎　さあ今改めて姉妹で、一刀づゝ切らつしやい。
兩人　さあ、それは。
市郎　但しは弟に犬死さすか。
兩人　さあ。
市郎　敵を討つか。
兩人　さあ、
市郎　さあ、
三人　さあ〳〵〳〵。
次郎　どうぞ殺して下さりませ。（トこれにてお浪薄雲思入あつて、）
お浪　それ程までにおつしやるのを、
薄雲　討たぬも濟まぬ義理なれば、
お浪　一寸なりと、

薄雲　五分なりと、
兩人　親の敵を討ちませう。(ト此時うしろへ梅之助、八重雲出て、)
梅之　樣子は一間で聞きましたが、折よく爰へ來合せし、此梅之助も繋がる緣。
八重　わたしら二人は仇討の、
梅之　時にとつての檢視役。
市郞　又助太刀は市郞兵衞。
梅之　名乘り合して、
八重　潔よう。(トこれにてお浪は刀、薄雲は脇差を拔き、次郞吉へ立ち掛り、)
お浪　いふにや及ぶ、仇敵。
薄雲
次郞　如何にも慾に目がくれて、二人が親の宗庵は、この次郞吉が手にかけた。
お浪　親の敵。
兩人　覺悟しやっ(ト双方より次郞吉をそつと切る。)
市郞　弟そちも望みが叶ひ、思ひ置くことはあるまいな。
次郞　心にかゝる雲もなく、冥土へ旅立つ次郞吉が、二人の衆へ置土産。(ト懷から袱紗包みの香合を出

す。）
兩人　やゝ、此品は。
次郎　その夜盜んだ大江の重寶。
梅之　我が預けたる香合なるか。
八重　再び戻る上からは、
市郎　御不興うけし大旦那の、
お浪　これでお詫も直に濟み、
梅之　やがて目出度く八重雲と、
八雲　どうか女夫にならるゝやう、
お浪　それはお案じなさんすな、夫が妹と諸共に、かねて身請けをなす積り。
梅之　あゝ、何から何まで、
八重　嬉しうござんす。（ト兩人悅ぶ、時の鐘、次郎吉苦しき思入にて、）
次郎　これ兄貴、早く死にてえから、水を一杯呑ましてくんねえ。
市郎　手負に水はならねえが、どうで死なにやあならねえ體。

お浪　次郎吉さんの望みに任せ、
市郎　兄弟別れの水杯。（ト市郎兵衛手水鉢の水を柄杓に汲み、愁ひの思入にて出す。）
次郎　えゝ忝けない。（ト次郎吉呑んでうつとりとなる。この時遣手のお辰出て、）
お辰　やあ、こりや客人には。
市郎　大酒せしゆゑ、吐血をしたのだ。
薄雲　そんなら此儘。
お浪　駕籠でこつそり。
お辰　どうやら怪しい。（ト寄らうとするを、市郎兵衛紙に包みて金を出して、）
市郎　これで何にも、（トお辰の胸を叩くを道具替りの知らせ、）言はずにくりやれ。

ト次郎吉落入る、市郎兵衛顔を背ける、みな／＼愁ひの思入。時の鐘、三重模様の合方にて、よろしく此道具廻る。

（胡蝶嫉妬の場）＝＝本舞臺元の道具へ戻る。ト奥にて、「東西々々此處相勤めまする淨瑠璃、祇園祭禮信仰記、金閣寺鼠の段、始まり左樣。」と呼び、これより縛られし胡蝶、奥を見込み、思入、

〽入相の鐘も霞にうづもれて心細くもたゞ一人、無慚なるかな雪姫は何を科とてからまれし夫も最早最期かと、思へばそよと吹く風も、あはやそれぞと見上ぐれば、花の散るさへ恨みなる、今ぞ生死の奥座敷。(ト此内胡蝶奥へ思入あつて、)

胡蝶　時も時、折も折、廣間で語る淨瑠璃は信仰記の金閣寺、松永ゆゑに雪姫が櫻のもとへ縛られしも叶はぬ戀の意趣返し、それとこれとは替れども、此身も戀に縛り繩。

〽花を雪かとながむる空に、散ればぞ花を雪と讀む、命も花と散りかゝる狩野介尙信が。

ト此うち二階から、禿ゆかり出來り、四邊を見て、

禿　胡蝶さん。

胡蝶　おゝゆかりどんか。

〽佇む夫婦が影と影。(トゆかり傍へ寄り、床の合方にて)

禿　さぞ切なうござんせうな。

胡蝶　よく尋ねてくれたぞいの、不斷同胞同樣に、中のよい朋輩も、わたしが無理なこと言うたので、みんな憎んで誰一人、尋ねてくれるものもない、そなたばかりぢや、嬉しいわいの。

禿　不斷お前がわたしをば、可愛がつて下さんすゆゑ、わたしやお前の縛られたのが、悲しうて〳〵

さつきから泣いて居たわいな。

胡蝶　ほんにどうした緣ぢややら、わたしもそなたが可愛ければ、そなたもわたしを便りにして、ほんの同胞同樣に、思へば思うて此樣に、泣いて居たとは優しい心、しかし爰に居るをお辰どんに見られたら叱られよう、早う部屋へ行きやいの。

禿　いえ〳〵、お前ゆゑならお辰どんに、叱られても大事ない、何ぞ呑みたうござんすなら、お湯でもお茶でも上げようか。

胡蝶　おゝ、さつきから呑みたい所、水を一つくりやいの。

禿　あい〳〵（ト合方にて、ゆかり上手へはひり、茶碗へ水を汲み持ち來り、）さあ、わたしが持つて居て上げるから、たんと呑みなさんせい。（トゆかり持つて居て呑ませる、胡蝶嬉しき思入。）

胡蝶　あゝ忝けない〳〵、よい心持になつたわいの。

禿　さぞ手が痛うござんせうな。（トゆかり胡蝶の手をさすりゐる。）

胡蝶　痛うてならねど心がら、誰も恨むところはない、さうしておいらんはどうなさんした。

禿　今下座敷からござんして、十三さんと寐やしやんすと、言はしやんしたわいな。

胡蝶　え、あの十三さんと寐やしやんすとか、えゝ、羨しいことぢやなあ。

〽寄らんとすれど繩取りが、引張る繩の強ければ、見かはすばかり涙聲。

ト胡蝶思はず立上り、つか〳〵と行かうとして繩に引かれ行かれぬ思入、ゆかりうろ〳〵して、

禿　胡蝶さん、お前どこへ行かしやんす。

胡蝶　おいらんの部屋へ行き、寐かさぬやうにしたいけれど、行くに行かれぬ此繩目。

〽一緒に行きたい死にたいと、叫ぶを軍卒せゝら笑ひ。

禿　此繩切つて上げようかえ。

胡蝶　あゝいや〳〵、そなたが切つた事が知れたら、あとでどのよに叱られよう、さあ〳〵早く行きや。

禿　いえ〳〵、お前ゆゑなら縛られても叩かれても大事ない、わたしや厭ひはせぬわいな。

胡蝶　その志しは嬉しいが、切つては濟まぬお主のいましめ、わたしに構はず早く行きや。

禿　それでも行きともないものを。

胡蝶　はて、お辰どんに見られぬうち、さあ〳〵早う行きやいの。

禿　そんなら後に、來ますぞえ。

〽さらば〳〵の暇乞、これが此世の別れぞと心の內に夕まぐれ、追立て〳〵引かれ行く。

ト禿ゆかり、あとを見返り〳〵、階子を上り下手へはひる。

〽見送る身さへからまれて、行くも行かれず延び上がり、見やれば誘ふ風に連れ、野寺の鐘もこう〳〵と、響に散るや櫻花、梢もしをれ身も凋れ、しをれぬものは涙なる。

ト此うち本釣鐘、引けの拍子木、胡蝶よろしく思入あつて、

胡蝶　おゝもう引けを打つて來たか、風に聞ゆる初瀬寺の鐘も九つ子の時に、十三さんとおいらんが、寐やしやんすとあるからは、こりや斯うしては居られない、えゝ、此繩解いてほしいなあ。

〽えゝ切れぬか解けぬかと、身をあせる程しめからむ、煩惱の犬我れと我が身を苦しむるうき思ひ（ト胡蝶身をあせり、よろしく思入）

浄〽あゝそれよ、三井寺の頼豪法師、一念鼠となり、牙を以て經文を喰ひ裂き恨を晴らせし例もある、此身この儘鼠とも虎獅子ともなしてたべ、南無天道様、佛様、えゝ拜みたうても手が叶はぬ、えゝ口惜しやなあ。〽をどり上り飛び上り、天に呼はり地に伏して、正體涙にくれけるが。

トこの内胡蝶、淨瑠璃を聞き居る思入、

あの淨瑠璃の雪姫は散り來る梢の櫻を集め、足の先きにて鼠の形を一心こめて書きしかば、終に

生きたる鼠となり、その繩目を喰切りて、姫を助けし鼠の段、その鼠ゆゑこの胡蝶が、かゝる憂目に逢うてゐるに、常から猫を可愛がれど、助ける術はないことか。

〽足にて花を搔寄せ〳〵搔き集め、筆はなくとも爪先きを筆の代、墨は涙の濃き薄櫻、足にまかせて書くとだに繪は一面に寄るものぞ、凄くすは〳〵動くは風かあらぬか、花を毛色の白鼠忽ち爰に顯れ出で、繩目の葛草の根を月日の鼠が喰切り〳〵、喰切るはずみにばつたりこけしがむつくと起き。

ト此うち胡蝶いろ〳〵思入あつて、よき程にうすき風の音ドロ〳〵になり、以前の指金の猫出で胡蝶の繩を喰切る、これにて胡蝶どうとなり、繩の切れしを見て、

や、嬉しや繩が切れたか。おゝ今のわたしが恨みを聞き、猫が繩を喰切りしか、ちえゝ、よう喰切つてくれたなア。

〽見やれば邊に散花も、鼠の行方も嵐吹く、木の葉と共に散り失せたり。

ト此うち猫は上手へはしりはひる。

此上はおいらんの部屋へ行つて、二人が仲を少しも早く、おゝさうぢや。

〽さうぢや〳〵と身繕ひ、悅ぶ足も地に附かず夫の命助けんと、小褄ほら〳〵花の波船岡山へ

と。

ト三重にて胡蝶よろしく上手へはひる、これにて此道具廻る。

(二階廊下の場)＝本舞臺眞中二間塗骨障子建切り、上の方一間奥深に廊下の片遠見、下の方一間廊下の片遠見、此下櫺子窓、總て二階廊下の體。合方にて道具留る。と時の鐘端唄になり、下手廊下口より十三手拭を持ち、手水に行きし思入にて出來り、

十三 宵は二階も騒がしく、耳に附いたる三絃も、かすかに聞ゆる二上りは、誰が部屋なるか忍び駒、引から先きがしつぽりと眞の遊びの世界となり、更けて田圃に鳴き立てる蛙は濡るゝ雨呼ぶか、月も暈召す朧夜は、はて憎からぬ景色ぢやなあ。

ト十三手拭で手をふきながら向うへ思入、上手より○、□出來り、

○ おや十三さん、まだお休みなさんせぬか。

十三 今薄雲が歸つて來たから、是れからそろ／＼寐る積りぢや。

□ しつぽりと、おしげりなさいまし。

十三 それはさうと、胡蝶はどうしたな。

○ ほんに胡蝶さんは藏前に、縛られて居なさんしたが、誰が繩を切つてやつたか、縛つた繩が切つてあり。

□ どこへ行つたか見えぬゆゑ、何でも外へ逃げたどいうて、田圃の方へ若い衆が手分けして、

兩人 行きましたわいな。

十三 むゝ、そんなら胡蝶は繩をば切つて。

ト ぢつと思入、此時下手廊下口より胡蝶窺ひ、顔を出す、十三これを見てびつくりなし、田樂にて正面の障子へ消える、胡蝶思入あつて跡へはひる。兩人これを知らず、

○ おや、十三さんはいつの間にか。

□ どこへお出でなさんしたか。

◎ きつい床急ぎでござんすな。

□ どれ、花の戸さんの部屋へいつて。

○ お客の讒訴をしようわいな。

ト 兩人下手へはひる。此途端十三田樂にて出で、四邊を窺ひぢつと思入あつて、上手へ行かうとする。下手から胡蝶出で、ねらひ寄りつか／＼と行き、

胡蝶 十三さん、待たしやんせ。

十三 や、胡蝶かつ（ト行かうとするを引留め、）

胡蝶 なぜ其やうに逃げなさんす。

十三 逃げはせぬが薄雲が、一人部屋に待つてゐるゆゑ。

胡蝶 さうでもあらうが十三さん、さつき言うたわたしが願ひ、成るならざらの御返事を。

十三 むゝ、そなたの頼みの返事なら、出來ぬといふより外はない。

胡蝶 ても色氣のないおつしやりやう、其お詞ではどうあつても。

十三 思ひ思うた薄雲を、捨てそなたに見返られぬ。

胡蝶 さう言はしやんすりや、もう是れまで。（ト胡蝶隱し持ちし短刀を出しきつとなる。）

十三 こりや、おれを殺す氣ぢやな。

胡蝶 おゝ、戀の叶はぬ意趣ばらし。（ト胡蝶拔いて切つてかゝる、十三身を躱し、）

十三 小癪なことを。（ト八千代獅子のやうな合方にて兩人立廻り、十三肩先を切られ、）やゝ、こりや手を負ひしか。

胡蝶 おゝ、殺さにやおかぬ。（ト又立廻る。爰へ一、二出て、）

兩人　や、こりや十三樣を。

ト兩人胡蝶を留めようとする立廻り、胡蝶留められながら、および腰に十三を切らうとする、十三後の障子を蹴破り逃げてはひる、胡蝶兩人を相手に立廻りあつて、手を負はせる、兩人下手へ逃げてはひる。爰へ△出て、

△　や、胡蝶さんが。(ト言ふを直に切り附ける、△倒れる、胡蝶思入あつて、)

胡蝶　障子を越して染みたる血汐、これを知るべに、おゝさうぢや。

ト△うぬと掛るを切倒し、逸散に障子の破れへはひる。△跡を追ひかけはひる、上手より薄雲、下手より市郎兵衛出來り、舞臺にて、

薄雲　や、市郎兵衛さんか。

市郎　おいらんか。

薄雲　もし、胡蝶さんが十三さんを切つたといふことでござんす。

市郎　さては女の一途に迫り、其身をしまふことをなしたか。(ト薄雲四邊を見て、)

薄雲　や、こゝに大層血汐の滴り。

市郎　そんなら是れより逃げ行きしか。(ト障子の破れへ思入。)

薄雲　障子へかけての足跡は。

市郎　これぞ正しく人間ならず。（ト此時指金の鼠、薄雲に這ひかゝるを、）

薄雲　あれえ。（ト拂ひ落す、指金の猫出で、これを追つて障子の穴へはひる。）

市郎　さては化生の、

ト此時ドロ／＼にて、障子へ大きな猫と鼠の影うつる、薄雲びつくりして、どうとなる、市郎兵衛片棲取つて踏み出すを木の頭、

仕業よなあ。

トきつと見込む、薄雲は袖にて顔を覆ふ、此仕組よろしく、時の鐘、誂への合方にて、

ひやうし　幕

明石志賀之助と薄雲（終り）

櫓太鼓

稽古筆七いろは

年々歳々古めかしく車双紙の繰返し
祖父や親父が名筆の噂に残る假名手本
御勧め受けて其儘に寫せど及ばぬ未熟者
年功積みし人々の教を便りにお叱りを
返りみづいれ名に高島の硯の梅の香りある
墨さへ下手の曲形やつと書いたる清書も
只御贔屓のお直しを力と頼む寺子の拙

「鳩の平右衞門」は慶應三年八月、作者五十二歳の時、市村座に於て、上演されたものである。足利殿中、本國早打、寺岡住家、彌作鎌腹、赤垣德利、大星夜討、義士引上等の義士物を集めて上演した時、その一部として、舊來の作に創作的の補綴を施して上演せられたのである。物が單純で、色彩に乏しくパツとしたものでないから、さして好評といふでもなかつたが、義士銘々傳の一つとしては、眞率な人情味に滿ちてゐるものである。近年中村吉右衞門によりて復演され、好評を博した。

書卸しの時の役割は、市川九藏(寺岡平右衞門)、坂東龜藏(親寺岡平左衞門)等であつた。挿繪にしたのは、大正七年五月市村座に上演された時の舞臺寫眞て、中村吉右衞門の鳩の平右衞門である。扉の題字は繪草紙から採つたものである。

大正十四年九月

校訂者



稽古筆七いろは（鳩の平右衛門――一幕）

平右衛門住家の場

江州逢坂山の場

〔役名――寺岡平左衛門、同平右衛門、矢間十太郎、小潮田又之丞、藥種屋伊兵衛、藪醫者了竹、金毘羅參り斧平、平右衛門女房おきた等。〕

（寺岡住家の場）――本舞臺三間の間常足の二重、正面暖簾口、上手押入戸棚、下手鼠壁、米櫃、膳棚、臺所道具の書割、此前に竈、釜、茶釜を掛け、上の方三尺後へ下げて一間障子屋體、下の方葺下しの下屋、内に置流し、手桶、繩暖簾を掛け、いつもの所門口、此外に草非戸、釣瓶あり後藪疊、總て寺岡住居の體。爰に了竹慈姑天窓、さんすゐなる醫者にて藥箱を開き、藥を調合して居る、側におきた世話女房のこしらへ、大和風爐へ土瓶を掛け、澁團扇にて煽ぎ居る、門口に斧平白の手拭を冠り、白裝、金毘羅參りのこしらへにて、札箱を背負ひ立掛り居る、越後獅子の唄にて幕明く。

斧平　金毘羅參りに御報謝。

きた　手が塞がつて居る、通つて下され。
斧平　通り一遍でございます、どうぞ一錢下さいまし。
きた　えゝも、しつこい、手が塞がつて居るといふに。
了竹　おきたどの、今日は加減をしましたぞ。
きた　それは有難うございます、去年から二年越し父さまのぶら〳〵煩ひ、何といふ病でございまする。
了竹　平左衛門どのゝ病根は、先づ第一が年の上立ち枯れといふ病ゆゑ、中々急なことにはいかぬ、朝鮮の大人參を用ゐねば全快せぬが、絶えず人參を入れるであらうの。
きた　はい、藥種屋から調へまして、きつと毎日上げますわいな。
了竹　藥種屋の手代伊兵衛どのは、ちよこ〳〵來るであらうの。
きた　はい、三日にあげず參られますわいな。
了竹　伊兵衛どのがちよこ〳〵來るは、おきたどのにきた山ゆゑぢや。
斧平　御面倒でございませうが、御報謝を下さりませ。
了竹　まだ門口に居たのか、氣の長い物貰ひだ。
きた　さあ〳〵早う行つて下さんせ。（ト門口を明け、おきた手の內を斧平に遣る。）

斧平　これは有難うござります。（ト言ひながら門をのぞき込む。）

きた　えゝ、人の家をのぞき込んで、氣味の悪い人ぢやわいな。

了竹　そして履物などを持つて行くから、おきたどの氣を附けさつしやい。（ト斧平了竹を見て、）

斧平　さうおつしやりますは、了竹さまぢやあござりませぬか。

了竹　おゝ、九太夫どのゝ家來斧平か。

斧平　思ひ掛けない所でお目に掛りました。

きた　そんならお前は、御家老さまの。

斧平　九太夫さまに勤めて居ました。

きた　道理こそ、見たやうな顏ぢやと思うて居ましたわいな。

斧平　わしもさつぱり見忘れましたが、大星樣の若黨、元助どのゝ娘御だな。

きた　去年お家の騷動から、平右衞門どのと女夫になり、かすかな暮しをして居ますわいの。

了竹　斧平は何でまた、金毘羅參りに出掛けたのだ。

斧平　九太夫さまが死なれてから、鷺坂さまへ取入つて。

了竹　あゝこれおきたどの、病人が呼ばれるやうだ。

きた　あいさうでござりまするか、丁度お藥が上つたれば、熱い所を上げませうわいな。

ト藥土瓶と茶碗を持ち、合方にておきた上手障子屋體へはひる、了竹跡を見送り門口へ來て、

了竹　今言つた鷺坂氏とは、高野樣の御家來ではないか。

斧平　如何にも高野樣の御用人、主人とは別懇ゆゑ、其の御緣で斧平も鷺坂樣へ取り入つて、今では家來同然にてお屋敷に居りますが、鹽冶家の浪人共が敵討の企てをなすといふ噂ゆゑ、それを詮議に姿を替へ、由良之助の隱れ住む山科から、此の界隈を嗅ぎ出しに歩きます。

了竹　鹽冶家の沒落から、今では町醫の太田了竹、どうかこなたが伴內殿へ取り持つてはくれまいか。

斧平　それは何より易いこと、由良之助が企てを嗅ぎ出して下すつたら、それを功に伴內樣へお取り持ちをいたしませう。

了竹　さういふ事は脈を引き、考へ出すが愚老が得手もの、慥なことを見屆けて內通をしませうが、して共方が住所はいづれだ。

斧平　三條小橋の花屋の家を、當時借りて居りまする。

了竹　然らば種を聞き出して、少しも早く知らすであらう。

斧平　お出でをお待ち申します。金毘羅參りに御報謝。（ト右の合方にて斧平下手へはひる。）

了竹　さてよい蔓に取附いたわえ、先づ山科に居る大星はじめ、矢間、千崎、原、竹の森、此の家の足輕平右衛門まで、ある事ない事注進なし、高野家の家來になり、立身出世をせねばならぬ。それはさうとおきたをば口說いてくれと愚老を頼んだ、藥種屋の伊兵衛め、早く來てくゝればよいが。

（ト藥箱をしまひ居る、やはり右の唄にて、花道より伊兵衛羽織着流し、藥種屋の手代にて出來り、）

伊兵　あゝ、戀は諸道の妨げと、いふやうな顏でもないが、あの平右衛門が女房のおきたが見世へ人參を買ひに來るのでわしが病、どうかしてせしめたいと去年から貸込んだ人參代が二十兩、今に色よい返事をせぬゆゑ、了竹を荷擔人に金を枷に口說き落し、今日は返事をさす積りだ。（ト言ひながら舞臺へ來り、門口で髷を直し衣紋を繕ひ、）はい、御免なさい。（ト門口を明ける、了竹見て、）

了竹　や、伊兵衛どのか、大分遲うござつたの。

伊兵　外ならぬこゝの家ゆゑ、髮を結うて湯にはひり、めけて來たゞけ暇取りました。

了竹　道理で今日はめづきりと、こなた器量が上りましたぞ。

伊兵　ときにわしが戀人のおきたは、內に居ますかな。

了竹　おゝ居るとも〳〵、たつた今まで爰に居たのだ。おきたどの〳〵。

きた　あい〳〵、何でござりますぞいな。（ト合方にて、奧よりおきた出て來る。）

伊兵　何でもない、わしぢや。
きた　おゝ伊兵衛さま、よう來て下さんしたな。（ト伊兵衛の側へ來る。）
伊兵　あんまりよくも參らぬて。
きた　お前のお出でを昨日から、待兼ねて居ましたわいな。（ト寄添ふ。）
了竹　いや、待兼ねて居たとは有難いな。
伊兵　そりや、ほんまに待つて居たとか。
きた　あい、人參が切れ目ゆゑ、持つて來て貰はうと思うて。
伊兵　そんなことであらうと思うた。
了竹　イヨ、色男め／＼。（ト伊兵衛むつとして）
伊兵　いや、其の人參ももう送られぬ。
きた　え、そりや何ゆゑ。
伊兵　何ゆゑとは知れたこと、こなたに心があればこそ、去年から貸込んだ人參代を締上げたら、丁度高も二十兩、此の勘定をさつしやらねば親方をしくじるゆゑ、もう跡は送られぬ。
きた　其の勘定もどうかして少しづゝも上げたいが、すゝぎ洗濯賃仕事、晝夜わかたず精出しても。

伊兵　高が女の手仕事なりや、よく取つて二百か三百、二朱と纒まる仕事は出來ぬ。

了竹　亭主はあつても足輕上り、草履草鞋を作るより、外に儲ける術は知らず、二十兩の事はさて置き二分の工面もむづかしい。

伊兵　それぢやによつて金の替りに、此の伊兵衛が心に隨ひ、こなたが自由になりさへすれば、人參はいふに及ばず、金が入るなら金も遣らうし、着物がほしけりや買うて遣らうし、望み次第にして遣るのに、なぜうんと言はぬのぢや、如何に屋敷者ぢやとて、餘りといへば野暮堅い。

ト伊兵衛おきたの手を取り、引き寄せる。

了竹　こりや伊兵衛どのゝ詞につくがよいではないか、親父が病氣も人參を絶えず用ゐにや直らぬ難症、まだ〳〵是れから二三十兩も呑ませねば全快せぬ、草履草鞋や賃仕事をいくらしたとて呑まされぬ、人參代に身を賣つて辛い勤めをする者も世間には幾らもある、何をするのも平右衛門が親の爲めなりや、知れたとて大事ない譯なれば、伊兵衛どのに身を任せ、人參の仕送りをして貰つたがよからうぞや。

きた　さあ、わたしも親の爲なれば伊兵衛さまに隨うて、無くてならぬ人參を送つてお貰ひ申したいが、何をいふにも夫のある身、不義をしては操が立たず。

伊兵　これ〳〵おきたどの、それが悪い料簡だ、近い譬がこなたのお主、鹽冶の奥方顔世さまが師直の言ふことを聞けばお家も無事、判官さまも腹を切るにも及ばぬこと、こなたもおれに從へば人參はいふに及ばず、小遣錢も仕送れば親父も助かる內も無事、厭だといへば親父どんより、平右衛門が命にも拘はる金の人參代、殺すも生すもおきたどの、こなたの心一つぢやぞえ。

ト伊兵衛おきたの手を捉へろ、右の唄にて花道より平右衛門肩入の着附、一本差し尻端折り草履にて、草履草鞋を竹にてかつぎ出來り、花道にて、

平右　今元助どのに逢うて聞けば、大星樣を初めとして何れも樣が鎌倉へ、御下向も近々とのこと、明日にもあれ御沙汰があれば、直にお供をして行かねばならぬ、親父さまへ打明けて話しがならぬ一大事、旅支度も內々で用意しておかねばならぬ、何にしろそれまでにあの御病氣が直ればよいが。（ト門口へ來りがらりと明け、）女房、今歸つた。（ト此聲に皆々びつくりなし、）

兩人　や、平右衛門どのか。

平右　見れば女房を引つ捉へ、こりやどうしたのでござりますな。

きた　さあ、是れはな。（ト言ひかけるを、）

了竹　さあ、これは何でござる〳〵。おきたどのが癪が起つて愚老が手に餘るゆゑ、伊兵衛どのを賴ん

で押して貰うたのだ。

伊兵　いやも、癪も〳〵、ぴんしやん〳〵と、言ふ事を少しも聞かぬ野暮堅い癪ゆゑに、わしが押へ附けて居るのだ。

平右　それは大きに御苦勞でござつたが、平右衞門といふ主ある女を晝中引つ捉へ、癪とあれば仕方もないが、品に寄つては伊兵衞どの。

伊兵　え。

平右　假令足輕風情でも帶刀なせば刀の手前、その分にはいたされませぬぞ。

伊兵　あゝこれ〳〵、決していやらしい事なぞをいたした覺えはござらぬぞ、了竹どのが證人でござります。

了竹　いかにも愚老が證人でござる、伊兵衞どのは人參の金の催促にござつたのだ、いやらしい事はござらぬ〳〵。

きた　何のない事がござんせう、來る度毎にわたしを捉へ。

伊兵　あゝこれ〳〵、あらはにいへば二十兩、人參代を貰はにやならぬ。

了竹　何事も言はず語らず、癪に相違ござらぬわい。

平右　醫者が證據に癪といふなら、癪に違ひはあるまいから、丸藥でも置いて行かつしやい。

了竹　いや癪は癪に違ひないが、藥を呑む程でもござらぬ。

平右　あつてもなくつても、ちつとこつちに、いや、是非ともおきたに呑まさにやならぬ、ありたけ置いて行かつしやい。

了竹　とんだ目に逢ふものだ。（ト了竹紙入から丸藥包みを出してやる。）

平右　これは癪の證據ゆゑ、禮はしませぬ、貰ひますぞ。

了竹　それは御念の入つたことだ。

伊兵　斯ういふ所に長居は恐れ、了竹どの、參らうではござらぬか。

了竹　參るとも〳〵、何ぼきかぬ藥でも只取られては引合はぬ、少しも早く參らう〳〵。（ト兩人門口へ出て、）これ伊兵衛どの、こなたの賴みで虎伯丸を一包み棒にふつた。

伊兵　何のこなたの丸藥なら、鼻糞を丸めたのであらう。

了竹　どうして〳〵、麝香入りの虎伯丸、今日の替りに九月前は勘定をしませぬぞ。

伊兵　それは御念の入つたことだ。（ト右の唄になり、兩人囁き合ひ花道へはひる。おきた跡を見送り合方になり、）

きた　こちの人、よい所へ歸つて下さんしたな。

平右　藥種屋めが來居つたのは、人參代の催促か。
きた　あい、段々人參代も二十兩程になつたゆゑ、やかましう言うて來たのぢやわいな。
平右　微塵積つて山とやら、二十兩になつたと聞いては、どう才覺をしたとても、所詮返す金は出來ぬ。
きた　とあつて勘定せぬ時は、人參を送らぬゆゑ、父さまのお命にも拘はることゆゑ、いつそのこと君傾城に此身を賣り。（トほろりと思入。）
平右　むゝ、其の身を賣つて人參代を調へくれる心なら、君傾城にならずとも、おぬしに惚れて居る、伊兵衞に其身を。
きた　えゝ。
平右　品に寄つたら、任してくりやれ。
きた　親夫の爲めとはいへ、何で此の身を伊兵衞どのに。
平右　任せにくゝもあらうけれど、明日にもあれ鎌倉へ、お供をすれば明る日から、生活に迫る瘦世帶、路頭に迷はにやならぬゆゑ、親夫ばかりでなくお主の爲めゆゑ、女房ども、どうぞ其の身を穢してくりやれ。
きた　いやと言はれぬ仕儀なれど、これぱかりは平右衞門どの、どうぞ堪忍して下さんせいな。

平右　いやといふのも尤もぢやが、現在亭主が女房に身を穢せといふ苦しさを、推量して跡々の、生活のなるやう頼むぞよ。

きた　あゝ、是非もないことでござんすなあ。（トおきたワッと泣く、此時上障子屋體にて手を叩く。）

平右　あれ、何か御用があると見え、親父さまが呼ばつしやる、泣顔隱して行つてくりやれ。

きた　あい、參りますわいな。（ト涙を拭ふ、又手を叩く。）

平右　斯ういふ切ない入譯も、聞えぬ耳の親父さま、又お呼びなさるぞよ。

きた　はい、今參りますわいな。（ト立上りこ）此の身を穢す位なら、いつそ死にたうござんすが、わたしが死ねば父さまが跡でお困りなさるゆゑ、死ぬにも死なれぬことかいな。

平右　えゝ、何をぐづ〳〵いつて居るのだ、早く行つて上げぬかい。（トきつと言ふ。）

きた　あい、今行きますわいなあ。

ト唄になり、おきた涙を拭ひながら上手障子屋體へはひる、平右衞門思入あつて、

平右　叱り附けてはやるものゝ、夫婦になつて僅一年立つか立たぬに、たゞの一日樂をさせたこともなく、ありとあらゆる苦勞をさせ、思へば不便なことぢやなあ。

ト合方になり、花道より矢間十太郞小潮田又之丞、ぶつさき羽織、野袴大小にて出來り、花道にて、

又之　矢間氏、平右衛門が宅は何れでござるな。
十太　最早向うの小家でござる。
又之　左樣でござるか、さゝお先きへ。（ト舞臺へ來り門口から、）
十太　賴まう〳〵。
平右　はッ、どなた樣でござりまするか。
十太　平右衛門は在宿なるか。（ト門口を明ける、平右衛門見て、）
平右　これは〳〵矢間樣、小潮田樣、ようこそお出で下さりました。
又之　世を忍ぶわれ〳〵ども、差合ひの者はないか。
平右　お差合ひはござりませぬ、お心置きなく、先づ〳〵あれへ。
兩人　然らば許しやれ。
ト合方きつばりとなり、平右衛門上手に花茣蓙を敷き、兩人この上に住ふ、平右衛門煙草盆を出し、
平右　生憎只今藥を煎じ、湯をさましましたれば、お茶は御免を蒙ります。
十太　親平左衛門病氣にて、嘸かし用多であらう。
又之　決して心配いたしてくりやるな。

平右　御覽の通りの住居ゆゑ、お構ひ申しはいたしませぬ。（ト思入あつて、）して、お二人樣には何御用ございまして、是れへお出でゝございまするな。

十太　われ〳〵兩人參りしは、豫て約せし一儀につき、大星氏の內意を受け、

又之　竊に尋ね參つてござる。

平右　すりやお頭樣のお指圖にて、お出で下さりましたとか、して御內意の趣きは。

十太　只今演舌いたすであらう。（ト十太郞は奧、又之丞は門口を窺ひうなづく、誂への合方になり、）內意と申すは、別儀でない、かねぐ〳〵申し合せし一條、よき手蔓あるに附き、俄に東へ下向なし、敵地の樣子を探らんと昨夜評議一決なし、力彌殿を初めとして、今朝より忍び〳〵、東へ下向いたしてござる。

又之　それに附き其方儀かねぐ〳〵の願ひにより徒黨の內へ加へしかど、承はれば昨年より親平左衞門病氣の由、今其方が旅立てば跡の難儀は如何ばかり、親を始め女房も、定めて路頭に迷ふであらう。

十太　附いては首尾よく本望を、遂げても、又遂げいでも、一命捨つるわれ〳〵共、これが本望遂げた後再び故鄕へ立歸り、親兄弟へ對面が出來ればよけれど、叶はぬ身の上。

又之　一旦の志は亡君へ屆きたれば、一味徒黨へ加はりしも今日より列をのがれ、親の介抱いたすが

ようござると。
兩人　大星氏の內意でござる。（ト平右衛門これを聞き思入あつて、）
平右　そりやお頭樣の仰せながら、親の介抱いたせよとはお情餘つて平右衛門お恨みに存じまする。小身者の身を以て、お歷々と諸共に一味徒黨に加はりしは、此上もない身の仕合せ、親平左衛門は申すに及ばず、女房きたも元助が妹なれば二人とも御家の御恩を受けたる者、假令路頭に迷ふともお主樣には代へられませぬ、お荷物を擔いでなりと鎌倉表へ私をお連れなされて下さりませ。
十太　忠義一途の其方ゆゑ、尤なる事ながら御家來とは申すものゝ、身分も輕きお足輕、僅五兩に二人扶持、申さば御恩も薄い道理、一味の列に漏れたればとて、誰も笑ふものはない。
又之　數代高祿頂戴せし斧九太夫はいふに及ばず、一度列に加はりながら變心なせし高田進藤、それらに引替へ今日まで、變心なさゞる平右衛門。
十太　其方が心底は亡君始め大星氏、われ〳〵共に至るまで、實に感心いたして居る。
又之　大恩受けし者さへも、幾人となく變心なせば、大星氏の詞に隨ひ、
十太　思ひ止つて長病の、親の介抱、
兩人　いたすがよからう。（ト是れにて平右衛門むつとなし、）

平右　すりや私が小祿ゆゑ變心なさうと思召して、それで親の病氣に假託け、お供にお連れ下さりませぬか。申すまでもござりませぬが、千五百石取る大星樣も、又二人扶持の私でも、今日命を繋ぎまする御恩に高下はござりませぬ、去年お家の騷動以來敵を討たんと、非人にまで身をやつして師直を、附覗つたる平右衞門が此の魂を御存じなく、若し變心でもしようかと御供にお連れ下されずば、生きて居て詮ない體、只今此の場で切腹なし冥土へ行つて我が君へ、申譯をいたしますから、憚りながらお二人樣、お見屆け下さりませ。

ト平右衞門肌を脫ぎ、脇差を拔き手拭にて卷き腹へ突き立てようとする、此內兩人平右衞門にちつと目を附け居て、

十太　やれ早まるな、平右衞門。

又之　心底見えた、暫く待て。（ト又之丞平右衞門を留める。）

平右　お疑ひを受けたる上は、潔よく相果てまする。

十太　こりや、生は難く死は易し。

又之　急く所でない。

兩人　まあ〳〵待つた。

平右 ではござりますが。
十太 はて、待てと申さば。
兩人 まあ〳〵待ちやれ。（ト平右衛門思入あつて。）
平右 すりや、お疑ひは晴れましたか。
十太 如何にも疑ひ相晴れた、其方が忠義は、豫て大星氏には御存じなれど、情なきは足輕の輕き身分に、徒黨の內でも變心なさんも計られずと、疑ふものも多きゆゑ。
又之 われ〳〵兩人內意を受け、心底探りに參りし所、命を捨つる今の有樣見屆けし上からは、われ〳〵共と諸共に。
平右 すりやお疑ひが晴れまして、お供にお連れ下さりまするか。
兩人 如何にも同道いたすであらう。
平右 えゝ、有難うござりまする。（ト平右衛門嬉しき思入こ）して御發足の日限は。
十太 今朝より同志の者忍び〳〵に出立なしたり、われ〳〵二人も此趣きを、大星氏へ申し上げ、直に出立なす所存。
又之 其方も今宵の內に、大津宿の鍵屋まで、竊に尋ね參るがよい。

平右　委細畏まつてござりまする、御沙汰があれば早速にお供いたす心ゆゑ、旅の支度も内々に用意いたしてござりますれば、直に出立いたすでござりまする。
十太　出て再び歸らぬ旅立ち。
又之　親女房にも暇乞ひを。
兩人　よういたして參るがよい。
平右　有難うござりまする。（ト兩人思入あつて、）
十太　最早日差も八ツ下り、山科へ立越えて大津までは餘程の道。
又之　何さま、急ぎの旅なれば、少しも早く參るでござらう。（ト兩人立上る。）
平右　左樣なれば支度をなし、跡よりお供いたしまする。
十太　左のみ急いで參るに及ばぬ。
又之　今宵の內に大津まで。
平右　委細畏まつてござりまする。（トこれにて兩人門口へ出る。）
兩人　然らば平右衞門。
平右　御兩所さま。

十太　鍵屋方にて、
兩人　相待ち居るぞ。
ト唄になり、兩人花道へはひる。平右衛門跡を見送り、嬉しき思入。奥よりおきたしか〲と出來る、
平右衛門これを知らず、
平右　さあ〱忙しくなつて來たが、先づ脚絆・三度笠はよし。
きた　もし、こちの人。
平右　飯行李も買つて置いたし、薬もさつき貰つて置いたし。
きた　もし、こちの人。
平右　三尺帶はあるし、合羽はあるし、いや、ないものは路用の金ぢや。
きた　もし、こちの人。（ト大きく言ふ。）
平右　びつくりしたわえ。
きた　お前、鎌倉へ行かしやんすかえ。
平右　おゝ悦んでくれ女房、日頃の願ひが叶つたわえ。
きた　そりやまあ嬉しいことでござんすが、何日立たしやんすのでござんすえ。

平右　明日ともいはず今宵の内に、大津まで行かねばならぬ。
きた　今宵の内に立たしやんすとは、あんまり急でござんすな。（ト名殘り惜しき思入。）
平右　いつ何時といふことの、知れぬは豫ての覺悟だわ。何にもせよ、是れへ詰める飯はあるか。
きた　いゝえ、ござんせぬわいな。
平右　飯がないとは困つたことだ、これ、何をわりや泣くのだ。
きた　さあ、かねて覺悟でござんすが、餘りといへば急なことゆゑ。（トおきた泣く。）
平右　えゝ未練な奴めが、お歴々樣の列に加はり、鎌倉表へお供をするは、此上もない身の冥加、何で不吉な吼え面するのだ。
きた　わたしも武士の娘ゆゑ、此の出立が悲しうてそれで泣くのぢやござんせぬ、お年の上にあの御病氣の父樣が、鎌倉でお前が死んだと聞いたなら、がつかりと力も落ち泣き死になさるであらうと、それが悲しうござんすわいな。（ト泣く、是れにて平右衞門ぎつくりと思入。）よう思うても見て下さんせ、女夫になつて丸一年添うか添はぬに此のやうな、夢見たやうな本意ない別れ、如何にお主の爲ぢやとて、腹切りに行く旅立を、どうまあ是れが悦ばれませう。わたしや泣くまいと思うても、涙が堪忍せぬわいなあ。

ト おきた泣く、此の内よき程に上手障子を明ける、内に蒲團を敷き夜着にもたれ平左衛門切つぎ更けたろ病人のこしらへにて窺ひ居る。平右衛門よろしく思入あつて、態ときつとなり。

平右　えゝ、言はうやうない未練者めが。大切な出立に、不吉の吼え面、手は見せぬぞ。

ト 一腰へ手を掛ける、平左衛門びつくりなし、

平左　あゝこれ悴、早まるまい／＼。（ト一間より出て、平右衛門を留める。）

平右　えゝ親父さま、うつちやつて置いて下さりませ。

平左　どうまあうつちやつておかれるものか、まあ／＼待つてくれ／＼。（ト平右衛門を留める。）どういふ譯か聾ゆるおれは知らぬが嫁が惡い、假令何であらうと男に負けねばならぬわい。女子は五障三從とて幼い時は親に從ひ、中年にして夫に從ひ、老いては子に從ふが、是れ則ち女子の常。爰へ來てあやまるがよい、女房が夫にあやまつたとて、誰も笑ふものはない。

きた　あい／＼。（ト平右衛門へうなづき、）泣いたはわたしが惡うござんす、堪忍して下さんせいな。（ト平右衛門にあやまり、襷をかけながら、）目出たう祝ふ出立の、御膳が直に出立ちの御膳。

平左　何と言やる。（ト聞きたき思入、）

きた　門出を祝ふ目出度き御膳、どれ炊かうかいな。

ト誂への合方になり、おきた襷をかけ釜の下を焚きつける、平左衞門これを見て、

平左　これ悴、あれを見やれ、われが惡かつたと思へばこそ、泣く／＼も飯ごしらへ、何からのもつれか知らぬが、遂に是れまで只の一度、喧嘩したことのない仲のよい女夫仲、大方喧嘩は悋氣であらうが悋氣も男が大切からぢや、大概なことならば料簡してくれ、年は取る病は重る搗て加へて聾になり、身の不自由な平左衞門、ひよつと二人が置去りに、いやそんなこともあるまいが、萬一互ひに別れるやうなことになつたら何とせう、何事も年寄りのおれに免じて、料簡しやれ。

ト此内おきたは米を磨ぎ釜へうつす、平右衞門はぢつと思案の思入あつて、ふつと思ひ附いたといふこなしあつて、平左衞門へ書いて見せる。

平右　これ親父さま、何ぞといふとこなさんは、あの引摺の最屓して、現在の血を分けた平右衞門を袖にするは、どういふ氣か、何で料簡する所か、腹が立つてならぬわい。（ト平左衞門讀んで見て、）

平左　はゝゝゝ、われもまあ子供のやうに、何を分らぬことを言ふのぢや。親となり子となるも前生から深い因緣、血を別けたの別けぬのといふ親子の仲に隔てがあらうか、そんな分らぬことを言はずと、機嫌直して料簡しやれ／＼。（ト是れを聞きおきた涙を拭ひながら、）

きた　えゝ有難い、舅御さまのお志しを聞きましては。（ト泣かうとするを、）

平右　あゝこれおきた、泣いてはいけぬ、おぬしも腹が立つたやうに、何でもおれに投げ打ちしやれ。
きた　そんなことがなるものかいな。
平右　えゝ、しろといふに。（トきつと言ふ。）
きた　えゝも、情ないことぢやわいな。（トおきた思入あつて、米かし桶を投げる。）
平右　それでこそ、おれが女房だ。
ト平右衛門煙草盆を取つて投げる、平左衛門びつくりして、双方を留めながら、
平左　あ、これ〳〵投げ打ちは危ない、止しにしやれ〳〵。何が其やうに腹が立つか、料簡してくれといふに。（ト側へ寄るを、）
平右　これ親父さま。（ト引据ゑて疊へ書いて見せる、平左衛門これを讀む。）
平左　やあ、何ぢや、それ程嫁が可愛くば、あれを殘して出て行くから、緣を切つて勘當してくれ。えゝゝゝゝ、そりや本心で言ひ居るのか。（トびつくりなす。）
平右　おゝ、知れたことだ。（ト書いて見せる。）
きた　これ、其やうなこと言はしやんせずと。
平右　この愛想づかしも忠義の一つ、延引しては不忠となるわ。（ト此時釜より煙り上る。）それ、じやじ

ゝや時だ、火を引かぬかい。

きた　あい〳〵。

ト平右衛門平左衛門を突き放す、平左衛門倒れるを介抱しようとして手を組みぢつと思入、おきた火を引き居る、平左衛門思入あつて、

平左　これ〳〵、腹が立つなら此の親をどのやうにもして料簡してくれ、親一人子一人なれば、便りにするはそちばかり、腹が立つなら親があやまる、これ料簡してくれ〳〵。

ト平左衛門手を合せて拜む、平右衛門じゆつなき思入にて、又疊へ書きながら、

平右　假令何と言はしツても、いツかなわしは料簡ならぬ、それも實は餘所外に、女が出來て其處へ行くに親や女房が邪魔になるから、そつちで切らずばこつちから、親女房の緣切つた。

平左　えゝゝゝ。(ト平左衛門どうとなり、呆れる。)

平右　それ、女房ども、用意の着替へ。

きた　あい〳〵。(ト戸棚より風呂敷に包みし着替へを着せようとするを、)

平右　おれが着るから構ふな〳〵。(ト平右衛門我が手に着替へ、尻を端折り、脚絆をはきながら、)それ飯が出來たら、早く行李へ詰めてくりやれ。(ト腹を立てゝいふやうに言ひ、行李を投げる。)

きた　お前もまあ、一生の別れ、得心の行くやうに、父さまへ此事をいうて上げて下さんせいな。
　　　ト行李へ飯を詰めて態と投ろ、平右衛門取つて風呂敷に包み、腰へ巻きながら、
平右　此事他言いたすまいと、徒黨の列に加つた時、神文書いたを忘れたか。
きた　そりやさうでござんすが。
平右　えゝ、其胸當を早くよこせ。
　　　トおきた胸當を投げろ。平右衛門取つて胸當を掛けろ、此の内平左衛門呆れし思入にて、
平左　外に出來た女とは、どんな女か知らねども、此の貞節な嫁を捨て親を捨て出て行くとは、言はうやうない不孝者、望みの通り勘當する、どこへなりと出て行きやれ。
平右　すりや、勘當なされて下さりまするか。
平左　えゝ、面を見るのも腹が立つわい。
平右　えゝ有難い。（ト拜まうとして、）女房ども、さらば。（ト三尺帯を締めながら門口へ出る。）
きた　あもし、こちの人。（ト留めろ、平右衛門は草鞋をはく。）そんならこれが。
平右　再び逢はれぬ夫婦の別れ。
きた　はあゝ。（ト泣き伏す。）

平左　あゝこれ、（トおきたを引廻し、）とつとゝ此の家を出てうせう。（トきつと言ふ。）

平右　はい、おさらば。

ト早き合方ばた〳〵にて、平右衛門逸散に花道へはひる、平左衛門伸び上り跡を見送り、おきたは泣き居る、此模樣よろしく道具廻る。

（逢坂山の場）――本舞臺上下岩の張物、向う遠山の書割、上手に誂へ振よき臺幹の松、此の傍に腰掛の岩臺、下手に逢坂山といふ榜示杭、日覆より松の釣枝、總て逢坂山の體よろしく、山おろしにて道具留る。と山おろしを打ち上げ、床の淨瑠璃になり。

〽忠孝の道は一筋東路の、名にし近江の逢坂越え、行くも歸るも別れては逢ふとはいへど別れたる、親や女房に逢ふことの、叉となき身の平右衛門、心いきせき歩み來て、

ト山おろしにて、花道より以前の平右衛門出來り、花道にて、

平右　やれ〳〵急いだ〳〵、秋の日の短さに心忙しく急いだが、爰はもう逢坂山、大津までは僅の道、向うへ行つて息つぎに、一服やつて行かうかい。

〽一息つかんと傍なる、岩にどつかと腰打ちかけ、見晴らす四方の風景も、吉田火口に火をうつし、地切り煙草を吞みながら、

ト平右衛門舞臺へ來り、岩に腰を掛け、煙草入から摺火打を出し煙草を呑みながら空を見て、

もう今日も何時であらうか、曇つて居るので時が知れぬが、腹の時計では七つ前でもあらうか知れぬ、親父さまに明さぬゆゑ、立ちしなに急いだので飯を喰はずに出掛けたが、腹の時計が來たやうだ、爰でこそ旅の用意、行李の飯を喰ふ所だ。

〽腰の飯行李取出し、（ト腰に附けたる飯行李を出し。）

斯う又見晴らしのいゝ所で、飯を喰ふのは格別だ。

〽箸取上げて喰ひかゝれば、耳かしましく鳴く山鳩、

ト平右衛門飯を喰ひにかゝる、上手の松の木へ指金の鳩飛び來りて鳴く、

えゝ、年より來い〳〵と、あたやかましい山鳩めが。

〽あり合ふ石を投げ付くれば、ぱッと立つては又鳴くにぞ、平右衛門は吐息つき、

ト平右衛門石を取つて鳩に打ちつける、これにて鳩ぱッと立つては又鳴く、平右衛門思入あつて、床の合方になり、

老少不定と言ひながら、若きが殘り老いたるが先きへ行くのが順當なるに、先立つばかりか年老いし親の病氣も餘所に見て、血判なせし誓ひゆゑ、敵討の樣子も明かさず心にもない惡口雜言、

嘸憎い奴とお恨みなされてゞござりませう。

〽故郷の方へ打向ひ、(ト平右衞門向うへ思入あつて手を突き、)

もし親父さま、忠孝二つは五常の第一、何れに重い輕いはなけれど、小祿ながら御扶持を受けし主君の敵が討ちたいばかり、親に不孝と知りながら此身を捨てに鎌倉下向、首尾よく敵を討ち果せても、又討ち損じても切腹はかねて覺悟の徒黨の義士、何れの道にも今生で再びお目に掛らぬ私、嘸相果てしとお聞きなさらば其の歎きは如何ばかり、重い忠義に輕い命捨つるは何とも思ひませぬが、たゞ親父さまのお身の上、そればかりが案じられ、

〽爰までとつかは來る道も、先へ一足また後へ、一足引かるゝ親子の恩愛、心に忘れはいたさぬと、涙に暮れしが氣を取直し、(ト平右衞門よろしく思入あつて氣を替へ、)

はゝゝゝ、はゝゝゝ、あゝ愚癡な〱。義によつては親子兄弟刃を合すも武士の習ひ、女子供を見るやうに愚癡なことを思ひ出して、まあ誰も聞かねばこそよけれ、義士の衆に聞えたら面目次第もない譯だ、はゝゝゝゝ、はゝゝゝ。

〽涙交りに打ち笑ひ、(ト泣き笑ひして箸を取上げ、)

どれ、扶持米にあり附かうか。

〽又喰ひかゝれば鳴く山鳩、松の梢を見返りて、

又山鳩が鳴き居るか、親父さまのことで胸が塞がり、喰はうと思へど喉へ通らぬ、大津へ行つて飯の替りに、蕎麥か饂飩でも喰はうかい、此の行李に殘つたのは幸ひ鳩にくれてやらう。

〽行李の飯をば投げやれば、親鳩先きに子鳩が群がり、餌ばみをなすを打ち見やり、

ト平右衞門行李の飯を撒いてやる。風の音になり、指金の親鳩子鳩四五羽飛んで來て、是れを喰ふ、平右衞門これを見て、

同じ鳥類の其の内でも、烏には反哺の孝あり。又鳩には三枝の禮あつて、親鳥が子鳥をあはれみ食を分けて與へる有樣。

〽鳥でさへあの如く、子を憐むが親の慈悲、

ましてや人間、親父さまが嘸や跡にて歎いてござらう。

〽いつそ本心打明けてと、駈出せしが、（ト平右衞門思入あつて、花道へ行きかけ）

いや〳〵、最前矢間小潮田樣へ番ひし詞があるからは、ちつとも早く大津宿へ。

〽又もやとつて返せしが、（ト跡へ戻り、）

どう思ひ直しても、今日逢はねば此の世にて、再び逢はれぬ親父さま、一先づ家へ歸らうか。

〽歸らば遲刻此の儘に、行かば逢はれぬ親子の別れ、暫し途方に暮れたる折から、道を急いで來かゝる兩士、それと見るより聲を掛け、

ト此內平右衞門よろしく思入あつて、山おろしになり、花道より以前の十太郎又之丞出來り、花道にて舞臺へ思入あつて、つか／＼と來り、

兩人　そこに居るのは、平右衞門ではないか。

平右　これは／＼矢間さま、小潮田さま、只今お立ちでござりましたか。

十太　其の方はまだなか／＼出立はいたすまいと存じ居つたに、早かつたな。

又之　爰で逢ひしは丁度幸ひ、われ／＼共と同道しやれ。

〽言はれてはッと平右衞門、

平右　へい、私めも御一緒にお供いたしたうござりまするが、出立を取急ぎ、餘儀ないものを宿許へ失念いたして參りましたから、取つて參りたうござります。

十太　すりや、此の處より引返して、

平右　へい、左樣にござりまする。

〽聞くに矢間は氣色を替へ、

十太　こりや平右衞門、家を出る時妻子を忘れ、國を出る時身を忘る、外に失念なものは無き筈ぢやが、何を忘れて參つたのぢや。（トきつと言ふ。）

又之　あいや矢間氏、左樣でござらぬ、妻子を忘れ身を忘るゝは、侍たるべき者のこと、何をいうても平右衞門は、小祿の足輕ゆゑ。（ト平右衞門の顏をちつと見て、）失念ものもござらうわい。

十太　ではござらうが、足輕でも、徒黨の數に加はれば、われ〳〵共も同じこと。

又之　さう思はるゝも尤ながら、そこが人の高下でござる、身分が違へば心も違ふ。

十太　何さま、斯樣なものは賴みにならぬ、われ〳〵共は先きへ參らう。

又之　それがよろしうござる。

〽苦り切つて行き掛けるを。（ト兩人上手へ行かうとするを、平右衞門留めて、）

平右　あいや御兩所樣、暫く、宅へ引返しますを變心でもいたすやうに、思召すかは存じませぬが、左樣な心はござりませぬ。

十太　然らばわれ〳〵と同道いたすか。

平右　さあ、御同道いたしたけれど。

又之　跡へ歸るは心變りか。

平右　全く以つて。
十太　同道なすか。
平右　さあそれは。
兩人　さあ、
平右　さあ、
三人　さあ〳〵〳〵。
又之　えゝ、斯様なものにお構ひなくと。
十太　如何にも先きへ參るでござらう。
平右　ではござりますが。（ト平右衞門留める。）
兩人　えゝ、留め立ていたすな。
〽留むる袖を振拂ひ、兩士は打ち連れ急ぎ行く。
ト平右衞門袖にすがるを手酷く振拂ふ、平右衞門ばつたり倒るゝ、兩人腹の立つ思入にて、上手へはひる。
〽跡見送りて齒がみをなし、

平右　今御兩所のお詞では、列を漏れたる高田進藤、不忠不義の腰拔武士と、一つにされるが口惜しい、跡追ひかけてちつとも早く。

〽身支度なして駈出す、目先きへぱつたり親鳩が、命盡きてか落入れば、群れ居る小鳩が寄集ひ、鳴き悲しむを見るにつけ、親の身の上氣遣はしく、行きつ戻りつ四鳥の苦しみ。

ト此內平右衛門身支度をなし、上手へ行かうとする。風の音烈しく親鳩苦しみながらぱつたりと落ち入る、子鳩群がり鳴き悲しむ、平右衛門これを見て思入。時の鐘。

折も折、時も時、此の親鳩の死んだのは我に知らせの前表なるか、是れから跡へ立歸り、取つて返して大津まで行つた所が里數は三里、今打つたのが七ツゆゑ、日暮までにはまだ一時、親にあふみと山城の爰は所も逢坂山、行くも歸るも覺えの金膽、忠孝二ツを身一ツに、日暮れぬ內にお

お　さうだ。

〽尻引つからげ平右衛門、飛ぶが如くに、

ト平右衛門尻を端折りきつと見得。是れにて鳩ばつと立つ、是れを見上げる。山おろし曲撥にて此道具廻る。

（元の寺岡内の場）――本舞臺元の世話場の道具。爰に伊兵衛おきたを引立て居るを、平左衛門留めて居る、了竹立ちかゝり居る、三重、時の鐘にて道具留る。

きた　こりや、わたくしをどうさしやんすのぢや。
伊兵　どうするとは知れたこと、人參代の二十兩、耳を揃へて金を渡すか。
了竹　但しはこなたに惚れて居る、伊兵衛どのゝ女房になるか。
きた　えゝ、穢らはしい、何で女房に、
伊兵　ならずば金を今渡すか。
きた　さあ、それは。
了竹　女房になるか。
きた　さあ、
兩人　さあ、
三人　さあ〳〵〳〵。
伊兵　えゝ面倒な、うせをらう。（ト引立てるを平左衛門留めて、）
平左　どういふ譯か聞えぬゆゑ、樣子は知れぬが、嫁女はやらぬ。

伊兵
了竹　邪魔な親父め、すつこんで居ろ。（ト平左衛門が蹴倒す。平左衛門どうとなる。）

きた　あれ危ない、父さまを。

伊兵　得心せねば老ぼれめを。

了竹　茲で存分さいなまうか。

きた　どうぞ堪忍して下さんせいな。

〽留むるおきたを引きのけて、平左衛門をさいなむ折から、宙を駈來る平右衛門、それと見るより飛んで入り、二人を投げ退け仁王立ち、

ト了竹おきたを引附け、伊兵衛平左衛門を引附けさいなむ。ばた／＼になり、花道より平右衛門走り出來り、直に内へはひり兩人を投げ退け、平右衛門おきたを圍ひ、きつと見得。

平左　や、そちは悴か。

きた　おゝこちの人、よう戻つて下さんしたな。（ト兩人起上り、）

伊兵　やあ、誰かと思やァ平右衛門、何で二人を、

兩人　投げたのだ。

平右　病に弱る親父さまや、かよわき女房を手籠めになすゆゑ、投げたがどうした、何とした。

伊兵　いや手籠めにはせぬ、催促するのだ。
平右　何と。
伊兵　こなたの方にも覺えがあらうが、あの老耄が去年から毎日呑んだ人參代、積り〳〵て二十兩、草履草鞋を賣る家へ、何を目當に貸すものだ。
了竹　こなたの女房に伊兵衞どのが、惚れて貸した二十兩、今日の明日のと言譯も、愚老が賴まれ度々言つたが。
伊兵　もうべん〳〵と待つては居られぬ、今宵中に勘定するか。
了竹　但しは代りに女房を渡すか。
伊兵　それもならねば代官所へ、こなたを連れて訴へようか。
平右　さあ、それは。（トぎつくり思入。）
伊兵　さあ、三つに一つの、
兩人　返事をさつしやれ。
〽退切ならぬ金の切羽、平右衞門は心を定め、（ト平右衞門ぢつと思入あつて、）
平右　おゝ、其金濟まさう。

伊兵　や、すりや人参代の二十兩、

了竹　耳を揃へて渡すとか。

平右　後ともいはず、それ受取れ。

〽女房おきたを突きやれば、（ト平右衞門おきたを突きやる。）

伊兵　そんなら、おきたを、

兩人　金の代りに、

平右　おゝ、暇くれた、女房去つた。

きた　えゝゝゝ、そりや情ない平右衞門どの。

〽夫に犇と取縋れば、

平右　その歎きは尤もだが、孝貞忠義に去られてくりやれ。

きた　それぢやというて。

平右　えゝ、最前も言つておいたに、未練な奴めが。（トきつと言ふ。）

きた　はあゝ。

〽わツとばかりに泣き伏せば、譯も白髮の父親は、

平左　こりや、嫁女には、又いさかひか。
〽介抱なすを引退けて、（ト平左衞門おきたをいたはる、伊兵衞了竹引退けて、）
兩人　すりや、人參代にいよ〳〵女房を。
平右　渡して遣つたら、言分あるまい。
伊兵　おゝ、無いとも〳〵、是れでさらりと帳を消し、
了竹　今夜からは伊兵衞どのゝ、
伊兵　女房のおきた。さあ、來やれ。（トおきたを引立てる。）
きた　いえ〳〵、わたしや厭でござんす。
了竹　厭であらうが、應であらうが。
伊兵　金の代りだ。
兩人　さあ、來やれ。
〽引立てられて是非なく〳〵、跡に名殘りもをし鳥の、夫に別れて引かれ行く。
ト伊兵衞了竹、おきたを引立て下手へはひる、平右衞門門口へ行き、
平右　女房ども、許してくりやれ。

〽跡見送りて伏拜む、後に暫し默然と、躊躇ひ居たる平左衞門、起直りて威儀を改め、

ト平右衞門おきたに許してくれといふ思入、此の內平左衞門耳の聞える思入よろしくあつて、

平左　こりや平右衞門。

平右　はい〳〵。（ト平左衞門の前へ來る。）

平左　そちや勘當うけた親の家へ、何用あつて立歸つた。

平右　え。

平左　いやさ、何用あつて歸つたぞ。（トきつと言ふ、平右衞門ぎつくり思入。）最前此家へござつたる矢間さま小潮田さまへ、番ひし詞をそちや忘れ、親女房に心引かれて立歸りしか、うろたへ者めが。

〽思ひがけなき、親の詞に、

平右　やあ、それ御存じの上からは、あなたはお耳が。

平左　おゝ、聞えるとも〳〵、ずんとよく聞えるわ。

平右　えゝゝゝ。（トびつくりなす、誂への合方になり、）

平左　可愛さうなは嫁のおきた、そちへの貞節おれへの孝行、貧しい暮しを苦にもせず、すゝぎ洗濯賃絲取り、稼げど足らぬ身代にかてゝ加へておれが病氣、日毎にとゝなふ人參も伊兵衞が心あるを

幸ひ、心にもない戯れごとも、其の人參を借りようばかり、おれが聞いたら苦にせうと聞える耳を聞えぬと不具になつて暮すのも、嫁が可愛さ不便さゆゑ、それとは知らず最前も、おれに歎きを掛けまいと、夫婦喧嘩と見せかけて、たばかつて行く出立は、

〽健氣もの出來したと、心の悦び引替へて、

親女房に心迷ひ、誓紙を破り立歸り、流石は足輕風情ぢやと四十餘人の人々に、指をさゝれ打ち笑はれ、親の名まで汚し居るか、孝が重いか忠が重いか、數代の御恩を打ち忘れしは、腰が拔けたかうつけ者め。

〽病苦も忘れ平左衞門、我が子を勵ます一言に、平右衞門は手をつかへ、

ト平左衞門よろしく思入、平右衞門もさてはといふこなしあつて、

平右　はツ、斯く親人には一大事を御存じの上からは、何をか包まん仰せの通り、亡君の敵師直を討ち取らんと、臍を固めし四十餘人の義士の面々、他言せまじき神文に包み隱して出立せしが、逢坂山にて食事をなし、殘りし飯を山鳩に與へし處、子鳩を集め餌を分ち育む有樣、

〽鳥でさへ親と子の、愛情はあるものを。

さぞ親人の御歎き如何ばかりぞと推量なし、せめて包みし本心を打明けて御安堵させ、お暇乞ひ

をいたさんと、思ふ折柄矢間さま小潮田さまがお出でなされ、小祿ゆゑに私を御蔑みの御一言、無念さに心取直し、

〽又行き掛ける目の前へ、一羽死したる親鳥を、數の子鳥が取圍み、歎き悲しむ體を見て、未練卑怯と笑はゞ笑へ、まさかの時に高名なし、今の汚名を雪がんと、今生のお別れに立歸りしも、これ親人、（ト平左衛門に取り附き、）も一度お顏が拜みたさ、斯く本心を打ち明けてお暇乞ひをいたす上は、何しに跡へ心殘さん、潔よう出立して、敵師直の首打ち取り、やがて吉左右お知らせ申さん。

〽御安堵あれや親人と、初めて明す本心に、親はほく〱打ち悦び、

ト此内平右衛門よろしく思入、平左衛門嬉しき思入にて、

平左　ほゝお出來した、出來し居つた。其の本心を聞く上は病みほうけても武士の端、敵討の門出には定まれる方式あれど、早急のことなれば心ばかりの身祝ひも、萬事に事を缺徳利、杯とてもあらざれば、せめてのことに門出を、祝うて親が肴をくれう。

平右　なに、お肴とな。

平左　些少ながら、旅の路用。

〽藥袋を差出せば、平右衛門開き見て、

ト平左衛門懐より人參の包を出しやる、平右衛門見て、

平右　こりや人參の藥包、これを路用とは。

〽不審立つれば平左衛門。

平左　去年三月十五日敵師直が其の爲に、御切腹と聞くよりも、おのれやれ、殿樣の御無念を晴らさんと思ふ忠義の一心も、年寄の身に長の病氣、所詮お役に立たざれば、せめてそちが出立の路用の金を調へんと矢竹に思ふ折も折、大人參を用ゐよと醫者のすゝめに嫁女が難儀、假令貞女を破つてもおれが命を助けんと、伊兵衛が世話を幸ひに、是れまで取り込む人參も、生きて甲斐ない此身ゆゑ、呑んだ積りで嫁女に隱し貯へ置きし其の人參、價は凡そ二十兩、それを御用に立てゝくりやれ。

〽我が子を思ふ親の慈悲、平右衛門は押し頂き、（ト平右衛門人參を頂き、）

平右　はゝ有難き親の御恩、又女房が眞實は未來で禮を言ひませう。（ト時の鐘）あの鐘は最早入相、お名殘り惜しうはござりますれど、是れにてお暇仕らん。

平左　おゝ、一時延びれば一時の不忠。

平右　片時も早く、是れより大津へ。
平左　然し時刻も餘程の後れ。
平右　なに、一時三里、瞬くうち。
平左　諸士に追附き、後れを取るな。
平右　心得ました。親人、おさらば。
〽立ち出づるを、
平左　平右衛門、待て。
平右　はッ、待てとは。
平左　餞別くれう。
〽言ふより早く、一腰を腹へがばと突き立つれば、平右衛門打ち驚き、
ト平左衛門隱し持つたる短き脇差を拔き、腹へ突立てる。平右衛門びつくりなし、
平右　やゝ、是りや親人には何ゆゑに。
平左　おゝ、切腹なせしはまさかの時、親がなくば心引かれず、そちに手柄をさゝう爲め。
平右　すりや手柄をさゝうばかりに、命をお捨てなされしか。

〽いたはる折柄始終をば、窺ひ居たる以前の兩人、

ト平右衞門平左衞門の介抱をする、此の時下手より以前の十太郎、又之丞出で、

十太　平右衞門が立歸りしは、仔細あらんとわれ〳〵も、取つて返して最前より、始終の樣子は逐一聞いた。

又之　親子夫婦諸共に、世にも稀なる忠信孝悌、まことに感心、

兩人　いたしてござる。

平右　はゝ有難き其のお詞、猶も此の上御供なし、命限りに働かん。

〽いふに手負は打ちうなづき、

平左　こりや〳〵悴平右衞門、敵高野師直は、お主の敵ばかりと思ふな、親の敵も師直なるぞ。

十太　主と親との仇敵。

又之　人に勝れし手柄せよ。

平右　はゝ、仰せにや及ぶべき。

ト此時斧平後へ窺ひ出て、

斧平　樣子は聞いた。（ト行かうとするを引捉へ、）

平右　軍法智略は知らねども、さし覺えたる將棋好き。

〽雜兵ながら平右衞門、桂馬も角も取つて投げ、敵地へ成りこみ金銀を飾りしきらゝの館も微塵、ちつとも待てなし突掛くる槍は鋭き香車道、どこに居飛車の師直を追詰め〳〵王詰めて、勝負は勝と鬨の聲、

ト此内平右衞門斧平と立廻りあつて、

親人冥土で、見物あれ。

〽勇み立つたる寺岡が、忠義の程ぞ類ひなき、

平左　ほゝお、勇まし〳〵。

〽言ふ息さへも四苦八苦、

十太　其の心底を見る上は、是れよりわれ〳〵兩人は、夜をかけて出立なさん。

又之　平右衞門は跡に殘り、親の遺骸女房の、身の片附けを是れにでせよ。

ト袱紗包みの金を出す、平右衞門取つて、

平右　すりや、此の金子を。

十太　些少なれども、

又之　此の場の香奠。
〽はゝ忝なしと押し頂く。折から歸る女房おきた。
ト平右衛門金包みを頂く、ばた〳〵になり、下手よりおきた出來り、
きた　こちの人、
平右　女房悦べ、人參代が手に入つたぞ。
きた　えつ、有難うござりまする。
ト此時斧平起上り、
斧平　平右衛門、覺悟。
〽切つてかゝるを身を躱し、（ト立廻つて引付ける。）
十太　そやつは敵の、
兩人　廻しもの。
平右　時に取つての門出の血祭り。
〽言ふより早く幹竹割り、
ト平右衛門刀を拔くより早く斧平を見事に切る。平左衛門これを見て、

平左　ほゝお、天晴。

〽につこと笑ふが此の世の名殘り、娑婆と冥土の門出に、別れ〳〵に。

ト平左衛門笛を掻き落入る、おきた縋り泣く、平右衛門は刀の血糊を拭ふ、十太郎又之丞は扇を開き、平右衛門をあふぐ、此の模樣よろしく三重カケリにて、

幕

鳩の平右衛門（終り）

世界は眞書太閤記天王山より山崎の戰ひ掛て小栗栖へ落行く明智光秀に附添ふ齋藤村越は溝尾も共に守護なせど羽柴が勢に隔てられ鋭き敵に近江路や便り堅田に丹吾が茅屋あやめの方に對面は左馬之助が一世の名殘門に立聞く長兵衛は卑怯未練と突掛くる心は直な竹槍に傍にはおしほがとつおいつ餘る思案の其處へ危急を告る林半次郎はや八方の敵勢に光俊是非なく大鹿毛にて叡山おろしの激浪もやすく〱わたる唐崎に駿馬のわかれを大詰として

扇音修羅場読切

墨画龍湖水読切

「樂書龍湖水乘切」は明治三年一月、守田座に稿下された。作者五十五歳の時である。原名題は、「館扇曾我訥芝玉」と呼んで、太閤記の中の大德寺燒香の場と共に脚色されたのであつた。當時守田座は狂言堂左交（三世櫻田治助）が立作者であつて、作者は左交の請によつて、湖水渡りの一幕を書いたのであるが、狂人長兵衞を點出して、脚色人の意表に出て、甚だ好評であつたと傳へられてゐる。扉に掲げた題字は作者のがなかつたから、故竹柴其水の筆を採つておいた。また、語りも明治二十九年四月明治座に上演された時のものである。

書卸しの時の役割は、澤村訥升（明智左馬之助光俊）、市川左團次（入江長兵衞）、岩井紫若（光秀の妾菖蒲の方）、中村仲藏（漁師丹吾兵衞）、澤村其答（入江長兵衞女房おしほ）、市川小團次（林半次郎）等であつた。

挿繪にしたのは、揚洲周延筆の錦繪で、澤村訥升卽ち後の助高屋高助の左馬之助乘切の景である。

大正十四年九月

校訂者



墨畫龍湖水乘切（明智左馬之助――一幕）

丹吾兵衛住家の場

琵琶湖乘切の場

【役名――明智左馬之助光俊、百姓丹吾兵衛、入江長兵衛、光俊の家臣森半次郎。光秀妾蔦蒲の方、長兵衛女房お汐。其他軍兵、百姓、庄屋等。】

（丹吾兵衛内の場）――本舞臺四間六枚飾り常足の二重、杉皮附の柱、藁葺屋根、上手一間障子屋體、向う暖簾口、上手佛檀押入戸棚、下手鼠壁、いつもの所藁葺、丸太柱、竹簀戸の門口、下手誂への登り木の松、日覆より同じく釣枝、一面に藪疊、後あとへ下げて湖水の遠見、總て江州石場村丹吾兵衛内の體。二重下手に居爐裏、自在竹に罐子掛けあり、此傍に丹吾兵衛、白髮鬘やつし裝世話親仁のこしらへにて粗朶を焚いて居る、平舞臺上手に一、二、三軍兵のこしらへにて槍を立掛け、二重へ腰を掛け茶を呑んで居る。下手に○、△、□蓑笠草鞋百姓裝にて、立掛り居る、浪の音、臼挽唄にて幕明く。

軍二　こりや〳〵老人、ぬるくしてもう一杯くりやれ。

丹吾　はい〳〵、畏りました。（ト盆に茶碗を載せ、罐子の湯を汲み持ち來り、）見ますれば軍のお裝、お前さ

ま方は、羽柴さまの御人數でござりますかな。

軍一　いかにも、我々三人は討手の大將羽柴の御內、

軍三　大津口を引受けし、堀秀正の家來どもだ。

丹吾　それでは大方山崎で、戰をなされたでござりませうな。

軍一　おゝいたしたとも〳〵、逆賊明智光秀が集まり勢と合戰なしたが、名に負ふ主人の弔ひ戰。

軍二　味方に七分の强味があるゆゑ、無二無三に突き崩し、攻め立てたので言ひ甲斐なく。

軍三　風に木の葉の散る如く、ばら〳〵〳〵と逃げ出し、或ひは自殺或ひは討たれ、最早過半討ち取つたて。（ト是れを聞き○思入あつて、）

○　いや、それはお手柄な事でござりましたな。いやも、本能寺の夜討から思ひがけない戰が始まり此邊まで大騷ぎだ。

△　老人子供は荷物と共に近國の知邊へ送り、今にも家を燒かるゝかと、夜もとつくり寐ませなんだが。

□　羽柴さまのお蔭にて、是れから世界も穩かに、枕を高く寐られませう。

三人　こんな有難いことはない。

軍一 羽柴さまの御仁情を、有難いと思ふなら、百姓どもゝ申合せ、
軍二 竹槍でもこしらへて、落人と見たなら、誰彼なしに突殺し、
軍三 大將でも仕留めれば、一廉の御褒美だぞ。
○ そのお觸を聞きかじり、御覽の通り此村でも竹槍をこしらへて、手柄する氣でござります。
□ 承はれば小栗栖で、大將の光秀を竹槍で突いたとやら、
△ 申す噂でござりますが、ほんの事でござりますかな。
軍一 ほんの事とも〳〵、土民に稀な智慧者にて、今孔明とか渾名に呼ぶ、
軍二 中村長兵衞といふ者が、藪の中から一突きに、突いた手疵で無慙の最期。
軍三 是非なく家來が介錯なし、首級を土中へ埋めたを、又長兵衞が掘出して陣中へ持參なした。
ト丹吾兵衞これを聞き、悔しきこなしにて、
丹吾 さてはいよ〳〵、光秀さまは。
軍兵三人 や。(ト聞き耳立てる。)
丹吾 いやさ、光秀どのは討たれしとか。その長兵衞といふ人は、えらい手柄をしましたな。
○ 定めてしつかり御褒美を、貰ひました事でござりませう。

三人　氣の惡い話しだな。
軍一　そち達も褒美がほしくば、光秀が最期を餘所に、逃げ出したる卑怯者、
軍二　明智左馬之助光俊、何れへ落ちたか行方知れず、雲龍の陣羽織が目印ゆゑに若し見たら。
軍三　おッ取り卷いて突殺せ、褒美はしつかり下さるぞ。（ト丹吾兵衞思入あつて、）
丹吾　すりや、光俊どのには。それが誠の事ならば、言はうやうなき臆病者。
□　弱いものがこつちの附目、
△　早く手柄をしたいものだ。
軍一　いや、暫時休息したので、草臥が拔けたやうだ。
軍二　是れから又々山越しに、
軍三　落人者の詮議なさん。
丹吾　左樣ならば、あなた方は、
三人　もうお出でなされますか。
軍一　最前から世話であつた。
軍二　やがて恩賞、

三人　するであらう。(ト波の音、合方にて、軍兵三人花道へはひる。)

○　さあ是れからわしらも手分けをなし、出口々々へ張番附け、

□　今言つた臆病者の、左馬之助を初めとして、

△　落人どもを突留めて、褒美の金を貰はうかい。

○　丹吾兵衞どの、こなたも一緒に、突留めに行かつしやれ。

丹吾　わしも落人突留めて、褒美の金を貰ひたいが、今日は疝氣がおこり腰をのすことがならぬ、どうでも貧乏神に取附かれ、金儲けがならぬと見える。

□　疝氣とあれば仕方がない、竹槍を置いて行くから、少しもよくば天窓數、

△　褒美の割を進ぜるから、跡から出掛けてござらつしやい。(ト皆々門口へ出る。)

丹吾　隨分手柄をさつしやれだが、死者狂ひの落武者ゆゑ、怪我せぬやうにさつしやれや。

○　そこは案じさつしやるな、强さうな者が來れば、

□　勝手の知れた田圃道、

△　逃げるには負けはせぬ。

丹吾　そんなら皆の衆。

三人　どれ、一手柄して來ようか。

ト波の音、合方、竹法螺にて三人花道へはひる、丹吾兵衞跡を見送り、

丹吾　今軍兵衆の話しでは、いよ〳〵明智光秀さまは小栗栖の藪蔭で果敢なくお果てなされたか、附添ふ者もなかつたか。何にしろ合點の行かぬは、智勇勝れし左馬之助さまが、何で後を見せさつしやつたか、嘘か誠か分明ならぬ、委しい譯を聞きたいものぢやなあ。

ト案じる思入、時の鐘合方になり、上手の屋體より菖蒲の方、好みの鬘、桔梗の紋附の着附、屋敷風のこしらへ、二つになる抱子を抱き出來り、思入あつて、

菖蒲　もし、とゝさま。

丹吾　おゝ、娘か。

菖蒲　今休みし軍兵の話しは誠であらうかいなあ。

丹吾　嘘かまことか分らねど、合戰の場へ出會ひし人達、まんざら嘘でもあるまいかいなう。

菖蒲　すりや、殿様には小栗栖にて。

丹吾　あ、これ。（ト菖蒲の方を留める、時の鐘、誂への合方になり、門口より外を窺ひ、思入あつて）幸ひ誰も他人が居ねば、親とおつしやるには及びませぬが、元お前さまはわしが女房死んだ婆が、乳をあげ

た八瀬の里の郷士の御息女、出入りの醫者が媒介にて明智さまのお屋敷へ御奉公にお出でのところ光秀さまのお手が附き、間もなうお胤を御懷姙、滿つる十月にやす〳〵と御平產なされしは、玉のやうなる御男子ゆゑ、此上もないお手柄にて、菖蒲の方と尊敬され、親御さままで樂々と何御不自由のないお身の上も、盈れば缺くる今度の騷動。

菖蒲　愛宕山の御旅宿より怪我せぬやうに和子を連れ、一先づ我が家へ立歸り、事鎭まるまで忍び居よと殿樣の仰せゆゑ、我が家へ竊に歸りしが、明智さまのお屋敷へ上りし事を近所にて、知つて居るゆゑ世間を憚り、以前の誼にこちへ來て幼い時に里に行た娘の積りでそなたの厄介、早う戰の鎭まるやう、神や佛へお願ひ申せし其甲斐もない今の噂、あれが誠の事ならば、何としたらよからうぞいなあ。

ト菖蒲の方淚を拭ひ、愁ひの思入。

丹吾　そのお悔みはお道理ながら、味方の者なら知らぬこと、敵方の流言に、ないことも有るやうに觸れ歩くのも一つの計略、慥な事は知れませぬ。

菖蒲　內に忍んで居ることも、殿樣を始めとして光俊さまにも御存じなれば、まこと御最期遊ばしたら誰か知らせに來さうなもの。

丹吾　今に誰か其場を切拔け、御注進に參りませう。必ずお案じなさいますな。

菖蒲　是れに附けても味方の內にて、智仁勇備はりし、左馬之助光俊殿が　卑怯未練に後を見せ、何ゆゑ其場を逃げられしか。

丹吾　それは大方計策にて、深き御所存あつての事と、此親仁は存じますが、然しかゝる時節ゆゑ計り難き人心。

菖蒲　もしも誠に我君の、御落命も餘所に見て。

丹吾　命惜しさに落ちしなら、言はうやうなき卑怯者。

菖蒲　一方預かる大將さへ、

丹吾　後を見する世の中なれば、

菖蒲　數にもならぬ軍兵は、

丹吾　逸足出して逃ぐる筈、

蒲菖　あまだある家來の內。

丹吾　殿をする者なきとは。

菖蒲　賴み少ない、

兩人　世の中ぢやなあ。(ト寺鐘にて兩人愁ひの思入。赤子笛になる。)
丹吾　おゝ和子さま、お目が覺めましたか。
菖蒲　泣くのは蟲が知らすのか。おゝ、いんのこ〳〵。
ト抱子をいぶり附ける、波の音、臼挽唄になり、花道より庄屋、ふん込袴庄屋のこしらへにて出來り、つか〳〵と內へはひり、
庄屋　丹吾兵衞どの、內かな。
丹吾　や、庄屋さまか。(トびつくりなす。)
庄屋　何をびつくりさつしやるのだ。
丹吾　さ、思ひがけない、
菖蒲　惡いところへ。
庄屋　なに、惡い所とは。
丹吾　いや、よい所へござらつしやりました。これ娘、お茶でも早く。
菖蒲　あい〳〵。(ト立ちかゝるを、)
庄屋　あゝこれ〳〵、構はつしやるな〳〵、ゆつくりしては居られぬわえ。

丹吾　何の御用で、急な事でござりまするか。

庄屋　さあゆつくりして居られぬ譯は、村の者から聞いたであらうが、明智方の落武者が此村へ來たらば、竹法螺で人數を集め、竹槍で突ッ殺せと羽柴さまから嚴しいお觸、若しも身寄りの者あつて一晩でも泊るが最後、四邊近所のものまでも、きつとお咎め蒙れば、必ず落人を泊めさつしやるな。

丹吾　いやも、お觸がござりませいでも、明智方に身寄りがなければ、匿ふ氣遣ひはござりませぬ。

ト庄屋、菖蒲の方を見て、

庄屋　爰に居る此女中を、今娘と言はつしやつたが、つひぞ見た事がないが、明智方の身寄りではあるまいの。

丹吾　いえ／＼、是れは此親仁が、四十二の二ツ子で藁の上から都へ遣つた、實の娘でござりまする。

庄屋　あゝさうか、村人別にないゆゑに、娘とは知らなんだが、何で内へ歸つたのぢや。

丹吾　さあ山崎の合戰で、女子供はあぶないゆゑ、昨夜内へ逃げて來ました。

庄屋　して、其娘の居た先きは。

丹吾　さあ、その居た先きは。

庄屋　町家か屋敷か。

菖蒲　わたしは屋敷へ。

庄屋　や、先きは屋敷か。

丹吾　いえ〳〵、町家でござりますが、家屋敷のある立派な暮し。

庄屋　して、居たところは。

丹吾　さあ、都の千本通り、西へはひつて三軒目。(ト庄屋思入あつて)

庄屋　それでは明智の。

兩人　えゝ。(トびつくりなす。)

庄屋　いやさ、あき地のある隣りぢやの。

丹吾　慥左樣でござりまする。(ト思入。)

庄屋　わしは度々用事で都へ行けば、どこの隣りは何生業、かしこの隣りは何生業と、軒を竝べる商人家の暖簾の印、紋所まで委しくわしは知つて居る。

丹吾　それは一藝でござりまする。

庄屋　いや、紋所といへば、娘御の着物の紋所は桔梗かな。

菖蒲　はい、左様でござりまする。
庄屋　水色に桔梗の紋。
菖蒲　え。
庄屋　明智の紋と、同じ紋ぢやな。
丹吾　明智の紋は知りませぬが、娘が家は家名が桔梗屋、それで紋に附けまする。
庄屋　さういふ事ならよけれど、同じ紋の桔梗ゆゑ、明智方の落人などゝ、見違へられぬやうにさつしやれ。
丹吾　はい、有難うござりまする。（ト此時竹法螺の音する。）
庄屋　相圖の法螺を吹くからは、落人でも來たと見える、こりや斯うしては居られぬわえ。
丹吾　もうお歸りでござりまするか。
庄屋　おゝ、落人を突留めて、褒美の金を貰はにやならぬ。（ト門口へ出る。）
丹吾　左様ならば、庄屋さま。
庄屋　返すぐも桔梗の紋。（ト目を附ける。）
菖蒲　え。（ト思入。）

庄屋　氣をつけさつしやれや。（ト波の音、竹法螺の音、ばた／＼にて、庄屋早足に花道へはひる。）

丹吾　今の庄屋が、あなたの紋所桔梗へ目を附け、明智さまの若し身寄りではあるまいかと、不審に思つて行つたからは、めつたに油斷はなりませぬ。

菖蒲　人も知つたる紋所ゆゑ、着替へたいにも取急ぎ、着替を持たねば是非もなし。

丹吾　何にいたせ端近では、人の目褄に掛りますれば。

菖蒲　奥に忍んで居ようわいなう。

丹吾　そのうちには味方の衆が、誰か尋ねて參りませう。

菖蒲　さうしたならば殿樣の。

丹吾　御安否も知れませう。（ト赤子笛。）おゝ、おむづがりなされまするか。

菖蒲　どれ、添乳して遣りませう。

ト唄になり、菖蒲の方、抱子を抱き上手障子屋體へはひる。丹吾兵衞は思案の思入。此時花道の揚幕にて、

子役大勢　氣違ひよ、はうさいよ。

ト波の音、臼挽唄になり、花道より長兵衞、石持やつし裝、さん俵を冠り、竹の大小、狐附きのこしら

へ、女房お汐同じくやつし裝、世話女房のこしらへにて、介抱しながら出來り、跡より子供大勢やつし裝にて、竹切れ草鞋など持ち、囃しながら出來る、

長兵　こりや〳〵、入江長兵衞さまのお通りだのに、なぜ子供等下に居らぬ。下に居らう〳〵。

子供　やあ、誰が下に居るものか。

大勢　氣違ひよ〳〵。（ト竹で叩き立てる。）

お汐　あゝこれ、子供衆、氣違ひではない程に、必ず囃して下さんすな。

子役　何で氣違ひでないものが、そんな裝をして歩くものか。

皆々　氣違ひよ〳〵。

お汐　これ〳〵、お前方はよい子ぢや程に、どうぞ構うて下さんすな。

皆々　氣違ひの、阿房やアい。（ト草鞋を打附け、花道へはひる。）

長兵　正一位の位ある、おれに投打ちしをつたな。（ト追ひかけようとするを留め、）

お汐　もう逃げて行つたから、堪忍してやらしやんせいなあ。

長兵　おれが威光に恐れたと見える、弱い奴ではあるわいやい。

お汐　さあ〳〵、お前は強うござんすから、もう歩いて下さんせいなあ。

長兵　おゝ強いか〳〵。（ト肩臂を張つて、）下に居れ〳〵。

ト右の鳴物にて舞臺へ來り、つか〳〵と内へはひり、きよろ〳〵と四邊を見廻す、丹吾兵衞びつくりなし、

丹吾　これ〳〵、此人は案内もせず、土足で人の家へはひり、不作法千萬な人である。

お汐　これは〳〵、御主人さまでござりまするか、御覽の通り少し氣のをかしいものでござりますれば、眞平御免下さりませ。これ、こちの人、ひとさまのお家へ土足ではひり、ちやつと外へ出やしやんせいなあ。（ト手を取り、引出さうとする。）

長兵　いや〳〵、おれは外へ出ぬ、今朝ツから歩いたので、いかう足が草臥れた、爰で休んで行かうわいなう。

お汐　そんなら草履を脱がしやんせいなあ。（ト女房無理に長兵衞の草履を脱がせる。）

長兵　こりや〳〵親仁、頭が高い、下に居らぬか。

丹吾　人の家へ土足ではひり、親仁々々と頭横柄な。いつたいこなたは何者だ。

長兵　何者とは緩怠至極、おれが位は正一位、名は長兵衞といふものだ。

丹吾　成程是れはたゞならぬ、氣がをかしいと見えまする。

お汐　いえも、とんだものに取附かれ、誠に困りきりますわいなあ。
長兵　これ親仁、われが家は汚ないから、新筵を敷いてくれ。
丹吾　なに、新筵を敷いてくれとは。
お汐　あもし、何をお隱し申しませう、此人はわたしの連合でござりますが、此間から狐に附かれ、何を言ふやら他愛なし、定めてお氣にも障りませうが、みんな狐が言はせること、お許しなされて下さりませ。
丹吾　はゝあ、そんなら此人は狐附きか。
お汐　はァい、左樣でござりまするわいなあ。
ト此うち長兵衞よき所へ住ひ、きよろ〳〵して四邊を見ながら、
長兵　これ〳〵おれはまだ飯を喰はぬ、早う飯を喰してくれ、赤の飯に鰶か油揚げを添へて持つて來い。
お汐　これ、爰はお前の家ではない、見ず知らずの人樣の家で、勝手な事を言はしやんすな。
長兵　何の構ふ事があるものか、今におれが日本國の觸頭になつた時は、一廉の禮をして遣るわ、早く赤の飯を喰はせぬか。

丹吾　いや、飯も炊いて進ぜたいが、取込みごとが家内にあれば、外へ行つて喰つて下され。
長兵　いや〳〵外へは行かぬ〳〵。何でも馳走にならねばならぬ、奧の間へ案内しやれ。
丹吾　奧には乳呑みが寐て居れば、通すことはならぬ〳〵。
長兵　何でも奧へ行かねばならぬ。（ト長兵衞奧へ行かうとする、女房引き留めて、）
お汐　これこちの人、如何に狐の業ぢやとて、お近附でもないお家で、口から出任せ言ひたいがい、わたしやお氣の毒でならぬわいなあ。
長兵　いや、氣の毒なことは少しもない、親仁の天窓が藥罐ゆゑ、野干はおれが眷族ども、早う親仁に飯を炊かせい。
お汐　もし狐の業でござりますから、どうぞ御免なされて下さりませ。
丹吾　いやも、狐附きとあるからは、仕方もない事なれど、今もいふ取込みごとが家内にあれば、これお內儀、早う連れていて下され。
お汐　はい畏りました。さあ、もう日も暮れるに間もないから、早う家へ行かうわいなあ。
長兵　いや〳〵おれは行かぬ〳〵、今夜は爰へ泊つて行く。（ト長兵衞ころりと横に寐る。）
お汐　えゝ情ない、お前はなあ。（ト胸づくしを取つて、引起しきつとなる、合方になり、）人さまの家へ來て、

お前の恥を並べ立て言ひたい事はなけれども、不斷からわたしの異見を、空吹く風に聞きなして明けても暮れても山へ行き、獵人同樣獸を撃ち、よしない殺生さしやんすゆゑ、此樣に狐につかれお前はよい氣であらうけれど、さん俵を天窓へ冠りあられぬ姿で往來を、氣違ひ同樣子供に囃され、草履や草鞋を打附けられ、お前は何とも思はねど、附いて歩く女房の身は、どのやうにござんせう、何ぼ正氣でないというて、少しはわたしの心の內を、思ひ遣つて下さんせいなあ。

長兵　えゝやかましい默らぬか、今に日本國の觸頭になるおれが身の上、さうなる時はおぬしも出世、悅んで居るがよい。

お汐　出世せいでも大事ないから、早う家へ歸らしやんせいなあ。（ト手を取つて引立てる。）

長兵　あゝこれ、今行くから、其樣に引つ張つてくれるな。

お汐　わたしやお氣の毒でならぬから、爰の家を出やしやんせいなあ。

長兵　居ろといつても此樣な、汚ない所には居られぬ〳〵。

丹吾　居られぬとは丁度幸ひ、さあ〳〵早く出て行つて下され。

お汐　はい〳〵、連れて參りまする。（ト門口へ出て、）狐附きの事なれば、御免下さりませ、其內お禮に上りますわいなあ。

丹吾　決して禮には及ばぬから、再び來て下さるな。

お汐　畏りましてござりまする。さあ、こちの人、行かしやんせいなあ。

長兵　どつちの方へ行くのぢや。

お汐　家へ行くには一筋道、向うへ行くのでござんすわいなあ。（ト長兵衞向うを見て身顫ひをなし、）

長兵　いや〳〵、向うへは行かぬ〳〵。

お汐　そりやなぜでござんすえ。

長兵　向うに大きな犬が居る、あいつが居ては行かれぬわい。

お汐　どうぞあの犬が來て、狐を落してくれゝばよいが。

長兵　どつこい、落されてなるものか。

ト波の音ドロ〳〵のやうに打ち、長兵衞思入あつて下手の藪の内へはひろ。女房是れを見て、

お汐　犬に恐れて藪へ逃げ込み、困つた人ではあるわいなあ。

ト同じく跡を尋ねる思入にて、藪を押分けはひろ。時の鐘、丹吾兵衞思入あつて、

丹吾　いや、いろ〳〵な奴がうせをつて、今日は思はぬ暇入りした、人は見掛けに寄らぬもの、今來た和郎も見掛けでは、中々狐につかれさうな、足らぬ人とも見えぬけれど、狐に附かれた所を見る

と何處か拔けて居ると見える。何にせい附いて歩く女房がいとしい事ぢやわい。(ト時の鐘。)狐附きで日の暮れたも知らなんだ、今の狐に化されはせぬか、うつかりしては居られぬわい、眉毛を濡らして燈火を附けようか。

ト時の鐘、合方にて、丹吾兵衛唾にて眉毛をぬらし奥へはひる、時の鐘打上げ、床の淨瑠璃になる、

〽入相の三井の晩鐘かう〱と、日も西山へ落武者に、射かける矢走の敵地を切拔け、明智左馬之助光俊は、疲れし駿足いたはりて、草にも心置く露の、光りを便りに傍に佇み。

ト本釣鐘、かすめて波の音、蟲の聲を冠せ、花道より左馬之助光俊好みの鬘、鎧、手甲、臑當、附太刀馬手差し、白地へ墨畫の雲龍の陣羽織、好みのこしらへ、柄の折れし血に染みし手槍を持ち、誂へ通り飾附き鹿毛の馬の手綱を取り、靜々と出來り、四邊へ思入あつて花道よき所に留り、

光俊　昔が今に叛逆の榮えし例あらざるゆゑ、再度諫言いたせしかど、我が詞を用ゐたまはず、内藏之助が勸めに乘じ本能寺へ夜討を仕掛け、一旦の勝利を得、三日たりとも天下を取り、市中へ地主を許せしは末世へ殘す一つの功、されども主君を弑せし天罰のがれがたなく、羽柴が爲に一時に味方敗北なし、既に大將光秀公には小栗栖の藪陰にて、名もなき者の手にかゝり敢なき最期を遂げられしは、是れ順逆の天地の戒め、あゝ愼むべき事ぢやなあ(ト思入あつて、)向うの小屋はそ

の以前、お家の家來丹吾が茅屋、光秀公の側女たる、菖蒲の方もおはするよし、今生の暇乞ひに
門口より、訪れ參るであらう。
〽年經る松を目印に、丹吾が門へ歩み來て、
トやはり右の鳴物にて、光俊舞臺へ來り、門口より内を窺ひ、
頼む〳〵、丹吾は居らぬか。
〽おとなふ聲に納戸を出で。（ト奥より以前の丹吾兵衞、角行燈を提げ出來り、）

丹吾　又狐附きが來はせぬか知らぬ。（ト言ひながら門口へ來り、）案内を乞ふは、誰でござるぞ。
ト光俊門口を明け、

光俊　丹吾、身共ぢや。（ト丹吾兵衞行燈の戸を明け、光俊を見て、）

丹吾　光俊さまでござりまするか。

光俊　こりや、他聞を憚る。ひそかに〳〵。

丹吾　へい、ようお出でなされましたな。

光俊　人目を厭へば此馬を、暫しの間物の小蔭へ。

丹吾　畏りました。木部屋へ繋いでおきませう。

〽丹吾は馬の口を取り、木部屋へこそは引いて行く內外窺ひ光俊は、草鞋をぬいで四邊へ氣配り、樣子聞きつけ一間より、菖蒲の方は立ち出でゝ。

ト丹吾兵衞馬の口を取り、下手藪の脇へ引いてはひる。光俊わらんぢを脫ぎ、外を窺ひ內へはひる、此時障子屋體より、以前の菖蒲の方抱子を抱き出來り、

菖蒲　おゝ左馬之助殿、御別條はござりませぬか。

光俊　これは〳〵菖蒲の方、既にお目にもかゝられぬ所、あやふい場所をやう〳〵と、切拔けて參つてござる。

菖蒲　それは〳〵お怪我もなうて、お目出たうござりまするわいなあ。

光俊　して、若君にはお替りもござりませぬか。

菖蒲　御安泰にござりまする。

光俊　それは何より重疊でござる。

〽話し半へ丹吾は出で。（ト丹吾兵衞下手より出て、外を窺ひはひる。）

丹吾　扨最前から此邊でも、とり〴〵の噂ゆゑ、お案じ申して居りました。

菖蒲　して山崎の戰ひは、味方が勝利でござりましたか。

光俊　されば、初めは勝利なりしが、敵は新手を入替へ〳〵織田家恩顧の大軍に味方は明智一家のみ、それより小勢の上に變心多く、戰ふ度に人數は減り、遂に防戰いたし難く妙心寺へ引揚げしが、主從ちり〴〵に、何れへ落ちしか行方知れず。

菖蒲　それでは人の噂に違はず、味方の負けでござりましたか。

丹吾　して我君、光秀樣には、

兩人　御別條はござりませぬか。

〽問はれて光俊息をつぎ、

光俊　申すも便なき事ながら、光秀公には果敢なくも、小栗栖村にて落命ありしぞ。

兩人　えゝ。(ト兩人びつくりなし、)

〽兩人はツと打ちおどろき、

菖蒲　智勇勝れし我君さまが、如何なされて御最期ありしか。

丹吾　仔細をお聞かせ下さりませ。

光俊　仔細具に申すであらう。

〽あたり憚かり聲潛め、(ト誂への合方になり、)

そも山崎の一戦破れ、妙心寺まで味方を引揚げ、光秀公には坂本へ五百人餘の人數を従へ、

〽夜半の嵐に吹きおとす木の間がくれにたどり行きしが、

軍慮に敏き羽柴秀吉、明智の落人討取らば莫大の恩賞なさんと、近郷へ布告せしゆゑに、慾に迷ふ愚人ども、手に手に槍を携へて、爰かしこに埋伏なし、不意に突いて出るゆゑ、隨ふ者も逃げ散りて小栗栖村へかゝりし折は、主従僅かたゞ六騎、駒を早めて通りしを藪の内に忍び居て、大將目掛けて突き出す竹槍、鎧の間より脇腹突かれ、深手ながらも光秀公、一二町は落行きしが、痛手にたまらず落馬なし遂に其場で果敢ない御最期、是れまでなりと附添ふもの共、指違へて殉死なす、中にも水尾正兵衛が主人の首級を隱さんと山際へ埋めしを、突きたる者が跡を附けその首級を掘出し、羽柴の陣へ持ち行きしと風説に聞き及ぶ、天下を取りしも僅か三日、十日ともたず小栗栖の露と消え行く明智の滅亡、是非もなきことではなきか。

〽無念を忍び物語れば、菖蒲の方は涙にくれ。

ト光俊よろしく思入にて言ふ、菖蒲の方始終涙に暮れし思入にて、

菖蒲　最前から人の噂に聞いては居れど、敵方のもし流言であらうかと、よもや〳〵と思ひしが光俊様のお話しで、誠の事を承はり、夢に夢見るやうぢやわいなあ。

丹吾　是まで數度の戰場に、遂に後れを取りたまはぬ、光秀樣が何故に、かゝる御最期なされしか、殘念なことでござります。

〽口惜し涙にくれにける。（ト兩人よろしく思入、光俊氣を替へ）

光俊　是れといふのも正しき主人、信長公を討ちたまひし天罰、保元平治の昔より叛逆榮えし例なきゆゑ、愛宕山の旅宿にて某お止め申せしかど、齋藤始め四天王諸臣等が勸めにより、本能寺へ夜討を仕掛け、一旦の恥辱は雪ぎしかど、今日の今に至り、家來が埋めし首級まで羽柴方へ取られしは、主を討つたる天の戒め、所詮及ばぬ事ゆゑに、卑怯未練に後を見せ、光俊これまで落延びたり。

菖蒲　流石は明智左馬之助樣、卑怯未練と言はれても命全う落延びたまふは、再び味方の軍勢集め、弔ひ戰を花々しく、なさるお心でござりませうな。

丹吾　そりや申さずとも知れたこと、餘人は知らず明智方で軍師と言はるゝ光俊さま、十人が九人まで其場で討死なすべきを、恥を忍んで落延びたまふは、再び雪ぐ御所存に、こりや相違ござりませぬ。

菖蒲　常々君のお話しにも、我が片腕は光俊なりと、仰せありしは大丈夫な、其お心を御存じゆゑ。

丹吾　武士は斯くこそ有りたきもの、恐れながら丹吾兵衞、感心いたしてござりまする。

ト膝を進めて褒めそやされ、光俊額の汗おし拭ひ、
ト此うち光俊うつむき、じゆつなき思入にて、額の汗を拭ひ、

光俊　あゝこれ〳〵、其樣に言はれては汗顏の至り、敵に後を見せたるは誠の卑怯未練にて、再び軍勢催促なし、弔ひ戰をいたさんなどゝ、左樣な所存かつてなし。光秀公の最期を餘所に、逃げ歸りしは今日限り、最早戰をいたさぬ心。

兩人　何とおつしやる。

光俊　さあ、夜に入つて此家へ來たは、鎧兜を脫捨て下賤匹夫の姿となり、何れの果へか忍び行き、土民となつて一生涯、命全う氣を安く浮世を送る所存ゆゑ、再び義兵の弔ひ戰、聞いてもぞつと身の毛立ち、最早心が土民ゆゑ武士と思うて下さるな。

ト案に相違の、詞に驚く菖蒲の方、丹吾兵衞はあきれ果て、とかう返答もなかりける。

菖蒲　すりや、光俊樣には眞實に、鎧兜を脫捨てゝ、恥を恥とも思はずに、

丹吾　命延はり土民となる、思召しでござりまするか。

光俊　されば討死いたす時は、名は後代へ殘れども、命を捨てねばならぬゆゑ、卑怯未練と言はれても

命を全う生き延はり、此世に居たさに光俊は、恥を恥とも思はぬぞ。

菖蒲　如何に命が惜しいとて、常に替りしそのお詞、

丹吾　そりや御本心でござりまするか。

光俊　他人にあらぬ二人の衆、何僞りを申さうぞ。

〽聞くに得堪へず、菖蒲の方、(ト菖蒲の方きつとなり、)

菖蒲　えゝ情ない、光俊さま。(ト誂への合方になり、) 今更いうて返らねど、常々君の仰せにも一家も多き其中に、光俊位思慮深き智勇勝れし者なしと、御賞美あつて一方ならず力に思召せばこそ、此戰にも坂本の城を預けたまひしは、山崎の戰破れても坂本へ引揚げて、再び戰をなさる御所存、其殿をなすべき身で、今此處より姿を替へ、落延びたまふと言はるゝからは、城中においで遊ばす奥さまや若君さまを、打捨てたまふお心なるか。

光俊　さあ捨てる心はなけれども、坂本まで行く道は、大津より三井寺まで羽柴の同勢充滿なせば、翼あつて天を翔けるか、地中を潛らば知らぬこと、中々以て行きがたし、强ひて行かば討取られ、大事の命を捨てねばならぬ、あゝ恐るべし〳〵。

〽未練の詞に丹吾兵衞、老の一徹にじり寄り、(ト丹吾兵衞きつとなり、光俊に詰寄り、)

丹吾　これ光俊さま、いやさ光俊どの。こなたは戰で血迷うてか、雜兵端武者なら知らぬこと、大將分の身を以て、土民になつて助かりたいとは、くどい事をいふやうだが、そりや本心でござりまするか。

光俊　如何にも、身ども本心なるぞ。

丹吾　おゝ本心でござるなら、言はうやうなき腰拔武士、善にもせよ惡にもせよ一旦與せし上からは、死を共にするが義心、以前はお家の御家來なれど、今は土民の丹吾兵衞、御緣あつて菖蒲の方さまをお匿ひ申せしからは、若しも露顯の其時は、土民ではござりまするが、卑怯未練にこなたのやうに、逃げ隱れはいたしませぬ、潔く諸共に親仁は命を捨てる所存、死なねば義理が立ちませぬ。

光俊　なに、露顯のときは命を捨てゝ、誠にそちは死ぬる心か。

丹吾　今は土民の親仁ながら、以前は武士の丹吾兵衞、命は惜しくござりませぬ。

光俊　すりや左程まで義を思ふか、光俊ほとんと感心いたす。（ト光俊思入にて言ふ。）

丹吾　えゝ、おかつしやりませ。

光俊　然しそれは惡い料簡、生は難く死は易し、生きられるだけ生き延びて、好きな酒でも呑むが德、

汝がいらぬ義理立てする、光秀どのゝ非業の最期は、主を討つたる天の罰、こりや斯うなうてはならぬ筈、それを家來がとも〴〵に、殉死なすとは大きな白癡、はゝゝゝゝ、命知らずのうつけぢやなあ。

〽さみさす詞に菖蒲の方、忍びがたなく抱きたる和子を打捨て、ぐつと詰寄り。

ト菖蒲の方腹の立つ思入にて、抱子を下へ置き、赤子笛、丹吾兵衞かけ寄り抱き上げる、菖蒲の方は光俊に詰寄り、

菖蒲　聞けば聞くほど口惜しい、光秀公をそれ程まで蔑なさるなら、なぜ其時、遮つて止められぬぞ、一旦與なし今更に、主を討つたる天罰ゆゑ、さうなうてはならぬとは、義もなければ信もなし、言はうやうなき臆病者、草葉の蔭で我が君が、嘸ぞ御無念でござりませう。（ト此内抱子泣くな、丹吾兵衞いぶり附け居る、菖蒲の方懷より、紫の袱紗に包みし、水色の卷いたる旗を出し、）その御無念は妾腹ながら、和子がお晴らし申しまするぞ。

〽和子を小脇にかき抱き、隱し持ちたる水色に桔梗の旗にて光俊が、肩をはッしと打ちければ、

ト菖蒲の方泣き居る抱子を引取り、光俊に詰寄り旗にて光俊を打つ、光俊ちつと思入あつて俯向く、丹

吾兵衛手を打つて、

丹吾　ほゝう、若さまお出來しなされました、蛇は寸にしてその氣ありと、卑怯未練の光俊どのを、よく御折檻なされました、やがて桔梗のその御旗翻へすのは此若さま、生きて居つたら此親仁、お馬の口でも取りませう。

菖蒲　その翻へす御旗にて、打ちしは則ち君の折檻。

丹吾　これでも卑怯に逃げ隱れ、弔ひ戰はさつしやりませぬか。

光俊　臆病未練な光俊ゆゑ、明智の家が滅亡なすとも、弔ひ戰はいたさぬ所存、打つて腹が癒ることなら、サ、サ、存分に打たつしやれ。

菖蒲　臆病神に取附かれしか、言ひ甲斐のない事ぢやなあ。

〽男勝りに張詰めし、心も流石女子ゆゑ、涙先立ち泣伏す折柄、藪蔭押分け以前の男、きよろつく眼に四邊を窺ひ、有合ふ竹槍ひツしごき。

ト此所菖蒲の方丹吾兵衛よろしく思入、時の鐘、ばつたりと音して、下手の藪を押分け、以前の長兵衛半身出して內の樣子を窺ひ居て、よき程につか〳〵と出て、門口にある以前の竹槍を取り扱いて、

長兵　卑怯者、覺悟せよ。

〽無二無三に突つ掛れば、光俊ひらりと身を躱し、陣扇取つて竹槍を、ちやうと押へて動かせず。

ト長兵衛光俊へ突きかゝる、光俊身を躱して、陣扇にて竹槍を押へ附け、

光俊　やあ、何奴なれば此の狼藉。

長兵　明智に與せし者共は、軍兵たりとも討取れと、羽柴さまよりお觸ゆゑ、おのれを殺して褒美にするのだ。

光俊　いや、小癪なる其一言、臆病未練の光俊なれど、土民共の手に合はうか。

長兵　何を小癪な。

〽押へし竹槍引くよと見えしが、胸許目掛けて繰出すを、右へ開いて左りへ拂ひ、負けず劣らぬ兩人が、手練のほどは臆病とも、狐附きとも見えざりけり。

ト文句の通り、長兵衛突いてかゝるを、光俊陣扇にて扱ふ、大小の鳴物になり、立廻りよろしく、菖蒲の方丹吾兵衛は、兩人に目を附け心得ぬ思入、

〽暫らく挑み爭ひしが、竹槍からりと捲き落され、はずみにどうと伏し轉ぶを、起しも立てずぐつと引附け。

ト光俊竹槍を陣扇で卷き落す、是れにて長兵衞どうとなる、光俊引附け、

光俊　さあ、われを突いて手柄にせよ。

長兵　あゝこれ／＼、許して下され／＼。おりや人間ぢやあない、狐でござる。

光俊　やゝ、何と。

〽ためらふ折柄小蔭より、女房とつかは走り出で、（トばた／＼になり、藪の蔭よりお汐出來り、）

お汐　あゝもし／＼、其人はわしの夫、狐附きでござりますから、お許しなされて下さりませいな。

光俊　なに、此者は狐附きとな。

〽襟上とつて引き起し、火影に顏を打見やり、

ト光俊冠りしさん俵を取り、長兵衞を引き起して顏を見て、

や、こなたは入江長兵衞ならずや。

長兵　え。（トぎつくり思入、女房見て、）

お汐　おゝ、あなたは明智左馬之助さま。（ト長兵衞狐附きの思入にて、）

長兵　はあゝ、左馬之助とは誰の事だ。

光俊　これ、以前は同じ在所にて、人と成りし左馬之助、長兵衞そちは見忘れしか。

長兵　おりや、そんな人は見知らぬ〳〵。

丹吾　扨はこの狐附きは、光俊さまと同じ國。

菖蒲　丹波の者でありしとか。

光俊　一ッ所で育つたる、竹馬の友の光俊を、見忘れしとは、如何なるぞ。

お汐　此間より狐につかれ、何辨へもないこちの人、覺えぬ筈でござりまする。

光俊　むゝ、狐附きゆゑ存ぜぬとか。

長兵　おゝさつぱりと忘れたが、今夜は伏見の稲荷の森へ、嫁入りがある筈ぢや。どれ、悦びに行て來ようか。

〽さん俵を打ち冠り、行かんとせしを。

光俊　狐附き、待て。

長兵　何と。

光俊　あの、こゝな僞り者めが。

〽襟上取つて、ぐつと引附け、

お汐　あゝもし、何で夫を僞りものとは。

光俊　さいふ汝も一ツ穴。

お汐　え。

光俊　狐の附きしといふは僞り、深き所存のある事は、左馬之助が見拔いたり。

長兵　や。（トぎつくり思入。）

光俊　長兵衞汝は先達て、羽柴方へ仕官せしと故あつて慥に聞く、察する所計略にて狐附きと姿を替へ、濫に人家へ入込むは、明智の落人詮議の爲の、こしらへ事であらうがな。

長兵　むゝ。（ト思入。）

お汐　いえ／＼嘘ではござりませぬ、山狩り好きのこちの人、年經る狐を殺したる、其報いにて附いたる狐、こしらへ事とおつしやるは、お目違ひでござりまする。

光俊　いゝや違はぬ、目違ひならず。

丹吾　入らぬ事の口出しながら、こしらへ事と仰しやるには、何を證據に見極められしぞ。

光俊　ほゝう、此光俊が見極めしは例ある事、惣じて狐の附きしもの眼中どよみて語音狂ひ、自と陰の調子になるに、眼中語音に替りなく陽の調子は誠の人間、狐附きにあらざること、一目見て見拔いたり。人は知らず左馬之助、汝等ごときに誑かされうか。

長兵　いや〳〵おれは狐附き、眞人間ではござらぬ〳〵。（ト狐の思入、光俊うなづき、）

光俊　むゝ、誠それに相違なくば、舊友の誼左馬之助が、立所に落してくれん。

長兵　すりや、我に附きし古狐を。

光俊　言ふにや及ぶ。

〽いふより早く拔き放す、刃に驚く女房が、胸許取つて差附くれば。

ト光俊太刀を拔き放す、女房は長兵衞を切ると心得びつくりなし支へるを、光俊直に胸許を取り太刀を差附ける。

お汐　こりや、何となされまする。

光俊　こりや長兵衞、汝本心を明さずば、此妻を刺し殺すぞよ。

長兵　あゝこれ、早まつたことさつしやるな。

光俊　汝が妻の親といふは、丹波の國に隱れなき槍術の指南を受けし、恩ある師匠の此の娘、刺し殺されても構はぬか。

長兵　さあ、それは。

光俊　狐附きは僞りか。

長兵　さあ、
光俊　本心を打明すか。
長兵　さあ、
光俊　さあ、
兩人　さあ〳〵。
光俊　長兵衞返事は如何なるぞ。
〽せり詰められて是非なくも。（ト長兵衞切なき思入にて）
長兵　女房が命お助け下され、只今本心明かし申さん。
〽言ふにこなたも猶豫なせば。（ト光俊お汐を放し、刀を下へ置く、長兵衞思入あつて）
今は何をか包み申さん、狐附きといふは僞り、造り事でござりまする。
菖蒲　すりや、光俊どのゝ詞の如く。
丹吾　僞りものであつたるか。
長兵　かゝる所行をなしたるも、羽柴方の御内なる堀久太郎が家來なれど、元より愚鈍な某ゆゑ主人にも用ゐられず、何卒一つの功を立て、立身なさんと思ふ折柄。

〽明智方の勇士たる、左馬之助光俊を、討取つたる其者には。
一萬石與へんと、主人が詞に飛び立つほど、手柄がし度く思へども、舊友たる光俊どの討たれぬ義理も慾に迷ひ、

〽狐附きと姿を替へ、夫婦諸共爰かしこ、百姓家へ入込みしも。
貴殿の行方を尋ぬる計略、人並ならぬ長兵衛が三本足らぬ猿智慧も、丹吾兵衛が此家にて見顯はされしは舊友の信義を捨てし天罰なり。斯くいふ上は命は惜しまぬ、女房を助けて長兵衛が此首取つて下されい。

〽どつかと坐して首差延べ、命を捨つる覺悟の體。

と長兵衛光俊の前へ住ひ、首差し延べ覺悟の思入、光俊これを見て、

光俊　おゝ舊友の誼を忘れ、我を狙ふ憎き長兵衛、不便ながらも助けおかぬぞ。

〽刀を目先きへ差出せば、(ト光俊長兵衛の前へ刀を突出す。)

長兵　首討たれるは覺悟の前、時刻を延ばさず討つて下され。

光俊　いふにや及ぶ。

〽女房あわて走り寄り、

お汐　あゝ申し、討たで叶はぬ事ならば、わたしを殺して長兵衛どのを、どうぞ助けて下さりませ。

ト首を突き附ける。

長兵　えゝ、そちが知つたる事ではない、おれが死なねば義理が立たぬ。

お汐　お前を殺して女房の身で、をめ〳〵生きて居られませうか、何でもわたしが死なねばならぬ。

長兵　いや〳〵、おれが死なねばならぬ。

お汐　いえ〳〵わたしが。

長兵　此の首討つて下されい。

ト此内長兵衛を掻き退け、女房體を差附ける、又長兵衛女房を突きのけ首を差延べる、此争ひよろしく、光俊兩人によろしく目を附け、思入あつて太刀を鞘へ納め、

〽命惜しまぬ夫婦が心底、光俊とつくと打見やり、持ちたる刀を鞘に納め、

光俊　兩人ともに爭ひ無用。

兩人　え。

光俊　先非を悔んで命を捨つる、二心なき兩人が、誠は面へ顯はれたり。

長兵　すりや、兩人が先非を悔いし、

お汐　心の誠が知れましたとか。
光俊　ほゝ、凡眼なれど光俊が二心なきは見拔いたり、いかなる大罪犯すとも改むるに憚る事なし、それに附き長兵衛どの、武士は思ひ止まられよ、今戰國の世の中に中々以て非力にて、立身出世は難きこと、仕官の望みは某に今討たれたと思ひ止まり、生れ替つて今日より、大小捨て土民となり、命全う過ぐされよ。
〽言ひつゝ腰にたくはへし、袱紗包みの金取出し。
ト光俊腰に卷きし袋より、錦の袱紗に包みし金を取出し、
此金子は某が軍用に所持せしが、今其許へ舊友の誼にこれを進上申す、些少ながら此金子で、其身のすぎはひ計られよ。
〽差出せば、はツとひれ伏し、(ト光俊袱紗包みの金を出す、兩人ひれ伏し、)
長兵　はゝ有難きその御異見、所詮手柄のならざる某、今より武士を思ひ止まり、土民となつて夫婦とも、氣樂に暮すでござりませう。
お汐　命の親の光俊さま．いつかは今日の御高恩、お送り申すでござりませう。
長兵　さるにても此金子、お志しは頂戴いたすが、山崎の戰破れ、貴殿も是れより何れへか、落行か

れるに金子なくては、定めて御不自由、是れは返上いたしまする。

ト長兵衛金包みを、光俊の前へさし戻す。

光俊　いや其軍用も今日限り、明日は此世に、いやさ、此身に不用の其の金子、斟酌せずと受けて下されゝ。

ト又差出す。

長兵　左程まで言はるゝ親切、無にいたすも本意ならず。

お汐　お志しの此金子。

兩人　頂戴いたすでござりまする。

〽夫婦諸共押し戴く、こなたは始終を聞き居る丹吾。

ト長兵衛女房金包みをいたゞく、此以前より菖蒲の方、丹吾兵衛は顔見合せ、合點の行かぬ思入。

丹吾　合點の行かぬは光俊さま、軍用金も今日限り、明日は此世と言ひかけて、跡おつしやらぬは仔細ぞあらん、如何なる事でござりまする。

〽詰り掛くれば、打ちうなづき。（ト丹吾前へ出る、光俊思入あって、）

光俊　その不審尤も至極、明日は此世と言ひかけしは、是れより一先づ坂本の城中へ引返し、明日は敵

を引受けて、討死いたす所存なるわ。

丹吾
菖蒲　ゑゝ。(ト皆々おどろく。)

光俊　さればこそ、今日限り、軍用金も不用なり。

菖蒲　さては卑怯に此場をのがれ、土民になると言はれしは。

光俊　狐に等しく某も、土民になると言ひしは僞り。

丹吾　すりや、何の爲に。

光俊　さ、心にもなき光俊が僞り言ひしは外ならず、菖蒲の方は女のこと、こなたの心を探らん爲め。

丹吾　なに、わしが心を探らんとは。

光俊　大丈夫の心を見た上、預けたき品あつて。

菖蒲　丹吾を始め此身を試し、預けようとおつしやるは。

丹吾　如何なる品で、

兩人　ござりまする。

光俊　預け申すは、御家の系圖。

兩人　ゑゝ、何とおつしやる。(ト誂への合方。)

光俊　そも〳〵今度の合戰は主を殺せし明智光秀、天の罰を蒙らば勝利は思ひ寄らざるゆゑ、大將始め我々まで討死なすは元より覺悟、命はさら〳〵惜しまねど、卑怯未練に後を見せ逃げ延びしは此系圖敵に渡すが口惜しく、此家まで逃げ延びたは菖蒲の方が守り申す、若君に渡さん爲め、大切の品なるゆゑ必ず人手に渡さぬやう、守護を賴むは丹吾兵衞、それゆゑ心を探りしぞ。いざ、お受取り下さりませ。

〽系圖の一卷恭しく、扇に載せて差出せば、菖蒲の方は取りあげたまひ、

ト光俊鎧の間より、錦の袱紗に包みし、系圖の一卷を出し、陣扇へ載せ出す、菖蒲の方取上げ押戴き、

菖蒲　かねて話しに聞きたるが、そんなら是れがお家の系圖とな。

光俊　慥に御落手下さりませ。

菖蒲　命に替てもお家の系圖、しかと預かりましたわいなあ。

光俊　是れにて安堵いたしたり。

〽うちくつろげば丹吾兵衞。

丹吾　えゝ恨めしい光俊さま、數ならぬ土民、心替りもあらうかと疑うての僞り事か。

〽口惜しうござりまする。

今は賤しき漁師なれど、元は明智の内家來にて、御恩を受けし丹吾兵衛、二心がござりませうか、斯ういふ事と知らぬゆゑ。

〽明智方の軍師とも、言はるゝ御身の光俊さま。此期に及び後を見せ、命惜しさに土民となり、世を送らんとは言ひ甲斐なき、臆病武士と思うたゆゑ、老の一徹今の惡口、面目次第もござりませぬ、眞平御免なされて下さりませ。

〽御ゆるされてと手を突けば、菖蒲の方も共々に。

ト丹吾兵衛手を突き詫る思入、菖蒲の方もこなしあつて、

菖蒲　そりや我が身とても同じこと、頼みに思ふ光俊さまが、心替りに氣も顚倒、女心の淺はかに御家の旗で打擲せしは、此身のあやまり、許して下され、光俊どの。

〽許してたべと諸共に、涙ながらに詫びければ、

光俊　いや〳〵、其お詫びには及ばぬこと、我を卑怯と蔑なして、御旗を以て打たれしは女に稀な大丈夫と、打たれながら光俊は、嬉し涙をこぼしてござる、たゞ此上は忍び果せ。

〽その若君を守り育て、お家の系圖を大切に、明智の家名絶えざるやう。菖蒲の方は申すに及ばず、丹吾兵衛も力を添へ、よしなに跡を計らひくれよ。

丹吾 はゝあ、お頼みなくとも此親仁、十ツ百年も生き延びて、此若さまを大將に、再び義兵の旗揚げなさん。

光俊 其の志は忝けないが、時到らねば及ばぬこと。

〽言ひつゝ傍の陣羽織、手に取り上げて畫面を見せ。

ト光俊傍にある陣羽織を取つて、背の龍を見せ、

此陣羽織に畫きしは狩野永徳が墨畫の龍、まツこの如く雲を得て、昇天いたす時到らねば及ばぬ事ゆゑ地中に潛み、御養育をいたしてくりやれ。

〽龍によそへて光俊が、諭すは天晴智仁の勇士、長兵衛夫婦は感じ入り、

長兵 これ女房聞いたか、感に絶えたる光俊さま、我れ〳〵如きが及ばぬ事、お貰ひ申せしこの金にて、命全う士民となり、御異見守るでござりませう。

お汐 御恩送りに明日からは、若さまや菖蒲さまの、お宮仕へをいたしませう。

光俊 丹吾とても老人ゆゑ、力を添へて下されい。

〽皆々安堵の其折柄、物騒がしき人聲に、すは變ありと人々が、氣遣ふ所へ手負ひの若武者、敵の追手と切合ひ打合ひ、眞一文字に馳せ來り。

トドンチャンばた〳〵になり、舞臺の皆々氣遣ふ思入、花道より半次郎綛の切れし鎧、諸所に矢の立ちし陣立、手負のこしらへ、幕明の軍兵二を相手に拔身にて立廻りながら出て來る、花道にてちよつと立廻り、舞臺へ來り、切倒し、どうとなつて、

半次 御注進々々〳〵。

〽呼はる聲に、光俊立出で、（ト光俊つか〳〵と半次郎の側へ來り、）

光俊 森半次郎か。

半次 御主君さまか。

〽心ゆるんで悶絶なせば。（ト半次郎悶絶する。）

長兵 や、こりや氣を失はれしか。

お汐 水を一口上げようかいなあ。

長兵 いや〳〵、手負に水は禁物だ。（ト長兵衛介抱なす。光俊側へ寄り、）

光俊 數ヶ所の手疵に氣を失ひしか。（ト半次郎の耳に口を寄せ、）こりや半次郎、敵の追手が來りしぞ、追返して殿いたせ。

〽言ふ聲耳に入つたるか、はツと息吹き返し。

ト光俊きつといふ、半次郎息を吹き返しきつとなる、光俊側へ進み、

して〳〵、戰の樣子は如何に。

半次　はツ、君の殿いたさんと。

〽娑婆と冥土の別れ道、大津八町札の辻、松の並木を小楯に取り、僅か七騎で必死の働き。

敵は名に負ふ堀秀政、烈しき下知に先手の雜兵。

〽比叡颪に叢雲を散らすが如くむら〳〵と、射かける矢先は雨霰、透間なけれど死もの狂ひ、多勢の中へ切込めば、右往左往に崩れ立つ、これ幸ひと薙ぎ立て切拔け祕術を盡し、勝に乘じて追ひまくれば、磯の鷗の追立つ如く、羽風に均しくばら〳〵〳〵、湖水をさして逃げ散つたり。

ト此内軍兵と立廻りよろしくあつて、

左れども多勢の羽柴方、追々跡より繰込めば、最早殿いたし難く、君には是れより坂本の城へ御入りあつて然るべし。

〽流るゝ血汐にのんどを潤し、深手に屈せぬ剛氣の若者。

ト半次郎矢をぬき、血汐を甜め、息の切れし思入。

光俊　ほゝ、出來したり〳〵、汝等が働きにて、暫く爰に足を止め、我が宿望を晴らしたり。

半次　左樣ござらば某は、又々是れより引返し、討死いたすでござります。
光俊　すりや、其方は引ッ返すとか。
長兵　然し數ケ所の其の手疵。
丹吾　敵に向はゞ忽ちに。
半次　死するは覺悟の半次郎、最早これが今生の。
光俊　來世で逢ふぞよ。
半次　はッ。（ト奚へ軍兵の二出て）
二　覺悟。（ト切つてかゝる。）

〽打つて掛るを身を躱し、右と左へ切つて捨て、よろほひ〳〵ゆゝしくも戰場さして。

ト半次郎ちよつと立廻りあつて、二を見事に切り倒し、よろ〳〵と花道へ行き、刀を杖にきつと見得、ドンチヤンばた〳〵にて、よろしく花道へはひる。

光俊　最早追々羽柴勢、此邊までも繰込まん、敵の來らぬ其內に、我もお暇いたすでござらう。
菖浦　お名殘り惜しうござりますれど、お止め申す事ならぬ、右も左りも敵の中。
丹吾　殊に褒美の金が欲しさに、百姓どもが一致なし。

長兵　手に〳〵竹槍携へて、落人詮議とこゝかしこ。

お汐　徘徊なせば油斷ならず。

光俊　いや〳〵、長居いたせば人目にかゝり、此家へ難儀の掛るは必定、片時も早く坂本の城中へ立返り、かねて覺悟の事ながら君の奥方皐月どの、宗閑どのにも討死なす手筈を今宵諜し合せ、まつた殘りの城兵には軍用の金子を與へ、裏手より竊に落し、心靜かに名殘りを惜しみ、豫て城内に祕め置きし、織田家より傳來の和漢無双の種々の珍器、われ〳〵の屍諸共天下の寶を火中なすは、誠に無益の至りゆゑ、明日敵勢押來らば大將に對面なし、目錄を以て右の珍器を敵方へ渡せし上一戰に及び、潔く切腹なして城中へ、一時に火を掛け、一門殘らず討死いたす所存ゆゑ、比良ヶ嶽の方に當り、火の手揚らば奥方はじめ、我々どもが討死と御推量下されい。

〽義を立て通す光俊が、詞に人々感心なし。

菖蒲　はッ、敵へ寶を送るとは、世にも稀なる光俊どの。

丹吾　和漢無双の珍器より、天下無双の勇士をば。

長兵　討死さするは、殘念至極。

お汐　止むる仕様はないことか。

〽智勇を惜しむ人々が、悔み歎くぞ道理なる。（ト皆々愁ひの思入、此時揚幕にて遠寄せになる。）

〽折からひゞく鐘太鼓。

丹吾　やゝ、湖水へ響く鐘太鼓は、

菖蒲　正しく寄せ來る羽柴勢。

女房　然し間はある樣子。

長兵　何れまで押寄せしか、松の上より遠見なさん。

〽言ふより早く門口の、古木の松に攀登り、向うをきつと見渡して、

ト長兵衞尻端折り、肌脫ぎにて門口の登り木の松へ上り、向うを見て、

天に映ずる篝の光りに、寄せ來る敵を見渡せば、遠くは日の岡逢坂山。

〽近くは松本四の宮邊、桐の薹の旗飜へし。

雲霞の如く羽柴の大軍、むゝ。

〽言ふより早く、ひらりと飛び下り。（ト長兵衞松の枝より飛び下り、）

御油斷あるな、光俊どの。

〽言へば莞爾と打ち笑みて、

光俊　假令數萬の大軍で、取り圍むとも一方を切り開かんは手裏にあり。
丹吾　いや、仰せではござれども、よしや一方切り拔けても、
菖蒲　落行く先きは琵琶の海、
長兵　船の通路を留めたれば、
お汐　坂本までは行きがたし、
丹吾　其間に敵勢押し來らば、
長兵　いかゞいたして、
三人　落ちたまふぞ。
光俊　おゝ其時は石場より湖水へ乘込み、唐崎の松を目當に乘越えん。
丹吾　いや〳〵それは及ばぬ事、昔が今に此の湖水を、馬にて越えたる例を聞かず。
菖蒲　渡海なすべき船でさへ、風の烈しき其時は、
お汐　矢走の渡しも留まるとやら。
長兵　然し馬上で越えるといふには、定めて覺えの、
皆々　ある事ならん。

〽いふに光俊進み出で。(ト光俊陣扇を持つて進み出て、)

光俊　事新らしく申さずとも、誰も知つたる事ながら、

〽抑々近江の湖は、支那天竺はいざ知らず、扶桑一の湖水にして、
琵琶の形に似たるゆゑ、琵琶の海とも呼びなせり、夫の瀟湘の八景を、山川の地名にたくらべ、
〽詩に列ね歌に詠み、その風景を賞すれど、
それは文をば好むゆゑ、
〽われは武道を好むゆゑ、仰げば高き三井寺の、かねて湖水の淺深計り、
粟津の浦の船ならで、馬上で越すは石山の、いとかたき事なれど、
〽瀬田の長橋打ち渡り、陸路を行けば弓と弦。
つがふ矢走や打出の濱、
〽的は唐崎一ツ松、堅田に雁のむれる日は、波穩かに越え易く、
比良の高嶺の山おろし、烈しき折には波高く、
〽風に追はれてたぢ／＼／＼、ぱッと立つたる水をくゞり。
淺き所は馬に乘り、深き所は馬よりおり、手綱を取つて拔手を切り、

〽浮きつ沈みつ共に泳ぎ、馬を助けて行く時は、陸路を行くに異ならず、是れより一方切拔けて湖水へ乘込み向うへ渡り、追來る敵に左馬之助が馬術の程を見物させん。

〽馬術勝れし光俊が、湖水を渡る物語り、聞く人々は安堵なし、

ト此内始終物語り模樣、光俊陣扇を遣ひ、よろしくあつて、

丹吾　扨は是れまで馬上にて、湖水の淺瀨を測られしか。

長兵　深淺を御存じある上は、水の深みも氣遣ひなし。

菖蒲　是れより湖水を渡りたまはゞ、嘸や追手の敵方も、

お汐　類ひ稀なる御修行に、感心なすでござりませう。(ト此時ドン〳〵ヤン烈しくなる。)

光俊　追々近附く貝鐘太鼓、此家に敵の來らぬうち。(ト光俊陣羽織を着る。)

菖蒲　すりや、光俊どのには、

お汐　最早是れより、

光俊　湖水を越して城中へ、

丹吾　お歸りあれば、最う是れぎり、

長兵　明日討死と極まれば、
菖蒲　これが此世の、
皆々　お別れなるか（ト皆々名殘りを惜しむ思入）
光俊　隨分ともに、御機嫌よろしう。
〽惜しむ名殘りの涙を拭ひ、
丹吾乘馬を。
丹吾　畏りました。
〽いふより早く木部屋より、引出す馬の手綱をさばき、ひらりと打乘る其ところへ。
ト此内丹吾兵衞下手より以前の馬を引出す、光俊手綱さばきして、ひらりと飛び乘る、爰へ軍兵の二出
て、
二　落人見附けた。
〽切込む雜兵、長兵衞襟上取つてぐつと引附け、
長兵　こゝ構はずと、
皆々　片時も早う。

光俊　何れもさらば。

〽別れを告げて光俊は、坂本さして。

ト光俊花道へ行き振返る、菖蒲の方抱子を抱き立身にて見送る、長兵衞二と立廻つて引附ける、丹吾兵衞は門口にて見送る、皆々名殘り惜しき思入よろしく、三重ドンチヤンにて、

幕

ト幕外、光俊涙を拭ひ氣を替へて一鞭當てる、是れにて馬躍りあがり、ドンチヤン、カケリにて、勢ひ込んで逸散に花道の揚幕へはひる。跡波の音にてつなぎ、引返す。

（湖邊軍兵屯の場）――本舞臺一面の波幕、爰に一、二、三、四、五、六の軍兵六人立かゝり居る、波の音にて幕明く。

軍一　何といづれも見さつしやつたか、羽柴勢のわれ〳〵に、追ひ詰められて逃げ場に困り、

軍二　深さの知れぬ湖水へ乘込み、跡へも先きへも行き難き、明智左馬之助光俊とやら、

軍三　水に溺れて馬もろとも、土左衞門と改名なし、今に死ぬるは案の定、

軍四　それより敵と戰つて、潔く討死なさば、後世までも名を殘さんに、

軍五　卑怯未練に逃げ出し、湖水へ馬で乘込むとは、命知らずのたはけもの、
軍六　あれ〳〵、餘程行きは行きをつたが、馬も水に弱つた樣子、もうくたばるに間もあるまい。
軍一　水に溺れて苦しむざまを、
軍二　濱邊へ行つて見物なさん。
軍一　何れもござれ。
五人　合點だ。(ト波の音にて、六人上手へはひる、よき程に知せに附き波幕を切つて落す。)

(湖水乘切の場)――本舞臺眞中に誂への松の大樹、左右に枝さし出て、枝受けの丸太、所々に立て、上手に一間極綺麗な朱塗りの宮をこしらへ、日覆より松の釣枝、後比叡山坂本を見たる遠見、舞臺前雨落ちより、打寄せの波手摺、花道切落し兩側波手摺、一面に波布を張り、兩棧敷向う正面水引打返し、近江八景の書割、所々に旗差物を見せ、此道具誂への通りよろしく、波の音、千鳥笛にて道具納まる。と波の音を打上げ、謠曲掛りの淨瑠璃になる、

〽名にしおふみの琵琶の海、四ツの緒合す八ツの景
〽あかぬ眺めの風色も、修羅の街となる鐘は、三井寺ならぬ陣鐘に、合す太鼓を打出の濱。

トドンチヤン入り、

〽夜の目も粟津膳所をかけ、我唐崎と羽柴の討手、弓と矢走に押寄する、敵を切拔け落延びし、明智左馬之助光俊は、（ト大小入り、）

〽逆卷く水の湖水へ乘入り、瀨田石山を跡になし、渡るにかたき堅田浦、比良の高嶺を吹きおろす、烈しき風にたまらばこそ、一ッ拂へば最うわづか、二町にたらず三度まで、浪に追はれて吹き返され、心はやれど馬蹄は利かず。

是れへ波の音、大小をかすめて、遠寄せを冠せ、よき程に花道の揚幕より、前幕の光俊、馬に乘り湖水を乘つ切る思入にて出來り、始終花道の方より水の花を散らし、よき所にて風の音烈しく、鳴物も早めて、光俊向うへ行かうとしては、風に吹き戻される振よろしく二三度あつて、きつとなり、

光俊　ちえゝ殘念や僅かにて、烈しき風に支へられ、目當となせし唐崎まで乘附くことのかなはぬか、此儘湖水の水屑とならば、末代までの明智の恥辱、救はせたまへや弓矢神、救はせたまへや弓矢神、傳へ聞く劉玄德は的盧を以て檀溪を越す、汝大鹿毛我を助けよ、えゝおゝ〳〵。

〽心に念じ光俊が今一息とあふり立て、風に向つて乘切れば四方へ飛び散る水煙り、中は白地の陣羽織、名に負ふ狩野の永德が筆を揮ひし墨畫の龍、時得て天に昇るが如く、竝居る敵

も聲を揚げ、感ぜぬ者こそなかりける。

ト此内風に向つて、乗切る思入よろしく、水の花おびたゞしく散し、文句の切れまでに舞臺へ來る。

〽正八幡の加護なるや、安々岸へ乗附けて、一息ほつと息をつき、馬柄杓を取つて咽喉を潤し馬にも飲ませ跡見やり。

ト光俊舞臺へ上り一息つき、腰に差したる馬柄杓を取つて水を呑み、馬の口へかけて遣ることよろしくあつて、文句の切より床二挺の合方、かすめて波の音、千鳥笛を冠せ、光俊向うを見て、

雲霞の如き大軍も琵琶湖の深淺知らざるか、誰一人乗り入つて、我を追ひ來る者なきは、水練うとき族と見える、嘸大鹿毛も疲れしならん、われも是れにて一息吐かん。

〽かたへの石に腰打ちかけ、腰なる矢立取り出し、香包の疊紙を出し、

〽六字の文を書き記し、手早く髪に結び附け。

以此馬渡湖水、名大鹿毛。

ト光俊腰より扇形の矢立を出し、鎧の間より香包の疊紙を出し、右の六字を書き、馬の髪へ結び附け思入あつて、馬の頭を撫でながら、

〽光俊馬に打向ひ、

これ大鹿毛、今光俊が申す事、心あらばよう聞けよ。(ト床二挺の合方、竹笛入りになり、)世にも稀なる駿足ゆゑ、一方ならず祕藏なし、今日まで飼ひおきしが、只今暇を遣はすぞ、何故と思ふであらうが、又々是れより城中へ伴ひ行けば、明日は敵を引受け汝にも、討死をさせねばならぬ、かかる名馬をやみ／＼と、殺すは無益のことなるゆゑ、此松へ繫ぎ置く、敵勢來りて分捕りなし、連れ行かば伴はれ、何れへなりとも主取りなし、命を全う長生きいたせ。

〽思へば數度の戰場に、汝の蔭にて幾度か、あやふきをのがれしが、中にも今宵の此の大難。假令湖水の深淺を、心得たりとも乘越すべき、駿足なければ越し難し、此の命を助かりしは偏に汝が蔭なるぞ、忘れはおかぬ忝けないぞよ。

〽忝けないぞと撫でさすれば、頭をうなだれ悄々と、落淚なせば光俊も、不便のものやと諸共に、浮む淚を押拭ひ、

ト光俊馬の頭をさする、是れにて馬愁ひの思入よろしく、光俊これを見て不便なといふ思入、淚を拭ひ、

今某が申せしこと、性あつて辨へしか、頭をうなだれ淚を流すは、汝も我に名殘り惜しいか、我も汝に名殘り惜しいぞ。(ト馬うつ向きゐる。)思へば不便な事ぢやなあ。

〽名殘りを惜しむ其の折柄。

ト光俊馬を攫へ愁ひの思入、此時下座にて竹法螺を吹く、光俊きつとなつて、

次第に間近く聞ゆる法螺の音、陸を廻りし羽柴勢、早や押寄すると覺えたり。味方へ知らせの、合圖の狼煙。

ト鐙の間より玉を出し、舞臺へ打ち附ける、ドンと本鐵砲の音して、掛け煙硝ぱつと立つ、是れと一緒に遠寄せを打込む、此の音に馬おどろき刎ね上るを、光俊轡面を取り、遠寄せを聞いて、

はて、心地よき、(ト岩臺へ踏みかけ馬の頭を差上げる、此の時、銀張りの千鳥を大分に引きあげる。)手つがひぢやなあ。

〽勇み進んで

ト光俊伸上りて花道揚幕の方をきつと見込む。三重、カケリ、波の音、千鳥笛にてよろしく、

幕

左馬之助湖水の乘切(終り)

（附錄）主なる興行年表

野晒悟助

年時	座名	名題	悟助	戸平	南無右衛門	仁三	詫助	おしづ	小田井	香晒
慶應元年一月	市村座	鶴千歳曾我門松	市村家橘	坂東彦三郎	市川團蔵	中村鶴蔵	中村鶴蔵	澤村訥升	坂東三津五郎	尾上菊次郎
明治七年三月	守田座	群入田鶴宿魁菊	尾上菊五郎	坂東彦三郎	中村芝翫	市川左團次	中村仲太郎	坂東秀調	中村いてふ	坂東彦三郎
明治十六年一月	久松座	醉菩提悟道俠客	坂東家橘	市川照蔵	市川九蔵	坂東彦十郎	坂東彦十郎	荻野八重桐	中村かほる	坂東三津太郎
明治十八年十月	千歳座	醉菩提新酒又六	片岡我童	坂東家橘	尾上菊五郎	尾上菊五郎	尾上菊五郎	尾上菊之助	岩井松之助	坂東家橘
明治二十五年五月	春木座	本朝粹菩提	坂東家橘	中村雀右衛門	市川小團次	市川小團次	中村勘五郎	岩井松之助	市村竹松	中村富十郎
明治三十二年八月	春木座	粹菩提禪悟野晒	市村家橘	市川染五郎	市川猿蔵	中村芝鶴	市川猿之助	市川女寅	なし	なし
明治四十三年一月	歌舞伎座	粹菩提悟道野晒	市村羽左衛門	片岡仁左衛門	市川八百蔵	市川八百蔵	市川段四郎	中村歌右衛門	市川門之助	中村芝鶴
大正七年一月	市村座	同	尾上菊五郎	坂東彦三郎	守田勘彌	中村吉右衛門	中村東蔵	尾上菊次郎	河原崎國太郎	尾上菊三郎
大正八年二月	歌舞伎座	同	市村羽左衛門	市川段四郎	市川八百蔵	市川八百蔵	中村傳九郎	中村芝雀	中村福助	吾妻市之丞

白浪五人女

年時	慶應元年八月	大正六年五月
座名	市村座	新富座
名題／役割	處女評判善惡鏡（むすめひやうばんぜんあくかゞみ）	娘評判善惡鏡（むすめひやうばんぜんあくかゞみ）
お六	尾上菊次郎	澤村源之助
おくま	市村家橘	片岡我童
おきち	澤村訥升（おまつ）	中村雀右衛門
おてん	坂東三津五郎（おあか）	市川松蔦
おさん	中村鶴藏	市川小團次
徳兵衛	坂東彦三郎	市川左團次
喜之助	澤村訥升	市川壽美藏

明石志賀之助

年時	慶應二年二月	明治四年六月	明治三十六年二月	明治四十一年九月
座名	市村座	守田座	宮戸座	市村座
名題／役割	櫓太鼓鳴音吉原（やぐらだいこおとによしはら）	關東銘物男達鑑（くわんとうめいぶつをとこだてかゞみ）	同（おなじく）	同（おなじく）
明石	坂東彦三郎	坂東彦三郎	市川染五郎	中村駒助
朝比奈	坂東彦三郎	坂東彦三郎	市川染五郎	守田勘彌
仁王	河原崎權十郎	中村芝翫	中村時藏	尾上榮三郎
市郎兵衛	河原崎權十郎	中村芝翫	尾上幸藏	尾上榮三郎
朝霧	市川九藏	市川左團次	中村吉右衛門	坂東三津五郎
次郎吉	市川九藏	市川左團次	尾上幸藏	中村駒助
丈之助	坂東龜藏	中村翫雀	尾上菊十郎	市川高麗三郎
おなみ	中村歌女之丞	岩井紫若	市川女寅	岩井粂三郎
おすま	岩井紫若	坂東三津五郎	尾上菊三郎	尾上芙雀
長吉	市村家橘	坂東三津五郎	（おかつ）市川女寅	岩井粂三郎
仁太郎	市川新之助	市川子團次	坂東英造	尾上紋三郎

鳩の平右衛門

年時	座名	名題	平右衛門	平左衛門	お北	又之丞	重太郎
慶應三年ア月	市村座	稽古筆七いろは（けいこふでなゝつ）	市川九藏	坂東龜藏	藤川ともゑ	尾上幸藏	市川助壽郎
大正七年五月	市村座	鳩の平右衛門（はとのへいゑもん）	中村吉右衛門	尾上松助	尾上菊次郎	守田勘彌	中村東藏
大正十四年三月	邦樂座	同（おなじく）	中村吉右衛門	尾上松助	中村時藏	大谷友右衛門	坂東三津五郎

湖水乗切

年時	座名	名題	左馬之助	菖蒲の前	長兵衛	丹吾兵衛	おしほ	半次郎
明治三年一月	守田座	館扇曾我訥芝玉（ごしよあふぎそがのくしだま）	澤村訥升	岩井紫若	市川左團次	中村仲藏	澤村其答	市川子團次
明治六年八月	中島座	其譽湖水駒（そのほまれこすゐのこま）	澤村訥升	岩井紫若	中村壽三郎	中村鷺助	澤村千鳥	勝川又吉
明治十六年四月	市村座	槌手濱乗切講談（うちでのはまのつきりかうだん）	助高屋高助	河原崎國太郎	澤村訥子	市川壽美藏	岩井松之助	片岡我童
明治二十九年四月	明治座	明智光俊譽乗切（あけちみつとしほまれののつきり）	尾上菊五郎	坂東秀調	尾上菊之助	片岡市藏	尾上榮三郎	中村福助

大正十四年十月十五日印刷
大正十四年十月十八日發行

『默阿彌全集第六卷』

非賣品

著作權者印

河竹藏版

補修 河竹糸女

校訂
編纂者 河竹繁俊

發行者 東京市日本橋區通四丁目五番地 和田利彦

印刷者 東京市本郷區眞砂町三十六番地 佐藤駒次郎

印刷所 東京市本郷區眞砂町三十六番地 日東印刷株式會社

發行所 東京市日本橋區通四丁目五番地 春陽堂



